

---

# 魔法少女リリカルなのはStS syo ~守りたいモノ~

タ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはSt S syo 守りたいモノ

### 【Nコード】

N99850

### 【作者名】

タ

### 【あらすじ】

新設された機動六課に一日遅れでやってきた男。彼は守りたいものの為に戻ってきた……

(4/11、誤字修正しました)

(5/24、第三十三話、一部分修正しました)

(7/6、誤字修正しました)

(8/24、誤字修正しました)

## Prologue (前書き)

はじめまして、夕ゆづです！

今回のこれが初投稿、初作品なんです！！

不出来かもしれませんがよろしくお願いします！！

## Prologue

「俺の……俺のせいだ……」

少年は抜け殻のように立ち尽くしている。

背はさほど高くなく、年もおそらく12、13といったぐらいだろうか。

若干ボサついているが綺麗な黒髪に整った容姿。首には赤い宝石がついたチョーカーが付けられている。

見た目だけなら女の子と思われても不思議じゃない。

本来、日本人なら有り得ない美しく透き通ったような朱の瞳は光を失っている。

今この少年に信じられるものは何一つなかった。

服は所々で破れ、少量だが流血もしている。

体もボロボロだがそれ以上に心がボロボロだ。

「もう何も信じない。人なんて……」 心底そう思っていた。

「そんなこと言わないで！」

一人の少女が少年に叫びかける。

少女は金髪のロングヘアで可愛いの部類から美人へと変わりかけている年頃と言ったところか。

「人を皆信じてとは言わない。でも、人間全てを嫌いにならないで

！私は……私はあなたの味方だから！！」

「そんな戯れ事はいい。そうやって誰もが嘘を付いて俺を騙す……」

少女の呼び掛けに少年は反発する。

「私は嘘はつかないよ」

少女は少年の方へ歩み寄る。

「来るな！人との係わり合いなんてもうたくさんだ！」

少年は拒絶する。

「それじゃあ心が死んじゃうよ」

それでも少女は歩みを止めない。

「もうほっといてくれ！」

少年は剣状の魔力弾をいくつも少女に飛ばす。

「ほっとけないよ。今の君の在り方はなんだか昔の私と似てるから」

少女の体には魔力弾がかすり、傷がどんどんついていく。

それでも少女は止まらない。

「来るな！俺に構うな！」

少女は少年の前まで来た。

そして

「あ……」

少年を抱きしめた

優しく

壊れないように

「そんな悲しいこと言わないで。私は絶対あなたを裏切らない。いつだってあなたの味方にいるよ。一人じゃないから。だからもう一度がんばってみよ？」 少年の頭に過ぎる昔の記憶

《いい？私あなたの味方。一人じゃないのよ。

だからもう一度私と生きてみない？》

人の温もりに触れた少年の瞳には涙が溢れ、だんだん大きくなっていく。

「泣いてもいいんだよ。私が受け止めるから」

「あ、あア…… ああああ」

少年は少女の胸で泣き明かした。  
これが少年にとって三度目の人生の始まりだった。

## Prologue (後書き)

短いすよね……

現在十話程が出来上がっており、今回並に短いものはないのでこれは許してください(笑)

少しずつでも良くしていきたいので感想お待ちしています！

よろしく願います!!



## 第一話 始まり（前書き）

こんにちは、夕です！

初めの方なので二日続けて投稿しちゃいました（笑）

今回は主人公の名前もしっかり出てくるので良ければ覚えて  
ってください！！

それではどうぞ！！

## 第一話 始まり

「ここだよな」

『そうみたいだね』

頭をかきながら一人の男が建物を見上げている。

寝癖そのままの前髪が跳ね返っているにも関わらず美しい黒髪、黒い瞳に加え整った容姿をしている。

首には赤い宝石の付いたチョーカー、茶色い制服のズボンのポケットには六つの指輪が引つ掛かっているが、これで女性なら大和撫子と言われていたかもしれない。

男 “浅儀昶” は建物に向かって歩きはじめた。

その建物は隊舎で時空管理局、古代遺失物管理部、通称【機動六課】の本部隊舎。

昶はその局員なのだ。

実際にはこれからののだが

「ちよつと遅れちゃったな」『ちよつとって時間じゃないでしょ。

丸一日の遅刻よ丸一日。一日あればカップ麺何個作れると思ってるの!?!』

「しらねえよ! ていうより何で一日の時間をカップ麺で表そうとするんだよ! 分単位の問題じゃないんだぞ! 日だぞ日! 時間を軽く凌駕してるんだぞ! もう少し分かりやすい例えにしろよ!」

昶は不運に見舞われ予定より一日遅れて到着することになってしまっている。

「解ってるなら早く入った方がいいんじゃない？皆怒ってるんじゃないかな？」

「それを言うな。考えないようにしてるんだ……」

「朧ちゃんご愁傷様」

「縁起でもないこというな！」

先程から朧は独り言を喋っている訳ではない。

相手はきちんと頭の上に乗ってるのだ。

大きさは手の平にも乗るようなサイズ。

蒼い長髪に浴衣を着た女の子。

彼女の名前は“レイン”。

朧のユニゾンデバイスにして長年のパートナーだ。

「でもまあ大丈夫なんじゃない？ちゃんとした理由もあるし。死ぬ前には止めてくれるよ」

「理由あるのにやられるんだ！しかも死の一步手前！」

「もう朧ちゃんのツッコミ飽きた〜早く中に入る〜」

「たくっ……調子づきやがって」

悪態を吐く朧。

彼女はマイペースなのだ。

そんな彼女に髪を引っ張られながら朧は隊舎へと入って行った。

「さすが新隊舎。綺麗だね」

「ああ、ここで一年働くんだよな」

機動六課は試験運用とのことで活動期間は一年と定められている。それにも関わらずこの為だけに新たな隊舎が建てられた所をみる

とこの部隊がどれだけ期待されているかがわかる。

煙たがられている可能性も否定出来ないが。

「まずは、部隊長室に行かないと駄目だよな。誰かいないか……な  
……と?」

その時ちょうど青髪の女の子が通りかかった。

「ちょっとゴメン、その子」

「はい、なんでしょう?」

(あれ?どこかで見たような……)

翔はこの女の子とどこかで会った事があるように感じた。

「君どこかで会ったことない?昔に」

女の子は少し考えて

「すみません。ちょっと覚えてないです」

勘違いかな、と結論づけるが、

『古いナンパの手段だね』

レインに一蹴されてしまう。

「違うッ!ホントにそう思ったんだ!」

『うっそだ。鈍感スキルA+の翔ちゃんがそんなこと思い出す訳

ないじゃん』

「黙れっ！俺のどこが鈍感だ！」

『そんなの昔からに決まってるじゃない。この前だって石に躓いた女の子に「あの〜」　ん？』

これまで呼び止められたにも関わらずずっと放置されていた女の子が堪らず声をかける。

「あ、ゴメンね。あの部隊長室って何処にあるのかな？」

「失礼ですけど、どういったご用件で？」

少し警戒ぎみな返答。

それでも今までの会話からでは変なやつと見られても仕方がない。

「昨日までに来れなかったから、はやても言っただけなのかな？それじゃあ君が八神部隊長に『浅儀昶が到着しました』って連絡してくれないかな？それで通じると思うから」

「はあ、わかりました」

女の子はそういうと少し離れた所で連絡をとる。

『何で説明しないの？』

「めんどくさいから」

『はあ、ホントにズボラでマヌケなバカなんだから』

頭の上で呆れるレイン。

散々な言われようだがある程度当たっているので何も言い返せない昶。

「お待たせしました」　そうこうしていると女の子が通信を終え戻ってきた。

青髪の女の子、スバル・ナカジマは部隊長である八神はやてに連絡をとる為少し離れた場所へ移動していた。

（なんなんだろうあの。別に危険な感じはしないけど……怪しい）

今も頭の上に乗っかってるちっさい女の子とギャーギャー騒いでいる浅儀昶と名乗った男の方を見ながら考えた。

（なんだか私と会ったことあるみたいだったけど、私はわかんないし。身長は私よりちょっと高いぐらいだから歳は私と同じか少し高いぐらいかな）

実際昶は19なのだが身長が160センチ以下とかなり平均より低いのでたびたび誤解される。

それに加え

（男の人……だよな？男性用の制服穿いてるし）

昶は髪の長さや中性的な容姿に加えある諸事情により女性だと勘違いされる事が多々ある。

(まあ、大丈夫かな)

そう結論づけたスバルは部隊長に通信を繋いだ。

「八神部隊長。今宜しいでしょうか？」

『ん、スバルか。どないしたん？』

「今ロビーに男の人が来ていまして部隊長に『浅儀朔が来ました』と伝えてくれと……」

『そうか、やっときたんか……それじゃあスバル、その人をゆつくりと部隊長室に連れて来てくれるか？ゆつくりやで？出来れば十分くらい』

「はあ、やってみます」

『ほな、頼むで。やっときたんか。ホンマ何しとったんや……』

通信が切れ、今までとのイメージと随分掛け離れた部隊長にスバルは少し呆けていた。

(え〜っと、一応は知り合いなのか……な?)

とりあえず今もギヤーギヤー騒いでる方へ戻ることにした。

「それで何て言った？」「十分ほど待ってほしいとのことですよ」「そっか。それじゃあ此処で待っていいようかな。ところでこれは大事なことなんだけど……」

「はい……」

先程の雰囲気嘘のような顔つきになる朧を見てかスバルもごくりと息を呑む。

そして朧は一番気になっている事を口にする。

「部隊長……怒ってなかった？」

「……えっ？」

スバルはポカンと口を空けて固まっている。

「いや、だからはやて怒ってなかった？」

「だ、大丈夫だと思いますよ。最後に『ホンマ何しとんたんや』とか言っていましたけど」

「だあああああつ！ヤバイ！ヤバイよ！絶対怒ってるよ!？」

『いきなりフラグ立ったね。おめでとう!』

「死亡フラグなんか立ったって嬉しくないわ!」

頭を抱えながら、あああ〜と呻いている朧にスバルはとりあえず声をかける。

「あ〜、一つ質問していいですか？」

「ん、何？え〜と……」

ここで朧はまだ名前を聞いていなかった事を思い出し、彼女もそれに気づき敬礼しながら答える。

「スバル・ナカジマ二等陸士であります」

「スバルって言うのか。俺は浅儀朧三等空尉。よろしく」

「さ、三等空尉!失礼しました!」



昶が自己紹介をすると突然驚くスバル。昶からしても何故驚かれたのかいまいちピンとこない。

『見えないって事だよ。昶ちゃんならせいぜい研修生にしか見えな  
いって』

「正式な局員にも見えないんだ！」

レインの軽口に戻す。ちなみにだが昶は管理局には六、七年程働いている。

「あの……浅儀二等空尉？」

スバルの方へ片手を上げながら昶は軽い感じで口を開く。

「あ、昶でいいよ。階級はつけなくていいからな。区別してるみたいで嫌いなんだ」

「で、では昶さんと」

「それでいいよ。それで質問って？」

スバルは視線を昶の頭上上げる。

「昶さんの頭の上に乗っているのは？」

「ああこいつは『はあく』い。私はレイン。昶ちゃんのユニゾンデバ  
イスよ。よろしくねスバル 』……だ」

「昶ちゃんって……」

「いや、気にしないでくれ」

『理由聞きたい？』

「はいっ！！」

理由としては本当にたいした意味はないのだが昶としては知られ

るのは極力避けたいらしく、

「言わなくていい」

『え〜なん「言わなくていい」……はあ〜い』

「スバルもそれは聞かないでくれ」

「わかりました……」

と口止めする。

それでもレインがスバルの耳元で

『また今度教えてあげるよ』

と囁いているのを聞き半ば諦めモードに入る。

「それよりスバル。そろそろいいんじゃないか？」

気付けば結構時間が経っていた。

「そうですね。それじゃあいきましょうか」

彼らはスバルに連れられ部長室へと向かった。

## 第一話 始まり（後書き）

どうでしたか？

初めのうちは結構説明みたい

なのも入っちゃうと思います、ゴメンナサイm（――）m

がんばって行くんで良け

れば応援してくださいー！！

では、サヨナラー！！

P・S・ 最低でも一週間

に一話は更新するつもりなのでよろしくお願いします！

## 第二話 悪気はなかった（前書き）

どうも、夕です！

このラノ2011を手に入れたんですけどベスト10内の作品で“文学少女シリーズ”以外全部既に見てる作品ばかりでちょっとはしゃいじゃいましたwww

“文学少女”も読みたいとは思ってるんですけど、金欠大学生にはちょっと厳しいです（泣）  
いずれ買いますけどね！！

因み私が今一番アツイと思うのは“SAO”です！！  
12月の新刊が楽しみですw

では、どうぞ！！！！

## 第二話 悪気はなかった

現在、翔、レイン、スバルは部隊長室の扉の前に立っている。

「どうしたんですか、入らないんですか？」

スバルには翔が何故躊躇っているのかが全くわからなかった。

何も変哲のない扉。

しかし、翔にはこの扉の隙間から滲み出てくるような、どす黒いオーラが見えている。

「少し時間をくれ……」

翔は心の中で叫ぶ、どうか心の準備を！、と。

しかしその叫びは全くと言っていいほど届くことはなかった。

『もういいよ。早く入る』

「レインお前っ！」

身内からの裏切り、レインが呼び鈴を鳴らしてしまった事でもはや猶予はなくなってしまった。

余談ではあるがレインが押したのは先の理由だけでなく、ビビリでめんどくさがりの翔に任せていたら、二時間はこのままだろうと考えたレインなりの配慮である。

「はい」

中から女性の声がする。

「スバルです。浅儀朏三等空尉をお連れて来ました」

「どうぞ〜」

「失礼します」

「……失礼します」

『失礼します』

中に入ると一つのデスクに座っている女性とレインぐらいのちびっ娘がいた。

女性の方は茶髪のショートヘアピンを付けた、ここ機動六課の部隊長“八神はやて”二等陸佐その人だ。

一方、銀髪のちびっ娘の方は彼女のユニゾンデバイスでもあるリインフォースである。

この時、六課にいるはずである悪魔三人ともが待ち構えていると思っていた朏は一人だけだった事に少し安心していた。

……恐ろしい事には変わらないのだが

「スバルありがとーな。もうええよ」

「はい。それでは失礼します」

そうしてスバルは敬礼して部屋を出ていと、はやては笑みを浮かべて朏の方へと顔を向ける。

「さて、二年振りやね。久しぶり、朏くん」

「あ、ああ。はやても元気そうで」

『リインもいるですよ』

『リンちゃん!!久しぶり〜!』  
『レインちゃん!!お久しぶりです〜!』

二人とも手を取り合ってキヤーキヤー喜んでいる。この二人、髪濃さや服装が違い、レインの方が少し大きいのだがそれでも両方ちっこいのでぶっちゃけうりふたつだ。

「二人ともデバイスどうし積もる話もあるやろ。外で話でもしてきい」

『『はあ〜い』』

ちびーずは早々に部隊長室を後にし、二人だけとなってしまい、朧には早くも希望の光を追い出された形となった。

さて、と再び朧に視線を向けるはやて。

「まあ聞きたい事はいろいろあるけど……まずはやっぱり遅れた理由やな。丸一日の遅刻はさすがに珍しいで」

「いや、これにはちゃんとした理由が……」

「なんや?ちゃんとした理由があるなら聞くで。私もそこまで分かんず屋やないからな」

机に肘を付け、顎に手を置くはやては終始笑顔。

それならいいんだけど、とぼやきながら朧は説明を始める。

「集合の前日から行こうと思ってたんだよ。ちゃんとチケットも取って」

懐から三日前の次元港のチケットを取り出し見せる。

「うん、それで？」

「行くまでにまだ時間があるからレインと一緒にご飯でも食べようかなあーと思つて街を歩いてたら、前でおばあさんが引つたくりにあつて、その犯人を追いかけて捕まえたと思つたら、次はその近くで火事が起こつて、その人命救助を手伝つてたら、ぜひお礼をさせてくれつて一日缶詰にされて、取つてたチケットの時間が過ぎちゃつて、やっと解放されたと思つたらミッド行きのチケットが満席で取れたチケットが今日の朝の便だけでこんな時間に……」

有り得ないような話だが全て実話であるのだが相も変わらずニコニコし続けるはやてに冷や汗が止まらない朔。

「なんやえらい偶然の連続で怪しいけど朔くんが嘘つくとは思わへんから私は信じるよ」

「そうか！」

心配しすぎてたかな、と一瞬安心したが

「でも連絡出来へんかったんか？少し遅れますって？」

「……………あ」

地獄に突き落とされた。

自業自得だが…………

「そ、それはその…………」

はやての笑顔が物凄い。



どう物凄いのかと言つととにかく物凄い。

「その……なんや？」

「忘れてた……」

「有罪やつ!!」

はやては机をバンッと勢いよく叩くと、扉が急に開かれた。  
朧が後ろに振り返るとそこには……

「にやはは、久しぶりだね朧くん」

「もう少し責任感持とうよ朧……」

「き、聞いてたんだ。二人とも……」

残りの悪魔、高町なのはとフェイト・T・ハラオウンが立っていた。  
た。

## 第二話 悪気はなかった（後書き）

どうでしたか？

はい、短いですが、すみませんm（――）m

その分読みやすくを心掛けてるので、『こつした方がいいよ』と言  
うような物も凄く助かるので良ければ感想等ください！

今回も読んでくださりありがとうございました！！

では！

### 第三話 説教のち挨拶（前書き）

どうも、夕です

明日祝日で大学が休みだと気付いてテンション上がって投稿しちゃいましたwww

今回も短いですが、どうぞー！

### 第三話 説教のち挨拶

部隊長室。

ぶつちやけここで一番偉い人の仕事場でも、今ここは地獄の『お話し部屋』となっている。

現在ここには四人。

一人は言わずもがな、お話しを受けている浅儀朧。対するお話しする側は三人、この部隊長である八神はやてを筆頭に、FW部隊である【スターズ分隊】、【ライトニング分隊】の隊長、高町なのはとフェイト・T・ハラオウンだ。

ちなみに現在朧は床に正座中。

三人の女性はそれを囲むように立っている状態。

三人のそれはもう物凄い『おはなし』に朧は意気消沈している。その時間は既に二時間。

内容は社会人ならほうれん草がどうか、もっと責任感を持ってとかなんとか。

本来なら一時間程で終えるはずだったが、ほうれん草の意味がわからないような阿呆である朧の『社会人だけじゃなくても食べるだろ』との発言により三人からの精神破壊攻撃に加え、傷の付かない肉体言語も加わり、もはや死に体。

「朧、聞いているの？」

「もちろんです！」

しかし返事は即答。

「まったく、翔はだいたい……」

そしてその繰り返し。

翔的にもそろそろどうにかしたい。

「あゝ」

恐る恐る口を開く。

「何かなあ翔くん？」

なのは怖い。

ホントに怖い。

口には出さないが翔は確実にそう思っている。

「皆さん此処に来てから随分時間が経ってますけどお仕事の方は大丈夫なんでしょうか？」

間違ったことは言っていない。

決して怖くて早く終わってほしいから言っている訳じゃない、と自分に言い聞かせる。

「それもそうやな」

「うん、仕事もほっぽってきちゃったしね」

それでいいのか一等空尉……

「後は私が注意しておくよ」

「そうだね。フェイトちゃんに任せるよ」

「どのみちそろそろ終わらせなアカンと思とって翔くんを紹介するために皆にロビーに集まって貰ってるんだよ」

「準備いいね、はやて」

「まあ無駄な時間使ってしまったからな」

「すみませんでした！」

横目で見られ素早く土下座。

「それじゃあ行こか」

やっとのことで立つことを許され部隊長室を出た。

その時朧の足が痺れて数分動けなかったのは余談だ。

side syo

ロビーに行くとき結構な人数が整列していた。

これが俺一人の為に集まってくれてると思うとなんだか悪い気がするな。

ちらっと見てみるとシグナムやヴィータ、さっきのスバルなど何

人か見知った顔もちらほらいる。  
はやては台に上り、口を開く。

「昨日もこうやって集まってもらいましたが、昨日にはまだ到着してなかった隊員がいます。  
その人がたつた今到着したんで紹介したいと思います。それじゃあ上がって」

俺ははやてと入れ代わりで台に上がる。肩にはいつの間にかレインが乗っていた。

あゝ緊張するな。

「えゝ、皆さん俺一人の為に集まって貰ってすみません。一日遅れる形になりましたが今日から此処で皆さんと働かせて頂く浅儀朧三等空尉です。」

それとこの肩に乗っているのが『ユニゾンデバイスのレインです。気軽にレインって呼んでね。よろしく』  
ということ、俺の事も朧って呼んでください。

何人かは見知った顔もいるようで安心していきます。  
皆さんよろしくお願ひします!」

俺とレインはそうして頭を下げた。  
周りからは温かい拍手が聞こえる。

「浅儀三等空尉にはイロイロと忙しく留守にすることの多いハラオウン隊長のいるライトニング隊の二人目の副隊長として働いてもらいます。それじゃあ解散!」

こうして俺の自己紹介は何事もなく終わった。

「翔さんお久しぶりです」

一人の女性がこちらにやって来た。

「久しぶり、シャーリー。元気にしてたか？」

「はい。二年振りですもんね」

「そうだな」

シャーリーは以前、フェイトの執務官補佐をしていた時からの知り合いで俺のデバイスもよく見てもらっていた。

『シャーリー。私もいるよ』

「レインも久しぶり〜元気だった？」

『うん。元気、元気』

女どうして話に花を咲かせている。

「遅かったな翔」

「もうなのは達に説教くらってんだろ？」

「もう、ヴィータちゃん。思い出させたら可哀相でしょ」

話しかけてくれたのは順にシグナム、ヴィータ、シャマルさん。

何でシャマルさんだけさん付けかつて？

そのほうが呼びやすいし、ただそれだけだよ。

一人だけ老けてるなんてこれっぽっちも思っていないからね。

「翔くんなんか失礼なこと考えなかった？」

「いいえ。そんなことあるわけないじゃないですか」

貴女は十分お綺麗です。



「お前やっぱりちつこいな」

「お前にだけは言われたくねえよ、ヴィータ」

だが事実俺は背が低い。

なのはやフェイトにも負けてるし……

ダメだ。考えてたら落ち込んできた……

「まあ、そう気に病むな。遅れた理由は聞いたぞ。  
なかなか災難だったみたいだな」

「連絡してこねえのはいただけねえがな」

「相変わらずキツイな」

「きつちりしてるだけだ」

さいですか。

「それで今日はこれからどうするんだ？」

「めんどくさいけど、なのは達が訓練所に来てくれて。何処にあるかわからないんだけど」

「なら一緒に行こう。私達も行く所だからな」

「頼む」

「それじゃあ行くぞ」

シグナム達の後についていき訓練所へ向かう。

「レインそろそろ行くぞ」 『はあ〜い。それじゃあシャーリーまた  
ねえ〜』

「はあ〜い」

まだ喋ってたのかよ。

俺はシグナム達の後について訓練所へ向かった。

### 第三話 説教のち挨拶（後書き）

どうでしたか？

まあ、今回も余り中身のない物でしたけどWWW

次は訓練所です！

お約束ですよね（笑）

多分明日も更新すると思います！

楽しみにしてくれると嬉しいです！

では！！

## 第四話 賭け（前書き）

どうも、夕です

初感想頂きました！！

橘 葵さん、ありがとうございます！

こつこつのを感無量って言うんですかねwww

今回の話ではこの小説でのキーワードの一つが浮き彫りになります。  
簡単に言うと伏線です。

では、ごっぞー！！

## 第四話 賭け

side syo

「凄いなこれ」

『そうだね……』

シグナムらに連れられた先には訓練所のはずなのだが市街地が佇んでいた。

やっぱりミッドの技術力ってすごい。

ヴィータが言うには、ここが訓練所で間違いないらしい。

「シャーリーが基礎設計してなのはが完全監修した自慢の空間シユミレーターらしいぞ」

あいつらならやるだろうな。

シグナム達はモニターの前で見学に回るらしく俺とレインとで階段を下りる。

「あつ、来たね翔くん」

そこにはなのはとフェイトが立っていてその近くにはスバル達が立っている。

「スバルさつきはありがとな」

「あ、はい！でも驚きましたよ。副隊長なんですね！」

「まあな。これからよろしく」

「「朧さんお久しぶりです！」」

「エリオにキャラ。大きくなったな」

エリオとキャラは昔フェイトが保護した子供達で、俺も面識がある。

「これからまた一緒だな。よろしく頼むぞ」

「「はい！」」

うん、やっぱり子供は元気が一番だよな。

「フリードも頼むぞ」

「キュル」

キャラの竜である、フリードリヒ。

チビ竜だからって侮れない。昔一回だけ黒焦げにされかけた経験もある。

あとはオレンジの髪の女の子か。

「えっと、君は初めまして……だよな？」

「はい！ティアナ・ランスター二等陸士であります、浅儀副隊長！」

ぴしつと敬礼をして挨拶をするこの子の第一印象はちょっと硬い子だな。

「ティアナか。俺の事は朧でいいよ。あと副隊長とかもつけなくていいからな」

「えっ、でも……」

「いいんだよ」

ティアナはいいんですか、と言うような顔でなのは達の方を見る。

「無駄だよティアナ。翔くんはこういう事は何故か引かないから」

「翔は子供だからね」

「余計な事いうな」

『さすがフェイトちゃん、よく解ってるね』

「まあね」

何なんだよお前は……

「まあ、とにかくそういう事だ。解ったなティアナ？」

「はあ、わかりました」

何とか了承してくれたみたいだ。

まあ呼び方なんてどうでもいいけど。

「で、なのは。俺はなにかするの？」

此処に呼ばれたって事は……

「うん。模擬戦をしてみらおうと思ってるね」

ですよ……

俺、ここについていきなり説教されて疲れてんだけどね……

「拒否権がないのを解ってて聞くけど何で？」

「だって翔くんの実力って二年前から知らないんだもん。いつの間にか魔導師ランクSランクなんかとっちゃって……」

「こっちはビックリしたんだよ。二年間連絡一切なかったし」

俺は今までの二年間、フェイト達との連絡を断つてある任務に付いていた。

この六課に入る事になったのだったって一段落ついた時の任務報告でリンデイさんに聞いたからだし。

「ゴメン。いろいろ急がしかったんだよ」

「心配してたんだからね……」

しみみりした空気が流れる。

やっぱり少しは連絡した方がよかったのかもしれないかな……

『大丈夫だよフェイトちゃん。私がついてたんだから。それに翔ち

ちゃんの方もフェイトちゃんのことすごく心配してたよ』

「なっ!?!」

「そっなの? / / /」

俯きながら問い掛けてくるフェイト。

「しっ、してない! 全くしてない!! 何言ってるんだよレイン!? 余計な事いうな!」

ヤバイ……

今めちやくちや顔が熱い。

『せっかくフォローしたのに』

「フォローの仕方が間違ってるんだよ!」

FW四人ともポカンとしちゃってるじゃないか!



「もういいかな？」

なのはが止めに入る。

「……気付いてたなら止めてくれよ」

「ゴメンゴメン。見てて楽しかったから」

やっぱりSだ。絶対Sだ。

「まあとりあえず朧くんの実力が知りたいなっていうこと。FWの四人にも勉強になると思うし」

「ハア、めんどいけど仕方ないな。で、誰が相手なんだ？」

出来れば楽な相手がいいけど　こんなところにそんな相手いないよな。

「私とかシグナムさんもやりたかったんだけど今日はフェイトちゃんかやるよ」「フェイトが？」

フェイトもバトルマニア戦闘狂だからな

「フェイトちゃんがどうしても初めにやりたいんだって」

「やるのかフェイト？」

「うん。負けないよ」

やるしかないみたいだな。

「いいぜ、こつちだって今回こそ勝たせてもらうからな」

今まで模擬戦で一度もフェイトに勝てたことがないし。

「それじゃあ皆、上のモニターで見てよっか」  
「俺はレインとユニゾンした方がいいのか？」

ユニゾンすれば戦術の幅も広がるけど……

「ん〜、レインはまだ使わなくてくれた方がいいかな。純粹な力が知りたいから」

「OK、わかった。レインもなのは達と上のモニターで俺が勝つ所をしっかりみとけ」

『そんな大それた事言わない方がいいんじゃない。負けた時の言い訳が出来ないよ?』

「俺はもう負けないの!」

『はいはい。じゃあがんばってねえ〜』

子供扱いしやがって……

side out

なのは達はシグナムらの所へ戻り、今訓練スペースにいるのは朔とフェイトのみ。

静まり返る中で彼女が朔に話しかける。

「朔」

「何?」

「朧が私の補佐官を辞めてからもう二年だよな」

「そうだな」

「二年間何してたの？」

まあ聞いてくるわな、と朧は内心で思う。

二年前の当初、朧の行方を知っていたのは極小数で、それも半年を過ぎると全ての連絡を絶っていた。

その際フェイトは何度か朧を捜しに行くと言い出しており、そのたびに周りから止められていた。

六課に朧が来ると聞いた時まではやての所に押しかけ何処で何をしていたのか問いただしていたり　はやて自身もリンディから聞いたのみで概要は全く知らなかった　と、簡単に言うともとても心配していたと言うことだ。

「何って、仕事だよ仕事」

「連絡も取れないような危険な仕事だったの？」

「違うよ……結構、急がしかったからで……」

「嘘はついてない？」

《私は嘘はつかないよ》

《私は絶対あなたを裏切らない。いつだってあなたの味方であるよ。》

昔、そう言ってくれた女の子に朧は嘘を付きたくなかった。

自身、今まで彼女にこのような嘘を付いたことは一度もなかった。危険じゃなかったと言ったら嘘になる。この二年で何度も死にか

け、それをフェイトに話したら確実に心配する。  
これ以上フェイトに心配をかけたくなかった。  
だから昶は話さずに任務に就いた。

「……………」

故に無言。

そんな空気をフェイトが軽い口ぶりで破った。

「それじゃあ賭けをしようか」

「賭け？」

「昶が勝ったら何も言わなくていいよ。私ももう聞かない。でも、私が勝ったらこの二年間にあつたこと教えてくれる？」

(変わらないな、この方法……………)

昶は初めてフェイトと会った時の事を思い出した。

「フェイトらしいな」

「なのはから教わったことだよ」

「納得」

フェイトもその昔自分を救い出してくれた親友の方法を真似ている。

自分にそうだったように。

きつと力になれるのだと。

「バルディッシュー！」

「アートNo.1、2」

「セット・アップ!」

白いマントをなびかせ黒いバリアジャケットに身を包んだフェイト。

一方、昴のバリアジャケットはインナーと腰のベルトから垂れ下がっている布は白。ズボンも黒く、インナーの上からも黒い外套布を羽織り、胸には銀の甲冑。銀のブーツと拳には薄手のグローブ、とその姿は魔導師のバリアジャケットではなく騎士の甲冑。

フェイトはバルディッシュを斧の形状であるアサルトフォームに對し、昴は左右それぞれに短剣を握っている。

そこで二人の前になのはが映ったモニターが現れる。

『こつちの準備は出来たよ。ルールはカートリッジ制限無しでどちらかがギブアップ、戦闘不能、もしくはこちらでこれ以上の戦闘は不可と判断した場合。もちろん非殺傷設定でね。それじゃあ二人とも準備はいい?』

「ああ」

「いつでも」

『それじゃあReady Go!』

開始の合図を聞いても俺達はまだ動かない。

「昴」

「フエイト」

「この勝負……」

両者とも視線を合わせ

「絶対負けねえ（ない）！」

こうして六課初の模擬戦が開始された。

## 第四話 賭け（後書き）

どうでしたか？

はい、キーワードは“二年間”です！

別に初めの二年間が地獄だったって訳じゃないんですけどね、まあそこは後々

今回出てきた初めのBJはMBAのリーズバイフェの服装をイメージしてくれたら幸いです

疑問、誤字、ここ良かった、こうした方がいいよ、など、どんな事でもいいので感想お待ちしてます！！

では！！

第五話 模擬戦（前）〜攻防〜（前書き）

どうも、夕です

今回いよいよ初戦闘シーンです！

上手く書けてるかは正直微妙です……けど張り切りました！！

あと、今回の後書きに報告とお願いがあります！！

そっちの方も見てください！！！！

では、ごきげん……！！



## 第五話 模擬戦（前）〜攻防〜

開始直後、先に動いたのはフェイト。

勢いよく地面を蹴り、一気に距離を詰める。

手にはしっかりとアサルトフォームのバルディッシュを握っている。

「ちっ、相変わらず速いなおい！」

管理局随一の速さを誇るフェイト。

だが身体の内から強化をかけている朧には完全に対応出来る速度。

「はあああっ！」

斧が朧の身体へと振り抜かれる。

「はっ！」

それを左の短剣で軌道をずらす。

斬！斬！斬！

近接主体のアサルトフォームから繰り出される次々の軌跡。

「ふ はっ はあああっ！」

躲し、流し、弾く

「はあっ！」 弾く事で出来た僅かな隙を朧は見逃さず横に一閃。

それを読んでいたが如く柄で受け、再び攻撃に転じる。  
幾たびも繰り返される攻撃と防御。

両者攻守の手を休める事なく既に数十合。

早くも千日手かよ

朔は頭で幾つもの攻め手を思考しつつ、そう考えていたが、

「はあああああっ！」

「っ  
」

今までよりも力強く打ち込まれる斧に両の剣を交差させ防ぎ、鏝  
ぜり合っ。

そこでフェイトが動いた。

「バルディツシュ！」

『フォトンランサー』

そう発したフェイトの後方には四つの槍の魔力弾が待機している。

先の打ち込みはこの為の布石っ！

「ちっ、ソードスフィア！」

気付いた朔は咄嗟に四本の剣状の魔力弾を展開する。

「ファイア！」

「くっ、ショット！」

槍と剣、合計八つの魔力弾が双方の場へやってくる。

フェイトは一瞬でその場を離れるが、昗は体勢を崩され動きが遅れた。

昗は自分の魔力弾でフェイトのそれを相殺させ、誘爆を引き起こし、バックステップでダメージを軽減。

爆風が止むと同時に前方のフェイトを確認すると八つの先程の魔力弾が展開している。

「プラズマランサー！」

全弾が昗に向かって放たれるが、それを上昇しながら躲す。

しかし、

「ターン！」

「誘導系かつ!?!」

全弾が反転し今度は後方から狙いをつけている。

それに加えて、

「バルディッシュ！」

『イエス、マスター、ロードカートリッジ』

ガシャンと音を立て薬莢を吐き出し、バルディッシュのコアが光る。

昗の全包围に約六十になる魔力弾が展開された。

これだけを全てかわすのは不可能。

なら、

「 躲さなければいいよな」

そして何か呟いた後

「ファイア！」

全弾が発射された。

S i d e F a t e

「今のは絶対避けられないはず」

今朧の周りで六十ものスフィア（半分以上はダミーだけど）を爆発させたことでその辺りが全く見えない。

戦闘不能にまで追い込めなくても相当なダメージは与えられたはず。

しかし、

「えっ!?!」

爆風の先には無傷の朧の姿があった。

「何で!？」

今のを全部避けたっていうの？

「さすがフェイト。今のは驚いた」

爆風が全てなくなって朧の方を確認する。

「無手？」

朧の武器が消えている。

さっきまでの双剣は見る影もない。

「何をしたの？」

「ただ防壁を張っただけだよ」

「防壁？」

前まで朧は自分一人でシールドを張れなかったはずじゃ……

「お前は多分こう思ってるだろ『なんで朧にシールドが張れるの?』  
ってな」

鋭い……

「少しは成長したからと言って俺は確かに今もレインなしには正  
面に張るようなシールドしか張れないよ」

「なら……」

朧は昔から防御系統の魔法が殆ど使えなかった。実際使えなくってもちゃんと防いでたけど。

「カラクリはこれだよ」

そうやって朧の手に現れたのはボロボロになった大剣。

「それって……」

「ああ。No.6のアート“大剣”だよ」

身体全てを覆う程に大きい剣。

そもそも朧は“アート”という六つで一つという変なデバイスを所持している。

しかも機能なんて一つを除いて殆ど何も付いてなくてただ武器としての性能と少し強めの耐久性しか持たないもので、シャーリーは『名前を付けるなら簡易アームデバイスって所ですね』とか言ってた事はよく覚えてる。

「でもそんな物で……」

あの弾丸全てを防げる訳がない。

確かに正面からの物なら防げるだろうけど、全包围からの弾丸相手ならフィールド系のバリアしかないはず……

「ここをよく見て見ろよ」

そうやって朧が指差した剣の腹には大きな魔法陣が彫られている。

「これは俺の滞在先で開発されたものでな、詳しくは聞いてないけ

ど武器自身に特殊な術式を刻む事で本来扱えない魔法を使えるようにする物だそうだ。だからこれでフィールド系のバリアを張ったってわけだ」

信じられないけど実際に私の攻撃を完全に防いで見せた。

「すごいね、それ」

「いや、やっぱりダメだわ。全くの試作型で魔力は大分持つてかれるし、防御系統しかないし、使えば行使に耐え切れなくなって武器がボロボロに使えなくなるわ」

全く以って使いづらい、と愚痴る朔。

「んじゃ、そろそろ俺も少し真剣にさせてもらおうかな」

そう言うと朔の周りに魔力が溢れ始めた。

s i d e o u t

朔の周りに吹き荒れる魔力が足へと集中していく。

「手を抜くのは止めたの？」

問いかけるフェイト。

長年連れ添っていた彼女はこれまでの動きが朧の実力でない事を看破していた。

「やっぱ気付いた？結構上手く出来てたと思うんだけどなあ」

「当然だよ。だって“彼女”がまだ出てないもん」

「ん？……あゝ、アイツはしばらく出す気はないよ」

「え、どうして？」

「いや、今リミッターなんか付いてるだろ？」

アイツ制限とかかかっている状態だとめっちゃ怒るんだよ。ここ来る前だって『万全の状態時以外余を起こすな』とか言ってたし」

「なんだか分かるような気がする……」

苦笑いしながら今の説明で納得し、改めて気を引きしめる。

「んじゃ、そろそろ再開するか」

そう言った瞬間、朧は手にあった大剣をフェイトに向かって投擲した。

「ッ！？ はああああああっ！！」

凄まじい速度で向かってくる大剣をバルディッシュで弾き飛ばしすぐに朧の方へと視線を戻す。

「なっ！？」

しかしそこには既に朧の姿はない。

本来先程までの速さならいくら大剣で気を逸らしたとしても速さで勝るフェイトが見失う事はない。



明らかに先と速さが違う。

(でも！)

フェイトは後方へバルディッシュを振るう。

「そこっ！」

「ちっ」

そこにはバルディッシュと鏝ぜり合う、西洋風の剣を持つ朔がいた。

「これ防ぐのかよ」

「残念、見えてる」

今の一撃で速さは紙一重でフェイトが上だと証明される結果となった。

だがしかし、

撃！撃！撃！撃！撃！

朔の猛攻が始まった。

右手に携えられた剣でバルディッシュを押さえ付け、腰を捻り回し蹴りを放つ。

「くっ！」

コースは顔、しかしフェイトはそれを残された腕で受け止める。

「まだまだあああつ！」

蹴りを放った左足を支点にし、邪魔な剣を手放し体を180°回転させ踵落しの要領で振り下ろす。

当たれば確実に意識を欠き飛ばすその攻撃をフェイトは体をのけ反り後方へ跳ぶことでなんとか回避。

互いの距離は十メートル強。

仕切り直しか

見ていた誰かが言った。

しかし、

そんなことを誰が決めた？

翔は流れに身を任せながら地に足を着け、ヒュンと音を立てて右手

を素早く振るう。

フェイトはまだ体勢を整えていないが、ただの拳が十数メートル先の人へ当たる訳がない。

そう、拳なら

「なっ!?!」

凄い速さで向かっていくのはナイフ。

その軌道は確実に胸の辺りを狙っている。

『プロテクション』

反応の遅れたフェイトを守るようにバルディッシュがシールドを展開しナイフは慣性に従うまま地面に落ちる。

ナイフによる投擲をなんとか防いだが既に朧は徒手空拳のまま動き始めている。

「return!」

その一言でフェイトの足元に落ちていたナイフは一瞬で朧の手中へと収まる。

これがアートにある一つしか持たない最大の機能。

“ 手中転移 ”

武器を投擲にも使い手放す朧の生命線とも言える機能。

魔力が届く範囲内なら瞬時に朧の元へと戻る転移機能。

制約に魔力の大量消費を始め多々あるのだが朧はこれを好んでよく使う。

腕を振るいフェイトへと一閃。

しかし、フェイトとてこれ以上好きにさせる訳にはいかない。

「バルディッシュユ！」

『ソニックムーブ！』

朧の放った一撃は空を切り、フェイトは瞬時に背後へと移動しバルディッシュユを振るが朧もすぐに反応し後方へと下がる。

ここで本当の仕切り直しがなされる。

「本当、お前どれだけついて来れるわけ？」

手にあるナイフを待機状態へと戻し、再び西洋剣が現れる。

「まだまだ朧に負ける訳にはいかないからね」

話しながら笑みを零す二人。

「いや、今回は俺が勝たせてもらおうよ」

「朧も強くなったみたいだけど、私だってこの二年間で強くなったしやっぱり私の勝ちだと思っな」

「いいや、俺だね」

「私だよ」

「俺だ！」

「私だね」

「いいや、俺だね！」

「なら賭けにこれも付けたそうよ。負けたほうが相手の言うことな  
んでも聞く」「ようし、いいぜ、やってやるよ。負けてから待った  
は無しだからな！」

「それはこっちのセリフだよ」

ここにまた一つ、互いに負けられない理由が増えた。

「バルディッシュ」

『ザンバーフォーム』

フェイトはバルディッシュを大剣のザンバーフォームへと変え構え、朧も両手で剣を構える。

「それじゃあ、第二ラウンドというか」

再び二人は駆け出した。

## 第五話 模擬戦（前）〜攻防〜（後書き）

初戦闘、続く！！

読めるモノでしたか？

「これって何？」っていうものなどがあればお答えします！！

ネタバレにならない程度に（笑）

それでは、前書きに書いたように報告とお願いをWWW

次話では無理なんですけど、本編の後に登場キャラ達の座談会？的な事をしたと思ってます！

トークは勿論、オリキャラプロフィール紹介や本編解説等など、お便りを頂ければその要望にも（出来るだけ）答えて行きます！！

そんなモノをやりたいんですが、この作品のタイトルを見てくれればわかるように私はネーミングセンスが全くありません！（泣）

ですから親愛なる読者の皆様から“翔くん達の座談会（仮）”の名前を考えて貰いたいんです！

締め切りは、申し訳ないんですが2010年11月31日23時59分59秒……まあぶっちゃけ12月1日までです。

その日に届いてるタイトル名から僭越ながら私が選ばせていただき、その日の内に投稿させて貰います！！

悲しくも一通も集まらなかった場合は泣く泣く私が考えます(泣)

皆様お願いします！

タイトル名だけでなく、感想等もお待ちしてます！！

では、次話でお会いできることを心待ちしています！！m(´)

— m

第六話 模擬戦（後） 〱真意と決着〱（前書き）

どうも、夕です

模擬戦は今回で終了です。

といっても戦闘描写は少ないんですが……

どちらが勝つのか！

では、どうぞ……！



第六話 模擬戦（後） 〱真意と決着〱

side nanoha

凄い

そんな言葉が新人達の方から聞こえる。

当たり前だと思う。

私だって驚いてる。

横で一緒に観戦しているヴィータちゃんやシグナムさん達だって声には出さないでいるけど多少足りとも驚いてるはずだ。

今少し離れてフェイトちゃんと昶君の模擬戦を観戦してるのは新人FW四人に私とヴィータちゃん、シグナムさんに、データを取りに来たシャーリー、そのシャーリーの頭に乗ってるレインに野次馬根性で見に来たはやてちゃんだ。

「なのは……」

ヴィータちゃんが二人の攻防から目を離さずに私に声をかけてきた。

「昶の奴、リミッター付きであんなに強かったか？」「多分この二年間でここまで力をつけたんだと思う」

以前までなら多分もうフェイトちゃんの勝ちで勝負が決まっていたと思う。

確かに昔から強かったけどリミッター付きでこんな動きが出来る人じゃなかった。

二年間でこんなに変わるものなの？

「レイン、この二年間何があったんや？」

堪らずはやてちゃんがレインに聞いたです。

『いきなり核心部分？まあいろいろあったんだけど、それは私が言うことでもないしね。私的には朧ちゃんが自身から話すのを待ってあげてほしいかな』

ん〜、レインは話す気がないみたい。

『でも、さすがフェイトちゃん、凄く速いね〜』

「それに付いて行ってる朧君も凄いいけどね」

速さだけならあの二人が管理局最速じゃないかな？

「あの……なのはさん？」

私達が話しているとティアナが私に声をかけてきた。

「どうしたの、ティアナ？」

「朧さんって何者なんですか？フェイト隊長相手にあそこまで……」

「エリオやキャロも朧君が戦つてるところを見るのは初めて？」

「はい、フェイトさんのなら資料とかで見たことあるんですけど」

「朧さんの資料は一つもなくて……」

「そっか、それじゃあ皆は“黒衣の麗人”って聞いた事ない？」

私の質問にティアナが不思議そうに答える。

「その人ってアレですよ？ “ハラウン執務官の懐刀” とか言われてた人ですよ？」

私も聞いたことあります、とスバルも会話に加わる。

「凄く綺麗だけど素顔があまり知られてないっていう。確か二年前ぐらいから姿を眩まして蒸発したんじゃないかって噂の人ですよ？」

へえ、そんな風に言われてるんだ。

「エリオ達はその“麗人”の事聞いたことあるかな？」

「僕は聞いたことないです」

「私もです」

まあ悪魔で局内での噂だしね。

「でもその人が朔さんとどう関係するんですか？」

「それはね」

『朔ちゃんがその“黒衣の麗人”だよ』

私が言おうとしたのに……

「ええええっ！？」 「噂を知ってたスバルとティアナが驚き、キヤロは不思議そうに質問する。」

「でもその麗人さんって女性の方なんじゃ……」

最もな考えだと思う。

「でもあの朔君の髪が凄く長かったら女の子って紹介されても信じちゃうでしょ？」

「……あ〜」「……」

全員一気に納得したみたいだね。

「まあそんな訳でイロイロ勘違いされて付いた異名なんだけど、朔君についてはレインはもちろん、あとフェイト隊長とかシャーリーの方が詳しいよ」

そう言うと四人は首をシャーリーとレインの方へ向ける。

s i d e s u b a r u

朔さんの事だよな、とシャーリーさんは二人の模擬戦が映ったモニターから目を離さずにキーをカタカタしながら話しはじめた。

「朔さんの入局前の経歴は特秘事項でわからないんだけど七年くらい前に管理局に入局して、訓練校はその過程を全部すっ飛ばして卒業。そしてすぐにフェイトさんに補佐として引き抜かれたんだって。訓練校で聞いたことないかな？昔、訓練校の教官を全員叩きのめして訓練を受けずに卒業した人がいたって？」

「噂くらいなら聞いたことあります。教官全員の骨を折って回った

つて」

「え？私は全員半殺しにしたって聞いたよ？」

「ただの噂だと思ってたけど、まさか朧さんがそんな人だったなんて……」

『ん〜、凄い話が飛躍してるね〜。そんなことした覚えはないけど』

え？

「ははは、実際は気絶させたり、デバイスを奪って無力化させただけなんだよ」

「そうなんですか……びっくりした」

じゃあ話を続けるよ、とシャーリーさんが再び口を開く。

「朧さんは執務官補佐として五年程働いていて、私もその間に会ったし。あの人はあんまり表に出たがらない人でね、フェイトさんが解決した事件の中には朧さん単独で切り込んで解決に導いた事件とかも幾つかあるんだよ。まあ基本は二人のツーマンセルだったんだけどね。それで二年前に単独任務に出て今回ミッドに帰ってきたの」

「と言うことは入局当時からずっとハラオウン執務官の補佐官をしていたって事ですか？」

「そう言うことになるね」

「へえ〜、朧さんってやっぱり凄いんですね〜」

《そんな訳無いでしょバカスバル》

念話で失敬なティア。

《どうして?》

《考えても見なさいよ。訓練校での事があつたとしても当時から頭角を現していたハラオウン執務官がそんな不透明でしかも過去の経歴がわからないような人物をいきなりヘッドハンティングなんてするわけないじゃない》

《い、言われてみれば……》

おっしやる通りです。

《これは絶対何かあるわよ》

《じゃあ、聞いてみたらいいじゃん》

《え、聞いてみたらって、ちょ、スバ》

「シャーリーさん、フェイト隊長はどうして朧さんをいきなり執務官補佐に選んだんですか?」

《ふっふくん。これでいい》

《訳あるかぁーっ!?!》

《へ?》

《へ?、じゃないわよ。アンタ何真正面から聞いてんのよ!そんな風に聞いて答えてくれる訳ないでしょが!》

《そういうものなの?》

《そういうもんよ!》

じゃあ、わからないままになるのか。

「よくは知らないけど、入局を進めたのがフェイトさんだったからだと思うよ」

あれ？

《教えてくれたよ、ティア？》

「ということは二人はお知り合いだったんですか？」

《あれ〜、ティア？》

無視？

《ティア〜、ティアったら〜》

《うっさいバカスバル！少し黙れ！》

うっ、酷い……

「言ってなかったっけ？フェイトさんと朔さんって同じ世界の同じ学校に通ってたんだよ。幼なじみってやつかな」

「「そうだったんですか！？」」

「二人だけやないで？私となのは隊長も幼なじみや」

そう言って話に入ってきたのは八神部隊長。

「朔君は中学生の頃から、フェイト隊長達とは小学生の時からつきあいや」

『管理局最強の身内部隊だね』

「身内部隊は余計や！……否定はせんけど」

「しないんですか……」

「凄い身内だ……」

「まあ、私から言えるのはこのぐらいかな。気になるならまた今度直接聞いてみたら？」

「はい、そうします」

「オメエら話すのもいいがちゃんと模擬戦の方も見とけよ。こんなもん滅多に見れるもんじゃねえんだからな」

「は、はいっ！」「」

ヴィータ副隊長に言われティアと再び戦闘の方へ視線を向ける。

高速戦闘での剣の撃ち合い。

互いに一歩も引いてない。

どっちの方が強いんだろ？

「レインはどっちが勝つと思ってるの？」

なのはさんも気になるのかな？

でも、レインは昶さんのデバイスなんだから当然昶さんが勝つって

『フェイトちゃんに決まってるじゃない』

昶さん裏切られた！？

しかも、一瞬で！？

「理由聞いてもいいかな？」

『そんなの皆わかってる事じゃないの？理由は簡単、あの戦い方よ』  
「戦い方？」



思わず声に出しちゃった。

『そ、模擬戦だからって多分無自覚だろうけど手を抜いて、ろくに魔力管理もせずやってるから今にも魔力切れを起こす。普段ならこの程度どうってことないんだけど今はリミッターも付いてるからね、初めてのリミッターにペース配分が取れてないもん』

確かに戦ってる昶さんちょっと辛そう。

『ほかにも私とユニゾンしてない事とか言い始めたらキリがないよ』『そうだね、やっぱりユニゾンした方がよかった？』『なのはちゃんも人が悪いよね』。本当はそこが狙いだったんでしょ？』

狙い？

レインは目を細めて笑みを浮かべながらなのはさんに話す。

『今回のコレ（模擬戦）は昶ちゃんの力を試すものじゃなくて様々な条件化での戦闘行為に慣れさせるのが目的なんでしょ？だから私とのユニゾンも止めさせた。違うかな？』

『うん、さすがレイン。でも昶君の力を知りたかったのも本当だよ』『まあ、確かになのはちゃんの推測通り私達はこの二年、手を抜ける環境にいなかったから、常にユニゾンして戦ってたし、使えるものはなんでも使うような戦い方してたからね。“アレ”だってそれなりに使ってたし』

レインの“アレ”という言葉に一瞬なのはさんの目が細まった。

「やっぱり使ってたんだね。それについてはまた後で本人に追及するとして……本当の事、やるまえに言わなくて怒ってる？」

『まさか。セーブの仕方はこの部隊でやっていくのに大切な事だも  
ん、特に朧ちゃんに“とつて”はね』

“とつて”？

「そろそろ決着だ」

今まで黙っていたシグナム副隊長の声で話が終わり、全員が試合  
に注目する。

『さてさて、後どれだけ粘れるかな？』

side out

「はあ……………はあ……………」

数十合の撃ち合いに加え、高速戦闘の為の魔力運用に十数回の“  
手中転移”で朧の魔力は極端に低下していた。

(使える魔力はあと三割弱……………ちっ、ちゃんと魔力管理すればよか  
った)

後悔先に立たず、朧は直ぐさま頭を切り替え、フェイト攻略の手  
立てを模索する。

「どうしたの、動きが止まってるよ?」

「……れ……」

「え?」

昶は突然ぼそぼそ呟き始めたが、フェイトの方まで聞こえない。

「……かれ……」

「聞こえないよ?」

「つかれた、だからもう終わらす」

昶は手中の剣を構え、駆ける。

「神煉流壱式、蒼閃」

閃

横に振るったその軌道から蒼白い斬戟がフェイトへと迫る。

迫る斬戟に対しフェイトは、

「いくよ!バルディッシュュ!」

『ロードカートリッジ』

ガシャンガシャン、と音を立てバルディッシュュの魔力刃の強度を上げる。

「はあああああ!」

振りかぶった大剣で向かってくる斬戟を迎え撃つ。

撃

蒼と金の刃がぶつかり合う。

その衝撃で打ち勝ったのはフェイト。

「よし！」

斬戟を掻き消した事で安心するフェイトだが、

『マスター、後ろです！』「え？」

「遅い」

バルディッシュの声でプロテクションを張るのは間に合ったが背を蹴り飛ばされ、なんとか宙に留まる。

「神煉流肆式、旋風つむじ」

轟

辺りに溢れ出す魔力がまるで風のように吹き荒れ、剣へ纏わせ竜巻を打ち飛ばす。

「……………」

さながら極小の台風にも見える竜巻の中で咄嗟にバリアを張ったフェイトだが動く事ができない。

「はあああああ！！！」

身動きの取れないフェイトへと向かうため昗は自ら作り出した竜巻へ突っ込み、剣をバリアごとフェイトをたたき付け、遠く佇む廃ビルへと打ち飛ばした。

「はあ……はあ……はあ……」

フェイトの飛ばされたビルは崩れ落ち、瓦礫と化しし、砂煙が立ち巻いている。

「これで……俺の……勝ちだ……な……」 自ら作った竜巻の中へ飛び込んだ事でバリアジャケットは破れ、至るところに切り傷ができています。

昗は自身の勝ちを確信し、地上に足をつけ、フェイトの落ちた方へと向かう事にした。

残念だったね

その声は不意に聞こえてきた。

「おいおい嘘だろ……」

声のした後方へ向くとフェイトが左手を前に掲げながら上空に佇んでいる。

すでにカートリッジのロードや詠唱も済んでいる。

「ちっ、アート……」

西洋剣を直ぐさま破棄し、ボロボロとなった、もはや剣の役割も成さない大剣が姿を現す。

「トライデントスマツシャー！」

フェイトの前に展開された魔法陣の中心から大きな砲線と二本の砲線が朔に向かって飛んでいく。

朔は左手を前に掲げ、残ったありったけの魔力を大剣へ込めミツド式とも、ベルカ式とも違う障壁を展開する。

朔の魔法陣五重の障壁がフェイトの砲撃とぶつかり合う。

「はああああ！」

魔力を送りつづけ、耐久力を上げ続ける。

しかし、一枚、二枚と散っていく。

三枚目、四枚目の障壁も散り、五枚目に差し掛かった時、フェイトの砲撃と障壁が拮抗し、爆発する。

「はあ……はあ……」

なんとか防ぎ切ったが、大剣は原形を留めてなく既に魔力もすっからかんに加え、爆風で前が見えない。

「これで終わりだね」

後ろから声がした。

朔は目を下にやるとバルディッシュのハーケンフォームの刃が喉

元に当てられている。

ここまでか

「何か言うことは？」

「……参りました」

「はい」

降参の声にバルディッシュを下ろす。

「私の勝ちだね」

「……ああ」

試合はフェイトの勝利で幕を閉じた。

第六話 模擬戦（後） 〱真意と決着〱（後書き）

さすがフェイトさんですw

やっぱり彼女には勝てないツスわ（笑）

ティアナやスバルはこんな性格じゃない!!と思われる皆様、私も  
そう思います（汗）

ただ、この先の展開等の関係でこんな感じに……

それと、前回から募集している、座談会タイトル名！本当にお願  
いします!!

ただ今応募数0……  
私泣きそうです!!

でも、顔で笑って心で泣くが教訓の私はめげません！

お便りが来るまでは!!

では、次話でお会いしましょう！



第七話 踏んだり蹴ったり？（前書き）

どうも、夕です

今回もまた身のない話です

早く、先を書きたい……

では、どしどし……

## 第七話 踏んだり蹴ったり？

模擬戦は最後、翔の油断という事で幕を閉じ、今は二人でなのは達の元へ戻っている。

「負けるつもりはなかったんだけどな」

「ふふ、でも私も危なかったよ」

どうだかな、と口に出しかけるが押し止める。

(条件付きでの戦闘なんてここ暫くしてなかったからな。管理局に戻ってきたんだし、もう少し周りの目も気にしないと)

そう考えていた翔に、フェイトが声をかける。

「翔」

「ん？」

「約束守ってね」

「約束？なんのことだ？」

勿論、翔は覚えているし、守るつもりでもいるがなんとなくフェイトを困らせてみたくなったのだ。

しかしそれが間違いだった。

「や・く・そ・く、覚えてるよね？」

「はい……ごめんなさい」

翔は思った。

フェイトに冗談は通じない、と。

「　　」

鼻歌混じりのフェイトと、引き攣った顔の朔。  
対象的な顔をした二人を他の者は温かく迎えた。

「二人共お疲れ様や」

「はやても来てたのか」

「気になってたからな」

「腕を上げたな」

普段はあまり褒めないシグナムが朔を褒める。

「まあな」

「でも、今回ので課題も浮き彫りになったんじゃねーか」

「うるへー」

ヴィータに痛いところを付かれて悪態を吐いてしまっが、内では「  
言われた通りだ」と思っていたりもする。

『ヴィータちゃんの言う通りなんだから素直に聞いていなさい』

「わかってるよ、子供扱いすんなよ」

『そういうことはフェイトちゃんに勝ててから言ってね』

「うっ……」

言い返せず黙りこくる。

『だいたい、朧ちゃんは』

引き続き、レインに罵倒されそうな朧に助け舟（話題転換）がきた。

「朧さん、後でアート貸してくださいね。修理しないといけないですし」

シャーリーの言う通り、既に朧のアートはボロボロの状態だ。

「それと……」

「ん？」

下を向きながらプルプル震えているシャーリーの顔を朧は首を傾け覗き込む。

「あのNo6“大剣”の新技术はなんなんですか!？」

「うわっ!？」

泥舟だった。

いきなり顔をあげ、目をキラキラさせながら聞いてくるシャーリーに朧は驚き、少し後ずさる。

「模擬戦途中だったからずっと我慢してたんですよ!あの魔法陣は!?!?どういう原理で!?!?どこで手に入れたんですか!?!?解析してもいいですか!?!?誰が作ったんですかあ〜!?!？」

「いや、ちょ、ちよっと待って!!??」

怒涛の攻めに混乱する昶。

「さあ解答を、さあ、さあ、さあああああ〜!」

もはや壊れた技術主任ジャンクバカに“待て”は通用しないと悟った昶は助けを求め、レインを見るが、エリオ達と話しており、一瞬目があつた時の『私しくない』とでも言うような顔で昶を地獄の淵へと追いやつた。この時昶が「死ぬ、この裏切り者お〜!」と心の内で叫んだと言つことを付け足しておく。

「と、とにかく後じゃダメなのか？俺は模擬戦で疲れてる。シャワー浴びたい。その後説明、OK？」

もつともである。

「NOです！もう待てません！私に新たな知識を！技術を！プリーズ！」

もはや常識も通じず、昶は視界からシャーリーを消してさっさとシャワーを浴びに行く事にする。

もついいのかな？

空気が冷たいものになつた。

今の今までギャーギャー騒いでいたシャーリーも静かなもので他も皆声を出せないでいる。

「昶君模擬戦お疲れ様」

「あ、ああ」

声の主はなのは。

翔は恐る恐る声のした方へ向く。

笑ってる

けどその顔は完全に微笑ましいものじゃない。

翔は知っている。

既にここに来て何度も味わったはずだ。

世界最恐の笑顔を……

「どどど、どうしたんですかなのはさん？」

思わず敬語を発してしまう。

「翔君私昔言つたよね？無茶は止めてねって？」

「お、覚えてるよ。そそそ、それがどうかしたか？」

先程までの戦闘で火照っていた体も今はまるで雪山に放り込まれたように冷たく感じる。

「翔君二年の間にも結構無茶したみたいだね」

翔はレインを睨み付ける。この瞬間長年連れ添った二人の間にアイコンタクトが成される。

（てめえ、レイン！余計なことを！）

(え〜と……ドンマイ)

(何が“ドンマイ”だ! どうせお前がなのはに乗せられて言わされたんだろ! バカデバイス!)

(ひっどーい、そんなこというの!?! 私は朧ちゃんの事を思ってなのはちゃんにイロイロ言っただのに!)

(それだろがバ)

「聞いているの、朧君?」

「聞いてます、はい!」

表情の変わらないのはに周りも冷や汗が止まらない。

「でも、過ぎた事を言っても仕方がないからね。二年間の事はそんなに怒ってないよ」

「そ、そうか、アハハハハ……」

朧は“怒ってないよ”の一言で安心しきって大切な言葉を聞き逃していた。

「でもね? 朧君。さっきの無茶な戦い方はなんなのかな?」

「ハハハ……え? 怒ってないって……」

「うん、“二年間の事は”ね?」

再び空気が凍り付いた。

「……………ハハ、ハハハ、ハハハハハハハ」

朧は壊れた。

「ハハハハハ……さらばっ!」

脱！

魔力で強化したわけでもないのに脱兎の如く駆け出した。

しかし、

「なっ、バインド!?!」

朧の体に幾つもの桜色の輪が絡み付く。

「甘いよ」

「な、なのは……」

もはや逃げる事も言い訳もできない。

「フェ、フェイト!」

助けを求めるがフルフルと顔を振られ、他は皆顔すら合わせようとしない。

「あ、あれバリアジャケット?お、お前ら離れて行くな!」

「朧君……」

「は、はい……」

「少し頭冷やそっか……」

「いや、ちよっと」

レイジングハートを構えたなのはを止める手立てはもはやない。

「ダイバィィィン」





周りを見ると、シャルさんがいた。

「ここはメディカルルームよ。なのはちゃんの砲撃で気絶してそのままここに運ばれたの」

「そうですか」

なのはのやつ無茶苦茶しやがって……

あれ？模擬戦での傷痕も治ってる。

「切り傷とかもあつたから治療しといたけど無茶しちゃダメよ」

シャルさんはこちらの考えを読みとって答えてくれた。

「はい、すみません。ちょっと頑張りすぎちゃいました」

「テストロツサちゃんに強くなったとこ見せたかったの？」

「ノノち、違いますよ！ただいつまでも負けっぱなしは嫌だなんて」

「ふふっ、そついう事でいいわよ。でもこれからは気をつけてね」

「はい……」

「ありがとうございました」

俺はメディカルルームを出て少し歩いていると重要な事に気付い

た。

「此処ってどこ？」

まだここにきて数時間しか過ぎてなく施設を案内される間もなくぶっ飛ばされたので全然わからないのだ。

「どうしょ……」

メデイカルルームに戻ってシャマルさんに聞こうにも戻り方もわからない。

「迷子だ……」

仕方ないじゃないか。  
初めての場所なんだから。

「とりあえず歩くか……」

歩いてたらどこかにつくだろつ。

というか今何時だ？

ここに付いたのが十二時で説教に二時間で挨拶、模擬戦もろもろで一時間。気絶してた時間は……わからん。

「今の時間とは……あれ？アートのがない……」

気が付くとズボンに引っ掛けていたアートが全て無くなっていた。

六つで一つのデバイスアートの待機状態は全て指輪。指輪なんだ

から指に通そうかとも考えた事もあったが正直、六つも付いてたら邪魔だ。それに俺は指輪なんぞ似合わん。

## 閑話及第

それが全部なくなってるってことは……

「あつ、そっか。気絶してる間にシャーリーが持って行ったのか」

確か調整したいから貸してくれと言われていた。

後で返してもらえばいいか。

でもそれより……

「今日は仕事とかないよな……」

初日だしこんな事になったんだからあったとしてもフェイト辺りがやってくれてるだろ。

デスクワークだけはやりたくない……

そうこうして歩いていると食堂らしき所についた。

時計があり、見ると二十時を既に回っていた。

「あ、翔」

「ん、起きたんか？」

声のする方を見ると隊長陣（+レイン、リイン）が揃い踏みしていた。

「気が付いてたんだね」

「ああ、心配かけて悪かったな」

「気をつけてね、昶くん」

「なのは、お前が言うな。俺の責任でもあるけど半分はお前の責任でもあるんだぞ」

「にははは。ゴメンゴメン」

頭に手を当てながら謝るなのは。

ホントに反省してるのかこいつは……

『昶ちゃ〜ん。私だって五分くらいは心配したんだよ〜』

「はいはい、そりゃ嬉しいね」

『どーいたしまして』

えへん、と腰に手を当て踏ん反り返るレイン。

ない胸張るなオイ。

とりあえず、料理を運んできて、フェイト達のテーブルにお邪魔する。

「エリオ達はどうしたんだ？」

もう食べ終わったのか、と聞いた俺にヴィータがプチトマトを口に運びながら答えてくれた。

「アイツらなら今頃グロッキー状態だ」

「飯も食わずにか？」

「まあ今は寝かしてやれ、昨日もこんな感じだったしな。後で食べにくるだろう」

そんなにキツイのか、と聞いたかったがなのはの訓練なら有り得ると感じて口に出さない。

まあご愁傷様と言うことだ。

ん、このパスタ旨い。

「そういえば俺のデバイスってシャーリーが持ってんだよね？」

そう言つと何故か皆して疲れた顔をしだした。

「う、うん……はあ」

「いちような……はあ」

む、何故そんなため息をする。

『朧ちゃん、アートかなり壊しちゃったでしょ？その修理と言う名目で部屋に閉じこもっちゃって全く出てこないんだって。暫く借りたからって代わりにのデバイスまで渡されちゃった。大方調べ尽くしたいんだね』

そう言つて俺が受け取ったのは剣のキーホルダー型のデバイス。

「多分、シャーリーに説明を求められると思うよ……」

憐れ朧、みたいな顔をするなよフェイト!!

「覚悟しとくよ……」

なんだかんだで楽しく夕食を食べ終え今は自室で休憩中。

荷物はまだ殆ど段ボールの中だ。まあ元々荷物は多い方じゃないけど。

レインはリインの所へ遊びに行っただけ今部屋のベッドでゴロゴロ口の真っ最中。

「やべ〜、この枕最高」

フカフカ枕万歳。

そこに、コンコンと扉を叩く音がした。

「空いてるよ〜」

扉が開いたら、フェイトが立っていた。

「どっしたんだ?」

来た理由は……

「約束の件」

だよな。

「少し散歩しようか」

俺達は部屋を出た。



第七話 踏んだり蹴ったり？（後書き）

なんかビミョーでしたかね（笑）

別にこの話もなくて良かったんですけど、まあ約束を守らすためには入れなきゃな〜って感じたんで入れました！

最近よくこの話、読んでくれる人がおるんかな〜、って思ってしまします……

……少しずつでも良い作品を作っていきたいので感想や座談会タイトル名！お待ちしてます！！

では……！！

## 第八話 約束は計画的に（前書き）

どうも、夕です！

武戦鬼人さん、感想ありがとうございました！！

今回のお話、最後の方なんかおかしくなってますけど反省してません！！後悔してるけど（笑）

昴とフェイトしか出ないですけどどうぞ！！！！

あと、後書きも見てくださいね！！

## 第八話 約束は計画的に

春先でまだ肌寒い満月の夜。

「寒くないか？」

「大丈夫だよ」

月明かりに照らされながら二人は歩いている。

朧がフェイトを散歩に誘ってからすでに二十分も過ぎていた。

しかしフェイトは自分から決して口を開こうとはしない。ただただ朧の横で歩いてるだけ。

待っているのだ。朧自身から話してくれることを。

そのことがわからない朧でもない。

覚悟を決めて切り出した。

「どこから話そうか」

「ここまでが大まかな二年間での出来事だ」

「…… 朔」

「驚いたか？」

静かに話を聞いていたフェイトはゆっくりと朔に近づいていき、

パチン

朔の頬を叩く音が静かに響いた。

朔もこうなることを予想していたのか何も言わない。

「なんで…… どうして何も言ってくれなかったの！私…… 私達が信用出来なかったの！？」

普段温厚なフェイトはこぞぞというばかりに激しい剣幕で朔を責め立てる。

「心配をかけたくなかったんだ」

言えば止める、もしくはついて来ると聞かなかったら、と

「当たり前だよ！心配かけたくなかった？二年も勝手にいなくなる方がずっと心配するぐらいわからなかったの！！」

「……ごめん」

「バカ！バカ、バカ、バカ、バカ、バカ！」

泣きながら昴の胸を叩き続けるフェイト。

こんな姿が見たくなかったはずなのに。

「ごめん……」

その一言しか言えず、顔も俯けてしまう。

そんな昴をフェイトは抱きしめる。

「バカ……前にも言ったでしょ？……私はいつでも昴の味方だって

……一人じゃないって……もっと……周りを頼っていいんだよ……」

あの時のように

そっと

壊れないように

「ああ……そうだったな……」

肌寒い月夜に、確かな温もりを感じていた。

「収まったか？」

「うん……、って翔のせいでしょ!？」

「ははは……ごめん」

「もう!」

暫くして泣き止み頬を膨らませながら怒るフェイトの反則気味な表情に翔は思わず顔を背けてしまう。

「どうしたの顔赤いよ?」

「な、なんでもない!」

?、と不思議そうに顔を傾げるフェイトだがそれがまた翔にはドストライクなのだ。

翔の方は何か話題転換しようとするが何を言ったら良いかわからず、混乱しているとフェイトが急に何かを思い出したような声を上げた。

「あ、そういえばもう一つ約束してたよね」

「え? そうだっけ?」

思考の海へ潜り何を約束したのかを思い出す。たしか

負けたほうが相手の言うことなんでも聞く

言った。確かに言った。

あの時はたいして気に留めてなかったがよくよく考えると、とんでもない約束をしたものだと言いたがる。

初からずるといった何を言われるのか……仕事量の増量なんて言われたら溜まったもんじゃない。

「何をやらせるつもりだよ……」

冷静を装うが内心何がくるかドキドキで汗もダラダラと噴き出し  
ている。

「それじゃあ一つ目はね」

マテ

コイツハナニライツテイル

「ちょっと待て！お前はいつたい幾つやらせるつもりだ！普通一つ  
だろ、一つ……！」

「だって何も一つだけなんて言っていないよ。ねえバルディッシュ？」

『はい、なんなら再生してみますか？』

「う………もういいよ」

ずるい、ずるすぎる。内心そう思ったが口に出せば言い含められ

ることが目に見えているので黙っておく。

「守ってもらいたい約束は三つ。まず一つ目は勝手に居なくならないでちゃんと相談すること」

フェイトからすれば尤もなことだ。

毎回毎回「任務に行く。元気だな」と、今生の別れみたいな書き置きが残されていて何年も音信不通など溜まったもんじゃない。

他の者に聞いても知らないやら、わからないやら、ばかりで初めの方は結構沈んでいたものだ。

「それは今回の事で身に染みたまよ」

昗もこれにはすぐに同意する。

「二つ目は無理をしないこと。昗はなのはみたいにすぐに無理するんだから」

これは先の模擬戦だけの事ではない。

補佐をしていた時からあったことだ。そのおかげで危うく腕の一本や二本、無くしかけた事も少なくない。

「あんまり自覚がないんだけど……」

「それが一番重症なの！」「うっ……善処するよ……」

渋々承諾する。

守られるかどうか定かではないが。



「三つ目は月に何度か勉強する時間を設けること」

「……………は？」

一瞬思考が停止してしまった。こいつはいったい何を言ってんだ？

意味がわからないと言うような顔の朧にフェイト言った。

「だって朧の知識って凄い偏りがあるでしょ？」

「そんなことないぞ、俺だってちゃんと」

「中学の時から勉強してないでしょ？」

「それは……………」

「それに管理局の事だって殆ど覚えてないでしょ？」

「そうだけど……………」

朧は勉強が嫌いだ。

別に出来ない、という訳ではない……………と思う。本人曰く、やる気が出ない、机に向かってペンを構える、という行為自体が嫌いということなのだが。

本来、魔法の構築や制御には地球で習う理数系が重要となるのだが、朧の魔法はミッド式やベルカ式とは違うモノで、理数の理解があればあるほどいいのだが別に理解が乏しくとも魔法行使ができるのだ

朧は諸事情により中学の頃から学校に行き始めたのだが、ハツキリ言ってやる気がなかった。興味のないものは全くと言っていいほどしないし、出来ない。授業は疎か、テストで寝るのは当たり前。そのせいで、成績表は殆ど一か二。成績表をフェイトやリンディに見せなければならぬ際はいつも偽装通知表を用意していたという徹底ぶりだ。

その気概を勉強に回せば幾何出来ていたのだろうかとも思わずにはいらぬ。

当然の如く偽装はバレて悲惨な目にあっていたのだが……

ちなみに何故リンディに見せてたのかと言うと、朧を産んだ両親は幼い頃に死に、親代わりっぽい人もいたのだが十一の時に死んでしまい、”ある事件”をきっかけに管理局に保護され天涯孤独だった朧をハラオウン一家が世話していたからだ。

またまたちなみにリンディというのはフェイトのお義母さんで、他にフェイトの義兄のクロノ、その妻であるエイミィと二人の子供、フェイトの使い魔のアルフ。以上がハラオウン一家である。

## 閑話及第

ともかく朧は勉強しないし、出来ないのだ。

「別に難しい事をやれなんて言っていないよ。せめて義務教育で習う範囲ぐらいの教養は覚えなさいと」

「それぐらい俺だって……」

「じゃあ問題ないよね？」

「いや、だからそんなの」

「第一、約束なんだからちゃんと守らないとね」

痛いところをついてくる。

それを出されたらもうどうにも出来ない。

「わかったよ……」

渋々承諾する。

「私が責任を持ってちゃんと教えるから頑張ろ」

「冗談じゃない」

という言葉をなんとか飲み込む。

勉強することは千歩、いや万歩譲って我慢しよう。

だが、初としてはスパルタな勉強法に定評のあるフェイトだけは  
なんとしてもごめん被りたい。

こうしてる時も昔の重・い・出がひしひしと甦っている事だろう。

「いや、フェイトも忙しいだろ？なのはかはやてにでも教えてもら

「わ・た・し・が・や・る」

「……………はい」

笑顔な女と落胆した男、対象的な表情をした二人は宿舎の方へと  
戻っていった。

## 第八話 約束は計画的に（後書き）

どうでしたか？

翔くんは勉強大嫌いです、はい。

やっと初日終了です。

長かった……

突然ですが皆様！！

私は勘違いしてました！

11月が31日までであるものだ……！！

前々からお願いしてました座談会タイトル名、今日の深夜までです！

ただ今応募総数0件……！！

泣きそうです！

どなたかお願いします……！！

普通の感想もお待ちしてます！

でもどうか、タイトル名を……！！

では……！！

## 第九話 勘繰りと信頼（前書き）

なんとか間に合った……

どうも、夕です。

今日朝から友達の間も含めてモンハンの為に並んで手に入れました！

前作はHランク3程度で辞めてしまったんで今回は頑張りたいと思います！！

話題が逸れましたが座談会！やりました！

見てください、どうぞ！！

## 第九話 勘繰りと信頼

ちびっ子着物少女、レインの朝は昴を起こす事から始まる。

『昴ちゃん、朝だよ！起きないと遅刻するよ！』

たまにはこういうのがあってもいい、とレインも思う。しかし、これが毎日しなければならいとなれば、

『結構面倒なんだよね〜』

マスター  
昴は今だに夢の中。

参る。ほんとに参る。

そう思いつつも起こさない訳にはいかないのです声をかけつつける。

『ホントに寝坊助なんだから……昴ちゃん！起きてっば！』

『あと二時間……むにゃむにゃ……』

『そこはあと五分って言っところだね！？完全に欲求全開だよね』

『！っ？』  
「……ZZZ」

起きる気配が全くない。

仕方がないのでレインは大きく息を吸い怒鳴り散らす。

『すうーい、起きなさあ……い！……い！……い！……い！……い！……』

『ん……、なに……』

返答している昗は目をパチパチさせており、未だ寝ぼけている。

『もう朝だから、早く顔洗って、着替えなさい!』  
「うん……」

寝癖たつぷりで目をかきながら洗面台へ向かう昗を見てレインは大きなため息をつかずにいらなかった。

朝食を済ませ昗とレインはF W組と一緒にレインの案内で施設や人員の紹介を受けている。

ようするにオリエンテーションだ。しかし、そこで少し疑問が出てくる。昗やレインはわかるが何故今になってF W組なのか？

彼女らは今日でもう三日目ならもう済ませているはずなのでは？

『昨日するはずが昗さんが遅刻してきて挨拶やもろもろで出来なかったからですよ』  
「すみませんでした!」

昗はとりあえず謝った。

例えこちらに悪気がなくとも一応は頭を下げる。  
翔は多くの経験（主に悪魔達）から学んでいた。

『こちらの食堂で、案内はひと通り終了です。ちよつどお昼休みですし、これにて解散としましょう』

「「「「「ありがとうございます！」「」「」

「サンキュー、リイン」

『リインちゃんありがとう』

『はいです』

数時間後、案内を終えたリインはびゅーんとどこかに飛んで行ってしまい。

五人+レインが残された。

「さて、お昼ご飯でも食べようか」

「「「「「はい！」「」「」

空いている席を探しウロウロしていると

「スバル〜ちよつといい〜？」



遠くの方から女の子が手を振りながら声をかけている。

「はぁーいっ。すみません、先に食べてて下さい。すぐ合流するんで」

「わかった」

そう言うとスバルは呼ばれた方へ走って行った。

ここにきてまだ三日のはずなのだがスバルは既に殆どの事務員とも交友関係を結んでいる。

残された翔達は人数分の席を確保するために辺りを見回す。

「ティアナ、どこか席空いてないか？」

「あそこが空いてるんじゃないですか？」

「お、んじゃ行こうか」

『早く行こ。お腹すいた』

たわいもない話をしながら席へ向かうのだが……

「……」

「えっと……エリオ、キャラ？」

「はい！」

「お前ら、お互いに全然喋らないな」

「え？」

「そうですか？」

部隊最年少であるエリオとキャラ。お互い十歳なのだが最低限の会話しかしていない。

「六課に来てからだろ？初めて会ったのは」

「そうですね」

「えっ？私は二人兄妹みたいなものだって聞いてたんですけど……」  
ティアナは不思議そうな顔を昶の方へ向ける。

「ああ、それは……」

「私達は二人ともフェイトさんが保護責任者なんですけど、別々の場所で過ごしていましたので」

「写真では知ってたんですけど」

複雑な生い立ちを持つ二人はフェイトに保護された経緯を持ち、その頃から昶とも面識があった。

それをすぐに察したティアナは罰の悪そうな顔で二人に謝罪の言葉をかける。

「……そつか。ごめんね。あんたらもいろいろ複雑なんだ」

「いえ、フェイトさんからもなるべく二人で仲良くしてほしいと言われてますので」

「そう。お母さんの言うことはちゃんと聞かないとね」

「はいつ！」「」

子供らしい、元気な返事に皆、笑みを零してしまふ。

『なら、二人とも、ちゃんコミュニケーションとらなきゃ』

「レインの言う通りだぞ。俺やレイン、フェイトとかなら普通に話すだろ。そんな感じでいいんだよ」

「そうですか？」

「そうだ。二人はライトニングのコンビで家族のようなものなんだからな」

「何の話してるの〜？」「」

そんなことを話しているうちにスバルが帰ってきた。

「別にちっこいの二人があんまり話さないわねって、言っただけ」  
「あーそれ、あたしもちよびっと思ってた。お話はしたほうがいいよ」

「はい！」

「最初は話なんてあわないのが当たり前！なんでもお話してくうちにいろいろわかってくるもんなんだから」  
「はいっ！」

新人組の中で飛び出て社交的なスバルからの言葉はどこか説得力がある。

これで二人の間の他人行儀な雰囲気は解消されるだろう。

「がんばりましょう、ルシエさん！」

「がんばるであります、モンディアル三士！」

ダウト

「そこだよ、そこっ！！何で敬語！？もっとフレンドリーに！わかるかなあ！？」

『とりあえずはその呼び方と』

「敬語ね」

「行くよ、キャロ！」とか“うん、エリオくん！”とかでいいんじゃないの？」

「「が、がんばります」」

どこかずれた会話をするおチビ二人。がんばるとか、がんばらな

いとか、そういうことではないと思うのだが……

『もう、お腹すいた〜。早く食べようよ〜』

「そうね」

「行く〜！」

「朧さんとエリキヤロって知り合いなんですよね？」

取り皿の上に大量のパスタを取りながらスバルが言った。

「ん？そうだな。フェイトが二人と出会った時に俺もいたからな」

執務官補佐であった朧は大半がフェイトについていく事が多かった。当然、当時の二人の事も多少なりとも知っている。

「あの朧さん、質問いいですか？」

「いいよ、ティアナ」

「フェイト隊長達とはいつからお知り合いだったんですか？」

「ん、フェイトと？そうだな……六年？……くらい前からじゃないかな。その時にフェイトやシグナムと出会って、なのはやはやてを紹介してもらったんだ」

『でももうすぐ七年くらいじゃない？』

「そんなにか。あの時が懐かしいな〜」

「どんな出会いだっただんですか!？」

テーブルから身を乗り出すスバルに翔はなんでそんなに興味津々なんだ、と思わずにいられなかった。

side teana

まったく、この子は……

《ちょっとスバル!せっかく少しずつ聞き出そうと思ってたのに!》

《だって》

《もういいわよ》

《ごめんね、ティア》

バカスバル。

まあいいわ。

どうせアンタはわかってないんだろっし。

この話には少しおかしな所がある。

翔さんとレインの話から、まあ七年としよう。昨日シャーリーさんが言っていた翔さんの勤務年数は約七年。普通同じ学校だったとしても出会ってすぐに勧誘みたいな事があるのだろうか?誰も嘘を付いてる感じではなかったし……あああもうわかんない!

こうなりやヤケよ！

「私も興味あります！」

「そんなの聞いても面白くないぞ」

「いえ、そんなことありません！」「」

「ん〜、やっぱりそれはまた今度な」

「そんな〜」

「仕方ないわ。諦めなさい、スバル」　まあしょうがないか。

《いずれ、チャンスは来るわよ。気長に待ちましょ》

《わかったあ……》

ここは断念して私は食事に戻る事にした。

side syo

《別にご飯時に言うような内容でもないしいいよな？》

《いいんじゃない？話すなら全部言わないといけなくなるし》

《だよな。でも何でそんなことあいつらは興味あるんだ？》

《昶ちゃん……ギャルゲ主人公、顔負けの朴念仁だね……》

《はあ？どついう意味だよ？》

《さてね。今度はやてちゃんにでも聞いてみたら？》

???、全く持ってわからん。

《何だよ……それと昨日フエイトに言ったからな》  
《言ったってこの二年のこと？私はそれでいいと思うよ。朧ちゃんは無茶ばっかするんだもん。私以外にも止めれる人が必要だし。なにより……朧ちゃんの進む道を私も進むだけだもん。文句なんてある訳無いよ》

《……》

《朧ちゃん？》

《……ぐすっ》

『えっ、ちょ、ちよっと朧ちゃん!?!』

「「「朧さん(どうしたんですか)!?!」「」」

ヤバイ……感動して涙出た。

いきなりのことでみんな驚いてるし。

「いや、なんでもないよ」

「ご飯に何か入ってたんですか!?!」

いや、何で？

「そんなわけないでしょ、バカスバル。でも、ホントに、いきなりおかしいですよ?」

「ティアさんの言う通りですよ。何か悲しいことでも思い出したんですか?」

「私達でよければ相談にのりますよ?」

四人とも優しいな。一人ちよっとズレてるけど

「ホントに大丈夫なんだ」

『 翔ちゃんはちょっと目にゴミが入っただけだよ』

「 ホントですか? 」

「 あ、ああ。だからなんともないよ 」

「 「 「 「 はあ……………」 」 」 」 」

納得してないみたいだけどしょうがないな。

《 もう! ! なんでいきなり泣いてるのよ! ? 》

《 だって、レインがすごく嬉しいこと言うから…………… 》

《 だからっていきなり泣かない! フェイトちゃんに言ったことだつてもともと言わないといけないことだったし、後々なのはちゃん達にも言わないといけないんだよ! 》

《 それはわかってるよ。でもレインがそんなこと言うなんて思わなくって…………… 》

俺を弄り倒す事が生き甲斐なのがレインだったはずなのに……………

《 私は私の好きに生きてるんだから別にいいの! 》

《 でも…………… ありがとう 》

《 もう、ホントに子供なんだから! ! 》

頬朱く染めたレインがぷいとそっぽ向いてしまった。

でもそんな風に思ってくれてたのはうれしいな。

「 翔さん? 」

「 何、キヤロ? 」

「 ホントに少し変ですよ? 」

「 何でもないよ。それより四人とも午後からは訓練あるんだろ? 早く食べよつぜ 」



この日の翔はフェイト曰く

「なんだかすごいうかれてた」

とのことだった。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

翔「異議あり！タイトル名の変更を申請したい！」

レ「却下〜 異議は認めませ〜ん」

翔「黙れ！この待遇は不当だ！」

レ「作者が決めたんだから仕方ないの」

翔「くっ……タイトルに不安を感じるが……今回から始めました  
！〜れいんぽすと〜！」

レ「ノリノリじゃない……れいんぽすと……うん いいタイトル名

じゃない  
タイトルを募集したみたいだけど、お送られてきたのはたったの1  
通だったし」

翔「たつたとか言わない！1通でも来た事に喜べよ！！」

レ「だつて〜」

翔「だつてもクソもない！えっと、送っていただいた武闘鬼人さん  
！」

二人「ありがとうございます！！」

レ「私、正直誰も送ってくれないと思つてたもん」

翔「うん、否定はしない。でも、悲しくなるからそういう事言うの  
はやめようか」

レ「今回のタイトルでは武闘鬼人さんのデカルトの言葉つても候  
補に上がってたんだけど、最終的に作者が『これどついう発音する  
んだろ？』という作者の知識不足でお蔵入りになつて、作者の友人  
が考えた“〇〇ぽすと”シリーズから選ぶ事になつたんだよね」

翔「明らかにひびちかさんだよね元ネタ！？」

レ「タイトルの事は置いていて」

翔「強引に流すな！？」

レ「ねえ翔ちゃん？」

翔「なんだよ？」

レ「ここって何喋っててもいいんだよね？」

翔「まあ、特に決まりはないな。ここは本編とは時空間が違うけど世界（小説）の抑止力が働くからダメなものは世界が勝手にどうにかしてくれる」

レ「うっそだ〜。なら言っちゃうよ？言っちゃうよ？ネタバレのオンパレードだよ？」

翔「やってみるよ」

レ「ただでさえ少ない読者減らしちゃっても文句言わないでね？実は の って で なんだよね〜  
って検閲入った〜!？」

翔「だから言っただろ？抑止力が働くって」

レ「じゃあ、ここって何するの？」

翔「基本的には、この作品を書くに当たったの苦労話とかその時の話の事、俺達の紹介、雑談、読者さんの質問に対する説明とかいろいろ……」

レ「質問くるの？」

翔「だから、悲しくなる発言禁止だっただって!!!」

レ「それじゃあ、とりあえず今回の話について触れてみよう」

翔「無視するなー!!」

レ「今回はコミックであった所だよね」

翔「ああ、まあ作者曰く今回のテーマは“信頼”だそうだ」

レ「私と翔ちゃんとの？」

翔「普段じゃ中々見れないレインのツンデレ姿が見れがばあっ!?!」

レ「余計な事言わないでいいの!?!」

翔「はい……」

レ「あと、ティアナだね」

翔「そうだな。別に面白い事なんてなんにもないのにな」

レ「わかってないね。翔ちゃんは」

翔「どういづことだよ?」

レ「女の子って言うのは秘密事っていうのが大好きなもんなんだよ」

翔「、してた が言うなよって、検閲入った!?!」

レ「便利だね。抑止力」

翔「だな」

レ「と、まあ今回はこんな所かな。ちょっと物足りない気もするけど初回だしこんな感じでいいかな」

翔「そうだな。これからお便りとかそんなのが届いたらそれについても答えていくつもりだからよろしく」

レ「感想とかいろいろ待ってるよ」

翔「じゃあ」

二人「またな（ね〜）」

第九話 勘繰りと信頼（後書き）

どうでしたか？

なんとタイトル名にレインが抜擢されました！！

感想くれたら嬉しいです。

では、次話でお会いしましょう！！！！

第十話 とある訓練での一日（前書き）

どうも、夕です！

SK&Nさん、感想ありがとうございました！

武闘鬼人さんも毎回ありがとうございます！

感想の一つ一つが励みになります！

今回はそれなりに重要かになっていう感じですよ。

では、どろどろー！

## 第十話 とある訓練での一日

side syo

六課に来て数日、副隊長に就任してるんだけどいまだに副隊長らしい仕事をしてない。まあ副隊長が何するかなんて知らないけど。

今だって新人達と混じってなのはの訓練を受けている。

何故副隊長の俺がそんな事をしないとイケないのかと言うと、それはなのはが、「翔くんにはもつと安全面を勉強してもらわない」と半ば強引に強制参加させられたからだ。

ちなみに俺の本来の仕事はレインとフェイトがやってくれているそう。

「まあデスクワークするよりマシだな」

「何か言った、翔くん？」

「独り言だよ」

「そう？」

現在、FW四人がガジェットドローンとかいう機械十五機と模擬戦中。俺はなのはとそれを観戦中。

ガジェットドローンというのはこれから俺達が戦っていく機械らしい。思っていたより動きは速いがどうってことない。でも、

「あのAMFはちょっと厄介だな」

AMFっていうのは確か、アンチマジックフィールドだったか？  
そんな感じの略語で簡単に言うとなんか魔力結合が掻き消されて魔法が



使えなくなる。まあ魔法が完全に使えないワケじゃないし要はやりようだ。

俺もあんまり詳しい事はわからない。

「うん。一般の魔導師じゃとっさの時に手も足も出ないだろうね」

ミッド魔導師の基本戦闘は魔力弾での攻撃。それが掻き消されるとなったら文字通り、お手上げ状態だろう。

「でも、あいつら頑張ってるな」

目の前のモニターではガジェットに奮戦するティアナ達の姿が映っている。

AMFにもそれぞれ対応し、少しずつ、危なげだが着実に破壊していつている。

「うん。訓練初日にもガジェットを相手させたけど、その時よりも動きがいいよ。ちゃんと、イメージできていた証拠だね」

まだまだ危なっかしいけどね、と付け加えるが、やっぱり嬉しそうだ。

自分の生徒が少しずつでも成長していく、それが嬉しくないはずがないか。それぞれの個性、長所を伸ばしあい、短所を補っていく。それがチーム戦の醍醐味だと俺は思う。

俺は苦手だけど。

「いいチームになりそうだな」

「してみせるよ」

なのはの腕に期待だな。

そうこう話している間に最後の一機にスバルの拳が叩き込まれた。

「全機撃破したみたいだね」

「時間は？」

「13分52秒」

「それじゃあサクツと終わらせるか」

「行ってらっしゃい」

四人が終わると次は俺の番だ。敵は同じガジェット、十五機。ただし戦うのは俺一人。

新人組対俺って感じだな。

『朧くん準備はいい？』

モニター越しになのが確認する。前方には既にガジェットが配置されている。

「何時でもいいぞ」

『それじゃあ、Start!』

なのはの合図と共にガジェットが一齐に散らばる。

「いくぞ」

『了解』

手に現れるのはアートとは別の西洋剣。

「アートのない間はこれを使ってくださいと、シャーリーに渡されたアームドデバイス。」

「俺の簡単な魔法はインストール済みとの事でこれくらいの戦闘なら支障は得にない。」

「身体に魔力を浸透させることで身体機能を強化し、地面を蹴り、一気に駆ける。」

「見つけた」

「散らばった内の一機を発見し、狙いを定め、手に力が籠る。」

「神煉流壱式 蒼閃」

閃

「剣を振りガジェットに向けて斬撃を放つ。」

「二回目になるがもう一度言うと、AMFが使われてるからって魔力による攻撃がすべて通らないわけじゃない。」

「小さな効力なら完全に掻き消されるがある程度の魔力量での攻撃なら威力が下がるだけで攻撃自体は当てることができる。これは今までの経験談だ。」

「一年ほど前にもAMFを使う奴と戦った事もあるし。」

「まあAMF濃度にもよるが……」

「蒼閃で真つ二つにし、すぐさま次のターゲットを捜す。」

「魔力を目の方へ充填して通し、辺りを見回す。」

「いた……って多いなオイ」

魔力が通された俺の目は今や最大4km程なら見て取れる。  
2km程先にはガジェットが五機で行動していた。

姿勢を低くして駆ける。

距離は後、100m程。接近しながら剣を振りかぶる。

「ふっ」

勢いよく投げた剣が一機に突き刺さり爆散させる。

他の四機は今の爆破でその場を離れようとするが俺はもう目の前にまで詰めて拳を奮う。

「神煉流伍式 碎覇」

魔力を練り込まれた拳は鉄をも貫く鋼拳。

地を蹴り、一機に殴打。

「はぁあっ!」

殴!

拳はガジェットを貫き、引きぬき、離れたのちに爆発した。

残った三機がビームを打ち狙ってくるが、それをできうる最小限の動きで避ける。

正拳、肘打ち、廻し蹴り、ガジェット共に再び”碎覇”を打ち付ける。

「はぁあ!」

残った三機のカジエツトを破壊し、先程投擲した剣を拾い、すぐに残りのカジエツトを捜しに走る。

「ガラクタは後何機だ？」

『残り九機です』

「時間は？」

『3分43秒です』

「マジか？ちよいゆっくりし過ぎだな」

確かFW組は10分と少しぐらいだったはずだし、このペースじゃ危ないな。

『残りの内、四機前方1km弱』

「よし」

仕方ない。ちょっとペース上げるか。

身体の周りに魔力が溢れ出す。

俺は先程よりも力強く地を蹴り、一気に距離を縮める。

「ソードスフィア」

『ソードスフィア オープン』

駆けながら六のスフィアを展開。

「ショット」

弾・弾・弾・弾・弾

鋭利な剣がガジェットへと向かうが着弾する前に殆どがAMFにより掻き消されるが、その間にガジェットへと駆け抜け、

斬・斬

すれ違い様に二機を切り裂き、

「蒼閃」

閃

蒼い斬戟が残ったガジェットを包み込み爆発させる。

「次」

破壊を確認し残りを潰しに行く。

「はっ！」

こちらに狙いを定めたビームを避け、最後のガジェットを切り払う。

『お疲れ様。それじゃあ戻って来て』

労いの言葉を聞き、俺はなのはの所に戻った。

Side out

『お疲れ様です！』

「お疲れ」

律義にも声を張り、労う新人達に向かえられ朧はBJを解除する。朧が戻ってきた事を確認してなのはは話しはじめた。

「みんなお疲れ様。ティアナ達のタイムは13分52秒、少しずつだけどタイムも縮まつてるしいい調子だね。きちんと前の訓練の経験が活かせていていい感じだった。でも、やっぱり動きが全体的に遅い。特に動きの切り替えが一番の課題だね。攻撃や防御、回避をしてる間にも次のことを考えてすぐに行動する。これは一番大事な事だからね。まあまだ訓練が始まってまだまだだからそれを踏まえて次からの訓練、がんばってみようね」

『はい！』

「次に朧くんだけど」

「おう」

「身体強化の出力もきちんと抑えてるね。これ以上の出力は出した

らダメだよ」

「わかってる。昔なのは達に散々言われたからな」

昶は過度な強化魔法を長時間行使した事で筋肉やら骨やら身体の内がポロポロになった、という過去があり、その当時病院のベッドの上で大いに反省させられた事がある。

「タイムは7分02秒。初めの方はのりくらりって感じだったけど、途中からの巻き返しはよかったよ。でももっと早く決めれるでしょ？」

「今日始めてガジェットを見たから軽く流した程度にただけだからまだまだ大丈夫だよ」

「なら私からはもう特にないな。皆は昶くんに何か質問とかあるかなあ？」

「はい」

キャラコが手を挙げた。

「答えられる範囲でならいろいろ答えるぞ」

「えっと、あの昶さんって身体機能を向上させる魔法使ってるんですよね？」

「そうだよ」

「私のブーストと似ていると思うんですけど、あんなに半永続的に使用して大丈夫なんですか？」

最もな質問だな、と昶は思う。

基本、どの魔導師も軽い身体強化の魔法はかけてある事が多い。

しかし、昶のソノ強化はブースト系のソレに酷似している。

ブースト系は自分の限界以上の力を引き出せるものだが、その分身体への負担も大きい。本来はキャラコのようにその要所要所で使う



のが好ましい魔法。

「俺のアレは確かにブーストと似てるけど根本的には違うぞ。俺のあの魔法は筋肉や血流の流れのような文字通り内側からも強化してるんだ。元々体質的に平気って言うのが大きいけど、負荷の方は一定以上の出力に上げないと出ないから大丈夫だし。それに強化の割合も部位ごとに変えていけるからその場に適した強化だけでいけるから心配ない。」

それに昔、出力を上げすぎて自滅した時、なのは達にめちやくちや怒られて、それ以来強化を制限するのを約束させられたしな」

「そうなんですか」

朔の強化は身体の内からの事なので基本的にはAMFなどで消される事はないのだが、外から纏う魔力は結合が解かれてしまうので結局は多めの魔力消費がデメリットでもある。

次に質問したのはスバル。

「朔さんの魔法ってミッド式ともベルカ式とも違うような感じがするんですけど……」

「ああ、俺の術式は独特で“アウラ式”って言って、まあ今でも使う人はそれなりにいるモンだよ」

「あつら式？」

「管理局の魔導師は“ミッド式”と“ベルカ式”だけだから知らないか。まあ最近じゃベルカも“近代ベルカ”やらばつかでシグナム達みたいなの“古代ベルカ”って言われてる騎士も減ってきたみたいだけ」

現在の管理局員の殆どが“ミッド式”と“近代ベルカ式”が主流で“古代ベルカ式”も聖王教会の騎士ぐらいしか使っていない、と

というのがここ数十年での一般常識である。

ちなみにミッド式は二重の真円、ベルカ式は正三角、アウラ式は六芒星の魔法陣の形をしている。

「管理外世界や管理世界の中にはいろんな術式を使う奴らがひっそりと暮らしてたりする事もある。中には魔導師じゃなくて魔術師やら魔女、能力者とか呼ばれたりする奴らもいる。まあ世界は広いって事だな。覚えていて損はないぞ。特にティアナは執務官志望なんだろ？そついう奴らと出会う事もあるだろうからな」

「は、はい」

自分達の行使している術式以外の存在に驚愕する四人だが、朔のアウラ式があることからすぐに容認した。

「話しが逸れたな。一般的にミッドは遠距離、ベルカは近距離となってるだろ？簡単に言つてアウラ式にこの考え方は当て嵌まらない」  
「え？」

「アウラ式はアレだ。“超対人戦特化術式”って言われてる」

「超対人戦……」

「特化術式……」

「まあ別に対人戦だけって訳じゃない。馬鹿でかい獣とか異形の生物との戦闘に適した術式もちゃんと存在する。ただ風の噂で対人戦特化つてのが一番広まってしまっただけなんだ」

本当の別の通り名もあるしな、と新人達に微笑みかけながら言う。

「まあアウラ式が廃れていった理由もそこにあるんだけどな」

三人はこの言葉の意味がわからないのか首を傾げている状態だが一人、その意味に気付いた。

「戦乱の時代が終わったからですか？」

ティアナだ。

新人FWの中で飛び抜けて情報分析能力が高いティアナは今までの朧の言葉でそこにまで辿り着いた。その事に朧もなのも驚きを隠せないでいる。

「いや、すげえなティアナ。やっぱしリーダー向きだな」

「うん、指揮官訓練受けさせたいくらい」

「い、いえ、今の訓練でいっぱいいいです」

ベタ褒めの上官二人に照れるティアナ。

「ティアナの言う通り、長かった戦乱の時代が終結して管理局が“人を傷付けないクリーンな力”をスローガンとした事により敵を傷付ける事に特化したアウラ式はどんどん停滞していった。まあそこらは古代ベルカと同じだな」

アウラ式と古代ベルカ式では非殺傷設定と言ってもどうしても相手手を傷付けてしまう術式も少なくない。

そういう時代の流れに負けていったのがアウラ式というわけだ。朧自身はクリーンな力と言っても武力には変わらないのだからクリーンも何もない、と考えているのだがそれは口には出さない。

「まあ術式についてはこんなもんだ。他には何かあるか？」

次に質問したのはエリオ。

「朔さんはなんであんなにデバイスを多く所持してるんですか？一つに纏めた方が持ち運びも楽なのに？」

確かに朔はデバイスを数多く所持している。フェイトの義兄であるクロノ・ハラウンも“S2U”と“デュランダル”の二つのストレージデバイスを使用しているが朔のように五つ以上も使い分ける者はそうもない。エリオの言うことにも一理ある。

「それは一つのデバイスにいろいろな形状を詰め込むとデバイス自体の耐久性や性能が低下してそのデバイス本来の力を最大限に引き出せないってのが大きいかな」

朔の持つ“アート”というデバイス等は耐久力や魔力の通りが通常のデバイスより二割弱ほど性能が良くなっている。その理由が殆どの機能を抜粋し、その分を必要な部分へと当てているからだ。

だがこれにもデメリットはある。

その最たるものが扱いこなせない、ということだ。

本来、一つのデバイスを極める事が大切なのだが、この場合、デバイスを変えるタイミングが酷く重要となってくる。二つぐらいなら同時に使用することも可能だろうが、それが五つも六つもなるとどうしようもない。

「まあ、管理局にこんなにデバイスを保持してるやつなんて俺以外いないだろうな」

複数扱う為には臨機応変な状況把握が必須条件なのである。

ここまでの説明を聞いて、ティアナが何か思い出したように口を開いた。

「そういえば、昔にも朧さんみたいな人がいたらしいですよ」

「ん？」

「訓練校で聞いた話なんですけど、十数年前にも幾つもデバイスを扱う魔導師がいたらしくて、その人が当時の“エース・オブ・エース”だったらしいです」

十数年前の人物が今日でも語り継がれていると言うのもその人物が歴代の中でも抜きん出たものを持っていたであろう事が容易に想像できる。

「けど、とある任務中に仲間の局員に攻撃を加え、重傷を負わせてそのまま逃亡して、S級広域指名手配されたらしいですけど」

その話を聞き、朧は眉を細め、スバルはその話しに食いつく。

「それなら聞いた事あるよ。確か、歴代最強にして最悪の裏切り者って言われてるんですよね」

歴代最強のエース・オブ・エースと現代のエース・オブ・エース、戦うとどちらが強いのかとFW組の頭の中では考えられ、視線が自然となのはの方へと向けられる。

その本人はと言うと、

「にはやはは、そういう人もいたみたいだね」

と、苦笑いをするだけで特に気にすることでもないらしい。

「あの、その人は今ではどうなったんですか？」

最近入局したてで、管理局の内情に疎いキャラが聞く。隣でエリオも気になるのか首を振っている。

「今でも捕まってはいないみたいだけど、噂じゃもう死んだんじゃないかって」

「そうなんですか……」

あまり、幼い子供に聞かせる話じゃないと考え、なのはは手を叩き、注目させる。

「はい、今はそこまで。話は脱線しちゃったけど他に質問とかはない？」

そう四人に聞くが、それを朧が遮った。

「悪い、なのは。ちょい疲れたから先に戻るわ。質問はまた今度つてことで」

「え、ちょっと朧くん？」

なのはが止める間もなく朧は体の向きを変え、片手をじゃあなと、ハタハタ振りながら歩いて行った。

~~~~~

〜れいんぼすと〜

レ「二回目も無事開かれました『れいんぼすと』！それに対して本編主人公の翔ちゃん、なにか一言！」

翔「もうタイトル名は気にしないことにした」

レ「拗ねないの〜、今回は本編からゲストも来てるから」

翔「ゲスト？誰だ？今回の話からだとな新人達かなのはか？」

レ「では、登場してもらいましょう、どうぞ！〜！」

？「どもども〜」

レ「ではお名前を」

は「機動六課、総隊長やらせてもらってる八神はやて二等陸佐です」

翔「はやてかよ」

は「かよとはなんや、かよとは〜！」

翔「だって、はやてが呼ばれる理由なんてないじゃんか」

は「それはきつとアレや、数多の読者様が『はやてを出せ』とかで騒いでるんやろ。全く、人気者は忙しいわ」

レ「あゝ違うから。はやてちゃんどうこう言う前に感想自体が殆ど来てないから」

翔「それダウト！前回も言っただろ、悲しくなる発言禁止だつて！」

は「じゃあ、私が呼ばれた理由はなんなんや？」

レ「作者曰く『なんかここんとこのはやて、本編で空気だから』だつて」

は「穿て、ブラッティータガー！！」

翔「だあああああ！？なんで俺なんだよ！？」

は「翔くん主人公やろ！出番多いんやろ！」

翔「そりゃ、八つ当た　「ディアボリックエミッション！」  
があああああー！！」

レ「はやてちゃん」

は「レイン」

パンツ



翔「ハイタッチすんなよ!？」

レ「とまあ、前座は置いていて」

翔「前座で既にポロポロなんだけど!?!」

レ「それじゃあ今回言いたかった事を、PV:18000、ユニーク:2300突破!!」

翔「いや〜嬉しいかぎりだな」

は「これからもよろしくお願いや」

レ「増えるの?」

翔・は「悲しくなる発言禁止!?!」

レ「けど、いろんな人が楽しみながら見てくれたら嬉しいと思います。リリカルなのはStrikersよ は「れいんぼすと」の提供でお送りしてるから本編共々よろしくね」

は「最後にはさらりと自分のコーナー紹介してフォローした!?!レイン流石や!」

レ「では、今回の話について、はやてちゃんに一言言ってもらいましょ〜」

は「翔くん無双」

レ「だね〜」

翔「あれぐらい、フェイトとかなのはでも出来るだろ？」

は「そりゃな」

レ「そこ比べたらダメでしょ」

翔「んじゃ、どこと比べんだよ？」

レ「ん〜、新人とか？」

翔「年期が違うわ年期が！」

は「今回は結構翔くんが説明しとったな」

翔「作者のオリジナル要素爆発だからな」

レ「なんだかわかりやすそうな伏線もあったし」

翔「ああ、の事な」

は「検閲入るからって堂々とネタバレやりすぎちゃっつか」

レ「バレたら作者フルボッコだから」

翔「だな」

は「私も出番が少なかったら参加することにするわ」

レ「皆仲良く一発ずつね」

翔「勢いに乗った俺が言うのもなんだが此処の連中過激過ぎないか？」

は「気にした負けや」

レ「それじゃあ今回は「こ」まで！はやてちゃんどうもありがとうね！」

は「また呼んでや〜」

翔「どんな内容でも感想募集してるんでよろしく!!」

レ・翔・は「次回もお楽しみに!!」

## 第十話 とある訓練での一日（後書き）

どうでしたか？

PVとユニークについては皆様のおかげです！

ありがとうございます！

これからもよろしく願います！！

ぼすとはやてを出した理由としては中に書いた事とあと、私は生まれも育ちも大阪で関西弁が書きやすかったって事もあります（笑）

本編では結構独自設定が出てきましたが、

本編について何かあればどんどん言ってください！！

勿論、れいんぽすとの事もお待ちしてます！！

では、次話でお待ちしてます！！！！

第十一話 ファーストアラート（前書き）

どうも、夕です。

いつもよりは間がかなり開いてしまいましたが、一週間以上は絶対に開けないつもりです！

それでは早速どうぞ……！

## 第十一話 ファーストアラート

翔が六課に来て二週間が経った。

現在朝の九時過ぎ。

空は晴天で雲一つない。

翔は他の隊長陣より幾ばくか暇を持って余す事が多い。その理由として回ってくる書類仕事の大半をレインが担っているからである。

そういう事情の為、暇な時間には今でもちよくちよく新人の訓練にも顔を見せている。

基礎の反復が多く、目に見える程の大きな成長はまだ見込めないが、確実に成長はしている。

身体の動かし方、初動の速さ、コンビネーション。どれをとっても以前より良くなっている。

影ながら見守っている

翔はひそかにそう考えている。

その場にいるかどうかは別として……

『あ、翔ちゃんまたそこ間違ってる』

「だあーっ！もう嫌だ！レイン代わりにやってくれよ！」

現在昗はレイン指導の下デスクワーク中……

今日は昗の分があった、ということだ。

『ダメ。昗ちゃんがダメダメな事はフェイトちゃんだつてわかってくれてるんだから相当減らしてくれてるんだよ。それに加えて大半は私が代わりにやったんだから残りは自分でやりなさい！少しは出来るようにならないと将来困る事になるのは昗ちゃん自身だよ』

昗のデスクワークでの仕事量は同じ副隊長であるシグナムやヴィータに比べると少し多い。その殆どは昗のモノではなく、レインの情報処理能力を頼りにしているからである。

昗に回ってくるものなど必ず昗自身がしなくてはならない物や、レインが昗に覚えてもらおうという配慮により回す簡単な物ぐらいで殆どレイン任せだ。

比率としては

レイン：昗    ||   8：2

なのに、レインの方が早く終えてしまうというこの現実には救い様もない事実である。

俺ってレインがいなくなったらどうなるんだろ……

たびたびそう考えてしまい、そのたびに書類の山が目に見えなくなる。

「これが終わったらプリン買ってやるよ」

「え？どうしたの急に。それは嬉しいけど、食べ物で買収なんかされないからね」

「いや、これは自分で頑張るよ。只そう思ったただけだ」

「???」

レインの大切さを再確認し、朧は再び大量のデータと向き合い始めた。

「つ、疲れた……」

『お疲れ様』

朝早くから始めていた為お昼休みの時間までまだ随分余裕がある。まあ、二割にどれだけ掛かってるんだ、と言われればそれまでののだが……

食堂で時間潰すか、と考えていると通信が入った。

『朧さん。今大丈夫ですか？』

『シャーリー。どうした？』

『アートのフルメンテ終わったんで取りに来てもらえますか？』

「やっとか……、今から行くよ。ちょうどこっちも一段落したし」



ため息を尽きながら答える昶。

それもまあ仕方ない。初日にアートを渡して以来ずっと返ってこず、二週間経って漸く昶の下に戻ってくるのだ。

あれから、シャーリーにはいろいろ説明させられたり、ボロボロになった大剣に描かれた魔法陣復元の為に徹夜で質問攻めされたりと結構大変だった事をここに記しておく。

『ええ〜ッ！昶さんがデスクワークを午前中だけで終わらせたんですか！？』

シャーリーのソレは失礼極まりないものだが、昶に関しては例外が適応される。

勿論昶も理解はしてるが、納得はしていない。

『もちろん殆ど私がやったよ』

『あ、そうですね。それなら納得です』

「俺も納得したよ。普段お前がどういう目で俺を見ていたかってことが」

『いや、それは……えーっと……あははははは。それじゃあ待ってますんできてくださいね！』

ジト目でモニター越しに見つめる昶に耐えられなくなり通信を切断するシャーリー。

「通信切りやがった」

『別にいいじゃない。シャーリーが言ったことに一つも間違いなんてなかったし』

「うっ」

言い返せずに籠もる。

「と、とりあえず早くアートを取りに行くぞ」  
『はい』

デバイスを取りにシャリーの所へ行くと、なのはとFW四人、それにリインがいた。

『おはようございます』

「ああ、おはよう」

『なのはちゃんもリインちゃんもおはよう』

「うん。おはよ」

『おはようです』

「なのは達は何をしてるんだ？」

「四人の実戦型のデバイスを受け取りに来たんだよ。朧君は？」

「俺はメンテしてもらったアートを受け取りに来たんだ」

「やっと戻ってくるんだ……」

「ああ」

「だから四人ともちょっと待っててね」

『はい』

シャーリーが台の上にある待機状態のアート等を朧に渡す。

「ご注文通りフレーム強化と細部の微調整、頼まれた機能の抜粋は済みましたよ。あと古いパーツは最新のものに変えておいたんで基本性能もほんの少しは上がっていると思います」

アートはアームデバイスの簡易版ということでミッドの技術で十分過ぎる程であるのだが、

「さすがシャーリー。ありがとう」

「でも、やっぱり魔法陣は復元出来なかったです……」

ううと唸りながら肩を落とす。

「まあいいじゃん、別になくて困る物でもないし」

これ自体本当に仕方のない事なのだ。

陣が描かれていた大剣はパーツ交換処が丸ごと交換しなければならぬくらい大破しており、直すというより換えるといった方が的確なぐらいなのだ。

それに朧もこれは試作型とか言われて無理矢理持たされた物で実戦で使う気などさらさらなかった。

それでも、せめて少しでも分析しようと思いたらしいのだが、

「これ手掛けた人一体何者なんですか？ポロポロになった筈なのに強固過ぎますよ、あのセキュリティ。あんなのより上なんてレインのブラックボックスぐらいですよ!？」

『アレね〜』

「そんなにすごかった？」

レインが持つ許容量キャパシティの半分には謎のデータが占めている。セキュリティもなにもない莫大なデータ。しかし、その中身が何なのか全くわからない。

本来、データというものはどんなに強固なファイアウォールで固められていたとしても、必ず“出入口”というものが存在する。それは先程の魔法陣にも当て嵌まる。当たり前的事だ。出入口がないと作った本人さえ入れないのだから。

しかし、レインのソレにはない。削除しようにもエラーで返され文字通り、お手上げなのだ。

レイン本人はと言うと、『わかんない』と、明らかに知ったような反応を毎度の事しているのだが答える気がないらしい。

シャーリーは今でも時々解析を試みては挫折している。

「まあ魔法陣の方は技術云々の話なんで、まだ希望がありますよ」

めげずに意気込むシャーリーは、あつ、と何かを思い出したように人差し指をたてて朧に言った。

「アートですけど、フルメンテしてわかったんですけど、どの子も小さな部位でのひび割れや損傷寸前の箇所が目立ちましたよ。

あまり無理な戦闘は控えてくださいね」

「わかったよ。気をつける」

「お願いしますよ」

そのあと、アートの改良点を幾つか朧に言い含め、シャーリーは新人達の方へと向き直る。

「さて、お待たせ。次は四人の新しいデバイスの説明だね。」

設計主任は私。協力がなのはさん、フェイトさんにレイジングハー  
トさんとリイン曹長。あと、エリオのデバイスには少しだけど朧さ  
んのデータも取り込んでるよ」

「俺のデータ？」

「うん。私がお願いしたんだ」

「なのはが？」「朧君の基本動作は丸つきり参考にしないけど幾  
つかのステータスはエリオにとってだいぶプラスになるからね」

「そうなのか？」

「はい！とても勉強になります」

朧の近接戦闘で得意とするのは力より速さで押すタイプなので、  
そのための術式も朧はきちんと組み立てているので、恐らくそこが  
組み込まれているのだろうと、朧は推測した。

そうこうしている間にリインとシャーリーが話を進めている。

「で、その子達には何段階かに分けて出力リミッターをかけて  
るからまずはそれで扱いを慣れていって、各自が今の出力を使い切  
れるようになったら私やなのはさん、フェイトさんにリインさんの  
判断で上げていくから」

『一緒にレベルアップしていく感じですね』

「出力リミッターと言えば……」

ふと思いついたようにティアナが呟いた。

「出力リミッターと言えば、なのはさん達にもかかっていますよね？」

そうだよ、となのははティアナの質問に答えていく。

「私達はデバイスだけじゃなくて本人にもかかっているけどね」

「本人にもですか!？」

「能力限定って言うって六課の隊長、副隊長には皆かかっているんだ」

「朧さんにもですか？」

「おい、スバル。俺も一応副隊長だぞ。そんなに見えないか？」

「いや、そういうことじゃ……あはははははは」

軽く、睨まれたスバルは笑ってごまかす。

「朧君だけじゃなくて私やフェイト隊長、シグナム副隊長、ヴィー  
タ副隊長」

『あとはやてちゃんもですよ』

四人は何故そんなリミッターを付けるのかわからないらしく、  
朧が説明する。

「えーっと。部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総計って決まっ  
てるだろ？」

だから一つの部隊で高ランクの魔導師を多く入れたい時はそこに収  
まるように出力リミッターをかけるんだ。そうだったよな？」

『よく出来ました』

こめかみの辺りの血管がブチ切れそうになった朧だがなんとか堪  
える。

『要するにチート部隊を作りたい時の裏技だよ』

「チート部隊って言うなよ……否定はしないけど」

新人達は皆、しないのかよ！と心の中でツツコミを入れた。

「私達の場合だとはやて部隊長が4ランクダウン。隊長達が大体2ランクダウンかな」

「4ランクダウンって……」

「八神部隊長はSSランクだから……」

「Aランクまで落としてるんですか!？」

「ぶっちゃけアイツは殆ど戦わないし。さほど問題ないだろ」

当然、どこの部隊でも部隊長自ら出るなんて場面はよっぽどの事がない限りない。

加えて隊長陣全てがS級魔導師である六課ではさらに低い確率だ。

『そうは言ってもはやてちゃんもいろいろ苦労してるですよ』

「なのはさんは？」

「私は元々S+だから2.5ランクダウンでAA。朧君もAAまで下げてるよね」

「ああ。俺はSランクで2ランクダウンしてるからな」

だから魔力をフルに使っての戦闘ができないんだよな、と嘆く朧。以前のフェイトとの模擬戦を見た新人達からしてみれば、あれ以上あるのかよ！と思わずにはいられなかった。

『隊長さん達は部隊長であるはやてちゃん。はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか部隊の監査役であるクロノ提督の許可がないとリミッター解除は出来ませんし、許可は滅多なことじゃ出せないそうです』

ラインの言う通り。

しかもこの二人の一回ずつしか解除出来ないから、制限は二回ま

で。

これがチート部隊の限界だと翔は考える。

「まあ、隊長達の話は置いて、今は皆のデバイスの事を話そ」

なのはがそう言ってまた四人のデバイスの説明に戻った。

翔もヒマだからかその説明を聞いている。

その時に

警！

部屋のモニターに一級警戒体制のアラートがなり響いた。

「れいんぽすと」

翔「なんだか今回俺の扱い酷くない？」

レ「なんのこと？」

翔「シャーリーとかスバルとか何気に結構言ってるぜ？」

レ「でも、どれも事実だよ？」



翔「そくだよな、俺なんて所詮……」

レ「翔ちゃんがいじけちゃたところで、今回のゲストを呼びましょ、ではどうぞ！」

？「にははは、翔くんも大変だね」

レ「今回のゲストさん、お名前をどうぞ……！」

な「スターズ分隊長、高町なのは一等空尉です。よろしくね」

レ「タイトルに載っちゃう原作主人公！ここからは作者曰く『19で魔法少女？キツくない？彼女のOHANASHIだけは受けたくありません！管理局の白い悪魔こと、高町なのはさん！』との事です」

な「デイバインバスタアア……！」

翔「え？ぎゃあああああ！？」

レ「隅っこでいじけてる翔ちゃんに問答無用で砲撃魔法、さすがなのはちゃん」

翔「お、俺が何をした……」

な「ん〜、八つ当たり」

翔「最低だ！この主人公最低だ！」

な「この作品じゃ翔くんが主役でしょ？」

レ「なのはちゃん、それは半分正解だよ」

な「どっいう事？」

レ「だって『れいんぽすと』の主役は私だもん」

翔「もっどっだっていいよ……」

レ「え〜と、翔ちゃんが本気で落ち込む前に今話について、なのはちゃんどうぞ！」

な「え、私？え〜と、レインがハイスペック？」

翔「否定はしない。レインがいなかったら絶対に俺書類仕事してないと思うし、いっつも教えてくれるし」

レ「ノノほ、褒めたって手は抜かないんだからね！そう思っんならしっかり覚えてよ！」

翔「善処する。覚えられるかは別にして」

な「にやはは……」

レ「と、とりあえず！今回は翔ちゃんの簡単なプロフィール紹介だから！どうぞぞー！」

浅儀朶

19歳

魔力光 蒼色

魔法術式 アウラ式

魔導師ランク S

階級 三等空尉

デバイス

ユニゾンデバイス

レイン

簡易アームドデバイス

アト 6種

NO・1 短剣

NO・2 短剣

NO・3 西洋剣

No. 4 ????

No. 5 ナイフ

No. 6 大剣

## 使用魔法

### ・身体強化魔法

朧が扱う特殊術式の一つ。

外からの強化ではなく、内からの強化方法。

本来魔力を持つもの少なからず体内で流れているが、個人差があるといえど極少量である。それを流す量を意図的に増幅させ、筋肉や骨に魔力コーティング施し、身体強化を謀る魔法。

この術式を一般の魔導師が使用すると内側から魔力が暴走を起こしたり、体内の器官や骨、筋肉などに支障を来たす。

なのでこの術式を扱うには年月をかせかせて慣れるか、特別な術式と併用させる、または先天的に平気な者に限られる。

しかし、個人差はあるが誰しも限界というものがあり、その限界を越えると平気な者として重傷を負う事がある。

### ・ソードスフィア

朧の操る魔力弾。

剣の形を成している事から付けられた名。

朧は最大七つの魔力弾を同時展開でき、魔力の籠める量や編み方によって大きさ、形を変えることが出来る。

・手中転移

アートの付けられた唯一と言ってもいい特殊魔法。

魔力に届く範囲なら朧の元へと戻る魔法。

現在公表されている制約は魔力の大量消費のみ。

神煉流

魔法と言うより魔力を用いた技と言った方がしっくりくるモノ。

神煉流とは剣技を軸とした流派。

壱式 蒼閃

剣に魔力を纏わせ、斬撃として放つ。

魔力の多少により斬撃の大きさを調整出来る。

応用が効く扱いやすい。

肆式 旋風

壱式と同じように魔力を纏わせるのだが膨大な魔力を風に見立て纏

わせ、鋭い斬撃ではなく、小さな竜巻となり、敵を飲み込む。

伍式 碎覇

拳に魔力を練り込み、敵へ放つ技。

元々、敵の攻撃を防ぐ、防御用の技だったが、次第に攻撃にも使われるようになった。

技能

魔力放出

本来視覚出来ない魔力が目に見える程の濃度として身体の回りに溢れ出す。

魔力を大量に放出している分、消費は激しいが走攻守など、あらゆるモノが向上する。

フェイトとの模擬戦でも途中から使用している。

翔「今のところはこんなもんか」

な「これで一部なんだもんね」

レ「翔ちゃんは手数で攻めるタイプだからね」

な「本編では名前も出てない魔力放出なんてものもあるし」

翔「アレは強引な力業だからな。最初に切るべき切り札ってところかな」

レ「でも、フェイトちゃんに負けたよね」

翔「あれはフェイトが強すぎたんだよ」

な「翔くんも強かったけどね」

レ「以上、プロフィール紹介は終わり！また新しい事があれば紹介



レ「人の黒歴史に触れるからそうなるんだよ、なのはちゃんだって結構気にして」

な「レイン？」

レ「え、えくと……アハハハ……今回はこれでおしまい！～それじゃあ！」

レ・な「次話でまた会いましょう！～！」

翔「……俺は放置かよ」



## 第十一話 ファーストアラート（後書き）

少しですが初のプロフィールを書いて見ました。

まあ強そうですが、基本フェイト達の少し下？ぐらいに思っ  
て貰えたら丁度いいと思います。

何か質問や感想があれば是非ともください！

お待ちしておりますwww

それでは今回はこの辺で……

次話でお待ちしております!!!

## 第十二話 力と想い（前書き）

どうも、夕です！

今回は書き足し書き足しでたった今出来たばかりです！

“れいんぽすと”に報告もあるので見てください！

ではどしどしー！

## 第十二話 力と想い

昴達はヘリパイロットのヴァイスが操縦するヘリに乗って現場に向かっている。

事件の概要は、教会が捜索中だったレリックが見つかり、そのレリックを乗せたリニアールがガジェットに乗っ取られて暴走しているというもの。

リニアール内のガジェットは最低三十機で他にもいるかもしれないと報告を受けた。

今回が初出勤の新人達はそれぞれ緊張しているが、まあなんとかなりそうなくらいだ。

一人を除いて。

キャロである。

リンからの説明を受けた後からずっと俯いたままである。

隣で心配そうに見ていたエリオが声をかけても大丈夫、と笑って返すが直ぐに俯いてしまう。

それに見兼ねた昴がキャロに声をかけた。

「キャラ」

「は、はい！」

「怖いのか？」

「い、いえ、大丈夫です！」

「俺が言ってるのは任務の事じゃない」

「え……」

「自分の力が怖いのか？って事だ」

一瞬、目を見開いたキャラは何かを言いかけたがすぐに俯き答える。

「はい……」

キャラ・ル・ルシエ

彼女はレアスキル「竜召喚」を持つ召喚魔導師で、竜と共に暮らす少数民族“ル・ルシエ”の出身で本来なら管理局に入ったりなどしない。

しかし、彼女はルシエの集落を追放されてしまった。

別にキャラが何かをしたわけではない。

只単にキャラは竜召喚士として類い稀な素質を持っており、その強大な力を危惧した長老がルシエの村から追い出したのだ。

幼くして独り身となってしまったキャラに集落以外での知り合いなど当然いない。どうしようもない彼女は各地を転々しその時、時

空管理局に保護されたのだ。だが、そこでもレアスキル『竜召喚』を持っていながら力の制御が出来ないキャラは様々な場所へたらい回しにされ、その実態を知ったフェイトが保護者となり、引き取られた。

そんなことがあつてか、キャラは自らの力に恐怖を抱いている。

そんな事情を知っている昗はキャラの肩に手を置き、優しく語りかけた。

「キャラ、自分の力に恐怖を感じる事が悪い事だと俺は思わない、俺だってそう思う。力は手段だ。使い方次第で良くも悪くもなる」

優しく、しっかりとキャラの瞳を見つめながら。

「でもな、“怖い”と思う以上に“信じて”みるよ」

「え……」

「キャラが信じなくても俺やフェイト、エリオ達だって皆キャラの力を“信じてる”、“信頼”してる。勿論キャラが扱うからだし、キャラを信頼しているからだ」

でもな、と昗は更に続ける。

「それだけじゃダメだ。キャラ自身が自分の力に向き合つて、信じてやらなきゃ。それに失敗を恐れるな。今は一人じゃない。失敗し

ても俺らが助けてやる。逆に俺らが失敗したらキャロが助けてくれ。キャロの力は皆を守る優しい力なんだから恐れることなんて何もない。信じろんだ。

自分がやれると思う事を精一杯やってみろ。そうすればきっと応えてくれる

。人ってもんは守るモノがあればなんだって出来るんだからな」

ニツと微笑む朔。

「は、はい！」

「よし！」

朔は肩に置いていた手を頭へと持って行き、ワシヤワシヤ撫でる。

「エリオとフリードも頼んだぞ」

「はい！」

「キュル」

「スバル、ティアナも頼りにしてるぞ」

「はい！」

一通り目的を終えた朔は、なのはの横へと戻る。

「朔くん、お疲れ様」

「おいおい、労働はまだ始まってもないだろ」

『良かったよ、朔ちゃん』

「うっさい。だまっつけ」

『ふふ、でもな、“怖い”と思う以上に“信じて”みっだあああああ  
ああ！！黙れ、ばか野郎おおおお！！』 朔ちゃんかっこい

い  
』

こういうことは後から言われると純粹に恥ずかしいものだ。  
ニタニタしながら、からかうレインと悶絶してる昶を見て思わず  
笑みを零すFWメンバー。

先程までの緊張した空気が嘘のようだ。

そうこうしていると、空にまでガジェットが現れ、なのはと昶が  
先行する。

「ヴァイス君。私と昶君、それとこっちに向かってきてるフェイト  
ちゃんを空を抑える」

「ああ。だからハッチを開けてくれ」

「わかりやした。頼みますよ。お二人とも」

ハッチが開き中に風が入ってくる。

「それじゃあちよつと行ってくるけど、皆もがんばってね」

『はい！』

『レイン、お前はレインのサポートを頼む。レインもしっかりな』

『まかせてよ』

『はいです！』

「それじゃあ、昶君先に行くよ」

「ああ」

なのはが先にへりから飛び降り、

「レイジングハート、セットアップ」

『スタンバイ、レディ』

光に包まれ、茶色の制服から白をメインにしたバリアジャケットに身を包まれ姿を現す。

「スターズ01、高町なのは。行きます」

なのはは先にガジェットの方へと飛んでいった。

「俺も行ってくる」

『朧ちゃん気をつけてね』

「ああ」

朧はなのは同様へりを飛び出し、

「アート、セットアップ」

黒のBJに身を染め、

「ライトニング05、浅儀朧、出る」

No.1と2のデバイスの二刀一対である短剣を腰に携え、六課にきて初の実戦へと向かった。

「はああー！」



初は新型の飛行型のガジェットを相手にしている。  
右手に持つ剣でビームを弾き、左手に持つ剣で切り裂く。

『新たに近づく機影五』

「ソードスフィアオープン」

『ソードスフィア』

辺りに五つの剣のスフィアが精製される。

「ショット！」

五機のガジェットに向かって飛んでいくスフィアは3機に当たり、  
2機に避けられる。

初のスフィアは直線にしか飛ばせなく、避けられやすい。  
だがそれならそれなりの戦い方ってものがある。

「神煉流壱式 改 蒼閃双牙」

残った二機に接近し、二刀で蒼閃を振るい二機を真っ二つになる。

「ソードスフィアオープン！」

『フルオープン』

新たにまた接近する六機を視界に入れ、出せるスフィアの最大数の  
七本を展開し回りを囲むように発射。

一カ所に密集させたガジェットに魔力を多く籠めた特大の蒼閃で  
一刀入れ六機を一齐に破壊した。その後も西洋剣に持ち替え、高  
速でガジェットに接近し次々と破壊していく。

辺りに敵がいなくなった事を確認し、一息付く。

「よし。なのは達は」

なのは達の方へ目を向けるとどんどん撃墜していくのはとフェイトの姿があった。効率よくどんどんと撃墜していく。

「やっぱり凄いなあいつらは……」

「いったい俺の何倍のガジェットを破壊してるんだよ、と言いたそうな顔をする朧。」

だがそのおかげで制空権が取れるのも時間の問題だ。

こちらは大丈夫だと確認し、朧は通信を開いた。

「ロングアーチ。新人達は大丈夫なのか？」

『現在ライトニング03、ライトニング04が新型と交戦中苦戦しているみたいです』

「わかった。援護に向かう。なのは、フェイト。こっちは任せたぞ」  
「うん」

「朧も気をつけて」

朧は少し速度を上げ、リニアレールへ向かった。

「エリオくん!？」

エリオと二人で新型のガジェットに果敢に挑むが大きく、硬い上に予想を超える広範囲のAMFにより、劣勢を強いられていた。

「大丈夫!任せて!」

回り込み、反撃の機会を窺うエリオだがガジェットの触手により阻まれ、弾き飛ばされる。

「ぐあああつ?!」

エリオは自らのデバイス、ストラードは握ったままだが意識を失ってしまう。

ガジェットはそのままエリオを外へ投げ捨ててしまう。

「エリオくん!？」

気絶しているエリオは真つ逆さまに落ちようとしている。

このままじゃエリオくんが!？」

脳裏に浮かぶのはエリオの顔と朧の言葉。

《人ってもんは守るモノがあればなんだって出来るんだからな》

私がエリオくんをつつ！

キャラはエリオを追い、飛び降りた。

AMFの発生源であるガジェットから離れる事で万全の状態での魔法が使用可能になる。

気絶したエリオをきっちり抱きしめ、高々度リカバリーを発動。落下速度が緩やかになっていく。キャラは自身の使役竜に話し掛ける。

「フリード、不自由な思いさせてごめん。私、ちゃんと制御するから」

もはやキャラの瞳に力への不安などない。

いくよ

守りたい者の為に力をつかうのだから！

「竜魂召喚！」

力強く叫び、キャラを包むように環状魔法陣が展開される。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ来よ！我が竜フリード・リヒ。竜魂召喚！」

その瞬間、魔法陣を突き破り現れたのは巨大な白き竜。

フリードの真の姿である。

意識を取り戻したエリオと目が合い、キャロは抱きしめていた事に気づく。

「ごめんなさい！」

「うっん、こっちこそゴメン！」

端から見れば初々しいことこの上ないが、今はそれどころじゃない。

すぐに気を取り直した二人は新型のガジェットへと向き直す。

「フリード、ブラストレイ！」

フリードが放った炎は先程までのフリードのソレとは比較にならず、その威力はAランク魔導師の炎熱砲撃に匹敵する。

しかし、装甲の厚い新型にはあまりダメージがない。

二人は素早く攻撃方法をエリオの斬戟に変更する。

「我が乞うは、清銀の剣。若き槍騎士の刃に祝福の光を。猛きこの身に、力を与える祈りの光を」

フリードの背でキャロは両手を広げ、二つの球体が現れる。

「いくよ、エリオくん！」「了解、キャロ！」

エリオはフリードの背を蹴り、ガジェットへと向かう。

「ツインブースト！スラッシュ&ストライク！」

フィールド貫通と打撃力の強化がエリオのストラーダに付与される。

「はあああああ！」

斬・斬

電撃が付与された魔力刃で延びてくる数多の触手を切り刻み、リニアに足をつける。

「ストラーダ！」

ガシャンガシャン、と音を立てカートリッジをロードする。

「一撃必中！」

撃！

ストラーダを構え、AMFをも貫き、ガジェットへ突貫。

「はあああああ！」

轟！

突き刺したストラーダでガジェットをそのまま真っ二つにする。

爆！

大きな音を立てガジェットが爆破する。

「杞憂：だったかな」

援護に向かうとそこには巨大な白き竜の姿があり、ちょうど終わった様子だった。

「フリードか。キャロも制御出来たみたいだな」

『車両内、及び上空のガジェット反応全て消滅。スターズ03、スターズ04。レリックを無事回収しました』

任務は無事成功し剣を待機状態へ戻す。

『翔ちゃん』

「レインか」

リニアレールの中のレインから通信が入る。

『あとの事後処理は私達でやるから。朧ちゃんはスターズの人達とへりに戻ってていいよ』  
「え？いいの」

先程事後処理はライトニング、スターズはレリックを持ち帰るよ  
うにと通信が入っていた。

朧としてはめんどろだが仕事だからと割り切ってやるつもりだったのだが、やらなくていいと言うのなら嬉しい限りだ。

『朧ちゃん居ても何も出来ないから邪魔なだけだもん』

悲しかった。

「……………泣いてもいいかな？」  
『事実でしょ？』

だから余計に悲しいんだよ！と反論するが、

『それじゃあ私は忙しいから切るね』  
「……………ぐすん」

朧はがつくりと肩を落としてへりに向かった。



暗がりの部屋に大きいモニターが展開されている。  
映し出されているのは起動六課部隊員の先の戦闘風景。

それを見つめる者が二人いる。

一人は白衣を着ている紫色の髪をした嫌みな笑みを浮かべている  
男。

もう一人は黒いローブを羽織った人物。  
顔はフードで隠れているが胸の膨らみからして女なのだろう。

「ふふふ。素晴らしい」

男はそのモニターを見て興奮している。

「あんだレリックを探してたのに持って行かれてもいいの？」

女が男に言う。

「別に構わないよ。レリックは惜しいが彼女達のデータが録れただけでも十分さ」

画面に表れるのは青髪の少女とピンクの少女、栗色の髪の白い女の姿。

「やはりこの案件は素晴らしい。私の研究にとって興味深い素材が揃っている上に」

次に表れたのは赤髪の少年と金髪で黒い女。

「プロジェクトFの生き残りね」

女が口を開く。

「おや、知っていたのかい？ああ。生きて動いているプロジェクトFの残滓を手に入れるチャンスがあるんだからね。ふふふふ」

男は笑みを絶やさない。

「個人的な意見なら全力で止めに入りたいけどこっちの都合もあるからそれは止めてあげる。

けどね　もし一人でも殺したらただじゃおかない」

女は殺気を男に飛ばす。

「安心したまえ。誰ひとり殺すつもりはないさ。それも私の計画の一部に入っているよ」

常人なら気絶してもおかしくない殺気を当てられてなお、男は涼しい顔をしている。

「それとあいつの相手は私の役目だから」

「ああ、彼だね」

男が操作してモニターに表れたのは黒髪の男。

「浅儀一族唯一の生き残り。彼は”浅儀の禁忌”を使えるのだから？」

「……」

「無言は肯定と受け取るよ。ふふふふふ、本当に興味深い。まさ

か噂に聞いていたあの禁忌が見れるとは」

女は未だ殺気を放ちつつ、男に語りかける。

「アンタの言う祭には参加してあげる。アイツに手を出すのも構わない。だけど、最後は私がやるから」

「わかっているよ」

「私はゼストやルーテシアは気に入っているけどアンタは嫌い。それを忘れないで」

「嫌われるのは慣れていくよ。ハハハハハハ」

横で笑っている男を見てため息を尽き、女はもう一度モニターに目を向ける。

「成長したみたいだけど、その程度なの、翔？」

歯車はゆっくりと動いていく。

~~~~~  
〜れいんぽすと〜

レ」はあい、れいんぽすとこの時間だよ」

翔「時間と言うよりはページだけだな」

レ「細かい事は気にしないの!」

翔「今日もゲストがいるのか?」

レ「うん、じゃあ早速呼ばっか。では、ゲストさんどうぞ!」

???「ど、どうも」

レ「では自己紹介をお願いします!」

フ「ライトニング分隊長、フェイト・T・ハラオウンです。よろしくお願いします!」

翔「そんなに緊張するなよ」

フ「頑張ってみるよ」

レ「じゃあまずほ、」

レ・翔・フ『PV30000アクセス、ユニーク30000人突破!  
ありがとうございます!』

レ「皆さんのおかげです!これからもよろしくね」

翔「さて、それで今回フェイトが呼ばれたわけだが」

レ「この作品のメインヒロインだもんね」

フ「私なんかでいいのかな？」

翔「そんなこと気にすんなって」

レ「翔ちゃんもヒロインはフェイトちゃんしかいない！とか言ってたもんね」

翔「そんなこと言ってねえ！／＼」

フ「ありがとうね、翔／＼」

翔「あ、ああ／＼」

レ「こんなところで二人だけの固有結界なんて展開しないでよ」

翔「誰のせいだ誰の！／＼」

レ「じゃあ今話についてフェイトちゃん一言どげぞ」

翔「この展開にももう慣れたよ……」

フ「キャラの成長が嬉しかったかな」

レ「さすが親代わりのフェイトちゃん！」

翔「キャラもエリオもどんどん成長して行くからな」

レ「何年したらエリオに身長抜かれるかな？」

翔「抜かれてたまるか！俺はこれから伸びるんだ！」

フ「だといいんけどね」

レ「なにげにキツイ事言うよね……」

翔「そういえば何か言っとく事があつたんじゃないか？」

レ「強引に変えたね」

フ「うん」

翔「うっ、いいんだよ！それより早くしろよ！」

レ「仕方ないな。えっと、発表は二つ！一つ目はこの“れいんぼすと”にゲスト出演してもいいよって言う人を募集したいと思います！作者曰く『頑張つてらしさを出して行きたいと思うのでよろしくお願いします！』との事です。

あと、翔ちゃんを出演させたいなという方も募集してます。良ければ出してあげてください。私でもOKだよ」

翔「俺今そのこと聞いたんだけど？」

レ「まあいいじゃない」

フ「頑張つてね」

翔「お、おう」

レ「そしてもう一つは、クリスマス特別編！『外伝、不安だらけの

クリスマス』を投稿予定なんです！」

翔「いいじゃんか」

レ「次期は本編の五年前なんだったって」

フ「確かにそんなことあったな」

翔「そうだな。でもそれがどうかしたのか？」

レ「それが、今8割方出来てるらしいんだけど、全部でいつもの2、3倍の分量になっちゃってて、分けて投稿するか一つで纏めて投稿するか悩んでるんだって」

翔「そりゃあ、読者さん達が見やすい方がいいし、悩むよな」

フ「だからその意見が欲しいの？」

レ「そういって」

フ「じゃあ、今回言いたいことは、一つが他の作者さんとクロスしませんか？と、二つ目がクリスマス企画を二つに分けた方がいいですか？って事だね」

レ「うん、纏めてくれてありがとう」

フ「どう致しまして」

翔「今回はこんなところ」

レ「そうだね。今回はありがとうね、フェイトちゃん」

フ「私も楽しかったよ」

レ「質問や感想も待ってます!」

翔「では、」

レ・翔・フ『次話でお待ちしてます!!!』



## 第十二話 力と想い（後書き）

どうでしたか？

“れいんぼすと”での報告、皆さん考えてくれると嬉しいです！

今回はキャラロがメインです！

上手く書けてたらいいんですが……

感想もお待ちしてます！！

では、次話でお待ちしてます！！！！

第十三話 黒衣の麗人（前書き）

どうも、夕です！

ホントは昨日辺りに更新するつもりだったんですが、忙しくて……

今回の“れいんぼすと”にはゲストもいます！

では、ごっごー……！

## 第十三話 黒衣の麗人

「どうしたの？こんな朝早くに」

機動六課訓練所。

朝日も昇ってまだすぐの時間。

「済まないけど四人の訓練が始まる時間まででいいから訓練に付き合ってくれないか？」

訓練シミュレーターによって周りは木々に囲まれている。

その場には二人。

一人は白い制服に身を包んだサイドアップに髪を纏めた栗色の髪  
の女性。

もう一人は黒いローブに身を包んだ黒髪のロングヘア。

「別にいいよ。私は何をすればいいのかな？」

制服の女は心良く承諾する。

「ありがとう。それじゃあまずは」

side ????

「お姉ちゃん……お姉ちゃんどこ？」

周りは赤色しか見えない。

人はいない。

お姉ちゃんもいない。

「熱いよ。痛いよ。痛いのだよ……」

さっきこけてしまつて足を擦りむいた。

「嫌だよ……もう帰りたいよ」

これは夢だ。

私の生き方が一変した昔の出来事。

なのはさんに助けてもらった空港火災。

あの時、力から逃げていた私に出来る事は泣き叫んで、助けを待ただけだった。でもこの時周りは火の海で誰もいない。

こんなのもう嫌だ。

ずっとそう思ってた。

覚えてる。

そんな私に石像が倒れてきたんだ。  
この時子供ながらに思った。

” あ、私死んじやうの ”

そんな私をなのはさんが、

斬！

石像をナニカが斬った。

あれ？

なのはさんじゃない？

長い黒髪の青白い剣を持った、女の人  
が倒れる石像の前に浮かんでいる。

誰だろこの人。

私の記憶にはこんな人……

「助けにきたよ。もう大丈夫だからね」

あ、  
思い出した。

そうだ。

最初、この人に助けられてこう聞いたんだ。

「お姉ちゃん、だあれ？」

それでこの人はため息を尽きながらこう言ったんだ。

「はあ。いい？人は見かけで判断しちゃダメだよ」

何が言いたいのか全くわからなかった。

でも、完全に思い出した。

そのあとになのはさんが来て、

「いた？」

「ああ。この子を頼む。」

この先にもまだいるみたいだから

「わかった。気をつけてね。君もよくがんばったね。もう大丈夫だよ。あとは出口まで一直線だから」

あの人は私をなのはさんに預けて奥に行こうとしたから私は言った。

「綺麗なお姉ちゃんありがとう」

そう言うとなのはさんはクスクス笑って、あの人は一瞬こっちに振り向いて、苦笑いしながら、

「ははは、もうそれでいいよ」

一言言って行っちゃったんだ。

そつだ。

これが私の始まりだったんだ。

「」

私は今ティア、エリオ、キャロ、あとフリードとで訓練所に向かっている。

いつもはなのはさんがシミュレーターの前に待っているけど今日はもう先に行っているらしい。

「スバル、アンタどうしたのよ？」

「ん？何が？」

別におかしいとこなんてないと思っけど。

「スバルさん。なんだか今日凄くご機嫌ですよね」

「僕もそう思います」

「なんか朝起きてからずっとなのよ」

「ん〜、ちよつと昔の事思い出してね」

「どんな事なんですか？」

「え、別にたいした事じゃないよ」

「いいじゃない教えなさいよ」

「別にいいけど」 私は今朝見た夢の内容を話した。

空港火災に巻き込まれた事。

そこでなのはさんだけでなくもう一人助けてくれた人がいた事。  
思い出した限りの事を話した。

「空港火災の事は聞いてましたけど、そんな事があつたんですね」

少し前にこの事故の事はエリオやキャロにも話している。

「ふーん。で、アンタはなんでその人の事を忘れてたのよ」

「えっと、そのあとに見たなのはさんの壁抜きのインパクトが強すぎた……」

「そんなに凄かったんですか？」

「そうだよ、キャロ。あんなの喰らったらひとたまりもないと思う

……」

非殺傷設定でも臨死体験ぐらいするんじゃないかなあ……

「でもその女性の名前はわかってるんですか？」

「それがわからないんだよ。お父さんにもその時に聞いてみたんだけど知らないって言ってたし、救助隊にもそんな人はいないって言われて」

「そうなんですか……それじゃあ訓練のあとになのはさんに聞いてみたらどうですか？」

「それだよ！ ナイスエリオ」



「いや、それほどのことじゃ……」

「でもそれなら今日の訓練も頑張らないといけませんね」

「うん！そうだね」

よし！今日も頑張ろう！

「あれなのはさんじゃない？」

ティアが指差した方向になのはさんがいた。

「ホントだ。もうB」着てる」

いつも始めは教導隊の制服なのに。

「もう一人誰かいますよ？」

「訓練中みたいね」

「なんの訓練なんだ」

私はこの時言葉を失った。その人の動きに見とれてしまつて。

訓練の内容は多分なのはさんのアクセルシューターをひたすら避けるものみただけ。

「……ル」

その数は軽く三十はあり、あんなの避けれるの？って思うぐらいなのにあの人は全部紙一重で避けてる。

「…バル……い……るの……」

来る場所が最初からわかってるみたいだし、なんだか踊ってるみ

たいで綺麗。

「聞ってるの！バカスバル！」

「え？」

「『え？』じゃないわよ！何回呼ばせんよ」

「ゴメンテア。それで？」

「あの訓練してる人つて髪が黒色で長くない？」

「え？」

もう一度見てみる。

魔力弾を避けるたびに長い綺麗な黒髪がなびいてる。

「ああああ〜！あの綺麗なお姉ちゃんだあ〜！！！」

S i d e n a n o h a

「ああああ〜！あの綺麗なお姉ちゃんだあ〜！！！」

突然の声に私達は動きを止めた。

声の方を見てみるとスバルがこちらの方に指を指してる。

「なんだか不愉快な言葉が聞こえたような」

「あれ？そんなに時間経ってたんだ」

時間を見るともう四人の訓練の時間だ。

「皆集合」

四人が集まる。

「ゴメンね。時間すっかり忘れてたよ。それじゃあ早速だけど始めようか」

「はい、それはいいんですけど……」

「ティアナ、どうかしたの？」

「隣の方はどなたなんですか？」

「え？」

隣を見してみる。

ああ。そういうことが。

「やっぱりわかんないか」

ふふ。

これはこれで面白いね。

「私達のご存知なんですか？」

「はあ、一人くらいわかってくれてもいいんじゃないか？」

「昶君も拗ねないの」

「え？」

「昶……さん？」

口をあんぐりと開けたまま昶くんに指差すティアナ。

「そつだよ」

「これだつて付けてるだろ」

翔くんは、もはやトレードマークと言える自分の首の黒いチヨーカーを指でつついく。

『えええええ〜！?』

S i d e s y o

『えええええ〜！?』

この反応だよ……

どいつもこいつも、もう馴れたけど少しは傷付くんだぞ。

「ホントに……翔さんなんですか？あ、でも背格好は翔さんと同じくらいだし」

「それは安易に背が低いと言いたいんだな、ティアナ？」

「いや、それは……ははは……」

頭かきながら、笑つてごまかすティアナ。

所詮俺はお前より少し背が高いぐらいで、なのは達にも負けてるよー！

「……レイン、ユニゾンとBJ解除」  
《OK》

レインの声が聞こえ、俺は髪が元の長さに戻り、服もティアナ達と同じ訓練着となり、レインも現れ、その姿はいつも通りの浴衣姿だ。

「あれはユニゾンした姿なんですか？」

「ああ。あんまり好きには馴れないけど」

『えゝ、だって朧ちゃんすっごく可愛いよ』

「可愛いとか言うな！」

「ユニゾンってあんな感じに姿が変わるものなんですか？」

エリオが聞き、代わりになのはが答えてくれる。

「んゝ、ユニゾンで髪や瞳、BJの色は変わるけど普通はあんなにも髪が伸びたりはしないよ。八神部隊長とリインのユニゾンもそんな感じだし」

「それじゃあなんで？」

『多分私が特別だからだと思っよ』

「特別？」

『うん。詳しい事は秘密』

「はあ」

「といひじつは……」

「ん？」

今まで黙っていたスバルが口を開く。

「ということは、四年前に助けくれた綺麗なお姉ちゃんは昶さんなんですか!？」

「その綺麗なお姉ちゃんって止めてくれないか？」

「どうなんですか!？」

いや、俺の発言は無視ですか……

「四年前って……」

「あれだよ。はやてちゃんのとこに遊びに来て起こったあの空港火災」

四年前…… 空港火災……

「あれかあ!？」

「やっぱりあれは昶さんだったんですね!？」

「そうだね。最初にスバルを発見したのは確かに昶君だよ」

「そうだよ! やっぱり俺スバルに会った事あったじゃんか!？」

「どういう事?」

「いや、初めて六課に来た時にどっかで会ったことがある気がしたんだよ。ほらなレイン。ナンパなんかじゃなかっただろ! (詳しくは一話参照)」

『あんなのまだ気にしてたの? 昶ちゃんしつこい』

たまにこイツを真剣にジャンクの海に沈めたくなる……

だがそこはなんとか怒りを抑えて平常心を保つ。

「周りの人達に聞いても誰も昶さんの事誰も知らないって言ってて」

「朧くんって元の姿とユニゾン姿で使い分けて正体隠してるでしょ？」

「潜入とか隠密の任務で役に立つからな。だからあの姿を容認してるんだけど」

それに、と付け加える。

「見せたらスバルみたいな反応をするやつが多いからだよ」

綺麗はあんまりなかったけどな、身長のせいか愛玩動物のような目で見られる事が多いし。

「だって可愛いよ。皆もそう思うよね？」

「正直女として負けたと思いました……」

「おい、ティアナそれは言い過ぎ」そうでしょそうでしょ。朔ちゃんは元々顔立ちが童顔だから髪を伸ばしたり、くくったりしたらとっても可愛いんだから それにドレスとかワンピースとかも似合うから何を着せようかいつも迷っちゃうんだよね。あ、勿論浴衣も似合うよ 『……』

くるり、と回り自身の着ている水玉模様の浴衣を見せながら饒舌に話すレイン。

俺はどうリアクションしたらいいんだよ……

そんな俺をキャラ口は慰めようと両手をグッと胸にまで持っていき、

「大丈夫ですよ。自信を持ってください！」

キャラ口……それは違うだろ……

早く話題を変えなくては、

「朧さんのさっきの動きもまるで踊ってるみたいでした！」

チャンスはすぐに到来した。

「いや、あれはマグレだってマグレ」

「でもホントに凄かったですよ。くる場所が初めからわかってたみたいな」

こいつらはなんでいつもこうピンポイントでついてくるんだ？

《朧ちゃん》

《わかってるよね？》

レインとなのはが念話で忠告してくる。

《わかってるよ。秘密事項っていうんだろ。リンディさんが言うから従ってるけど俺は上の命令なんて聞きたくないんだけどな》

基本的に管理局の上層部の事は信用してないし、

《我慢してね》

《朧ちゃんの尻拭いはフェイトちゃんやリンディさんがさせられるんだからね》

《ああ。肝に銘じとくよ》

フェイト達には迷惑かけたくないしな。



「朧さん？」

「ああ、悪い。どうした？」

「あの動きってホントにマグレなんですか？」

「とてもそうには見えなかったんですけど」

「しつこいぞティアナ。」

俺はあんな動きを狙って出来るほど器用じゃない。

この話は終わりだ。もう訓練の時間なんだから？」

強引に話をそらす、ティアナは必死に食い下がろうとする。

「でも！」「はい、それじゃあそろそろ始めるよ」「……はい」

俺の意図を察してか、なのはが助け舟を出してくれた。

「俺達もシャワー浴びに行くか」

『そつだね』

それに乗り、俺とレインはその場を離れることにした。

「あれで納得してくれると思うか？」『どうかな。最後はムリに押し通した感が否めなかったし』

だよな、とレインに同意する。

『それに他の三人は大丈夫でもティアナは絶対何かあるって思ってるよ?』

「あいつが一番食い下がってきてたしな」

俺はこの時、何故だかあそこまで執着するティアナが不安で仕方なかった。

~~~~~

～れいんぽすと～

レ「今回も無事に始まりました、れいんぽすと!」

翔「ここに需要があるのかどうか怪しいけどな」

レ「ふっふっ、ならそれを見せてあげようじゃない」

翔「それって需要をか?」

レ「そうだよ、では今回のゲストさんどうぞ!」

？「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン！」

翔「テンション高いなオイ！」

？「俺はいつもこんな感じよ！」

レ「今回のゲストは【世界をめぐる、銀白の翼人】から、銀の翼を持つ主人公！時風舜くんです」

舜「世界最強の時風舜だぜい！」

翔「募集してすぐに出演してくれた訳か」

レ「うん、ありがとうね舜くん」

舜「いいってことよ！」

レ「それじゃあ毎回恒例の今話について舜くんに一言もらおうよ」

舜「ん〜、翔もいろいろと抱えてんだな〜」

翔「まあね、舜程じゃないと思うけど」

レ「なんせ世界を又に掛けてるもんね」

翔「だな、かなりの数の世界を回ってるんだろ？」

舜「まあね〜、でも仲間が沢山出来ていいこともあるもんだぜ」

翔「でも自分と闘い続けるのは辛くないのか？」

舜「あれは俺であって俺でないからな。キツイっちゃキツイがまあ俺自身がやると決めたからな」

翔「覚悟はあるってことか」

舜「あたぼーよ！」

レ「今はStrikersの世界なんだよね？」

舜「そうよ、この間もエリオに諭されちゃったんだよ」

翔「自分を正してくれるやつがいるって言うのは良いことだけどな」

舜「ホントにお兄さん少し不甲斐なかったです」

レ「ま、大事なものはこれからだからね。過ぎた事は糧にして進むしかないよ」

舜「おうよ！」

翔「まあお互い頑張るしかないかな」

舜「そういうだね」

レ「それじゃあここで少し報告を 以前言ったクリスマス特別編は24日と25日の2日に分けて投稿することにしました」

翔・舜「お」

レ「作者曰く『1話でやるには今までと違って長すぎるかな』と思つて。24日はバイトが入ってますが頑張ります!』との事です。寂しい人生送ってるんだね、作者」

翔「しかも、バイトとか別に関係ないだろ」

舜「まあいいでないの」

レ「ちゃんと更新出来るんならね」

翔「そうだな」

レ「さて、今回はこんな感じかな」

舜「お、もうそんな時間か」

翔「今日はありがとう、楽しかったよ」

舜「俺もだぜい」

レ「今回の舜くんみたいに出演してくれる方はまだまだ募集中なのでよろしくね 私達に来て、て言うのも全然OKだよ」

翔「勿論、普通の感想や誤字訂正、れいんぼすとでこんな事してほしいなどの提案でもなんでも受け付けてるからくれたら嬉しい」

レ「じゃあもう一度、舜くん今日はありがとう」

舜「はいはい」

レ「今回のゲストは【世界をめぐる、銀白の翼人】から時風舜くん  
でした」

舜「またね」

レ「では、舜くんも一緒に」

レ・翔・舜『次話でお待ちします!』

### 第十三話 黒衣の麗人（後書き）

どうでしたか？

武闘鬼人さん、時風舜くんの召喚ありがとうございました！

ちゃんと舜に成り切れてたか不安で仕方ないですが……

武闘鬼人さん、時風ファンの方、不快感を与えるようならすみませ  
ん。

今回は24日からの連続投稿クリスマス特別編です！！

見てください！

お願いします！！

感想等もお待ちしてます！

ではこのへんで

次話でお待ちしております！！！！

外伝 不安だらけのクリスマス (前) (前書き)

どうも、夕です！

今回から2日連続投稿のクリスマス特別編『不安だらけのクリスマス』です！

これは翔やなのは達が中学二年生の頃の話です。

書き方もすこし変えて見ました。

楽しんでくれると幸いです。

では、どうぞー！ー！



外伝 不安だらけのクリスマス（前）

朝、季節は冬。

昨晚から降り始めた雪のお陰で辺りは一面銀世界。

今は午前7時30分、正直言って寒い。

こつこつ日は一日中布団に被って過ごすに限る。  
熊の冬眠しかり、猫がコタツで丸くなるしかり。

自分がそう出来るかは別として。

「こつこつさび」

肌を温めるべく肩を抱くように腕を持って行き、さする。

これだけの動きでも寒空の中じゃそれなりの労力なのに温めるのは一時だけなのだから割に合わない。

「かといって、動かすのを止めるわけでもないけど」

「何を言ってるの？」

「単なる独り言」

俺、浅儀昶は隣の女性に軽く答えた。

「ふうん」

隣の女性、フェイト・T・ハラオウンは私立聖祥大附属中学に通う中学二年。

栗色を主体とした制服の上からはコートを羽織って、首にはマフラーと完全装備だが、下は短いスカートだけと、なんともまあ寒そうだ。

かくいう俺も下は長ズボンだが、まるっきり制服オンリーの格好である。

制服の上から絶えず身体をさすり続ける俺を見て、

「だから早く買わなくちゃ、って言ったのに」

「わかってるよ」

俺だってバカじゃない。

通学用のコートはきちんと持っていた。

三日前までは。

「もう、なんで見ず知らずの人にコートあげちゃうかな？」

「説明しただろ、物凄く寒そうにしてる妊婦さんがいたから仕方なかったって」

「だからってもう少しやりようがあったと思うけど」

確かに今冷静に考えたらいろいろとあったと思う。

少ない小遣いの中から出した諭吉が消えたと考えると少し残念な気がしてならないが過ぎたことを言っても仕方ない。

その結果、妊婦が無事赤ん坊を産めただろうと考えたら安いもん

だ、と無理矢理納得させる。

だが、土日を挟んだ月曜からこの寒さは反則だ。

土日をジャケットで過ごしていた為かやはり上に羽織る物がないのはキツイ。

なにげに最近、衣服類の消耗が目立つ。この間だって任務中に首を狙ってきたナイフがチョーカーを切断して使い物にならなくなった。こちらも出来れば早く買い替えたい。

しかし、金の入る予定はあるが既に計画を立てているので、そんなイレギュラーに使う分などない。

「忌ま忌ましい寒さだ」

「今更言っても仕方ないでしょ」

全く持ってその通りなので、早く学校へ行きエアコン付きの教室で昼寝と洒落込みたい。

そう思い至った俺は自然に足に力が入り、歩を速めたが、

「フェイトちゃん、翔くん」

後ろから声が聞こえ、俺達は振り向く。

「おはよ、なのは、はやて」

「おはよ」

「おはようさんや、フェイトちゃん、翔くん」

後ろならやってきたのは予想通り高町なのはと八神はやて。

大概、俺とフェイトの方が後ろから追い付く形が多いのだが今日は俺達の方が早かったようだ。

今日は日直だと、フェイトにたたき起こされたせいだろう。

「なんや、翔くん寒そうな格好してるやんか。寒ないんか？」

ここにいる全員、俺の『妊婦さんにあげちゃったよ事件』を知っているくせに、そんなことを聞いてくる。

表情はそれぞれフェイトは呆れ顔、なのはは苦笑い、はやてはニヤケ顔。

この狸が。

「そう思っんなら、そのコートを俺にくれ」

悲しいことに身長が少し……ほんの少し残念な俺ははやてのコートだって普通に入る。

最近、ではフェイトやなのはに身長を並ばれ、このままじゃ時間の問題だと感じてしまっのが悩みだ。

「にやはは、翔くんもっと考えて行動しなきゃね」

わかってるよ、と返事をしさと学校へと足を向ける。

「む、」

その態度が気に食わなかったのだろうか、

「だいたい翔はね、……」

フェイトの説教が始まったが、この程度なら縮こまらなくていいと感じた俺ははいはい、とだけ返事をし歩を進める。

相手の威圧の具合がわかる程怒られていると考えれば少し反省しなければとも思うが、とりあえず現状ではその考えは持ち越した。

今の俺にはやるべき事がある。

そのためにも早く暖かい教室で体力回復に勤しまなければ。

「翔！ちゃんと聞いているの！？」

今日も忙しい一日になりそうだ。

朝のHRが始まるまでの少しの時間、その過ごし方は人それぞれだ。

惰眠を貪る者、やり忘れた宿題に勤しむ者、昨夜のTVについて友と盛り上がる者、そしてここにも五人の女子が話に花を咲かせている。

先の三人に加え、二人のお嬢様、紫の髪をした月村すずかと中学

に上がり金髪ロングをショートボブに変えたアリサ・バニングスの  
聖祥五人娘である。

「でね、お母さんの知り合いらしいんだけどその新人さんがすつこ  
く可愛いの」「へへ、会ってみたいな」

「そうね、アルバイトって事は高校生でしょ？どこの人なの？」

「お母さんは近くの女子高だと言ってたよ」

「それって、あの超お嬢様学校じゃないの!？」

「あの、やたらに偏差値の高いあそこかいな!？」

「凄いいよね、私も少し話したんだけどね、ちょっと恥ずかしがり屋  
なんだけど全然年上って感じがしなくて同じ歳の友達って感じなの

「ホントに会ってみたいわね」

「それじゃあ今日うちに来る？ここのところ毎日入ってるから多分  
いるよ?」

「そうやな、久しぶりに翠屋でお茶も悪ないな、フェイトちゃんは  
どうや?」

先程からの会話で終始無言だったフェイトにはやてが話を振る。

「……」

「フェイトちゃん?」

「え、あ、うん……」

今までの話が完全に上の空だったようだ。

「どづしたの、フェイトちゃん?」

「何か悩み事でもあるの？」

なのはとすずかは不安げに聞く。

「うっん、そっぴいのじゃないんだけど……」

言い淀むフェイトにアリサはイライラし両の頬つねる。

「あゝ！もうイライラするわね！さっさと言いなさいよ！」

「ほへはあへへはひほ〜（それじゃあしゃべれないよ〜）」

このやりとりは結局、HRが始まるまで行われた。

「朔の様子がおかしい？」「うん……」

その日の放課後、五人はなのはの実家、翠屋へと集まり、フェイトの話聞いていた。

「最近学校が終わるとすぐにどこかに行っちゃうし、家に帰ってくるのも遅くて……」

朔はリンディの保護観察を受けており、ハラオウン家に住んでい

なので昀とフェイトも同じ屋根の下で生活しているのだ。  
ちなみに今日も学校が終了すると昀は忽然と姿を消した。

「それで彼女としては気になるって訳ね」

「か、彼女！？そそそんなじゃないよ！？／＼／＼」

カアツ、と自ら注文したストロベリーケーキのように顔を真っ赤にさせるフェイト。

「ああ、ごめんごめん」

「もう……」

恥ずかしさを紛らわす為に紅茶を飲むフェイト。

「もう夫婦だっけ」

ブーーーーッ！

吹いた。

このことを予測していたのか前方のすずかはきちんとお盆で防いでいる。

さすが長年アリサと親友をやっているだけあって、いじめっ子アリサを理解している。

「もうそのへんにしとこうよアリサちゃん」

見兼ねたなのはが助け舟に入る。

「そうね、フェイトのリアクションが面白過ぎてつい調子に乗っち



やったわ。ごめんねフェイト」

あゝ面白かった、と満足げなアリサに対し、

「も、もう／＼／」

更に耳まで赤くなったフェイト。

でも、ここからは真面目な話なのかアリサが言った。

「そう言われると、最近アイツ付き合い悪いわね」

「アリサちゃんに限っては仕方ないような気がするけど」

（（（確かに……）））

すずかの言葉にアリサ以外全員が納得してしまう。

アリサ達の買い物に付き合わせられた昶は荷物持ちがデフォル  
トされている。

それだけなら昶とて男として我慢できる。

しかし、そこからオプシヨン機能がついて来るのだ。

口論でアリサに勝てない昶は詰られ、辱められ、けちよんけちよ  
んとされるのだ。

他の四人もそれを面白がっている節があり、約一名はアリサ陣営  
に加わる事も少くない。

狸とか狸とか。

「でも、最近付き合いが悪いのは確かやね」

紅茶の入ったカップを口に持って行きながら言っはやて。

「リンデイさんは何か知ってるの？」

「母さんは知らないって」

「そうなんだ……」

うーん、と悩む五人娘。

「それじゃあ、明日翔くんが何してるのか探ってみる？」

言ったのは洋梨のタルトを口にしたなのは。

「学校終わりについてこと？」

「そうそう、付けてみるの」

「でも翔にもプライベートが……」

尾行なんて、とあまり乗り気じゃないフェイト。

善くも悪くも真っ直ぐなフェイトはこういう行為が好きになれるのだ。

だがここで二人の悪魔が甘美な言葉を囁く。

アリサとはやてである。

「でもいいの、フェイト？もしかしたら本当に彼女が出来たのかも知れないわよ？」

「か、彼女！？」

「しかも、その相手は物凄い悪女で翔くんは只の遊びで飽きたらポ

イされるかもしらんで?」

「ポ、ポイ!？」

右手にアリサ、左手にはやて、ともはや逃げ場はない。

「そうね、、 朧って騙されやすいからお金も取られてるかも知れな  
いわね」

「だからコートも、 買わへんのやのうて買われへんのかもしれんな  
!」

あることないこと強引に繋げて行く悪魔達だが、 フェイトの思考  
回路では何故か繋がって行く。

「あ、 助けられるんはフェイトちゃんだけやろつな」

「わ、 私だけ？」

「そのためにも明日尾行しないとイケないのに、 あ、 フェイトは朧  
を見捨てるのか」

「み、 見捨てないよツ!! 私が朧を守るもん！」

バンツ、 と朧を叩き立ち上がるフェイト。

左右では、 ニヤリ、 と口を吊り上げる悪魔達。

フェイトの後ろでは勿論ハイタッチも忘れない。

こうして、 明日『朧尾行大作戦(仮)』が決まった。

「じゃははは……」

軽い気持ちで提案したなのは何故か罪悪感でいっぱいになった。

すずかはと言うと終始笑みを浮かべ紅茶を味わっている。

「それじゃあ、明日の作戦を立てるわよ！」

「オーツッ！」

騙した二人と騙された一人。意気込み、やることは同じだが向いてるベクトルが全く違う。

「それじゃあ、とりあえず」

作戦会議を開始しようとしたが、

「す、すみません！遅刻しました〜！」

パンツ、と入口から勢いよく翠屋に入って来たのは茶髪の女性。

「あらあら、今日は遅かったわね明日奈ちゃん」

「すみません、桃子さん、ちよつと支度に手間取ってしまって」

「大丈夫よ、今はそんなに忙しくないから」

優しく諭すのはなのはの母、高町桃子。

とても子持ちの母には見えない若さ。

でも、と一言付け加える。

「女の子が走ってくるのは頂けないわよ」

笑顔の善なのだが、明日奈と呼ばれた女性からは怯えたような声が聞こえる。

「は、はい……気を付けます……」

そして、店の奥に入って行き、少しして店の制服に着替え戻ってきた。

「明日奈さ〜ん」

端の方の席に座っていたなのは手を振って女性を呼ぶ。

呼ばれる声の方へと向かった明日奈はなのは達を見て一瞬固まっていた。

「どうしたんですか？」

不思議に思ったなのはが聞いた。

「え、いや、なのはちゃんのお友達って皆綺麗な人なんだな〜と思っ  
つて」

ハハハ、と笑う明日奈。

「綺麗やなんて、お世辞の上手い人やわ〜」

満更ではないようだ。

「えっと紹介するね。少し前から、うちで働き始めた雨宮明日奈さ

ん

「あ、雨宮明日奈です。よ、よろしくお願いします」

少しオドオドしている明日奈という女性。

栗色の髪を腰辺りまで伸ばしている。

身長はなのはと同じ程度。

高校生の筈なのだが中学生に気圧されている。

とりあえず、全員簡単な自己紹介を済まし、どうぞ「ゆっくり、  
と一言残し明日奈は仕事へ戻って行った。

「なのはが可愛いって言った理由がわかったわ」

「うん、なんだか同年代のお友達って感じだね」

今も接客に勤しむ明日奈を見ながら話す五人。

「ほんま、相当な童顔やな。年上とは思われへんわ」

それぞれ思い思いのことを口にする。

「ねえ、なのは」

「なに、フエイトちゃん？」

「ここでバイトしてることとは明日奈さんって近所に住んでるの  
？」

「そうじゃないかな？詳しくは知らないけど」

「そっか」

「そんなことよりそろそろ明日の事について会議始めるわよ！」

五人は再び『勅尾行大作戦（仮）』について話しはじめた。

次の日、冬休み前で短縮授業が始まっており、学校は四限で終わり。

そして、現在は終わりのHR。

「え〜と……今日の、連絡は、これで、終わり……です」

何度も言葉を詰まらせる担任教師。

それも仕方がない、とこの教室にいる数名を除き思っている事だろう。

そのこと自体彼女、フェイト・T・ハラオウンは気付いている。けどそんなことに今構っている余裕はない。

それだけこの教室内はピリピリしている。

この平和な現代の日本で東南アジアの地雷地帯のような緊張感が流れている。

正直、このような空気は四限が始まる少し前から流れている。

四限目の数学教諭など何度も教室への入退室を繰り返していた。

一方クラスメート達は「休み時間にまた何か騒いでたな」と感じている者が多く、度々こういう事が起こるこのクラスでは今や慣れというものが発生し、一つの共通見解がある。

触らぬ神に祟りなし、ということだ。

そして、現在それらの空気を発しているのは六人。

なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、そして昶である。

それぞれが今か今かと先生の一言を待っている。

「えと……みんなは……何か……言っとく……事は……ない……かな？」

いくら担任といえど授業では他クラスを行き来する者では慣れなどないはずなのに、必死に頑張っている。

クラスメート達もその担任教諭の勇姿に心では、

「頑張れ、先生！」

「すげえよ、アンタはすげえよ！」

「もう少しだから頑張って！」

とテレパシーを送っている。

しかしここで一つ疑問が出てくる。



何故こうなったのか?、と。

それはやはり三限終わりの休み時間まで遡る。

「朧! 今日ちよつと付き合いなさい!」

先程まで、授業を睡眠の時間と勘違いしてるんじゃないか、と思うほど熟睡していた朧にアリサは言った。

「ふああ、何かあるのか?」

欠伸しながら聞き返す。

「クリスマスの事でちよつとな」

はやてが言う。

「あれだろ? 今年も集まってパーティーやるんだろ。今年はさすがの家だっけ?」

毎年、クリスマスの日には皆で集まって騒ぐと言つことになっている。

生憎、なのはの家族はケーキ販売で忙しく、なのはだけの参加だ  
が。

「そう、その買い出しに付き合っしてほしいの」  
「いいかな？」

なのはとフェイトが昶にお願いする。

昶はいつものように二つ返事で了解

「ごめん。今日無理」

しなかった。

「何か用事でもあるの？」

いつものように笑顔を絶やさないはずかが聞いた。

「ああ。ちよつと野暮用がね」

頭をかきながら、少しバツが悪そうに言う。

「それって、最近いつも出かけてるのと同じ理由？」

「そうなんだよ。悪いな」

フェイトの質問にも軽く返答する昶。

「それって何してるんや？」

はやてが聞く。

「ん？だから野暮用だよ、野暮用」

「だから、その中身を聞いてるんでしょ！」

「そ、それは……」

アリサにまくし立てられ言いそうになる昶だが、

「だぁぁー！野暮用って言ったら野暮用だ！お前らには関係ないだ  
ろー！」

『なっ！？』

信じられない事を聞いた、というような顔をする五人。

「それはないんちゃうか、昶くん？」

「それは……、」

気持ち的には謝りたい一心なのだが、今更引き下がれない。

「とにかく！今日は無理なんだ！」

「説明になってないで!？」

「うっさい小狸！」

「こっ、こだぬ……昶くん、あんたは言っちゃならん事を言ったん  
やで……」

ブロックワード（禁句）に触れた昶にもはや意志決定などない。

「もうええわ！昶くんの予定なんか関係ないわ！無理矢理にでも連  
れてくで！」

朧の拉致が決定した。

「おい！俺は行けないって行って」

「お黙り、チビツ子！！」

「チビって言うなあー！！」

朧もキレた。

後は売り言葉に買い言葉。フエイト達が止める間もなく。四限目が始まってしまった。

そんなこんなで学校の終了と同時にリアル鬼ごっこが開始される事となったのだ。

表立って殺意剥き出しなのは、はやとアリサだけだが、他の三人も朧の発言には少なからずイラツと来ている。

もはや、尾行という本来の目的とは掛け離れてしまっているような気がしないでもないような気が、とフエイトは考えるが今は一旦その考えを頭の奥に押し込める。

「それじゃあ……終わります……しょうか」

「きりーっ」

日直の号令に全員が立つ。

この時既に昶は荷物を手に持ち始めている。

「礼

」さ  
』

走！

脱！

さようならなど待つに値しない、と六人が駆ける。

席の関係から前と後ろに一つずつある出入口にははやてとすすずかの方が早く着く。

「逃がさんで！」

「ごめんね、昶くん」

扉の前で両手を広げ通さない意志表示をする二人。

「覚悟しなさい！」

「逃がさないよ」

「にやはは、ごめんね」

残りの三人は昶の方へと向かう。

出入口二つを固められ、逃げ場はない。

カゴの中の小鳥だ。

だが、

出口が二つだけだと誰が決めた。

『えっ！？』

昶の行動に驚いたのは五人だけではない。  
クラスメート、先生、全員が驚いた。

窓に足を掛けたのだ。

「  
ッ！」

昶の意図に真っ先に気付いたフェイトは舌打ちし、昶の元へ駆け  
たが、

「お前らには捕まんねえよ」

そう一言言い残し、飛び降りた。

『キヤー！？』

『おい、昶の奴やり過ぎだろ！？』

様々な声が飛び交う。

先までいた教室は三階に位置している。

普通の一般人なら十中八九無事では済まない。

だが昶は普通でもなければ一般人でもない。

クラスメート達が昴の安否を確認するために窓の方へ駆け寄る。

しかしその先に見えたのは無事に着地し門を抜け出る昴の姿だった。

昴は魔導師。

特に、身体強化魔法などいつも使っているのでこのくらいわけない。

魔法に関わる三人もまさかこんな所で使わないだろうと油断していた。

「やられた」

そう一言言い残し、フェイト達は昴を追い掛けに行った。

学校を出て十数分。

それぞれ別れて昴を捜すことにした。

その中でフェイトは昴の行きそうな場所を捜し回っていた。

「どこに行ったんだろ……」

片っ端から捜し回っているのだが見つからない。  
携帯に連絡が来ないということは他もまだ見つからないのだ  
ろう。

もう一度見て回ろうと来た道に振り返ると、

「あ！」

少し遠いが海鳴駅の前に朧が立っている。

フェイトは少しだけ近付き、電柱の陰で様子を窺う。

「……誰かと待ち合わせ？」

朧はしきりに時間を気にしている。

誰なんだろう？

今のフェイトにはその事しか頭には浮かび上がらなかった。

そして数分後。

待ち人は来た。

「おんな……の？」

遠巻きで顔はよく見えないが綺麗な長い黒髪で胸も……それなり  
にある。

「なっ！？」



そして女は朧に近づくや、いきなり抱き着いた。

朧は引き離そうとしているが女は全く離れようとしな

少しして観念したのか腕に女を装着したまま朧はどこかに行ってしまった。

もう二人は見えない。

走れば朧にすぐ追い付くことは出来た。

だがしなかった。

否、

出来なかった。

一歩も動く事が出来ず、地面にへたり込んでしまっていた。

これが十二月二十一日の出来事である。

外伝 不安だらけのクリスマス (前) (後書き)

今日はここまでで、続きは明日です！

今回はまだ途中ということ、『れいんぽすと』もお休みです。  
明日はちゃんとあります。

感想等もお待ちしています！

では、明日お待ちしております！！！！

外伝 不安だらけのクリスマス（後）（前書き）

メリークリスマス！

どうも、夕です。

皆様どういったクリスマスを過ごすんでしょうか？

リアルの私は恐らくただ今バイト中です（泣）

予約投稿なのでこの時間に投稿出来ました。

それに25日の朝にはお金がなくて半年くらい切れてなかった散髪に行き、そのあとは友人の引っ越し手伝いとクリスマスなんて全く関係ありません！

長々と語ってしまいましたが、今回でクリスマス編終了です！

翔とフェイトはどうなってしまうのか！？

では、どうぞ！……！

外伝 不安だらけのクリスマス（後）

十二月二十二日、朝。

一つの机に集まる五人。

ちなみに今朝の段階で昨日の朔の態度に対するOHANASHIは済んでいる。

今は自身の机で気絶している。

「それで昨日は結局どうやったんや？」

「そうだよ。もういいよ、の一言だけで何もなし」

「うん、ホントにもういいんだ……皆ありがとう」

そう言い笑みを浮かべるフェイトだがそれは明らかに作りもので、端から見るととても大丈夫そうには見えない。

「何があったって言うのよ？」

「口にした方が楽になる時もあるよ？」

優しく気遣う四人にフェイトは昨日見た事を話した。

駅の前で朔を見つけたこと。

そこで女性と待ち合わせしていたこと。

その女性と朔がとても親しそうだったことを話した。

「嘘から出た実とはまさにこのことやな……」

皆がア然としている中はやてがぼつんと言った。

「あんなんでも結構モテるしね……」

日頃、近くにいる五人には耐性が出来ているので平気だが、基本的に翔は純情だが天然の女たらしなのだ。

それなりに……いや、かなりモテる。

「で、でもその人が彼女だって決まったわけじゃ……」

「抱き着いてたんだよ？」

「そ、それは……」

なんとか否定の道を示そうとするが次々と問題点が上がってくる。

「翔くんにその人の事は聞いたの？」

「そんなこと聞けないよ……晩御飯の時もまともに目を合わせられなかったし……」

昨晚、翔に話し掛けられても素っ気ない返事しか出来なかった。

「だからもういいよ。昨日翔が言った通り、私には関係のない事だから……」

その言葉になのは達はそれ以上何も言えなくなっていました。

その日の夜、ハラオウン家の食卓を四人と一匹が囲んでいた。

ハラオウン家の法であるリンディ。

自称ハラオウン家の使い魔アルフ。

浴衣好きのユニゾンデバイスであるレイン。

ちなみに今は十歳程度の子供の大きさである。

保護観察を受ける、居候の朧。

そしてリンディの義娘である、フェイト。

ちなみにクロノは現在長期任務に入っており、早くてもあと二日は帰って来ない。

夕食はいつもレインやアルフを中心にワイワイとしている

「……………」

している……

「……………」

している？

「……………」



いつもより二割増しくらいの朧の叫びが食卓に響いた。

「フエイト」

「義母さん」

朧やレイン達はもう夢の中にいる深夜。

フエイトも寝ようとしていたのだがリンディに呼ばれリビングにいた。

「飲みなさい。温まるわよ」

出されたマグカップにはココアが入っている。

一方リンディの湯呑みには緑茶が入れており、ちゃぽん、ちやぽん、と角砂糖が入る音が聞こえる。

出会ってからそれなりの時が経つのだがリンディのこの行為には未だ慣れない。

ずずず、と甘々な緑茶を啜るとリンディは優しく問い掛けた。



「何を悩んでいるの、フェイト？」

「うっん、別になんでもないよ」

飽くまで私は只の同居人だけなんだから私がどうこう言っている事じゃない、そう言い聞かせる。

そんなフェイトを見てリンディはフェイトの横へと座り直す。

「フェイト？私は頼りにならないかしら？」

「そんなことないよ！すっごく頼りになるし……」

「なら私に話してくれないかしら？私も貴女の悩みと一緒に抱えたいの」

「義母さん……」

横から抱きしめてくれたその温もりは確かに母親のものだった。

「 翔くんが何か隠し事をしていて、尾行してみたら女の子と仲良く歩いてたと……そうゆうこと？」

リンディに話したフェイトはこくり、と頷く。

「翔くんにそんな相手がいたなんてね」

リンディも素直に驚いている。

「それって何時くらいの事なの？」

「学校が終わってすぐだから一時前くらい……」

「その時間だったら……」

「何か知ってるの？」

リンディの口からポツリと出た一言に反応してしまつ。

「ううん、私が言つてあげられる事は一つだけね」

「なんなの？」

「翔くんを信じてあげなさい」

「え？」

「あの子は貴女を悲しませるような事はしないわ。だから少しぐらい待つてあげても罰は当たらないわ」

そうね、と顎に人差し指を当て考える。

「クリスマスくらいまで待つてみたら？ どうせ貴女の事だから翔くんへのプレゼントも買つてるんでしょ？」

「うん……」

二週間前くらいから悩んで決めたモノをちゃんと机の引き出しに入れて閉まっている。

でも彼女が入るなら女の子から貰つプレゼントなんて迷惑なんじゃない……

そう考えるとどうしても躊躇ってしまう。

「大丈夫よ」

リンディはわかりきったような顔で諭す。

「さて、そろそろ寝ましようか。お休み、フェイト」  
「お休み、義母さん」

話しが終わり、フェイトは自分の部屋へ戻りベッドに入る。

全てが拭えた訳ではないが、少しだけ気持ちが楽になったような感じがしたのだった。

十二月二十三日、イブと終業式を明日に控えたこの日の放課後、フェイトは一人で河川敷にいた。

なのは達は気を利かせ、いろいろ誘ったのだが「ちょっと一人で考えたいことがあるから」と一人で来たのだ。

十二月の河川敷は正直かなり寒いのだが、コートやマフラーを付けているのでまだ大丈夫だ。

それに少し寒い方が頭を冷やせる。

そう思いやって来たのだ。

翔くんを信じてあげなさい。

昨夜の事が脳裏に浮かぶ。

「信じたいけど……」

次に浮かんだのは仲睦まじい二人の後ろ姿。

「どうしたらいいんだろ……」

思わずため息をついてしまう。

「ハラオウンさん？」

不意に後ろから呼ばれる声がした。

「明日奈……さん？」

そこには栗色の髪をした新人ウエイトレスが不思議そうに立っていた。

「ううゝ寒い……」

はあくゝ、と自分の隣で息を手に吹き掛ける自分より年上らしい女性を見て、フエイトは思わずかわいいと思ってしまう。

明日奈の着ている服は黒のジーパンに黒のジャケットでと少しでも大人びて見せようと、背伸びしている感じがしてそれがまた凄く可愛いのだ。

「いいんですか？こんなところで道草食って？」

「大丈夫だよ」

と、河川敷で一緒に座っている明日奈は言う。

一人で黄昏れているつもりだったフエイトは、何をしてるの、と聞かれ、少し風に当たろうと思って、と答えると何かを感じ取ったのか明日奈も、それじゃあ私も、と隣を陣取りだしたのだ。

「バイトはないんですか？」

「うん、昨日までだから」

「昨日まで？」

彼女の働いていた店、翠屋はケーキが美味しい事で有名でクリスマスシーズンのこの時期はとても忙しく、猫の手も借りたい筈なのだ。

「桃子さんの約束なの。二十二日までって」

「そうなんですか」

とりあえず納得したが、そこで話しが途切れてしまう。

何か言わないと、とフェイトは口を開こうとしたが、明日奈の方が早かった。

「何か悩み事でもあるの？」

かなり直球の質問だった。

フェイトは一瞬躊躇ったが、ここは高校生の意見も聞いておこう  
と思い、話すことにした。

流石に男の子の事で悩んでいるとは恥ずかしくて言えないので、  
親しい友人が自分の知らない間に手の届かない所へ行ってしまうそ  
うで悩んでいると話した。

「義母さんは信じて、待ってあげなさいって言うんだけど……」

そこで今まで黙ってフェイトの話しを聞いていた明日奈が口を開  
いた。

「フェイトちゃんはどうしたいの？」

「え？」

ゆっくりと諭すように言う。

ちなみに、ハラウンさんと呼んでいたのだが、フェイトでいい  
です、と本人が言うので呼び方は変わっている。

「リ、……フェイトちゃんのお母さんが言ってるように信じてあげるのも良いと思うけど、私はフェイトちゃん自身がその子に一体、どうしてほしいのかによると思う」

「私自身が？」

「言葉にしないと……言わないと伝わらない事ってあると思うから。どこかに言ってからじゃ遅いから……」

フェイトにはその彼女の言葉には、何か言い表せない雰囲気があり、その声色には哀愁が帯びているように思えた。

そして、もうひとつ感じた事があった。

似ている、と

言葉にしないと……言わないと伝わらない事ってあると思うから

フェイトを暗闇から救ってくれた女の子の言葉と。

何度も問い掛けたくれた親友の言葉と。

「ごめんね、何か変な事言っちゃって」

ははは、と笑みを浮かべる明日奈。

「いえ、とても参考になりました」

ありがとうございます、とお礼を言うフェイトに明日奈は何故か顔を赤くして手を横にブンブン降る。

「そ、そんな私は別に／＼／」

どうやら恥ずかしかったようだ。

「それじゃあもう行くね」

少しして、気持ちを落ち着かせ、明日奈が立ち上がった。

「話を聞いてくれてありがとうございます。お陰で気持ちが纏まりそうです」

よかった、と一言いい、立ち去ろうとするが、もう一度だけフェイトに声を掛けた。

「私はその友達がどんな子かは知らないけど、その子はフェイトちゃんも友達になれて幸せ者だね。フェイトちゃんも自分が後悔しないように頑張ってね」

そう言って、明日奈はその場を去った。

「後悔しないように……」

自然にそう呟いていた。



十二月二十四日、世間一般ではクリスマスイブ、それに加え聖祥の学生にとっては終業式でもある。

既に終業式も終わり、必要な手紙、宿題なども貰い受けている。

……勿論通知表も

ある者は上がった成績に顔を綻ばせ、またある者は友と見せあいっこしている。

そしてここにまた、その成績を見て蒼白な顔をするものが一人。

昶である。

毎回、終業式が近くなると通知表の偽物、偽造表（仮）の製作に取り掛かる昶だったのだが、今回はなにかと忙しくすっかり忘れていたのだ。

「ヤバイぞ……いや、今からやれば……」

ぶつぶつとなにか言っているが、もはや悪あがきの何物でもない。

「いや、今から作っても質でリンディさんにバレる」

通知表に使われている紙やインクに先生のハンコ等、必要な物を挙げていけばキリがない。

そして当然、それらを集める時間はない。

「正直に見せるか？」

バレる前提で作るより素直に謝った方がOHANASHIは少ない……はず

以前バレた時は正座で三時間の説教に加え、お仕置きの数々……

「考えないようにしよう……」

頭から苦悩の日々を追い出し、帰路につく事にする。

「帰ろうぜ、フェイト」

「今日は用事ないの？」

昨日の朝などは少しぎくしゃくしま感じだったのだが、夕飯辺りから普段のフェイトに戻り、普通に会話をするようになっていた。

「まあ後で少しあるんだが……」

どこか煮え切らない態度の朔。

「今はとりあえず帰ろうぜ」

そう言われ、久しぶりにフェイトは朔と一緒に我が家へ帰った。

家に着き、自分の部屋へと入るフェイト。

マフラーとコートを脱ぎ、自身の制服に手をかける。

そこで自分の机に目がいき、引き出しを開ける。

そこには綺麗にラッピングされた包みがある。

「後悔しないように……」

その言葉は何故か背中を押してくれているような気がした。

私服に着替え、リビングへと行くと、朔はもう着替え終え、アル

フも帰って来ていた。

「おかえり〜、フェイト〜」

「ただいま、アルフ」

今ではハラオウン家での使い魔となつてはいるが、元はフェイトの使い魔。フェイト好きは変わらないのだ。

「さ、お昼にしましょうか」

リンディのその一言で皆席に着く。

『そういえばクロノくん今日の夕方には戻ってくるんだって』

レインが取り留めもなく口に出した。

「そうなんだ。今回は二ヶ月くらいだったな」

次元航空艦の艦長を勤めているクロノ・ハラオウンは長期での任務もそう少なくなく、長い時は半年程掛かる場合もある。

「今年もなんとかクリスマスには間に合うね」

「そうね、今回は長引きそうだって言ってたけど、どうにかなったみたい」

「明日はエイミィも来るんだろ？」

『そう聞いているよ。全員で何人くらいになるんだろ？』

「用意も大変そうだな」  
「私と義母さんも手伝うんだけどね」  
「私とレインもいくぞ!」  
『朧ちゃんはクロノくんとエイミィを連れて来てね』  
「おう」

明日の予定を確認しつつ、和やかな昼食が過ぎて行く。

そんな中でフェイトが聞いた。

「ねえ朧」  
「ん、なんだ?」  
「このあとって予定ある?」  
「俺もフェイトに話があるんだけど」  
「話し?」

予想外の朧の返答に少し驚いたが、それなら、とフェイトは昼食を終えた後にまたリビングに来るように朧に伝えた。

朧の話しがなんなのか気にならない訳ではないが、やることは変わらない。

そう自分に言い聞かせ、一抹の不安を残しながら、残りの昼食を食べた。

昼食を終え、フェイトと昶は再びテーブルに向かい合うように座っている。

ソファーでくつろぎながらテレビを見ているレインやアルフ、洗い物をしているリンディもどこか緊迫した雰囲気が流れている。

そんな空気で先に口を開いたのはフェイトだった。

「そういえば、こうやって話すのって久しぶりだね」

「そうだな。俺も最近忙しかったし、ここ二、三日はその……なんか変な感じだったしな」

ははは、と微笑を浮かべる昶。

「うん……ごめんね」

元を正せば昶の隠し事から始まったのだが、そんな空気を作ったのは自分自身なのだと言罪する。

そんなフェイトに、別に謝る事じゃないよ、と昶は諭す。

「……」

二人して黙ってしまいが、このままじゃ埒が明かないとフェイトが切り出す。

「迷惑かもしれないけど、後悔したくないから」

と、フェイトはポケットから包装された箱を取り出し、朧の方へ差し出す。

「ん、これって」

「まだイブだけど、クリスマスプレゼント」

クリスマスには朧もすずかの家で過ごすので恐らくこの後に彼女と会うのだろうと推測したフェイトはその彼女と会う前に渡したいと思い、この時を選んだ。

「開けていいか？」

「うん」

綺麗にラッピングされた包みを綺麗に剥がし、箱を開ける。

「これって」

「前に使い物にならなくなって新しいのが欲しいって言ってたから」

箱の中には、黒いチョーカーが入っていた。

それにはこれまで付けてきた物と同様に宝石を埋め込める場所がある。

「ありがとうフェイト。大事にするよ」

満面の笑みでお礼を言う朧。それほどまでに朧にとって嬉しい事だったのだ。

「どうしてもソレを渡したかったんだ、彼女に悪い気もしたけど…」

少し悲しげな顔をするフェイトだが対する昶は不思議そうにしている。

「彼女？なんのことかわかんないけど……」

そう言いながら、昶も自分のポケットから何かを取り出し、フェイトに差し出した。

「え？」

それはフェイトのと同様、綺麗にラッピングされた包み。つまり、

「クリスマス……プレゼント？」

「他になにがあるんだよ」

口調は素っ気ないが、顔が真っ赤なので周りから見ればそれが照れ隠しなのがすぐにわかる。

「開けてもいいの？」

「あ、ああ」

先程とは逆の立場になり、フェイトが包みを剥がしていく。

「これ……」

「前、買い物に付き合った時、ソレが可愛いとか言ってただろ、だから」

昶の選んだ物はハートの形をしたネックレス。

裏には『FATE・T・HARLAWN』と刻まれている。



「高かったでしょ、いいの?」  
「誰のために買ったと思ってるんだよ」

顔を背けるが次は耳まで赤くなっているのでフェイトからはまる見えだ。

そんな様子に嬉しく思うのだが、

「嬉しいけど、彼女に悪いよ……」

こういうプレゼントは彼女に買ってあげて、と朧に突き返した。

「さつきから彼女彼女ってなんの事言ってるんだ?」

「ごまかさないでもいいよ。私見ちゃったから」

「???」

何か話しが噛み合わない。

朧は本当に何のことかわからない、と言うような顔をしている。

「この間、駅で女の子と待ち合わせしてたでしょ?」

「え?」

朧の顔色が少し変わった。

「女の子が抱き着いて朧も満更じゃないみたいだったし」

「いや、あれは……」

急にあたふたし始めた朧を見て、やっぱりそうなんだな、と確信

した。

「あの子、彼女なんでしょ？」

「違う！それはない！」

「じゃあ誰なの？」

「それは……」

言い淀む朔。

「朔くん」

そんな追い詰められた朔に一人が声を掛けた。

「な、なんですかリンディさん？」

この空気の中に介入するのは相当な覚悟が必要な筈なのだが、リンディはすうと入ってきた。

「今日は終業式だったでしょ、通知表を見せてもらえる？」

突然の予告なしの爆撃到来である。

「義母さん、それは後にしてもらえる？」

「そ、そうですね、今はフェイトと話し中で……」

「いいから今すぐ持ってきて？」

「は、はいっ！！」

とてもいい笑顔なリンディには逆らえず、もの凄い速さで通知表を取りに行く。

「義母さん」

「すぐに終わるから任せなさい」

問い詰めるフェイトをリンディは一言で静めた。

「も………持つてきました」

怖ず怖ずと差し出す朔。

リンディはすぐにそれを開き、中身を確認する。

そして一言、

「何か言うことは？」

「ごめんなさい！！次からは頑張りますから！」

朔は素早く土下座に移行した。

「前もそんなこと言ってたの覚えてる？」

「はいっ！弁明の仕様もありません！！」

今の朔にプライドなど微塵もない。

あるのはこの後に行われるであろう地獄絵図の回避のみ。

「まあ、今回は赦してあげてもいいわ」

「本当に？」

「但し、レイン」

『はあ〜い』

いきなり呼ばれたにも関わらず、その表情は待ってましたと言わんばかりである。

「わかってるわよね」

『OKだよ フェイトちゃんもよく見ててね』

「なにをする気 !、おいっ、レインやめっ」

ッ!？」

何か気付いた物はすぐに止めようとするが、リンディのバインドにより身動きを封じられてしまう。

『バレたんだから観念しないとね』

そう言っつて、レインの身体が光り輝く。

『フェイトちゃんが言っつた彼女ってこんな感じじゃなかった？』

光から姿を表したのは黒髪の女性。

先程までのレインは蒼い髪をした子供サイズだったが、フェイトの目の前にいる女性は彼女と同じくらいまで背が高く、胸もあり、その姿はあの日朧と共にいた女性である。

「どづいこと？」

フェイトとしたら何がなんだか全くわからない。

『これ、私の変身魔法なんだ だから朧ちゃんと一緒にいたのも私だよ』

くるりと一回転してみるレイン。

ちなみに今の服装はレインのBJとなっている桜柄の着物になっ

ている。

「え？え？」

フェイトは今一体何が起こっているのか全然頭が回らない。

『理由としてはこれかな』

そう言ってレインは朔に近づいていく。

「お、おい！やめろって！それだけは！！」

『ダメ ユニゾン・イン！』

そうして現れたその姿は見慣れている綺麗な長い黒髪をした朔の姿。

そして、

《いつくよ》

「だからダメだ」

朔が最後まで言い切る前に先程と同様に光出す。

そして現れた姿は

「明日奈……さん？」

「うう……」

バインドを掛けられ、顔を赤く染め、涙目になった雨宮明日奈だ

った。

「ということは明日奈さんは朧でなのはお母さんに頼んでバイトさせてもらってたって事？」

「そう……」

ユニゾンはもう解除し、レインも子供サイズに戻って今は皆落ち着きながら今回の騒動についての確認を行っている。

「朧が明日奈さんっていうのは誰が知っていたの？」

「俺とレイン、桃子さんにリンディさん、あとアルフかな」

つまり、今ここにいるハラウン家はフェイト以外知っていたのだ。

「アルフも知ってたの？」

「ごめん、フェイト。口止めされてて」

「でも最初にフェイトから朧くんに彼女がいたと聞いた時は驚いたわ。まあすぐにレインだってわかったんだけど」

「義母さん、朧の事わからないって」

「秘密にしてって頼まれてたんだもの」

「まず、とあまあまなお茶を喉に流しながら言っリンディ。」

『まあ私ってわからないように変装したんだから成功かって言われ

れば成功だね』

「だからってお前が抱き着いてこなかったら、こんなめんどくさい事にならなかったかもしれないんだぞ」

『でも翔ちゃんだって満更じゃなかったでしょ？私の胸が当たって喜んでたくせに、翔ちゃんのエッチ』

「う、うっさいわ！し、しし仕方ないだろ！／＼／」

『あれ、認めちゃうんだ？翔ちゃんのエロエロ大魔王』

「ちっちがう！」

小さい子供に口喧嘩で負ける中学生っていうのも……、とフェイトは苦笑いするが、まだ疑問は残っている。

「なんで変装してたの？」

別にバイトくらいやっててもおかしくないんじゃないと思うけど、そう考えるフェイト。

『それはあれだよ。一つはプレゼントを買う為にバイトしてる事をフェイトちゃん達にバレたくなかったんだって』

「ならわざわざ翠屋でやらなくても……」

「地球じゃ中学生をバイトに雇ってくれるところなんてないんだよ」

翔の言う通り、地球はミッドとは違い中学まで義務教育となっている。

『だから、桃子さんに事情を話して承諾してもらったの』

「この間一緒にお茶してる時なんて『もう一人娘が出来たみたいだわ』って喜んでいたわよ」

『翔ちゃん可愛いからね』

「やめてくれ……」

昶としては慣れているとは言え、気持ちのいいものじゃない。

『でも昨日のアレはよかったね』

「「え？」」

昶とフェイトはレインに対し、何を言うんだ？、という顔をする。

『私はその友達がどんな子かは知らないけど、その子は　「やめるおおおお！」え〜、後悔しないよう　「だあああああ！  
！」「ふふ　』

地面に膝をつける昶に対して、レインはご馳走様でしたとでも言わんばかりの笑みを浮かべている。

そしてフェイトはというと、

「でも、バレたくなかったんなら昨日はどうして出てきたの？」

『フェイトちゃんが何か悩んでるみたいだったから、昶ちゃんが明日奈の姿なら相談に乗れるんじゃないかって』

なるほど、と思う。

確かにフェイトの周辺事情を知らない筈の明日奈に言いやすかった。

しかし、ここで一つ大事な事に至ってしまふ。

「そっか、アレも昶ってことは……　　ッ！／／／」



つまり昗の事を昗に相談していたということだ、

『いや、あの時は結構シリアスだったのに、私は笑い死にそうだったよ』

ニヤニヤするレインに茹蛸のように赤くなるフェイト。

どうやらレインの一人勝ちのようだ。

なんとか話題を逸らそうと昗が口を開く。

「そうだ、もうバレたから聞くけど、昨日言ってた親しい友達って誰なんだよ？」

「『……え？』」

この発言にはフェイトもレインもポカンてしている。

「俺らの周りで引越するやつなんていたか？」

『昗ちゃんまさか、わかってないの？』

「俺の知ってるやつなのか？」

『まあ……そうだね』

「???.?」

誰だ?と一人で腕を組みながら唸る昗を見て、レインはフェイトの肩をポンと叩き、労りの言葉を掛ける。

『大変だね、フェイトちゃんも……』

「でも今回はこれで助かった……のかな？」

ははは、と笑うフェイト。

「なあ、誰なんだよ？」

「それはもういいの！／＼それより翔の方も私に話があったんでしょ！」

「あ、ああ。フェイトのプレゼントは選んだんだけどなのは達は何にすればいいか思い付かなくてフェイトと一緒に選んでもらおうかなって」

「なら、今から選びに行こ！」

「おい、押すなって！」

「義母さん、出掛けてくるね！」

「はいはい」

「フェイト、お土産よろしく」

『なかよくね』

よかった

玄関の方へ翔の背を押しながらフェイトは思った。

今年のクリスマスも良い思い出になりそうだ。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ・翔『メリークリスマス!』

レ「今年ももうおしまいだね〜」

翔「この小説が始まってからまだ一月と少しだけだな」

レ「これからも未永く続けれるといいね」

翔「ああ。今日はゲストはいるのか?」

レ「ん?いるよ、作者」

タ「オイオイ!ちゃんと紹介しろよ!」

翔「もう出てきてるじゃん」

レ「え〜、めんどくさいな〜、え〜と、さくしゃです。はい、はくしゅ〜わ〜ぱちぱち〜」

タ「真面目にやれよ!たくっ……どうも、皆さんメリークリスマス!作者の夕です!」

翔「今回はこの3人でやるわけだな」

レ「あと一人来てるよ」

翔「誰だ？」

レ「今回のクリスマス編の主役だよ」

翔「てことは」

レ「はい、フェイトちゃんどうぞ」

フ「メリークリスマス。また来ちゃいました」

レ「というわけで今回は4人でやっていこうと思いまゝす！」

翔「まずは作者に何故今回の話を書こうと思ったのかを聞こう」

タ「いくつか理由はあるんだけど、一つ目はまあクリスマスだからクリスマスのお話を書きたいな、と思ったからかな」

レ「有り触れた最もな意見だね」

タ「二つ目はチョコレートについてが書きたかった！」

フ「どうしてなの？」

タ「作中じゃあただのトレードマークとしか書かれてないけど翔にとって大切な物だから」

翔「そうだな。俺だってなんの意味もなく付けたりなんかしないし」

レ「フェイトちゃんにもらって二代目になったけど初めのチョコレートだってちゃんと理由があって付けてたんだもんね」

夕「それもいずれ書く予定だから言わないように」

翔「なんか俺の事ってほとんど検閲に引っ掛からないか？」

夕「そりゃ主人公だからね。いろいろあるんだよ」

翔「まあ確かにそれなりの人生は歩んできたつもりだけど」

レ「それによく言っじゃない」

翔「ん？」

レ「女は秘密を着飾って女を磨くって」

翔「俺は男だよ……」

夕「雨宮明日奈という仮の姿も持ってるけどね」

翔「あれは！／＼／」

夕「翠屋でも気付かれなかったし」

レ「フェイトちゃんはちょっと引っ掛かってたみたいだけどね」

フ「どこかで見たとような気がしたからかな。あの時はすぐに勘違い  
と思ったんだけど」

夕「それどころじゃなかったと？」

フ「うん……／＼／」

レ「はいはい、ご馳走様」

タ「そういえば、なのは達にはどう説明したんだ？」

翔「レインの暴露」

タ「そうか……」

翔「しかもクリスマスのパーティー中にだぞ！」

フ「お兄ちゃんとかユーノも来てたよね」

翔「パーティーの最後の方なんかアリサ達だけじゃなくてエイミィさん達も混ざって着せ替え人形にさせられたし……」

レ「楽しかったよね」

フ「うん」

翔「こっちは楽しくねえよ!!」

タ「でも少しだけ翔の気持ちわかるな」

フ「作者が？」

タ「俺も少し前に母親に女物のかつら被らされたから」

翔「……マジ？」

タ「マジ……」

レ「で、どうだったの？」

タ「『こついう女の子いる』って言われた……しかも父親とかにも……」

フ「……まあそついう事もあるよ」

タ「いや、翔は昔からいろいろあったからいいかも知れないけど、こつちはめちゃくちゃ恥ずかしかったんだぞ……」

翔「俺だつて好きでやつてた訳じゃないわ！」

レ「まあどうでもいいんじゃない？」

タ・翔「よくない！」

レ「それじゃあ今回はこんなところかな」

タ・翔「無視するな！」

レ「フェイトちゃん今日はありがとうね」

フ「私も楽しかったよ」

翔「今更叫んでもレインに良いようにされるだけだ。作者もなにが言った方がいいんじゃないか？」

タ「そうだな……え、読者の皆様、いつも見ていただいている方々、今回初めて見てくださった方々、皆様どうもありがとうございます！これからもより良い物を作るために一層精進しますのでよろしく願います！感想等々も非常に私の力になりますので良ければそちらもよろしく願います！」

レ「それじゃあ今回はこの辺で、みんな良いお年を」

翔「では、」

一同『次話でお待ちしております!!!』



外伝 不安だらけのクリスマス（後）（後書き）

どうでしたか？

少しグダグダになってしまったような気がしないでもないですが書いちゃいました！

『れいんぽすと』でも言った通り、どんな些細な事でも良いので感想等お待ちしております！！

今回はお正月に投稿しようかなと考えています。

では、皆さん良いお年を。

次話でお待ちしております！！！！

第十四話 強引な里帰り（前書き）

どうも、夕です！

皆さん、明けましておめでとございませう……！  
今年もよろしくお願いします！

今回はある意味ギャグパートです。

では、早速ございませう……！

## 第十四話 強引な里帰り

ある日の機動六課。

「いつてらっしやい」

「何を言ってるの？ 朧くんも行くんだよ」

「いや、俺は留守番しとくよ」

「これは任務なんだよ？」

「そんなものはしらん！ 残るったら残る！」

俺が俺であるために！

そう訳もわからない事を喚きながら朧は逃げよつとするが、

「そんな我が儘が許される訳ないやろ！ さっさと行ってきい！ スバル、テイアナ！」

「すみません」

「これも任務の為なので」

「ちよっ！ は、放せ」

はやての命により二人掛かりで朧の両腕をがっちり掴む。

「副隊長命令だ！ 放せ！」

.....

『 朧ちゃんってやつぱり………』  
「 抜けてるよね………」

レインとフェイトが顔を見合わせながらため息をつく。

「 何が抜けてるだ！失礼な事言っな！」

心外だとも言うつかのように叫んでいる。

「 阿呆か！そつちが副隊長ならこつちが部隊長命令じゃあ！はよ行  
つてこんかあっ！！」

スバルとティアナは呆れながらも腕はしっかり放さない。

「 と、いうわけで」

「 行きますよう朧さん」

振りほどこうとするが思いの外二人の力が強く、ずるずると引き  
ずられていく。

その姿を見守るようにはやては朧に向かって手を振る。

「 安心しい。うちも後で行くから。頑張って怒られてきいや」  
「 いいややだああああ」

そのまま朧はへりに乗せられた。

おかしいと思ってたんだ。

良く言えば両手に花、悪く言えば連行中にある現在、俺はどうしてこうなったのかを考えている。

今日はレインもリインも子供サイズになってたし、フェイト達もなんだかいつも以上にニコニコしていた。

その段階で気づけなかった俺の失敗なのか？

否！

そんな些細な事で気付けられるやつの方がおかしい！  
はやてのやつも寸前まで俺にだけ黙っていやがって……

と、いうことで（どういうことかは気にしたら負けな方向）俺は六課前線メンバーに拉致られ派遣任務として海鳴市に連れてこられました。

ちなみにデバイスの二人の服はリインがはやての昔の服らしくてレインは俺が昔買ってやった着物を着ている。

補足だがレインは着物以外の服はあまり着ない。

本人曰く、『着物が気に入ってるから』らしく、別に普通の服も着ないこともないとのこと。

非常に稀な事だが。

『到着です』

「ここがなのはさん達の故郷……」

緑が溢れ、透き通るような湖が広がる光景を見、初めて地球に来たFW達はさほどミッドと変わらない自然にちよっと驚いている。

「ここは具体的にはどこなんですか？湖畔のコテージって感じが」

『ここは現地の住人がお持ちの別荘なんです。ここの使用を快く許諾いただけましたですよ』

現地の協力者。

いくつか思い当たる人物はいるが、このような立派なコテージを持つというならそれは絞られてくる。

「おい、リイン！やっぱり」

声は一台の高そうな車の到着によって遮られた。

アレには海鳴に来たくなかった原因が乗っているはずだ。

くそ！今からじゃ逃げられない。どうすれば……よし、かくなる上は

「レイン！ユニゾンして変身魔法だ！」

これで俺だとわからないはず。

『やだ』

即答ですか。

「なのは、フェイト」

「アリサ（ちゃん）！」

車から降りてきたのは予想通り、なのは達の友人アリサ・バニングス。どうやら俺にはまだ気が付いてないらしい。

なのは達と喋っている間に逃げようと試みるが、ガチッと肩をつかまれ、

「アンタなに逃げようとしてんのよ」

はい、捕まりました。

「アリサ・バニングスです。よろしく」

『よろしく願います！』

アリサとFW達が挨拶を交わす中、俺はというと

頭にコブを作り正座中です、はい。

F W達の視線が痛い。

「さあてと、久しぶりね翔」

「オヒサシブリデスアリササン」

「アンタ二年行方眩ましてたそうね」

「イイエ、ソナツモリハ」

「レインどうなの？」

『眩ますつもりはなかったけど連絡を取る気はなかったよ』

裏切り者！

長年のパートナーは簡単に俺を突き放してくれる。

「それって眩ます事と変わらないってわかってるわよね？」

「ハイ、スミマセンデシタ」

「まあフェイト達にもいろいろ言われてるだろうから私はこのぐらいにしといてあげるわ」

「オヤサシイデスネアリササン」

「アンタいい加減怒るわよ」

「すみませんでした！」

プライドなどカケラも感じられない程に素早く頭を下げる。

「まあいいわ。でも」



アリサが俺に近づき、耳元で囁く。

「（これ以上、愛しのフェイトを悲しませるんじゃないわよ）」  
「　　ッ！！？／／／なっ、なに言ってるんだよ！そそなんじやねーよ！！」

自分で顔が赤くなっていくのがわかる。

熱い、物凄く顔が熱い。

してやったり、とでも言うような顔でこちらを見るアリサ。  
昔からこうやって俺をからかってくる。

正直、俺は苦手だ。

「あれれ、顔が真っ赤よ？どうしたの？」

「お前は黙れ！！」

いつか同じような目にあわしてやる、俺はそう心に決めた。

今回の任務は海鳴市の市街地全域でのロストログニア搜索。

それぞれスターズ、ライトニング、ロングアーチに分かれて捜査開始。

なので今は俺、レイン、フェイト、エリオ、キャロとで捜査中。  
ちなみにシグナムはロングアーチの直接指示で動いている。

「それにしても変わんないなこは」  
『そうだね』

二年間離れていた俺にとって故郷とも言えるような此処は以前までと同じように自然が残る綺麗な町だ。

「そういえばさっきアリサさんが言ってた行方を眩ましてたって」  
ふっと思ったのかキャロが尋ねてくる。

「任務だよ。結構特殊でそれが二年かかって連絡取ってなかったっただけだから」

しばらく会ってなかっただろ？と言っ。

嘘は言っていない。

「そうなんですか」  
「だからフェイト達とも会ったのは二年ぶりだったしな」  
「そうだね。ちっとも連絡くれなかったし」

横目でこっちを見るな。

「それは前に謝っただろ」  
「そうだったかな」  
「しつこいぞ」  
「朧が悪いんですよ」

うっ、と睨みつけてくるフェイトにこちらも対抗していたらエリ

オとキャラ口があわあわしだして、

「二人とも喧嘩はやめてください！」

「仲良くしましょよ」

必死になつて止めようとしている二人。

そんな二人にレインがやれやれと手を振りながら言った。

『ほつといていいよ二人とも。あれは夫婦喧嘩だから』

「「なつ／＼／そそ、そんなんじゃない（よ）！」」

赤く染めた顔でハモってしまったことにより周りの人達にもクスクス笑われてしまい、更に赤くなってしまう。

「さ、さつさと行くぞ／＼／」

「そ、そうだね／＼／」

エリキャラ口は不思議そうに顔を傾げているが、レインの方はアリスのようにニヤついた顔をしている。

お前も覚えてろよ。

この時周りにいた主婦の方々から”あんなにも若い子連れの夫婦なんていたかしら？”と少しの間話題になった事は誰も知らない。

ロングアーチからの連絡では今回のロストログアに危険性も事件性はないらしい。

ただし貴重な物らしく無傷での確保をと……全く注文が多い事だ。

日も傾き始め、回る所もあらかた回りフェイトが運転する車です中、スターズを拾ってコテージに到着。

到着するとアリサの他に月村すずかが来ており、今はフェイト達と話しに花を咲かせている。

「朧くんもレインちゃんも久しぶり。二年振りだね」

「ああ」

『おっひさ』

軽いな、おい。

「朧くんの事だからまた無茶してたんでしょ？」

「そんなわけないだろ」

「してたんでしょ？」

「いや 「してたんでしょ？」……はい」

笑みを絶やさぬすずかだが、それには有無を言わさない程の威圧感がある。

普段からおしとやかな聞き役で元聖祥五人娘の中では一番の良識

人と認識しているのだが、こういう時は一番怖い。

他も鋭い視線をこちらに向けないでください。

「フエイトちゃんに迷惑かけちゃダメだよ」

「……肝に命じておきます」

どんどんダメージが蓄積されていく……

「あれ、車？」

なにやらこちらに車がやってきて中から出てきたのは、

「はあ〜い」

「みんなお仕事してるか〜？」

「お姉ちゃんズ参上」

順にクロノさんの奥さんでフエイトの義姉に当たるエイミィさん、フエイトの使い魔のアルフ、なのはの姉である美由紀さん。

初対面である新人達との自己紹介を済ませ、今はそれぞれワイワイ話し合っている。

俺はそれを少し離れた所から見ているとこっちの方にエイミィさんとアルフがやってきた。

「翔くんも久しぶりだね」

「お久しぶりですエイミィさん。一年前ぐらいにリンディさん通信を入れた時以来ですかね」

「それつきりホントに一回も連絡寄越さないんだから」

ため息を尽きながらコツンと俺の頭に一発放つ。  
それに苦笑いして返す。

「リンデイさんも俺の頼み通りフェイト達に黙っていてくれたみたいで」

「結構大変だったんだよ」

「はは、ありがとうございます」

フェイト達と連絡を絶つてからの二年間、始めの方にはリンデイさんに定期報告をしていた。曲がりなりにも管理局員の俺が誰にも連絡も取らずに任務に出るのは不可能だ。

だから俺はリンデイさんに頼み込んで一人で任務に行けるようにしてもらい、フェイト達にも俺の事を秘密にしておいてほしいと言っておいた。

その際にSランク以上の魔導師ランクを取る事を条件とされ、フェイト達には秘密裏に魔導師試験を受けた。

「母さんにもたまには連絡入れてあげてね。喜ぶから」

「はい」

「おゝい。翔」

「よおアルフ」

アルフは今では現役を退いたが現在はハラウン家の使い魔として頑張っている。

「ちゃんと帰ってきたから何も言わないけどもうフェイトに心配かけんなよ」

「わかってるよ。他のやつにも散々言われた」

主思いの使い魔は俺の返答を聞くと、納得したような顔をし、ならいいんだよ、とだけ言った。

「カレルとリエラも会いたがってるから休暇の時にはきてね」

「あの二人俺の事覚えてるんですか？俺が会った時はまだちっちゃかったのに？」

カレルとリエラというのはエイミィさんとクロノさんの双子の子供でこれがまた可愛かったりする。

「うん。“お兄ちゃんって今度いつ来るの？”ってよく言ってるよ」「そうですか。なら今度また行かせてもらいます」

暫く会っていなかった二人に会いに行くというのも悪くない。

そう考えていたらエイミィさんがとんでもない事をさらりと言い始めた。

「というより翔くんいつフェイトちゃんと結婚するの？」

「なっ／＼／＼ななななな、何いってんですか!？」

「フェイトちゃんの事好きなんでしょ？」

「そ、それは……／＼／」

「まあ何か相談事があったらお姉さんに任せなさい」

そう胸を張りながらエイミィさんは俺の前を去って行った。

人妻となり大人しかつたがエイミイさんも昔はアリサやレインよ  
りだったことをすっかり忘れていた。

そこでレインがこちらにやってきた。

『朧ちゃんどうしたの？顔赤いよ？』

「赤くない！」

一日はまだ終わりそうにない。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「ばんぱかぱ〜ん！明けましておめでと〜ございま〜す」

翔「明けましておめでと〜ございます！いやあ、無事に新年も迎え  
られたな」

レ「今年の干支はなんだっけ？昨日までが“たいがー”だったから  
あ……………」



翔「違う、寅だ。それも寅だけど冬木のは別だ」

レ「子、丑、寅、卯……卯？あ、ウサギか！」

翔「そうだな」

レ「今年はいいい年になればいいね」

翔「ああ、最低でもJS事件解決くらいまではいつて欲しいよ」

レ「作者の頭ではJS事件は第一部らしいからね」

翔「どこら辺まで出来てるのか見当もつかないけど」

レ「そこは私達が言っても仕方ないけどね」

翔「それじゃあそろそろゲスト呼ぼうぜ」

レ「今回はいないよ」

翔「え？……いない？」

レ「そう」

翔「なんで？」

レ「いないから」

翔「いや、だから」

レ「いないから」

翔「ああそう……」

レ「だから今回は私と翔ちゃんだけで進行していくよ」

翔「おう、今話はサウンドステージの話だよな」

レ「うん、海鳴市に行った時の事だね」

翔「久しぶりに会ったっていうのにアリサの奴、いきなり殴ることないよな」

レ「逃げようとするからじゃない」

翔「だって絶対説教とかされると思ってたから」

レ「たいしてなかったじゃない」

翔「まあそうなんだけど」

レ「後私を感じた事言ってもいいかな？」

翔「なんだ？」

レ「美由紀さん空」

翔「それは言っちゃダメだ！」

レ「でも実際に空気」

翔「だから禁止!!」

レ「多分次は一言もセリフないよね」

翔「それぐらいにしとけよ!美由紀さんいい人なんだぞ!」

レ「お姉ちゃんズ参上……………この一言だけなんて」

翔「お前性格悪すぎるだろ!」

レ「これは私だってさすがに罪悪感が…………」

翔「ならやるなよ!」

レ「とまあ前座はさておき」

翔「長いよ!」

レ「お正月という事でまずは私達二人に今年の抱負を、だって」

翔「本編はまだ春辺りなんだけどな」

レ「ここは“れいんぽすと”だもん。普段の世界とは別次元だからいいの」

翔「そうか、じゃあまずは俺から。やっぱり俺としてはさっき言った通りJS事件完結かな。それでより一層沢山の読者さん達が楽しんでくれたらと思うてる」

レ「翔ちゃん良いこと言うねえ〜」

翔「べ、別に普通だよ！次はレインだぞ！」

レ「はいはい、照れちゃって可愛い」

翔「黙れ！／＼／」

レ「は〜い。私の抱負はね〜、読者さんが楽しんでくれる事って言うのは翔ちゃんと一緒だね。他にはこの“れいんぼすと”の発展と向上かな」

翔「さらりと宣伝するなよ！」

レ「後はまたクリスマス特別編みたいなのやりたいな」

翔「作者が衝動的に考えついた『劇団なのは』か？」

レ「うん 他にもいろいろやりたいな〜」

翔「それはアレだ。作者のやる気と読者さん次第だ」

レ「出来るといいね」

翔「そうだな」

レ「後今年はもっと感想とか〜、要望とか〜、質問とかゲストさんとか来てほしいよね」

翔「切なる願いだな」

レ「願いで終わりそうだよな」

翔「くじけそうになる発言禁止！」

レ「と、まあこんな感じで今年も頑張っていくからよろしくね」

翔「今回はこれで終わりか？」

レ「うん、今年も頑張っていくから皆よろしくね」

翔「レインがさっき言ったように感想、誤字、質問、要望、ゲスト出演や俺達の出張等等どんな些細な物でも受け付けてるんでよろしく！」

レ「それじゃあ、」

レ・翔『次話でお待ちしております！！！！』

第十四話 強引な里帰り（後書き）

どうでしたか？

サウンドステージはあと一話続きます。

読者の皆様が良い年を贈れますように。

次話でお待ちしております！！！！

第十五話 Let's go to せんとー(前書き)

どうも、夕です！

大学生になって初めてもらったお年玉は少なかった……

最近、本は沢山買ってるんですがゲームもしたい気分、何か面白いゲームはないですかね？

関係ない事でしたね。

では、どうぞ……！！

第十五話 Let's go to せんとー

side syo

コテージでは、はやてが既に鉄板焼きを作っていて俺も皿だしやらなんやら手伝おうかと進言したところ却下され、俺は別の重大任務を受け持った。

それは

「ここを通りたければ俺の屍を越えていってください!」

「どうしてそんなに邪魔するのよ」

「俺はただ一人として犠牲者を出したくないだけです  
マルさん!」

シャ

そついうことだ。

俺の最重要任務『シャマルさんを止める』だ。

「私達が来る前に手を出していないだろうな!？」

今までにないような物々しさで言い放つシグナム。



「ひどい。私だってお料理できるもん！」

「そういうことはもうあったマシになったら言え」

「ヴィータもバツサリ言うよな」

否定はしないけど。

シャマルさんの悪魔の料理を阻止し、はやて特製の鉄板焼きを皆で舌鼓をうちながらの夕ご飯は何事もなく終わり、俺達は風呂に入るため近くのスーパー銭湯にやってきた。

ちなみに俺の着替え等はフェイトが用意したものらしい。

「大人十三枚と子供五枚」

はやてが代表で券を買うが俺には疑問があった。

「十三？十二じゃなくて？」

「そやで」

「え？だって」

周りを見渡しながら数えていく。

俺、フェイト、なのは、はやて、シグナム、シャマルさん、スバル、ティアナ、アリサ、すずか、エイミィさん、美由紀さん。

「やっぱり十二じゃ……」

そこでヴィータと目が合う。

「そっか十三か……」

「オメエぶつつぶされてえのか」  
「……すみませんでした」

あなたの方が年上でしたね。

脱衣所へ向かい歩いていると、“銭湯と言えばこれ！”という自販機に目が止まり上がったら絶対に買おうと決心する。

「あ、そうだ。フエイトお金ちょうだい」

「え？なんで？」

いきなりお金をくれと行って、はいどうぞ、とくれる人なんていやしない。

「上がったらアレ飲みたいから」

俺は自販機に指差す。

「自分のお金は？」

「あのなあ、俺はお前達に拉致られてここに来たのに日本円なんて持つてる訳ないだろ」

有無も言わずにへりに放り込んだくせに。

「仕方ないな。はい」

そう言ってフェイトは財布から小銭を俺に差し出す。

「エリオの分も買ってやりたいから240円ちょうだい」

俺だけ買ってエリオは無しなんて最悪だからな。

「え？エリオってこっちで入るんじゃないの？」

「いや、アイツは男だろ」

確かにここは十一才以下ならどちらの湯にも入れるが。

「でも」

「それじゃあ本人に聞いてみるか。エリオ」

「なんですか？」

エリオと一緒にキャラもやってきた。

「男湯と女湯どっちに入りたい？」

普通の男ならそんな選択、すぐに『女湯！』と答えそうだがエリオなら、

「えええ〜！？ぼ、ぼぼぼ僕は男ですよ！？」

顔を赤らめながら言うエリオ。

真面目でシャイなエリオなら必ずと断る事は計算の内。

「でもエリオと一緒に入りたいなあ〜。キャラもそう思うよね？」

「はい！一緒に入ろうよ、エリオくん」

キャラ口を使うとは卑怯な。

「ここはエリオの意思を尊重してやれ。さあ、俺と共に男湯でゆっくりするか、フェイト達と共に女湯へ行き緊張と羞恥で休まらない時間を送るかどっちだ!？」

「朧さんとゆっくりします!」

この時のエリオの解答は答えるまで一秒とかからなかった。

「そういうことだ。諦めろ」

「う〜」

そんな唸っても関係ない、と言い張りエリオと共に進んで行く。

とそこで男湯と女湯で分かれる所がやってきた。

『朧ちゃんここでユニゾンしたら女の子にしか見えないから女湯に入れるよ〜、どうする?』

なんてとんでもない事をレインは口にしてきた。

「な!?!?!/ /ばばば、ばかかお前は!?!? そんな事するわけないだろ!?!? だ、だいたいお前らのヘナチヨコな裸なんてみたくもなばあっ!?!?」

アリスさんのお投げになった桶が顔にクリンヒット。

「朧? 嘘をつくのは良くないわよ?」

黒い笑みを浮かべながら言うアリサを見て赤かったであろう顔も今や真つ青な自信がある。

「はい。ホントは物凄く興味がありますけど自身の保身の為遠慮させていただきます」

「それでいいのよ。さあ、あんな変態放つといて早く入りましょ」

そうやって幾人は笑い、また幾人は奇異な目をしながら女の子達は行ってしまった。

「朧さんも大変ですね」

十才の優しさに涙したのは俺達だけの秘密だ。

「よし、こいエリオ。背中洗ってやるよ」

「ありがとうございます」

俺はエリオの背中を洗ってやっている。

「朧さんちょっと痛いです」

「それくらいがちょうどいいんだよ」

泡をお湯で洗い流し次はエリオが俺の背中を洗ってくれるらしい。

「これぐらいですか？」  
「ああ。いい具合だ」

ゴシゴシとエリオが背中を洗ってくれる。

「翔さんの身体ってそんなに筋肉がついてないように見えますよね」  
「ん？ああ。あんまり無駄な筋肉をつけたくなくて内側に必要最低限しかつけてないからな」  
「だからあんなにも独特でスピーディーな戦い方ができるんですね」  
「そういうこと」

筋肉を無駄につけず引き締める。

昔、身体の小さい俺にはこれが一番最適だからと教えられ、鍛えてきた。

その細身のおかげで女と間違えられる時もあるけど……

「なんだかこうしていると兄弟みたいですね」  
「まあそんなもんだろ。フェイトだってエリオからみればお姉さんみたいなもんだろ？」  
「そうですね」

そんなたわいもない会話をしていると、

「エリオく〜ん」  
「キャキャ、キャロ！？こっち男性用だよ！？」

たぶんフェイトの策略だろうな、と俺は当たりをつける。

「キャロはもう身体は洗ったのか？」  
「はい！」

「そうか。ならエリオも洗い終わってるから連れてっていいぞ」

俺はもう十分楽しんだ。

「朧さん!？」

「諦める。フェイトはしつこいんだ」

「さ、行こっ、エリオくん」

「朧さんの鬼iiiiiiii!?!」

キャロに引きずられエリオは魔境である女湯へと拉致られていった。

「そつえば俺も昔はアイツと入ってたなあ」

拉致られながら顔を真っ赤にしたエリオを見たからか、露天風呂で温もりながら俺は昔の事を思い出していた。

《アンタの身体ってホント女の子みたいね》

《初心ね〜、恥ずかしがっちゃってかわい〜》

《ほらほら、この胸に飛び込んできてもいいのよ？まあ羞恥の塊の  
アンタにそんな度胸はないか。あはははははは》

……………

「おもちゃにされた記憶しかない」

アイツは俺の反応がよほど気に入ってたんだろっな。

思い出してはいけなかったような黒歴史を記憶の奥にしまいなが  
ら風呂を上げることにする。

こんなけどまだ任務の最中なので、あまり長湯は出来ない。

脱衣所でフェイトから受け取った服に着替え、ロビーに戻る。

そこでは一足先に逃げてきたのか少しくったり気味のエリオがも  
う上がっていた。

「お疲れ様」

「酷いですよ朧さん」

「悪い悪い。お詫びになにか飲み物買ってやるから」

「そんないいですよ」



「そんな子供の時から遠慮なんかするもんじゃないぞ。それにな」

俺はエリオの肩に手を置きながら言った。

「銭湯が上がったらビンジュースを飲む！それがこの世界の常識だ！」

「そうなんですか？」

俺の独断と偏見だ。

今も俺が飲みたいだけだし。  
だがそれは胸の内にしまい、頷く。

「よし、それじゃあどれにする？」

種類はたいていどこも“牛乳”、“コーヒー牛乳”、“フルーツ牛乳”と決まっているがここは珍しく“イチゴ牛乳”や“リンゴ牛乳”といった物まであった。

「それじゃあ僕はコーヒー牛乳を」

お金を入れボタンを押し、ガシャンと出てきたジュースをエリオに差し出す。

「ほれ」

「ありがとうございます」

エリオにコーヒー牛乳を渡し、俺はフルーツ牛乳を置く。  
邪魔なラベルを剥がし、蓋を開け一気に飲もうとすると、

「やっぱりフルーツ牛乳買ってる」  
『朧ちゃんはお子ちゃまだもんね〜』

フェイトとレインの二人がやってきた。

「別にいいだろ。俺が何を飲もうと」

『別にいいけど、エリオだってコーヒー牛乳なのに朧ちゃんはフルーツ牛乳ってところがやっぱり……ねえ』

「フン、なんとでも言え。俺は好きな物を飲む！」

フルーツ牛乳を上に向け、がぶ飲みする。

フルーツ牛乳がお子ちゃまだと言っるのは偏見だと俺は思っている。人間誰しも好き嫌いと言っものがあり、苦味と甘味で甘味を取るのが子供とは早計過ぎる。大人だって甘い物が欲しい時があり、それが風呂上がりだというだけだ。

なんて考えていたちょうどその時にバルディッシュユが光りだした。

『サーチャーに捕捉。ロストログニアです』

「！？見つけたか。フェイト、エリオ。お前らは皆が上がるのを待っていてくれ。俺はレインと一緒に先行する。結界は任せた。行くぞレイン！」

『OK』

「頼んだよ朧」

「任せろ」

俺はレインと共に現場へ駆けつけた。

「あれ……なのか？」  
『そうみたいだね』

現場に到着した俺達の前には幾つものスライムが逃げ惑っていた。

「あれ、斬ってもいいんだよな？」

『いいんじゃない』

「そうか、アート No.1、2 open」

左右の手に短剣を携えスライムに突っ込む。

「はっ！」

斬！

左の剣で切り込むが、

「斬撃が通らない!？」

『あれじゃ多分打撃系もダメだね。あんなに数が多いのはロストロギアの性質で危険を察知したら分裂して逃げるみたい』

物理攻撃は通用しないってことか。

「あれ全部が本体なのか？」

『ううん。本体は一つだけみたい。だから、』

「それを見つけて封印、もしくは動きを封じるってところか」  
『だね』

俺は封印なんて出来ないから動きを止めるしかない。クライアン  
トは確か無傷でとか言ってたな。  
全くもってメンドクサイ。

「たぶん本体はアレだ。一つ動きが違う」

『朧ちゃん相変わらず目ざといね』

「褒めてんのかそれ？行くぞ」

俺が行こうと足に力を入れたところで、

《朧くんちょっと待って！》

なのはから念話があった。

《どうした？》

《もう少ししたらそこにティアナ達が到着するからあの子達にやら  
せてあげたいの》

《経験を積ませたいのか？俺は別に構わないけど。援護に回ればい  
いのか？》

《うん、ありがと》

念話が切れ、それと入れ代わる形でティアナ達がやってきた。

「朧さん！」

「来たな、今回はお前らに任せる。アレに斬撃系、打撃系の攻撃は  
通用しない。他はわからないが、俺が与えられる情報はそれだけだ。  
自分らで考えてやってみる。俺もティアナの指示で動く」

『了解！』

さて、お手並み拝見だ。

ティアナはまず物理攻撃以外の魔力弾やフリードの炎等も効かない事を確認している。

《うん、まずは正解ってとこだね》

《ああ。未知の敵との戦闘では情報が一番重要だからな。でもあいつらもレインが言ってた分裂する事くらいは知ってるんだろ？》

《うん。デバイスに情報が送られてるはずだから》

そうか、なら

「ティアナ。どうするんだ？」

「あの中に本体がいるはずです。それを特定して動きを止めるのが最善だと思います」

「よし、なら俺はどう動けばいい？」

「あまり周りに広がらないように足止めをお願いします」

「わかった。周りのスライムの動きを封じる。本体の特定とその活動の停止は四人に任せる。いけるか？」

「はい！」

「よし、1st out。レインやるぞ」

『いつでもいいよ』

二刀の剣を待機状態へと戻し俺はレインと共に叫んだ。

「『ユニゾン・イン』」

光から現れた俺の姿は髪の長い女の子モード（命名レイン）だ。

「壊したらダメなんですよ？」

ユニゾンした俺を見て何を思ったのかスバルが言った。

「まあ見てろって、こっちは任せたぞ」

「あ、はい」

俺は四人から離れ、森を抜けようとしている一団へと接近する。

「ソードスフィア改・ソードサモナー」

『どどんどんいっくよ』

足元に蒼色の魔法陣が展開され徒手空拳だった俺の手には左右合計六つの凍った剣が現れている。

ソードスフィアの発展系ソードサモナー。

この魔法は氷の魔力変質を持つレインとのユニゾン時にしか使えない。

ソードスフィアを凍らせてそのまま剣として扱う単純な魔法だ。

瞬時に展開出来るが出せる本数もユニゾン前から三本増えた十本まで。そもそも人の手は二本しかないのだから同時使用は二本までと、対して程度も高くない。

だが使いようによっては、

刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺  
刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺

逃げるスライムもどきを囲うように剣を投擲していく。

その数は既に六十を越えている。

もどきは逃げ道を防がれどうしようもない。

俺の役 割はあくまで援護なのでここまで。

肝心のティアナ達も本体の特定ができたようだ。

『朧ちゃん、本体がシールドを張ってるよ』

「大丈夫だ。まあみてるよ」

シールドを確認するや否やスバルとエリオのコンビネーションアタックでシールドを破壊しキャロが素早く確保した。

それを見たレインはぱちぱちと手を叩きながら驚きの声を上げた。

『おお、すごいすごい。やるようになったね』

「そりゃ毎日なのは訓練受けてるからな。イヤでも上がるだろ」

これで海鳴での任務は完了。すぐにミッドに帰る事になるだろう。

このあと、キャロが完全封印を経験してみたいと言い出し、見事に成功させ、こうして初めての派遣任務が終了した。

~~~~~  
うれいんぽすと

レ「PV50000アクセス！」

翔「ユニーク5000人突破！」

レ・翔『ありがとうございます！』

レ「このまま停滞しないといいよね」

翔「そうだな」

レ「さて、今日はゲスト来てるよ」

翔「お、この間は誰もいなかったからな」

レ「それじゃあ登場してもらいましょう、どづぞー」

？「ど、どづも」

？「こ、こんにちは」

レ「じゃあ自己紹介よろしくね」

エリオ「機動六課、ライトニング隊所属エリオ・モンディアルです  
！」



キャロ「機動六課、ライトニング隊所属キャロ・ル・ルシエです！」

レ「ということで、今回はエリキャロコンビがゲストです」

翔「まあリラックスしてくれ」

エ「わかりました」

キ「はい」

レ「じゃあいつも通り、今話について一言を二人に言ってもらおうかな。エリオからどうぞ！」

エ「翔さんが酷かったです」

翔「いや、あれは仕方ないって」

レ「翔ちゃんがエリオを売ったんだよね」

エ「はい」

翔「人聞きの悪い事いうな！エリオも肯定するんじゃない！」

キ「エリオくん嫌だったの？」

エ「い、嫌って訳じゃないんだけど僕も一応男だから……／／／」

翔「どんな事があったんだ？」

エ「初めは露天風呂でキャロとフェイトさんだけだったんでまだマ

シだったんですけど……」

レ「その後キャラに引きずられて女湯までやって来たんだよね」

エ「そしたらスバルさんやアリサさん達に……」

キ「楽しかったね」

エ「ははは……」

翔「それで急いで逃げ出したのか」

エ「はい……」

翔「俺が悪かったよ……大変だったんだな」

エ「はい……」

レ「そんな変な男の友情なんていらなから次にいこ、キャラどうぞ！」

キ「えつと、なんだか遠足みたいでとても楽しかったです」

翔「キャラらしいな」

レ「私も一言いい？」

翔「なんだ？」

レ「やっぱり空気だったね美　「その発言禁止!!!」ええ」

翔「それには以後触れる発言は禁止！わかったな！？」

レ「はあ〜い」

翔「たく……今日はこんなもんか」

レ「そうだね。エリオもキャラもありがとつね」

翔「また来てくれよ」

エ・キ『はい！』

レ「感想等も待ってます！」

翔「どんな些細な内容でもいいから送ってきてくれると嬉しい」

レ「では、」

全員『次話でお待ちしております……！』

第十五話 Let's go to せんとー (後書き)

サウンドステージはこれで終了ですね。

次回は1月9日を予定しています。

感想なども待ってます!!!

では、次話にてお待ちしております!!!

第十六話 浅儀初の一日（前書き）

どうも、夕です！

今回はプロットの段階で少しグダグダだったんで内容も少し……いや、大丈夫か？

怖い……

あと少し改行を変えてみました。

では、どうぞー！ー！

## 第十六話 浅儀朧の一日

side rain

今日は雲一つなく晴れ渡った快晴。

こんな日はどこかでピクニックと洒落込みたい所だけど生憎仕事がある。

私はもう着替えを済まし、髪を解かし、顔を洗い、歯を磨き、準備万端。

ちなみに私の仕事はいつもこの自室から始まる。

今日も朧ちゃんは遅刻しそうだからです。

だって爆睡してるんだもん。

いつもいつも全く成長しない朧ちゃんに困り果てるので今回は秘密兵器を持ってきた。

それは、

「ホントにまだ寝てるんだね……」

朧ちゃんの寝顔を覗き込みながら呆れるように言うのは金髪美人、フェイトちゃん。

ホントはなのはちゃんやはやてちゃんも連れて来たかったけど皆忙しいので、悪いとは思ったが朧ちゃんをどうにかするために一番

効率的なフェイトちゃんに来てもらった。

「……………ZZZ」

「よく寝てるね」

『寝る子は育つって言うのになんでこんなにちっさいんだろ?』

ここに着いてすぐの頃、グリフィスクンやヴァイスくんを見て『いいんだ……………俺の成長期はこれからだ……………きつとこれからなんだ……………』とか言っつて部屋の隅で泣いてた時があったっけ。

「いつもどうやって起こしてるの?」

『フトン剥ぎ取ったり出来ないから怒鳴っつて起こすくらい……………かな』

以前は顔を叩いて起こしてたりしたけど寝返りをうった朔ちゃんに危うく窒息死させられかけて以来、怒鳴ることしかできなくなっただからね。

「それじゃあ、いつもみたいに起こしてくれる?」

『うん……………朔ちゃん、朝だよ!起きて!』

「……………ZZZ」

『遅刻するよ!』

「ん……んん……あとで……むじゅ……」

あとでってなによ?

「重症だね」

『これが毎日はずがに骨が折れるんだよね……』

たまにならいいんだけど。

『それじゃあフェイトちゃんお願いね』

「うん。翔、もう朝だよ。早く起きて」

体を揺らして起こすけど翔ちゃんは

「……うん……あした……おきる……」

「翔は何を言ってるの?」

『いつものことだよ』



フェイトちゃんもはやため息しか出ないみたい。

「昔もこんなだったけどね」

『そうだね』

地球に住んでた時も朧ちゃんはこんな感じで寝ぼすけだったけど、リンディさん達の笑顔のちようきよ……OHANA……おはなしで見事に起きるようになった。

『そろそろホントに時間がなくなってきたよ』

このままだったらフェイトちゃんも巻き添えにしてしまいそう。

「じゃあそろそろ起こそっか」

そう言ってフェイトちゃんは朧ちゃんの耳元に顔をもっていき、ボソボソと一言口にする。

「あああああ~~~~!!!?!?」

朧ちゃんが跳び起きました。一体何を言ったのフェイトちゃん……

「目が覚めた？」

ニツコリ笑顔のフェイトちゃん。

「あ、ああ」

意気消沈な朧ちゃん。

「あんまりレインに迷惑かけたらダメだよ。もう朧だって子供じゃないんだから」

「わ、わかった……」

「もしまたこんなことがあったら わかってるよね？」

「……はい」

朧ちゃんはガクガク震えてるし、正直フェイトちゃん怖い……

s i d e s y o

「怖かった……」

『何を言われたの?』

「思い出させないでくれ……」

考えただけで……ヤバイ、震えが止まらない。

『でも鞠ちゃんが悪いんだからね!いつもちゃんと起きないから!』

「眠いんだから仕方ないだろ!」

俺だって起きようとは思ってた………時もある。

「はぁ、それで今日の仕事は?」

『昨日の任務の報告書の提出』

「いきなりデスクワークかよ!？」

俺なんかよりもっと適任がいると思うのに。

自慢じゃないが俺は六課一デスクワークが出来ないと自負している。

そんな俺にそんな仕事を回してくる理由は大方、フェイトだろう。あいつは何かにつけ込んで俺にやらそうとする。

いい加減覚えてほしいんだろうな。  
でもなあ、

思わずため息をついてしまう。

『いいじゃん。今日のデスクワークはそれで終わりにしていいって言うてたよ』

「ならレインがそれやってくれよ」

『ただし、翔ちゃんがやるようにだって』

鬼め……

「なら早く終わらす為に行くか」

『うん』

デスクワーク……鬱だ。

そう思いながら俺はとぼとぼと歩いて行った。

そして仕事を始めて三十分後……

「えっと……ここは……でいいんだよね？」

『違う！ここは……で……あの資料を参考にして……』

一時間後……

「いじつか？」

『ああ……それはそうじゃなくて……何回言わせればわかるの！？』

三時間後……

「……………これでどうですか？」

『翔ちゃん？私が言いたいことわかってるよね？』

「……………やり直します」

六時間後……………

『舐めてんの？』

「決してそのような事は……………」

八時間後……………

「……………これで勘弁してください」

『まあ……………後の細かい場所は私がやっつくからもういいよ。お疲れ様』

「お……………終わったあ〜」

長かった……………

酷く長い死闘だった……

いつもとは違い全部俺がやらないといけなかったから相当時間がかかった。

なにせ朝起きて、朝食を済ませてすぐに取り組んで終わったのはお昼を軽く過ぎてている。

おかげでお昼ご飯を食いそこなった。

まあ食材とかは部屋に少しはあるし久しぶりに自分で作るか。

サンドイッチくらいなら俺だってすぐに作れる。

「それが終わったら部屋に戻って来てくれよ。お昼作って待ってるから」

『OK』

俺が言うのもなんだがレインの情報処理能力はハンパない。おそらく六課一だろ。

俺から見てもわかる。

そんなレインにずっと教わっててあのレベルの俺って……

「考えるだけ悲しくなるだけだ」

頭を振りその考えを外へ出す。うん。人は適材適所だ。

頑張ってくれているレインの為にも美味しいご飯作らないとな。

部屋に戻り冷蔵庫の中身をチェックしてすぐに調理に取り掛かった。

作ったのはタマゴやハムを挟んだ物やトマトとレタスなどのオーソドックスな物だ。

「まあこんなもんだろ」

『翔ちゃんご飯なに〜?』

女の子が帰ってきての第一声が『ご飯なに〜』と言うのはどうかと思う。

まあデバイスだけど。

「サンドイッチだよ」

『いいね〜』



「デザートにプリンも買ってるから」

『ホント〜!?!?』

そう言っただけ俺はレインとテーブルについた。

ちなみにレインはプリンが大好物だったりする。

「それじゃあ」

「『いただきます』」

俺達は少々遅い昼食をとりはじめた。

昼食を食べ終わり、新人四人の訓練を見に訓練所へと訪れた。

一応服は訓練着を着ている。

到着すると皆それぞれ個別スキルの訓練をしているところだった。

ティアナはなのはと精密射撃訓練

スバルはヴィータと防御魔法の訓練

エリオ、キャラはフェイトと回避訓練

とそれぞれ適材適所に頑張っている。

俺もストレッチしとくかと伸びをすると、なのはが俺に気付いた。

「あれ、翔くん？」

『こんにちは！』

「よう、俺も体を動かさそうと思って」

「も、もう報告書は書き終えたの？」

「もちろん」

「な……に……？」

「明日は雪……じゃ……レイン？」

『ちゃんと翔ちゃんに全部やらせたよ。何時間かかったか……』

順になのは、ヴィータ、フェイト。

お前らもう少し俺を信用しろよ。

side out

「体を動かして来たんだよね？」

なのはが聞いた。

「ああ、アート振って動きの確認でもと思って、それとも何か手伝った方がいいか？」

「ならスバルと組み手やってもらえないかな？」

「組み手？スバルと？」

意外だったのか朧も不思議そうな声を上げた。

「朧さんってシューティングアーツもするんですか？」

シューティングアーツとはミッドで流行している格闘技でスバル

などの戦闘技術などにも組み込まれている。

「いや、シューティングアーツ自体は習った事ないけど近接戦闘で格闘は基本だからな。武器がないから闘えませんが話にならないだろ？だから俺も少し勝手が違うかもしれないけど素手でも闘えるよ」

教えるのは苦手だけどな、と付け足す。

「どうかな翔くん。頼まれてくれる？」

そう聞いてくるのはにヴィータが続く。

「元々お前にいずれ頼もうとは思ってたんだ。私達じゃスバルのスパーリング相手はできねえからな」

なのはとヴィータはそれぞれ遠距離魔法とハンマーでの攻撃なので格闘は全くと言っていいほどしない。

そこでそこそこ精通する翔に白羽の矢が立ったということだ。

「いいよ」

「そっか。スバルはどうかな？やってみたい？」

「はい、ぜひ！」

なのはの言葉にスバルは胸の辺りにまでグッと両の拳を持って行きながら頷く。

「ならヴィータちゃんはスバルと昶くんの組み手を見ていてあげて」

「わかった」

ほかの者はそれぞれ自分達の訓練へと戻り、この場は俺とレイン、スバルにヴィータが残った。

「じゃあやるか」

「はい！」

「ルールは魔法一切なしの格闘オンリーだ。十五分以内にスバルが一発でも昶にクリンヒットを入れられればスバルの勝ち。入らなければ昶の勝ちだ」

そのルールを聞き、ヴィータの掛け声に合わせて二人は構える。

既にスバルはリボルバーナックルをはずしてある。

「ヴィータ、合図頼む」

「いくぞ」

互いの距離はおよそ五メートル。

「始め！」

その合図が始まると同時にスバルは一気に間合いを詰める。

「はあああつ！」

ローラーを使い、滑るように接近するスバルは声を上げながら右拳を朧へと勢いよく放

「甘いよ」

撃！

容赦ないスバルの右ストレートが朧の顔へ飛んでくるがそれを右に頭を傾げるだけで避け、懐に入り込んで放たれた右腕を掴み、空いた左腕で鳩尾に肘打ちをくらわす。

「 がっ!?!? 」

鳩尾に入った事により息ができなくなったスバルが片膝をつく。

「 甘いぞスバル。そんな大振りが当たる訳ないだろ 」

「 は、はい! 」

スバルはすぐに息を整え、拳による連打を放つ。

殴・殴・殴・殴・殴

「 うおおおお! 」

次々と放たれる攻撃を朧はひたすら避ける。

「 ワンパターン過ぎるぞ! 」

「 まだまだあつ! 」

顔、胸、肩、腹、さまざま部位を狙うスバルだが全てが直線的な動きで剋はたやすく見切る。

「はっ！」

スバルの腹に膝蹴りを入れる。

「がぁっ!?!」

痛みで前のめりになるスバル。

「まだ続くぞ」

蹴!

すぐさま後ろへ回り込み蹴りを放つ。

もろにくらったスバルだがなんとかすぐに体勢を立て直す。

実戦なら後頭部を打ち付けて気絶させるが、剋は気絶されたら困るので蹴りに変更した。

「その足は飾りか!もっと考えて!動きで相手を翻弄しろ!」



「はい！」

そこからはずっと千日手でスバルの鋭い拳と弧を描くような重い蹴りの猛攻をひたすら受け流し、避ける。

そうして

「終了だ」

ヴィータの終了の合図により二人は動きを止め、スバルは疲れたのか大の字に寝転がる。  
息もかなり上がっている。

「あ、ありが………とう………うざい………ました………」

「どうだった？」

それほど疲れていないのかすぐに呼吸を整えた昗はヴィータとレインに組み手の感想を聞いてみた。

「少しずつだがスバルの動きが良くなっていったな」

『うん、昗ちゃん最初は余裕見せて避けてばっかだったけど途中からは防御もとってたもんね』

「いや、実際俺は魔力なしじゃ全然だし。魔法なしじゃ受け流すか避ける事しかできないよ。それに、スバル」

昴はスバルの方へと顔を向ける。

「は、はい……」

「お前の一撃は確かに強い。けど当たらないと意味がないからな。だからもつと虚実を混ぜていくんだよ。全てを当てるんじゃないなくて一撃、たった一撃でいい。その一撃を当てるための攻撃を組み立てていくんだ。幸いお前には俺と違って才能もある。すぐに俺なんて相手出来なくなる」

「そ、そんなことないですよ」

スバルは予想外な事を言われ顔を横にブンブン振っている。

「それじゃあ後少し休憩したら次はまた私との防御魔法の訓練だ」

「はい！」

「昴はどうすんだ？」

「他のやつらも見てくるよ」

少しぐらいなら役に立てるかも知れないし、とヴィータに言い  
刎はその場を離れた。

それから時間は新人達の訓練を転々と見て回りちよろちよろつ  
とアドバイスをして日が暮れはじめたのでその日の訓練は終了した。  
新人達を先に帰してなのはデータの整理を他の隊長陣が待つ。

「スバルとの組み手はどうだった？」

「粗削りだけどなのはの訓練受けてるだけあってやっぱタフだわ」

「やってみて見えてくるもんとかあるしな」

頭の上で手を組みながらヴィータも上々と評価する。

「それじゃあまた今度頼むかもしれないけどいいかな？」

「ああ。構わないよ」

刎はすぐに了承した。

「刎は結構ヒマだしね」

「これでも大変なんだぞ？」

「どうせデスクワークでしょ？」

グサツ

『量は少ないのにね』

グサツグサツ

「しかもレインが手伝ってあの時間までかかるし」

グサツグサツグサツ

フェイトとレインの精神攻撃が容赦なく朧を貫く。

「俺だって頑張ろうとは思ってるんだよ!？」

『なら少しは成長して』

ザクッ!

翔としては一番の功労者であるレインにそんなことを言われたら  
なにも言い返せない。

それでもなんとか搾り出して出た答えは

「……頑張ります」

これが俺の精一杯です、とでも言うような消沈ぶり。

「よし、終わり みんなゴメンね」

翔への精神攻撃が繰り広げられている間にデータ整理を終えたな  
のは。

「よし、戻るか」

訓練所から隊舎へと戻る。

「あ、そうだ」

戻る途中、たわいもない雑談をしていた五人だが不意に何かを思  
い出したようにフェイトが呟いた。

「どうしたんだ？」

突然声を上げたフェイトに翔は声をかける。

「ん、そういえば今日だなって思ってた。ふふ」

笑顔で答えたが他の四人はなんのことかわからなかった。

s i d e s y o

「あ、ちよつ、まだ……」

「ダメ、もう待てないよ」

甘美な声が聞こえる。

俺はその言葉により更に冷静さを失わされる。

「フェイト……」

「翔、手が止まってるよ？」

言われ慌てて手を動かす。

夜の十時過ぎ。

現在自室に戻って来ている。

中には俺とフェイトのみ。ちなみにレインはレインの所へ行っている。

この時間帯、完全にフェイトのペース。

なんとか俺のペースへ持ち込む………なんて一生できないだろうな。

だって苦手だもん

勉強

「……5、4、3、2、1、終了」

「……」

フェイトは俺から白い紙を受け取り目を通していく。胃に穴が空くんじゃないかと思われるこの時間。

俺の精神は既に限界を超えている。

数分して、フェイトは紙から目を離し、ため息をつき、ニッコリ俺に一言。

「26点」

……



「真面目にやってるの?」

今朝レインにも同じような事言われました……

「いつまで経っても先に進めないんだけどな?」

「これが俺の全力です……」

「勉強に対する姿勢がなってないからダメなんだよ」

そう。六課に来たその日の夜にしたフェイトとの約束の一つ、

月に何度か勉強の時間を設けること

そう約束させられあの日以来俺は既に七回も机に縛られるように鉛筆を握らされている。

間違えてはやる気はあるの?と言われつつける日々。他にも物凄い笑顔、無言の重圧、いつの間にか構えられてるバルディッシュ  
tc……

脱走を試みた回数は数知れず、実際に行動を起こした回数既に二回。

行動を起こし捕まった回数同じく二回。

捕まり地獄を見た回数またもや二回。

二度目の地獄の最後に微笑みながら言ったフェイトの言葉、

次はないよ？

俺はそれ以来この時間は言われた事に忠実に取り組む犬と成り下がった。

仕方ない。俺だってまだ生きていたい。

「朧聞ってるの？」

「聞いてます。はい」

今からはテストの見直し。

適当に受け答えしていたら終わるだろう。

「だからここは……で……」つやって……」

……

「これはどうなるのは解る？」

「ああ」

.....

「この問題は……」

.....

「さて、これで今日の分は終わったけど」

至福の時間が訪れた。

「解説ちゃんと聞いてた？」

「もちろん」

抜かりない答えを返す。

「じゃあこれ解るよね？」

「え？」

指された問題は先程説明していた物。

もちろん話なんて聞いてなかった。

「え、え」と……これは……」

問題の解き方は出てこないのに汗はどんどん出てくる。

「どうしたの？さっき説明したよ？」

この笑顔……恐らくわかってらっしゃる。

「だから……その……あはははは……」

人間どうしようもない時は何故か笑ってしまう。

「……」

「ははははは……はは……」

「……」

「は………はは」

「延長だね」

「いやあああああー!!」

結局この日、就寝出来たのはこの四時間後だった。

~~~~~  
くれいんぽすと

レ「始まったよくれいんぽすと!」

翔「さて、早速今日のゲストを呼ぼうぜ」

レ「呼びたいんだけどね、今日はいないんだよ」

翔「なんで?」

レ「作者が無理に今日投稿したから」

翔「あくだからか」

レ「別にこの日に投稿するなんて言わなきゃよかったのに」

翔「どうしても今日がよかったんだろ？」

レ「知り合いとかいつも絶対忘れるから悲しいんだって」

翔「まあ俺らも絡まないけど」

レ「そうだね。今話は翔ちゃんの日を紹介する話だったんだけど、翔ちゃんはとうだった？」

翔「俺結構頑張ってるよね？」

レ「そうかな？」

翔「だって朝からデスクワークに追われて、お昼は訓練に夜は地獄の勉強会……普通なら死ぬるね」

レ「普通なら朝は自分で起きるし、デスクワークももっと早く終わらすし、勉強会なんてする必要ないよ」

翔「悲しくなる発言禁止！！」

レ「え〜と、今日はもう終わろうかな」

翔「無視するな！そして早っ！！」

レ「だって別に今回の話私興味ないもん」

翔「自分本意だなお前は！」

レ「ぶ〜、ちがうもん。そこまで言うならちよつとだけ裏話」

翔「今話のか？」

レ「うん。実は今回の話入れるか悩んだんだって」

翔「何故なんだ？」

レ「これからの話の展開にあまり関わらないしもう少し後で入れてもいいかな〜って考えたらしいよ」

翔「でも今回入れたと」

レ「うん。やっぱり少しずつオリジナルの話も入れていきたい、っていうのと試験的な意味も込めてるんだって」

翔「そういえばなんだか書き方がいつもと違うかったな」

レ「それについて、いつもの方がいいか今回みたいな方がいいかアンケートも取りたいらしいよ」

翔「読者さんが見やすい方がいいからな」

レ「そういうこと だから読者の皆さんにはどっちが読みやすいか教えてくれたら嬉しいかな」

翔「前の方がいい、とか今回の、とか一言でもいいんでよろしくお願ひします」

レ「勿論、普通の感想や意見、質問、誤字訂正、ゲスト出演してくれる方や翔ちゃんの出演依頼とかもどんどん待ってるよ」

翔「こちらもよろしく」

レ「それじゃあ今回はこれで、」

翔「では、」

レ・翔『次話にてお待ちしております!!!!』



第十六話 浅儀初の一日（後書き）

どうでしたでしょうか……

“れいんぼすと”でのレインが言っていたようにどちらの方がいいか教えてくれたら嬉しいです。

勿論普通の感想等も大歓迎です！

そして言いたかった……

私も今日から19歳になったのだと！

ハッピーバースデー俺！

おめでとう俺！

……むなしい

では、次話にてお待ちしております……！！

第十七話 朱い眼（前書き）

どうも、夕です！

今回はホテル・アグスタです  
話も少しだけ展開が進みます。

改行もまた少しいじってみました。  
読みやすければ幸いです。

では、どうぞ！

## 第十七話 朱い眼

今日からこの子がアンタのパートナーよ

朝食時にそう言つて女が少年の手の平に乗せたのは青髪の浴衣を着た小さすぎる少女。

その小さい少女は今の今まで女のパートナーだった娘だ。

『頑張ろうね マスター』

そう言つてウインクし、飛び回る少女の言葉に困惑する少年にその娘を渡した本人は、

「これからこの娘はアンタと一心同体よ。そうね、言つてみるとアンタつていう抜き身の“剣”を納める“鞘”つて感じかな。ううん、私つて冴えてる」

上手く言えたらしく女は上機嫌でトマトを口に放り込むが、少年は彼女が何を言っているのか全く理解できない。

「今はわかんなくてもいいわ。アンタが鞘から剣を抜けるようになるのはずっと先の事だろうし。あ、この卵焼きもイケるわね」

いただき！と、少年の卵焼きまで奪い満足げな様子の女に対し少

年は余計に意味がわからなく、首を傾げる。

「そうねえ〜。アンタが素敵な男の子になれば教えてあげるわ」

そう言い聞かせた彼女に少年は少し考え、自分なりに答えを見つけて出し、

要はサキみたいに強くなったらいいんだよね？

と、自身満々に答えた少年だがそれを聞いて女はやれやれと深くため息をつき、

「この調子じゃ答えが解るのはいつになるのかしらね」

と不服そうにしていた。

『翔ちゃん！起きて！』

「ん……悪い寝てたか」

夜明け直後という時間帯。昗は立ったまま寝ていたところをレインに起こされた。

『しっかりしてよね。もう少しで交代の時間だから』

「ああ」

気が緩んでたな、と昗は自分の頬をパチンと叩き、気合いを入れる。

「悪いけどコーヒーもらって来てくれないか？目を覚ましたいんだ」

『OK、すぐ戻るから寝ちゃダメだよ』

レインも眠たいだろうに、一体あの身体のどこにあんな元気があ  
るのか、とレインの飛んで行った後ろ姿を眺めていた。

「ホテル・アグスタねえ」

昗は警備対象である建物を見上げて呟きながら昨日の事を思い出  
していた。

「ホテル・アグスタの警備？」

朔は渡された資料に目を通しながら聞く。

「そつや。骨董美術品オークションの会場警備と人員警護、それが今回の任務や」

部隊長室にシグナム、ヴィータと共にはやてから召集がかけられた朔は今回の任務についてははやて、ラインから説明を受けている。

『取引許可の出ているロストログアが幾つも出品されるのでそれをレリックと誤認してガジェットが出てくる可能性が高いということで私達にお呼びがかかった、ということです』

朔としては何故機動六課が出るのかがわからなかったがその理由をラインが答えてくれた。

「明日からの開催か」

「主はやて、私達が呼ばれたという事は今夜から警備に当たるといふ事ですね？」

「そついう事や。副隊長である、シグナム、ヴィータ、朔くん。あと数名の隊員で先に現地入りしてもらう」

「なのは達は明日からくるのか？」

「明日の朝から残りのFW部隊全員と私、ライン、シャマルにザフ

「イーラの計十人で行く予定や」

「FW部隊全員に加えザフィーラ達までの出勤とかなりの警戒がされている。」

「隊長三人には当日、中の警護に当たってもらうので新人達は三人に任せるです。交代の時間などはその中に書いているので後で確認しておいてください」

「リンの説明を聞き了解、と話を聞き終え部屋を後にしようつてすると、はやてに呼び止められた。」

「ちょっと待って。一つ言い忘れてたわ」

「なんだ？」

「ガジェットを送り付けてくる今回の首謀者。“ジェイル・スカリエッティ”の線でほぼ決まりや」

「ホントに俺ってスカリエッティと縁があるよなあ」

ジェイル・スカリエッティ

生命操作や生命改造を皮切りに数々の犯罪経歴を持つ広域次元犯罪者。

しかしその発想と技術は『違法研究者でなければ間違いなく歴史に名を残す天才』とまで呼ばれ、フェイトが生まれる事になった“プロジェクトF”の基礎も彼が築いたもの。

フェイト自身も数年前から度々事件を裏で関与しているスカリエツティを追っており、朧も個人的にスカリエツティを追っていた時期があった。

「まあでも今は警備に集中しないと」

再びパチンと顔を叩き気持ちを切り換える。

「何も起こらなかつたらいいけど」

不安は不幸を呼び寄せる

昔そう言っていた人がいたな、と思ったのだが朧は何故か不安に思わざるを得なかった。



オークションが行われるホテル・アグスタの警護。  
警備状況の確認を兼ねて中にいるスバルに念話を送る。

《中の状況はどう？》

《うん、特に異常なし》

《そう》

今のところは大丈夫そうね。

《でも今日は八神部隊長と守護騎士全員集合かあ》

《……そうね。そういえばあんたって結構八神部隊長達の事詳しくか  
ったわよね？》

《うん。父さんやギン姉に聞いた事ぐらいだけど……》

その内容は部隊長が所持しているデバイス名が夜天の魔導書とい  
う魔導書型であり、ヴィータ副隊長、シグナム副隊長、シャマル先  
生、ザフィーラは部隊長の特別固有戦力でリイン曹長を入れたら無  
敵の戦力だという事。

詳しい情報は特秘事項だからわからないけどね、と付け加え  
て。

特秘事項、レアスキル……

《何か気になるの？》

《別に……》

《そっか。じゃ、また後でね》

スバルとの念話が切れる。

最近一段と思うようになった。六課の戦力ははっきり言って異常だと。前にレインも“チート部隊”なんて言ってたし。

隊長各全員がオーバースランク以上、副隊長だってニアスランク。ほかの隊員達もみんな将来のエリート。

新人だってそう。あの歳ですでにBランクのエリオ、レアスキル持ちのキャロ。危なっかしいが才能に満ち溢れ、管理局員である家族のバックアップのあるスバル。

凡人は私だけ

それでも私はやってみせる。

いつだって自分の力でやってきたんだから！

警！

その時アラートが鳴り響いた。

私はクロスミラージュのアンカーガンを使い見晴らしのいい二階のテラスへ移動、スバルと合流し、前線のサポートに回っているシヤマル先生へと通信を繋ぐ。

「シヤマル先生、私も前線の様子が見たいんでモニター回してもらえませんか？」

《わかったわ。クロスミラージュに直結するわ》

繋がれたモニターにはヴィータ副隊長、シグナム副隊長、朔さん、ザフィーラが次々とガジェットを破壊していく光景。

「副隊長達とザフィーラすごい！」

スバルは素直に驚いてるが私が感じたものは違う。

「これで能力リミッター付き……」

私なんかとは次元が違う。

「なんか言った？」

「何でもないわよ……」

次々と破壊していた副隊長達だがガジェットの動きが急に良くなり攻撃が決まりにくくなってきた。どうやら有人操作に切り替えられたみたいだ。

「遠隔召喚来ます！」

キャロが叫んだと同時にぞろぞろとガジェットが魔法陣から現れてきた。

ふん！ やってやるわよ。

ランスターの銃弾はどんな相手だろうが撃ち抜けるって証明してみせる！

side syo

「ん？動きが」

先程まで単純なビームを撃ってきていただけだったガジェットが急に朧の攻撃を避けはじめた。

『どうやら有人操作に切り替わったみたいだね』

「そうだな」

その理由にレインと朧はすぐ当たりを付ける。有人操作ともなれば少し面倒になるがそう言っても残りは既に一機のみ。

スピードを上げ一気に距離を縮め、左右で持つ双剣で切り伏せる。

「ここらは片付けた。シャマルさん次は？」

《近くに敵の召喚師がいると思うの。そっちを見つけて》

「ティアナ達は大丈夫なのか？」

「今ヴィータちゃんが向かってるわ」

「了解」

二人は召喚師を捜す為、空へ上がる。だが当然空から見えるのは

木々ばかりで召喚師などまるで見えない。

「レイン、やるぞ」

『OK』

「『ユニゾン・イン!』」

まばゆい光を撒き散らし現れる長い黒髪に黒いローブを翻す朧。もはや最近見慣れてきた女の子モードだがいつになると普通のユニゾン姿になるのだろうか。

「なんだか嫌な予感がするんだ。速攻で見つける。レインも演算処理頼むぞ」

《訓練以外でこれやるのも久しぶりだね。うん、任せて》

レインの返答を聞き朧は瞳を閉じる。そして、

### 封印解除

そう呟き再び瞳を開く。封印、と大それた事を口にしたが見た目はほとんど変わっていない。

一部を除いては、

瞳に魔力を集中させ辺りを見渡す。強化魔法により4kmもの距離をカバー出来るといっても木々が広がる森林の中にある召喚師を

サーチャーを扱えない朧に見付けだす事は普通、不可能に近い。

普通なら、

「見つけた。二人いる」

《うん、気をつけて》

見据えるのは現在地から3km弱の地点。木々の中を走ればそれなりの距離だが空からならすぐに迫れる距離。かなりの速度で一直線に接近を試みる。

だが、

激！

「っ！」

突貫気味に放たれた槍を剣で弾き返すが想定以上に重く鋭い斬戟に朧自身も弾き飛ばされた。

「何故我らの位置がわかった？」

仕掛けてきたのは鋭い目つきをし、依然構えをとかない毅然とした男。

《朧ちゃん、この人》

《ああ。相当やるぞ……》

男の隙のない佇まいからレインはかなりの実力者と推測する。また、朧も男の実力に動けずにいた。

「答えぬか。なら」

突！

槍から放たれるのは鋭い突き。狙いは左肩。その威力は当たれば骨を貫くであろうレベル。

戟！

身体を半歩右へずらし左右に持つ両の剣を使い受け流す。その仮定で散らす火花がその威力を物語る。

「はああああ！」

戟・戟・突・戟・突

「はっ！」

男の鋭く速い斬戟と突きの攻撃に朧は双剣を使い、持ち前の柔軟性と速さでギリギリのラインで防いでいく。

しかしそれも<sup>リミッター</sup>限度がある。

朧から視る男は恐らくS級の実力者。対し、朧はリミッターが設けられAAまでの出力しか出し切れない。

なら使えるもので状況を打開するしかない。

《ソードスフィア》

男の背後にレインの意思で生み出された七本の魔力剣が展開される。

「むー!」

「ショット!」

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

「はあっ!」

轟!

魔力弾に気付いた男は槍を力強く振るう事で全てのスフィアを振り伏せ、大きく距離をとる。

「良い騎士だ。名は?」

「相手に名前を聞くときは自分から名乗るもんだ」

《子供の持論だね》

互いに警戒しながら男は朧に名を聞こうと話し掛けたが、少し子供っぽい部分がある朧は本当に子供のような屁理屈をこね、レインに突っ込まれる。この二人、案外余裕があるのかと思わずにはいられない。



「そうだな、失礼した。      ゼストだ」

「浅儀朧とパートナーのレインだ」

ゼストと名乗ったその男は朧の名を聞いて一瞬、目を見開いたがすぐに戻り、

「そうか、お前が……」

「俺を知っているのか？」

何故だと言わんばかりの顔。それもそのはず、『黒衣の麗人』という人物はそれなりに名が通っているがそれが朧だとは世間一般的には知られていない。

そして朧はミッド辺りではそんなに目立った動きは見せていないはずなので『浅儀朧』という名が知れ渡る事などない。

「知人に聞いた程度だ。だが俺の知っている浅儀朧なら先の動き、合点がいく」

知人？なんだコイツは？一体俺の何を知っている。

そう思わずにはいられないゼストの発言、そしてゼストは朧の瞳を見据えながら言った。

「俺の動きが視えているのだろうか？その朱眼は」

朧の朱い瞳を見据えながら言った。

「《っ!?!》」

通常の朧の瞳は黒く、普段の彼を知っている者が今の朱い朧の瞳を見ると不思議に思うだろうが、ゼストは今初めて出会った人物。ましてや朧の眼の秘密を知っているはずがない。

「誰に聞いた……」

「知人だ」

あくまで知人を貫き通すゼスト。朧にとって知られていた所で別に構わない。ティアナ達に隠していたのも管理局の上層部からレアスキルと認定され特秘事項とされていたからである。

しかし、そのおかげか朧の眼の事を知る者は限られている。そのことより導き出せる答えは

《内通者……もしくは私達の知り合いって線もあるね。どっちにしても朧ちゃんの事まで網にかけられているってことだね……侮れない》

「ああ、だが今は、」

敵の情報網の広さに素直に感心するレイン。情報のリーク先が気になるが今は目の前の敵だ、と朧は剣を持つ手をぎゅっと握りなおす。

《時間も少ないし決めにいくよ》

「No.1、No.2 out No.3 open」

二刀を待機状態へと戻し、両手に西洋剣を握り締めゼストを見る。

「眼の事を知ってるなら分かっているんだろ。この“眼”が魔導師にとつて天敵だつて事が」

魔導師殺しのその朱眼がゼストを見据える。

「ああ、だが俺はルーテシアを守らなくてはならない」

「ルーテシア？召喚師の娘か？」

朔は先程視えた召喚師が女の子だった事を思い出した。

「そうだ。それに俺は魔導師ではない 騎士だ」

そう答えたゼストに朔は強い意志を感じた。

「そうか……ならそれを証明してみるんだな！！」

膨！

内から外へ、一気に魔力を放出し身体を乗せた一撃で突貫し、ゼストは防御の体勢に入る。

撃！

互いの得物がまるで悲鳴のように火花を散らす。

「っ！」

身体を乗せたと言っても体格にかなりの差があり魔力も十分に引き出せない状態の朧の突貫では一瞬の威力は高くともゼスト程の実力者に耐えられた後には僅かに隙が出来、それを逃すゼストではない。

「はああああああっ！！！」

轟！

防御の体勢からそのまま支えている槍を振るい朧を吹き飛ばすゼスト。

そのまま朧の方へと駆ける。

戟・突・突

吹き飛ばされ、反応が遅れる朧に対処は難しい。

「アート！」

それらの攻撃に対し朧は切り払いを西洋剣で受け止め、突きを首を傾げる事で避け、二度目の腹部を狙われた突きを新たに起動させた大剣を間に挟む事でそれを防いだ。

その動きはまるで全て視えているとでもいうかのように、

ゼストの突きにより大剣ごと飛ばされる朧。再びインターバルの時が訪れる。

「アンタ強すぎるよ」

「お前も良くやる。その眼を差し引いてもな」

「そりゃどうも……でも勝たせてもらっつ、よー！」

斬！

再び接近し下から上へ、斬り払うように剣を振るつ。

「はぁあっ！」

戟！

合わせるようにゼストも振るい、鏝ぜり合いの状態に入る。

「首謀者はスカリエツティか！？」

「俺達は俺達の為に行動するだけだ」

「何のために！？」

「お前には関係のない事だ」

蹴！

蹴りを放つゼストだが朧はそれを後ろへ跳ぶ事で難無く回避する。

しかしそれがゼストの狙い！間の空いた一瞬を狙い大技を繰り出す。

膨！

「フルドライ　ッ！」

魔力が膨れ上がり大技を放とうとしたゼストの表情に曇りがで、突如動きが止まった。

《朧ちゃん！》

朧とてこのような瞬間を逃さない！

走！

魔力で底上げされたその速度で素早く後ろへ回り込む。

「病か。悪く思っなよ」

朧はゼストにその声をかけ気絶させるため剣を振り下ろす。

だが、

膨！撃！

朱眼が感じ取った突如現れた巨大な魔力が凄い速度で迫り、朧の

剣は止められた。

~~~~~

〜れいんぼすと〜

レ「はい、『れいんぼすと』の時間だよ」

翔「なんだか最近ここのネタがなくなって来ている気がするからなんだけど」

レ「翔ちゃん、それは作者のアホに言ってよ。時間がないんだ、とか言つて尺を全然くれないんだから」

翔「全てはアイツが元凶つことか？」

レ「その通り」

翔「それじゃあ、今度アイツを痛め付けるとして、今日はゲストいるのか？まさか前回同様ないとが……」

レ「今回はちゃんといるよ。じゃあ早速呼んじゃうよ、ぶっぞ〜」

な「またお呼ばれしちゃった」

レ「今回は二回目の登場、なのはちゃんだね」

な「よろしくね、レイン、翔くん」

翔「今回は八つ当たりしないでくれよ」

な「にやはは、わかってるよ」

翔「怪しいところだが……まあいい。それじゃあ早速今話について触れていこう」

レ「今回の大きな展開って翔ちゃんの眼、なのかな？」

翔「だろうな。今までにもすごしだけ使ってるんだけど、まあ地味だしね」

な「能力はかなりズルイ感じがするけどね。本編でも魔導師殺しとか描写されてたし」

レ「その力は本編で確かめてね」

な「ゼストさんも今回戦闘に参加したけど、原作じゃまだ見つかってない場面だよな」

翔「俺が見つけたしな」

レ「作者曰く『ゼストと翔は是非とも闘わせてみたかった！ゼスト



カツコイイもん!!』だつて」

翔「確かにあのおっちゃんは格好よかつたな」

レ「自分を守る騎士……女の子なら誰しも一度は憧れるよね」

な「うん、うん。絶体絶命の時に颯爽せつそうと現れて 翔「友達だ」

そうそう、そう言っつてヴァイターちゃんから守つて、つて違つよ！  
それはA・Sの第一話のフェイトちゃんでしょ!？」

翔「でも場面的には大差ないじゃん」

な「そうだけど、やっぱりそういうのは男の子の方がいいつて言っ  
か……」

レ「ユーノくん？」

な「にゃ!?!?!/ノ/ユ、ユーノくんは違つよ!ユーノくんは大切な  
友達で恩人だよ!？」

翔「ユーノはどう思つてんだろうな？」

レ「さあね」

な「もうこの話はお終い!次にいくよ!?!/ノ/」

レ「次つて言つと……最後のアレ?」

な「うん。なんだか意味深に終わつちやつたけど」

翔「でもアレは次話で出てくるから今言う事もないんだよな」

レ「まあこれも次話をお楽しみに としか言えないね」

な「そっか、残念」

翔「なら今回はこれくらいでお開きかな」

レ「そうだね。なのはちゃん、今回はありがとね」

な「私も楽しかったよ」

レ「それじゃあ今回はこの辺で、」

レ・翔・な『次話にてお待ちしております!!!』

第十七話 朱い眼（後書き）

ゼスト格好いいです！！

昴の能力も少しずつ明かされてきました。

次回もバトります。

私も文字とバトります。

バイトがしんどい……

そんな私の力となるのが読者の皆様の声です！！

不平不満、意見質問、感想等お待ちしております！

では、次話にてお待ちしております！！！！

## 第十八話 黒ローブの女（前書き）

どうも、夕です！

なんとか間に合った……

バイトが入りまくりの上、書いている途中に少し路線を変更したら  
予定よりかなりの量になっちゃいました（笑）

今回は前回の続きでほぼバトル回なので楽しんでくれたら幸いです。

では、どうぞー！

## 第十八話 黒ローブの女

意識を欠き飛ばすために放った朧の一撃はゼストへとは届かない。

朧とゼストの間に入ってきたのは黒いローブの人物。

そのローブはユニゾン中の朧の物と酷似してるが、細部が所々違い、相手はフードを被っていて容姿を確認出来ない。朧は胸の膨らみから見て恐らくは女だろうと当たりをつける。

《エッチ》

自分の中にいるはずなのだがレインからジト目で言われた気がし思わず、だまらっしゃい！と叫びそうになるが生憎そんな空気が流れている訳がない。

朧の剣を止めているのは女が片手で持つ一振りの刀。片手で放ったと言ってもかなりの力を込めた西洋剣を折れず曲がらずで支えている日本刀。一体どれほどの強度を持っているのか。

ともあれ、このままではと考え、一旦後ろへ間合いを空ける。

「済まない。助かった」

ゼストが女に声をかけるとすっ、と女は森の方を腕を上げ指差す。その場所はルーテシアという召喚師の少女がいる方向。

「そうか、わかった」

おそろく念話で話したのだろう。

「済まない。俺との勝負はここまでだ」

ゼストは一度朧の方へ視線を向けた後森林の中へ戻って行く。

「待て　　っ！」

声を上げ、追おうとする朧の前に女が立ち塞がる。

「お前のような騎士とはまた闘ってみたいものだ」

そう言い残しゼストは去って行った。

「せっかくのチャンスを台なしにしゃがって、代わりにアンタが付  
き合ってくれるのか？」

挑発的な言い方をする朧に無言を貫き通す女。

《ごめん、レイン。この黒女、強い。お前にも負荷がかかるけど大  
丈夫か？》

《仕方ないよ。この人がどれだけ強いか私だつて解る……》

これまでの佇まいだけでわかる、彼女の實力に朧の額からじわり  
と冷汗が垂れる。

朧は両手で西洋剣のアートを構え、女は両手をダラリと下げ右手  
に刀を持っている状態。構えない構えというのか、彼女のその姿  
は妙に様になっている。

「アンタもゼストの仲間か？」

「……」

やはり女は何も答えない。

「話す事なんてないってか。なら……捕まえた後にたっぷり聞いてやるよ！」

閃！

蒼き魔力を纏いながら全速力で間合いを詰めての下から上へ振り抜くように一閃。その斬戟も刀一本で軽々と防がれる。

しかし、朔にとっても止められる事は先の事からも予想の範囲内。

駆！

閃！

一瞬だけ、かかる負荷を度外視し足に集中的に魔力を込め、素早く後ろに回り込み、相手の刀を持たない左側に一閃。

刀は届かない。今度こそ決まる。

戟！

「なっ！？」

止められた。

確かに刀は届かなかった。

一体何に？

「大鎌……だと……？」

左手で肩にかけるように携えられているソレはまるで死神の持ち物だと言われても納得してしまうような漆黒の鎌。ソレが朧の剣を防いでいる。右手にはまだ刀を持ったまま。

閃！

女はすぐにこちらに向き直り刀を振るう。

「ッ！？return！」

先程飛ばされた大剣を手中転移で右手に転移させ刀を防ぐ。

大剣を右手一本で持つ物ではないがそれによって、両者とも今両手が塞がり均衡状態。

《ソードスファイア》

レインが後方に展開させた十本の魔力剣。

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

剣の魔弾が女を襲う。手に加える力を強め女は朧を弾き飛ばし、後方へと距離をとりながら手に持つ二つの武器を待機状態に戻す。



徒手空拳となつた黒装束は今だ魔弾の射程内。

この間にも相手の行動パターンを幾つも頭に展開している。こういう見た目には見えない作業が昶をこれまで生き残らせてきた理由である。

昶は目を離さない。彼の朱眼が女の魔力を捉えている。

それは一瞬で起こつた。

爆！

展開されていた魔力弾がいきなり全て爆発、前方に爆風が吹き荒れる。

その原因を昶は理解出来ていた。

《魔力弾での迎撃だ》

《うん、私も昶ちゃんの眼を通して見えた》

《この爆風に紛れて突っ込むぞ》

《OK! No. 6 out》

考えが纏まるとすぐに大剣のアートを破棄し、両刃の西洋剣を強く握り爆風へと飛び込む為駆ける。

戟！

「なっ!？」

しかし、先に飛び込んできたのは女。その左右の手には二丁の銃が握られており、剗の剣と鏢ぜり合いの状態。

「ぐっ、神煉流壱式、蒼閃！」

戟!

距離をとる為に無理矢理振るった斬戟は対した威力は出せなかったが吹き飛ばす事には成功した。

弾!

「ッ!？」

しかし、敵もただでは転ばない。

女は吹き飛ばされたのではなく、自ら後ろへ跳び威力のない斬戟から更に威力を軽減させ、そのまま放たれた魔力弾が剣に着弾し、弾き飛ばされてしまう。

「レイン！」

《ソードサモナー》

擲・擲・擲

弾かれた右手はそのままに空いた左手で凍剣を投擲。単純に狙って投げた訳ではない。時間差を付けた避けにくい攻撃。

弾・弾・蹴

にもかかわらず、その凍剣も二本は魔弾による迎撃、そして最後の一本もムーンサルトの要領で放たれた蹴りにより砕かれた。

弾・弾

そのまま流れるように魔力弾が放たれる。

「アート！」

《No.1、No.2 open!》

その声に合わせるように現れる二刀の短剣。それを投擲。

質量を持つアートは二つの魔力弾を切り裂き、その延長上にいる女へと向かっていく。

だがそれも女は軽く避け、ローブを靡かせ朧の元へ駆けながら発砲。

それに合わせ朧も放たれる全ての魔弾を紙一重に避けながら接近する。

「神煉流伍式、碎覇あ！」

拳！

魔力を乗せた破壊の右拳は真っ直ぐ女へとぶ。

女にその拳を左手に持つ銃で受け流れ、流れにそうように懐に入っていく

膝蹴りが来る

不意にそう感じ、

「やらさ、ない！」

当たる寸前で左手を防御へと回しなんとか直撃は避ける。

「ぐっ！」

それでもかなりの威力を持つ膝蹴りに痛みを隠せずのにけ反ってしまう。

蹴！

「があっ！！？」

そんな体勢の朧に容赦ない回し蹴りが放たれ、木々に激突してしまふ。

「……」

砂埃が舞う場所を見下ろす女。その姿はまるでこの程度じゃないだろう？とも言うつかの様子でただただ朧を待っている。

その肝心の朧はと言つと、

「痛つゝゝ!?!?」

《ぶつかる直前にシールドでダメージを緩和させたけど大丈夫?》

《ああ、なんとか……助かったよ》

身体に至る所に擦り傷が出来ているがレインなしでは恐らくもつと酷くなっていただろう事が容易に想像出来る。

《にしても……》

《うん……あの人、強すぎる》

先程までの戦闘も端から見れば実力者同士の拮抗したものが、  
実際にどちらもかなりの実力者なのだが、  
に見えるが、そんな事は全くない。

単に彼女が自分から攻撃側に回らなかっただけ。その証拠に攻撃に転じ始めた彼女に勅達は手も足も出なかった。

《どうする……はやてに頼んでリミッター解除してもらうか?それとも増援を待つか?それも不安が付き纏うけど……》

リミッターの解除は二回しか出来ない。その内の一度をこんな早期に使ってしまうのは少々心苦しいが、それほどまでに敵との力の差を感じてしまっている。

ヴィータやシグナムの増援を呼んだとしても、勅には正直勝てるか五分五分と推測している。

ともあれ、どちらの選択を選ぶとしても通信を繋がないといけな  
いわけだが、

《でもさつきから誰とも連絡が取れない。どうも通信妨害されてる  
みたい》

《なんて用意周到な……》

敵側の準備の良さに思わず舌をまいてしまう。

《アレも今は完全封印中で使えない、裏技を使っちゃうか？》

《今使うのは流石にマズイよ。使うタイミングは慎重に決めなきゃ》

朔の案はすぐレインに却下される。

《それじゃあどうするんだよ？》

《妨害範囲は広いし、多分これを行ったのは召喚師の子だと思うけ  
ど、あの人がいたんじゃ近付けないし》

《なら誰かが気付いてくれるまで時間稼ぎって事か？》

《正解。流石にこっちのリミットまで掛かる事はないと思うから、  
厳しいけど頑張ろー！》

まるでゴールの見えないマラソンをするような気分になるが、そ  
うも言ってられない。

擲・擲

昗達は持久戦の覚悟を決め、凍剣を二本生み出し、牽制の意味を込め投擲。それも簡単に弾かれてしまうが。昗はゆっくりと空に上がって行く。

《今手元に残ってるデバイスは？》

《No.4からNo.6までだね》

《No.1からNo.3の場所は特定出来るか？》

《ダメ、サーチまで時間が掛かる》

《そっか……》

昗の魔法、手中転移は遠くにある自分のデバイスを自らの手元に手繰り寄せる便利な魔法だがその制限の中の一つに『デバイスの場所を認知』があり、このような場合サーチを行い、場所を特定しないといけないのだが、現在戦闘中の女性と闘いながらサーチするなど正直無謀もいいところなのだ。

「残りのアーツは持久戦向きじゃないし……ここが踏ん張り所だな」

《行くよー！》

昗は左右の指に挟むように計六つの凍剣を構える。

対する女は初めと同様にぶらりと両手を下げ、二丁の銃を持っている。

擲・擲・擲・擲・擲・擲

先に仕掛けるは剋、手にある全ての凍剣を投げ付ける。

弾・弾・弾・弾・弾・弾

相手は合わせるように六つの弾幕で対抗し、相殺。爆風により視界が遮られる。

その中から現れる一つの蒼い弾頭。

否、

それは魔力によりコーティングされた突き。

全体重を突き出された凍剣に乗せた剋の突貫。

魔力放出により強化された凍剣と自身を覆う蒼い魔力は着弾した魔弾を全て弾く。

それはさながらどんな防壁も貫く無敵の矛。

「神煉流参式、狼牙あ！」

突！

そう叫びながら突っ込んでいく。衝突まで後一秒もない。

とつた！



確信した。

確信したのだ。

一瞬見えた相手の口元を見て確信したのだ。

「ふふ」

ダメだ、と

笑みを浮かべていた女は瞬時にシールドを張った。ただ単純なシールドにAAランク並の障壁破壊の能力を持つ『狼牙』を止める事など出来ない。

火花が散る。

しかし、その矛は標的を捉える事が出来なかった。

彼女はシールドを傾けて展開しクッションとして使い、軌道をずらすことで見事に避けて見せたのだ。

《朧ちゃん！》

一撃の突破力が高く出の速い狼牙は先程の軌道をずらしたり、朧の纏った魔力量以上のカウンターと言った対処法があり、防がれた事は当然ある。だがそれを初見でここまで綺麗に見せた者はなかった。

朧の知り合いにいるバカ騎士だって初見は、血を流していたのだ。  
それを初見で見切られた事に動揺する朧だが女はそんな時間を与えない。

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

「くっ!？」

迫りくる魔弾を高速で避ける。

弾・弾・弾・弾・弾・弾

移動した先にも放たれる魔力弾。

「ちっ!」

擲・擲・擲・擲・擲

瞬時に凍剣を作り出し投擲し相殺。

瞬!

ソニックムーブの如きその速さで接近。

「はあああつ!」

蹴!

勢いをそのままに跳び蹴りを放つがシールドで阻まれる。

左右の剣による連載

(なんなんだ!?)

先程もあつた頭で明確にイメージされる敵の次なる一手。未来予知にも似たそのイメージに合わせるように凍剣を持って行く。

戟・戟・戟・戟・戟・戟

左右から放たれるの六連撃。イメージと違うのは剣戟ではなく銃による打撃だと言うことだけ。

どういう訳かはわからないが、とにかく防ぎきつた事は事実と頭を切り替え、再び凍剣での連載に移る。

だがその全ては綺麗に捌かれ、女は距離をとりながら発砲。二発の魔力弾を凍剣で対抗し、すぐさま六本の凍剣を作り投擲。

擲・弾・弾・擲・弾・擲・弾・擲・弾・擲・弾・擲・弾

魔力弾対凍剣の応酬。

女の銃口は二つ。柄が一度に持てる数は両手で六本。数では上回るが彼女の早打ち(クイックドロウ)はこちらの動作を上回っている。そしてティアナのクロスミラージュのようなカートリッジを装填する形を取らず、自らの魔力を吸収させて放つであるうソレに弾の装填時間がないので前弾からほぼノータイムで引き金が引かれる。

《徐々に押されてきてるよ!》

《こっちはこれが精一杯だよ!!》

力、技量、速度。何を取っても現在の朧を凌駕している。

何より、

《完全に遊ばれてるっ!》

徐々に押されてきている弾丸の撃ち合いも恐らく朧の弾丸数に合わせて撃ってきている。それだけでなく他の場面でも女が終わらせようと思えば、もう勝負が着いている。そして一番その事を連想させるのは、

殺る気がないのか？

彼女からは殺気が丸つきり欠けているのだ。まるでこちらの力量を計っているかのように。それゆえに持久戦が成立しているのだ。だがその終わりは突然やってくる。

「ッ!!!?!」

眼と頭に現れる激痛。思わず眼を閉じる。

《嘘、早い!?!》

レインの声が頭に響く。

時間切れ

それだけが頭を過ぎった。

《昗ちゃん！》

「ッ……？」

レインの必死の声に眼を開ける。飛んで来るのは魔力弾に加え槍

昗は他に意識を取られ反応が遅れた。

「くっ」

咄嗟に凍剣を魔力弾と相殺させるが、槍は間に合わない。

「うおおおっ！」

強引に身体を反らして回避を試みる。

「があア！」

しかし腹部に槍が刺さり凍剣を落としてしまっ。

「しまっ」

既に目の前には刀を構える女。

《昗ちゃん！》

斬

振り下ろされた刀は肉を斬り裂き、昗の体は血を流しながら森の

中に墜ちて行った。

s i d e s y a m a r u

ティアナのフレンドリーショットはなんとかヴィータちゃんが防いでくれた。

ガジェットも全て破壊して一応の騒ぎは収まったけど朧くんとレインとの連絡が取れない。あの二人なら大丈夫だろうけど何か嫌な予感がする。

「シゲナム。朧くんと連絡が取れないの。東側にいると思うからすぐにもっかっ」

トン、と何かが後ろに降り立った。すぐに振り向いて確認すると、  
「朧くん!？」

ユニゾンした姿の朧くんがBJを血で染めて黒いローブの女性に抱えられている。

「血止めはしてるわ」

そう答える女性から朧くんを受け取り寝かせ、すぐに治療を開始

する。

細かい切り傷は後回しにし先に正面からの刀傷と腹部の刺し傷を治療していく。傷は深いが幸い内臓に損傷はないみたいで、レインも気絶しているみたいなので大丈夫。彼女が血止めをしてくれたおかげで出血死はないけど重体には変わらない。

私はヘリで運ぶため、ヴァイスくんやテストタロットちゃんを呼び出し、来るまでの間も治療をし続ける。

「それじゃあ私は行くわね」

そう言っただけで彼女は飛び去ろうとしたが私は呼び止めた。

「ちょっと待って！話を聞きたいの、一緒に来てくれないかしら？」

こうなった経緯を聞かないといけない。

「ごめんなさいね。もう行かないといけないから」

背を向く彼女はもう飛び出とうとしている。

「ならせめてこれだけ教えて！誰が翔くんとレインを！？」

「私よ」

「え？」

「私が倒したのよ」

そう言っ て彼女は幾つもの疑問を残したまま飛び去った。

~~~~~

「れいんぽすと」

な「どうも、高町なのはです」

フ「こんにちは、フェイト・T・ハラオウンです」

は「八神はやてです、よろしく」

な「今回は私達が『れいんぽすと』の司会をさせてもらいます」

フ「本編の方では朧もレインも意識ないからね」

は「まあここは本編とは全く関係ない所やから、今も二人は舞台裏のコタツに入っ てのんびりミカンでも食べてるけどな」

フ「はやて、それ言っ ちゃダメなんじゃ……」

は「別にええんや、あの二人いつも出ずっ ぱりで卑怯やん。私達が



仕切る場でぐらい評判落とさなな」

な「そのはやてちゃんの発言の方が評判落ちそうだけど……」

は「そこは気にした負けや！なので、今回はこの六課美人隊長三人組で進行していくで！」

フ「び、美人だなんて／＼／」

な「自分で言つてて恥ずかしくないのかなあ？」

は「じゃあ、今話について触れていこか」

な「レインのスルースキル！？」

は「今回は完全に朧くんと謎の女性とのバトルやったな」

フ「うん、リミッター付きとはいえ朧を赤子扱いにする程の実力」

な「何者なんだろう？倒した相手をシャマルさんに治療させたり、ちよつと不可解な所もあるよね」

は「朧くんも言つとつたけど、作者曰く『胸の大きな女性だよ』と……だああああ胸か！？巨乳か！？やっぱし男は巨乳がええんか！？だから朧くんも巨乳のフェイトちゃんがええんか！？」

フ「ちよ、はやて！？いきなり何を言ってるの！？／＼／」

は「巨乳じゃないから私には男がおらんのか！？」

な「にやはは、私だってそんな人いないよ」

は「なのはちゃんはユーノくんと後一步でゴールインやんか！お互いが今一步踏み出されへんだけやんかあああああ！！」

な「にゃ！？／＼／」

フ「暴走してるのに的を得た事言ってる……」

は「それだけやない！他にも」

はやて暴走中……

は「すつきりや」

な「私はちよつと帰りたくなつたよ……」

フ「私も……」

は「何言ってるんねん二人とも、これから始まるって時に？」

な・フ『はあ……』

は「まあデカ乳女の事は置いて」

な「デカ乳……」

は「翔くんの新技が披露されたな」

フ「じゃあ、ちょっと解説するよ」

### 神煉流参式 狼牙

簡単に言えばもの凄い突き。魔力放出により強化された身体を剣に乗せ突貫する技。技の速く、発動時には自身が放った魔力が防壁となり脆弱な攻撃は弾き飛ばすうえ、Aランク並の防壁破壊の付加効力もある凡庸性の高い技。

しかしそれもより強力な攻撃カウンターや軌道をずらされる回避方には滅法弱いという弱点を持ち、初も基本的に同じ相手に二度使わない。

フ「こんな感じかな」

な「フェイトちゃんはこの技を受けたことがあるの？」

フ「私は五重のシールドを張ってなんとか耐えたかな。それでもB」にまで通されちゃったけど」

は「本編ではまた綺麗に防がれてたなあ」

な「ホント、凄いよ」

フ「私達もあの人と闘う事あるのかな？」

は「うん、出来ればご遠慮願いたいけど、作者次第やね」

な「闘う事になっても全力全快でやるだけだけどね」

は「流石になのはちゃん」

フ「それじゃあ今回はこの辺で終了かな」

な「そうだね。次話はどんな感じの話なんだろう？」

は「バトルはないみたいだな事を作者は言ってたわ」

フ「楽しみだね」

は「感想もお待ちしておりますのでよろしくお願いや」

な「意見や質問、」

フ「作者へのアドバイスやこんなのが見てみたい等どんな事でも構いません」

は「良ければ送ったってな」

な「では、」

な・フ・は『次話にてお待ちしております!!!』

第十八話 黒ローブの女（後書き）

どうでしたでしょうか？

少々わかりづらいかもしれませんが巨乳姉ちゃん凄い強いです（笑）

読んで『なんかおかしいぞ？』とかいうのがあれば言ってください。  
結構変なテンションで書いたので（笑）

あともしかしたら一、二週間休むかもしれません。

大学のテストが……レポートが……

一回生の内に頑張っておかないと（泣）

休むかどうかはまだ未定なので詳しくは数日中に活動報告に書きたいと思います。

個人的には凄く続きを書きたい……

ストック0はしんどいです（笑）

では、次話にてお待ちしております!!!

## 第十九話 罪（前書き）

諸君、私は帰ってきた!!

……何のネタかは忘れてしまいましたが、お久しぶりです!!どうも、夕です!!

いや、長かった苦悩の日々（テスト and レポート）に終わりを告げてようやく書き進める事ができます!!

長々も言うのもなんなのでこのへんで、

では、どろぞろ!!

## 第十九話 罪

interval

昔々の出来事。

とある村に一人の少年がいて、

少年は一人で、

母親は少年が物心付く前に病で倒れ父親も同時期に亡くなったと聞かされており、少年は実の両親の事を殆ど覚えていない。

覚えているのは小さい自分を抱きかかえ、少年の名前を呼び掛けてくれる優しそうな両親の姿だけ。

そんな彼を引き取ったのは村の一人の男。

その理由は単純明解。

ただ押し付けられただけ。

少年の生活はそこから変わった。

物置と言つ名の家に閉じ込められ、そこから出されるのは働かされる時だけ。

周りの大人や子供は忌み嫌い、名前なんて一度も呼ばれなかった。  
呼ばれるのはいつもオイ、オマエ、コイツ、忌見、疫病神、異端  
など侮蔑ばかりだった。

生きるってなんなの？

そんな事を考える毎日

自らに意思などなく

馬車馬のように働かされ

物置（暗闇）に放り込まれ

ただ時間だけが過ぎていく日常

けどその日々も簡単に終わりを告げた

勢いよく上がる火の手

次々と殺されていく村人達

大人も子供も皆殺されて残るのは少年一人

こちらに近付いてくる影



死ぬの？

恐怖がない、と言えば嘘かもしれないがそれでも、

別にいいや

そう想って目を閉じ死を受け入れる

そして少年は死んだ

そして生まれ変わった

手を差し延べられたあの時から

s i d e s y o

「JJJJは……」

見覚えのある天井。

朔が目を覚ましたのは六課の医務室。

「俺は……ッ!？」

起き上がるうとするのと体に痛みが走る。視界を下に向けるとそこには包帯がみっしりと体に巻かれていた。

「そついえばやられたんだっけ」

腹を槍で刺されて仕上げに刀で一閃。倒れても仕方ないな、と思っ

「……」

頭に出てくるのは自らを倒した女。

「なんでわからなかったッ……!」

脳内で再生される女の動き。それがあ人物の動きと重なる。

戦闘中の変なイメージもその為だ。

「いや違う……わかってたけど信じたくなかった、かな……」

わかっていた筈なのに

知らない振りをして

気づかないように

前を見なかった

「くそ……！」

知らず握り締めていた手から落ちた雫がベッドのシーツを赤く滲ませる。

会いたかった女

会えない筈の女

そして、

俺が殺した女

伽藍の病室で、静かにそう呟いた。

「そうですか、またアイツに心配を……」

「うん、流石に仕事があるから帰したけど。夜も付きっきりで看病してくれてたのよ」

目の覚めた朧が始めに会ったのはシャマル。目覚める前まではフエイトもいたようだ。

アグスタの件から既に二日経っており、その間朧はずっと眠っていた。

朧と共に意識を失ったレインはデバイスルームで治療中らしくあと一日程で復帰できるとのこと。

そして朧は今現在、死んでる 気を失っていたただけだが 間の出来事を聞いていた。

「これは危なかったですね」

「ホント、ヴィータちゃんが間に合ってくれてよかったわ」

今はシャマルと一緒にティアナのフレンドリーショットの記録を見ている。

「ティアナはどうしてるんですか？」

「反省したみたいよ？なのはちゃんと話もしたみたいだし」

「そうですか、と朧。

「でも、ティアナってたまにこう、無茶しますよね。他の子達より

も。危なっかしいと言っか」

「もう、翔くんが言える事じゃないでしょ」

「それは……あははは」

呆れ顔でため息を尽くシャマルと笑ってごまかす翔。シャマルに至ってはもう半分諦めも入っていきそうな感じである。

「ティアナのアレには理由があるのよ」

「理由？」

「ええ」

その内容はティアナの殉職した兄の事だった。エリートだった兄が犯人を取り逃がしてしまっただけでなく、その時に上司が「無能だ」とか「死んでも止めるべきだった」とかなんとか調子に乗った事を言っただけでなくその無能と言われたその任務を最後にして亡くなってしまうたとの事だった。

「ちっ……」

それを聞いて舌打ちする翔。自身も局員だということにも拘わらず元来、管理局という組織を嫌っている翔の内心でどれほどのモノが溜まっていて、何を思っているのか誰にもわからない。

「それでティアナは自分の兄は無能なんかじゃないと認めさせたいんですね」

「そういつことかしらね」

朧の質問を肯定するシャマル。朧もその考えはわかるが、

「焦ったってどうにもなんないだろ」

そう呟く朧。

「え？」

「なんでもないですよ。ほかには何もなかったんですか？」

「そうねえ、アートを探すのが手間だった事ぐらいかしら」

「すみませんでした……」

戦闘時に拾い損ねたアートは全部局員の皆さんがかき集めてくれたとの事でそれなりに大変だったようだ。それを聞いてしまうと局員も皆が悪い訳じゃないんだけどなあ、となんと自分本位に甘く考えてしまう。全くもって子供のような思考の持ち主な朧である。

「あと、こつちも聞きたい事があるんやけどええか？」

声のする方、扉の方へ振り向くと、はやてとフェイトが立っていた。

「もう大丈夫なの朧？」

「ああゴメン、心配かけたみたいだな。でももう大丈夫だよ」

「そう、よかった」

安堵し、ホッと一息尽くフェイト。その様子からも朧は随分心配をかけたんだろうと内心少し反省した。あくまでも内心で、だが。

「で、はやて。聞きたい事って?」

「この人の事や」

「……」

投影されたディスプレイに映っていたのはユニゾンして気を失った朧を抱えている黒装束の人物。

「直接会ったんはシャマルだけやけどこの人が朧くんを運んできてくれて、オマケに朧くんを倒したのは自分やって言っとったみたいやし」

「声からして女の人と思うんですけど」

「朧くんはこの女の人と知り合いなんか?」

はやては真っ直ぐ朧を見ながら聞いた。

「どうしてそう思うんだ?」

「質問を質問で返すんは止めてもらいたいんやけど」

省らかさないでほしい、はやての顔の真剣さがそう物語っている。

「あの時はそんな余裕なかったし、判らなかつたな」

なんでもなさそうに言う昶。そんな反応に対してはやはり、

「そっか、判らんかつたか……」

はやはり優秀な捜査官で昶の言っている意味を正しく理解している。

「あの人は誰なんや？」

昶は判らなかつたのだ、あの時“は”、

「……」

「昶くん。ここは組織や。私の言ってる事わかるやろ？」

「……」

昶の無言の答えにはやはり現実を突き付ける。組織の中じゃ個人の意思は通らない。

「少しだけでいいんだ。頭の中が混乱してて……少し整理をさせてくれ」

事実、昶自身も問題を先送りにして真実から目を背けているだけなのだ。

すぐに割り切れる程彼は物分かりの良い方じゃない。そこに目を当てる為にも時間がある……



「はやて、私からもお願い。少しだけでいいから時間を上げてほしい」

「フェイト……」

昴の身勝手な我が儘に付き合っつて、フェイトもはやてに頼んでくれている。フェイトだってあの女性が誰なのか知りたくない訳じゃない。

むしろ、昴をあんな目に遭わした相手を今すぐにも追いたいくらいなのだ。

それを見てはやては、はあ、と深くため息をつき、

「これじゃあなんか私が悪者みたいやんか」

そう口にし、

「少しだけやで?」

昴の我が儘を許してくれた。

「いいのか?」

「そう言うんやったら時間くれなんて言わんといてほしいわ」

「ゴメン」

「まあええよ。そのかわり、時間が経ったらきっちり教えてもらうぞっ」

そう言っではやては退出していき、シャマルもはやてと一緒に出て行き朔とフェイトだけが残された。

「ありがとな」

「誰にだって言いたくない事だつてあるよ」

「そう言ってくれると正直助かるよ」

そこから二人とも押し黙る。何を言えば言いのか、何を言っちゃダメなのか、何を言わないといけないのかがわからないから。

「……………判つてるんだろ？」

先に口を開いたのは朔だった。

「……………見当は着いてるよ。私はあの話聞いてたし」

それに、と朔に近付きながら続けるフェイト。

「それに、そんなに震えるなんて私にはそれくらいしか思い付かないよ」

「え……………？」

朔は震えていた。

それが歓喜でなのか、恐怖でなのか、または悲哀でなのかはわか

らないが、その身体は確かに震えていた。

「全部だよ」

フェイトはベッドに腰掛け、優しく言う。

「生きてることに歓喜して、交戦したことに悲哀して、再会する」  
とに恐怖してる」

「はは、そうかも、しれない」

震える声で、振り絞るように声を出す。

「でも、俺は、それだけの事を、したんだ。殺されたって、仕方ない」

殺したんだから

と、泣きそうな顔をして震える。

「違うよ、違うんだよ」

そんな子に今フェイトが言ってあげられる事はそれくらいで、出来る事は震え噤り泣く小さな男の子を抱きしめてあげる事だけだった。

それから朔の一週間はベッドの上だけの生活だった。出歩こうものなら隊長陣の説教数時間に加え、シャマルからの懇切丁寧な病状説明。

「いい？ 朔くん。確かに外傷は殆ど完治してきているわ。でも、無理に動いたら傷が開くし……………」

と長々と聞かされること約一時間。さすがに逃げ出す気も失せた。

あれから特に進展などなく、朔もお見舞いに来てくれた人達にも普段通り接している。

FW達やシャーリー、ヴァイスなどたくさんのお見舞いがやってきた。

ティアナが見舞いに来てくれた時に少し探りを入れてみた朔からはもう吹っ切れた様子だったが、それでも少し生き急いでる感じは否めなかった。

ヴァイスからも少し報告があつたのだ。

「スバルと二人で早朝訓練？」

「ああ、なんか見てらんなくて」

「止めたのか？」

「一応は……でも聞く耳持たずって感じで」

ため息混じりの答えからそれなりに重症だと受け取り、ヴァイスと共にどうすべきか頭を捻らせたり……

と、こんな感じに何かとイロイロあったりしたわけなのだが、

朧がなにより一番苦痛だったのはフェイトが来た時だ。

フェイトは自分の仕事が終わると朧の所にやって来て膨大な量の問題プリントを強制してきた。逃げれない朧にとっては心の休めなかつた一週間と言えよう。

それでも目覚めた初日以来、フェイトもいつも通りに朧と接しており、朧にとってそれは非常にありがたかつた。

そして落とされたもう一騎、レインはというと、もう復活しており朧の代わりにバリバリと仕事をこなしている。

はやては謎の女性について話した朧との会話をレインに話したが、

『朧ちゃんがそう言うなら私からは何も言えないよ。待つてあげて』

とだけ言い、全ては朧の気持ち待ち、という事となった。

「お前はわかってたのか？」

『必死に違うと思い込んでいたんだよ。たとえ無意識だとしても。そこは朧ちゃんも同じじゃない？』

仕事のついでに朧の見舞いに来たレインは、見舞いの品として置かれていたリンゴの上に座っている。

話の内容は当然彼女の事。

『私も混乱してるよ。話には聞いていたけど、やっぱり信じられなかったし。まさか死んだはずの人間が生きていて、その人に傷を負わされるなんて』

何故か助けしてくれたらしいけどね、と不思議そうになっているが淡々と口にする。

そのレインの姿は朧にとっていつもとは違うように見えた。

『二年間、“ミストラル”に戻って可能性を潰す為にもいろんなどこ回って行ったけど結局突き止められなかった……それは私や朧ちゃんの責任。二年かけて判らなかつた私達のせい』

他人からすれば二人に責任なんてないように思う内容。ただ単に知らない所で事が起こっただけなのだ。

それを彼らに言っても、

それは違う

そう答えるだろう。

迷いなく、一瞬で。

原因を作ったのは俺だ、私だ、と

殺したんだから、と

故に悩む。

簡単に答えは出せない。

でもね、

レインは朧の瞳をしっかりと見つめ、

『でもね、だからどうしたの？』

そう口にした。

「え……どういっ……」

目を見開き、あんぐりと開けた口で出せた言葉はそれだけ。

『まあ、生きてるとしてどういっ原理で生きてるか、なんて一年前くらいから私達も大方予測はつけてたし、今回現れた事で多分その予測で間違いないね。彼女が生きる理由が私達への復讐なのか、この世に未練があったのか、はたまた単なる暇潰しなのかは私にはわからないけど』

出される理由がだんだん小さくなっているが、そんな事をつつこむ空気ではない。

『でもね、もう一度言っよ』

目を閉じ、一呼吸置き、口にする。

だからどうした？

空気が変わった。

「ッ！」

翔は身震いした。



当てられているのだ、自らの相棒に。

殺気でもなんでも無い、純粹な言葉の重みに。

……レイ、ン？

肌がピリピリとするその感覚と目の前の小さなパートナーのただならぬ威圧感に飲み込まれる朔。

『浅儀朔、御身は何を望む』

発せられたその言葉に普段の気軽さは微塵もない。

『その身は今まで何を視て、何を聞き、何を想った』

一つ一つの言葉（剣）が胸を刺す。今の彼女にはさながら騎士のような気迫が籠っている。

『御身の芯にあるものはなんなのだ、主』マスター

翡翠色の瞳は視線をずらすことすら赦さない。

『どつするかなど遠の昔に決まっていよう』

そう、言い終えたレインは今一度瞳を閉じると、

『へへ、らしくなかったね』

普段のレインに戻っていた。

「い……今の、は……？」

レインが戻った事で身体が感じていた圧迫感が抜けた昶は息絶え絶えに声を出し、今も全身から汗が止まらない。

『ん、まだ内緒』

口元到人差し指を持って行きウインク。

答えはいつか教えてね、と微笑みながらレインは病室を後にした。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「みんなおつまたせ、帰ってきたよ！これからもよろしくね」

昶「えつと、作者の都合で長らく休んでいてすみませんでした。今回から漸く再会になりました。また作者共々精一杯頑張ってきた

いと思ってるのでまたよろしくお願いします!！」

レ「朧ちゃん固いよ」

朧「お前は軽すぎんだよ!こつこついう時はちゃんと丁寧に謝れ!」

レ「私と朧ちゃんですプラスマイナス0だよ」

朧「つたく……………ほどほどにしろよ」

レ「……………本編じゃすつかりヘタレてた癖に」

朧「さ、さゝて復活第一弾のぼすとは誰がゲストなんだ?」

レ「強引すぎる、0て〜ん」

朧「うう……………レインが虐める」

レ「はいはい、泣かないの。それじゃあ今回のゲスト、どうぞ!」

?「なんだかいきなり、相棒と同じヘタレ資質を持つ人がいますよ  
!」

?「初対面で失礼だろ!？」

レ「今回のゲストは【魔法少女リリカルなのはStrikerS  
WITH 2nd】より、第一ヘタレ世代のヘタレ王、神崎ウィズ  
と、世間はやっぱりデバイスの時代!真の主演アテナ、アナザーフ  
レームでの登場です!」

ウ「まてえええい！？その説明おかしいだろ！？」

ア「そうです！主役兼ヒロインです！」

ウ「そつちじゃねえ！主役は俺だし、ヘタレ王って！？」

レ「ヘタレキングの方がよかった？」

ウ「そういう意味じゃねえええええ！？」

ア「やりますね、レインさん。見事な切り返しです」

レ「翔ちゃんて鍛えてるもん。これくらい訳ないよ」

翔・ウ『お前らもつと主人を敬ええええええ！！』

レ・ア『イヤよ（です）』

翔・ウ『即答！？』

レ「だって……………」

ア「ねえ……………」

翔「なんだそのデバイス同士の共通見解みたいなの！？」

ウ「俺達の何に不満があるってんだよ！？」

ア「ヘタレ具合」

ウ「ぐっ！！？」

レ「書類が書けない」

翔「がつ！！？」

ア「夜が怖い」

ウ「ぐがつ！！？」

レ「女性に頭が上がらない」

翔「がぐっ！！？」

ア・レ「大半が黒星」

ウ・翔「がはあっ！！？」

ア「そちらも大変そうですね」

レ「お互いだね」

ア「でも、相棒もはやてさん達には全くです」

レ「それを言うなら翔ちゃんもお化け屋敷とか入れないよ」

翔「ちょ、レイン、それは！！？」

ウ「アテナもこれ以上は流石に俺も持たないよ！！？」

ア「大丈夫です！倒れても私が癒してあげますから！」

レ「アテナちゃんは優しいね」

ア「I love WITH ですから」

ウ「いや、どや顔だけど上手くないよ!？」

レ「私も朔ちゃんは好きだよ?.....面白いから」

朔「それ明らか褒めてないよね!？」

レ「それじゃあそろそろ本編に触れていこうか」

ア「そうですね」

ウ「見事なスルー!？」

朔「もつつつこむのは止めよう.....手玉に取られるだけだ.....」

ウ「そうだな.....」

ア「今話の内容は病室での話ですね」

レ「朔ちゃんが悩みまくってるね」

ウ「フェイ姉ってやっぱり気遣いが出来る女性だね」

朔「ああ、本当あいつには救われてるよ。今も昔も」

ウ「でも今回の見所ってやっぱり」

ア「ラストのレインさんですね。アレが相棒なら気絶モノですよ」

ウ「いや、そこはなんとか頑張っ……ムリか？」

翔「ホント、俺も気絶してもおかしくなかったよ」

レ「ちょっと大人げなかったね」

ウ「そんなレベルじゃなかったんじゃないか……？」

ア「アレは一体なんだったんですか？」

レ「ひ・み・つ、だよ」

ア「まあとにかくアレです。世の中やっぱりデバイスが一番と云うことです！」

ウ「何故そこでそうなる!？」

ア「だっていくら翔さんが背が低いと言ってもレインさんはその何分の1と思ってるんですか？そんな方が圧倒しているんですよ？いくら背がちっさいからと言っても」

翔「身長は関係ないだろ!？」

ア「いえ、大事な事なので2回言いました！」

翔「俺はこれから伸びるの!!!」

レ「ウイズくんは今19だよね？」

ウ「ああ、でもそれが？」

レ「同じ年齢の男の子にまた身長負けたね、翔ちゃん」

翔「負けてない！」

レ「でも第一期に公表されたウイズくんのプロフィールには『なのはちゃんと同じくらい』ってあるよ？翔ちゃんなのはちゃんに身長負けてるじゃん」

翔「ぐらいだろ！？まだ決まってない！」

ア「なら今確かめましょうか？相棒、翔さん、こちらに。ちゃんと背筋を伸ばして下さいね」

レ「はい、翔ちゃん背伸びしない」

翔「くっ……」

ウ「どうだ？」

ア「はい、相棒の方が普通に高いですね 数センチ差があります」

翔「グリフィスやヴァイスだけでなくウイズにまで……ふん、いいんだ……俺は20を越えた辺りから急激に伸びるタイプなんだ……きつとそうなんだ……」





レ・ア『私のマスターだからね（ですから）』

ア「おやおや、レインさんもやはり翔さんloveなんですね？」

レ「べ、べつにloveなんかじゃないし、私は翔ちゃんと長い付き合いだからわかるだけ！」

ア「ティアナさん程ではありませんが、ツンデレ素質を持っていますね」

レ「私は普通よ！」

ア「認めてしまった方が楽ですよ、よく言うでしょ？イヤよイヤよも好きのうち、早くゲロツちやいましてよ！」

レ「ア・テ・ナ？それくらいにしとこうね？」

ア「こんなところでレインさんの威圧感モードを発動させるわけにはいきませんし、ここらが潮時みたいですね」

レ「物分かりがよくて助かるわ」

翔「そろそろ戻らないとな」

ウ「気にしても仕方ないし」

レ「戻った？それじゃあそろそろ締めるよ」

翔「え？もう!？」

ウ「俺殆どツツコミしかしてないような……」

レ「まあ主演は」

ア「私達デバイスですからね！」

翔「いや、違うよ！？タイトルにも俺やウイズの名前が入ってるからね！？」

レ「タイトルに名前が入ってるからって主演とは限らないよ翔ちゃん」

ア「下剋上の世の中ですからね」

レ「デステイニーだってフリーダムに主演交代させられたでしょ？」

翔「ガ○ダムを持ってくるな！あれは少々特殊なんだよ！！」

レ「あれこそガン○ム無双だよね」

翔「否定はしない！でも個人的に作者はあのシリーズからガンダ○に入ったらしい！」

レ「それじゃあ、ゲストにそれぞれ一言もらおうかな」

翔「ここで巧みなスルースキル！？」

レ「じゃあアテナちゃんからどうぞ」

ア「今回はレインさんと有意義な時間が過ごせました。ついでにへ

タレ資質を持つ朧さんとも出会えましたし、………相棒には敵い  
ませんが」

朧「ついで!?!」

ウ「俺一体どれだけヘタレと思われてんだよ!?!」

レ「じゃあ次、ウイズくんどうぞ」

ウ「………なんだか不遇な扱いを受けた気がするけど似たような  
境遇を受ける朧と会えて『なんか頑張ろう』って思えたよ。まあ、  
呼んでくれてありがとう」

朧「俺も勇気をもらえたよ。ヘタレ王」

ウ「お前までそう呼ぶか、ちびっこ!」

朧「ちびって言うなああああ!?!」

ウ「王じゃねええええ!?!?」

レ「あゝあ、次は殴り合いが始まっちゃった。でも自分でヘタレは  
認めるんだ?」

ア「本編でも認めましたしね」

レ「今回はありがとうね、アテナちゃん」

ア「いえいえ、私の方も呼んで頂いて楽しかったです」

レ「それでは、」

レ・ア『次話にてお待ちしております!!--!!』

翔・ウ『こっちは終わってねええええええええええッ!--!!』

## 第十九話 罪（後書き）

どうでしたか？

八神煌斗さん！

ウィズとアテナをお貸しいただきありがとうございました！！

ちゃんとキャラが活かせてたでしょうか？

不備があれば言ってください。

そして、本編

朧のうじうじタイムが発動されました（笑）

まあ、続きはお楽しみに。

これからはまた今まで同様一週間以内で上げていきたいと思っ  
てます！！！！

どうか、これからも応援よろしくお願いします！！！！

感想や、些細な質問などなんでも受け付けているのでそちらもよろ  
しく（笑）

では、次話にてお待ちしております！！！！

## 第二十話 想い、悩み、苦しむ（前書き）

どうも、夕です！

いや〜マイソロ<sub>3</sub>がおもしろすぎて、他に手がつかない（笑）

もう少しでクリアできる所までようやくいけました。

エミルつええええええ！！？

マルタのメガネスキット、あれ考えた人そつとウドSでしょうね W

W  
W

さて、それでは本編をどうぞ！！！！

## 第二十話 想い、悩み、苦しむ

あれからまた数日が経ち、朧もすっかり通常シフトに戻った。

食堂では朝練上がりのFW達が朝食を取っており、リハビリがてら早朝訓練に参加していた朧の姿もある。

みんなそれぞれ談笑しながら食べているが朧一人は終始その輪に入らず、食事もあり進んでいない。

先程からマカロニを突いてばかりで、完全に心そこにあらずの状態。

「朧くん？」

「……………」

見かねたなのはが声をかけるが、考え事をしている朧にはその声が届かない。

「朧くん」

「……………」

御身は何を臨む

どうするかなど遠に決まっていよう



レインの言葉が頭から離れない。

何を臨む？遠に決まっていよう？

わからない

昔と今では違う。

生きる屍だった時があった。

救われた優しい時があった。

絶望し、傀儡に生きる時があった。

諦めの悪い優しい女の子に敗れた時があった。

人生のターニングポイントが人並み以上にある朧にはレインが何  
時のことを言っているのかわからない。

俺は今まで何をしてきたんだ？

ワカラナイ……

俺は一体何をしたいんだ？

ワカラナイ

俺はあいつをどうしたいんだ？

ワカラナイッ！

「翔くん！！」

「えっ！？」

いくら呼んでも反応しない翔に痺れを切らし、声を荒げたなのは。

「何回呼んだと思ってるの！？」

「ゴメン、ちょっと考え事してて」

「最近ずっとそんなだぞ。曲がりなりにも副隊長なんだ。もっとし  
っかりしろ」

同席していたヴィータも厳しい事を言うが翔を見る瞳は心配だ、  
と語っている。

「ああ、ゴメン。もっとしっかりしないと」

パンツと頬を叩き自らに気合いを入れる。

「そついえば明日って模擬戦だったっけ？」

ふと思い出したように言った。

「うん、スターズとライトニングに分けてね」

「両方ともなのはが相手するのか？」

「そうだけど」

当然！と答える戦技教導官。

「でもなのは殆ど出ずっぱりだろ？代わりに俺がやるよ」

朝から晩まで新人の訓練でそのあとメニューを組んだり、とな  
のはには休息の時間が殆どないのだ。

それゆえに進言した朧なのだが、

『却下』

その提案はなのは、ヴィータ両方に一瞬で否決された。

「心配してくれるのは嬉しいけど朧くんまだ病み上がりでしょ？」

「それにボケっとしてるお前なんか任せらんねえよ。お前がやる  
くらいなら私がやる」

全くの正論にぐうの音も出ない朧。

「わかった。明日は見学に戻るよ」

苦笑いしながら了承する。

でも

先までとは一辺、少し真剣な目つきに二人とも食事の手を止める。

「ティアナの事なんだけど」

「ティアナ？この間のフレンドリーショットの事かな？」

なのはが思い当たったのはアグスタでの出来事。

「いや、それについてはなのはが話したんだろ？俺が気にしてるのはその後の事だよ」

「それって、アレか？朝練前とかにスバルと一緒に自主トレしてるっていう」

そう言いながらヴィータが向く方向には新人達が食事をとっており、もちろん議題に挙がった二人の姿もあった。

「ああ、正直なのはの教導ってキツイだろ？」

「自分でやらせといて言うのもなんだけど確かにね」

「やはは、と頭をかくのは。」

「でも、別に強くなりてえっていう若手の魔導師にはよくある事だろ？……まあティアナなら特に」

最後の方が歯切れが悪い。

ヴィータもティアナの過去については聞いている為そんな感じになっってしまう。

「それはわかってるんだけど、多分不安なんじゃないかと思うんだ」  
翔はなのは達に自分の考えを話した。

その内容はなのはの訓練は基礎固めを最初に行っている為に自身に力が付いている実感が少ないのではないか？ということだった。

「俺もそういう頃があったから思うんだけど、訓練の内容と密度が濃いのになんで？って、この間の事が引き金にその想いも強くなってるんじゃないかな？」

自分の事で思い悩んでいる癖にここまで他人を気遣うのはもはやお人よしを通り越してただのバカだ。

最も、自分の事から目を反らしたいただけかもしれないが、

「確かに、そうかもな」

ヴィータもその考えには一理あると納得する。

「ああいう真面目で危うい新人達だから基礎をみっちり教えるのは当然だよな。なのはがどういう想いなのかも知ってるし」

「翔くん……」

なのはには彼女の大切な信念がある。翔にソレをどうこう言う資格なんてこれっぽっちもありはしない。

「だからティアナ達にどういう考えで教えてるのかって言うのを話してあげたら良いんじゃないかな？」

けどそれについて共に考えてあげる事は出来る。

だから昗は提案した。

「ヴァイスからたまに聞くんだけどさ、ちょっと不安なんだ。だから模擬戦が始まる前に」

何か不安に感じてしまう。

自分のモチベーションが悪いからだけかもしれないが、昗はそう感じてしまう。

不安は不安を呼び寄せる

アグスタでも起こったのだ。打てる手は打っておいていいだろう、との考えだ。

「うん、ありがとう昗くん」

お礼を言うのは、

「けど大丈夫だよ。ティアナは賢い子だから。きっとわかってくれるよ」

にこやかにそう言うのはに昗は、

「ならいいけど……」

と、そう言うしかなかった。

その夜、気分転換に昗は散歩に出た。

しかし、外に出た所で考える事は変わらない。

考えれば考える程にわからなくなっていく自分のふがいなさにため息ばかりが漏れる。

……時間の経過に気付かない程に

「ヤバツ！？もうこんな時間！」

こんなに焦る理由はフェイトが部屋に来るからだ。

勿論、女の子が来るからと言ってキャツキャウフフなんて事はない。そんな度胸昗にはない。

勉強会の時間が迫っているのだ。

当然フェイトに妥協はない。遅れば遅れるだけ時間が引き延ばされる。

知らないうちに遠くまで来てしまっていた昗は全速力で戻っていたが、視界の隅に人影を見え立ち止まった。

「ティアナ、なにやってんだ？」

「朧さん、どうしたんですか？」

「俺はただの散歩だけど、お前は……」

ティアナの服装は訓練服で手にはクロスミラージュ、辺りには射撃訓練用の的。何をやっていたかなど一目瞭然。

朧ま話に聞いていただけで直に見るのは初めてだった。

「最近スバルと二人で朝練の前にもこんなことやってるんだろ？」

「……知ってたんですか？」

少し、驚くティアナ。

いつもの朧なら気付くかもしれないが今の上の空の状態では気付いていないと思ったのだろう。

朧自身はいつも通り振る舞っているつもりだが、そう思っているのは自分だけだったりする。

「ヴァイスに聞いたんだよ。お前が無茶やってるってな」

「凡人の私は人より頑張らないといけませんから」

やっぱり自信が持てないってことか、と朧は結論づける。

「俺から言わせればティアナも十分優秀と思うけどな」



「……ヴァイス陸曹と同じ事言っんですね」

目を細め、少し朧を睨むティアナ。

「皆がそう思ってるって事だよ」

「……お世辞は結構です」

「お世辞じゃないってのに……とにかく、明日も早いんだし早く寝るよ」

「もう少ししたら上がりますから」

「そうか……」

これ以上はムダだと感じ隊舎へ踵を返す。戻る途中、朧は自主練に勤しむティアナをもう一度だけ見つめる。

「失ってからじゃ遅いんだ……」

誰に届くわけでもないその言葉はティアナに宛てたものなのか、それとも……

ちなみに勉強の事をころっと忘れていた昶はこのあとフェイトによって机に縛り付けられた事はまた別の話。

次の日、訓練もいつも通り進み、午前中は残り模擬戦を残すのみになっている。

スターズから始める為エリオとキャロは昶やヴィータ、シグナムと共にモニターの前で見学している。

「もう模擬戦始まっちゃってる？」

『デスクワークの方がちょっと長引いちゃった』

そこに遅れてファイトとレインがやってきた。レインの服装はいつも通りの着物でフェイトは昶達と同じ訓練着。

「本当は私が模擬戦の相手をしようと思ったんだけどね」

昶やエリオ達の隣に付きながらそう言うフェイトの表情は少し不安げ。

「今はスターズの番だよ」

「スターズの方も私が引き受けようと思ったんだよ」

「俺も昨日同じ事言ったら即効拒否された」

『当たり前でしょ。今は人の心配より自分の心配をしなさい』

レインは少し怒ったように言い付ける。言わずもがな、それは朔以外のここにいる誰ものが通見解のようで全員が頷いて見せた。

それをただ苦笑いで返す事しか出来ない朔。

「でも実際、なのはもここんとこ訓練密度が濃いからな。少し休ませないといけねえんだがな」

副隊長として、同僚として、なにより一人の友人として、ヴィータは自身の隊長の健康を気遣う。

「だから、俺が変わろうと」しつこい！……はい」

全く反省していない朔に怒鳴り黙らせるレイン、フェイト、ヴィータ。

「お前達はもう少し黙って見られないのか？」

『……すみません（すまねえ）』

今まで黙っていたシグナムの鶴の一声で縮こまる四人。

少し変な空気が流れ、その空気を断ち切るようにエリオが声をだす。

「あ、クロスシフトみたいですよ」

皆、声に合わせるように再び模擬戦へと集中する。

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

ティアナの繰り出す十数個の魔力弾が空へと浮かぶのはへと狙いを定め、飛んでいくが、

「ん？なんだかキレがねえな」

そう言ったのはヴィータ。部隊の中ではなのはについて、二番目に長く新人達を見てきている彼女にとってそれはすぐに感じ取れた。

「コントロールは良いみたいだけど……」

魔力弾の動きを見る限り、キレがない分コントロールを重視していると思わなくもない。

「それにしたって……」

納得が行かない、そんな顔をするヴィータだが、そんな外野の事などお構いなしに試合は続く。

弾を交わし続けるなのは。ティアナの目的はあくまで誘導。それを知ってか知らずか、誘導されてきたなのはの背後に伸びるウイングロード。

スバルが接近するのも見える。

「あれ実体だよな？」

『うん』

「何考えてんだあのバカ！？」

確認する昴に肯定するレイン。ヴィータに至ってはスバルの行動にお怒りの様子。

それもそのはず。

まだ少し距離が開いていてなのはにも気づかれている危険な位置。普段の二人ならここは幻影で対処する場面だ。

弾・弾・弾・弾・弾・弾

その証拠になのはのアクセルシューターがスバルへと打ち出される。

スバルはそれを掠りながらも避けつつ接近を試みる。

「あんな避け方教えたの？」

「あんな事教えてねえ」

昴がヴィータに聞いてみるがすでにかなりご立腹のよう。

拳

なんとか繰り出したスバルの拳をなのははレイジングハートで難無く防ぐ。

スバルはそのまま一撃離脱で離れていく。

なのはが何やら叫んでいるがあいにく昗達のいる所までは何を言っているのかは届かない。

「まあ何か考えがあるんだろ、ティアナがいないし」

辺りを見渡しながら言う昗。魔力弾を撃つてからのティアナの姿が見えないのだ。

「どこだろう?」

「あれじゃないか?」

昗の指差す先にはオレンジの光が輝く。

『おー、これは……』

「ティアナが砲撃!？」

レインとフェイトだけでなく、見ている皆が驚きの表情を浮かべている。

シグナムでさえ眉がピクリと動いていた。

「スバルさんもまた行きますよ!」

エリオの声が響く。

先程と同じ光景、スバルは彼女へと向かっていく弾幕をどうにか避けながら突き進んでいく。

しかし今回はスバルだけが標的だけでなく桜色の弾はティアナもその対象へと含まれている。

拳

放たれたスバルの拳はまたもなのはに防がれ、魔力弾もティアナへと着弾

「あつちのティアナさんも幻影!？」

「じゃあ本体は!？」

スバルの拳もティアナの砲撃も全て陽動。そこから狙われる本命は、

「あそこ!」

フェイトの声に皆反応する。

その視線の先にはウィングロードはなのはの頭上にまで延びており、その上を駆けるティアナの姿。

そのまま青い帯を駆け上がり、重力に従いながら落下していく。

ティアナの持つクロスミラージュの先端からは魔力刃が展開されている。

爆

狙いはバリア破壊、接触した辺りに爆煙が上がり周辺の視界が遮られる。

その余波は朧達の所まで届いている。

「な、なのは!?!」

『なのはちゃんなら防いでるんじゃない?』

ティアナの無茶な突貫に少し焦りながら安否を心配するフェイトに、朧の頭でくつろぎながら見ていたレインは当然のように言う。

「ああ、ちゃんと抑えてたよ」

部分強化で視力を底上げしていた朧は彼女らの疑問に答える。

「抑えてたよ……」

悲しげな顔をしながら、

煙が徐々に晴れる。



「……おかしいな……二人とも……どうしちゃたのかな……？」

攻撃を放った二人は驚きで声が出ない。

視界の先にはなのはが片手でリボルバーナックルを受け止め、もう片方でクロスミラーージュから出ている魔力刃を掴んでいる光景が広がっていた。

「がんばってるのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ……」

いつものなのはからはまるで考えられない空気。それは彼女の静かな怒りか、悲しみか。

「練習の時だけ言うこと聞いてる振りして、本番でこんな無茶するんじゃない……練習の意味……ないよね？」

魔力刃を掴んでいるなのはの手からは血が流れ出している。

ティアナは震える。訓練とはいえ、傷付けてしまった事を、血を流させてしまった事を。

「ちやんとさ……練習通りやろうよ……私の言ってること……私の訓練……そんなに間違ってる？」

顔を上げたなのはと視線が合うティアナ。ティアナは震え、目を見開き、目を合わせることが出来ない。

彼女は魔力刃を解除して距離を取り、構える。

「私はもう！誰も傷つけないから！！」

涙を流しながら構えるクロスミラージュからは魔法陣が展開される。

「失いたくないから！！」

それは、

「だから！強くなりたいんです！！」

嘘偽りない、心の叫び。

それを聞いたなのはは、ゆっくりと腕を上げ、ティアナを指差す。

「少し……頭、冷やそっか……」

クロスファイア

桜色の魔力が人差し指に集まっていく。

「うわああああ！！ファントムブレ」

叫んだその名が言い切る前に、

シュート

爆！

桜色の魔弾がティアナを襲い、爆発した。

「ティア！ ツ！？バインド！？」

反射的にティアナへと駆け寄ろうとしたスバルはバインドで拘束される。

「よく見てなさい……」

なのはが示す先には虚ろな状態のティアナ。  
そして今まさに二発目が放たれようとしている。

「なのはさん！？」

スバルの叫びは虚しく、放たれたクロスファイアはティアナへと向かい、

爆！

爆発した。

「ティア！？」

再び叫ぶスバル。

爆煙でティアナが確認できない。

あのフラフラな状態で避ける、防ぐ事など出来ない。

徐々に晴れた煙の向こうでは、

「朧さん!」

長い黒髪をなびかせる朱眼の朧の姿があった。

~~~~~

「れいんぽすと」

レ「さて、それじゃあ今回はゲストもない事だしいきなり本編に  
触れちゃおつか?」

朧「いきなりだな……、まあいいけど。今回はアレだな。巷で噂の  
魔王降「……もとい、なのはのアレな話だな」

レ「それ……言い直した意味あるの?」

朧「ある……と思いたい……」

レ「まあそれは置いて、このシーン作者は当初から展開は決めて  
いたんだって」

翔「最後に俺らが出て行ったアレだろ？」

レ「うん、ちゃんとユニゾンして防いでるんだよ」

翔「まあこれで次の話がだいたい予想つくよな」

レ「負け癖男vsエースオブエースだね！」

翔「嫌な言い方するなよ!？」

レ「でも事実だよ?」

翔「うっ!？」

レ「まあどんな展開になるかはお楽しみみて事だね」

翔「俺はあんまり闘いたくないんだけどね」

レ「自分で飛び出しといて?」

翔「それは……まあ……あはははは……」

レ「はあ、都合が悪くなるといつもそうなんだから……」

翔「ほ、他はどこか見所はないのか?」

レ「強引……まあいいけど、見所?そうねえ……翔ちゃんが悩みながらもなのはちゃんやヴィータちゃんと話しているとくぐらいじゃない?翔ちゃんの目ざとさがよく出てると思っよ?」

翔「もつと言い方を考えようよ!？」

レ「自身の問題からの目の反らし方のつまさ?」

翔「なお悪いわ!？」

レ「事実なのに」

翔「うっさい!俺にとって大変な問題なの!」

レ「わかってるよ。私は翔ちゃんがゆっくりでも自分で考えてくれる方が嬉しいからね」

翔「あ、ありがとう……」

レ「べ、別に本心を言ったただけだし、感謝される事じゃないわ!」

翔「で、でも嬉しかったから」

レ「ふ、ふん!もう今日はこれで終了!早く終わるよ!」

翔「あ、ああ、それじゃあ今回はこの辺で、感想等もお待ちしております!」

レ「では、」

翔・レ『次話にてお待ちしております!』

## 第二十話 想い、悩み、苦しむ（後書き）

どうでしたか？

少々詰め込み過ぎた感じがしますが……

魔王 降臨 （笑）

この話が原作になければここまで魔王とは言われなかったのでは……と、思わずにはいられません。

次話は『れいんぼすと』でも言ったように、翔vsなのはです！

見せてもらおうか、オーバーSランク同士の戦闘とやらを（笑）

リミッター付きですがwww

では、次話にてお待ちしております……！！

## 第二十一話 言葉（前書き）

どうも、最近ISのシャルの可愛さにやられている夕です！

今回の話は正直、凄く難しかったです！

言いたいこと、伝えたい事がきちんと書けているか？

ちゃんと戦闘出来ているか？

いつも以上に悩みました。

その上で仕上げた一話です。

では、どうぞ！……！



## 第二十一話 言葉

「裁判が終わるまではちょっと大変だけど我慢してね」

ある次元航行船の中のある一室。

黒い制服に身を包んだ金髪の女の子はベッドに座る少年にすまな  
さそうに言った。

少年はあまり喋らない。

彼女にはある程度気を許しているみたいなのだが他の人には必要  
最低限にしか口を開かない。

彼女が相棒のユニゾンデバイスに聞いた内容では昔はそうでもな  
かったらしいのだが、ここ一年で口数が激減したとの事だ。

少々人間不信に陥っているようで、『多めに見てあげてね』と  
は彼の相棒である着物少女談。

多少不安だが、まずは目先の裁判の為に行動しなければならない。

「（まあ、執行猶予は取れると思うけど）」

少年は単に騙されていただけで……まあ行き過ぎた公務執行妨害  
ではあるがやられた局員の命に別状はないので大丈夫だろう。

などなど考えていると、

「……聞いてもいいか？」

無口な少年が話しかけてきたのだ。

「どっしたの？」

「……なんで俺を助けたんだ？一度負かされた相手に何度も問い掛けて……」

彼女は一度少年に敗北している。そして彼は彼女の言葉を何度も拒絶してきたのだ。少年が不思議に思っても仕方がない。

「前に言った事あるよね？君の在り方が昔の私と似てるって」

少年の隣に腰掛けながら女の子は語ってゆく。

「私も昔そうやって助けてもらったの」

彼女の中であの頃の思い出が再生されていく。

「同い年の女の子なんだけどね、聞く耳持たずだった私に、ぶつかり合いながらも何度でも話しかけて、問い掛けてくれて」

その顔は、

「言ってくれたんだ、友達になりたいんだって」

その声は、

「そこから始まったんだ、私の人生」

懐かしむようで、

「その時、言葉にする事って大切なんだって気づけたんだよ。言葉にしなきゃ伝わらない事もあるからね。だから私も君に問い掛けたんだよ」

嬉しそうだった。

なのはの放った攻撃はティアナに届かなかった。

「翔……さん……」

虚いながらも、ぼやけて見える姿は黒い長髪の後ろ姿。

「いいから寝てろ」

顔だけをティアナの方へ向け、優しく言う。

その時ティアナの瞳に映ったのは、

「あかい……眼……？」

そう呟き、彼女の意識は遠退いていった。

「朧さん……その眼は……？」

なのはの隣でバインドを掛けられているスバルからははっきりと見える。

気を失っているティアナを抱えている姿はいつもの朧。黒い髪に黒いローブ、背もスバルよりやや高めなだけといつもと全く変わらない。

しかしそこだけが違う。

朱い瞳だけが。

「スバル、動かないでじっとしてろよ」

「え、あ、はい」

朧の手には魔力で編まれた凍りの剣が携えられる。

擲

「ッ……!？」

投擲された凍剣は一直線に進んで行き、スバルを拘束するバインドに直撃した。

「え………？」

スバルは驚いた。

自身に剣を投げられた事もそうだが、なによりその剣がバインドを掻き消した事にだ。

「これは………」

「説明は後だ。ティアナを連れてシャマルさんの所へ行ってきたくれ、俺はなのはと話があるから」

そう言い、昗はスバルにティアナを預け、二人が離れていくのを確認する。

「最後のアレは明らかオーバキルだろ」

再びなのはの方へ向き直り、言う。

「どづいうことなの昗くん………なんで私の教導の邪魔をするの？」

トーンの低い声が響く。

一触即発、まさにそんな空気が流れている。

「あれは教導なんかじゃねえよ」

「昗くんは何がわかるの？」

「さあね、俺は教えるの苦手だから」

「そう……なら口を挟まないでくれるかな？」

互いに一步も引く気はなく、なのははレイジングハートを構え、  
朧もアートの二振りの短剣を展開させている。

「言っとくけど、今のなのはに負ける気はしないぞ」

「奇遇だね、私もだよ」

疾！

どちらからでもない、二人は同時に駆ける。

『アクセセルシューター』

「シュート！」

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・  
弾・弾

レイジングハートより発せられた声により出現した十数個の誘導  
追尾型魔力弾が朧を襲う。

しかし朧はそれらに目もくれずある時は避け、ある時は弾いてい  
く。

「お前の教導はあんなもんなのか!？」

「そうだよ！？だったらどうなの！？」

戟！

接近し、剣を振るうがプロテクションで止められる。

そしてそこを狙う桜色の魔弾。後方に加え、左右から近付くそれらを朧は急上昇にて回避するが、なのはの操る優秀なアクセルは未だ執拗に朧を追いかける。

「あんまり失望させるな、よ！」

朧は旋回し追尾してくる魔力弾の背後に周り、次々と破壊していく。

「朧くん私に私の何がわかるっていうの！！？」

『ショートバスター』

激！

動きの止まった朧に発射の早いバスターが撃ち込まれる。

「レイン！」

《プロテクション》

壁

「またもや攻撃には目を向けず、自身の中にいるレインに防がせる。」

「答えてよ!!!」

『ダイバイン、バスター』

轟!

いつの間にか朧の背後に回っていたなのは本命のバスター。

不意を突いた巨大な砲撃魔法を避けるには今の朧には反応が遅すぎ、砲撃は容赦なく朧へと向かう。

滅

だがその砲撃も先のバインドと同様、突き付けられた短剣により掻き消される。

しかしなのはは慌てない。更なる追撃の為に周りには幾つも魔力弾を待機させる。

「俺はお前じゃないんだ、わかるわけないだろ!?!」

擲・擲

両手の剣をなのはに向かって投げ、それと同時に駆ける。

「なら、知ったような事言わないで!」

弾・弾・弾・弾



なのはは左手を号令を出すように振るい、シューターを発射させる。二つは短剣を弾き、後の二つは朧へと向かう。

「そんなんじゃないかったんだろ!？」

《アートNo.3 open》

激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激

現れた西洋剣で弾を切り裂き、蒼と桜の閃光がハイスピードで何度もぶつかり合う。

「なんの、事、なの!？」

「お前は、今まで、ぶつかり合い、ながらも、話す事、止めないで、きたんじゃないの、かよッ!?!？」

私も昔そうやって助けてもらったの

聞く耳持たずだった私にぶつかり合いながらも何度でも話しかけて、問い掛けてくれて

言葉にしなきゃ伝わらない事もあるからね。だから私も君に  
問い掛けたんだよ

思い出すのは自身を打ち負かした女の子が言っていた言葉。

撃！

なのはは朧の縦に撃ち込まれる一閃をレイジングハートで受け止  
め、鏝ぜり合っ。

「フェイトを救ったのは何度も話そうとしたお前の言葉（想い）じ  
やなかったのかよ！！？」

「ッ！！？」

蹴！

隙の出来たなのはは剣を反した朧に回し蹴りを放たれ、一直線に  
廃ビルへと突っ込んでいく。

「そんなお前に俺は憧れたんだ！お前みたいに誰かを、アイツみた  
いに誰かを助けて守りたいって！！」

煙の舞うビルに向かって想いの丈をぶつける朧。

なのはがいたから今のフェイトがいる。彼女はなのはのやり方を  
真似て朧を救ってくれた。端的に言えば、なのはの存在こそが朧が  
助かったきっかけなのだ。

その憧れの存在が話す事をやめ、更には過剰攻撃。朧にはそれが酷く赦せなかった。

轟！

煙の中から桜色の砲撃が放たれるが難無く回避する。

「そんなの朧くんの勝手でしょ……私にそんなもの押し付けないで……」

ふわふわと上がってくるなのは。蹴りは咄嗟の防御に成功したように汚れてはいるがたいしたダメージはない。

「それに朧くんだって変わらないよ……」

再び展開する魔力弾。その数は数十に及び、朧を取り囲むように移動していく。

「朧くんだって何も言わないじゃない。アグスタの一件以来、ずっと一人で抱え込んで」

「チッ！」

独自の高速飛行で突破口を捜す朧だが、なのはの巧みなシューター捌きに回避しか出来ずに苛立つ。

「全然話してくれない朧くに私達が……フェイトちゃんが、どれだけ心配してるかわからないの!？」

「んなもんわかってる!」

「わかってない!!」

《No.3 out、ソードサモナー》

擲・擲・擲・擲・擲・擲・擲・擲・擲・擲

西洋剣を待機状態に戻し、ソードサモナーを展開。

今の状況を打開するために片っ端から凍剣を出現させ周囲のスフィアに向かって縦横無尽に投擲する。弾丸をも凌ぐその速さで一つ、また一つと破壊していく。

「部屋で泣いてたんだよ!? 私じゃ力になってあげられないって! 翔くんを苦しみから救ってあげられないって!!」

「!?!?」

フェイトと長年連れ添った、同室のなのははそれを知っている。明るく接する彼女が決して翔には見せない涙を。

そしてその言葉は翔の動きを鈍らせる。

縛

「ッ!?!?」

スフィアの魔力に眼を引き付けられバインドの魔力に気が付けず、大の字に両手足を拘束されてしまい、その間にレイジングハートは魔力を溜める。

「だから私の事を言う暇があるんなら！自分の事をしっかりしてよ！！私に八つ当たりしないでっ！！！！」

『デイベインバスター』

轟！

光が朧を包み地面まで吹き飛ばす。

「フェイトちゃんの事だけじゃない、朧くんが話してくれないから捜査の進展もないんだよ！六課の皆に迷惑がかかってるんだから！！　　ッ！！！！？」

膨

着弾地点の煙幕が一瞬で吹き飛んでいく。そこには溢れんばかりの蒼い魔力を放出し、頬から出た血を拭う、朧の姿がある。

無傷、とは程遠いがそれでも戦闘に支障はない、と彼の朱眼は訴えている。

「今そんな事、関係ないだろ」

「朧くんはそうやって逃げてるんだよ」

い。  
どんどんヒートアップする二人、もはや意地と意地のぶつかり合い。

朧も再び西洋剣を取り出し、構える。

「俺は逃げてるわけじゃないー！」

駈！

ロケットスタートのように突貫する朔。

「はあああああっ！」

戟！

壁

右手一本で力任せの無骨な一撃は障壁によって簡単に防がれる。

「逃げたのはお前だろ！？お前の“きつとわかってくれてる”って  
いう驕りがティアナをああさせたんだよ！！」

《No.5 open》

朔はせり合いの中で空いている左手にナイフ形態のアートを展開  
させ、逆手に握る。

突

振り下ろされたその剣先が桜色の障壁へと触れる。

滅

「くっ！？」

音を立てず消えていく防壁を視界に捉えながら、なのはは急ぎ後

退する。

目の前には右手に持つ刃の刀身に蒼き魔力を籠めた朧の姿がある。

「言葉にしなきゃ伝わらない奴だっているんだよっ！」

閃！

神煉流壱式、蒼閃

切り上げるように繰り出された蒼い斬戟はなのはを切り裂こうと直進するが、

「レイジングハート！」

『ショートバスター』

爆！

斬戟が着弾する前にバスターによる誘爆を引き起こし、直撃を免れる。

それでも至近距離での爆発に巻き込まれなのは顔にはその苦痛が滲み出ている

「はぁ……確かに、私のアレは……はぁ……はぁ……はぁ……驕りだったのかも……知れない。でも……はぁ、言葉にしなきゃ、伝わらないのは、朧くんも、同じだよ」

「んなこと……はぁ……はぁ、わかって……る……だけど……俺は、

お前が……はあ、赦せ、ない」

互いに息を切らせながら、いまだ視線はずらさないが、自身の過ちには気付いている。朧も説教を垂れに乱入したのに自身も説き伏せられている。

要するに似た者通しの二人は引けないのだ。

ナイフを投げ捨て両手で剣を構える朧とレイジングハートを強く握りしめるのは。

投げたナイフが重力に従い落下していく。

そして、

カラン、と

ナイフが地についた音だけが聞こえた。

疾！

始まりと同様、どちらともなく二人は駆けた。

「うおおおおおおおおおつ！！」

「はあああああああああつ！！」

撃！

咆哮をあげながら互いの得物を振り下ろし、辺りが爆風に包まれ



る。

結論から言うとこれで決着がついた。

視界の晴れた先には、

「そろそろ納める。互いに気が晴れただろ」

「オメエらやり過ぎだ」

朔となのはの首筋にはレヴァンティンとアイゼンが当てられ、二人の間にはシグナムとヴィータが割り込んでいいて、

「ちょっと反省してね」

アートとレイジングハートを持つ腕はフェイトのバインドに止められていた。

不器用な二人の喧嘩は、引き分けという形で幕を閉じた。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「は〜い、今回はゲストがきてま〜す」

翔「なら早速登場してもらわないと」

レ「それじゃあ、どうぞ〜」

?「こんにちは」

レ「えっと、今回のゲストは【魔法少女リリカルなのはA's P  
R I S M H E A R T】より、機械弄りがハンパない！三門燐くん  
で〜す!」

燐「よろしくお願いします」

翔「今までのゲストで一番大人びているな……」

レ「まだ11歳なのにね。翔ちゃんを含めて今までの人達がどれだ  
け子供だったかがはつきりとわかるよね」

翔「いや、俺は違うよ!?!俺はそこまで子供じゃないよ!?!?」

レ「え〜？ 燐くんはどう思う？」

燐「う〜ん、僕の周りには大人の人があんまりいないから正確には答えられないけど……」

レ「けど？」

燐「ここまでテンションの高い大人は見たことないよ」

刺！

翔「がはあっ！！？」

レ「燐くんナイス、ボディーパー！」

燐「別にそんなつもりはなかったんだけど……」

翔「くっ…… 11歳でこの落ち着きようとは……」

レ「翔ちゃんが11歳の時って、こんなにしっかりしてなかったよ。むしろ落ち目の時期だったよね」

翔「うっ…… まあ確かにあの頃はちょっと…… 今回の冒頭もその頃のちよい後だよな」

レ「うん、今回は翔ちゃんとなのはちゃんのはた迷惑な喧嘩だね」

翔「…… もう少し言い方がないのか？」

レ「説教しに行った人が逆に説教されるって恥ずかしいよね」

翔「うう……」

燐「どちらの言い分もわかるけど、やり方がちょっとね」

レ「燐くんならどうしてたと思う？」

燐「そんな場面に出くわして見ないとわからないけど……自分のその時に出来る事をやる、かな？」

レ「燐くんおっとな」 翔ちゃんはキレてただけなのに

翔「……レインは俺を虐めてそんなに楽しいの？」

レ「作者曰く、今回の話は『戦闘！』と言うより互いの想いの丈を叫んでほしかった』って。なんかいつもと勝手が違うからすっごく難しかったって嘆いてたよ」

燐「翔さんの力の一端も見れたしね」

レ「魔法を掻き消した事？アレがもう少しまともに使えたら翔ちゃんもチートと呼ばれる日が来るんだろうけど、アレはもう絶対伸びないからね。結構大きな欠点もあるし。でも扱いは上手くなった方だと思うよ。それなりの経験は積んできてるし」

燐「それでもあそこまで大立ち回り出来るのは凄いよ」

翔「でも、それを言うなら燐の方が凄いよ。白と黒の魔力光を持ってるし、知識がなかったデバイスだって自分で直ぐに組んじゃうし」

燐「まあ機械弄りは得意だからね」

レ「翔ちゃんもやれば出来る子なんだけどなあ」

翔「なんだよ、その含みある言葉は？」

レ「べつつに〜、それじゃあそろそろ終了の時間だね」

翔「今日は来てくれてありがとな」

燐「いえ、こちらこそ楽しかったですよ」

レ「またきてね〜」

翔「読者さん達からの感想等も待ってるよ」

レ「今回のゲストは【魔法少女リリカルなのはA・S PRISM HEART】より、三門燐くんでした!!!ありがとうございます  
た!!!」

翔「では、」

レ・翔・燐『次話にてお待ちしております!!!』

## 第二十一話 言葉（後書き）

どうでしたか？

この話は『れいんぼすと』でも言ったように戦闘より言葉に重きを置きました。

私が一番初めに考えた事は初の一方向的な言い負かしは有り得ない、と言う事でした。

彼はそこまで偉くも賢くもありませんから自身の隙間に付け込まれます。

なのはだっぺいきなりこんな事になって少なからず動揺してると思っています。

そしてそこに朧が乱入してきたら、そりゃ勢いに任せてでも鬱憤を吐き出さなきゃいけないんじゃないかなど。

まああとがきで言っても仕方ないですし、何か思う事があれば是非感想等を送ってください。  
こうした方がよかったですんじゃないか？や、ここはこうだと思つ、などでもなんでもOKです。

もちろん、誤字脱字や質問などでもOKですよ。

正直、たいていどんな物でも構いません（笑）

長々とすみません(汗)

では、次話にてお待ちしております……！

溜めていたプロットが全部終了したぞ……どっしり……

第二十二話 一步（前書き）

やっと書けた……（汗）

どうも、ISのシャルに撃墜されている夕です（笑）

今回の話はなんだか締めりのないような感じなんです、なんとか形に出来たと思います。

では、どうぞ……！



## 第二十二話 一步

「なのは……私どうしたらいいんだろう？」

瞳に涙を浮かべながら、訴える女の子。

彼女が悩んでいるのは一人の男の子の事。

「味方であるよって言ったのに、私じゃなにもしてあげられない！なんにも力になってあげられない！」

部屋の外では、完璧に仕事をこなし、部下の面倒見がいい優しいお姉さん。このすぐ前だつて医務室まで勉強を教えに行っていたのだ。

だが、その女の子は泣いている。

自分が不甲斐ないからと。

「そんなことないよ。フェイトちゃんは頑張ってるもん」

同室の親友にだけみせた涙。

「でも、初は今苦しんでいるのに！私はただ待つてる事しかできない……！」

そう叫ぶ親友をただ抱きしめてあげることそかできないもどかしさ。

泣いているのも部屋の中だけ、明日になればまた元気で明るい優しいお姉さんに戻ってしまう。

だから親友は思う。

今この時だけでも彼女の心が少しでも休まるようにと……

「全く……二人ともちょっと隊長と副隊長の自覚が足らんのとちやうか？」

「しめんなさい……」

「反省してます……」

部隊長室から声が聞こえる。

両手を腰に当て、今日何度目かのため息を漏らすはやて。彼女の目の前には正座で絶賛反省中の二人の姿がある。

言わずもがな、朧となのはである。

身体の所々に絆創膏や湿布など少々痛々しいが彼らには良い薬だ。

「それで、朧くんが飛び出した原因はなのはちゃんの説明不足から起きたオーバキルなんか？」

「……うん」

反省しているのか縮こまってしおらしい朧。小動物のようなその姿に思わず抱きしめたい衝動に駆られてしまうが、はやては我慢出来る子だ。

手をわきわきとさせながらもどうにかこうにか衝動を押さえ込む。久しぶりに見た朧の天然の乙女ブレイカーだったが、まだ耐性は効果が残っていたようでなんとか助かった。

ちなみに余談だが現在六課の中で朧はそれなりに人気だ。これにもいろいろとドラマがあるのだがそれはまた別の話。

「で、なのはちゃんも売り言葉に買い言葉で朧くんに対する不平不満が爆発したと」

「……ごめんなさい」

二人のはっちゃけた理由を聞き再びため息をつきながら頭を抱えるはやて。

最初シグナムから連絡を受けた時は思わず呆けてしまった。

『高町と翔が訓練所で暴れています』

意味がわからなかった。

シグナムから繋げられた回線を通したモニターの先には蒼と桜の光が何度もぶつかり合っており、それなりに……いや、かなり激しい戦闘が行われていた。

それを見たはやては急ぎシグナム達に二人を止めさせて、シヤマールに診てもらった後、少し時間を置いてはやてが二人を部隊長室へと召集し今に至る。

「はあ、まずは翔くんからや。確かになのはちゃんの説明不足は反省せなアカン一つや。ティアナの負けん気がここまでやとは思わなかった。けど、それは翔くんが乱入して止めるもんやない。なのはちゃんはベテランの戦技教導員や。線引きはしっかりしてるし、危なかったらヴェータが止めてる。私が言ってる事わかるな？」

こくり、と頷く翔。

「で、次はなのはちゃんな。なのはちゃんも自分の教導を否定されて反論するのは判る。でもさっきも言った通り、説明不足なのはちゃんのミスやで？そこにアグスタの件を引き合いに出すのも違う。アレは私が待って言ったんや。ならそこで終いや。わかってくれるか？」

「うん……」

目を伏せながらなのはが答える。

「なら私からはこれ以上言うことはないわ。此処はちょっとの間空  
けとくから二人で納得したら出ておいで」

ほなな、と片手を挙げ退室していったはやて。

部隊長室に残された正座中の二人。……なんともまあ、間抜けな  
姿だ。

おまけにこんな状態で取り残されても話しくいだけだ。

「……立とうか？」

「あ、ああ」

いつまでも正座というのもどうかというところで、とりあえず立ち  
上がる二人。

……

……

……

気まずい空気が続く。

「えっと……ごめんね、翔くん」

先に切り出したのはなのは。

「私、甘えちゃってた……翔くんが言ってくれたように私の心情は話す事だったのに……そこを指摘されて、頭に血が上っちゃって……見ていたようで、全然周りが見れてなかった……」

なのはは額に手を置き、思った事を飾らずに話す。

その様子は自身でもかなりショックだった事を表している。

「それは俺だって同じだよ。いや、俺の方が酷い。ただ自分の主張を押し通そうとしたただけだもんな……」

なのは同様……いやソレ以上に反省の色が濃い。

普段の翔ならここまでの強攻手段には恐らくでなかった。

あつたとしても手はださなかった筈だ。

なら何故？

理由は？

簡単だ。

なのはが言った通り、ただの八つ当たり。

朔はここ最近、一向に悩みが晴れない事に少なからず苛立ちを感じていた。

弱い自分に、

不甲斐ない自分に、

答えの出せない自分に、

そこにあんな事があっただけだ。

「逃げてたのだったって本当は俺だよ。フェイトやはやてに甘えてずると引きずって、苛ついて、なのはに当たって……最低だ、俺」

己の行いをどこまでも悔いる朔。そんな行き過ぎた自己嫌悪に陥る朔を見てなのはは少し慌ててしまう。

「そんな、朔くん一人が悪い訳じゃないんだからそんなに落ち込まないで。二人とも悪いんだから、どっちもどっち。大事なのはこれから同じ間違いを繰り返さないように一歩ずつ進んで行く事だよ」

いつの間にか励ます側になっている事に少し戸惑いを感じるのはだが、再び自身の心情を気付かせてくれた男の子にこれ以上自分で自分を傷付けてほしくない、という想いがこういう形になった。

「だから、まずは仲直りの握手」

はい、と微笑みながら差し出された右手。

「（これがフェイトを救った光なんだな）」

翔は彼女の表情を見てそんな事を思い、しっかりとなのは手を握った。

「ありがとな、なのは」

「ふふ、私の方こそありがとう」

自然に笑みがこぼれる二人。

「とりあえず私はティアナと話してみるよ」

今はそれが大事だから、と。

「なら俺もアイツの事、話すよ」

「え、いいの？」

突然の事に驚くのは。

「ああ、いつまでも話さない訳にはいかないし」

正直、翔は事実を知った彼女達の反応も少し怖い。新人達には疑問を持たせてしまうかもしれない。

それに自分の中でも何一つ纏まっていない。レインへの答えもわかってない。



何も決まってるないのだ。

それでも、

「とりあえず一歩進んで見ようと思う」

ニコツと笑いながらそう言った朧になのはは、

「じゃ、じゃじゃ!!?」

やられてしまった。

かあつ、と顔を紅くしながらあわてふためくなのはを見て朧は、不思議そうに首を傾げるだけだ。

「（久しぶりだったから油断してた……これ、そろそろ自覚させないと、フェイトちゃんも大変なの……）」

なのははここにいない親友に心の中でエールを送った。

「なんだかよくわかんないけど、落ち着いたか？」

「朧くんいつか後ろから刺されるよ」

「ん???」

少しして落ち着いたなのは言葉を未だによくわかっていない様子にため息を漏らすのは。

とにかくいつまでもここにいるとはやてにも迷惑が掛かると思い、部屋を出ようとする。

警！

第一級の警戒アラートが鳴り響く。

二人は急ぎはやてに通信を繋ぐ。

「はやてちゃん何かあったの!？」

『もう二人とも大丈夫なんか?』

「ああ、おかげさまで……って今はそんな事言ってる場合じゃないだろ!？」

『そつやな、今ロングアーチスタッフが』

はやての話では今回海上にガジェットが現れ、ずっとぐるぐる回っているようで、恐らく狙いはこちらの実力を計る為だろう、というところらしい。

こういう緊急時に素早く動けるよう組織された六課のFWメンバーは既にヘリの前まで集合しており、その中には朧やなのはの姿もあり、スバルの横には目を覚ましていたティアナも整列していた。

「今回は海上での飛行戦だから私達隊長、副隊長で迎撃に出る。隊舎にはシグナム副隊長と浅儀副隊長が残るから二人の指示に従ってね」

『はい!』

「……はい」

なのはの指示に一人だけ返事が遅れる。誰の目から見ても今のティアナはコンディションが悪い。

だから、ヘリに乗り込む寸前になのはが言った。

「それと、ティアナは今回の出勤待機から外れておこうか」

「ッ!?!?」

目を見開き驚くティアナに横で心配そうにしているスバル達。

なのはの提案に隊長達は皆賛成するように頷く。

「……言うことを聞かない奴は使えない、て事ですか?」

俯き、拳を握りしめながら口を開く。

「自分で言っていてわからない? 当たり前前の事だよ、それ」

ティアナが反論してきた事に少々驚いたなのはだが確認するよう聞き返す。

しかし、火の点いたティアナは止まらない。

「現場での指示や命令は聞いてます。教導だってちゃんとサボらずやってます。それ以外の場所や努力まで教えられた通りじゃないとダメなんですか？」

ヴィータが諫めようとするが、なのはに止められる。ティアナはその事にも気付かずどんどんヒートアップしていく。

「私は、なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオのような才能も、キャロみたいなレアスキルもない！少しくらい、死ぬ気でやらなきゃ強くなるとなれないじゃないですか!？」

溜め込んでいた物をまるでダムが決壊したかのように叫ぶ。ティアナは全く反省していない。

殴

そう感じたのか、はたまた単に苛立っただけなのかティアナの肩に手を置き、シグナムが殴り掛かった。

「……どういっつもりだ」

だがその拳は靱によって止められていた。

「殴ったってなんの解決にもならないよ」

そう言って靱はティアナの方へ振り向く。

「お前も大概にしるよ。あんまり失望させないでくれ」

「……どういう事ですか」

冷やかな瞳で言う昗に敵意剥き出しのティアナ。  
昗はそんなティアナからへりの方へ視線をずらし、

「なのは、俺と交代してくれ」

そんな事を言い出した。

「何を言ってるの、まだ病み上がりなんだよ!!!?」

「ここは私達に任しとけよ!?!?」

フェイトやヴィータが反対するが昗は聞く耳を持たない。

「大丈夫だ。もう完治してるし、フェイト達も一緒だろ?」

なんでもないように言う昗はそれに、と付け加える。

「それに、なのはにはティアナと早く話してもらいたいからな」

それになのはは頷いた。

「もう、仕方なしだからね」

フェイトもため息混じりにそれを納得し、へりに乗り込んで行く。

「じゃあ後は任せたよ」

「そつちもな。ティアナ、なのはと話して、その後はまだ納得が  
いかなかったら俺に言ってこい」

そう言い残してフェイト、ヴィータ、朧を乗せたへりは飛び立  
た。

「ゴメンな、フェイト」

へりの中でポツリと呟いた。

「なんのこと？」

「俺、またフェイトを泣かせちゃったみたいだな……」

「……なのはから聞いたの？」

ああ、と答える朧。

フェイトがそんな弱みを見せたのはなのはにだけなのでその発信  
元は直ぐに特定出来た。

「もう、黙っててって言ったのに……」

若干紅くなりつつ照れ臭そうに言うフェイト。

「明日にでも皆に話そうと思う」

「……いいの？」

フェイトは朧の渋る理由を知っている。だからまさか、こんなに早くになるとは思っていなかったのだ。

「ああ、考えてたつてすぐに割り切れる事じゃないし今も不安とか悩む事ばっかだけど、六課の皆を信じてみようかなって」

立ち止まって考えるより歩き出して考える方がずっといい、そう考えた最初の通過ポイントの答え。まだまだ道は長いがそれでも朧は一步を踏み出す事を選んだ。

それを聞いてフェイトも自然と笑みがこぼれる。

「そっか、よかった」

「フェイトやなのはのおかげだよ」

「私は何もしてないよ」

「そんなことない。フェイトがいたから今の俺がいる。フェイトがいつも俺の味方でいてくれるから、俺は考える事が出来て、皆に話す事が出来るんだ」

歯が浮きそうなセリフをベラベラのたまう朧に対してフェイトは  
とらららら

「朧……」

……… 案外満更でもないみたいだ。

だが彼らは忘れてる。

此処は二人だけの世界ではないことを。

「ああ、おっほん！！オメエら私がいんの忘れてねえか？」

明らかにわざとらしい咳払いで空気をぶち壊したヴィータ。彼女も若干頬を赤らめている。

そして、つつこまれた二名はというと、

「ヴィ、ヴィータ！？ここ、これはそのなんていうかその……」

「ちちち違つよ、なな、なんでもないよ！？ただ嬉しかっただけだよ！そそ、そつだよね、朧！！？」

「あああ！そつだよ嬉しかっただけで別になんでもないんだ！！」

沸騰しながらかなりテンパっておられて、なにを言っているのか意味がわからない。

この時ヴィータを思った。

私もシグナムに代わってもらえばよかったな

と、



今から戦いに行くとは思えないこのテンションは、この後十分ほど続いた。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「祝！100000アクセス突破！！」

翔「おお、すごいじゃん。これも読者の皆様のお陰です。ありがとうございます！これからよろしくお願いします！！」

レ「大丈夫だよ、翔ちゃん。私達も、これからも頑張っていくから」

翔「いや、弓兵のセリフの使い方ちょっと違うからね！？」

レ「ぶう〜、別にいいじゃん」

翔「それで100000アクセスって作者の密かな目標だったんだ

る？」

レ「らしいね。なんだかこの前アクセス数みたら999999になって凄いいテンションだったみたいだよ」

翔「まあ今回は大目に見てやろう。あのバカも何か考えてるんだって？」

レ「うん、100000アクセス記念に何かやりたいらしいんだけど、なんにもアイデアないんだって」

翔「アレはどうしたんだよ？前に言ってた劇団なのは？」

レ「ああアレ？一度活動報告に変な予告編みたいに書いて誰にも反応されなかったみたいでハートが壊されたんだって」

翔「ああ……そりゃあれじゃあ……なあ……なんというか……頑張れとしか言えない」

レ「だから、読者さんにどんな事がしてほしいか聞いてみたいんだって。感想に書いてくれてもいいし個別メッセージでもOKらしいよ。まあ気軽にして事で」

翔「まあアイツが何か思い付くかもしれないしな」

レ「よろしくね」

翔「それじゃあそろそろ本編に触れていくか」

レ「だね、でも今回私一度も出番ないんだよね」

翔「この間に何やってたんだ？」

レ「翔ちゃんの始末書書いてた」

翔「ごめんね！そしていつもありがとうー！」

レ「冒頭のアレは前話でなのはちゃんが言ってたフェイトちゃんの事だね」

翔「アイツには本当頭が上がらないよ」

レ「でも、結構反抗したりもするよね？勉強の事とか」

翔「それとこれとは話が別というか……」

レ「それと久しぶりに翔ちゃんの乙女ブレイカーと鈍感スキルの事が書かれてたね」

翔「いや、俺は普通にしてるだけなんだけど……」

レ「それが乙女の気持ちをぶち壊すんだよ……」

翔「????」

レ「ああもういいよ。次々、なのはちゃんとの会話だったりティアナの叫びだったりあるけど」

翔「なのはとのアレは殆ど俺が悪かったと思ってる。わざわざ俺がしゃしゃり出る事でもなかったよ。ティアナは……ちよっと自分を

正当化し過ぎてたのが俺はちょっとどうかと思ったからああ言っちゃったんだけど」

レ「なんでシグナムの拳も止めたの？」

翔「言ったように殴ったってなんにもならないし、戦闘でもないのに女の子の顔を腫れさせるのもどうかと思ったから」

レ「はあ、そんなことだろうと思ったよ……」

翔「なんだよ」

レ「翔ちゃんらしいと思ったただだよ」

翔「????」

レ「で、最後のあまあま固有結界は胸やけするからパス！」

翔「それは激しく同意だ！」

レ「やっぱりやろうかな……」

翔「レインさん!？」

レ「冗談だよ。そろそろ時間だし」

翔「そっか！なら締めないとな」

レ「元気だね翔ちゃん……それじゃあ今回はここまで！何かあったら言っつてね」

翔「100000アクセス記念も気長に募集してるからよろしく！」

レ「では、」

レ・翔『次話にてお待ちしております！：！：！』

## 第二十二話 一步（後書き）

どうでしたか？

朧となのはの話し合いに些か疑問に思った方も多くいらつしやると  
思います。

朧もなのはも大概大人です。自身の行いは自身で見つめ直せるだけ  
の頭は持っているし、二人とも自身で抱えてしまうタイプの人間な  
ので自然とああなっただけでした。

最後のフェイトとのアレはまあオマケです。

朧が謝るシーンは必ず入れなくてはいけなかったのであんな形にし  
てみましたが、皆さんがどう感じたか……それを教えていただけれ  
ば幸いです。

そして勘違いしてはならないのは、朧のお悩みタイムは続くとい  
う事です！

彼は不器用な人間ですから割り切れたりしません。

本編でこれが伝わって入ればいいんですが、不安だったので不躰な  
がらあとがきに書かせてもらいました。

では、今回はこの辺で

100000 記念の案や感想等もお待ちしてます！！

では、次話にてお待ちしております！！！！

第二十三話 ……無双？（前書き）

どうも、夕です！

なんとか一週間、ギリギリ間に合った……

正直途中から予定を変更して書いたので時間がなく、かなり雑かも  
しれません（苦笑）

では、どござー！……

## 第二十三話 ……無双？

戦闘は特に何事もなくガジェットを破壊して終了した。

事後処理を引き継ぎ、朧、フェイト、ヴィータは六課へと帰ってきた。

「それにしてもガジェットのスピード、以前までとは段違いだったな」

今回のガジェット型は飛行速度が今までの物より上がっていたのだ。

だからと言って彼らがそれほど手を焼く敵でもないのだが、

「アレを一般の魔導師が相手するには少し荷が重い」

別の隊へ教導に行くヴィータは他の魔導師のレベルがどれくらい物なのかがよくわかつている。それゆえに不安が募る。

「ガジェットが市街地に現れたらって考えると……」

考えるだけでゾツとしてしまう。フェイトも自分で言った事であるが顔を曇らせる。

「まあ、その時に備えての六課だろ？俺は今からやらなきゃいけない報告書の方が悩みの種だよ」

ああ、と髪をぐしゃぐしゃにする朧とそれを見て笑う二人。この行動が半分本気半分冗談だとわかっているからだ。



……レインがないので六、七割程報告書に傾いているかもしれないが。

そんな事を話すうちに六課へと到着し降りて行く三人。そこでフエイトが何かに気付いた。

「報告書は私が纏めておくよ。だから初は、」

フエイトの視線の先を見る初。その先には、

「ん、なのはとはきちんと話してきたのか？」

こくりと頷くティアナの姿があった。

場所をちょうど誰もいなかった談話室へ移し、コーヒーを用意して向き合うように座る。

「まずは、ありがとうございます！」

そう言って頭を下げられ初は首を傾げる。

「俺……何か礼言われる事したっけ？」

「模擬戦の時に割り込んで来ていただいたのと、シグナム副隊長に殴られそうになったのを……」

ああ、と納得するが、それをすぐに否定する朔。

「あれは礼を言われるような事じゃないよ。俺が自分の意思で勝手にした事だから」

「でも、」

「その話はここで終わり。本題があるんだろ？なのはとは何を話したんだ？」

ヘリが飛んですぐになのはが話そうと駆け寄ったそうなのだがティアナは突っぱねてしまつたらしく、そこにシャーリーが救いの手を差し延べたようで、シャーリーがなのはの教導の理由と目的を新人四人に話したのだ。なのはの過去と交えて。

『PT事件』や『闇の書事件』などでの幼い頃からの無理が祟つて落とされ、飛べなくなるかもしれない事などを。

その後になのはと二人できちんと話したとの事だった。

「で、どう思った？」

それらを聞いた朔は問た。

「なのはさんは私達の事を大切に、第一に考えてくれていて……私は自分の事でいっぱいになっていたんだなって」

周りに圧倒されすぎてしまっていたのだ。今回はティアナの負けん気が少し悪い方へと傾いてしまったというだけの事。

「ならもう自分が凡人だとか言うのはもう止めるよ？ だいたい、凡人がああピーキーな新人達の中で指揮が務まるわけないだろ？」

その言葉にははは、と苦笑いするティアナ。

「それがわかったんなら明日良いもん見せてやるよ」

スバルにも説明しないとけないしな、とコーヒーを啜りながら言う。

「……良いもん？」

「なんなのは明日のお楽しみだ。明日も早いんだ。もう寝た方がいいぞ」

「はあ……」

そう言われるとティアナは再び礼を言い、自室の方へと戻っていた。

「と、いうわけだから。朝の訓練ちょっと割り込む」

誰もいない談話室でそんなことを言い出した昗だが、それを聞いてか物陰からひょっこりと現れた。

「別に大丈夫だよ……って気付いてたの？」

少し驚きながら陰から現れたなのは。おおかた、ティアナが昗と話すと聞いて心配だったのだろう。

「なんとなく、ね。ところでレイン見なかったか？あれからずっと見てないんだけど」

「レインなら多分部屋に戻ってるんじゃないかな？さっきまでいると忙しそうだったけど」

「そっか、それじゃあ俺も寝るよ」

そこで昗はなのはと別れた。

昗となのはの一件以来全く見なかったが、昗が部屋に戻ると自身のミニチュア特別ベッドですやすや眠るレインがいた。

また何かしていたんだろうな、と当たりを付けた昗はレインに毛布をかけ直してやる。

そして昗が改めて彼女の優秀さを知るのは明日の事であった。

翌朝、ティアナとなのはのわだかまりも解け、新人四人はいつも通りの訓練に励んでいた。

そして早朝訓練も仕上げに差し掛かった頃。

「なのは？」

「準備出来たの？」

「ああ、まあ準備って言っても身体をほぐすくらいなんだけど」

そう言いながらやって来たのはレインを頭に乗せ、黒いBJに黒いチヨーカーを付けた朔。

「それじゃあ今日は仕上げに四人対朔くんて模擬戦やるよ」

「え？」

「朔さんですか？」

今までそれなりに訓練に参加してきた朔だがその実、模擬戦に参加しようとしなかった。手合わせをしたのもスバルの組み手くらいだ。

そんな朔が相手ということで四人は少々驚いている。

「これが良いものなんですか？」

昨夜の会話を思い出したティアナが問い掛ける。

「別にティアナ達に得があるって物じゃないけど」

『ティアナが知りたがっていた事ではあるよ』

「私が？」

思い当たる節がなく首を傾げる。

「はい、話はここまで！皆、早く準備してね」

なのはの掛け声と共にそれぞれ所定の位置につく。

「レイン」

『ユニゾン・イン』

朧もレインとユニゾンし、女の子モードへと移行。

「それじゃあ今回のルールを説明するよ。制限時間は15分、朧くんに一撃を入れられたら四人の勝ち。逆に四人全員が戦闘不能に追い込まれたら朧くんの勝ち。朧くんはハンデで飛行は禁止。時間切れは引き分け、何か質問は？」

「こちらはありますん」

「俺もないよ」

距離を数十メートル離れた場所に向かい合う。

「それじゃあ始めるよ」

離れた所からモニタリングしているのがカウントを取る。

9

「アート・No.5 open」

《open》

展開したナイフを右手で持ち、構える。

8

7

「ティアナ」

「なんですか？」

6

5

「今からやるのここ以外で喋るなよ？スバル達も」

「え？あ、はい」

4

3

「封印解除」

《あんまり無茶したらダメだからね？》

「ああ、わかってる」

2

1

「朧さん、その眼……」

「朱い……」

「そんな事言ってる暇あるのか？」

『ッ!!!?!?』

0!

散!

始まると同時に四人は散って姿を隠し、朧だけが残される。



《昶さんは近接戦闘タイプ。あの眼は気になるけど、気にしても仕方ないわ。まずは……》

廃ビルの物陰に身を潜めるティアナは念話で指示を飛ばす。

《いい？いくわよ！》

《おう！》

昶は今だ開始地点から動いていない。ナイフを構えてはいるが、出方を待っている状態。

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

フェイクシルエットによる四方からの攻撃。当然全て偽物なのでダメージを与える事は出来ないが、回避行動をとらざるをえない。そこをオプティックハイドで姿を消したスバルの先制攻撃。ティアナの幻術魔法をフル活用した作戦、これだけの幻術を同時に使用するのには厳しい。

しかし、ティアナの後ろで初めから近くに散っていたキャラロがブーリストを掛ける事でこの問題を解決した。

そしてもし防がれたとしてもその直後にはエリオが仕掛ける準備をしている。

電光石火の短期決戦。

それがティアナの作戦だ。

跳

案の定、四方からの魔力弾を空中に跳ぶ事で回避した朧。

「はあああああ！」

姿を現したスバルは既に朧の後方を陣取り、今から振り向いても回避は不可能な距離にまで詰めている。

「とつたあああああ！」

リボルバーナックルを勢いよく振りかぶり、

蹴！

蹴り飛ばされた。

カポエラの要領で繰り出された蹴りはスバルを吹き飛ばすが、それと入れ代わるようにエリオが突貫する。

「はあああっ！」

カートリッジをロードしての高速攻撃はキャロのブーストがなくとも十二分な速度が出ている。

だがそれさえも、

「レイン」

《プロテクション》

壁

激！

「そんな攻撃じゃムリだ、ぞ！」

まるでそこにエリオが来ることがわかっていたかのように蒼い障壁を展開し、昗はストラーダでの攻撃を防ぐ。そしてそのままストラーダの柄を掴み投げ飛ばすと共に、

「まあ作戦はよかったと思うよ？」

軽やかに地に足を着けながらそう言った。

これまでの一連の動きを空中で飛行を行わずに成し遂げた昗。

バランス感覚や読みの良さだけでは些か説明がつかない。

「それと、」

膨！

昗の周りに蒼い魔力が噴き溢れ、

疾！

駆けた。

その速さはフェイトのソニックムーブと同等。

昶は駿足と言えるその足を止め、すぐに何も無い場所の“何か”を掴んだ。

「今の俺、幻術効かないんだよ」

倒

掴んだ“何か”を地に叩き付け、ナイフを翳す。

「まずは一人」

現れたのは組み伏せられたティアナ。既に首筋にはしっかりとナイフが当てられている。

「くっ……どうやって」

先程の作戦が失敗したと判断してティアナはすぐにオプティックハイドで自身を消し、昶に気付かれないように接近を試みたのだ。

だがそれは意図も簡単に見抜かれ、気付かれていないと考えていた際に逆に高速で接近されやられてしまったのだ。

「その質問は後。ティアナはリタイヤだから先になのはんところに行つてくれ」

拘束を外し、朧は辺りを見渡す。

「次は……」

「フリード、ブラストレイ！」

「チツ」

炎

空から降り注ぐ炎弾。急ぎ回避する朧。

「デイバイイイン」

避けた先には青い光球を溜めたスバルがいる。

ここに指揮をとっていたティアナがまだ生存していたらすぐに気付き展開は違っていただろう。

閃

「バス　え！？」

振り向き様に横一闪。

たったそれだけの動作で光球は消滅した。

ア然とするスバルだが、果たしてそんな時間が許されるのか。

「これ最初と同じ展開だぞ」

「しまっ」

懐から聞こえるその声に反応するが、時すでに遅し。

「神煉流伍式、碎覇」

拳！

『ウイングロード』

疾

繰り出された拳はマツハキャリバーの機転でどうにか回避でき、距離を取りつつ安堵する。

だがそんな余裕を窺は許さない。

擲

手に持つナイフを投擲し、ウイングロードへ突き当てる。

滅

「えっ、うわあっ！！？」

突然ウイングロードが消えた事により足場を失ったスバルは地面へ真っ逆さまに落ちていく。

「マ、マツハキヤリバー!？」

『魔法行使に干渉を受けました』

離れた距離を縮めようと駆ける昗だが、

炎

援護に入ったフリードの炎弾により大きく後退させられ、その間に着地するスバル。

「ありがとう、キヤロ」

「いえ、それより」

フリードの背にはキヤロの他にもエリオが乗っており、出された炎の先を見据える。

「どうするか?だね」

冷汗を出しながら言う。

「昗さんの動きは反応速度が良すぎます。こっちの魔法が全部防がれてしまった」

「うん、多分あの眼だよな」

皆がキヤロの言葉に朱い瞳を思い浮かべる。

「ティアが入れば心強いんだけど……」

「そうですね……」

指揮官の退場は彼女らにとってかなりの痛手となっている。

「もう小細工なしにつっこんじゃおっか？」

「やっちゃんいましょうか？」

なんだかやけくそになっている前線二人。

「来ます！」

キャロの声と共にフリードは飛翔。どうやら作戦はスバルとエリオの二人掛かりで攻めるやけくそ作戦に決まったようで、キャロはフリードの背からエリオにブーストを掛けるようだ。

疾

徒手空拳で迫る朧。ナイフはどうやらまだ回収していないようだ。

「行くよ、エリオ！」

「はい、スバルさん！」

疾

二人は左右に周り込むように駆ける。



「レイン、サモナー」

《ソードサモナー》

左右には二刀の凍剣が握られる。

「はあああああ！」

「うりゃあああああ！」

突・拳・突・拳・戟・撃・戟・撃

左右からの同時攻撃を捌き続ける朔。

砕

スバルの拳、エリオの薙ぎ払いが凍剣を砕き、氷の破片が宙を舞う。

だがしかし、

「レイン！」

《はいはい》

現・現

砕けた瞬間に次の凍剣を作り出し、先程と変わらない動作で防いでいく。

砕ければ復元、砕ければ復元の繰り返し。

すでに十八本もの凍剣を砕いているが依然、朧の手には凍剣が握られている。

「くっ！」

「キリがない！」

猛攻とも呼べる二人の攻撃は全て避けられ、防がれる。

「くっそおおおおお！」

痺れを切らしたスバルが弧を描くような大振りの蹴りを放とうとする。

そして朧も動く。

「レイン！」

刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺・刺

蹴！

撃！

「なっ！！？」

威力十分で放った蹴りは朧との間に突き刺さるように振ってきた凍剣十本が緩和剤となり、凍剣は砕かれてはいるが朧にまで届かな

かった。

「朧のターンはまだ終わらない。

エリオを弾き飛ばし、スバルに迫る。だが碎けた剣に足をとられているスバルは動けない。

「はい、二人目」

《あとはライトニングだね》

凍剣を突き付けられ手を挙げるスバル。

「あとどのくらいいける？」

《まだ10分は大丈夫だよ》

「ならそれまでに決めるぞアート、No.3 open」

エリオは既に立ち上がり朧に向かい構え、朧も西洋剣を構える。

「エリオ、いくぞ」

「はい！」

戟！

激しいぶつかり合いは火花を散らす。

「はあっ！」

「ふっ！」

戟・戟・戟・戟・戟・戟・戟・戟

力は均衡した物ではなく、押しているのは当然朧。

エリオも善戦しているが体格差、力量、経験、その全てが上回っている朧が打ち負ける要素はない。

そして、終わりは必ずやって来る。

戟！

「ぐッ!!?」

強く打ち込まれたエリオは後方に弾き飛ばされるが、それでも構えを解くことはない。

「エリオくん!?!」

縛

鎖を使った捕縛魔法、アルケミックチェーンが朧を襲う。

「キャロか!」

空に待機しているフリードの方を見る朧。ハンデとして飛ぶ事を封じられてる朧には届く事のない距離。

「けど、要はやりようだ！No.3 out」

手に用意したのは西洋風ではなく投擲用の凍剣。朧は狙いをキヤロへと変更し、それを投げる。

刺・刺・刺・刺・刺

投げた先はビル。

「ええ！？」

朧のとつた行動にキヤロは驚くしかなかった。

疾・疾・疾・疾・疾

ビルに突き刺さるソレを朧は踏み台にして駆ける。

既に最後の剣を蹴り、キヤロの目前にまでやって来ている。

キヤロに朧を退ける力はない。だが、

「キヤロ！！！」

駆！

ストラダのブーストで一気に朧へと突貫する騎士。

「チッ！レイン！！！」

爆！

フリードの上で引き起こる爆煙が視界を遮るが徐々に消えていく。

その先には、

「……なにかあったかな？」

キャロにナイフ、エリオに西洋剣を突き付ける朧の姿があった。

こうして新人VS朧の模擬戦は終わりを告げた。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「今回は新人達との模擬戦だね」

朧「そうだな」

レ「ようやく白星かと思つたら、朧ちゃん無双になつちやつてるよ」

朧「一応俺副隊長だし、朱眼使つたし」

レ「あれは初見殺しだからね」

朧「でも、経験豊富な強者なら初見でも俺負けるぞ？」

レ「新人達はまだ実戦経験が少ないからね」

朧「まあ次話でこの眼の事は説明されるだろ」

レ「いよいよチート眼が明らかになるんだね？」

朧「チートつて言うな！これにはちゃんとした理由もこれからのもあるんだからつて検閲！！？」

レ「久しぶりに検閲入つたね」

朧「と、とにかく！チートじゃないから！気長に見てくれたらちゃんと判るから！！」

レ「それじゃあこの辺で、次話にてお待ちしております！！！」

朧「勝手に終わるな！！？」

第二十三話 ……無双？（後書き）

どうでしたか？

ええ、言いたい事は勿論たくさんあるでしょう。

どんどん言ってください。

呆けた私の責任です。

詳しくは活動報告に書きたいと思います。

感想などもお待ちしてます！

今回は誤字脱字も多いかも……（汗）

では、次話にてお待ちしております！！！！



第二十四話 魔眼（前書き）

どうも、バイト上がり徹夜で書き上げている夕です！

今回は説明オンリーな感じですがどうか見て下さい！！

では、どうぞー！ー！

## 第二十四話 魔眼

「ふうん、君は面白い眼を持つてるわね」

出会ったその翌日、そう言った女性はまるで品定めするかのよう  
に少年の瞳を見つめる。

「……な……ない」

「なあに？」

「……んな……らない」

「そんな顔でもあんた男の子でしょ？はっきり言いなさい」

女の子みみたいな顔のした少年が俯きながら発したその声はとても  
小さくて女性には聞き取れず、若干苛々している。

「こんな眼いらない！」

叫んだその言葉にどれほどの思いが籠っているか女性にはわから  
ない。そんな言葉を投げ掛けられた彼女は別に気にしないように  
言う。

「いいの？その眼は無くすにはかなり惜しい物だけど」

私が欲しいぐらいだわ、とため息をつく。

「……欲しいのならあげるよ」

「え、ホント それは嬉しい……けど残念、例えその眼をくり抜いたとしてもその力はきつと君の元へ返ってくるわよ」

「……どういふこと？」

そういふことよ、と曖昧でいい加減な答えしか返さない女。

「君の力は神様が誰かから与えられた物。その眼もきつと君に必要な物のよ。なんなら私がその眼との向き合い方を教えてあげてもいいわよ？これから一緒に過ごすんだし」

「でも……」

「ああ、もう！あんたは私と生きてみよつって思ったんでしょ？なら私の言うことは聞いときなさい！」

少年は思った、めちゃくちゃな人だな、と。

でも彼女の言葉やその顔は今まで見てきた人達とは違う、温かさが確かにあった。

だから少年は聞いた。

「貴女は何者なの？」

「ん？言ってなかったっけ」

始めキョトンとした顔をした女だが満面の笑みを浮かべ、ウインクしながら彼女は言った

私、魔法使いなのよ

「お疲れ様」

「いやあ、初めて手合わせしたけど想像以上だったよ」

『アートもナイフだけでいくつもりだったのにね』

新人VS朧の模擬戦は朧の圧勝に終わった。既にユニゾンとBJは解除し、朧は訓練着にレインは着物となっており、談笑している。

いつもの姿だ。跳ねっ返りのある少し長めの黒髪に黒いチョコレート。

そして、“黒い”瞳。

「それじゃあ皆、今回の敗因はなんだと思う？」

整列している四人になのが聞いた。

「先ず私が初めにやられた事だと思います」

すぐに答えたのはティアナ。早々に退場した事を悔やんでいるようだ。

「確かにそうだね。指揮する人がいなくなっちゃってスバル達の動きも単調になってたし。もう少し時間を掛けてもよかったね」

なのはの言葉にティアナだけでなく、スバル達も俯いてしまう。

「でも、」

にっこり微笑みながら言葉を繋げる。

「作戦は悪くなかったよ。幻術を使つての奇襲作戦にエリオの飛び出したタイミングもよかったね。朧くんのアレは初見じゃどうしてもあんな感じになっちゃっよ」

「アレってさっきの赤い……」

自然と視線が朧へと集まる。

「さて、それじゃああの朱眼について話そうか。四人とも“魔眼”

って知ってるか？」

「魔眼？」

「僕は聞いたことないです」

「私もです」

初めて聞いた言葉らしく三人とも首を傾げているが一人だけ違っ  
た。

「魔眼……確か本で読んだ事があります。なんらかの力を宿した瞳  
の事ですよ？そういう瞳を持った人もいるって……」

ティアナだ。

「お？ミッドチルダじゃあんまり聞き慣れない言葉だと思ったんだ  
けど、流石ティアナだな」

ティアナが知っていた事が意外だったのか少し驚いている。

「私達の故郷、この間行つた地球ね？あの星でなら漫画や小説、神  
話や伝承とかで結構聞く言葉んだけどミッドじゃ魔眼がまつわる  
話が少ないからね」

なのはの言う通り、ミッドチルダには魔眼が絡んでくる物語は殆  
どない。

正確に言うと魔眼と言う言葉が殆ど書かれていないだけで実在は  
するのだ。古代ベルカの王などにもその手の事が描かれていたりす

る伝承もあるのだが、魔法文化が一般化しているこの世界では“レアスキル”と一纏めにされてしまう。

ちなみに呼び方は魔眼やら神の眼やら邪眼やら様々だが、他の管理世界や管理外世界でも魔眼は存在する。それでも魔眼保持者はかなり希少なものののだが。

『有名所を言えば“石化”、“魅了”<sup>チャーム</sup>、“千里眼”とかその辺りかな。同じ瞳でも力の差があったりもするんだけど』

朔の髪を弄くりながら悠長な口調で話すレイン。彼女の言った通り、瞳には力の強弱があり千里眼などであれば高位になると遠くを見通せるだけでなく、透視能力を発現させたりとその能力は様々だ。

「俺の眼は生れつき、その魔眼の一つを宿してたんだよ。だから俺本来の瞳の色彩は朱<sup>あか</sup>なんだよ」

「それでその能力はどんなものなんですか？」

勿体振る朔にスバルはワクワクしたような瞳を向け、待ちきれないようだ。

「俺の魔眼は魔力の流れを知覚し読み取る能力“流転の魔眼”って呼ばれる物なんだ」

「魔力の流れを……」

「読み取る？」

朔の説明に疑問が残る新人達。それを見てレインは代わりに説明

を始める。

『いい？人は魔法を使用するために自身の内にある魔力の源、リンカーコアっていう物が存在する。でも魔力っていうものはそこだけじゃなくて大気の中にも微粒子のように存在しているの。なのはちやんのスターライトみたいな収束魔法はそういう物を集めて放つてるし、ここまでではわかるよね？』

こくり、と頷くのでレインは説明を再開する。

『大気中の魔力は普段視認出来ない。これはオドとマナの違いからなんだけど、説明がめんどくさいから省くよ？ここまでわかって欲しいのは大気中の魔力とリンカーコアから発生した魔力は似て非なる物って事。そして翔ちゃんは大気中の魔力とリンカーコアから発生した魔力、勿論体内にあるリンカーコアとかもだけどその両方を視て、感じる事ができるの。わかる？』

「大体は……」

「半分くらいなら……」

「私も……」

ティアナはともかく、まだ十才のエリオとキャロには少々難しい内容みたいだったが、

「はは、ははははは……」

一名全くわからず笑ってごまかす青髪少女よりはまだマシだ。



「じゃあ、簡単に言ってみると……皆それぞれの魔力光があるでしょ？ 朧ちゃんなら蒼色。なのはちゃんなら桜色。それが自身の魔力として、大気中の魔力は無色透明って考えて見て。大気中の魔力はそこに確かにある物と理解してるけど視る事は出来ない。自分のリソナーコアもある事は実感出来るけど視る事は出来ない。魔力を魔法に変換させてから人は初めてそれを視る事が出来るの」

今回は解りやすかったのか 若干一名怪しいが なんとか四人ともついて来ているようだ。

「でも朧ちゃんは違う。朧ちゃんは魔力の段階からそれが視えてい  
るの。大気中の魔力も人の魔力もね。そして当然魔法も視えて知覚  
する。だから朧ちゃんには姿を消したティアナがはつきりと視認出  
来たの。解りやすく言うと大気中に人の形をしたオレンジの魔力光  
が存在してるみたいない感じかな」

「だから幻術が効かなかったのね」

そういう事かと納得するティアナ。エリオ達も相槌を打ちながら  
納得する。

「そして朧ちゃんは視えないはずの魔力も視える事で二つアドバン  
テージを得ているの」

「それが朧さんの動きの秘密ってこと？」

「お、エリオも良い感じしてるね。そう、その二つの内の一つが先読  
みする力。人が魔力行使する時、その魔力が向かう方向にほんの少  
しだけ視認出来ない魔力の動きがあるの。予備動作みたいな物かな、  
それがあるから朧ちゃんは魔力の使用されている攻撃の察知が人よ

り早く出来るの』

「それって……」

「無敵なんじゃ……」

『あとは魔法を殺す力だね。見たでしょ？いきなり魔法が掻き消されたりしたの。アレは魔法の綻びに切れ目を入れて分解してるんだよ』

「……………」

もはや絶句しかないティアナ達。それもそのはずだ。

魔導師というのは魔力を行使するから魔導師と言われるのだ。その魔導師の魔法が極端にいれば軌道を読まれて、消滅させられるというのだから。魔導師に対して絶対の力を発揮する能力。それゆえに朧は一部では“魔導師殺し”と呼ばれている。

「そんなに便利な力じゃないんだけどな。この力使ってもフェイトとかなのはに負ける時多いし」

「それはもうなのはさん達ぐらいだけですよ」

「スバルは私達をなんだと思ってるの……」

化け物じみた評価を受けて若干睨み付けるなのは。

「それに俺の魔眼にはデメリットもあるし」

「デメリットですか？」

「ああ、俺の流転の魔眼は効力が高いから普段は封印を施しているんだ。今朱眼じゃなくて黒色だろ？」

「高いのって何か問題があるんですか？高いほどいいと思うんですけど」

不思議そうに聞くキヤロ。効力が高ければ高いほど便利になるのなら構わないんじゃないか、という事なのだろう。

『今キヤロが私や朧ちゃんを視ている部分はどこだと思う？』

「え？眼じゃないの？」

確かめるように言うキヤロにレインは『違うよ』とぼつさり切った。

『視ているのは脳。人は脳が視認出来るものを処理して視界の中に現すの。普通の人間には視えないものが視える、いえ、視えてしまう。それは力が強ければ強いほど脳の処理が追い付かなくなって過負荷を起こす。いくら万能なソフトがあってもそれを使いこなせないハードウェアじゃ宝の持ち腐れの上、壊れちゃうもん。朧ちゃんの魔眼の強さは人間が持つには過ぎた力なの。だから今の朧ちゃんが魔眼を使える時間は少ない。私とユニゾンして演算処理を手伝って最大で30分が限度。でも眼の使い方次第で時間はどんどん削られていくし』

四人は静かにその話に耳を傾けている。

『リミットがくると先ずは激しい頭痛に襲われる。その後ムリして

使い続けると小規模な失明状態に陥る。多分これが最後通告なんだろう。そして恐らくそれでもなお使用し続ければ脳が破壊される。これが使用状のデメリットかな。力を持つ代償』

「代償？」

『うん……代償』

最後に少し悲しげな表情をしたがひとしきり説明を終えたレインは一息付き、朧の頭で寝転び始めた。

「本来の流転の魔眼は辺りの魔力が視えるぐらいで、そこまで効力が強いわけじゃないみたいなんだけど……まあ効力が強すぎるおかげで魔法を掻き消せる程の綻びを見つけられるんだけどね。それでもある程度集中しないと視えないから周りが少し散漫になったりしてあまり使えないんだよ」

朧が身体強化魔法を常時使っていられるのもこの眼により効率的な身体への流し方を知り得ているからである。

「それで、この眼は局ではレアスキル扱いになってむやみに教えるな、ていう上からの命令で今まで黙ってたって事だ。俺が教えられるのはこれくらいだけど……納得したか？」

驚きは大きかったようだがこれまでに見てきた朧の行動がそれを真実だと言っているので四人も素直に頷く。

ちなみに朧の眼の事を知っているのは六課内では付き合いの長い者達だけとなっている。

「それじゃあそろそろ帰ろっか」

区切りの良い所でなのはが提案する。話し込んでしまったので結構時間が経っていたのだ。

「今日は後、アイツの事を話さないとな」

隊舎への帰り道、なのは達が歩く最後尾で自分の頭の上で寝そべるレインに向かい朔が言った。

『その事なんだけど』

「ん？」

『ちょっとだけ待ってくれない？』

「何かあるのか？」

話そうと決心した方からしたらレインからの突然の待ったに出鼻を挫かれた気しかせず理由を聞く。

『今その件について説明出来る内容について今資料作ってるからそれが出来るまで待って欲しいの。完成するまで後少し掛かるから、はやてちゃんとかには私から言っとくし』

「……………」

『朧ちゃん？』

「やっぱりお前は最高のパートナーだよ」

昨日、なのはとの衝突から姿が見えなかったレインは朧の始末書を片付ける他に朧が恐らく話すだろうと予測して、その資料をも纏めていたのだ。

「こういうのを出来る子、と言うのだろう。」

朧も思わぬ答えに一瞬言葉を失ってしまった。

『べ、別に朧ちゃんの為じゃないもん！私だって関係あるんだからこれは私の為にやったの！』

赤らめた顔で朧の髪を何度も引っ張る。これを聞いた者は皆こっと思っただろう……ツンデレ乙、と。

まあこれを聞いたアンチクショーは朧一人だけなのだが。

「まあ、どうにせよ……ありがとな」

『……………うん』

この後、レインは部隊長室に足を運び、はやてに説明し話をするために後日時間が設けられるようになった。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「さて、今回はいよいよ眼の正体が明かされたね」

翔「流転の魔眼つてもっと良い名前はなかったのか？」

レ「ネーミングセンスゼロの作者にはこれが限界だったみたいだよ。候補としては精霊眼やらなんやら考えたみたいだけど。まあこんなの方がいいよ、て言うのがあってそれを教えてくれるようなことがあったら、もしかしたらソレに変更されるかもしれないね」

翔「とりあえず名前の事は置いて本編へ話を進めるぞ」

レ「OK〜って言うっても進めるような事何もしてないじゃん」

翔「ホント説明しただけだもんな」

レ「じゃあ今回はもう止めとく？」

翔「ならレインのプロフィールでも載せるか」

レ「いやだよ、恥ずかしい」

翔「別にたいしたことは載せないって。お前も俺以上に謎だらけなんだから」

レ「……ちょっとだけだよ」

レイン

ユニゾンデバイス

年齢？

魔力光 蒼

魔力変質 氷

魔法術式 アウラ式

単体魔導ランク？

階級 局員として登録していないので無し

使用魔法

単体での戦闘は行っていないので不明

備考

着物好きの女性型ユニゾンデバイス。性能はかなり優秀だが自分に



正直に生きる性格をしている。

昶を子供の頃から知っており、昶のお姉さんの存在でもある。

元々は昶を育ててくれた女性がマスターだったのだが昶へとマスター権が移動された。昶の事を昶ちゃんと呼ぶようになった経緯もいろいろとあるようだ。こういう所からか昶に対してツンデレな行動を示したりすることもあるが本人は認めない。性格の根っここの部分は恥ずかしがり屋。

彼女の中には大きなブラックボックスがあり、その中身を知る人物は今のところいない。

レイン自身、昶にも秘密にしている事が多少なりともあるようだが昶はそれを知ろうとは思わないようだ。

レ「こんなもの？」

昶「殆どわかんないじゃん!!？」

レ「だって私メインの話とかないし。私が出ない話だってあるもん」

昶「……そうだな」

レ「その間はなんだかムカつくけど、もう終わりの時間だから今は言及しないであげる」

昶「助かった……」

レ「ちょっとびり急ぎ足でしたがでは、」

レ・翔 『次話にてお待ちしております! ! !』

## 第二十四話 魔眼（後書き）

どうでしたか？

正直私は自分のネーミングセンスのなさに絶望してしまいました（苦笑）

良い名前があれば教えて下さいね

次話はもしかしたら少し遅れるかもしれませんが。させる気はないんですがなにぶんバイトが物凄く入っていて時間が取れるか……

でもそんな時、皆様の感想が支えになります！！

質問、感想等お待ちしております！！

では、次話にてお待ちしております！！

## 第二十五話 サキ（前書き）

すみません、遅くなりました!!

どうも、マクロスの映画を昨日観に行った夕です!

私は映画の方が好きですね。艦長ヤバイです（笑）

UCの三話も凄くよかったです!

さてさて、今回もバトルなしの説明回です!

グダグダ感はありませんがこれである程度の秘密は判ります。

では、どうぞ!!--!!

## 第二十五話 サキ

「……………」

とある場所のとある空間。展開された膨大な情報をあれよこれよと高速で取捨選択していく。

この作業を始めて、はや数時間。これだけ探しても見つからないという事は単なる思い過ごしか、と考え始めてしまう。

「ないならないで越したことはないんだけど……………」

そして手の動きが止まる。

「チツ、やっぱり……………」

見付けた内容に思わず舌打ちしてしまう。

「これは……………あの子に頼むしかないかなあ」

暗がりで見えるその口元は少し、笑っているように見えた。

「それじゃあ、話してもらおうか」

一室に集まったのはFW部隊一同と部隊長であるはやてに加えリイン、シャーリー。皆の視線は朧とレインの方へと向いている。

集まったのは他にもない。アグスタでの乱入者について朧に話を聞くためだ。

「これを見せてくれ」

モニターに現れた映像は黒いローブの女性。

「コイツは俺と同様に幾つものデバイスを所持していて使い分ける。俺は剣だけでなくコイツは多種類の武器を扱う。確認出来ただけでも、刀、銃、槍、鎌。恐らく他にもあると思う」

説明と共にモニターの情報も次々と差し変わっていく。ちなみにこれらの資料作成は全てレインによるものである。

「魔力保有量もずば抜けて高く、戦闘技術は軽く見積もってオーバーSランク以上。判断力、反応速度、魔力運用……どれをとっても一級品の実力を持っている」

モニターの情報と照らし合わせながら淡々と説明していく朧。

公開されていく数多もの情報。

「あの……一ついいですか？」

その途中に手が拳がった。

「ん、どした？」

スバルだ。

「この女の人ってアグスタで朧さんが闘った人なんですよね？」

「ああ、そうだよ」

「……朧さんはこの人と知り合いなんですか？」

新人達は隊長陣とは違い、今初めてこの話を聞いている。この疑問は当然だ。

説明している今も朧は大事な事を未だ何一つ話していない。話すと決めても心のどこかでブレーキを掛けてしまっているのだ。

その姿を見て不安そうに朧を見つめるフェイト。

当然、このままではいられない。

「そやな、そろそろあの人が誰なんか、どういう関係なんか……教えてもろてええか？」

机に肘をつき、拳に顎を乗せるようにしてはやては言っ。





「フエイトさん？」

「十七年前に管理局の航空武装隊に所属していた魔導師。歴代最強と言われたエース・オブ・エースにして最悪の裏切り者の烙印を押された人」

フエイトが言うそれは以前、ティアナやスバルが言っていた人物。仲間に重傷を負わせ、逃亡しS級の広域次元犯罪者と言われている。

「でも確か朧くんの保護者って……」

怪訝な顔をするのは。  
それもそのはずだ。

「ああ、もう死んでる」

そうなのだ。朧の保護者であった人物は八年程前に既に亡くなっている。

「ならどうして……」

死んだ人間は生き返らない。それは世の真理。

なら何故サキ・クルスは朧の前に現れたのか？

「そうか、そこでスカリエツィ……ちゅうわけやな？」

言ったのははやて。

「そうだ。これは俺とレインの憶測の域を出ないけど、ほぼ確定だ

と思う」

「人造魔導師……」

人造魔導師、人間に対して主に外科的な処置、調整によって強力な魔力や魔法行使能力を持たせる技術。

魔法文化が全盛となって以来、幾度も試みられた研究だが、成功率の低さや倫理的問題などから禁忌とされた研究。

スカリエツティが最も得意とする技術だ。

はやての呟いた言葉に数人反応したが、それに構わず話を進める。

「俺が二年間、ミッドに帰って来なかったのもサキの噂を聞いたからだ、『サキ・クルスが生きています』って」

それを聞いた当時の昶はすぐにリンディ・ハラウンと連絡を取り、サキ・クルス搜索の任務に就けてくれと懇願したのだ。

「生きていないわけがないからな。サキは俺が殺したんだから」

『　　っ！！？』

昶の発言に動揺が走る。

エリオやキャロなんかは信じられない、というかのように目を見

開いている。

「違う！ 昶が殺したんじゃない！！」

「一緒だよ。俺が殺したと同じなんだ」

フェイトの必死の否定も昶自身が認めなければ意味がない。

「ゴメン、話がみえへんねんけど」

周りから見れば全くもってその通りだ。

「簡単な事だよ。俺を庇ってサキは死んだ。ただそれだけ」

サキの最後は昶の油断と甘さが招いた結果の事で、昶はそれ自分分のせいだと思っている。

はやて達は昶自身が殺した訳ではない事を知り、とりあえずは安堵する。

「俺の目の前で息を引き取ったんだ、間違えるはずがない。だから俺はその噂を否定する為に二年間頑張り続けてきた」

一番生きていてほしかったと思っていた者が一番生きている事を否定する。皮肉な事だが、浅儀昶にとってそれは決して譲れない。

「自由気ままですぐに人をおちよくるお調子者だったけど、優しくて強くて、サキは俺の憧れだった」

生きるきっかけを与えてくれた最初の人物。エリオやキャロにと

つてのフェイトのような存在。

「なんだか想像していたような人とは全然違うというか……なんでそんな人が犯罪者に？」

昴の話聞き、ティアナは自分の聞いてきた人物像とあまりに当て嵌まらない事に疑問を感じる。

「こつという事は新人達にあまり言いたくないんだけど……」

その当時サキ・クルスと局員の十数名はある任務に出ていたのだという。それは暴走の危険性を持った希少能力者の子供を保護するといった内容だった。しかし、その実態はその希少スキルが欲しかった一部管理局上層部の保護とは名ばかりの拉致行為に等しかった。

子供は両親と静かに、平和に暮らしていただけだった。それを両親から引きはがし抵抗する二人を魔法で攻撃。

その現状を目の当たりにしたサキは部隊の全員を行動不能にし、その親子連れを逃走した。それが秘密裏に事実が書き換えられ、サキ・クルスはS級次元犯罪者にされた。

「サイテー」

誰かがそう言った。

他の者もこの話を聞き、皆思い思いに顔を背ける。

「今はどうか知らないけど、こんな事が管理局内部の一部では起こっていたんだ」

これが朧の管理局嫌いの理由の一つでもある。  
時空管理局だって一枚岩ではない。海や陸に別れているだけでなく、その中でも様々な派閥や主義に枝分かれしているのだ。

「信憑性のカケラもないこの話、皆は信じてくれるか？」

朧の言う通り、この話には証拠となるような物は何一つとして存在しない。頭のおかしくなった馬鹿の被害妄想とも受け取れる物だから、朧は臆した。信じてくれないんじゃないか、と。

572

「何を言っとんねん、信じるに決まってるやろ」

「うん むしろ信じないと思われていた事の方が心外だよ」

「管理局に裏側があることくらい知っている」

「まあそういうことだ」

『です』

「僕も似たような事ありましたし……」

「私も……」

「兄さんの事もありますし」

「朔さんが嘘つくとは思えないですもん！」

はやて、なのはを皮切りに皆頷いていく。

「私やレインだけじゃない。皆、朔の仲間なんだよ。もっと信頼しなくちゃ」

朔は今まで自身の暗い部分を極力話さないようにしていた。知っているのはリンディやクロノを含む極少数の人間だけ。それは信じてもらえないかもしれない、という考えの他に、サキ・クルスの事件の当事者に知られる事を避ける為でもあった。

だから話せなかった。どこから洩れるかわからないから。だがそれはフェイトの言う通り、朔はなのは達を本当の意味で信頼出来ていなかったのだ。

それを気付かされた朔は頭を下げた。信頼出来てなくてゴメン、と。そしてありがとう、と。

そんな朔の姿を見て皆、笑みをこぼす。

その本人は少し照れながら話を続ける。

「サキがスカリエッティに付いてる理由は大体想像出来る」

「なんなんや？」

「サキの目的は多分」

警

第一級のアラートが鳴り響く。

「ロングアーチ！何事や！！？」

すぐに管制の方と連絡を取る。

「部隊長！」

モニターに現れたのはシャーリー。その表情には焦りの色が見える。

「センサーが真っ直ぐこちらに近付く魔力反応を感知しました！なにこれ、速いっ！！？」

「シャーリー、映像出せるか！？」

「映像出ます！」

シャーリーと交代で映し出されたモニターには、

「サキ……」

黒いローブに身を纏ったサキが飛んでいる姿が映っていた。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「今回は前回と同様、説明会だね」

翔「サキについてだな」

レ「細かいところはぼかしてるけど」

翔「まあそれは後々という事で……」

レ「サキの名前も今回やっとまともに紹介出来たね」

翔「顔立ちとかは完璧な日本人だけど、アイツはハーフなんだよな」

レ「『サキ・クルス』って名前の理由もそれなんだって。日本語に直したら『来栖沙紀』とも言ってたけど」

翔「レインは元々サキのパートナーだったし、サキの事も詳しいのか？」



レ「まあ翔ちゃんよりは古い付き合いだね」

翔「……お前って一体何歳なの」

レ「さあ？」

翔「……」

レ「べ、別に何歳だっていいでしょ！！？女の子に年齢を聞くなんてサイテーなんだから！！」

翔「まあいいけどさ……」

レ「でも翔ちゃんも漸くなのはちゃん達に話せたね」

翔「サキの事は俺の罪だしどうしても言いにくくなっちゃってたんだよ」

レ「皆わかってくれてよかったね」

翔「ああ、心配は杞憂だったみたいだったよ」

レ「次話はまたサキの登場だね。翔ちゃん、やっぱり闘うのはイヤ？」

翔「そうだな……アイツには俺を殺す理由はある。けど、俺は闘いたくないよ……」

レ「そっか……それじゃあ、次話がどうなるのか！では」

レ・翔『次話にてお待ちしております！！！』

第二十五話 サキ（後書き）

どうでしたか？

ちょっと変じゃね？や、これどいう意味？みたいな疑問があれば是非言ってください！！

感想等もお待ちしています！！

今回はサキっちの登場です！

どうなるのか！！？

では、次話にてお待ちしております！！！！

第二十六話 お願い（前書き）

どうも、花粉症という地獄に悩まされている夕です!!

いよいよ彼女のとーじょですね（笑）

さてさてどうなるか……

では、びんごー……

## 第二十六話 お願

黒いローブで全身を覆う女性が地面に降り立つ。

そこは六課の訓練場。誰もいなかった為、今は平らで何も無いスペースとなっている。

彼女は歩を進める。その先に見えるのは機動六課隊舎。

だがここは彼女からすれば敵の拠点。当然、行く手を阻む者は現れる。

疾

「動かないで」

左右には魔力弾を待機させたスターズ、ライトニングの隊長。前方、後方には鉄槌と剣を構える副隊長。

「……」

リミッターが付けられているとはいえ、名だたるエースと歴戦の騎士四人に囲まれてなお、女の姿勢は変わらない。

だが突然、ピクリと何かに反応した。

「サキ……なんだろ？」

ワンポイントに赤い宝石の付いた黒いチョーカー、肩に着物少女

を乗せた少々心許ない身長青年、浅儀昶が言った。

昶はBJを着ていない。茶色い六課の制服のままだ。

「フフ……」

昶の言葉に女は薄く笑う。見え隠れする口元は小さいが確かに緩んでいる。

「な〜んだ、やっぱり気付いてたの？無口で損した」

まるで友人に話し掛けるような声と共に女はフードに手を掛け、ソレをとる。

黒い長髪に黒い瞳、“大和撫子”と言う言葉を具現化させたような顔立ち。その姿は昶の知る、サキ・クルスそのままだった。

「何をしにきた？まさか一人で六課を制圧しにきた訳ではあるまい」

サキの正面でシグナムが問い掛ける。威圧するシグナムに対してサキはてんで動じない。

「そう殺気立つの止めて欲しいわねえ。え〜っと貴女、マグナムだっけ？」

「シグナムだっ！！」

閃

故意か過失か、いきなりポケをかましたサキにシグナムはレ

ヴァンティンを振りかぶる。

が、

疾

「ッ！！？」

「だからそう身構えないで、謝るから、ね？ “シグナム”」

油断していた訳ではなかった。

ただ、一瞬。

一瞬の隙に懐に入れ首筋に刀を当てられた。

シグナムには動きの入りどころかデバイスの展開さえ見えなかった。

「あ、貴女達も動かないでね」

「クッ……」

困んでいた三人の方へは銃が向けられている。

誰もその動きに付いて行く事が出来なかったのだ。

顔を歪める三人。その表情を見てサキは依然笑みを浮かべたまま。

「あゝ私、別にドンパチやりに来たんじゃないんだけど……っつてこれじゃあ信用出来ないわね」

困ったような声の反面、一向に変化を見せない表情。

『なら武器を下げてくださいへんか？』

現れたモニターには部隊長であるはやての姿が映っている。

「ありやく、部隊長さんまで。ならそちらも武器を収めてもらえる？さつきも言ったけど今回ここに来たのは闘う為じゃないの」

『……皆仕舞ってくれるか』

はやての判断に従い、デバイスを待機状態に戻すのは達。

「話が早くて助かるわ」

ニッコリ笑い、それと同時にサキも両手の武器を戻し、シグナムから離れる。

その様子を見てひとまず安堵の表情を浮かべるはやてだがすぐに部隊長としての顔に戻す。

『で、あなたは一体何しにきたんや？』

単身乗り込んできた侵入者に彼女は問うた。

問われた本人はと言うと、

「ん？ 朧にお願いしにきたのよ」



と、淡泊な口調で言った。

サキには本当に戦闘の意思はないようなので朧達は場所を先程までいた会議室へと移した。

その場にいるのは朧、レイン、なのは、フェイト、シグナム、はやて。席に着いているのはサキとはやてのみで互いに対立するような位置に座っている。

当然、朧達は皆すぐに動けるようにはやての後方に待機している。

ちなみにヴィータは新人達と共に別の部屋で待機している。勿論、この部屋とは通信を繋いでいる。

サキからまだ本題を全く聞いていない。辺りは静かに彼女の“お願い”について聞く為に耳を傾けて、

「レインも変わってないわね。まだ着物着てるんだ？」



「あんたら敵同士やる！？なんやねんその仲良しこよしなお話しは！！！？あんたら私を舐めてるんかぁ！！？」

敵との接触など普通はシリアスな場面の筈だが飛んだシリアスブレイカーがいたものだ。

「あゝ、ゴメンね。久しぶりに会ったからつい」

『ゴメン、はやてちゃん』

反省の色がカケラ足りとも見えない二人に思わずため息が漏れる。

以前、朧からレインは自分の保護者から譲り受けたと聞いたことがあったはやてはこう思った。

「（このマスターおってこのデバイスありやな……）」

ひとまずコホン、と咳ばらいし空気を立て直す。

「それで、朧くんをお願いってなんなんや？」

これ以上話を逸らされたらたまったもんじゃないので早速本題に突入する。

「ちょっとここに行ってきたてもらいたいのよね」

そう言ってサキは一つのデータを展開させた。

「……」

「管理外世界の十三番よ。緑が多くて誰も住んでいない無人世界。近々管理局が開墾しようとしてるらしいわね」

映し出された場所はサキが言うような緑が溢れる自然豊かな場所だ。

「でもこんな所に一体何が……？」

思わず呟いてしまうフェイト。

「この世界にスカリエッティの研究施設があるの」

「なっ！！？」

「そんな近くに！？」

今まで数年に渡ってガジェット達は現れており、その場所にはリックや研究所が発見されるケースが多く、今ではそれらの研究所はスカリエッティのものだと判断されていた。

そして研究所が発見される場所は百番代などの第一世界であるミッドチルダからそれなりに離れた世界でこのような近くで発見された形跡は今までなかった。

「こんな近くで見つけられなかったなんて……」

単なる灯台下暗し、というわけではない。この意味がどういう事か、ここにいる者達はきちんと理解している。

「はいはい、考えてる事はわかるけど今はおねーさんの話を聞きな

さい」

パンパン、と手を叩き自分の方へと注目させる。

「発見出来なかったのはスカリエッティ（あの変態）が上手く隠していたっていうのも理由の一つよ。貴女達が考えている事の他にね」

見透かしたような物言いのサキ。事実、彼女にはお見通しなのだろう。

「で、私がお願いしたいのはこの研究所の破壊」

「!?!?.....なんでや?」

サキはスカリエッティ陣営の人物。そのサキが自軍の施設を破壊してくれと言うのだ。はやて達からすれば不可解な点が多すぎる。

「他意はないわ。あの施設を私が気に入らないだけ。スカリエッティ自身があの施設を使用していたのは随分前だったらしいし、これは私の独断よ」

先程までとは違う彼女の放つ独特の空気が部屋を包む。それだけサキにとって真剣な事なのだろうと受け取れる。

「行ってくれるのなら少しくらい情報提供してあげてもいいわ」

私が話せる事は限られてるけどね、と言うが彼女の提案は後手に出るしかない六課からしてみればかなり魅力的な物だ。

「で、どうなのよ?さっきからずっと黙ってるけど。私はあんたに

行ってもらいたいのよね」

その声で皆の視線が一カ所に集まる。

朧の下へと。

「……」

「昔言っただでしょ？そんな顔でもあんたは立派な男の子なんだから言いたい事があるならちゃんと言いなさい」

若干呆れた顔でサキは言う。彼女にとって朧の存在は今でも手の掛かる子供なのだ。

「サキは……」

朧が口を開く。

「サキはなんでスカリエツティに味方するんだよ……」

「味方？冗談。私はあんな変態味方なんて思っただけ。アイツだつてそうでしょうね。こんな使い勝手の悪い駒だとは思わなかったでしょうし。アイツとは契約と単に利害関係が一致してる部分があるっただけよ」

本当に嫌いなんだろう。

少々ご立腹なご様子だ。

「契約つてなんなんだよ」

「私達の間で交わしたルールみたいなもんよ。その中の一部のせいで朧に頼まなくちゃいけなくなっただし」

「利害つてなんだよ」

「そんなの教えるわけないじゃない」

縋る朧と突き放すサキ。

昔と何一つ変わらない雰囲気や言動に混じるように見え隠れする大きな壁。

朧にはそれが敵意に思えてならない。

当然だ。殺したんだから。

だから確かめたい。

俺を怨んでるか

けど聞けない。

返ってくる答えが怖いから

「それで行くの？行かないの？」

「行くよ、行く……」

覇気のない返事を返す。

「と、本人は言ってくれてるんだけど部隊長はOK?」

微笑みながらそう確認するサキ。

「……その研究所には何があるんや?」

「ん〜、鬼の子予備軍?」

「はあ?」

「自分で言うのも変な感じがするわね……私としてはいいない方がよかつたんだけど、アレも管理局からしたら保護の対象でしょう」

一人でぶつぶつ呟いていいいて何を言っているのかよくわからないが、とりあえず保護しなければならぬ人物がいる、という事らしい。

「……よわからんけど、そこに行かなアカン事だけはわかったわ。別に翔くんだけを行かさんでもええんやろ?」

勿論はやては翔一人で行かせるつもりはない。サキを見ていると畏の可能性は低そうだが、それでも信用出来ないのも確かだ。

「別に私はいいけど、それじゃあミッドが心許ないかもしれないわよ?あ、これが私が提示出来る情報ね。あの変態、なんだか探し物があるらしくて近々大掛かりに動くかもしれないわよ」

「!?!?」



サキの話によると今までのガジェットによる小手調べではなく、その目標の為にある程度の戦力を投入するとの事だった。

「……探し物ってレリックやないんか？」

「さあ？知らないわ」

コイツは絶対知ってる……

何故だかはやてにはそういう確信じみた物があった。だがそれと同時に話さないだろうという確信もある。

「その捕物を私が手伝うかわかんないけど、過剰な戦力の分散は止めた方がいいわね。研究所の方は朧一人でなんとかなるレベルだし。まあそこは部隊長さんが決めればいいわ」

どこまでも余裕を見せるサキはそこまで言い終わると唐突に立ち始めた。

「そろそろ行くわね」

「ちよっ、まだ聞きたいことが」

「止めときなさい」

「ッ!!!？」

場を威圧する物言いに誰もが口を閉ざしてしまっ。

「物分かりのいい子は嫌いじゃないわ。私が言える事はもうないも

の。貴女達には期待してるから頑張ってね」

と、その場で六芒星の魔法陣を展開させる。

転移魔法だ。

「サキ！」

「まだなにかあるの？」

めんどくさそうに聞くサキに昶は聞く。

「……俺はサキの敵なのか？」

ポカンとしたサキだったがすぐに笑みを浮かべて返答した。

「当たり前じゃない。次は全力でぶつかってきなさい。でないと私には勝てないわよ」

そう言い残してサキは消えた。

「シャーリー！追跡！！！」

はやてはすぐにロングアーチに支持を飛ばす。

『くっ……すみません、ロストしました』

しかし、転移を繰り返したサキを捕捉出来なかった。

その間、昶はただ呆然と立ち尽くすしかなかった。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「久しぶりにサキと話したわね〜」

翔「アイツ全く変わってないよな」

レ「終始サキのペースだったし。シグナム達も一瞬で力の差を思い知ったみたい」

翔「……俺達あんなチートに勝てるの？」

レ「……さあ」

翔「これどんなムリゲーだよ……」

レ「今回さりげなくサキの魔法陣から彼女の術式がアウラ式って確認出来たね」

翔「まあ俺に魔法を教えてくれたのはサキだし当然と言えば当然だ

よな」

レ「他にも結構伏線ばらまいていったよね」

翔「伏線っていうほどの物でもないのが殆どだけど」

レ「例えばスカリエッティが近々動くって言うのはヴィヴィオの時の事だし」

翔「ああ、でもなんでアイツはヴィヴィオが動く時期を知ってるんだ？」

レ「あれは知ってるんじゃないかって、単にもつすぐ見付かるだろうって事だから言っただけらしいよ」

翔「ホントにサキって適当に言うよな……」

レ「でも言うこともあながち間違いじゃないんだよね？」

翔「まあ……な」

レ「翔ちゃんサキに怨んでるのか？って聞けなかったけど」

翔「……もう少し時間を、心の準備を……」

レ「はあ、まあ仕方ない事だけど」

翔「本編の事はいつか本編で決着を着けるって！」

レ「逃げたね……」

翔「うっ……それより結構前に言ってた十万アクセス記念の企画っていつやるんだよ!？」

レ「無理矢理すぎて及第点にも程遠いけど、まあいいわ。それについてはヴィヴィオが登場してからやる予定らしいわよ」

翔「あ、そうなんだ。何をするんだ？」レ「前回意見をくれた方が結構有力なんだけど、作者はまだ殆どなんにも考えてないらしいよ。だから他にも案があるならどんどん送ってほしいんだって」

翔「まだ考えてないって……」

レ「アイツに今更何か期待してもムダって事だね」

翔「同意せざる得ない……」

レ「まあ今回はここまでというところで」

翔「感想や質問等も受け付けてますので!」

レ「では、」

レ・翔『次話にてお待ちしております!!--!』

第二十六話 お願い（後書き）

どうでしたか？

へたレな翔は結局サキに大事な事を聞けませんでした。まあここは  
まだ仕方ないと思ってくれば幸いです。

では、次話にてお待ちしております!!!

第二十七話 機動六課の休日（午前中の風景）（前書き）

どうも、夕です！！

今回は非常に短くなってしまいました。

別にカットしてもよかったですんですが、現状を伝えるには必要かな、ということを入れました。

では、どござー！！！

## 第二十七話 機動六課の休日（午前中の風景）

「はい、今日の訓練と模擬戦も終了、お疲れ様！」

その掛け声と共に地面にへたれこむ四人。

勿論、その時に『ありがとうございましたっ！』と礼を言うのも忘れない。

「でね？なにげに今日が模擬戦が第二段階クリアの見極めテストだったんだけど……」

『え？』

さも当然のようにサラ〜と言いつつなのは。後ろに立つフェイトとヴィータに視線で合否を問う。

「合格！」

「はやっ!?!?」

検討など明らかにしていないだろうフェイトの早い発表にティアナも素早くつつこむ。

「まあ、こんだけキツチリやって問題があるなら大変だっただ」

フェイトのフォローに入ったヴィータからの厳しい言葉な四人は苦笑いで返すしかない。



「私も皆良い線いってると思うし。じゃあ、これにて二段階終了！」  
無事に終了した御達示に四人は喜びをあらわにする。

「デバイスリミッターも一段階解除するから後でシャーリーの所へ行ってきてね」

「明日からは2ndモードを基本形にして訓練すつからな」

『はい!』

元気に返答するが、彼女達は一つ忘れてる。

「……って明日?」

そう。ヴィータはお昼から、ではなく“明日”と言ったのだ。そしてその疑問を払拭させるように頭の後ろで手を組みながら答える。

「ああ、訓練再開は明日からだ」

「皆、入隊日からずっと訓練漬けだったしね」

「そんなわけで、今日は一日お休みです。街にでも出掛けて遊んでくるといいよ」

隊長陣からの素敵なお褒美に『はい!』と返事をする四人。

四人はこれからの時間をどう過ごすのか、胸を積もらせていた。

『がゆえに我々を襲う被害や災害も十年前とは比べ物にならないほどに危険度を増している！兵器運用の強化は進化する世界を守るためのものである！』

朝の訓練も終わり、隊長陣や残りのヴォルケンス達は食堂にて朝食をとっている中、なんとも物騒な言葉が飛び交っている。大事な事だろうが、少なくとも食事時の話ではないだろう。

『首都防衛の手はまだ足りん。地上戦略においても我々の要請が通りさえすれば、地上の事件発生率も20%、検挙率においては35%以上の増加を初年度から見込むことが出来る！』

勿論、こんな演説じみた言い方をしている人物が六課にいるわけではない。

食堂で流れているテレビのニュース報道。

そこに映っているちよいワルどころか極ワルそうなお顔の人物  
レジラス・ゲイズ中將の演説だ。

「このオッサン、まだこんなこと言ってるのな」

呆れた顔で言うヴィータ。

「レジアス中將は古くからの武闘派だからな」

地上本部トップであるレジアスと首都航空隊で副隊長を勤めていたシグナムは多少面識があるようで肯定とも否定ともとれるどっちつかずな言葉でお茶を濁す。

「あ、ミゼット提督」

「え、ミゼットばーちゃん？」

不意に呟いたなのはの一言にいの一番に反応したヴィータはテレビの方へ視線を向ける。

その先に見えるのは三人のご老体。

本局幕議長、ミゼット・クローベル

武装隊榮譽元帥、ラルゴ・キール

法務顧問相談役、レオーネ・フィルス

「伝説の三提督揃い踏みやね」

はやてがいうようにこの三人が俗にいう“伝説の三提督”なのだ。

「でもこうして見ると……普通の老人会だ」

穏やかな表情で言うヴィータ。

「もう、ダメだよヴィータ。偉大な方達なんだよ」

「管理局の黎明期から今の形まで整えた功労者さん達だもんね」

フェイトとなのはが言う通り、その昔混乱続きだった管理局を支え、人道指揮をとってきたのがあの御三方で、今でも現場は退いてはいるものの、相談役的立場から管理局を見守ってくれている。

「ま、私は好きだぞ。あのばーちゃん達」

ヴィータはパンを口に運びながら嬉しそうに言う。

「朧はミゼット提督が苦手みたいだけどね」

そう言ったのはフェイト。

「朧くん、ミゼット提督にお会いしたことがあったんか？」

驚くように聞くはやて。

他の者も初耳だったらしく皆、同じような表情をしている。

「うん、お兄ちゃんや母さん達と何度かお会いした事があるんだって。一度護衛も頼まれた事もあるって言ってた」

フェイトが言うには、上の方でなにかと動き回っているクロノは当然三提督に会う機会もある。その場に朧も居合わせた、というわけらしい。

「そうだったんだ……でもミゼット提督が苦手ってなんでなんだろう？」

「えっと、本人が言うには『あのばーちゃんどれだけ人を子供扱いするんだよ……』って」

ははは、となのはの疑問に苦笑で答えるフェイト。

「あゝ、なんかわかる気がするわ」

「翔くん可愛いらしいものね」

「結構ガキっぽいしな」

「にははは、ミゼット提督からしたら孫みたいな感じなのかな？」

「そうかも……翔って偶に頭撫でたり凄く抱きしめたくなる時があるし」

上からはやて、シャマル、ヴィータ、なのは、フェイト。

皆、言葉は違つが言ってる事は同じだ。約一名は赤く顔を染めながらなんて事をおっしゃっているのですか。

「それで、翔はいつ頃戻ってくるのでしょうか？」

直角のように鋭く話題を変えたのはシグナム。

「ん？予定通りなら今日中に戻ると思うよ」

そう、翔は今機動六課にいない。

翔は今、レインを連れ管理外世界の第十三番惑星へと出張中であ

る。

理由は勿論、先日六課に押し付けてきたはっちゃん、サキ・クルスのお願いだ。

とはいえ先日と言ってもあれから一週間弱が経過しているのだが。

お願いの内容はその惑星にある研究所の破壊。

しかも、その理由が『私が気に入らないから』というまさに傍若無人な答え。

意味がわからない。

だがそれは彼女にとって大切な事らしく、情報も少なからず手に入った。

情報その一、近いうちに大掛かりな動きを見せる。

これはサキ本人が教えてくれた事だ。大きな捕物があると。

情報その二、スカリエッティの方も一枚岩ではないということ。

以前のサキの様子を鑑みるにサキはスカリエッティと全てに於いて結託しているわけではない。むしろ嫌っていると言ってもいい。

今回の依頼内容からいってもそうだ。普通自分の陣営の研究所を破壊してくれなど頼む筈がない。

利害の一致と言っていた。そこを切り崩せば、とはやては考えているがその利害がわからない事には手の打ち用がない。

そして情報その三、管理局内部にいるスパイの存在。

これは単なる推測でしかないが信憑性は高い。

今回朧が出向いた先は管理外世界と言っても十三番と、ミッドから比較的に近い場所に位置している。

それに頻繁に、とは言えないが定期的に観測を行っている世界での見落とし。 そうそうあるものではない。

これは情報を意図的に隠している人物が管理局内部にいるということを示す。

一応はやてとて打てる手は打っている。

聖王教会の騎士カリムや信頼出来る上司であるクロノ、そして職務態度に難有りだが優秀な査察官であるヴェロツサ。

彼等へ報告し、探りを入れてもらってはいる。

しかし、その成果もこんな早い状態では出る筈もなく、その他に今の六課で出来る事など調査に向かわせる以外にない。

そういう理由で朧は六課を留守にしている。

サキの助言により向かったのは朧とレインだけだ。

他にも同行者を付けようと考えたのだが朧とレインが断った。サ

キは嘘を付いていないから、と。  
だからそっちはそっちで対処に当たっておいてくれ、と。

最後までその案に反対していたフェイトも朧に『大丈夫、今回はちゃんと帰ってくるよ』と宥められ渋々了承したのだ。

既に六課を出て数日が経過しており予定では今日、明日に戻る事になっている。

現在の朧の精神面で少し不安が残るがそれもレインが大丈夫だと言っており、まあ彼女がなんとかしているだろうとはやては考えている。

彼女が現在考えるべきは他の事なのだから。

「……私はこっちですぐに動けるようにしとかなあかな」

そう小さく呟き決意を新たにした。



~~~~~

〜れいんぽすと〜

は「今回は朧さんとレインが出張中やから私とレインとでやるよ」

リ「はいです〜」

は「今回はだいたい原作通りやけど後半が少し変更になってたな」

リ「レインはてっきり今回は朧さんとレインちゃんの方を描写する  
と思ってました」

は「私もそう思ってたんやけど作者はそっち側の話は書かんとこか  
な？って考えてるみたいや」

リ「どうしてです？」

は「理由としてはあんまりいたしたことがないからやそつや。重要  
な事も少しはあるみたいやけど、今は必要ないんやて」

リ「そうなんですか。でもレインにはその方が好都合です 私の出  
番が増えるかもですから」

は「マスコットのお株はレインに取られてるからな……」

リ「はやてちゃん、それは言わない約束です〜!〜!」

は「ごめん、ごめん、堪忍してや」

リ「もう」

は「機嫌直してや。そろそろしめる時間や」

リ「仕方ないですね……えっと、意見や感想、誤字脱字などなど、いっっぱいお待ちしてるですよ」

は「今回は漸く彼女もちらっと登場予定らしいわ」

リ「では」

は・リ『次話にてお待ちしております(です)……!!!!』

第二十七話 機動六課の休日（午前中の風景）（後書き）

どうでしたか？

キリが良いところがあそこら辺になってしまい、続きを書くとき長くなってしまいそうだったのであそこまでにしました。

次回も恐らく短いと思います。まあ書いてみないとなんとも言えませんが（笑）

では、次話にてお待ちしております!!!

第二十八話 機動六課の休日（午後の風景）（前書き）

すみません、すっごい遅れました!!

どうも、牧割りの鈍器で手をおもいつきり殴ってしまった夕です！

痛い……（泣）

かなり遅い更新となつてしまいました。

今回も前回と似たり寄ったりですが少しずつ話は進んで行くので見てください！

では、どござー！……

第二十八話 機動六課の休日（午後の風景）

「これが……」

『多分ね』

「また厄介なものを……」

『どつするの？』

「決まってるだろ」

『だね』

休日を言い渡された新人FW四人。その内の二人、エリオとキヤロはレールウェイに乗り、街を目指していおり車内で楽しそうに談笑中である。

ちなみに二人の予定はこうだ。

『まずはレールウェイでサード・アヴェニューまで移動。市街地を散歩』

『ウィンドウショッピングや会話等を楽しみ、食事はなるべく雰囲気良く、会話が弾みそうな場所で』

『その後は映画を観て、夕方は海岸線の夕焼けを眺める』

雑誌引用してきました、と言わん内容。十歳ばかりの子供に一体何を期待しているのだ。無駄に律儀な二人はそれを一つずつこなすつもりみたいだ。

今時大人のデートだってこんな物はないだろうに……

ちなみのちなみにこの予定の立案はシャーリーであり、フェイトも目を通してOKサインは出している。

バカかこいつら……

と、こんなことはさておき、先程言ったように二人は楽しく談笑中だ。

「そういえば、キャラの竜ってフリード以外にもう1騎いるんだよね？」

今話題に上がっているのはキャラの召喚龍について。

「うん、ヴォルテール。黒くてすごく大きな龍。フリードは私が卵から育てたんだけど、ヴォルテールはアルザスの土地に憑いている古い守護龍なの」

ヴォルテールは近隣原住民からは信仰の対象とされる事も多く、アルザスの地において『大地の守護龍』と畏敬される希少古代種の真龍。

キャラが故郷を追放された原因でもある。

「だから私の龍って言うよりは私がヴォルテールの横で力を貸してもらっているというか、そんな感じ」

「そっか、フリードみたいに紹介してもらえたら嬉しいんだけど、そんなに偉大な龍ならわざわざ来てもらって挨拶だけってわけにはいかないよね」

隣の席に座るキャラに少し残念そうに言うエリオ。

「うん……大きさも大きさだし、ヴォルテールの力を借りるのは本当に危険な時だけだから」

巨大個体であるそれは、現代の人間の魔法や科学を含む理解力では計りきれない能力や行動様式を持ち、その存在が一つの戦争だと言ってもいいくらいなのだ。

「でも、いつかきつと紹介するよ！フリードもね、エリオくんの事本当に友達だと思ってるみたいだから」

胸の前でグツと両手を握りしめながら言うキャロ。

「そっか、嬉しいな」

「ヴォルテールとも、きつと仲良く出来ると思う」

互いに目を合わせ笑いあう二人。なんともほほえましい光景だった。

「やっぱりここのアイスは形からしてステキだ」

「……あんたホントにアイス好きね」

「うん、好き」

一方、スターズ組の方はというとヴァイスからバイクを借り街にまで遊びに来ていた。



初めに向かった場所は訓練校時代の馴染みのアイス屋。当然アイスを注文する。丸いアイス二つのティアナ対してスバルは色とりどりのアイスが九つ。

しかも一口で一つを飲み込んでしまう。

……寒くはないのか？

そんなスバルに馴れきっているティアナは呆れながらもぺろりと自分のアイスを舐める。

「で、特に何も決めずに来たけどこれからどうする？」

「ゲーセン！」

突然の休日の為、無計画でやってきたのだがスバルは既に行き先を決めていたらしい。

「いいわね、久しぶり」

昔はよく遊びに行っていたが働き詰めの毎日を送っている六課に入ってから当然ご無沙汰だったのでティアナの言う通り、本当に久しぶりなのだ。

最近は何にかと神経を擦り減らす出来事が多かっただけに今日の休暇は良いタイミングだった事だろう。

「本当、のんびりって感じね」

ティアナはそう自然に呟いていた。

「なんだかホント、のんびりだね」

「うん」

公園にまで散歩に来たエリオとキャラはベンチに座って一休みしている。

そうしていると楽しそうに前を横切る子連れの家族に自然に目を向けていた。

「キャラは六課に来る前はこういうお休みとか過ごしてた？」

「実は、あんまり……」

特殊な過去を持つ二人は普通の休日の過ごし方など今まで知る機会が殆どなかった。

「でもフェイトに遊園地とか水族館に連れていってもらったことはあるよ」

「あ、ホント？僕もだ」

しかし二人の共通の話題でもあるフェイトがそんな二人を遊びに連れていってくれたのだ。

「僕の時はお化け屋敷に入るのをすっごい嫌がってたりしてたなあ」

「うん、私の時もそうだったよ。あとアルフとお昼ご飯を取り合いましたりしてて」

「それをフェイトさんやレインが笑いながら見てるんだよね」

笑いあう二人。もう一人の共通の話題であるお化け屋敷を昔から今のようにな扱い方だったようだ。

余談だがお化け屋敷でも入れたお化け屋敷を怖さのあまりにアトで半壊させてこっそり絞られた事がある。

本人曰く『作りものがダメ』なのだそうだ。

「初めて遊園地に連れていってもらった時は凄く楽しくて、楽しんで、だけど日が暮れて楽しい時間が終わっていつっちゃうのが悲しくて、それでちよつと泣いちゃって」

「うん、なんだかよくわかる」

楽しい時間が名残惜しくなるのは誰だっただけである。

それが小さい子供で、初めての事なら尚更だ。

「前日は楽しみで眠れなくて、遊び終わった日はずっと寂しくて」

エリオの言葉を嬉しそうに相槌を打ちながら聞くキャロ。同じ気持ち、同じ考えの人間がいることが嬉しいのだ。

「今ならわかるけど、フェイトさんも朧さんも凄く忙しいのにその合間に面倒見てくれてたんだなって」

幾つもの次元世界へと赴く執務官の仕事は多忙だ。

執務官補佐にしたって執務官に付いて行くので同じだ。

そんな中の貴重な休みを自分達の為に使ってくれている。それは凄く幸福な事だと二人は考えている。

「だから、少しずつでも恩返しが出来たらなって」

「うん！一緒に頑張る」

そう言って二人はまた歩き始めた。

暗がりの広がった空間。

いるのは白衣の男だけだが、モニターには男と同じ紫色の髪的女性が映っている。

『レリック反応を追跡していたドローン型六機全て破壊されています』

女性は淡々と報告を行っている。

「ほう、破壊したのは局の魔導師か……それとも“当たり”を引いたか」

『確定は出来ませんが、どうやら後者のようです』

そう聞いて男の口端が嬉しそうに釣り上がる。

「素晴らしい、早速追跡を掛けるとしよう」

「ねえ、ドクター」

会話に入ってくるのはぴっちりしたライダースーツにジャケットを着た赤毛の女の子。

「それなら私も出たいんだけど」

「ノーヴェ、君か」

ノーヴェ、と呼ばれた女の子は自分の主張を言う。

『ダメよノーヴェ。貴女の武装はまだ調整中なんだし』

「今回出てくるのが“当たり”なら、自分の目で見てみたい」

「別に焦らずとも、アレははずれ必ず、ここにやって来る事になるわけだがね」

確信しているように男は言う。

「まあ、落ち着いて待っていて欲しいな。いいかい？」

「……わかった」

あまり納得していないようだが男に諭されノーヴェは渋々戻って行った。

『ドローンの出撃は状況を見てからにしよう。妹達の中から適任者を選び出します』

ああ、と返答するとモニターが移り変わる。

「愛すべき友人達にも頼んでおく事にしよう」

そこに映るのは一際高いビルの屋上。そこに佇む小さな女の子。

「優しいルーテシア、聞こえるかい？レリック絡みだ。少し手伝ってくれるかい？」

『……うん、いいよ』

一呼吸置いたように答える少女だが、これが彼女の話し方なのだ。

「ありがとう、ルーテシア。詳細はまたあとでウーノに送らせるよ」

『……わかった』

そうして再び画面が入れ代わる。

「やあ、サキ」

映るのはどこかのお店で赤いケーキを食べる黒髪の女性、サキ・クルス。

『なに？せつかく食べてるケーキがまずくなっただけだ』

刺々しい態度だが彼女自身、男の事をかなり嫌っているので仕方がない。

「それは済まなかった。お詫びに今度お菓子をこ馳走させてくれ」

『アンタからのお菓子なんて気持ち悪いだけよ。それより早く用件を言いなさい』

ケーキと紅茶を口に運びながら催促するサキ。

「そうかい、残念だ。……どうやら“当たり”を引いたらしくてね。君にも手伝って欲しいんだよ」

『わかったわ。始まったらクアットロ以外の誰かを寄越すか連絡しなきゃ』

「そうするよ。相変わらず君はクアットロが嫌いなんだね」

『理由はアンタだってわかってんでしょ。殺してやりたいくらいよ』  
そうして通信が切れた。

「殺してやりたい、か。フッフ……ハハハハハハハハハハ」 狂ったように笑う男。

サキが言う理由、勿論男はわかっている。

彼女の言うクアットロ、という女は色濃く男の影響を受け継いでいる。

だからサキはクアットロが嫌いなのだ。先程言ったように、殺してやりたいくらいに。

それは同時に男自身に対する言葉だと言う事も男は理解している。

だがサキは男に手を出さない。

契約があるからだ。

だから笑う。滑稽過ぎるから。

「さあて、祭の準備を始めようか」

男 スカリエッティは一人、そう呟いた。



それと同時に、一つの通信が六課隊員に流される。

『こちらライトニング04。緊急事態につき現場状況を報告します！サード・アヴェニューF-23の路地裏にてレリックとおぼしきケースを発見。ケースを持っていたらしい小さな女の子が一人。女の子は意識不明です。指示をお願いします！』

事態は少しずつ進んで行く。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

は「今回もレインと翔くんはお休みや」

リ「またまたリイン達本編出番なかったですね……」

は「そやな……これはもうこの名前を【はやてぼすと】に変える  
しかないな」

リ「何を言ってるんですかはやてちゃん！！？それなら【りいんぼ  
すと】ですよ！レインちゃんだってユニゾンデバイスなんですから  
！」

は「……なんやリイン？マイスターに齒向かうんか？」

リ「……はやてちゃんも私に譲る気はないですか？」

は・リ『……』

は・リ『やあああああああああ！！』

10分後……

は「……やめ、とこか……」

リ「はい……ですう……」

は「今回もまた翔くんとレインが出えへんお話や」

リ「エリキャラとスカリエッティ陣営が基本でしたね」

は「エリキヤロはホンマにええ子達やなあ」

リ「翔さんはいなくてもダメダメですね……」

は「それが翔くんクオリティーでもあるんやけどな」

リ「次からは原作の第十一ですね」

は「漸く私らも活躍出来る場面が出てくるな」

リ「はいです」

は「ところでもうちらつとヴィヴィオが出て来たけどそろそろ十万アクセス記念の話をするんとちゃうかったか？」

リ「そうですね。でも未だ内容が決まっていらないですよ？」

は「あんの作者は……」

リ「読者さんも何か案があれば教えて欲しいです！」

は「感想にでもメッセージにでもどんどん送ってくれると嬉しいですよ！」

リ「勿論、感想や質問、誤字脱字、その他イロイロお待ちしてるです」

は「いつ翔くん出てくるんやろうな……」

リ「リインみたいに空気じゃないだけ翔さん達はいいですよね……」

は「では、」

は・リ『次話にてお待ちしております(です)!!!!』

第二十八話 機動六課の休日（午後の風景）（後書き）

どうでしたか？

やはり地の字が上手く書けない……

やっぱり読んで書き続けてのべんきょーあるのみですね!!

と、いうわけで今から今日買ったSAOの新刊を読むぞ!!（笑）

れいんぽすに書いた内容も出来ればヨロシクお願いします（汗）

では、次話にてお待ちしております!!

第二十九話 機動六課の休日（戦闘風景）（前書き）

どうも、最近の悩みが本棚に本が収まりきららない、の夕です（笑）

第二次スパロボZ面白いですね。

少しグレンラガンに興味が湧きました。

曲ぐらいしか知らないんですよね。

あとリトバスもプレイしてるんですがクドルートやばかったです。

途中ボイスの存在を初めて呪いました（笑）

でもクド可愛すぎて生きるのが辛かった（笑）

……すみません、関係なかったです。

初めに言っときます。

今回も主人公空気です（笑）

では、本編をどうぞ！！！

第二十九話 機動六課の休日（戦闘風景）

「これでひとまずは安心かな。お腹減ったし、どこかで昼ご飯でも食べるか？」

『何を言ってるの？大変なのはこの後だよ。どうするつもり？』

「いや、そりゃわかってるけど……ん、通信だ」

『誰？』

「さんだよ。なんで俺の通信先知ってるんだ？」

『なんて？』

「……急ぐぞ」

『お昼に？』

「違うよバカ」

一日お休みをもらっていた新人達。

その中の二人、エリオとキャロが散歩中に見つけたレリックとそれを持って気絶している金髪の女の子。

そして恐らくレリックは地下水路にもう一つ。

すぐに全体通信で皆を呼び出したお陰でティアナにスバル、なのは、フェイト、シャマルにラインが既に現場に集まっている。

「ケースと女の子はこのまま搬送するから、皆は現場捜査ね」

「はい！」

なのはの指示に返事をする四人。皆、すぐに行動を開始する。

『ガジェット、来ました！地下水路に数機ずつのグループ。総数…  
…十二…十六…二十！』

『海上方面、十二機単位が五グループ！』

ロングアーチから報告され、次々と現れるガジェット。

「私達も出るよ」

女の子をへりに運びながら言うのは。

『うん、今海上で演習中やったヴィータがこっちに向かってくれて



る。リインはヴィータと合流して海上の南西報告を制圧。なのは隊長とフェイト隊長は北西部からや。女の子とレリックはヴァイスくんとシヤマルに任せてええか？」

『南西部、了解です！』

「こちらも」

「了解」

「お任せあれ！」

「しっかり守ります！」

はやての指示を聞き入れ、各々が了承する。

指示を飛ばしながらはやてには一つの考えが頭を過ぎる。

《なんだか探し物があるらしくて近々大掛かりに動くかもしれないわよ》

ガジェットの狙いがレリックなのか、それとも女の子なのか、ア  
しは今日の事だったのか、それはまだわからない……

電波塔の先端に紫の髪をした一人の少女　ルーテシア・アルピ  
ーノが佇んでいる。

そこに通信が繋がられる。通信相手はスカリエツティの補佐をし  
ているウーノ。

『へりに確保されたケースとマテリアルは妹達が回収します。お嬢  
様は地下の方に』

ウーノからの要請に「ん」と小さく頷く。

『騎士ゼストとアギト様は？』

「……………別行動」

『……………お一人ですか？』

不安そうな声だが表情に変化はない。

「一人じゃない」

そう言って両手に装着しているデバイス　アスクレピオスから  
黒いナニカが現れる。

「……………私にはガリユーがいる」

『失礼しました、協力が必要でしたらお申し付けください。最優先で実行します』

「……………うん」

ルーテシアの返事と同時にモニターが切れる。

「……………行こうか、ガリユー」

その言葉に応じるようにナニカが光り、足元にはベルカ式らしき紫の魔法陣が展開される。

「……………探し物、見付ける為に」

そう言って彼女は消えた。

地下水路ではティアナ達と合流すべく、一人の女性が駆けている。

ギンガ・ナカジマ、陸士108部隊に所属する陸曹でスバルの姉。

既にテイアナ達とは連絡を取っており、現在は六課にいるはやてに報告しながら合流地点へと向かっている最中だ。

「私が呼ばれた事故現場にあったのはガジェットの残骸と壊れた生体ポットなんです。ちょうど五、六才の子供が入るくらいの」

別の案件を捜査していたギンガだが、現在行われているこの事例と繋がっている可能性が高い為、捜査に合流しようとしている。

「近くに何か重いものを引きずって歩いたような跡があり、それを辿って行こうとした最中、連絡を受けた次第です」

この話から推察するに、ポットの中身は女の子。引きずった物はレリックだと簡単に当たりをつけられる。

「それからこの生体ポット、少し前の事件でよく似たものを見た覚えがあるんです」

『私も、や』

ギンガの言葉に頷くようにはやても答える。

「人造魔導師計画の素体培養機」

『ッ!?!?』

「これはあくまで推測ですが、あの子は人造魔導師の素材として造り出された子供ではないかと」

「レイジングハート！」

『アクセルシューター』

弾・弾・弾・弾・弾

打ち出される桃色の弾丸が容赦なくガジェットを破壊していく。

『スターズ01、ライトニング01順調。スターズ02もーグルー  
プ目撃破です』

「良い感じだね」

ロングアーチの声が聞こえ、フェイトも安堵感からかなのはに声を掛ける。

「うん、この調子なら……増援っ！！？」

こちらの方へと飛んでくるガジェット達はなのはとフェイトを取り囲むように飛び、まるでこちらの様子を伺っているようにも見え

る。

「この反応……」

それだけではない。

増

「なっ！！？」

いきなり、ガジェットの数が増えたのだ。

「ロングアーチ、これは！？」

『わかりません！どれも実機としか！』

なのは達も直に見ても実機にしか見えない。

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

背中合わせに魔力弾を打ち出すのはとフェイト。

だが破壊されて行くガジェットと別に弾をすり抜けている機体が存在する。

「幻影と実機の構成編隊……」

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

取り囲みながら次々と放たれるガジェットの攻撃を球体バリア系

の防壁で防ぎながらなのはとフェイトは状況を確認しあう。

「防衛ラインを割られない自信はあるけど、ちょっとキリがないね」

「ここまで派手な引き付けをするって事は」

「地下かへりの方へ主力が向かってる」

地下の方はギンガを含め五人いるのでまだなんとかなるが、へりの方は戦闘要員がないので狙われたらどうしようもない。

数が足りない。ここで朧がない事が悔やまれる。

そんな状況でフェイトは自分の考えを述べる。

「なのは、私が残って此処を抑えるからヴィータと一緒に」

他のフォローへ、と

「フェイトちゃん!？」

その提案に驚きの声をあげるなのは。しかしフェイトは話を続ける。

「コンビでも普通に空戦してたんじゃ時間が掛かり過ぎる」

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

未だ攻撃の手を緩めないガジェットは恐らく有人操作されており、そう簡単に落とせない。

「けど限定解除すれば広域殲滅で纏めて落とせる」

### 限定解除

リミッターが付けられている隊長陣はA Aランクまでの魔力しか放出することが出来ず、そのリミッターは六課にいる間、二回しか解除することが出来ない切り札。

「それはそうだけど……」

ここで切り札を切ってしまつて良いのか？

なのはの頭でその考えが過ぎる。

それを読みとつたフェイトも自身の不安を吐露する。

「なんだか嫌な予感がするんだ。だからなのはは」

『割り込み失礼』

「はやて？……つてその格好！！？」

行って、と言う前にはやてからの通信が入り、そのはやての姿に驚く二人。

「はやてちゃんなんで騎士甲冑！！？」

『ロングアーチ01からライトニング01へ。その案も限定解除申請も、部隊長権限で却下や』



映し出されたその姿は漆黒の対となる三枚羽。騎士のごときその  
B Jは最後の夜天の主の姿。

『嫌な予感も私も同じでな、クロノくんから私の限定解除許可をもらう事にした。空の掃除は私がやるよ』

総合SSを持つはやては広域殲滅魔法のスペシャリスト。これ以上の適任は他にいないだろう。

『だからなのはちゃんとフェイトちゃんは地上に向かってヘリの護衛。ヴィータとリインはFW陣と合流、ケースの確保を手伝ってな』

その指示に皆「了解！」と答えるが、なのはがそれに待ったを掛ける。

「…………ゴメンはやてちゃん、やっぱり私も限定解除お願い」

『ん？どういう……ッ！！？』

「貴女は！！！？」

はやてとフェイトはなのはの視線の方を見て声をあげる。

「おっひさ〜」

その視線の先には楽しそうにこちらに手を振るサキ・クルスの姿があった。

~~~~~

「れいんぽすと」

は「今回は最後の所以外まんま原作やったな」

リ「そうですね。書く意味あったんですか？」

は「まあそこら辺も含めて今回は作者が来てるから本人に聞いてみよか」

リ「それじゃあどつどつです」

は「……」

リ「……」

は「……」

リ「……」

は「……アイツは一体何してるんや」

リ「……来ないですう」

は「私ちよう見てくるわ。裏に待機してるんやろ?」

リ「お願いします」

リ「……リイン一人になっちゃいました」

リ「作者さんも最近忙しいみたいですから大変です」

は『ディアボリック・エミツションツ!』

?『ぶぎやあああああああああああああ!?!?』

リ「……なんだか後ろの方からすごい声が聞こえたような気がするです」

は「お待たせや」

リ「あ、お帰りなさい、はやてちゃん。あのー、今の声は?」

は「気にした負けやでリイン」

リ「はい?」

は「じゃあ、改めて作者呼ばか。はよ入り」

タ「ど、どう……も………タ……です」

リ「は！？作者さんがボロボロに……!?」

は「さつさと立たんかい、ボケ」

タ「は……い……」

リ「大丈夫ですか？一体裏で何が……」

タ「流石リイン……優しいね……」

は「コイツは裏で出番忘れてゲームしてたんや」

タ「だってスパロボが……やっと30話まで……」

リ「しゃきつとしなさいです、クズ！」

タ「優しさはいずこ!?!」

は「今のアンタに優しさは必要ないやろ？今いるんは鞭だけや」

タ「飴が欲しい!！」

リ「あげるわけないですう」

タ「うう……（泣）」

は「んじゃ本編に触れていくで」

夕「主人公空気（笑）」

は「確かにそうやwww感想にまで主人公（笑）って言われてるもんな」

リ「元々ちよつと残念な主人公でしたしね」

夕「……何気に一番酷い事言うね」

リ「それほどでもないですよ」

夕「いや褒めてないっす。早く本編の事喋りましょう」

は「今回の話書く必要あつたんか？」

夕「正直あんまりなかったかな。多分この作品を見てくれている方々はアニメの内容も知っているだろうし、それをなぞるだけの場面だったからやめとこな？って思ったんだけど、話の展開上、書かなきゃいけないかなって思って」

は「展開って最後に出たアレか？」

夕「そう。この話って元々なのはとフェイトのへり救出、ヴィータとリインのFW+ギンガと合流でVSルルー、はやてVSガジェツトども、と結構山積みな訳です」

リ「そうですね」

夕「それに加えてサキの登場でまたもう一つ場面がプラスされて、正直全ては書けんです」

は「だから?」

タ「今回にちらっとだけ書いて後は幾つかカットしようかなと」

は「どこを?」

タ「サキとヘリは大事だし、ルールーんとも少しは書かないといけないからはやての所かな」

は「穿て、ブラッティ・ダガー!!」

タ「ぎゃああああああ!!?」

は「私の活躍シーンをカット?何言ってるねん。ただでさえ少ない出番をアンタは奪うっちゃうんか!？」

タ「はいです」

は「死にさらせえええええええええええ!!」

タ「ぼぎゃああああ!!?」

リ「……はやてちゃん見事なアッパーです」

は「私の場面カットは考え直しや、わかったか?」

タ「ぜ、善処しますですはい」

は「よし、ええ返事や」

リ」……これは少し同情するです」

は「それじゃあ、そろそろお別れの時間やな」

タ「いや、その前に少し。え〜と、いつもこの話を読んで頂きありがとうございます！毎度の事なのですが十万アクセス記念の内容に悩んでいます。

ついこないだ以前ある作者さんからのアイデアを書こうと決めその執筆途中、致命的欠陥を見つけ敢なくお蔵入り。この作品男女の比率がおかしいんだよ……。なので本当にどなたか案を頂けたら嬉しいです！

いや、一つ案があるっちゃあるんですがアレはかなり長い話になりそうで書けないんです……。

感想にでもメッセージにでもどちらにでも構わないのでよろしければお願いします！！

後、普通の感想等もお待ちしています！感想、誤字脱字、此処はこんな方がいい、こんな話が見てみたい、昶を借りたい、【れいんぽすと】に出てやるよ、等などどんな内容でもOKなのでよろしくお願いします！！」

リ「終わっただですか？」

タ「ああ、ありがとう」

は「んじゃ締めるで、では」

は・リ・タ『次話にてお待ちしております！！！！』

第二十九話 機動六課の休日（戦闘風景）（後書き）

どうでしたか？

次回からは漸くちよいオリジナルが入ります。

皆さんわかりますよね？

ええ、魔王様がやっっちゃいます（笑）

では、次話にてお待ちしております!!!



### 第三十話 二人のエースオブエース（前書き）

どうも、最近生きるってなんだろう？って考えてしまっただけです。

今回はかなりへんな部分で区切ってますが、見てもらえる  
と嬉しいです！！

あと【れいんぽすと】は今回お休みです。

では、どごぞー！！！！

### 第三十話 二人のエースオブエース

ガジェットが飛び交う中でなのは達は冷たいものを感じた。

それが単に風のせいなのか、冷や汗なのか、確かめる事が出来ない。

目の前にいる人物から目を離すのは自殺行為だと肌で感じ取ったから。

「うん、やっぱり君達は優秀だね」

その人物はというと何故か嬉しそうに笑みを浮かべている。

『……やっぱりアンタが出てくるんやんな』

モニター越しにひがむように言うはやて。

「部隊長さんもいる見てるのね。朧はまだ帰ってないの？」

『生憎、アンタの御依頼の途中や』

「そ、ならいいわ。私は自分の役割を果たさせてもらっわ」

そう言うてなのは達の前に立ち塞がる女      サキ・クルス。

「なのは、ここは……」

『うん……頼めるか、二人共』

少なく見積もってもオーバーSランク以上の実力者である彼女を簡単に退けられる筈がない。だからフェイトは限定解除した二人で戦い、速攻で終わらせ二人でへりに向かう事を提案する。

「はやてもどつやら同じ意見らしい。」

「だからなのはもソレを了承」

「うっん、此処は私一人で抑える」

「しない。」

『ッ！！！？』

「確かに力量が未知数過ぎるサキさんは一人で抑えた方が数倍勝率は高いと思う」

「なら！」

「でもそれじゃあへりが危険過ぎるよ」

「確かになのは言う通り、一番狙われてもおかしくないへりをこれ以上孤立させるのはリスクが高すぎる。」

「だがそれはなのはの案も同じ事だ。」

「それならへりにヴィータを！」

なまじ初から話を聞き及んでいる分、フェイトはなのはを一人で戦わせたくなかった。

「ヴィータちゃんの位置からへりまでじゃ時間が掛かり過ぎるよ。それにティアナ達への援護もいなくなる」

ティアナ達の方が敵の目標かもわからない。そちら側も外せないのだ。

そして今までのやり取りを聞いていたはやてが口を開く。

『……いけるんか、なのはちゃん？』

「はやて!?!」

はやての言葉にフェイトは異議を唱えるように叫ぶ。

『こうしてる今もへりに危険が迫ってるかもしれん。現状を鑑みるにそれが今一番ベストな手段や』

はやてはそう判断した。

部隊長として。

「なら私が残った方が……」

『いや、ここはスピードで勝るフェイトちゃんがへりに向かってもらった方がええ』

「ッ」

フェイトとてそれは理解している。だが彼女はそこまで割り切れない。

「大丈夫だよフェイトちゃん」

「なのは……」

「私はもう墜ちないよ」

フェイトの不安を拭うようになのはが言葉を繋ぐ。

「それに私、負けるつもりなんてないよ？私そんなに信用ないかな？」

「そ、そんな事ないけど……」

「なら此処は私に任せて。フェイトちゃんはへりの方を守ってあげて」

余裕なんてない筈のこの状況で微笑みながらそう言う。

「……無茶しないでね」

最後は無理矢理自分を納得させ、フェイトはへりの方へと飛んで行った。

「貴女、確か高町なのはちゃんだったわね。なのはちゃんが私の相

手をしてくれるの？」

今まで黙っていたサキが口を開く。

「行かせてもいいんですか？」

「おねーさん、なのはちゃんの相手に忙しいから」

サキは何が狙いなのか？

いつも通り、彼女は笑いながら答える。

それに対し、なのははすっとレイジングハートを構える。

「レイジングハート、初めから全力全開でいくよ」

『了解です、マイマスター』

長年連れ添った彼女達はたとえどんな相手だとしても決して逃げない。

「私、負けないですよ」

「寄寓ね、私もよ」

激！

二人のエースオブエースが今激突する。

「確かこの辺りに……」

「ありました！」

ちょうどその頃、地下の方ではギンガと合流したFW達がレリックを発見していた。

「よし、上は大変みたいだし、早く戻って隊長達と合流するわよ」

『おう！』

ティアナの掛け声に答える四人。

ダン、ダン、ダン、ダン、ダン、ダン、ダン、ダン

「何、この音？」

規則的に鳴るその音に紛れ、ナニカが近付いている事に誰もが反応が遅れてしまった。

弾・弾・弾・弾

「きゃあああ!!?」

黒い魔力弾がキャロを吹き飛ばし、未だ煙の向こうからキャロの方へとナニカが接近する。

「でやあああああ!!」

激!

しかし、エリオがそれを赦すはずがなく、キャロとの間に割り込みストラーダで薙ぎ払う。

「ッ!?!」

「エリオくんッ!?!?」

エリオにナニカが当たり切り傷ができたのを見て、キャロが声をあげるが、エリオはキャロを下がらせ警戒を強める。

警戒の先には姿を消しているナニカがあり、その姿が徐々に明らかとなっていく。

それは人の形をした虫。赤い瞳、鎧のような黒い甲殻に空を飛ぶ羽、首もとはマフラーのようなものが巻かれている。

ガリユー、ルーテシアの召喚虫だ。

そちら側とは逆方向、キャロは後ろでケースを拾う女の子  
ルーテシアに気付き慌てて止めに入るが、



「……邪魔」

撃！

「ッ!？」

『プロテクション』

壁

ルーテシアの衝撃波がキャロを襲う。

咄嗟に障壁を展開して身を守るが威力の大きさから徐々にひび割れていき、

破

「きゃあああ!?!？」

「キャロッ!？」

防壁をぶち壊されたキャロはエリオを巻き込んで壁の方へと吹き飛ばされる。

「ハアアアッ!?!」

蹴

やられた二人と入れ代わるように跳び蹴りを放つスバルだが身体

を反らされガリユーに避けれてしまつ。

だがこの場にいるのはスバル一人ではない。

「やああッ!!」

撃

スバルを避けた後方からのギンガの攻撃。咄嗟に反応し、防御をとるがギンガの拳はガリユーのガードを撃ち破る。

「その女の子!ソレ危険な物なんだよ、触っちゃダメ!!こつちに渡して」

その間にもその場を後にしようとしているルーテシアに呼び掛けるスバルだが彼女は一向に答えずに歩きつづける。

「ッ!!!??」

だがルーテシアは突然立ち止まり身体を強張らせる。

現

「ごめんね、乱暴で。でもね、コレホントに危ない物なんだよ?」

ティアナだ。

ティアナが自身の幻術魔法、オプティックハイドで姿を隠してルーテシアに接近し、クロスミラージュのダガーモードで彼女の動きを封じていた。

身動きの取れないこの状態を良く思わないルーテシアは思わず顔をしかめる。

だがその顔も一瞬で笑みが零れた。

轟！

ティアナがソレに気が付く前に紫の弾が飛来し、轟音と閃光をぶちまけた。

撃！

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

なのはとサキの魔力光である桃と白がぶつかり合う。

既に限定解除し、エクシードモードとなっているのは。

「レイジングハート！」

『アクセルシューター』

「シュート！」

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

なのはの号令で動き出す十の魔弾。

対するサキは奇抜な動きで次々と回避していくが、誘導弾であるアクセルは依然その追尾を切らさない。

「神煉流壱式、白閃」

閃

爆！

無音で振るわれた鎌の一振りはその一撃で全ての魔力弾を迎撃した。

だがそれで怯むものではない。

「まだまだああ！」

『エクセリオンバスター』

撃！

一つの薬莢を吐き出し放たれる砲撃魔法。

それは容赦なくサキを襲う。

「アインス release、ツヴァイ、ドライset」

鎌を待機状態へと戻し、手に握るのは白と黒の二丁の銃。

それらの両銃は砲撃の方へと向けられる。

「神煉流参式遠ノ型、虎爪」

撃！

二丁の銃口から放たれた銀の砲撃は桃の砲撃を迎え撃つ。

轟！

うねりをあげる二種の光。互いに一步も引かない砲撃に辺りの大気が奮える。

そして、

爆！

耐え切れなくなった二つの砲撃は相殺され、放った術者も吹き飛ばされるがすぐに体勢を立て直す。

「流石エースオブエース……、ちょっとみくびってたな」

「……そう言っただけまだ余裕がありそうですね」

軽口に皮肉で返すのはだが事実、彼女の砲撃はサキのBJを傷付けている。

ダメージは全くないようだが、

「それじゃあ、もうすぐしギアをあげて行くわよ」

十数メートル離れたサキを見据えるのは

疾

「ッ！！？」

「視界からサキの姿が消える。」

撃

「がつ！？」

「死角からの首に強打。」

「なのははそのまま意識を失い、海へと落下」

「ディバイン、バスタアアーーーー！！！」

砲！

「落ちながらぐるり、とサキへと向き直し砲撃を放つ。」

(とった！)

反応が遅れた状態での近距離砲撃。なのはは命中を確信する。

「甘いわ！」

砲

サキは双銃を構え撃つ。

その威力は籠める魔力が少なかったのか、なのはのバスターより些か弱いものでとても相殺出来そうにない。

だが元よりサキは相殺する気などない。

彼女の銃口は明後日の方向を向いているのだから。

「なっ！！？」

通常砲撃を放つ場合、術者に伝わる衝撃やもろもろを計算し、自身を固定して砲撃を放つ。そこをサキは逆に砲撃を固定したのだ。

身体を固定していないサキは砲撃の威力を推進力にし回避したのだ。

「なんて出鱈目な避け方……」

思わず口に出してしまっ。

「まさか、あれに反応してるなんてね」

サキもなのはが防いでいた事に驚いている。

「……昔から防御は得意なんです」

なのははサキのうなじへの攻撃を小さな防壁を張って耐え切ったのだ。

「そう、ならもっと防いでみてね！」

弾・弾・弾・弾・弾・弾

白弾がなのはに迫る。

「防いでみせるよ、私は負けられないんだから！」

『その意気です、マスター』

かたや自身の目的の為

かたや自身を信じる者の為

常勝の二人の戦闘は更に激しさを増していく。



### 第三十話 二人のエースオブエース（後書き）

すみません、すっごいへんな区切りですよね。

続きも書く内容は決まってるんですが、まだ悩んでいる部分もあつてこんな形になりました。

感想等もお待ちしてます！！

では、次話にてお待ちしております！！！！

第三十一話 不可解な目的（前書き）

どうも、ユッキーは正義！！夕です！！！！

今回は引き続き魔王様とチートのバトルです（笑）

では、どうぞー！！！！

### 第三十一話 不可解な目的

はあ、はあ……はあ……

どンドン行くよ！ってなんや!？

えっ!!!？

いつこつちに……時間がないから早くしろ？

ええい、後で説明してもらうつからな!!!

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

海上を縦横無尽に飛び回る二人。

サキは自身を狙う魔弾を確実に相殺していく。

彼女達の遙か後方では白い光りが幾つも見える。恐らくははやて

の殲滅魔法だろう。

「戦っているのは私だけじゃない。

なのはは改めて不屈の心を握り直す。

「レイジングハート！」

『アクセルシューター』

レイジングハートのコアが赤く輝く。

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

なのはの周りに待機し始める数多の魔力弾。

その数およそ二十。

弾

「数で攻めたって操作出来なきゃただの的よ」

サキの牽制の意味を込めた一撃。それをひらり、と避ける。

サキが言う通り、狙いを外さないサキの弾丸をかい潜り、着弾させる為には全て操りきらなければならず、それ程のマルチタスク、一般の魔導師には不可能に近い。

だが

『私のマスターを甘く見ないで下さい』

淡々とした声が聞こえた。

「シュート！」

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

桃の魔弾が次々と弧を描くようにサキへと向かう。

向かってくる幾つもの的に狙いを定め、回避行動を取りつつ引き金を引く。

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

サキの早打ち（クイックドロウ）で打ち出された弾丸は魔力弾と同数。それらは寸分変わらず魔力弾を叩き落としていく。

「つつそお……」

そう言うしかなかった。

まさか全ての弾丸を避けられるとは思わなかったのだから。

弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾・弾

驚きながらも腕を止めない所は流石と言うべきか。

なのはは繰り出される弾丸を巧に動かし、高速で移動しながら引き金を引くサキを追い続ける。

マルチタスクとは分割思考。そして今なのはが操るシューターの数は二十。

つまりなのはは自身を合わせ二十一にも思考を分断させているのだ。

「くっ！」

当然、その分の負荷は大きい。今も小さな頭痛を伴ってなお、処理が疎かになる所から少しずつではあるがサキに弾を消されていつている。

しかし徐々にサキを追い込んでいるのもまた事実。

「しっこいわねッ！」

弾・弾・弾・弾

後方から追ってくる物とは別に前方から四つ、機敏に動くソレに狙いを定め掃射。

爆

着弾し発生した煙がサキの前方を覆う。

「チッ！」

弾・弾・弾

その中から飛び出してくる時間差の魔力弾。

煙から飛び出した弾はサキ自身と近すぎて誘爆させることは不可能。

ならどうするか？

「ツヴァイ、ドライrelease、ヒュンフset!」

黒白の双銃を戻し、左右の拳に薄手のグローブが装着される。

「ハッ!」

撃・撃・蹴

魔力コーティングされた拳が魔力弾を殴り弾く。

そのまま身体を大きく捻り、裏拳、回し蹴りと繋ぎ魔力弾は明後日の方向へと飛んでいく。

「やっぱり射撃戦は貴女の方が少し上ね。私じゃ勝てないわ」

三つの爆発を背景に首を鳴らしながらそんな事を言うサキ。

しかし彼女のメインは射撃での遠距離戦ではなく中、近距離戦。

全く勝てる気がしない。

「……サキさん」

「何かしら？」

しかし何故だろう？

「貴女の目的はなんなんですか？」

それと同じくらい負ける気がしないのは？

「目的？もち、なのはちゃんの足止めよ」

当然、とばかりにドデカメロンを揺らし胸を張るサキ。

「そっちの事じゃないです」

構えた杖をそのままに、なのは自身の違和感を口にする。

「スカリエツティ側に与しているにも係わらず、こちらに接触し情報を与えたり、倒した朧くんを治療させたと思っただら今みたいに私達への妨害行動……私にはただ状況を混乱させて楽しんでいるようにしか見えない」



確かにサキの行動には一貫性がなく、常軌を逸してる。彼女は矛盾しているのだ。

私はね、

そして、なのはの言葉を静かに聞いていたサキは言った。

「私は自分の目的の為に行動しているの。それを邪魔する奴、妙な小細工をする奴は皆私の敵よ」

そう答え、言い切ったサキ。その瞳は真っ直ぐなのはを見つめている。

だがなのはの聞きたかった答えはそんな曖昧なものではない。

「やっぱり……目的は教えてもらえないんですね」

「……そうね、ごめんなさい」

短く答えたサキは拳を握り、構えに入る。

相容れられない。

それが現状でのサキの答え。

誰もがそれを受け入れざるをえない。

「なら！」

しかしなのはは受け入れない。

「私が勝つたら、」

昶が思い出させてくれたから。

「目的を聞かせてもらいます!」

話そうとする心をなくしてはいけない事を。

「全く……やりにくい子ね」

そんなのはを見てサキは苦笑いを隠せない。

「けど嫌いじゃないわ。そういうの」

疾!

「いいわ!私に勝てたら教えてあげる!」

蹴!

そうだったサキの顔はどこか楽しそうだった。

「　　ッ！！？」

飛来してきた魔力弾の轟音と閃光に身動きを封じられるFW達。

『たつくも、私達に黙って勝手に出掛けちゃったりするからだぞ？ルールもガリユーも』

声は上から聞こえており、その主はすう、とルーテシアの方まで飛んで行く。

「……アギト」

『おう、本当に心配したんだからな』

アギト、と呼ばれた彼女は赤い紙に赤い羽。しかしそれでも一番特徴的なものはその身長だ。

その大きさはリインやレインと同程度、つまりユニゾンデバイスだということだ。

『けどもう大丈夫だぞルールー、なにしろこの私！烈火の劍精！アギト様が来たからな！』

爆・爆・爆

アギトの後ろでは小さな花火が幾つも上がっている。恐らくパフオーマンスなのだろう。

『オラオラ、お前ら纏めてかかって来いや!』

凄くテンションが高い。

なんていうかその……場違いだ。

『いゝくぜ、おりゃ!』

爆・爆・爆・爆

「くツ!？」

アギトが繰り出す爆撃の数々。対するティアナ達は数で勝るがキヤロが意識を失っておりエリオが抱えている為、実質三対三。

それにこの狭い地下の中でアギトの放つ爆撃は圧倒的アドバンテージを持っている。

現在もギンガがガリユーの相手をし、他の者はアギトの攻撃を回避するのに精一杯だ。

「ティア、どうする?」

柱の物陰に隠れながらこれからの動きについて司令塔に意見を聞く。

「任務はあくまでケースの確保。撤退して引き付ける」

「こっちに向かつてるヴィータ副隊長とリイン曹長につまぐ合流出  
来ればあの子達も上手く止められるかも、だね」

「そついうこと」

ティアナの作戦にスバルもエリオも頷く。少々他力本願な作戦だ  
が現状これが最も有効な手立てなのだ。

そこで不意に念話が届く。

《よし、中々良いぞ。スバルにティアナ》

「ヴィータ副隊長!？」

《私も一緒です、二人とも状況を読んだナイス判断ですよ》

「副隊長、リイン曹長、今どちらに?」

「ッ!?!ルールー!」

エリオが居場所を聞いているこの間にアギトも気が付いたのかル  
ーテシアに危険を伝える

「なんか近づいて来てる!この魔力反応……デケエ!?!」

撃!

「ッ!?!?!」

壁が壊され爆煙が舞う。

そこから現れた小人は瞬時にルーテシア達の方へ手をかざす。

『捕らえよ！凍てつく足枷、フリーレン・フェッセルン！』

『なっ！！？』

ルーテシアとアギトの周りでうねるように引き寄せられる水、それは瞬く間に彼女達を覆い、

凍

その場に大きな氷塊が出来上がる。

「ぶっ飛べー！ー！！」

撃！

ギガントフォームへと姿を変えたグラーファイゼンでのフルスイングがガリユールへと叩き込まれる。

咄嗟にガードの姿勢に入ったガリユールだがアイゼンの質量に耐え切れず柱を穴空きにしながら壁の方まで吹き飛ばされた。

「おう、待たせたな」

アイゼンを元の大きさに戻しながら言うヴィータ。

その姿はベテランの騎士。

「……ハハハ、ハハ」

「……副隊長達、やっぱり強い」

頼もしすぎる助っ人の力を改めて見て苦笑いしかできないFW一同。

「チツ」

そんな一同を露知らず、ヴィータは吹き飛ばした相手を確認すべく、壁にポツカリ空いてしまった穴を確認し舌打ちを打つ。

『こつちもです、逃げられました』

リインが魔法を解除に氷塊を消した後には地面に穴を空けられた後が残っていた。

そしてその直後、

震

「なっなんだ!?!」

突如として起こった大きな揺れ。

その答えを出したのはエリオに支えられ、今日を覚ましたキヤロだ。

「大型召喚の気配があります。多分それが原因で」

「ひとまず脱出だ！スバル！」

「はい、ウイングロード！」

地面に拳を叩き付け、螺旋状に展開したウイングロード。これに上り地上へと脱出していくのだ。

「スバルとギンガが先頭で行け、私は最後に飛んで行く」

『はい！』

指示に従い、スバル、ギンガの順に次々と地上へと上がって行く。

その途中、ティアナがキャラに話し掛ける。

「キャラ、レリックの封印処理お願いできる？」

「はい、やれます」

「ちょっと考えがあるんだ。手伝って」

「はい！」

そう言って二人も地上へと上がって行った。



「はあ、はあ……はあ……」

「ホント、ここまでやらされるなんて……」

漆黒のBJを纏うサキ。その手には白い槍が携えられている。

対するなのは姿は致命傷はないものの、息は乱れ、BJも破れている。

最初の方はサキの動きに何とか対応していたのはだったが、拳を放ちながらも展開された白槍により、なのはを問答無用で追い込んでいったのだ。

「まだまだ行くわよ！」

突・突・突

「クッ!?!?」

凄まじい速度で放たれる突きを紙一重で避けるなのは。

戟!

突きからスムーズに右払い。それをなんとかレイジングハートで

受け止める。

が、

膨！

「えっ!？」

突如サキから溢れ出す白い魔力。

槍を受け止めるレイジングハートを支点に身体を180°捻り、  
後方へと回り込み、

蹴！

「きゃあああッ!?!？」

弧を描きながらも鋭く放たれた蹴りはなのはを海中にまで吹き飛ばす。

「（今の攻撃……）」

海中から上がりながら思考するのは。

今行われたサキの動きは以前、なのはの前で朧がしてみせたものと非常に酷似していた。

それだけではない。

サキが纏う白い魔力。これも朧が扱う技能、魔力放出と同じなの

だ。

海水塗れになりながらもなのは再びサキを見据えて言う。

「やっぱり翔くんの師匠さんなんですね……」

サキの動きが改めてそう思わせる。

「ん？……ああ、動きが似てた？まあ私が基礎的な戦い方を教えたんだし、そういう事もあるわよ」

「なら何故翔くんと戦ったりするんですか？」

戦技教導をしているのはにはわかる。

翔の動きは独特なものではあるが、その根っこでは基礎がしっかりと身についている。

これは一朝一夕で身につくものではなく、初めから基礎を幾度と叩き込まれた証拠。

そして戦闘スタイルも違いがある二人が同じ動きをするという事はサキから翔が学んだ、と言うことだ。

それは親身になって教え込んだのだらう事がなのはには容易に想像出来た。

故にサキが翔と本気で戦うという事が理解出来ないのだ。

だからなのは知りたい。

何故教え子とこんな形で戦うような事をするのか。

「私の目的の為よ」

サキはスッパリと言う。

「また目的、ですか……」

全てはその目的に繋がっていて、結局何一つわかることがない。

その状況に顔をしかめてしまう。

「知りたければ私に勝つ事ね」

「もちろん、そのつもりです」

言い切るなのはだが今のままではじり貧だ。

　　プラスターを使うべき？

切るべき切り札はまだ残されている。

しかしここで使うべきなのか？

「ほら、行くわ　ッ！！？」

前のめりになり、接近しようとしたサキだが突然動きが鈍る。

「（なんだかよくわからないけど！）」

『エクセリオン』

「バスターー！」

轟！

桜色の砲撃がサキを包み込む。

「（手応えはあったけど……）」

視界を遮る煙が徐々に晴れ初め、撃墜を確認するのは。

「さすがに、効くわ、ね……」

煙の向こうにはBJが破れ、ボロボロになっているサキの姿があった。

手負いの状況だがあのなのはの砲撃を受け、意識を保って未だ戦闘を継続出来そうなのだ。

油断出来ない……

気を引きしめるのはだが、次にサキから放たれた言葉に驚くことになる。

「……今日はこの辺にしておくわ。ゼクスrelease」

槍を待機状態へ戻し、サキの足元には六芒星の魔法陣 恐らく

は転移魔法だろう　　が展開される。

「待って！」

引き止めようとするのはだが、

疾・拳

「きゃっ!!!??」

なのはの視界から消えた、と思うと同時に目の前に現れたサキの殴打により弾き飛ばされる。

「朧に伝えておいて、今度会う時までにはそのうじうじ、直しておきなさいって。貴女も早くへりに向かってあげなさい」

消

そう言ってサキは消えた。

「くっ……」

『大丈夫ですか、マスター?』

「うん、私は平気」

そう言うのはだが、サキの最後の動きには全くついて行けなかった。

遊ばれていた、ということだ。

だがそこで一つ疑問が浮かび上がる。

「けどなんであの砲撃が通ったんだらう？」

砲撃の前に現れたあの一瞬の隙もそうだ。

初めて戦ったのはから見てもらいしかなかった。

思考の海に潜っていく。

が、

『マスター、今はへりに向かいますよ』

「そうだね、ゴメン。急ぐ」

レイジングハートに諭され、思考を中断してなのははへりの方へと向かって行った。

「スターズ01、戦闘終了！今からヘリへと向かいます！」

「ライトニング01、ヘリを視認！」

「スターズ02、召喚師を確保しました！」

六課の管制室は今も慌ただしく動いている。

はやてが前線へと出ている為、今はグリフィスが指揮をとっている。

「ガジェット、幻影と実機の判別徐々に出てきてます！」

次々と報告される情報に安堵しながらも彼は指示をとばしていく。

「よし、それを」

警

「市街地にて巨大エネルギー反応！物理破壊型、推定……Sランク  
！？」

「なっ！！？」

「エネルギー、発射されヘリに向かってます！？」

「回避は！？」

「間に合いません！！？」



そしてへりを映したモニターは、

轟！

その音とともに砂嵐しか映さなくなった。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

は「さてさて、前回はお休みやった【れいんぽすと】やったけど何かあつたんか？」

リ「作者から渡された紙には『サキさんとなのはさんの戦闘の間に【れいんぽすと】を入れるより終了してからちよこつと解説入れた方がいいかな？』と思つた次第です』……との事ですが、」

は「嘘やね」

リ「はい、嘘ですね」

は「おおかた、『よし、なんとか出来た！』ってまだ【れいんぼすと出来てないやん！？時間ないし今回はいつか？朧とレインも出てないし』……とか考えとったんやろ」

リ「妙にリアルな解答、さすがはやてちゃんです」

は「あんな奴の思考を読むなんて朝飯前や」

リ「それじゃあ切りのいい所でそろそろ本編に触れていきましょう」

は「やね」

リ「なのはさんとサキさんの新旧エースオブエースの対決が見所ですね」

は「なのはちゃん、サキさん相手に凄い健闘してたなあ」

リ「あれでも、サキさんは本気じゃないんですよね？」

は「そやね、なのはちゃん相手に遊ぶなんて、サキさんの戦闘力は化け物か！？」

リ「……何を一人で言ってるんですか？」

は「……私はのってくれてもバチは当たらんと思う」

リ「のらないです」

は「うう……リインがイジめる（泣）」

リ「それじゃあここで今までサキさんが使ってきたデバイスを紹介するですよ」

アインデバイス……鎌（黒色）

ツヴァイデバイス……銃（白色）

ドライデバイス……銃（黒色）

ファイアデバイス……刀（白色）

フロンデバイス……グローブ（黒色）

ゼクスデバイス……槍（白色）

リ「ここまでが三十一話現在で登場したデバイスですね」

は「まだサキさんはデバイスを所持してるんか？」

リ「そこは本編で後々わかってくるそうですよ？」

は「さよか。ここで原作と違う点は、なのはちゃんVSサキさんが発生した事でヘリに向かったのがフェイトちゃんだけやってとこやけど、ヘリは無事なんか？」

リ「ぶっちゃけると無事ですね。じゃないと話が進みませんし」

は「……リインも随分メタな発言するようになったなあ」

リ「はやてちゃんのおかげです」

は「喜んでええんか、それは……」

リ「今回はここで終了です！ご質問等があればどんどん言ってきてくださいです！」

は「感想もちょうだいや」

リ「では、」

は・リ『次話にてお待ちしております（）です（！！！！）』

第三十一話 不可解な目的（後書き）

どうでしたか？

ん〜、上手く書けない（泣）

特に地の字!!!

もっと励まなければ……

では、次話にてお待ちしております!!!!

### 第三十二話 蒼い剣（前書き）

どうも、ユッキー最高っすね、夕です!!

いや、ケータイ変更の時に最新話が消えた時はかなり焦りましたね。

なんとか今日出来ました!

さてさて、今回は皆さんお待たせ致しました!!な回です(笑)

では、ぶじぞー!!

## 第三十二話 蒼い剣

「逮捕はいいけど、大事なへりは放って置いていいの?」

「 なっ!?!?」

「貴女はまた、守れないかもね」

この直後、へりに砲撃が放たれた。

「うっふふのふ〜 どう、この完璧な計画」

廃ビルの屋上で嘲笑うぴちぴちボディスーツを着ている眼鏡を掛けた女性。

ナンバーズNo.4、クアットロだ。

主力部隊を拡散させ、手薄なへりを撃つ。シンプルだが効果的な作戦。

幻影と実機の構成編隊を作り出したのも彼女のIS“シルバーカーテン”によるものだ。

「黙って、今命中確認中」

その横で大きな砲身を構えている女性、ナンバーズNO.10、  
デイイチ。

彼女のIS“ヘヴィバレル”により体内で生成したエネルギーを  
砲身、イノームスカノンの出力へと変え撃つたのだ。

左の瞳にあるスコープ機能を使い、爆煙の方へ目を凝らす。

「あれ？まだ飛んでる」

徐々に晴れる煙の隙間からは健在するへりの姿。

そして、

膨

何に感化されたのか煙が一気に消失する。

朱い瞳に黒の長髪、



「あっら〜、いつの間に戻って」

蒼の魔力を纏う女性にしか見えない男、

「こっちもフルパワーじゃないとはいえ、マジで……」

蒼い剣を携え、浅儀朔がそこにいた。

「見つけた」

『 ツ！！？ 』

声のする方へと向くとそこにはフェイト・T・ハラオウン。

脱

すぐさま逃走を開始する二人をフェイトが追う。

「止まりなさい！市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で逮捕します！」

「今日は遠慮しときますう〜！」

速度で劣るクアット口達だが未だ余裕がある答え方。

「IS発動、“シルバーカーテン”」

余裕の理由がこれだ。

人の目は疎か、機械による索敵をも騙すシルバーカーテンにより、二人の姿は完全にフェイトの目から消える。

ふふ、楽勝ね

意地の悪い笑みを浮かべながら心中でそう嘲るクアット口。

しかし、不可解な事が起きる。

「離れた……なんで？」

不思議に思い、ISを解除し姿を現す。

クアット口もデイエチもスピードに特化したフェイトを振り切れるような速度を出せるわけではない。

にもかかわらず、フェイトはどんどんと離れていく。

では何故？

その理由はすぐに判明した。

「まさかッ!？」

二人の頭上には黒ずむスフィア。

「ッ!？広域……空間攻撃ッ!!？」

遙か上空で本を持ち、杖を掲げるはやての姿。

非物理破壊性の魔力攻撃の為、市街地を破壊することはなく、  
一般人の避難も完了済み。

躊躇う事は何もない。

「遠き地にて、闇に沈め……ディアボリック・エミッション!」

咏唱の完了した球体は一度縮こまり、

膨!

凄まじい速度で球体が膨張し始め、市街地を次々と飲み込んでいく。

「あああああああああああああああ！！？」

急激に迫る暗黒から叫びながらも必死に逃げるディエチとクアツト口。

その甲斐あってかどうにかスフィアから逃げ切る事が出来た。

しかし、そんなに六課は甘くない。

『投降の意志なし……逃走の危険ありと認定』

『昏倒させれば良いのだろうか？』

「ッ！？」

二人の前方には既に左右に分かれフェイトと朧が立ち塞がっている。

「トライデント」

「神煉流肆式」

カートリッジをロードし左手を突き出すフェイト、蒼い剣を両手で構え振り上げる朧。

「スマッシュャー……！」

「旋風ッ！」

轟！

爆！

三つ又の砲撃と蒼き台風が二人を挟み、激突する。

爆発はうねりを上げ、轟音を撒き散らす。

『よじっ、ビンゴー！』

通信が繋がっている六課の管制から喜びの声が上がる。

「いや、逃げられた！」

『えっ！？』

『直前で救援が入った』

『だ、誰？』

『そんな事はよい、それよりさっさと追わんか！』

『は、はい！』

凜とした知らない女性の声に怒鳴られ、急ぎ追跡を開始する管制室のアルト。

しかし、頑張りは虚しく

『……反応、ロスト。異常反応、消滅……』

『それみい、おぬしが呆けてるから』

『す、すみません……』

「仕方ないだろ。相手は多分フェイト同様、スピード特化型に加えて幻術のエキスパートもいたんだ。アルトは頑張ってくれてたよ」

未だ誰とも知らない人物に責められ萎縮してしまうアルトを宥がフオローする。

『ふん、いつまで経ってもあまちゃんが』

「なんとも言えよ」

「まあまあ、落ち着いて。その話はそこでおしまい、ね?」

「俺は別に最初から……」

『フェイト、おぬしがそういうなら余も吝かではない』

言い争いを宥めるフェイトの姿はとても慣れ親しんだ感じがした。

『……というか、さっきから喋ってるのは一体?』

漸く疑問に上がった謎のお声の正体。

『余はここだ』

『え？』

声の発生源は朧の持つ蒼い剣。

それは今まで見せてきたどのアートとも違うと感じ取れた。第一、アートには大した人工AIは積んでいない。

そしてアルトの疑問に答えたのはアルトと同じくモニターの向こう側にいるシャーリーだった。

『あの剣が朧さんのメインデバイスだよ』

『違うと言っておるうが……久しいなシャーリー』

『久しぶり、デュランダル』

デュランダル、そう名乗ったデバイスが朧の第二のパートナーであるのだが、本人はシャーリーの言に不快感を感じているようだった。

「さて、事後処理は地上部隊の人達にお願いして、それじゃあそろそろ六課へと帰りますか」

『私もお腹減って死にそうだよ』

デュランダルは待機状態のチャーカーの宝石へと戻り、レインもユニゾンを解き姿を現す。

「朧？」

「ん、どうした？」

六課まで飛んでいこうとしていると後ろのフェイトから声が掛かる。

「さっきは急いでたからすぐ動きに合わせたけど、いつミッドに戻ってきたのか、向こうで何があったのか、しっかり教えてもらおうからね？」

「あ、ああ……」

凄みのあるフェイトの笑みに苦笑いで答え、久しぶりの六課に少し憂鬱な気分で帰る朧だった。

日も傾き、夕刻の時間。

なのはも今日の事件の始まりであった女の子の検査等で聖王医療院から戻ってきており、今は会議室にてFW部隊全員とはやてが集まっている。

無論、その中には朧の姿もある。



ちなみにレインは昶の代わりに報告書を制作中でいない。

「じゃあまず、昶くん。向こうで何があったか教えてくれるか？」

「ああ、管理外世界の十三番に到着してから」

はやての声に合わせ昶が語りはじめる。

昶の話では、初めの数日は辺りの調査に取り組んでその後、研究所を発見して調査に乗り出したとの事。

「中は結構広かったよ。ガジェットや対人向けのトラップも幾らかあった」

説明と共に画像データをポンポン展開させていく。

「詳しい事はわかんなかったけど、ここで研究されていたのは人造魔導師だと思う」

『 ツー！？ 』

昶の言葉に幾人かの表情が強張る。

「実際に長い間使われてはなかったみたいだし、データも殆ど消されてた」

「そうか……」

無駄足やったか？

そう考えたはやてだったが次の昗の放った一言が吹き飛ばす。

「けど、生存者がいたよ」

「ほんまかッ!？」

ああ、と新たに現れた画像には黒髪の小さな女の子が生体ポットの中にいる姿が映っていた。

「昗、この子は？」

執務官でこのような事件を幾つも担当してきたフェイトはすぐに安否を確認する。

「今は聖王医療院で保護されてるよ」

昗とて長年フェイトの補佐として活動してきたので対応は心得ている。

でも

と、昗の言葉には続きがある。

「詳しい検査はまだだけど、医者の話じゃ目を覚ますのはいつになるかわからないって」

一体いつからかはわからないが幾ら生体ポットの中とはいえ、長い間放置され続けていれば弊害は起きる。原因はそれだ。

「それと多分……」

「まだ何かあったの？」

昶が何かを言い淀み、それにフェイトがゆっくりと聞く。

「詳しい事は検査結果が出ないとわかんないけど多分あの子……サキのクローンだと思う」

『 ツ！？』

昶の言葉に部屋全体に衝撃が走る。

「残ってた資料の一部に書かれてたんだ。『サキ・クルスの遺伝子状態は良好。暴走の危険、今のところなし』って」

詳しくはレインの報告書を見てくれ、と昶。

「それでとにかくあの子を病院に連れて行く為に今朝一番にミッドに戻ってきて聖王医療院に行ったんだ」

ここまでが昶の出張任務の中身。

「でもなんで昶くんは六課が戦闘中だってわかったの？緊急のニュースとかでも報道されてたみたいだけど、それからじゃ間に合わなかったでしょ？」

続いては昶のナイスタイミングでの増援の理由。

医療院から現場まではそれなりの距離があり、とてもじゃないが速報を見てからでは間に合うとは思えない。

「ああ、それは連絡を受けたんだよ。『出張お疲れ様。いきなりで悪いんだけど、今はやて達が出動しているんだ。激しい戦闘になりそうだから君も急いで向かってあげてくれないかい？』って」

「誰や？クロノくんか？」

ちなみに昶が出張に出ている事は六課のメンバーとクロノやカリムなどの一部しか知りえていない事だ。しかし、クロノにしてもその時は聖王教会に出てきており、昶の帰りを知っているはずがなく、知っていたとしてもはやて達にその事を教えていただろう。

なら誰や？

「アコースさんだよ」

「ロツサ？」

昶の予想斜め上の答えに素っ頓狂な声を出すはやて。

ヴェロツサ・アコース。

管理局員の査察官で聖王教会の騎士カリムの義弟にして現代では希少な古代ベルカ式の使い手。はやての兄的存在。

こんな感じの経歴を持つアコースはクロノとも親しい仲だがはやてはアコースから昶と知り合いだったと聞いた事がなかった。

「アコースさんは俺を調査しに一年くらい前に会いに来たんだよ」

当時、忽然と姿を消し任務に就いた昶を不審に思いアコースは査察官として昶と接触していた過去がある。

「そんな話ロツサから聞いた事なかったけど……」

「だって口止めしといたし」

「しといたって……ま、まあええわ」

昶の言い草に若干苛立ちを覚えるがはやては大人な所を見せた。

「それで私に通信繋げてきたんか？」

「ああ、へりからあの砲撃の間に滑り込むには限定解除が必要だったからな」

昶はアコースに聞いた情報を頼りにへりの方へと向かっている途中、巨大なエネルギー反応を感知し、急ぎはやてにリミッターを解かせ、近くにいたフェイトに敵の位置特定を任せただ。

「それでデュランダルも？」

「ああ」

「デュランダル？」

聞き慣れない単語にキャラ口が聞き直す。

『余の事だ』

「起きてたのかよ」

声が出したのは昴の首元に付いているチョーカーからだ。

『余の勝手だろうに』

「相変わらずだなお前は」

「もう、仲良くしてっていつも言ってるでしょ！」

手を腰に掛け、一人とデバイスを叱り付けるフェイト。

『仕方ない。おぬしらは初対面だったか、余の名はデュランダル。覚えておくといい』

「は……はい……」

初めて見るタイプのデバイスに困惑気味のFW達。

「デュランダルはロストデバイスという種類なの」

「ロスト……デバイス？」

またも聞き慣れない単語になのはが説明してくれる。

「デュランダルっていうのは私達の出身世界の昔の話に登場する聖剣の名前なの。そしてこのデュランダルはその聖剣のオリジナル」

「……え？」

「それって……」

「……どういっしょ？」

「コイツは何世紀も前から存在する現代では再現不可能な剣なんだよ」

### 聖剣デュランダル

それは古フランス語叙事詩『ローランの歌』にて英雄ローランが使用し、妖精が鍛えたとされる伝説の剣。

その剣は決して折れる事がなく、切れ味に至っても「切れ味の鋭さデュランダルに如くもの無し」とまで云われている。

その話を聞いたティアナ達の疑問はこうだ。

何故伝説上の剣が現代にあって、それを朧が所持しているのか？

最もである。

「元々コイツもレイン同様にサキが持つてたんだよ。サキ曰く、地球の神話や伝承に出て来るような伝説上の武器は確かに存在して、デバイスに転用出来る技術が遙か昔にあったらしい」

それは管理外世界である地球が遠い過去には他の次元世界と交流があつた、ということだ。

「だからデュランダルはその時代の生き証人つて事なんだよ」

「殆ど話そうとしないけどな」

『当たり前だ。余の主でもないあまちゃんに話す云われはないわ』

「え？ 昗さんのデバイスなのになんで主じゃないの？」

スバルが首を傾げる。

確かに、おかしな話だ。昗のメインデバイスにも関わらず昗が主ではないのだと言う。

『こやつは言わば仮の主だ。私を扱うに相応しい力を持ち合わせておらん』

「?」

スバルはもはや全くちんぷんかんぷんのようだ。

「デュランダルは持ち主を選ぶデバイスなんだよ。だから本来はコイツが認めた人物じゃないと持つことも許されない」





『余はまた一眠りする。力が戻ったのなら起こせ』

そういつて点滅していたチョーカーの赤い宝石はその輝きを止めた。

「……………つたく、自分勝手な奴だよ」

悪態を尽く昶。

「まあデュランダルも悪気があるわけじゃないんだし……………」

「どうだかな……………」

フェイトの言葉を話半分に聞く昶の姿はこの前のような悩む以前の昶の姿。

この一週間弱の間に何があったのか、フェイトにはわからない。

しかし、昶の元気な姿を見て嬉しく思う。だがその反面、自分では元気にして上げられなかった事が彼女の胸を締め付けた。

「それじゃあ、俺もそろそろ行くわ。朝から何も食べてなくて腹が減ってたよな」

(それでも……………)

「まだ話は終わってないで昶くん？」

「え？」

朧が振り返ると極上の笑みを浮かべたはやての姿が。

「えと……はやてさん？」

しかし、彼女からは負のオーラとでも言うべきか、黒いナニカが背後に見える。

理由のわからない朧は助けを求め視線を皆の方へと向けるが、それは朧だけの錯覚ではないようで、

「はは、ははは……」

「だ、大丈夫だよキャロ！ほ、僕が守ってみせるから！！」

「エ、エリオくん！？」

「……骨は拾ってやる」

周りの者達も冷汗が止まらないみたいで次々と視線を反らす。

「えっ、ちょ！？お前ら！！？」

（こづついつ雰囲気、）

「しょ・う・く・ん？」

「は、はいいい!!」

ドスの効いた声に思わず背筋が伸びる。

「私、初めて翔くんが六課に来た時言ったよな？社会人だったら“ほうれん草”が大切やって」

「……………そ、そうだな」

「忘れとったやろ？」

「ッ！？い、嫌だなあはやて。俺は物覚えいい方なんだぞ？」

「なら“ほうれん草”てなんや？言ってみい」

ジト目で翔を見るはやてに冷汗が留まる量知らない。

「……………旅行食野菜？」

「ドアホ……………!!それを言うなら緑黄食野菜や!!」

「そ、それだあああ!!」

「それもちゃうわ……………!私が言ってるのは”報告“、”連絡“、”相談“の”ほうれん草“じゃボケ……………!!」

(久しぶりだな)

正座させられながらはやてに説教をくらっている昶を見て、フェイトはやっぱり嬉しくなり、

「そうだよ、昶。そんなことだから」

「待て、お前も参戦するのか!!!?」

「昶が成長しないんだもん」

とりあえず、説教に参加することにした。

ちなみに説教が二時間程掛かり夕食を逃した昶がフェイトに泣きついて食べ物を用意してもらった事はまた別の話……

~~~~~

「れいんぽすと」

レ「【れいんぽすと】よ！私は帰ってきた！！」

翔「長らく空けてたからな」

レ「その間はリンちゃんとはやてちゃんが頑張ってくれたみたいだね」

翔「本編で影が薄いからな。あの二人」

レ「翔ちゃん、そんなこと言ってる……」

翔「ん？何が　「フレスベルグ！！」ぎゃああああああああ  
ああああ！！？」

レ「だから言ったのに……」

翔「もう……少し、早く……頼む……」

レ「じゃあ、茶番はこれくらいにして本編に触れていくよ　今回は  
翔ちゃんの再登場と報告の回だね」

翔「注目するところは“ヴィヴィオと別の女の子”、“初登場デバ  
イス”『デュランダル』“、“俺の心境の変化”、“ここら辺かな”

レ「まずは女の子についてだね。この子は作者設定ではヴィヴィオ  
と同年代なんだって」

翔「ふ〜ん、で再登場はいつぐらいなんだ？」

レ「実はこの子、今のところはJ・S事件内に出演する予定ないら  
しいよ？」

翔「は？ならなんで出したんだよ」

レ「なんだかこのタイミングがよかったらしいよ？この子の出番は  
J・S事件後と次章か次々章なんだって」

翔「作者何考えてんだよ……」

レ「きつと何も考えてないんだよ」

翔「だな」

レ「でも、あの子サキのクローンなんだよ？」

翔「あんなのが二人もいるなんて想像したくないな……」

レ「名前も決まってるないんだって」

翔「じゃあ気長に募集するか？」

レ「OK」

翔「で、次はデュランダルについてだな」

レ「デュランダルは一番初めに作者が出そうと考えてたデバイスだね」

翔「他の有名所はあらかた他の作者さんが出してるからな」

レ「で、デュランダルの現持ち主が私って事なんだけど」

翔「当然秘密なんだろう？」

レ「モチ」

翔「あの生意気な声はどういう設定なんだよ」

レ「知らな〜い」

翔「でもデュランダルもフェイトの言うことは素直に聞くよな？」



レ「デュラちゃんは昶ちゃんが嫌いなだけの設定だからね」

昶「酷い設定だな！？それに知らないんじゃないかなかったのかよ！？」

レ「デュラちゃんについても後々語られると思うからその時までお楽しみに」

昶「……久しぶりのスルーは堪えるよ」

レ「最後は昶ちゃんの心境変化。これはフェイトちゃんも最後に言ってたね」

昶「これ、ホントたいしたことないんだけどな」

レ「うん、なんか読者さん達に悪い気がするよね」

昶「訳も次話か次々話くらいで出ると思うし」

レ「それじゃあ、そろそろ締めようか」

昶「感想や質問、誤字脱字、どんな内容でも受け付けてます！」

レ「それと、今回言った新キャラ少女の名前も地味に募集します！期限はとりあえずありません。なぜなら登場する機会がまだまだ先だから！とりあえず、こちらは『こんなのどう？』っていうのがあればメッセーじにてお送りして頂けば嬉しいな。他にも、ゲストに来て頂ける方や逆にゲストに来させてやる、という方々もメッセーじにてお送りください！他にも何か提案があればどんどん言ってくださいね」

翔「そういえばアクセス記念も近づいてきてるんだよね……」

レ「最近あんまりそっちは考えてなかったね」

翔「どうするんだ？」

レ「まあ、どうにかなるよ！」

翔「投げやりかよ！！？」

レ「気にしたら負けでは、」

翔「……仕方ないな」

レ・翔『次話にてお待ちしております！……！』

### 第三十二話 蒼い剣（後書き）

どうでしたか？

初かなりお久しぶりでしたが、説明が多くなってしまいました。

漸く出せたぞデュランダル！！

これからまだまだ秘密がちらほらと出てきます。

皆さん楽しみにしてくれれば嬉しいです！！

では、次話にてお待ちしております！！！！

### 第三十三話 兄と妹（前書き）

どうも、本棚に本が入りきららず困っている夕です!!

今回はタイトルからなんとなく想像出来ると思います。

では、どうぞ!!--!!

### 第三十三話 兄と妹

「君の後輩はどうだったんだい？」

「アンタには関係ない事よ」

にやけた顔で質問するスカリエッティに冷たく返すサキ。

ここはスカリエッティのアジト内。そして、スカリエッティの横では、ナンバーズNo. 1、ウーノが黙々とデータを処理している。

「しかし、強かったから使ったんだろう？勿論それがどういふことをかを知って」

そう、面白そうに笑う。

「……」

「これで歯車の動きは加速した。どうだろう？なんなら私が」

「黙りなさい」

サキは遮るように言い放つ。

「アンタはアンタの領分だけやってりゃいいのよ。こっちに干渉しないで」

「それはそれは、失礼した」

謝罪の言葉を述べているにも関わらず、全くそつは聞こえない。

「それにしても彼は良いタイミングでやってきたものだね」

現れたモニターにはへりを守る浅儀朧の姿が映っている。

「あの世界から帰ってきてまだそんなに経ってないだろうに」

「　　ッ!?.....知っていたの?」

研究所のデータはサキが勝手に持ち出したデータでスカリエツテイは知らないはずだったのだ。

「あのデータを君がわかるように復元したのは私だよ?失敗作だったからあのまま放置していたが、いやあ、実に良い仕事をしてくれた!」

モニターには恐らくガジェットに撮らせたのだろう、蒼白い閃光が研究所を文字通り切っている姿が映っている。

「漸く見る事が出来たよ、浅儀の禁忌を!素晴らしいね、あの力は!」

「チッ.....」

興奮するスカリエツティとは対照的にサキは舌打ちする。

ようはスカリエツティに躍らされていた、ということなのだ。それは舌打ちの一つや二つ、打ちたくなる。

「解析は未だ途中段階だが見れば見るほど面白い。やはりアレだね、身体そのものが変化しているように見える」

自身の仮説を嬉しそうに話すスカリエッティだがその顔付きには狂喜も見え隠れしている。

「……ふん」

スカリエッティ  
そんな変態を一瞥してサキはその場を後にする。

「……良いのですか、彼女を野放しにしておいて？」

サキが行った事を確認し、ウーノが口を開く。

それに対しスカリエッティはモニターから目を離さずに答える。

「構わないさ。彼女には時間もないんだ、どうせ何も出来やしないよ。それよりも早く解析を続けよう。それだけアレの完成が早くなる。ハハハ、ハハハハハハハ」

狂喜に満ちたその顔はまさしくマッドサイエンティストのものだった。

「なのはちゃん強すぎるのよ……っ！？」

立っているのが厳しく、壁にもたれ掛かるサキ。

「はぁ、はぁ……持ってくれるんでしょうね、この身体は……」

自身の手の平を見ながらぼやく。

その手は、赤い液体で濡れていた。

戦闘機人達との戦闘から数日、通常シフトへと戻った朧とレインはロングアーチの副官、グリフィスと廊下を歩きながら話している。

「と、言うことは朧さんが保護した子はまだ目覚めていないんですね？」

「うん、エリオ達が発見したっていう女の子と一緒に検査は終了したんだけど……」

『検査でわかったのは二人とも人造生命体で普通の子よりも魔力が大きいって事と、黒髪の子……私達が拾ってきた子がやっぱりサキのクローンだったって事ぐらいだね……』



昶の頭に座りながら言うレイン。話の話題は先日保護した二人の少女について。

内容が内容なだけにグリフィスや昶だけでなく、レインも真面目に話している。そして当然話に拳がるのが、

「やっぱり受け取り先が難しそうですね……」

『だね……』

「受け入れ先を探すにしても長期の安全確認は必要だろうし、当面は教会か六課で預かるしかないだろうな」

普通の孤児でも受け入れてくれる家庭はそれ程多くはない。それに加え、作られた存在ともなると一段と難しくなってしまう。

「黒髪の子の方はサキのクローンなんだし、サキが引き取ってくれたら文句なしなんだけど……」

なんて昶がぼやく。

『無理だろうね。今はスカリエッティ陣営にいるんだし。出来るなら私達に頼まなかったよ』

「せめてあいつが目的を教えてくださいればなんとか出来るかも知れないんだけど」

ハア、と溜息を吐く二人。

そんな重たい空気の中でグリフィスが何かを思い出したように口を開く。

「そういえば、もう一人の女の子は今、六課に来ていますよ。高町隊長が連れて来られました」

『そういえばそうだったね。私もさっき見てきたよ。ヴィヴィオって言うんだって』

「そうなの？俺はまだ会ってないな」

と、そんな事を話しているとロビーの所で何やら人だけりが出てくる。

『噂をすれば、だね』

そのレインの言葉の言う通り、そこにはFW陣に加え、なのは、フェイト、はやて、そして噂のちびっ子、ヴィヴィオが集まっていた。

「あ、翔さん」

「何の騒ぎだ？」

翔達の方へ気付いたキャラコ達が道をあける。

そして初めに声をあげたのは意外にもヴィヴィオだった。

「ローラン！」

「……ローラン？」

「……誰？」

聞き覚えのない名前に首を傾げる一同。

『ああ、それは、』

「……恐らく僕の事じゃないかと」

おずおずと手を挙げたのはグリフィス。

「え？」

「グリフィス？」

素っ頓狂な声をあげる昴。

『グリフィスくんのファミリーネームはロウランだよ。知らなかった？さつき皆の名前を教えたから、その時に間違えて覚えちゃったんだね』

「あ〜」

「そういえば……」

グリフィス・ロウラン

以前から知り合いだったはやてやなのは達にまで忘れられていた

グリフィス……悲しい子。

「で、こんなに大所帯でどうしたんだ？」

話を切り替え、ロビーに集まっている原因を聞くと、なのはが苦笑いしながら答えてくれた。

「にやはは……今からはやてちゃんとフェイトちゃんとで聖王教会に行かないといけないんだけど、離れてくれなくて」

「部屋では納得してくれたんだけど、見送りしてたらまた、ね」

フェイトの話では予想以上になのはがヴィヴィオに懐かれてしまい、離れてくれなくなっているとの事だった。

それを理解した昶はフェイトと目を合わせ、それに頷きで返すフェイト。

「ヴィヴィオ？」

昶は優しく話し掛けながら、相手の目線に合わせるようにしゃがみ込む。

「俺、昶って言うんだ。わかる？」

「……しよー？」

初対面だからだろうか、なのはのスカートを掴み少し怯えているが、それでもきちんと言った事に昶は笑顔で応える。

「そつだよ。ヴィヴィオはなのはさんが好き？」

こくん、と頷く。

「そつか。なのはさん優しいもんな」

またこくん、と返ってくる。

「おにーちゃんもなのはさんは優しいから好きなんだ」

昶の言葉に若干周りが、ざわざわするがそんな事気にせず会話を続ける。

その甲斐あってかヴィヴィオも反応を示す。

「……しょーも？」

「うん けど、なのはさん今から少しお出かけだろ？」

「……うん」

「だからその間おにーちゃんと遊んでくれないかな？」

最初に子供と話す時に大事な事は同じ目線に立ち、対等な立場にしてあげる事だ。昶は今、ヴィヴィオと友達になろうとしている。

「う……う……」

昶の言葉に悩み始めるヴィヴィオを見て一気に勝負をかける。

「ね？」

現

突然昴の手の平に現れたのはヴィヴィオの持つウサギのぬいぐるみとつりふたつな氷で出来たウサギ。

ヴィヴィオと話している間に念話でレインに頼んでおいたのだ。

手品のように現れたウサギに一気に興味を持って行かれたのかヴィヴィオは昴の方へと歩み寄り、氷のウサギを手取る。

「おにーちゃんとなのはさんの帰り、待ってようか？」

もう一度聞いたその言葉。

「うん！」

今度はハッキリと返事が返ってきた。

「それじゃあヴィヴィオ、次何しよっか？」

「ん、お絵かき！」

「OK、お絵かきな」

そんなこんなでなのは達が聖王教会に出かけている間、朧がヴィオの面倒を見ることになった。

掴みが良かったのかヴィヴィオはすぐに朧へと懐き、積み木、かくれんぼ、折り紙などを楽しそうに遊んでいる。

今はお絵かきタイム、ということだ。

余談だが朧は副隊長。当然彼のすべきお仕事、というものが存在するのだが、これも今となっては改めて言う必要はないのだが、レインが一手に引き受けている。本当に一家に一人欲しい万能デバイスだ。

「またプリンでも買っておいでやらないとな」

「どうしたのぉ？」

「ん？ヴィヴィオは絵が上手いなあ、て思っつて。それなのはさんだる？」

「えへへ、うん！」

机の上に置かれている白い紙には茶髪に恐らく六課の制服を着た女性が書かれていた。

「ヴィヴィオは今何才なんだ？」

「ん〜とね〜、6才！」

指を折りながら数える姿がなんとも愛らしい。

「6才か」

「うん、6さい！」

「（言語や意思がハッキリしている。これは元となった人物がいるな……）」

本来人造生命体は人工受精児であり、記憶などなく、思考も赤ん坊程度のもが多い。

しかし、ヴィヴィオにはその辺りがみられない。

それが示すものは、

「（プロジェクトFは続いてる、か……）」

## プロジェクトF

生命操作技術の一つでクローニングした素体に記憶を定着させることにより、従来の技術では考えられない程の知識や行動力を最初から与えることが出来る。



そしてこの技術、スカリエツティの構築した基礎理論を元に発展させて完成させたのがフェイトの母、プレシア・テストロッサなのだ。

しかし、元となった人物の肉体、及び記憶の複製が目的だったプロジェクトFも記憶の完全再現までは出来ず、よく似た別人として目覚めてしまう為、未完成の技術とされている。

恐らくヴィヴィオにもこの技術が関与している事は間違いないだろう、と昶は思案を巡らす。

「しよ〜お〜」

「ごめんな、おにーちゃんが悪かった」

思考の海に潜って放置していた昶をヴィヴィオが怒る。その時に頬を膨らませる様がなんとも子供らしい。

そんなヴィヴィオがふと思ったのか昶を見上げながら疑問そうに言った。

「しよーはヴィヴィオのおにーちゃんなの？」

意識して言った訳ではなかったが事あることにおにーちゃん、おにーちゃんと言っていた事に反応したようだ。

それに対し昶は頭をかきながら困ったように答える。

「そうだな、別に血が繋がっている訳じゃないけど、おにーちゃん的存在みたいなの？」

「？」

ヴィヴィオは曖昧な答えに首を傾げる。

「わかんないか、ヴィヴィオはしよーがおにーちゃんの方が嬉しいか？」

「ん〜」

その質問に手を組んで考えはじめるがすぐに答えに至ったのかパツと顔を上げて元気に答える。

「うん！」

「そっか。ならしよーはヴィヴィオのおにーちゃんだよ」

「しよーおにーちゃん？」

「それでも良いけど長くないか？」

「しよーおにーちゃん！」

「まあ、ヴィヴィオがそれで良いならなんでもいいよ」

「えへへ、しよーおにーちゃん」

そついいながら抱き着いてくるヴィヴィオの頭を優しく撫でる。

「よし、なのはが帰ってくるまでまだ時間はあるし、次はなにしようか？」

「ん〜とね〜」

「ふう、すっかり遅くなっちゃったね」

「うん、ヴィヴィオ、ちゃんと大人しくしてたかな」

聖王教会から帰ってきたのはとフェイトは今、はやてと別れて  
朧の部屋へとヴィヴィオを迎えに行っている。

「朧が見てるから大丈夫だと思うけど、逆に朧だから心配な事もあるからね……」

苦笑いしながらフェイトが言う。

子供に懐かれやすい朧は子供の扱い方が上手い。

上手くヴィヴィオとも仲良くなっているだろう。

しかし、心配なのはたまに朧も一緒になって暴走し始める事があるのだ。

以前クロノとエイミイの子供達の面倒を見ていた時も何を思ったのか、双子である二人を両肩に乗せて町内を全力疾走していたのだ。

そして何時間も帰ってこなかった朧にリンディのカミナリが落ち、涙目になりながら数時間お説教をくらった、という過去を持つのだ。

それを知っているフェイトはもちろん、なのはも話しを聞き及んでいるので不安は拭えない。

「まあ、今更考えたって仕方ないし、朧くんを信じよ……信じたい」  
後ろ向きな意思表示をしていると朧の部屋の前に到着し、ベルを鳴らす。

「朧くん、いる？」

なのはが呼び掛けるが一向に返事がない。

「まさか……ね」

今の今まで話していた内容が頭を過ぎり冷や汗が出る二人。

「朧、いないの……って開いてる？」

と、ドアに近付くとウィーン、と自動ドアが開いてしまう。

「フェイトちゃん、朧くんいた」

先に部屋へと入ったフェイトに確認するのはだが、人差し指を口元に持って行こられ止められてしまう。

二人の視線の先にはすやすやと眠る、朧とその上に乗りもたれ掛かるヴィヴィオ。

「お疲れ様、朧」

その様子を見て、安心したフェイトはそっと毛布を掛けてあげる。

「もう少し寝かせてあげよっか」

「そっだね」

微笑むフェイトとなのは。

その寝ている二人の姿は今日初めて会ったとは思えない、まるで本当の兄妹のようだった。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「今日はヴィヴィオの登場回だったね」

翔「ほぼ俺とヴィヴィオのシーンだったしな」

レ「翔ちゃんは今回ヴィヴィオのおにーちゃんになったけど他の作者さんのSSみたいにパパにはならなかったんだね」

翔「まあ、年齢を考えて俺19にヴィヴィオ6才だろ？パパって歳じゃないだろ」

レ「単に背が低くてパパに見えなかっただけじゃない？」

翔「黙れポンコツデバイス！」

レ「あ〜そんなこといっの〜？」

翔「ポンコツにポンコツって言って何が悪いんだよ!!!」

レ「今度から書類仕事自分でやってね」

翔「すみませんでした!!!」

レ「一月、プリン」

翔「う……………に、二週間」

レ「二月」

翔「……一月でお願いします」

レ「よろしい」

翔「お前のプリン一つ一つが高いんだよ……」

レ「その話は置いていて、本編の話いくよ」

翔「うう……（泣）」

レ「翔ちゃんってホントに子供に懐かれるよね」

翔「……あ、ああ。そういう事が多いけど」

レ「精神年齢が同程度って思われてるんじゃない？」

翔「……泣いていいかな？」

レ「ダメに決まってるじゃん」

翔「優しさが欲しい……」

レ「はい、それじゃあそろそろ締めるよ」

翔「俺が【ぽすと】に出る理由ってあるのかな……」

レ「感想、意見、質問、誤字脱字 e t c ……どんな内容でもいいので待ってまゝです」

翔「他にも前回からボソツと言っている黒髪ちびっ子オリキャラの名前やそろそろ執筆を始めようと思っっているアクセス記念の『このなのいいんじゃない？』という内容とかもメッセージに送ってくれると嬉しいです」

レ「要はどんな内容でもwelcome、て事で」

翔「では、」

レ・翔「次話にてお待ちしております！：！：！」



第三十三話 兄と妹（後書き）

ヴィヴィオってこんな感じでよかったのかな……

私のイメージではああいう感じなのですが（笑）

可愛いやつです（笑）

では、次話にてお待ちしております……！！

第三十四話 翔くんと鬼じっし(前) (前書き)

どうも、夕ですー!!

まずは一言、

どうしてこうなった……

今回は正直こんなに長くなるとは思ってませんでした(汗)

(前)ってwww

しかし、反省はしてるが後悔はしてません!!

それでは、びびりぞー!!

### 第三十四話 翔くんと鬼(前)

サキのクローンである少女は今だ目を覚まさず、医療院で眠っている。

対するヴィヴィオの方はというと、なのはが保護責任者となりヴィヴィオの保護者となった。

ヴィヴィオはひょんなことからなのはの事を『なのはママ』と慕い、後見人となったフェイトの事も『フェイトママ』と呼び、母親二人というなんとも不思議な形態で落ち着いてしまったのだ。

ちなみに翔は『しょーおにーちゃん』で定着している。

てな感じで事件もなく穏やかな日々が続いていたわけなのだが、

「くそっ!?!」

疾

逃げる、逃げる、逃げる。

翔は今逃げている。

追っ手の数は不明、一体どれ程の人員が注ぎ込まれているのか、その術を知る方法はない。

「いた！こつちです！」

「チツ！」

追っ手に発見され再び速度を上げる。

逃げるとこ逃げるとこ、すぐに発見されてしまう。

それだけ敵には優秀な指揮官がいるということまで舌打ちの二つや二つ、打ちたくなるというものだ。

「逃げず大人しく投降してください！悪いようにはしませんから！」

「信用出来るか！？何！？俺が何やったの！！？」

正直翔は何故追われているのかわかっていない。

翔にはある勘が働いている。

この逃走劇が始まったが最後、デッド・オア・アライブ、死ぬか生きるかの二者択一なのだ。

既に六人程迎撃したので現在目視出来る追っ手は一人。

このまま突っ切る！

足にぐっ、と力を入れスピードを上げ

「ここは通しません！」

「ッ！？」

前方を通せん坊するように立ち塞がる。

後方と前方に一人ずつ。

突然現れた新手に急ぎ、急ブレーキを掛け横道に方向転換。

後ろを気にしつつ他からの注意を怠らない。追っ手はまだまだいるはずだから。

そっちに意識を集中しつつ、もはやこういう状況ではお約束のセリフが頭に浮かぶ。

どっしてこうなった、と

事の発端は数時間前に遡る。

「ん、こんなもん届けられてもなあ」

部長長室では午前になければいけない仕事を終え、手持ちぶさたになったはやてが大きな小包を見ながら唸っている。

『はやてちゃん』

『こっちも終わったですよ』

部屋に入ってきたのはレインとリイン。ユニゾンデバイス達ははやての仕事を手伝っていたのだ。

『もうちよっと掛かると思ったけど早く終わったわね』

『そうですね』

開始当初は『は？何この膨大な量？』的なまでであったのでレインだけでなくレインにも救援を頼み、張り切っていたのだが如何せんはやてやレインの元々の処理速度に加え、レインのスペックの高さが尋常ではなくテキパキとこなしていき、予定時間より早く終わったのだ。

『ホントにレインちゃんは凄いです』

『はやてちゃんやレインちゃんが優秀だからスムーズに出来ただけだよ』

「どうやレイン、翔くんやなくて八神家にこうへんか？」

上司が部下のデバイスをヘッドハンティングという光景はなかなかあるもんじゃない。それに対してレインは笑いながら返答する。

『アハハ、魅力的な話だけど遠慮しとく。翔ちゃん一人じゃ心配だからね』

「そりゃ残念や」

はやてはそう言うが言葉とは裏腹に返答が始めからわかっていたようだ。

『ところではやてちゃん、何見てたんですか？』

ふわふわと小包の方へと顔を向ける。

「ああ、これか？懇意にしてる服屋からだな」

『綺麗ね、このドレス』

包みの中には紺を主体とした美しいドレスがあった。

『もらっただですか？』

「そうなんよ、なんか新作のドレスらしくてな。ちよいとモニターをやって、写真を撮ってくれへんかって送ってきたんや」

はやての話によると、このドレスを着た写真を撮ってそれを宣伝に使いたい、という事らしい

『要は広告塔になって欲しいって事？』

「まあ、そやね」

『じゃあ着るんですか、はやてちゃん？』

「いや、私はあんまりこういうの柄やないし、なによりサイズが少し大きいんよ」

なんの為に送ってきたんやろな、と溜息をつく。

そんな中でレインは顎に手を置き考え事をしながらはやてに確認する。

『これって誰が着てもいいの？』



「え？まあええと思うけど、なのはちゃんやフェイトちゃんは嫌がるや……」

話の途中辺りから悪どそつな笑みを浮かべ始めたレインを見ては、  
やても言葉を止める。

そして数秒後、

「フフフ、そういう事やなレイン？」

『わかった？さすがはやてちゃん』

俯きかげんな二人の表情は見えないが、気味の悪い笑い声だけが聞こえる。

「フフ、フフフフフ……」

リンからちらつと見えた二人の口元は悪戯を思い付いた悪ガキ  
そのものだった。

これを読んでくれている方々はもうお気づきだろう。

悪代官のはやて、レインの狙いはドレスアップした朧を弄び、恥  
ずかしかる顔を写真に収める事。

まず二人はその姿を拝む為に必要な同志を集める事から始めた。

六課の隊員は基本的に真面目な人物が多い。同志集めは困難を窮める、と思われた。

しかし現実には

・ 某エースオブエースの場合

「え、翔くんのドレス姿？……………にゃにゃ！！？いいね、やろっ  
！！」

・ 某ツンデレガンナーと愉快的仲間達の場合

「翔さんの捕獲？」

「報酬はアイス！？やります！やらせてください！！」

「部隊長命令って……………」

「……………翔さん一体何をしたんですか？」

・某デバイスマスターの場合

「任せて下さい、捕獲するんですよね？きつちり仕留めて見せますよ、フフフフ」

・某ヘリパイロットの場合

「どうしたんすか部隊長？……へえ、いいっすね。いつもいつもフェイト隊長といちゃつきやがって、今回は目にも見せてやる……」

・某医務室の先生の場合

「どうせならファッションショーにしませんか？」

・某名もなき女局員達の場合

「やりますー」

「参加させて下さい！」

「翔くんの泣き顔……ウフフフフ」

「あ、浅儀さんを虐める……キヤー／／／」

「やっぱり翔くんは受けが似合うわよね」

そして、某執務官はと言つと……

「任せて……！」

サムズアップした顔が協力を物語っていた。

こうして六課狩猟部隊が結成された。

一方、その当事者はどうと……

「は、はつくしゅん！」

「風邪か？」

「かもしれない。なんだか寒気がするし」

ザフィーラと雑談をしていた朧だが、悪寒がして仕方がない。

「なら部屋に戻れ。拗らせては厄介だ」

「ああ、そうするよ」

そう言って自室の方へと足を向けた。

「おかしいな、熱とかはないんだけど」

額に手を当てててもいつもとなんら変わらない。

それもそのはずだ。その悪寒はどこそのニュータイプが感じる直感のようなものなのだから。

そこに六課全体に呼び出しの放送が入る。

『ライトニング部隊副隊長、浅儀朧三等空尉、至急部隊長室にお越しください。繰り返します、ライトニング部隊副隊長』

「ん、俺？」

突然の呼び出しに心当たりがない朧だったが、とりあえず部隊長

室へと向かった。

「……なんなんだ？だんだん悪寒が酷くなってきた」

部隊長室前までやってきたのだがトビラから、まがまがしいオーラが渦巻いている。

「入りたくないけど……」

息を呑み、入室を決心する。

「はやく、きたぞ」

「どっどっ」

トビラが開き、中へと入る。

いつもと同じ、はやくとラインがいるだけの普通の部隊長室。

「待ったよ、翔くん」

「なのに何故だろう？」

「用件って言うのはな」

不気味な笑みを浮かべたはやくに恐怖を感じるの！？

脱！

「 なっ！！!? 」

話を聞く前に脱走を開始する。彼の勘が告げているのだ、聞いていたら終わりだと。

朔の予想の斜め上に行く行動の早さに二人共、口をあんぐりと開けたままだったが、はやてはすぐに思考を取り戻す。

「いきなり逃げられるとは思わなかったな……まさか気付いた? いや、それなら此処にこんとさっさと逃げてるか? 」

逃げられた、だがまあそれも予想内と言えば予想内。ただし早かったただけだ。

こういう状況を見越して同志を集めたのだから。

「フフフ、それじゃあ今から勝ちの決まった鬼ごっこを始めよか」

そう言うてはやては各所に散った同志達に連絡を取り始めた。

そして冒頭に戻る。

後方にはティアナとスバルのスターズコンビ、先程まで倒してきた一般局員とは訳が違う。

「お前らなんで追いかけてくるんだよ!!?」

逃げながらも追われる理由を聞きだそうとするが、

「部隊長に聞いて下さい!」

「アイスです!」

返ってくるのはそんな言葉だけ。

「てか、アイスに俺は負けたのかよ!?」

スバルの頭の中では、

翔くくく越えられない壁くくくくくアイス

なのだろう。

「こんな時ウィータ達がいてくれれば!」

恐らく止めてくれただろうウィータとシグナムは生憎出掛けていて今日は帰りが遅くなるのだ。

今更無い物ねだりをして仕方がなく、前方十字路の道を左手に曲がるうとするが、

「ハア!!?」



曲がった先からティアナがこちらに向かって来る。

いつの間に先回りしたんだ!?

反射的に後ろへと振り向く。

「ちょ!?!」

その先にもティアナの姿。よく見ると全ての十字路の先にティアナが存在している。

「ここまですんのかよ!」

ティアナは幻術まで使って捕まえに来ているのだ。

一体どれが本物なのか、ティアナも完全に本気だ。

「そこまでやるってんなら!」

疾

翔は魔力を身体へと流し速度を上げ、始めに曲がった先にいるティアナの方へ駆ける。

そして翔は速度を維持したままティアナへとぶつか

スウ、

らない。

「え、なんでわかったの!？」

後方からスバルの声が聞こえる。

翔は減速せずに前にいるティアナが幻術だと確信していたのだ。

「くっ、レインがないのに」

翔の瞳が朱く輝く。

彼は流転の魔眼を使用したのだ。レインがない状態では演算が追いつかないのでいつも程使用する時間は長くないが、それでも少しくらいなら問題ない。

しかし、念のためすぐに封印状態に戻し、黒目に戻る。

「撒いた……か？」

身体強化した翔は追っ手の二人を撒いた事で漸く足を止める。

しかし、翔に休息の時はこない。

「いました!」

「見付けたぜ、翔!」

「……もうやだよ」

次にやってきたのはシャーリーとヴァイスを筆頭としたロングア  
ーチ組。

次々と送られてくる刺客達にもう若干涙目になりつつある。

それでも逃げる足を止める事は許されないと足を前へと運び続け  
る。

「大人しく捕まってオシヤレになりましょう！」

「オシヤレ!?!」

昴の中で漸く見えてきた真相。

「要は俺を着せ替え人形にする気か!?!」

女性が多いのはそれが理由かよ!?!

「恥ずかしいのは最初だけです、次第に病み付きになりますから！」

「そんな病み付きいりません!?!」

病み付きになったら最後、男としていろいろと失ってしまうだろ  
う。

「昴くん待って!」

「私がお着替えしてあげるから!!」

「虐めてあげるから!!」

他にも幾人かが叫んでいるがスルー。というか、最後の一人はなにかいろいろと終わってる。

そんなゴタゴタした追っ手の中に一際異彩を放つ人物。

「オラアアア、大人しくお縄につきやがれ!」

「なんでヴァイスまでいんだよ!!?」

お前そんなキャラだったか!?!ぐらいな遠吠えをあげながら鞆を追い掛けるヘリパイ、ヴァイス。

「ヴァイスは別にんなもんに興味ないだろ!!?」

「たりめえだ!俺はホモじゃねえよ!!」

「じゃあなんで!?!」

後ろの方から「あの二人やつぱり……」や「ヴァイス×鞆よね」とか「意外に逆もありなんじゃない?」とか聞こえたが、二人は気にしない。てか、そんな言葉誰も言っていないと信じたい。

「いつもフェイト隊長とイチヤイチャしやがって!お前はっかりモテすぎなんだよ!?!」

「なな、何言ってるんだ！？ベベベ、別にイチャイチャなんてないし、モテてなんかもない！！というより、お前完全に私怨だよな！？」

反論を唱えるが顔を赤くしては全く効果がない。

モテている、というのも鈍感スキルA+の昴自身は全く自覚がないのだがコイツ、地味にモテるのだ。

それも近いうちに話す事になるだろう。

## 閑話及第

「とにかく死ねえええええ！」

「そこまで言うか！？」

このままでは埒が明かないので攻勢に入る昴。

十数人と敵は多いが所詮ロングアーチ。

「（まあ、大丈夫だろ）」

くるりと踵を返し、軍勢の中へと突っ込んでいく。

「おまへぶはあ！？」

とりあえず、ヴァイスの顔面に膝蹴りを放ち意識を掻き消す。

すう、と着地して残ったシャーリー達に笑顔で向ける。

「女の人を殴るのは趣味じゃないから気絶してもらおうよ」

瞬

そう言っつて朔が彼女達の視界から消えた。

「え？」

誰があげた声なのか、それを認識する事も出来ず一人、また一人と倒れていく。

「つと」

そして最後の一人に手刀を浴びせ崩れ落ちるその子を支える。

「つたく、俺は人形じゃないんだ。必要な時意外に女装なんてしてたまるか」

「なら今が必要な時つて事ね」

「ッ！？」

縛

突如現れたバインドに動きを封じられてしまう。

朔は忘れていたのだ。ロングアーチにも騎士がいた事を。

「シャ、シャマルさん……」

「はぁ〜い、翔くんゲット〜」

湖の騎士シャマル。サポートが本領の彼女がロングアーチにいる事、そしてこういう事が大好きな事を翔はすっかり忘れていたのだ………影が薄いから。

「翔くん、何か失礼な事考えなかった？」

「そんな訳ないじゃないですか、シャマルさん」

ジーツと見つめる彼女の瞳から目を逸らし答える翔。

「それじゃあ、はよてちゃんの所へ行きましょうか」

鼻歌混じりで歩を進めようとするシャマルに翔が待ったをかける。

「ちょ、ちょっと待ってください、シャマルさん！」

「どうしたの？逃がさないわよ？」

「それはもう諦めました。でも、どうしてこんな事になったのか俺知らないんですよ。理由がわからないと俺だって納得出来ませんよ」

着せ替え人形になる事だけは伝わったが何故そういう事に発展していったのが翔は詳しく知らないのだから尤もだ。

「そうね、確かはよてちゃんが言うには、はよてちゃん宛てに届い

た広告塔用のドレスを朧くんに着せる為って言ってたわ」

「ハア！？はやて宛てだったんでしょ！？ならばやてが着ればいいじゃないですか！！？」

「サイズがちよつと大きいらしいわ」

「だったらフェイトやなのはが着れば！」

「二人は恥ずかしいから嫌だって」

「俺の方が恥ずかしいわ！！！」

一体朧に人権はあるのか、と問いたくなるような質疑応答。恐らくないのだろう。

「それにレインちゃんが言い始めたらしいわよ？」

「絶対スクラップにしてやる……」

ギュツと拳を握り締め決意する朧。

「こんなところね。それじゃあ行きましようか、私も楽しみだしウキウキ気分のシヤマル。」

「そうですね、それじゃあ行きますよ」

「？」



あまりに素直過ぎる反応に疑問を持ち、昗の方へと振り返る。

## 縛

「へ？」

急に身体が締め付けられる感触がして、自身の身体へと視線を落とすとバインドが。

「ありがとうございますシャルルさん。親切なシャルルさんなら丁寧に教えてくれて時間を稼がせてくれるって信じてました」

ニッコリと微笑みを向けながら言う昗。

そう、昗の狙いは時間稼ぎだった。

即席のバインドなんてそう長時間拘束出来る物ではない。捕縛者の解析が入るのなら尚更だ。

そしてシャルルはと言うと……

「そ、そんな顔で言われたら……」

昗の乙女ブレイカーによって撃破されていた。

「それじゃあ行きます」

昗は早足でその場を後にする。

「はやての事だ、絶対まだ終わってない………やだなあ」

そう考えるとまた涙目になりそうになってしまふ。

「とにかくヴィータ達が帰って来てくれるまで逃げない」と

気が遠くなりそうな程、逃げなくてはならないが辱められるよりは数倍マシだと言い聞かせる。

昗の逃走劇はまだ始まったばかりだ。

~~~~~

「れいんぽすと」

翔「……何、この話？」

レ「何って、翔ちゃんを虐めようって話？」

翔「酷くない！？酷いよね！！？」

レ「別に良いじゃん、翔ちゃん女装好きでしょ？」

翔「好きくない！！」

レ「え〜、うつそだあ〜」

翔「そんなに俺で遊んで楽しいか！！？」

レ「うん」

翔「……あれ、目から雨が」

レ「しかもこの話まだ続くんだよね」

翔「こんな話に時間掛けるなよ！？バカ作者！！？」

レ「でもあれらしいよ？作者メモによると『今考えている日常パートって大半が翔を弄るような話しか思い付いてないんだよね』って」

翔「誰か！作者に隕石を落として！！」

レ「まあともかく翔ちゃん弄りはまだまだ続くよ」

翔「断固反対！！」

レ「では、次話にてお待ちしております！！！！」

翔「ムシするなあああああああああああああ！！！！」

第三十四話 翔くんと鬼じっこ(前) (後書き)

どうでしたか？

いや、本当に当初の予定ではいつも程度の長さ一話で終了予定だったんですが、なんだかだんだんと長くなってしまい(笑)

日常パートでこんなお話見てみたい、ていうのがあれば是非、メッセージの方へ送って下さい!!

感想やその他諸々もよろしくお願いします!!

では、次話にてお待ちしております!!

第三十五話 翔くんと鬼じっし(中) (前書き)

どうも、夕ですー!!

この間も言いましたが、今回も言わせてもらいます。

どうしてこうなった!?!?

まさかの中編!?

まさかの新キャラ!?

当初の予定を大いにブレイクした結果が中編に詰め込まれています。

こんな予定全くなかったのに……

では、どうぞー!!--

### 第三十五話 翔くんと鬼(じ)っ(中)

突然だが、本当に突然だが一人の女性を紹介したいと思う。

その子の名前はユニス・クローバー。

機動六課で事務を担当している18歳の女の子だ。

彼女は魔力を持たない一般局員だったが、類い稀ない情報処理能力が八神はやての目に止まり、部隊に引き抜かれてきた。

エリート部隊への引き抜きという事で彼女の家族はそれは大層喜んで。

普段はユニスにつんけんしている弟も「高町さんのサインを！」と頼んだくらいなのだから。

しかし、そんな家族とはよそにユニス自身はあまり乗り気ではなかった。

内気な性格の彼女は自身の能力がエリート揃いの部隊で足手まといにならないかが不安だったのだ。

……実際そんな事は毛ほどもないのだが。

それに加え元々の部隊でも最近になって漸く気兼ねなく話せるようになったというのに、そこを出て新部隊でやっていけるのか？

そんな不安があったわけだが、やはり内気な彼女は喜ぶ家族やエリート部隊に転属する事を祝ってくれた同僚達の期待を蹴る事が出来ず、機動六課に入隊を果たした。

入隊初日の同僚達との自己紹介では恥ずかしさのあまり、「ユ、ユニ……ユニス……クローバーでしゅ……」と、小声の噛み噛みというなんとも可愛らしい挨拶をしまい、赤く染まった顔を更に赤くしてしまう。

「（や、やっちゃった……これからずっと笑い者だよ……）」

顔を俯け、涙目になりながらこの先一年間の穏やかな生活に別れを告げる。

しかしそんな自己紹介だったにも関わらず、同僚達はユニスの性格をすぐに理解し……というか保護欲を刺激され、すぐに打ち解けられるようにとユニスに積極的に話し掛けていったのだ。

六課の皆マジでいい人達。

そんな周りにあたふたしながらも「私、頑張れるかも……」と、



心の中で小さく決意したのは彼女だけの秘密だったりする。

そして仕事にも慣れ、一月が経った頃、ユニスに少し遅れて春が訪れた。

その日は珍しくユニスは荷物運びをしていた。

「うう……お、重たいよ……」

いつもならこういう力仕事は男達が率先してやってくれるのだが今日は雑務に終われてその場にいなかったのだ。

女性の平均身長はあるが筋力是人並み以下のユニスにとって段ボール二箱は重すぎて、重ねた箱が視界を覆う。

この時ユニスは目の前に階段がある事に気付けなかった。

転

「きゃああ!?!」

突然なくなつた地面に足が空を切りバランスを崩したユニスは下へ真つ逆さ

「危ない!」

まにはならず男性局員によって支えられていた。

「怪我は？大丈夫？」

「あ、……は、はい」

ユニスの返答に安堵する男だが、彼女の額を指で弾く。

俗にいうデコピン、というやつだ。

「へう！？」

突然の痛みに変な声が出てしまい、額を抑え涙目で男を見る。

身長はユニスと対して変わらなく、見た感じ女性と間違えてもおかしくない。

しかし、彼の履くズボンが男性である事を証明している。

そもそもユニスはこの男性を知っている。

この人の為に入隊した翌日にも全隊員が集まったのだから。

「気をつけるよ。ユニスさんはあんまり筋力もありそうな感じじゃないし、こういうのは男に持ってもらった方がいい」

そう言いながら彼女の荷物を全て持ち始めた。

「わ、悪いです……私が……」

おどおどしながらも自分がやると主張するが、男は聞く耳を持たずに「ユニスさんこれってどこまで運ぶの?」なんて聞いてくる。

「あ、ありがとうございます……えっと、会議室とデバイスルームまで……で?」

仕方がないのでお礼を言い、行き先を伝えるがふと疑問が浮かぶ。

「(私、自己紹介したっけ?)」

いや、した覚えがない。

何度も言うのが内気な性格の彼女はデスクも一番端っこの方を使って目立たないようにしている。

なのにどうしてこの人は私の名前をしってるの?

「ん?」

ジーツと見るユニスに不思議そうに首を傾げる男。

その仕種はさながら小動物のものと同じで愛らしく、

「(か……可愛い……)」

ユニスをとろけさせるには十分だった。

「ユニスさん?どうしたの?」

「ふえ……？はわわ、すすす、すみません！」

呆けた顔のまま返事をするが、相手が年上で上司だという事を思  
いだし謝罪を述べる。

「いや、別にいいけど、俺何かした？」

身に覚えがないという顔で聞く男に詰まりながらも言葉を返して  
いく。

「あ、あの……私の名前……」

「名前？あ、ユニス・クローバーさんじゃなかったっけ！？間違え  
てたのか、ゴメン！」

「あ、ち、違います。あってます。ユ、ユニス・クローバーです、  
じいじいめんなさい」

間違っていないのに勢いよく謝られてしまい、逆に謝り返してし  
まう。

「いや、こちらこそごめんなさい……て、名前がどうかした？」

「ど、どうして知ってるのかなって……？」

漸く聞けた質問に男はポカンとしていたがすぐに笑顔に変わり返  
答した。

「そりゃあ同じ部隊の人だし……てまだ全員知ってるわけじゃない  
んだけど、グリフィスが言ってたんだよ。ユニスさんが事務を頑張

ってくれてるから随分楽が出来るって。それで誰なのかな？って

「屈託のない笑みを浮かべながら頭を撫でる。

「はあう！」

「え？あ、ゴメン。可愛らしかったからつい」

「あうあう……」

突然撫でられ驚きながらも男の発言により、もはや瞬間湯沸かし機のように顔を染め上げる。

その後も荷物を運ぶ間、たわいもない会話にさえ四苦八苦しながらもユニスは心地好い気持ちで過ごした。

「（この人……話しやすいな……）」

どうしてだろう？

不確かな事だが、男の事を考えると胸がアツくなる自分がいる。

「（……まさか今日お話しただけでなんて……ないよね？）」

しかし、大事な事だから更に重ねていうがユニスは内気だ。

そんな彼女がこの気持ちを確認める術を持ち合わしているはずもなく、こんなに近づく機会ももうないだろう、と忘れる事に決めた。

……はずだったのだが、

「（ふええええ！？どどどど、どうしてこんなことにもいいいい！！？）

狭い暗がりの密室に密着するユニスと男。

鼻と鼻がくっつきそうで制服のスカートも少しではあるがめくれ上がっている。

元を正せば自分の所為なのだが、非常にマズイ状態だ。

これを説明するにも少し時間を遡らなければならない。

今日もユニスはいつも通り仕事をこなしていたのだが、周りの女性局員達の間では謎の円卓会議が執り行われている。

「隊長、他の隊との連絡については!？」

「問題ないわ。私達は指定されたポイントに向かうだけよ」

「個人用のカメラの持参は!?!？」

「それは私からはなんとも言えないわ……司令にお聞きしないと……」

「お触りはアリなんですか!？」

「貴女は死にたいの!?!?あの方がそれを赦す訳ないでしょう!?!?!」

……六課の人選にかなり不安が出るような会議が行われているが、いつもこんなわけではないので、そこを勘違いしないでいただきたい。

今日はただちょっと……少し……いやかなりテンションが高  
いだけなのだ。

こうなっている理由をユニスは勿論知っている。

ユニスにも司令直々にお誘いされたのだから。

内容は浅儀勅三等空尉の捕縛及び、捕縛後のファッションショー。

どつという経緯でこんな大規模になったのかユニスは知るよしもないが、八神司令（今は部隊長ではない）を筆頭に各部署、各隊に分かれ壮大なねずみ捕りが行われている。

今も盛大に盛り上がりを見せる狩猟部隊をよそにユニスはその場を後にした。

「ハア……皆凄く楽しそうだなあ……」

溜め息をつきながら廊下を歩くユニス。

「私も参加した方がよかったのかな？……でも浅儀三尉は嫌がってるらしいし……」



そう、ユニスは狩猟部隊に参加しなかった。普段は人の誘いを断れるような事は稀なのだが今日のユニスははっきりと自分の意思を伝えられたのだ。

優しく周りへの気遣いを忘れない彼女は人の嫌がる事をしないと決めている。

「（自分がやられて嫌な事を人にしちゃいけません）」

もしユニス自身がステージでファッションショーをするとすると、

「（は……恥ずかしくてそんなの出来ないよぉ……）」

赤く染めた頬を両手で覆いながら、顔をふる。

ユニスはいいい子なのだ。

「……でもちよつと見たかったなあ」

……誘惑にも負けない………たぶん。

そんな事を考えていたからだろう、ユニスは前方を見ていなかった。

「「きゃ（わぁっ）！！？」」

曲がり角から勢いよく出てきたナニカにぶつかってしまい尻餅を

ついてしまっ。

「ふう……ご、ごめんなさい……」

「ふう、こっちこそごめん、俺も前を見てなかったから……」

互いに自分の非を認め、相手の顔を確認する。

「あ……浅儀三尉!？」

「ユニスさん?」

ぶつかった相手が今考えていた人物だった事に驚きを隠せない。

「あ、浅儀三尉……今」

「「「待つてええ!」「」」

大丈夫なんですか？

と聞こうとしたのだが、曲がり角から聞こえた幾人もの声により遮られる。

「チッ、しつこい!」

聞こえる声に舌打ちし立ち上がる。

「ごめんユニスさん、俺急いでるから」

「あ、あの、こっちです!？」

倒れたユニスの手を取り立ち上がらせ、朧は逃げよつとするが意を決したユニスが朧の手を引き誘導する。

「え、ちよつ、ユニスさん!？」

「こ、この中なら大丈夫です!」

勢いよくトビラを開けて朧を押し込み自分も入る。

「ユユユニスさん!?!?これはちよつとマズ」

「静かにしてください!」

慌てる朧を黙らせてトビラに聞き耳を立てる。

「どこに逃げたの!？」

「司令からの指示は!？」

「辺りにいるはずだから捜せと!」

「なら散って捜しましょう!見付けたら司令に報告!」

『はい。』

廊下からドタバタと音がし、やがてしんと静まる。

「あ、あの、ユ、ユニスさん?」

「……どうやら行ったみたいで……す？」

追っ手の気配が消えて、朧の方へと振り返ったユニスは一瞬思考が停止してしまう。

なんでこんなに近いの？と、

二人の距離は目と鼻の先、というより鼻がくっついてしまう距離なのだから。

「キャ、キャアア」

「ちよっ!?!」

「ンー!?ンンー!?!」

一瞬でリンゴ飴のように赤くなったユニスが悲鳴を上げるがその口を急いで塞ぐ朧。

「ちよっと待って!困る!今見つかったらシャレになんないから!」

朧からしてみれば逃げ切る為とは言え、いきなり押し込まれこの状況になったというのに、それで叫ばれてはどうしようもない。

手で口を抑えながら朧はユニスを落ち着かせる。

「いい?落ち着いた?大丈夫?」

「んん、んん!」

ブンブンと音が聞こえそうなほど顔を縦に振るユニスにゆっくりと手を離そうとする。

「キヤアア、ンー、ンン！！？」

「だから叫ぶなって！？」

そんなやり取りが数回行われ、漸く現在に戻る。

「（ふええええ！？どどど、どつしてこんなこといいいい！！？）」

ユニスの案内した場所は清掃用具を収納していた部屋……もとい物置。

ここなら見つからないと思いき親切心で案内したのだがどうしてか自分まで入ってしまったのだ。

正直かなり狭い。

一畳程の部屋にはモップやらなんやらが敷き詰められ、それが更に圧迫している。

本来この場所は清掃道具を入れる為だけの場所であり、人が二人も入る場所ではないのだから当然といえば当然だ。

ともあれ、さっきのドタバタで朧とユニスはかなり危ない状態となっている。

服の上からと言ってもユニスがトビラと朧に状態で体が密着しており、服がめくり上がり下着がチラチラと見え隠れしている。

朧としてもかなりアタフタしながら目のやり場に困っている。

二人に共通して言える事は顔がヤバイくらい赤い、ということだ。

内気で人見知りなユニスは当然として、周りが美人揃いの癖にいつまで経っても初心な心を持つ朧にもこの状況は厳し過ぎる。

貧乳をステータスとして持つユニスなのだが密着しているとやはり女の子、それなりにはあるわけで……

「(や……柔らかい……)」

しかもユニスが体勢をどうにかしようとモゾモゾと動くたびに感触も変化があり……

「(ムムムリー!?!?これはいろんな意味でヤバすぎる!?!?)」

最善の手はここから脱出する事だと位置付け、ユニスに提案する。

「とど、とりあえず出よう……」

「はい……」

そう言ってユニスがトビラに手を伸ばすが、

「朧、どこに行つたんだろ？」

「「ッ！！！？」」

突然トビラの向こうから聞こえてきた声に体をビクつかせる。

「「ッ、この声って……」」

「ああ、フェイトだ……」

先程まで真っ赤にしていたとは思えない程朧の顔は真っ青になっている。

今ここでフェイトが見つかるのは非常にマズイ。ここ最近の出来事の中で一番マズイかもしれない。

ここまで来たら朧にとって着せ替え人形にさせられる事など、もはやどうでもいい。

問題なのはこの現状をフェイトに見られる事に順位が入れ替わったのだから。

「ユニスさん、ごめんもう少しこのままでもいいから」

ゴソツと動いた朧にユニスも体が動く。

「「え？」」

最悪な事は最悪のタイミングで引き起こる。

そんな事を昔誰かが言っていた気がした。

ふとそんな事を思い出したのは何故か？

最悪のタイミングで最悪な事が引き起きたからだ。

少し動いた反動で開閉ボタンに触れてしまいトビラが開いたのだ。

「わぁっ（キヤッ）！！？」

トビラという支えがなくなった事で体が重量に引かれ倒れていく。

前のめりに倒れた体を起こしながら、目を開く。

「つて〜、ユニスさんだいじょ……っ……っ……」

目の前の光景に昗は言葉を失う。

「っ……っ……ん……」

昗の下にはユニスが仰向けで倒れており、端から見れば昗が押し倒したように見える。

そしてそれを端から見る一人の女の子が……



「……朧？」

「ッ！？」

声を掛けられ、体をビクつかせながらも、ゆっくりと顔を上げる。

「なにしてるのかな？」

綺麗な笑顔を向けるフェイトだが、その笑顔がひたすら怖い。

あれ？いつの間にB」を？いつの間にバルディッシュを？

「別にいいんだよ？うん、私は別に朧が誰と何をしてようと」

ならどうして貴女はそんなに怖いのですか？

「私には関係ないもんね。朧が決める事だもんね」

「いや、まで、これはごか」

「誤解？ふくん、押し倒しておいてそんな事言うんだ？」

「ちち、違ってます！これは私が！！」

「別に朧を庇わなくていいんだよ。私怒ってないから」

いや、貴女は怒ってらっしゃいます。

「だから話を聞けって！？とりあえず気を静めて！ね？」

「気を静める？アハハ、何を言ってるの、朧？だから私は怒ってないんだよ？」

埒が明かないこのやり取りを解決させるべく、バルディッシュが仲介に入ろうとする。

止めるべき所はしっかり止める、優秀なデバイスだ。

『マスター、ここは一度話を詳しく聞いてみて』

「バルディッシュは黙っててね」

『イエス！！』

心地が好い返事だが、とりあえず先程の優秀という言葉は返してもらう事にしよう。

「さっきも言ったけど私は怒ってないから、ただね……」

コツコツと近づくフェイトがギュッとバルディッシュを握る。

「ちょっと反省してもらいたいの」

「ごめんユニスさん、アート、セットアップ！！」

疾

次の瞬間にはユニスを残して朧は消えていた。

「バルディッシュ？」

『……ソニックムーブ』

疾

そしてそれを追うようにフェイトも疾走する。

その場にポツンと一人残されるユニス。

「……………」と、とにかく誤解を解かなくっちゃ」

頭を整理するのにはしばらく掛かったが、ユニスはフェイトに事情を話して怒りを静めてもらおう事を優先事項におく。

別にユニスに怒りが向いているわけではないので、ここで止めても彼女自体には特に支障はない。

ただ一人の男の命が散るだけなのだからだ。

だが彼女は動く、朧の為に。

「私の所為なんだし、私が言わないと……………」

この気持ちは彼女の責任感から来るものなのかそれとも…………

その答えをユニスが知るのはまたまた先の話となる。

とりあえず今は、

「……………」どうやって追いかければいいんだろ？」

次元の違う速さを駆ける一人に追いつく事から考えなくてはなら  
なかつた。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

翔「何!?(中)って何よ!?!?」

レ「中編が入ったのは今までで初めてだよ」

翔「別に中編がダメってことじゃないんだよ！」

レ「じゃあ何がダメなの？」

翔「どうしてこんなくだらない話で中編なんてなるんだよ!!?」

レ「作者も不思議で仕方ないみたい」

翔「しかもフェイトにいらぬ誤解を……」

レ「また翔ちゃんが私の知らない所でフラグなんて立てるからだよ？」

翔「またって何!?俺は乱立させた覚えはないんだけどね!?むしろ立てた事なんてある!!!?」

レ「……それがわからないから鈍感スキル持ちって言われるんだよ」

翔「俺は普通に接してるだけで……」

レ「今回の話だってユニちゃんに随分紳士的な話し方だったよね?ユニさんなんて呼んじゃって」

翔「ユニちゃん?ああ、ユニスだから、ユニね。そんなの知り合つて間もない男にユニスなんて呼び捨てで呼ばれるのあの子だって嫌だろう。女性相手には丁寧接しろって、昔サキが言ってたし」

レ「……薄々気付いてたけど、翔ちゃんの対女性スキルはサキが原因  
って事だったんだね」

翔「はい？俺は言われたように接してるだけなんだけど」

レ「はいはい、翔ちゃんは悪くないよ〜」

翔「……なんだか凄く納得いかない」

レ「そこ、むくれない。今回は今話にも出ていた新キャラクター『  
ユニス・クローバー』」

翔「詳しい紹介は次回の話の後になるけど、可愛い子だよな」

レ「うん、18歳だから翔ちゃんとは1つ違いなだけだね」

翔「見えないよな」

レ「見えないね」

翔「次回もまた出るんだよな？」

レ「そうみたいだね、ユニちゃんがどう動くのか楽しみだよ」

翔「それでは、」

レ「次話にて、」

レ・翔『お待ちしております……!』

第三十五話 翔くんと鬼じっこ(中) (後書き)

どうでしたか？

今回初めは本当に一話で終わらせるつもりだったんですが、もの凄  
い事に(笑)

ユニちゃんだってチヨロツとだけ出るモブキャラだったのに肉付け  
していったらこんなに長く……何故!？

まあ、モブキャラな事には変わりありませんが(笑)

次回はいよいよ完結編です!!……………たぶん。

感想、質問、誤字脱字、提案等などお待ちしております!!

では、次話にてお待ちしております!!

第三十六話 翔くんの鬼じっこ(後) (前書き)

どうも、夕です!!

昨日の内に投稿すると言っておきながら遅くなってしまいました、すみませんでした!!

本編が完成したのが深夜4時、そこから寝てしまった。た今学校へ向かいながらいんぽすとを仕上げました。

途中から燃え尽きた感があるようなないような……

しかも過去最長の長さ(笑)

ではとりあえず、完結編をどうぞ!!!



第三十六話 翔くんと鬼じっし(後)

疾

「チツ」

距離が開かない事に焦りを覚える。

しかし相手は管理局随一の速さを持つと言われるフェイトならそれも仕方ない。

差が開かない代わりに縮まらない。

それだけの速さを翔自身も出しているのだ。

そしてこの距離感に苛立ちを覚える者がもう一人。

「……」

フェイトだ。

今の彼女の瞳にはハイライトがなく、ひたすらに無表情。バルデイッシュと言う名の鎌を引っ提げた金色の死神。

凄く怖い。

次元を越えたこの鬼ごっこに周りのハンター(一般局員)はただ見ている事しかできず、たまに前方へと立ち塞がるうとする無謀者には、男なら鉄拳制裁、女ならそのまま威圧のみのスルー、と些か

鼻肩があるが朧に理由もなく女性を殴り飛ばすなんて出来ず、気絶させるにもフェイトと言う死神に追われている以上そんな時間、微塵もありはしないので致し方ない。

「バルディツシュ」

『……フォトンランサー』

現

「ちょ、おい！おまつ！？」

低く言い放った声にバルディツシュが反応し、出現する四つの魔力弾。

「ファイア！」

弾・弾・弾・弾

叫びを遮るように槍の形をしたソレが容赦なく朧へと直進する。

「ソードスフィア展開！ショット！！」

弾・弾・弾・弾

爆

朧も同数のスフィアで相殺するが、なにせ建物の中なので互いに威力を抑えていると言っても被害は当然出る訳で、

「嘘!?!」

「うおっ!?!」

「キヤアア!?!」

……主に仲間に被害が出ているわけだが。

「危ないだろ!?!」

「……… 朧が逃げるからだよ?」

「ならばバルディッシュを仕舞ってくださいませんか!?! 話し合おう!」

逃げながらも訴え続ける朧。逃げているだけでは根本的な解決が望めない事を理解しているのだ。

話せばわかりあえる。

朧はそう信じてる。

「反省した後に話し合おうね」

「わかりあえねえ!?!?」

信じたものは儚く散りさった。

そして二人の鬼ごっこが始まって五分程が経過した頃、痺れを切らしたフェイトがおもむろにはやてへと通信を繋いだ。

「はやて……」

『お、フェイトちゃん、見付け……た？』

通信の向こう側で楽しそうだったはやての顔が一瞬で青ざめた。

「ごめんね、翔はすぐに捕まえるから」

フェイトの顔に浮かぶのは満面の笑みのはずなのに怖さが滲み出ている。

『いや、ムリせんでええんよ？フェイトちゃんのペースで……』

「すぐに捕まえるから」

『りよ、了解や……』

有無を言わせない佇まいに冷汗を流しながら了承する

「それでね、ひとつはやてにお願いがあるんだ」

『お、お願いか？』

台風は過ぎ去るのを待つに限るとフェイトのお願いを聞く。

「リミッターを解除して欲しいんだ」

『リミッターか！それやったら任せ……て………ムリに決まってるやろおおおお！！？』

予想を遥かにぶつ飛んだ発言に恐怖を押さえ込んでのノリツッコミさすがははやて。

『どうしたんやフェイトちゃん！？フェイトちゃんに何が起こったんや！！？』

「別に、いつも通りの私だよ？……だから早くリミッター外して、ね？」

昴を追いながらもひたすら催促し続けるフェイトの声は至って冷静。

昴を捕まえる事にも賛成だ。元より言い出しっぺの一人でもある。

しかし冷静なのは声オンリー。いくらなんでもこんなレクリエーションみたいな事の為に残り一回しか使えない切り札を切るなんて出来るわけがない。

もし切ったとしたらそれはただの阿呆だ。

とりあえず、リミッターとは別案をフェイトに提案してみる。

『フェ、フェイトちゃん。その願いは常識で考えてムリやる？代わりに昴くん捕縛の指揮権を渡すからそれじゃあアカンか？私も全力でお手伝いさせてもらおうよ？』

「……わかった。それでいいよ」

コクリと頷くフェイトにひとまず安心するはやて。

「こういう時のフェイトを刺激するのは得策ではない。過去に二回程発生した経験談からだ。」

『そつえばあの時も朧くんが発端やったような……ハア……今度は何をしてくれたんや……』

「こういう時は大抵朧が何かやらかした時だと、これもはやての経験が語っている。」

「たまにこうやって周りを巻き込む大騒動にまで発展するのだから、巻き込まれた方は堪ったもんじゃない。」

「ここは素直にフェイトに従っているのが吉だ。」

「そつ思い、はやては指示を待つ事にする。」

「ならまず全員にこう伝えて」

「ハア……ハア……まい……たか……？」

膝に手を置き、肩で息をする朔。

後ろからフェイトが消えた事で漸く一休み出来たのだ。

「ふう……くそ、どうすりゃいいんだよ」

息を整え、次にとるべき行動について考え始める。

当初の条件はシグナムとヴィータの帰宅までだったが、事情が変わってしまった。

「優先順位の一つは早急にフェイトの誤解を解く事だ。けど……」

先程までのフェイトを見ているとわかるように、真正面から話し合いに行こうとしても待っているのは激しい痛みの末の死、だけだ。

「一番有効なのは……イヤ、ダメだ。彼女には荷が重い」

頭でユニスに説明してもらおうという案が浮かんだが首を振りすぐに考えを頭の外へと出す。

「……仕方ない、ここはレインかはやてに手伝ってもらおうしかないか」

見返りに何を要求されるか堪ったもんじゃないが背に腹は変えられず、翔は恐らく今回の発端であるだろうはやてに通信を繋ぐ。

「はやて、翔だ」

『

』  
「はやて、おい！」

『

』  
声が返ってくる気配がなく、モニターも繋がらない。

通信を切り、レインの方にも繋ぐがこちらも同様に出る気配がない。

「どつという事なんだ？」

場所を特定されない為に翔から回線を遮断する事はあるとしても向こう側から遮断する事にメリットなどない。

考えられる事はただ一つ。

『ムダだよ、翔』

『フェイト……』

開かれたモニターからフェイトが現れる。



『皆、私に協力してくれてるの』

「やっぱり……」

今や八神司令はハラオウン司令へと変更されたのだ。

『大人しく捕まってくれないかな？今なら死ぬ一歩手前で止めてあげるよ』

「それで大人しくすると思ってるのが怖いよ！」

『なら……覚悟してね』

そうニコリと狂気が隠れた笑みを向けて通信が切られた。

「じ、怖い……」

これで昗は捕まれば死ぬ事が約束されてしまった。

やったね、たえちゃん！

「まで、それはナニカ違うだろ！？てか、誰よ、たえちゃん！！？」

いよいよ壊れてきたのか電波が聞こえ、頭を抑えブンブンと振り回す。

混乱しているとドタバタと足跡が聞こえてくる。

「ハア、いつまで続くんだろ……」



生憎やってくる方向は一方だけなのでそれとは逆方向に

「待ってましたああああ！」

「さあこいやああああああああ！！！」

「絶対捕まえるわよおおおお！！！」

「こつちも！！！？」

振り向けば人がいた。

こつちも二十以上はいる。

「いい加減諦めなさああああい！」

二方向から迫るゴミ（局員達）から逃げる為残った道へと急いで  
駆ける。

そこで一つ物が気付いた。

「なんだかさつきから皆さんのやる気高すぎないですかね！！！？」

始めの方もそれなりのテンションを持っていたが人が増えた頃から  
テンションが異常過ぎる。

「何があんた達をそこまでさせるんだ！！！？」

先程まで敢えてスルーしていたがへんな雄叫びをあげている輩もいるのはおかしすぎる。

その理由もテンションの高い彼らは簡単に教えてくれた。

「三尉を捕まえた人は『朧くん一日お持ち帰り権』が貰えるのよ！」

「朧くんお持ち帰りiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

「フッフ、その一日があれば……」

「朧くんを私好みに染めてアゲル……エへへへ」

「また俺ですか!？俺が賞品なんですか!?!？それと貴女達凄いいい!!」

女性の怖さには種類があると逃げながら理解した朧だが、今の言葉から察すると何故男どもが張り切っているのかわからない。

しかし、朧は頭の回転が早い……たまに。

ハッ、と男性達の考えを理解した。

「お前達がソツチ系の趣味だったとはな!」

「違うわマヌケエエエエエエ!?!?」

今回は回転が早い、というより阿呆なだけだった。



この瞬間、回りの温度が下がった。

男達は皆下を向き、フフ、フフフ、と不気味に笑っている。

そして全員が同じタイミングでサムズアップ！

『リア充は死ねええええええええ！！』

下がっていた温度が一気に高まったように感じた。

「リア充！？なんで！！？」

「リア充は皆そういうんだ！」

「くだらない？くだらないだつて！！？」

「お前にモテない男の気持ちがあつてたまるかああああああああああああ！！！」

「俺がモテるわけないだろ！？」

「貴様嫌みかああああああああああ！！！！？」

そう、モテる奴にはモテない奴の気持ちはわからないのだ。

男達からすればフェイトの紹介はまさに天からの思し召し。

それを一言、「くだらない」と一蹴されたのだ。

これを怒らずして何を怒る。

……こうやって人は敵をつくっていくのだ。

ちなみにわかっていると思うが、これら全てはフェイトが出した賞品。皆が知る純粹で優しいフェイトさんは今はいないのだ。

再び逃走を始めて十数分、今や一人一人が一騎当千の魔導師のよ  
うな気合いを放つハンターに焦っていたのか昶はある事に今更なが  
ら気が付いた。

「（これって誘導されてる？）」

昶が逃げようとするところになるとこから新たにやって来る追っ手が  
ら逃げていたのだが、道順に作為的なものを感じる。

そしてその考えは見事的中していた。

「すみません、昶さん」

「いじめんね、昶くん」

前方に佇むエリオとなのはが冷汗をかきながら謝罪する。

恐らくは彼女を止められなかった事だろうと昗は推測した。

「もう逃がさないよ」

もう一人いた金色の死神の事だろうと。

「これなんてムリゲー!?!」

膨!

脱!

蒼い魔力を放出させ、速度を上げていく。

『ソニッククムーン』

瞬・瞬

しかし、追っ手の内二人は昗と同様、高速戦闘を得意とするエリオとフェイト。

すでに一般局員達の姿は見えないが、悠々と昗のスピードについてくる。

「いくよレイジングハート」

『アクセルシューター』

弾・弾・弾・弾・弾



スピードではフェイト達より劣るのだがついていけない事はなく、幾つもの魔力弾を朧へ狙って放つ。

「お前、ら！マジ、で、殺す気、か！」

アートの5のナンバーを持つナイフを展開させ、迫りくる魔力弾を片っ端から切り伏せていく。

「朧さん、もうこれ異常逃げてもムダです！」

「エリオ！お前もか！」

朧と平行に走るエリオがストラダーを握り訴えかける。

「一体何をやっただんですか！？」

薙

「あれはフェイトの誤解なんだよ！」

横薙されたストラダーをナイフで弾く。

「なら早く話し合って！」

「それが出来れば苦労しない！それよりエリオがここにいると言っことキャラも参加してるのか！？」

サポート技に秀でたキャラがいるとしたら朧もかなり苦しい事になる。

「キャラはさつき他の隊員の方に呼ばれていませんよ!」

閃

「そう、かよ!」

エリオの返答に安堵しながら一閃を跳んで避ける。

「バルディツシュ!」

『アークセイバー』

斬

「ッ!? No.6 open!」

爆

迫る魔力刃に咄嗟に反応して自分との間に大剣を出現させるが爆発に巻き込まれ吹き飛ばされる。

「チッ!」

飛ばされながらも空中で体勢を立て直し逃げようとするが、

「い、行き止まり……」

目の前には壁が広がるのみ。

フェイト達と出会うまでが誘導ではなく、ここに誘い込むまでが誘導だったのだ。

「これで鬼ごっこはおしまいだね」

一歩、また一歩とにじり寄る死神。

誘導された事に気づけなかった朧の負けだ。

仮に攻めにいってもフェイトだけならともかくなのはもエリオもいるので、確実に返り討ちにあってしまう。

万事休す。

「……フェイト」

諦めたのか俯いてしまう朧。

「大人しくしてね」

コツコツと歩く音だけが辺りに響く。

「こんな言葉を知ってるか？」

「え？」

不意に口を開いた朧。

「パンがなければお菓子を食えばいいじゃない」

「なんですかそれ？」

いきなりおかしい事を言い出した昶を不思議そうにして聞くエリオ。

その答えは隣にいたなのはから聞こえてきた。

「たしか、マリー・アントワネットの言葉だったよね」

マリー・アントワネット

16世紀フランス国王ルイ16世の妃。

彼女は生前、国が貧困で食料がなく、パンがなかった時期に『パンがなければお菓子を食べればいいじゃない』と言う発言を残している。

この『お菓子』というのも『ブリオッシュ』というパンの事なのだが、それは『王の菓子』と呼ばれており、通常のパンよりバターと卵を多く使用している物なので当然食べられる訳がない。

一説にはパンに使う小麦は高級品なので粗悪品の小麦をバターや砂糖でコーティングしていた為尤もな発言だと言われる事もあるのだが、何も知らない人が聞けば憤慨する内容である。

水がなければワインを飲めばいいじゃない、と同じレベルである。

地球の話なのでエリオが知らなくとも無理はない。

「その言葉がどうかしたの」

冷やかに言い放つフェイト。

彼女達は知らないのだ、今日の昗が阿呆だと言っことを。

「道がなければ作ればいいじゃない」

「は？」

「ッ！？しまっ！！？」

エリオが素つ頓狂な声を上げる隣でフェイトが何かに気付き急いで接近を試みる。

「遅い！」

撃

昗は手に持つ大剣で壁をぶち破ったのだ。

それはもう『まずはこの壁をぶち壊す！』みたいな感じで。

「ご丁寧にフェイト達との間の天井を崩し、瓦礫で足止めをしながら」

「くっ！」

砂煙が晴れた後にはもはや昗の姿はない。

瞬

フェイトすぐに壊された壁の向こうを駆け抜ける。

そんな中ただ呆然としているエリオとなのは。

「……翔さんこんな事までやってしまつて後の事考えてるんでしょか？」

「……多分考えてなかつただらうね。翔くんって抜けてるところがあるから」

「……修理費どのくらいかかるんでしょう？」

「……さあ？」

なんだか二人とも物凄くバカバカしくなってきた。しまった。

『追わないのですか？』

ぼうつと突っ立っている二人だったがレイジングハートに声を掛けられ現実に戻ってくる。

「……とりあえず僕は八神部隊長に連絡します」

「お願い、それじゃあ私は二人を追うね」

そうしてなのははエリオと別れて二人を追っていく。

その足どりはどうも重たい気がしていた。

一方、壁をぶち壊した本人はと言つと。

「危なかった……」

移動しながらほっとしている。

この男はやっぱり自分のやった事に全く持って気が付いていない。

「このままじゃ体が持たないよな……」

正直さっきのような状況にもう一度陥ってしまったら逃げ出せる自信がないのだ。

二度同じ方法が通じる相手ではない。

そうなると当然、必要となってくるものは限られてくる。

「やっぱりどこか隠れられるところがないかな」

自室は当たり前前に却下。食堂やトイレなどもベター過ぎる。

「デバイスルームは……ダメだ、シャーリーが来る」

なかなか良案が浮かばないので手を組みながら唸っている。

「あ、しょーおにーちゃん」

「ん？」

子供らしい高い声が聞こえ、顔を上げると案の定、ヴィヴィオがこちらに

向かって走ってきていた。

少し後ろには寮母であるアイナの姿もあり、互いに会釈する。

「おにーちゃん！」

「同じ手は食わん！」

まるで弾道ミサイルよろしくに突っ込んでくるヴィヴィオをがっしりと掴み、体当たりを防ぐ。

前に当然後ろから声を掛けられ振り向いたら、頭が鳩尾をモロにぶつけて死にそうになった事が記憶に新しいのだ。

まあ、ミサイル本人に悪気は全くなく、今も「えへへ」と屈託のない笑みを浮かべているのだが。



そんなヴィヴィオを肩車しながらアイナの方へと歩いていく。

「こんな所でどうしたんですか？」

「ごめんなさいね、ヴィヴィオがどうしても翔くんに会いたいわって」

少し困ったように答えるアイナ。

「おにーちゃんあそぼー！」

「テテッ、髪を引っ張るな。今からか？今おにーちゃんちょっと忙しくて」

そこまで言っ言葉を止めた。

閃いたのだ。

ヴィヴィオと遊ぶという名目でどこかの部屋を借りればいいと。

「（来た！俺にもツキが回ってきた！）」

これでヴィータやシグナム達が帰ってくるまで時間を稼げばいいのだ。

後は……まあなんとかなるだろうと。

「ええ〜、あそぼ、あそぼ、あそぼ〜！」

首に付けたチョーカーを引っ張りながら手をブンブンと振り回すもんだから。

「ちょ、ヴィヴィ、くるし……」

「翔くん？ツ！？ヴィヴィオ放しなさい！？翔くんの首が絞まっているわ！？」

次第に青くなっていく顔に気付いたアイナが急ぎ放すように言ったおかげで翔は三途の川を見ないですんだ。

「ハア……ハア……ハア……フェイトに殺される前に死ぬかと思っ  
た」

「大丈夫、翔くん？ほら、ヴィヴィオもごめんなさいって」

「……ごめんなさい」

若干涙目になりながら謝るヴィヴィオに笑いかけながら翔は頭に手を置く。

「大丈夫だよ。ヴィヴィオは本当に悪いと思ったから“ごめんなさい”って言ったんだろ？」

コクリ、と頷くのを見て話を続ける。

「そうやって素直に“ごめんなさい”が言えるならヴィヴィオは良い子だよ」

そう言って頭を撫でる。

「だから良い子のヴィヴィオと一緒に遊ぶ事にするよ」

「……いいの？」

「うん」

「やったあー！」

余程嬉しかったのか朧に飛び付くヴィヴィオ。

「朧くんよかったの？」

朧達のやり取りを見ていたアイナは優しそうな表情をしながら聞く。

「はい、俺もその方が助かりますし」

「助かる？」

「ええ、実は」

「そうだったの……なら私の部屋を使って」

「いいんですか？」

「ええ、ヴィヴィオの相手をしてもらうんだし」

昶は今の自分の状況をアイナに話した。

ちなみにヴィヴィオは昶と手を繋ぎながら嬉しそうに歩いている。

「それにしても昶くんは良いお父さんになれるわね」

「お父さん……ですか？」

突然の話題に不思議そうな顔をする昶。

「さっきヴィヴィオに言っていた言葉、凄よかったと思うもの」

「さっき？……ああ、あれは受け売りです。昔に俺も言われた事があって」

「そうなの？」

少し照れているのか、頬赤らめ、頭をかきながら答えていく。

「俺の親代わり……まあ姉みたいな感じでしたけど、その人に言われたんです。『自分で素直に謝れるならアンタは良い大人になれるわよ』って」

「……その人の事、翔くんは大好きなのね」

アイナの言葉にまた一段階顔を赤くするが、素直に言葉が続けていく。

「……そうですね。俺が一番尊敬する人ですから」

内緒にしてくださいね、と恥ずかしそうに言う翔にアイナは、

「ああ、もう翔くんすっごい良い子ね。私の子供にならないかしら？」

翔を抱きしめながら言った。

「ア、アアア、アイナさん！？何を言ってるんですか！？離れてくださいよ！！？」

既に翔の顔はトランザム状態にまで上がっている。

隣で見ているヴィヴィオは羨ましいのか頬を膨らませてうーうー唸っている。

「あら残念」

すぐに翔から離れるアイナだが未だ翔は顔が赤いまま。

「さあ、着いたわ」

タイミングが何か作威的な物を感じるが翔は早く入ってしまった

かったので気にしなかった。

「……素直になれるようにね」

「え？」

何かアイナが言った気がしたが声が小さすぎて昶には聞こえなかった。

「それじゃあ、よろしくね」

「あ、はい」

アイナは用があるらしく部屋には入らずに行ってしまう。

そして昶はヴィヴィオに話し掛けながらトビラを開ける。

「それじゃあヴィヴィオ何して遊ぼ」

縛

「ふえ？」

突如、四肢に鎖が巻き付き拘束され部屋へと引っ張り込まれる。

六課でこんな芸当を出来るのは一人しかいない。

「キャ、キャロ？」

「はい、あまり動かないくださいね」

昴はキャロの召喚と無機物操作を組み合わせた魔法、アルケミックチェーンによって拘束されたのだ。

何故キャロがこんな所に？

それに捕まえてきたと言うことは答えは一つ。

「アイナさんに騙されたのか!？」

ヴィヴィオを使ったまさかの伏兵に愕然とする昴。

「ち、違います！私が皆さんに手伝ってもらったんです！」

「え？」

そこにいたのは予想外の人物だった。

フェイトは急いでいた。

「まさかキャラロが捕まえるなんて」

先程キャラロから通信が入ったのだ。

朧さんを捕まえました、と

そしてフェイトはキャラロが指定した部屋の前までやってきた。

「キャラロ、私。入るよ」

トビラが開き最初に目に入ったのは、

「フェイトママ〜!」

「ヴィ、ヴィヴィオ!?!」

飛び付くようにやってきた予想外の人物に驚きを隠せない。

「あ、フェイトさん」

部屋の中を見るとキャラロと鎖でグルグル巻きにされている朧、そしてもう一人……

「あ、あの!さっきのは私の所為なんです!ただ、だから浅儀三尉は悪くないんです!」

ユニス・クローバーの姿があった。



「……それならそうと言ってくれればよかったのに」

「……話全然聞こうとしなかった人のセリフか？」

昶の冷やかな視線から目を逸らしアハハハ……と笑ってごまかすフェイト。

普段とは立場が逆転しているので少々レアだ。

「でもなんで俺は鎖で繋がれる事になったんだ？」

「というよりユニス……だったよね、ユニスはキャロやヴィヴィオと知り合いだったの？」

昶の質問を軽く流しフェイトが質問する。

確かに、事務員のユニス、FW部隊のキャロ、最近六課で預かり始めたヴィヴィオと言う幼女トリオ　ユニスは18だが雰囲気がいまんま幼女なので　が知り合いというのもなんだかかなり不思議だ。

三人でアイドルデビューしたらさぞかしおっきいお兄ちゃんが沢  
山集まる事だろう。

「ユニスさんは初めフリードと一緒にだったんです」

「フリードと？」

「フ、フリードが可愛くって……エ、エサをあげてたんです……」

二人の話では、一匹で飛んでいたフリードを見かける度にユニスがエサをあげたり、抱いていたりしていたらしく、それを知ったキヤロが話しかけ友人になっただけらしい。

ヴィヴィオに関しては、よくアイナの手伝いをしており、その時に紹介されたとの事。

「と言うことはこれってユニスさんとキヤロとアイナさんが考えたって事？」

「いいえ、全部ユニスさんが考えたんですよ」

「ホントに？」

「ホントです」

「あう……すみません……」

事実を知り驚く昶とフェイトだが、当の本人は恥ずかしいのか、赤くなりながら何故か謝っている。

「どんなふうに考えたんだ？」

「え、ええと……まずは私じゃ、お二人に追い付く事が出来ないの  
で、キャロちゃんに浅儀三尉を捕まえるのを手伝ってもらおうかな  
って……」

左右の指をつんつんと合わせながら説明していくユニス。

「捕まえるのは朧だけでよかったの？」

「ハラオウン執務官は三尉を追いかけていましたので大丈夫かなっ  
て思ってた……わ、私の目的は誤解を解く事だったので」

「ヴィヴィオやアイナさんに協力してもらったのは？」

「三尉がヴィヴィオちゃんと仲良くしているって結構有名だったの  
でアイナさんに頼んでこちらに連れて来てもらえるようにしてもら  
ったんです。……正面からじゃ避けられると思ったので」

「……て事はアイナさんもう知ってたのか」

まるで知らない振りをしていたアイナの演技力に脱帽する朧。

「あ、後はヴィヴィオちゃんとキャロちゃんが居ればハラオウン執  
務官も冷静になるかな……と」

一通り説明を終えて一息つくユニス。

そして聞き終えた二人はと言うと、

「凄いな……」

「うん……」

ユニスの作戦を素直に感心していた。

「そ、そんな凄いななんて……はう……ごめんなさい」

また赤くして顔を俯けるユニス。

そんな彼女に昶が話し掛ける

「そんな謙遜しなくていいんだよ。本当に凄いなと思ったんだから」

「はい……」

顔をひよこつとあげるユニス。

「それに、そんなに俯いていたら可愛い顔が台なしだよ？」

「はあう！？」

「む……」

続けられた言葉にユニスは耳まで真っ赤にして再び俯いてしまった。

そして昶の発言にご機嫌斜めな女の子が一人。

「昶、捕まっただからファッションショー始めるよ」

「はい？その話はなくなったんじゃない……」

『何を言ってるんねん！？』

いきなり一つのモニターが飛び出してくる。

「おおいつー！？……っではやてか」

『私もいるよ』

「レインもか……今回ははやても責任あるだろ。監督不行き届きだし」

確かに今回ははやて達が始めなければこんな事にはならなかった。

はやてもそこは認めているようで頷いている。

『それは私も責任の一端はある思てる』

「なら、」

『けどな』

はやてが映るモニターの横にもう一つモニターが現れる。

『これはどないしてくれるんや？』

映し出された映像はぼっかり空いた壁と崩れた天井。

「……………あ」

翔は思い出した。

逃げる為とはいえ、六課を破壊していた事を……

思い出したら額や背中から冷汗がどんどん出てきて止まらない。

『直すのにはまず辺りを綺麗にして業者を呼んで、工事してもらって、ああ、二階も潰してもうたからなあ』

はやての手にはそろばんが握られており、次々と弾いていく。どこから取り出したのか、なんて野暮な事を聞いてはいけない。

『ぎつとこんなもんやな』

パチン、と最後の位を弾き、翔へと向ける。

「……………ダメだ」

青ざめた顔で翔はうなだれた。

「わからない！」

『なんでじゃポケエエエエエエエエ！！？』

阿呆なポケへの盛大なツッコミはまるでモニターから飛び出してくるような勢いを持っていた。

『そろばん位わかるようにしとけやあああああああああああ！！』

そう言いながらも電卓を操作し朧に見せる辺りが流石だ。

そしてそこに並ぶ零の数に目を丸くする朧。

「……こんなにかかるの？」

『今すぐにこんだけ払えるんか？』

正直、朧はあまりお金を使う機会がなかった為貯金はあるのだが、使えば全額が吹っ飛んでしまう。

『私がなんとかしてあげてもええんよ？もちろん少しは出してもらうけどな』

考える時間はいらなかった。

「やらせてもらいます」

のちにその場にいたユニスは語っていた、綺麗な土下座だったと。

「はあ〜い、それじゃあ浅儀朧ファッションショーの開幕や！」

『キヤアアアア！〜！』

『早く登場して〜！〜！』

『まだなの〜！？』

『恥ずかしがってる姿を見せて〜！〜！』

ステージの上ではやての掛け声と共に叫ぶ女性陣。最後の声は気の性だと思っ。

そしてステージはいつ作っただんた？

「それじゃあまずはドレスアップした朧くんや、どうぞー！」

ステージのカーテンが開き、一人の影が現れる。

照

スポットライトに照らされその姿が晒される。

「な、なんでこんな事に……」



《いいじゃない、翔ちゃん似合ってるよ》

「……嬉しくない」

そこに立つのは明らかに女性。

『キヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！』

『可愛いわ！可愛いわ！翔くん！！』

『やべえ、めちゃくちゃ可愛いじゃねえか！！？』

『私をお姉ちゃんって呼んでええええ！！』

『俺を罵ってくれえええええ！！』

レインとユニゾンし、綺麗な黒い長髪となり紺を主体としたドレスが生え、シンプルな装飾だが男性、女性にも大人気だ。

《ほら、ちゃんとやらないといけないんでしょ》

「うう……やっぱりヤダよお……」

《あんな大金出せないんだから仕方ないでしょ》

「ちきしょう……俺これが終わったら死のう……」

涙を拭き、瞳を閉じてそう決心した。

「ああ、集まってくれてどうもありがとう！きき今日はわ、私のフ  
アッションショーをた、楽しんでいって……ね」

……

『ウオオオオオオオオオオオ！！』

『キヤアアアアアアアアア！！』

いきなり翔が女性のような喋り方を始め、一瞬の静寂が訪れるが、  
すぐに歓声と共に熱気が辺りを包み込む。

何故翔がこんなにも体を張っているのかと言うと、これもはやて  
から出された条件の一つなのだ。

翔の特技には変装、というものがあり潜入捜査などでは結構変装  
……というより女装をしていた経緯がある。

その際に昗はバレない為に女口調で話したりしており、これがまた元々声が高いからかよく似合うのだ。

そんな事を知っているはやては昗に女の子に成り切ってやるように、との命を降したのだ。

当然昗は反論したが工事費やら諸々を引き合いに出されては勝てるはずがなく、こつこつ事になってしまったのだ。

「では、次はゴシッククロリータでどうぞー!」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!』

次の衣装へと着替えた昗がステージへと立つ。

その姿をステージ脇から見るのはとフェイト。

「フェイトちゃん、一つ聞いていいかな?」

「どうしたの、なのは?」

話しを始める二人だが視線は昗から離さない。

「今回は勘違いであんな事になったんだよね?」

「ええと……アハハハ……うん……」

恥ずかしそう笑うフェイト。

「それでホントなら朧くんを捕まえた人には『朧くん一日お持ち帰り権』が貰えたんだよね」

「うん」

「でも今回はそういう女の子との出来事が嫌であんな事になったのにどうしてそんな賞品にしたの？」

よく考えればそうだ。

フェイトは朧がユニスといちゃついていたのが嫌であんな大事にまで発展したというのに矛盾している。

しかし、フェイトはまるで「何を言ってるの？」とでも言いたそうな顔をなのはへと向けながら答えた。

「だって朧がそう簡単に捕まるわけないもん」

当然のように言い放つフェイトになのは内心でこう思っていた。

ああ、こつこつ事はすぐ信じるんだね、と

~~~~~

〜れいんぽすと〜

翔「俺を虐めてそんなに楽しいかあああああああああ！?!?」

レ「うん」

翔「即答!?!?」

レ「にしても今回は長かったねえ〜、過去最高じゃない?」

翔「こんな話別にいらなかったのに……」

レ「いじけないの！今回は久しぶりにゲストが来てるから」

翔「ゲスト？それって多分……」

レ「それじゃあどうぞ〜」

？「こ、こんにちは……」

レ「じゃあ自己紹介よろしくね」

ユ「ど、どうもです、ユユ、ユニス・クローバーでしゅ！……はっ  
う……また噛んじゃったよお……」

レ「と、いうわけで、今回は新キャラ、ユニス・クローバーちゃん  
ですす！」

ユ「よよ、よろしく、です……」

翔「そんなに緊張しなくていいよ。気楽に、ね」

ユ「はい……」

レ「……もう完全に手玉に取ってる」

翔「なにが言った？」

レ「べっつに〜」

翔「？……変なレイン」

レ「それじゃあユニちゃんのプロフィールをどうぞ」

ユニス・クローバー

18歳

一等陸士

機動六課事務員

内気で恥ずかしがり屋の女の子。類い稀なる情報処理能力が八神はやての目に止まり、ヘッドハンティングされ機動六課へとやってきた。

人見知りが激しい彼女は機動六課でやっていけるのか不安だったが人の良い六課隊員達に触れ、少しずつだが打ち解けていった。

一言で言うと良い子。

ユ「うう……はずかしいよお……」

翔「いや、大丈夫だよ。おかしなとこなんてなかったよ」

ユ「あ、ありがとうございます……」

レ「今日の話も一番の活躍はユニちゃんだったんだしもっと自信を持ちなよ」

ユ「は、はい……」

翔「それじゃあそろそろ終わりだな」

レ「では、」

翔「次話にて」

レ「お待ち」

ユ「しし、してあります……あう、ひたはんだ（舌嚙んだ）」



第三十六話 翔くんと鬼ごっこ(後) (後書き)

どうでしたか？

なんだか途中から変なテンションで書いていたので凄い事になって  
しまいました(笑)

では、次話にてお待ちしております!!!

外伝 翔の初学校生活（前）（前書き）

どうも、シユタゲを買うかかなり悩んでいる夕です!!

今回は10万アクセス記念作品です!!

実際10万は随分前で今や20万もいつの間にか越えてしまっているのですが（苦笑）

まあ、細かい事は置いといて（オイ

タイトルから通り、翔の昔話です。

またもや前編とかになってしまいました（笑）

しかも中途半端なところまで……

それでも楽しんでいただけると幸いです!!

では、どうぞ!!……

外伝 翔の初学校生活（前）

「手伝いますよ」

「いいのかい、悪いねえ」

「翔！予定通りに」

「ああ、後で部屋に行けばいいんだろ？」

「早く来いよ、皆待ってっから」

「おう！」

「翔くんこの間のアレなんだけど……」

「それならレインに渡して置いてください、あいつがやってくれろ  
と思いますから」

「わかったわ」

「なんだか引つ張り風ね、朧さん」

「そうだね」

休憩所から食堂へと食料を運びながら、様々な人に声を掛けられる朧を見て呟くティアナにスバルが相槌をうつ。

その話を横で聞いていたエリオとキャラも話に加わる。

「朧さんは親しみやすいですから」

「優しく、私達をいろいろと気遣ってくれて……そういうところがフェイトさんと少し似てて」

「あ、それわかる！僕もいつも良くしてもらって」

「うんうん、他にも」

「ちびっ子達にも大人気、と……私的には朧さんはフェイト隊長と言うよりアンタに似てるような気がするのよね」

「え、私？」

共感出来た話題に花を咲かす二人を見ながらティアナ達の話も盛り上がっていく。

「人付き合いが良くてデスクワークが出来なくて、よく怒られる……ほら、まるつきりアンタじゃない？」

「えへへ、それほどでも」

「褒めてないんだけど……ハア、まあいいわ」

なにか勘違いをして照れながら頭をかくスバルを見て、思わずため息をついてしまう。

「皆楽しそうだね」

「何か面白い事でもあった？」

『私達も混ぜて』

声の主はなのはとフェイト、その肩に乗るレインだ。

恐らく仕事が一段落して休憩所に飲み物を買いにきたんだろう。

『何を話してたの？』

「朧さんの事です」

「人付き合いが凄く良いなと思って」

ふわふわと飛んでキャロの頭へと移動するレイン。

スバル達が席を譲りながら先の話について話すと微笑してなのはが返した。

「にははは、確かにそうだね。私が初めて会った時から想像もつ

かないなあ」

「あはは……」

『あの頃はちよつとねえ……』

苦笑いで返すフェイトと遠くを見つめるレイン。

そんな二人の様子を不思議そうに見るFW達。

「なのはさんと出会った時って……」

「うん、私達がまだ学生だった頃」

「そういえば、なのはさん達にも学生時代があったんですね……」

「む……どういふ事かな、スバル」

驚く、というより思い立った、というような顔をしたスバルに頬を膨らませるなのは。

「いや、それは……アハハハ……」

目を逸らし笑ってごまかす彼女は、そんなことより！、と無理矢理話題を変更する。

「あの頃はちよつとって、どんな学生だったんですか？」

初対面や同僚にも親しく接する朧が荒れていたというのが想像出来ないのだ。

決して話題変化の為だけではない……………多分。

エリオ達もそこは気になるようで興味津々でなのは達が話始めるのを静かに待っている。

そして、フェイトが語りはじめた。

「そうだね、あの頃の朧はちょっとした問題児だったんだよ……………」

「突然ですが本日、皆さんに転校生を紹介します。さあ、入って」

私立聖祥大附属中学のとある一室。

六月という転校シーズンから掛け離れた時期にやってきたということ。教室内はそわそわしている。

そんな中、担任に呼ばれ教室へと足を踏み入れる者が一人。

黒髪に黒い瞳の童顔。少し髪が長いがズボンを履いているので男性なのだろう。

聖祥の制服を身に纏う彼の首には赤い宝石が付いた黒いチョーカーが一際目立つ。

教壇の横に立つ少年の後ろで担任が彼の名前を黒板へと書いていく。

「ほら、自己紹介して」

書き終えた担任に促され少年は口を開いた。

「……浅儀昗です。よろしくお願いします……」

発せられた声には張りがなく、どこかよそよそしい雰囲気を出している。

そんな昗を緊張しているのだろうと思った担任がフォローする。

「浅儀くんはご家庭の事情で転校して来ました。学校に通うのは初めてだと言うことなのでいろいろと教えてあげてくださいね。それじゃあ席は……ハラウンさんの隣が空いているわね」

示された席は窓際の一番後ろの席。

昗は指示された席へと向かい座る。



「朧、わからない事があつたら言つてね」

「ああ……」

彼の隣に座る女の子　フェイト・Ｔ・ハラオウンが笑みを浮かべながら言った。

転校初日の初っ端から名前の、しかも呼び捨てで呼ばれるというのも珍しいものだが、この二人に関しては特別だ。

なにせ二人は同じ屋根の下で生活しているのだから。

「前はどこに住んでいたんだ？」

「今までは通信教育だったの？」

「趣味は？」

「今どこら辺に住んでんの？」

「部活は決めた？」

「彼女はいるの？」

一限目が終了し、休み時間に突入すると男女問わず、一斉に朧の元へと駆け寄り質問を始めはじめた。

教室の出入口には他クラスの生徒まで見に来ており、まるで珍獣扱い。

だがそれだけこの時期の転校生は珍しいということだ。

「お父さんはお仕事何やってるの？」

「お姉ちゃんとかいない？いたら紹介してくれよ！」

収まる様子のない質問のラッシュ。しかし、それにも昶は感心がなくただ面倒だというような顔をしている。

別に質問に答えてもいい。けど一斉になんて答えられる訳ないだろ。

なんて考えていると、

パンパン、と手を叩き周りを注目させる、金髪でショートボブの少女。

「はいはい、アンタ達、そんな一気に質問しても答えられるわけないでしょ。順番よ、順番」

昶の横でリーダーシップを発揮する彼女は周りの纏め始めた。

昶はこの女の子を知っている。というより写真で見た。

なので騒ぎを止めてくれた礼を言う事にした。

「……………助かったよ……………バーニングさん」

「誰が」

「え……？」

「誰がバーニングだあああああああ！！！」

撃

彼女の拳は容赦なく昗の顔を狙い撃つ。

「……危ないだろ」

しかし、彼女の一撃は空を切った。

昗が顔を傾け避けたのだ。

避けられた事に一瞬驚くも、避けられたという事実が彼女のボルテージを上げていく。

撃・撃・撃・撃・撃

「アンタ、ねえ！殴られ、なさい、よ！」

「……何を怒ってる？」

拳の連打を軽く避けていく昗。どうやら彼は何が彼女の怒りに触れたかわかっていないようだ。

既に周りにいた生徒達は少し離れ、完全に観戦状態だ。

「私の、名前は、バニングス！アリサ、バニングスよ！間違っんじや、ない！」

「……バニングス？バーニングじゃなかったのか」

「当たり前よ！、と拳を振りかぶるアリサ・バーニン……バニングス。」

彼女の怒る理由を漸く理解した昶は軽やかなその動きを止め、

撃！

盛大に吹っ飛ばされた。

「え？」

先程までの動きからまさか当たるとは思ってたフルスイングが気持ちいいぐらいにクリティカルしたのだ。

そして目の前には吹き飛ばされた一人の少年。

アリサは急いで昶へと  
駆け寄る。

初めから殴る気は満々だったがフルスイングを当てる気なんてさらさらなかったのだ。

「ちょ、なんで避けなかったのよ！？」

「名前を間違えた俺が悪いから……ごめん」

殴られた時に口の中を切ったのか、血を拭い立ち上がる。

「そ、そりゃそうだけど……あ、謝らないでよ！私だって殴っちゃったんだし……」

調子を狂わされあたふたとするアリサ。

「……気にしないでいいよ。俺が悪いんだから」

そう言っつて昗は出入口へと向かっていく。

「ちょ、アンタどこ行くのよ!？」

「……学校には保健室って所があるんだろ？そこに行く」

「行くつて……アンタ場所知ってるの？」

今日初めてやってきた学校の事を昗が知るはずもなく、立ち止まる。

そして一人の女の子を呼ぶ。

「フェイト」

野次馬の中から出てきた彼女はハア、とため息をつき昗の隣へとやってきた。

「それじゃあアリサ、私は昗を保健室へ連れて行くから先生がきた

ら宜しくね」

アリサにそう言い残すと、フェイトと昶は教室を後にした。

この後アリサは昶がフェイトと何故知り合いなのかと周りに男子 から質問攻めにされたりした事を二人は知らない。 特

チャイムが鳴り、休み時間も終了している。

廊下には申し訳程度に聞こえる教鞭を執る教師の声と、こつんこつんと保健室へ向かう二人分の足音だけが鳴り響くのみ。

「もう、あんまり無茶しないでよ？」

歩を進めながら小さい子を叱り付けるように言った。

「あんなの無茶にならないよ……それに俺が悪いし」

「そ・れ・で・も！いい？」

「……わかったよ」

昶の顔は教室のような冷めた表情ではなく、少し拗ねたような表情。

これが最近、フェイトに見せるようになった昶の姿の一つ。

その顔を見て苦笑するフェイトにムツとする朧。

「な、なんだよ……」

「フフ、皆良い人達だよ。朧にもそれはわかってるんだよね？」

「……うん」

小さくだが頷く。

それを見たフェイトは優しく微笑みかけた。

「少しずつでいいから、少しずつ……皆の厚意も受けとっていいこと  
ね」

会話だけ聞いていれば、まるで母と子の会話にしか聞こえないが、  
れっきとした同年代の会話なのだ。

そしてフェイトの言葉に朧は、

「……………」

すぐに頷く事が出来なかった。

保健室に着いた後、朧は少し腫れた頬に湿布を貼り終えたが教室

に戻らなかった。

フェイトは戻るように言ったが、「少し疲れた」とベッドに寝転がってしまった。

保健室の先生も朧の様子を見て「初めての学校に気圧されたのかもね」と朧の滞在を認めてしまったのでフェイトは仕方なく教室に戻っていた。

その後もずっとベッドに寝ながら窓の外を眺めているだけで、ほとんど時間が過ぎていった。

そして朧が保健室に籠ってから数時間が経ち、一人で保健室の先生も用事があるとどこかへ行った。すると、不意に扉が開いた。

「失礼します。朧、いる？」

「何しに」

「失礼しま〜……って先生いないじゃない」

やってきたのがフェイトだったので何をしにきたのか聞こうとしたがひよこつと先程のアリサ・バニングスが顔を出したので思わず口を閉ざしてしまう。

「先生いないのに入っちゃっていいのかな？」

「ん〜、別に構わへんやろ」



「はやてちゃんもあんまり騒いじゃダメだよ？」

やって来たのは二人だけでなく、五人。しかも全員女の子。

全員以前フェイトから見せられた写真に映っていた女の子達だと  
朧はすぐに思い出した。

だんまりする朧とは対照的に楽しそう話すフェイト達。

《何をしにきたんだ？》

突然大勢を連れてきたフェイトに念話を飛ばす。

そんな朧にフェイトはまた一つため息をつく。

「普通に喋ればいいのに……もうお昼だからお昼ご飯を持ってきたんだよ。今日は私がお弁当を預かってたから」

そう言って差し出された包みを受け取る朧。

「ありが……って待て」

すっかりお昼の事を忘れていたので礼を言おうとするがあることに気付く。

「どうかした？あ、もしかしてお弁当小さかった」

「いや、大きさはこれで充分……って違う。それは何？」

目線の先には朧と色違いの包みを一つ持つフェイト。よく見ると

他の女の子達も同じような物を持っている。

「え？何ってお弁当だけ？」

「それは見たらわかる。だからなんでそんなもんをここに持って来てるんだ」

「だってここで食べるんだもん」

「ハア！？」

さも当然とばかりに言うフェイトに声を荒げる昶。

恐らく今日一番声を張った一言だろう。

「なんでここなんだよ！？」

「だって昶と食べたかったから」

「うっ……そ、それは別にいいけど……」

恥ずかしげもなく言われた一言に頬染め、言い籠る昶。

「あ、あの〜」

そんな二人を見ていた四人が入り込む。

「私達……お邪魔かな」

「なんか二人の世界って感じやね〜」

「とうとうより、アンタちゃんと声張れるんじゃない」

「にははは、アリサちゃんそんな言い方しない」

口々に言う四人だが彼女達もここから動く気はないらしく、既に机や椅子を並べ始めている。

「……俺は」

居づらくなつた保健室から出て行くこととするが、腕を掴まれてしまふ。

「ダメ 私の友達の紹介もしてないでしょ」

「……知ってるよ。写真の子達だろ」

そう言つて昗は四人の方へ顔を向ける。

「……紫の子が月村さん、金髪の子がバニングスさん、関西弁の子が八神さん、そしてポニーテールの子が高町さんだろ」

「お、私達の名前知ってたんか？」

関西弁の女の子 八神はやてはフェイトが自分達の事を昗に教えている事知っていたが、話を聞いていた限り覚えていないと思つていたので。

「……何度か聞いてたから」

「私の名前はさっき間違えたけどね」

「もう、しつこいよ、アリサちゃん」

「……」

アリサに言われ鞆は再び謝りだす。

「ふん、もういいわよ」

そう答えるが突然何かを思い付いたのか口元を吊り上げる。

「そうね、私達とお昼を食べる事でチャラ。それでいいじゃない」

「あ、それいいね」

アリサの提案に乗るフェイトを見て止めようとする鞆。

「ちよ、まっ」

「素直にいうこと聞きなさい」

「……はい」

有無を言わさない物言いに鞆は頷くしかなかった。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「番・外・編！」

翔「随分と遅くなったけど」

レ「10万アクセス記念です！」

翔「これもいつも読んでくださっている皆様のおかげです！」

レ「ありがとうございます！そしてこれからもよろしく願いします！……！」

翔「と、いうわけで始まった今回の番外編なんだけど……！」

レ「どうしたの翔ちゃん？そんなプルプル震えちゃって」

翔「……で……だ」

レ「え？」

翔「……で……話……だ」

レ「はつきり言ってよ」

翔「なんでこの話なんだあああああああ！！？」

レ「ん？だって『翔ちゃんの初学校生活』と『翔“ちゃん”のわけ』のどちらがいいかアンケートをとったらこっちだったんだもん。二票だけど」

翔「くじけそうになる発言禁止！それと人の黒歴史勝手に漁るんじやねえええええええええええええええ！！？」

？「五月蠅いぞ」

蹴

翔「ぼげええ！！？」

レ「そういえば今回はゲストがいたんだよね」

？「しょうかいおねがい」

レ「はいはい、では、今回のゲスト！珀狼さんが執筆中の【金色の閃光のもう一人の義兄】から！モテる男は辛いぜ、エース・ハラ

オウンと、ますたーだいすき娘、ユニゾンデバイスの焰華です！  
！」

エ「よろしく頼む」

焰「おねがいします」

レ「エースくんはフェイトちゃんの義兄なんだよね？」

エ「ああ」

レ「それでね、こつちの世界ではヒロインってフェイトちゃんなんだよ」

エ「それは知っている」

レ「まあね、いつも感想くださってるし、って思い出した。エースくん今日はなにで来てるの？」

朔「痛っ、頭思いつきり打った……」

エ「もちろん、ジープだが？」

脱！

レ「あ、朔ちゃん逃げちゃった」

エ「心配ない、焰華をつけた」

焰「えんかぱんち」

翔「がぼお!!?」

焰「ますた〜、つかまえてきたよ〜」

エ「よくやった焰華」

焰「えへへ〜」

レ「さすが空手の有段者、翔ちゃんが死に体だよ」

エ「まあ、調k y……もとい、特訓は後でじっくりとやってやるから」

翔「無理だから!?! エースさんの特訓なんて俺生き残れないから!?! しかも調教って言いかけたよね!?!?」

レ「あれ? 翔ちゃん、将来のお義兄さんにちゃんとご挨拶しないと」

翔「しょ、将来!?! おお、お義兄さん!?!?」

エ「お前にお義兄さんと呼ばれる筋合いはない!?!」

## 撃

翔「……………」

レ「なんだか今日は凄くやられてるよ翔ちゃん……………」

焰「ますた〜しよ〜くんのこときらいなの?」



エ「別に嫌いというわけじゃないよ。ただ浮気者が許せないだけだ」

翔「う、浮気者って俺は別に!!?それにエースさんなんて  
させて、ってなんで世界の修正力が働くんだよ!!?」

レ「向こうの本編でエースくんが知らないからだろうね」

エ「ほう……翔は俺の知らない事を知ってるのか……」

翔「ふえ?」

エ「さあ、話してもらおうか……」

レ「……いい加減本編に触れていっていいかな?怒るよ」

翔・エ「りよ、了解です……」

レ「ふう、漸く本編の事を話せるよ……さて、今回の翔ちゃんは普  
段の翔ちゃんと全然雰囲気違います」

エ「確かに、覇気が全くなかった」

翔「うう……人の黒歴史を……」

焰「よしよし、可愛いそ〜に」

翔「焰華ちゃんだけだよ、俺を気遣ってくれるのは……」

エ「……あれが同一人物とは思えないけど」

レ「まあ、ね。でもフェイトちゃんには心を許してるんだけどね」

エ「フェイトが助けたからなのか？」

レ「それもあるけど、それだけじゃないんだって。まあそこら辺はのちのち」

エ「アリサやすすか達も登場したようだが、この時からアリサとの力関係は既に確定事項となっているのには恐れ入ったよ」

レ「フェイトちゃんだけじゃなくてこの頃にはアリサちゃんやすすかちゃん達にもお世話になったからね、感謝しきれないくらいだよ」

エ「フツ、あいつらしいな」

レ「さて、今回はこのくらいかな。あ、そういえば今ならこんなものがあるんだけどいる？」

エ「？なんだこの写真の女性は」

レ「朧ちゃんの女装姿だよ。前に天照大神さんが六課にばらまいてくれたの」

エ「中々よく出来た変装だな」

レ「もつちろん、私とのユニゾン中だしね。ちなみにこの時の偽名は『雨宮明日奈』だよ。よく使う変装なんだ」

エ「……朧も苦勞してるんだな」

レ「それじゃあ、今回はきてくれてありがとうね」  
エ「いや、こつちも充実した時間を過ごせたよ」

焰「わたしもたのしかったよ」

エ「それに……今からが本番だからな」

翔「俺は風になる！」

脱

エ「逃がすか！」

駆

焰「あゝあ、いっちゃった」

レ「まあ好きにやらせてあげないとね」

焰「こんかいはおまねきありがとうございました」

レ「焰華ちゃんは良い子だね。それじゃあ一緒に締めようか？」

焰「うん」

レ「では、」

レ・焰『次話にてお待ちしております……!』

翔「うう……ドナドナが聞こえるよ……」

エ「お前が相応しい男かきつちり見極めてやるっ……」

翔「いやあああああああああああ……!?!?」

外伝 翔の初学校生活（前）（後書き）

どうでしたか？

翔のイメージが随分違うと思われたと思います。

安心してください、私も思いました（笑）

この時期の翔はかなり病んでいます。

というより、人間不信です。

次回で多分終わらせられる……はず？

そして珀狼さん、エースさんと焰華をお貸しくださりありがとうございました！！  
ございました！！

ちゃんと動かせていたか激しく不安ですが、何かを不備があればお  
つしゃってください！！

次回もゲストを呼ぶ予定なのでお楽しみに！！！！

では、次話にてお待ちしております！！！！

外伝 翔の初学校生活（後）（前書き）

どうも、夕です！！

お待たせしました！！

外伝後編です！

本当、ずっと悩んで書いた内容がこういう形になりました！

では、どうぞ！！！！

## 外伝 昶の初学校生活（後）

「 というわけで、私やなのはちゃんも管理局員なんよ」

「 部隊は全然違うんだけどね」

アリサの重圧に負けた昶は大人しく席に着いた。

そしてお弁当を広げ、始めにしたのは、なのは達が魔法関係者だ  
という話だった。

アリサやすずかは魔法を使えないが認知している良き理解者との  
事。

それらの話を聞き流しながらお弁当をつついていた昶にアリサが  
突っ掛かる。

「 ちょっと、アンタ聞ってるの？」

「 ……聞ってるよ。八神さんは捜査官で高町さんは戦技教導隊なん  
だよ。そしてバニングスさんと月村さんは魔法の存在を知ってい  
る」

聞いているならいいのよ、とサンドイッチをぱくつくアリサに周  
りは微笑し、話を続ける。

「 浅儀くんはフェイトちゃんの家に住候してるんだよね？」

「うん、最近はお兄ちゃんも家を空ける事が多いから母さんも喜んでるの」

すずかの質問にフェイトが答える。

ハラオウン家は元々、リンディ、クロノ、フェイト、アルフの四人で暮らしていたのだが、裁判が終了し、保護観察を受ける事になった朔の身元引受人であるリンディが、戻る場所がない朔とそのデバイスでもあるレインを引き取る事になったのだ。

レインは持ち前の明るさですぐ周りに溶け込んでおり、今頃家でアルフとお昼の長者番組を観ながら『いいとも〜!』とか言っているのだろう。

あの10分の1でも朔になればなあ

フェイトはそう思わずにはいらなかった。

全員食べ終わり、たわいもない雑談をしながら時間は過ぎていった。

その間も朔に能動的な行動はなく、あくまで受動的に聞かれた事に答えるだけ。

そんな朔に栗色の髪をしたサイドテールの少女　高町なのはが声を掛ける。



「浅儀くん、次の授業は出席するの？」

午前中、一限だけしか出席していなく、教室でも少し微妙な空気が流れているのだ。

そんな事を知る由もない朧だが、授業費をリンディに出してもらっている以上あまりサボるなどはしたくない。

ちなみに朧は当初学校に通うつもりなどなかったがリンディに半ば強制的に入学させられたのだ。

「……出るよ」

「なら教室に戻るっか」

ボソツと言ったその言葉を拾ったフェイトが席を立つ。

それに続く形で皆立ち上がり、片付けを始め、朧も自分の弁当箱を包み直す。

だから気がつかなかった。

フェイト達が口を吊り上げていた事を、

「はい、それじゃあこの時間はロングホームルームLHRなので今日は浅儀くんへの質問タイムにしましょうか？」

『うおおおおおー!!』

『先生太っ腹!!』

『浅儀様々だな!』

鳴り響くクラスメイト達の声。

何故こんなにも喝采が上がっているのかは勿論理由がある。

実は先週までの予定ではこの時間は作文の朗読会の予定だったのだ。

この担任、凄く生徒思いの先生で生徒の事を知ろうとよくこういう事を実行するのだ。

生徒からしてみれば、正直中学生にまでなって自分の書いた作文の朗読などというこっぴばずかしい事やってられない。

だからこそ、この提案にあそこまでしゃぎ倒していたのだ。

タイミングが良すぎると感じた初はすぐフェイトへ念話を飛ばす。

《なんだよこれ》

《なんの事?》

《とぼけるなよ、なんなんだこの用意周到さ。アンタの差し金だろ》

昶の冷たい視線にフェイトは目を反らす。

念のため言っておくと、昶の勘通り、沢山の人に接して貰おうとやはりフェイトが担任に提案したのだ。

「それじゃあ浅儀くん、こっちに来てくれる？」

「ほら、呼んでるよ。早く行かなきゃ」

担任の呼び掛けに話を切り上げ、昶を促す。

そして覚悟したのか一度だけキツとフェイトを睨みつけると、教卓の方まで歩いていった。

「それじゃあ質問のある人は挙手……って多いわね」

ざっと見ても二十近くいる。

一クラスの人数が約四十人なので半分も人間が挙手している事になる。

その中の一人を担任が当てる。

「前は何処に住んでいたんですか？」

「……海外を転々としてた」

流石に時空航行船の中です、とは言えないので適当にでっちあげ

た。

「じゃあここもすぐに転校しちゃうの？」

一人の生徒が発言するが昶はすぐ否定する。

「……多分しないよ。今は知り合いの家で居候してるから」

これはリンディがこうしておけ、と言いついて聞かせていたものだ。

「浅儀くんの両親は今も海外なの？」

「……両親は物心つく前に亡くなって。海外で一緒にいたのは親戚の人」

「あ……う、ごめんなさい……」

昶の亡くなったという言葉に発言した女の子が気まずそうに萎縮してしまう。

周りも騒がしかったのが嘘のように静まり返っている。

そんな様子を見て昶は悪いことを言ったと思い、気にしていない事を伝える。

「謝らなくていいよ……親代わりの人がちゃんと育ててくれたから……両親の顔は知らないけど……その人が俺の大切な家族だったから……」

その言葉を聞きホッとするクラスメイト達。だが正確に理解した

者も数人いる。

大切な家族“だった”

その言葉に込められた想いを感じ取り、フェイトは唇を噛み締めた。

それから質問タイムは続いた。

趣味はなんだ、誕生日はいつだ、彼女はいるかエトセトラエトセトラ……

幾つもの質問を答えていくが、やはり朧の表情から笑顔は見えず、どこか警戒しているようにも思えた。

「これで全部終わったわね、それじゃあ最後に浅儀くんから何か言ってもらいましょうか」

最後の質問も無事に終了し、締めとして担任は朧に言葉を貰おうと視線を向ける。

「俺は……」

「いいじゃない、何か言いなさいよ」

「そつだよ、意気込みとか」

「何か一言、私達に」

「なあ、いいだろ」

断ろうとしたが、アリサの声に遮られてしまい、その声に便乗し、他の生徒達も口々に言い出してしまふ。

「静かに、無理強いしない。また今度」

「……いえ、わかりました」

騒ぎを治めようと担任が止めに入るが、今度は昶の声がそれを遮る。

クラスメイト達も昶の言葉を静かに待つ。

「……俺は貴方達が怖い。話す事が……怖いんだ」

その言葉に教室の空気が変わった。

「別に貴方達が悪いわけじゃないから勘違いしないで欲しい……良くしてくれようとしているのはわかる……単に俺が貴方達を信じきれないっただけだから……」

.....

何を言ってるの？

無音の中で皆の顔がそう言っている。

人間、突然理解出来ない事が起こると一瞬、思考が止まってしま  
う事がよくある。

これもその一つだ。

そんな中で最初に口を開いたのは担任教師だった。

「.....ア、アハハハ.....な、中々スパイシーな挨拶だったわね.....  
.....浅儀くんはホントに面白いわ、はい、皆拍手！」

先生はどうかしてフォローしようとするが、戸惑いと冷やかな  
空気が入り混じり最早どうすることも出来ない。

拍手も先生が勢いよく叩くが周りからパチ、パチ、と疎らな音し  
か聞こえない。

この後、刎に話し掛ける人は誰もいなかった。

「なんであんな事言ったの!?!」

「……いいだろ別に」

「良くないよ!」

その日の帰り道、フェイトは朧を問いただした。

何故ああも引き離すような事を言ったのか。

あの発言で朧は孤立してしまった。元々朧にクラスメイト達と仲良くしてもらいたくてフェイトが画策したのに全てが裏目に出てしまったのだ。

「せつかくクラスに溶け込めるチャンスだったのに!」

「んなこと誰が頼んだんだよ!」

声を荒げて叫ぶ二人は次第に注目を集めてしまう。

周りで見られている事に不快感を覚えた朧は歩く速度を上げる。

「ちょっと、朧」

「構うなよ!?!」

「キャッ!?!」



急に速くなった朧に追いつく為に腕を掴もうとするが、弾かれてしまう。

「あ、……」

弾いた手とフェイトの顔を交互に見つめる。その顔はやってしまった、とでもいうような表情だ。

「くっ！」

駆

「あ、待って！」

逃げるように走り去ってしまった朧をフェイトはただ見ているしかなかった。

朧の転入から一週間がたった。

この七日間で朧に近付く者はめっきり減った。話せばある程度は答えるので時々クラスメイトが話し掛けるが、それも滅多にない事で他は担任やフェイトくらいのものである。

担任の先生はクラスで浮いている朧に試行錯誤して馴染ませようとするが、如何せん、朧から壁を作ってしまうので効果がない。

そんな朧をフェイトは学校だけでなく自宅でも気にかけているのだ。その姿勢に朧はいつも、言葉に詰まりながら、苦い顔をしながら言う。

「ほ、ほっといってくれよ！」

「　　ッ！？なんでそんなにっ！」

「もういいんだよお……」

自分の為に必死に働き掛けてくれる彼女の行為に胸がちくりと痛む。

しかし、朧は変わらない。

人を信じられない。

信用と信頼の違いなんてレベルじゃなくそれ以前の問題。

何が朧をああさせるのか。不思議に思った彼女達はフェイトに聞いた。

「なんであんな捻くれてるのよアイツ!？」

「ちょっとアリサちゃん……」

「もうちょい抑えて……な？」

癩癩を起こすアリサを宥めるすずかとはやて。

すずかとはやては朔やアリサ達とはクラスが違うのだが話は当然聞き及んでいる。

……というより転校生がおかしいと他のクラスにも噂になっているのだ。

ちなみに今は翠屋で話しており、三人のやり取りを見て苦笑するのはがフェイトへと顔を向ける。

「でも、フェイトちゃんと話す時はあそこまでじゃないよね？なんだけかフェイトちゃん以外の人に壁を作ってるって感じかな」

朔の纏う雰囲気を的確に突いた言葉にフェイトは呆気に取られたような表情をする。

「凄いななのは……うん、一月くらい前に朔が、今気兼ねなく話せるのは私と彼のパートナーだけだって、言ってた」

今は私ともまともに喋ってくれないけどね、と苦い顔で付け加える。

その話を聞いてはやてが疑問点を浮かび上げる。

「今、て事は昔は違ったって事やる？」

「うん、朔のパートナー……レインって言うんだけど、彼女の話し

や昔はもつと明るい性格だったんだって。今はまたすっかりなくなっちゃったけど、この前までは笑ったりとかもしてたんだよ」

「アイツが明るい？……ダメ、想像出来ないわ」

根暗とも言える性格の朧しか見ていないアリサは明るい朧を想像して、すぐに顔を横へ振る。

「……浅儀くんってフェイトちゃんが保護したんだったよね。それが関係してるの？」

「私もプライバシーとかあって詳しくは聞いてないからなあ」

なのはやはやても管理局員だが朧の関わる事件については特秘事項となっているのに加え、個人のプライバシーも考えて深く聞かなかったのだ。

「うん……詳しく私の口からは言えないけど、朧はちょっと酷い騙され方をして、人を信じれなくなってるの」

朧とフェイトが出会った事件。

元々は危険指定物、ロストログアの不当所持の取り締まりとそれに関わる組織の検挙が目的だった。

その過程でフェイトは朧と出会い、戦った。

そして事件の最後に騙されていた事に気づき、心が折れ“かけ”、フェイトが持ち直した。

これが大まかな二人の出会いだ。

「それで、これからどうするつもりなの？」

理由を聞くと昗自身の問題にしか聞こえなく、さすがにフェイトに問う。

そんな問いにフェイトはきっぱりと答えた。

「やるよ、私は。私は昗の味方だから」

フェイト達の会話と同時刻、帰宅した昗はレインに捕まっていた。

「……どうしたんだよ」

『まあいいから座って』

蒼い長髪で着物を着ている見た目小学生の少女。その少女に椅子へ座るように指示される。

彼女が昗のパートナーである、ユニゾンデバイスのレイン。

普段は手の平に収まるサイズなのだが地球にそんな身長の間人はいないので小学生程度の大きさになっている。

補足しておく、レインの年齢は不明である。少なくとも朧やフ  
イト達よりかは遙かに年上だ。

彼女の指示に従い、朧は仕方なく椅子に腰掛ける。

「……用件は？」

『もう学校に行き始めてそろそろ一週間経ったけど……上手くやつ  
てるの？』

「……さあね」

とぼけるように答えながら朧は席を立ち、部屋へ戻

『はい待ってね』

「っ!?!?って何すんだよ!!!?」

立ち去ろうとする朧の襟元を掴み強引に席へと戻す。

『話は終わってないも〜ん。ちゃんと聞いてよね』

怒らせるといろいろと面倒な事になると感じた朧は大人しく話を  
聞く姿勢に入った。

『最近ね、フイトちゃん凄く悩んでるんだよ』

「……」

『あの子ってあんまり愚痴ったりする子じゃないだろうに、どうしたらいいんだろ……って。いい子だよね』

用意していた緑茶を美味しそうに啜りながら言う。

要はフェイトから相談されていたということらしい。

『まあ、私はフェイトちゃんに一任してるからあまり言いたくないんだけど……』

「……じゃあ」

なんなんだよ、と言おうとする前にレインが口を挟んだ。

『はつきりさせなよ』

「ッ!?!……どういう意味だよ?」

『今の昗ちゃん、凄いい中途半端』

なんでもないように言われた言葉だが昗自身、それを理解しているように動揺している。

『フェイトちゃんから聞いたけど、昗ちゃん、怖いとか言って人を近寄らさないようにしたのに、話し掛けられたらちゃんと答えるんでしょ?』

自ら線を引き、その境界線を踏み越えようとしない。そのくせ受け答えはしっかりする。矛盾しているのだ。

『一人でいたいのなら話し掛けられても無視すればいい。皆といた  
いなら線なんて引かなきゃいい。中途半端なんだよ、朧ちゃん』

「っ……」

レインの言葉がぐさりと胸に突き刺さる。

『そんな煮え切らない態度がフェイトちゃんを困らせてる事になる  
の』

「お、俺は……」

的確に当てられ、朧は言葉が見つからない。

『ま、別に私は朧ちゃんに付いて行くだけだからどっちでもいいん  
だけど、周りが困るしね。早く決断してね、マスター』

そう言ってレインは席を立ち、部屋を出ようとドアノブに手をか  
ける。

『悩むんならおねーさんが少しヒントをあげましょう 信じられな  
い……それは誰の所為なのかなあ？』

そう言い残し、レインは去っていった。



次の日、翔はある人物に中庭へ呼び出されていた。

正直、あまり話した事のない相手に戸惑いを覚えるが、用件はだいたい想像が付く。

そして、彼女がやってきた。

「ごめん、待たせちゃったかな？」

「……別に、今来たところだから」

やってきたのはなのは。

そして、早々に話題を切り出してきた。

「浅儀くんは人を信じられないんだよね？」

「……ああ」

「騙されるかもしれないから話す事が怖いんだよね？」

「なん……ああ、そうだよ」

何故知っているのかと思ったが、大方フェイトが話したんだろうと当たりを付け、流す事にした。

「でもね、浅儀くんの行動は矛盾してるって自分で気付いてる？」

「ッ!？」

昨日、レインに言われた事を今度はなのはに言われてしまった。

なのははそんな朔の反応を見て、優しい表情をつくる。

「そっか、やっぱり自分でも気が付いてたんだね」

「……違っ」

「それに本当は」

否定しようとする朔だったがなのはの話はまだ続いている。

本当は皆を信じたいんだよね？

「ッ！…!？」

その言葉は朔の心を大きく揺さ振った。

「でも、騙されるんじゃないか？そう考えると話すのが怖くなる」

「……が……」

「え？」

「それが……それがなんだって言うんだよ！」

叫んだ声が響き渡る。

近くには人がいないが、此処は中庭なので誰もいない訳ではなく、

少数だが辺りにいた生徒達も朧達の方へと振り向いている。

「知ったような事を言うなよ！あんたに俺の何がわかるっていうんだ！？」

だがそんな事に気付かない朧はどんどん声を荒げていく。その姿は端から見て、単なる強がりには見えない。

「うん、私にはわからないと思う……けどね、言葉にしなきゃ自分の事も相手の事も理解出来ないし、してあげられないよ」

「……………」

なのはの言葉がじわりじわりと身体に染み込んでいく。朧にもそれが正しい事とわかっているのだ。

今では口を挟む事さえ出来なくなっている。

「私とフェイトちゃんってね、会った当初は敵同士だったんだ」

「え…………？」

そしてなのはは懐かしむように語りはじめた。

「ロストロギア、ジュエルシード。私達はそれを巡って戦った」

それは出会いの物語。

なのはが魔法と出会い、フェイトと出会った、忘れられない物語。

「けど、私は理由もわからないまま戦ったりするのは嫌だったの。話せば協力しあえるかもしれないのに、始めからわかりあえないって決め付けちゃうのが、凄く嫌だったの」

だからなのは呼び掛けた。問い掛けた。

なんでジュエルシードを集めるの？

貴女の名前は？

理由を教えて！

何度も問い掛けた。

「いつしか目的がジュエルシードじゃなくてフェイトちゃんと友達になる事になっちゃってたの」

言ってくれたんだ、友達になりたいんだって

次元航行船での会話。

「その時に改めて思ったんだ、言葉にしなきゃなんにも始まらないんだって」

いつかフェイトが話した恩人の女の子。

「……高町さんが」

「ふえ、どうしたの？」

抜けたような返事をしたこの少女が自分を救った少女を救った人

……

目を見開いたまま朧は動かない。

「貴女が……」

そう言いかけ、

「キヤアアア！！」

『！！！？』

突然聞こえた悲鳴に一斉に振り向く二人。

その先には木の枝にぶら下がる一人の女の子の姿がある。

その木はかなりの高さがあり、そのまま落下すればただでは済まない事が容易に理解出来る。悲鳴を上げたのは下にいる彼女の友達だろう。

「うう……」

「だ、誰か！助けて！！」

叫ぶ友達を余所に周りの生徒は突然の事態に頭が回らないようであたふたとしていて、少女は今にも落ちそうだ。

「今行くからっ！」

気付いたなのは下でキャッチする為にすぐに駆け出した。

「キャッ！！？」

しかし無情にも捕まっていた枝が折れてしまい、女の子は真つ逆さまに落ちていく。

「(ダメ、間に合わない！)」

なのはの速さではあと少しの距離が届かない。

だが諦めずに走る。

届かせてみせると、

風

「えっ？」

不意に強い風が吹いた。

思わぬ強風に顔を背けてしまう。

その一瞬が命取りになる。

「しまっ」

慌てて女の子の方へと走る。

しかしそこには、

「え？」

女の子を抱える朧の姿があった。

「怪我は！？」

「え、いえ、大丈夫です。あ、ありがとうございます……」

なにが起こったのかわからない、というような表情をしながら礼をいう少女。

彼女の友達も周りの生徒達もその瞬間を見逃した様子だった。

「ふう……」

お姫様抱っこで抱える女の子の様子を見て安堵する朧だが、すぐに表情が変わった。

「なんであんな危ないことしたんだ！？」

「ヒッ！」

突然怒鳴られ女の子はビクッと身体を震わせる。

なのはを始めとする周りも朧の豹変振りに騒然とする。

「こ、子猫が……下りられなくなって……それで……」

瞳に涙を浮かべながら答える女の子だが朧は容赦しなかった。

「それで自分が下りられなくなったら世話ないだろ！ー！そういう時は誰かに手を借りろよ！ー！」

「い、いじめんなさい……」

今にも泣き出しそうな顔で謝る女の子。

そんな姿を見た昗はフツと優しい表情に戻った。

「でも怪我がなくてよかったよ。もう無茶したらダメだからな？」

微笑みながらそう言った。その顔を見た女の子の顔は一気に崩壊した。

「う……う……うわあああああ！」

「ちょ、待て、なんで泣くんだよ！？」

抱えられたまま胸で泣き叫ぶ女の子に昗はあたふたしてしまっ。

その姿を見たなのは、思わず笑みがこぼれた。



暫くして泣き止んだ女の子はもう一度朧にお礼を言って去って行った。

「別にお礼なんていいのに……」

「へへ、あれがアンタの本当の顔ってわけね」

「ッ!？」

声のした方へ慌てて振り向くと、なのはだけでなく、アリサやはやて、すずか、そしてフェイトが笑みを浮かべながら立っていた。

「……なんの事だよ」

「今更とぼけたって無駄やで」

「うん、きちんと見せてもらったから」

「……見てたのか？」

「私達だけじゃなくてクラスの子も何人か見てたみたいだよ？」

「チッ……」

はやて、すずか、なのはの言葉に舌打ちをする。

だがその顔は赤く染まっっていて、照れ隠しだという事がすぐに分かる。

「朧、もういいんじゃないかな？」

そう言ったのはフェイト。

「さっきの朧は考えるより先に身体が動いてた。そうだよね」

「……………」

応えないで無言を通す朧に話を再開させる。

「人間は世の中沢山いる。だから嘘を付いて騙す人だっている。人の言うことが全部正しいって事はないんだもん。だからなにが嘘でなにが本当なのか、喋って、会話して、自分で判断しないとダメなんだよ」

「あ……………」

信じられない…………それは誰の所為なのかなあ？

レインが言っていたヒント。

それは昔、ある人が言っていた事…………

「なんであの人を手伝わなかったのかって？そりゃあ、アイツが信用出来なかったからよ。え、なんでって？アンタねえ…………まあいいわ、アンタも私の弟子なら覚えておきなさい。私は誰かれ構わず手助けしてるわけじゃないわ。私は私が助けたい、て思った人しか助けない。利用しようとする輩になんて絶対手を貸さないわ。アンタ

も自分が信用出来ない相手には手を貸さないようにね。それも全部  
翔が判断する事だけだね』

今の今まで忘れていた彼女の言葉。けど今はしっかりと思い出せる。

「俺は……自分を信用出来なかったのか……」

ただただ一心不乱に一つの背中を追い求め、大切な事を忘れていた。

「翔？」

ぼうつとしていた翔を心配そうに見上げるフェイト。

迷惑をかけた、心配させた、優しい女の子に頭を下げた。

「ごめん、フェイト」

素直に、真つすぐに。

謝られた本人はぼけーとしていたが、すぐに笑みを浮かべて言った。

大丈夫だよ、と

「浅儀くん、漸くちゃんと話せそうだね」

なのはが二人のやり取りを見ながら近づく。

「……翔」

「え？」

翔がボソツと言った言葉を聞き直す。

「翔だ。浅儀って呼ばれるのあまり好きじゃないんだ」

そう照れ臭そうに顔をかいていた。

「これが翔の学生生活の始まりだよ」

話し終えたフェイトは「コーヒー」を口にする。

「なんだか、翔さんじゃないみたいですね……」

「う、うん……」

F W達は今の翔との食い違いに驚きを隠せない。

「あれから翔くんも少しずつ変わって行って今みたいになったんだよ」

なのはが言う通り、フェイトから始まり、なのははやて達、次にクラスメイト、同級生、そうやってどんどん自分を取り戻していったのだ。

『あの節はありがとね』

「別に私達は、」

「うん、翔が自分で頑張ってたただけだよ」

謙遜する功労者二人。

「おい、何話してるんだ？」

噂をすれば、と翔がやって来た。

「え、ちょっと昔話をね」

「昔話っていつの頃の？」

「秘密だよ」

そう言って指を口元へとやる。

「お前、もしかして俺の事じゃないだろうな？」

秘密、と言つ言葉から敏感に察知し、問い詰めるがひゅるりとかわされてしまふ。

「だから、ひ・み・つ、だよ」

「おい、待てって！おい！」

朔が逃げるフェイトを追いかける。

その光景を見てなのは思った。

人って変われば変わるもんだなあ、と。

~~~~~  
「れいんぽすと」

翔「まずはお詫びを、今回は凄いい待たせしてすみませんでした」

レ「これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします！」

翔「ふう〜、てなわけで漸く（後）をお届け出来たわけだけど、」

レ「早速ゲストに登場してもらおっか」

翔「天照大神さん執筆中の【魔法少女リリカルなのはStrike  
rs】相反する二色の翼〜】より、陰と陽の翼を持つ男！蒼波優斗  
くんです！」

優「お邪魔します」

翔「前はそつちでもお世話になったね」

優「あの時はご迷惑を……」

レ「大丈夫だよ、楽しかったし。実質涙したのは翔ちゃんだけだし」

翔「うっさい、黙れ」

レ「それじゃあ、そろそろ本編に触れていくよ」

優「あの女の子ってどうやって助けたんですか？」

翔「あれはいつも通り身体を魔力で強化させて走っただけだよ」

レ「速さならなのはちゃんより翔ちゃんの方が速いからね」

優「今回は昔を思い出すようなシーンも多かったですし」

レ「翔ちゃんが思い出したシーンの一つは第二十一話にあったところだよ。サキの言葉は今回初めてだね」

優「翔さんはいろんな人に支えられているんですね」

翔「……そうだな。感謝してるよ。結局は俺自身の気持ちの問題だったんだ。それに気付けたのは、皆のおかげだから」

レ「だね それじゃあ今回はこの辺までだね」

翔「これで漸く10万アクセス記念も終了だな」

レ「次は20万アクセスで……っってもう過ぎちゃってるんだけど」

翔「なら30万でいくか」

レ「それがいいかもね」

翔「優斗、今日は来てくれてありがとう」

優「こちらこそ、ありがとうございました」

レ「また来てね」



翔「では、」

優「次話にて」

レ・翔・優『お待ちしております! ! ! ! !』

外伝 翔の初学校生活（後）（後書き）

どうでしたか？

書いてる途中で何度も混乱しながら試行錯誤したんですが、おかしな所や質問などがあれば是非言ってください。

そして天照大神さん、優斗を貸していただきありがとうございます！！！！

なにか不備があればすぐに言ってくださいね。

では、次話にてお待ちしております！！！！

第三十七話 リアルって名前が付いているけど本当にこんな事があるなんて思

どうも、夕です！！

今回は指摘があり、少し書き方を変更しました。

そして内容もなんだかはやめちゃになっちゃって……

もっと文章の構成力を付けなくては、と思っけてしまいます（泣）

では、どうぞ！！……

第三十七話 リアルって名前が付いているけど本当にこんな事があるなんて思

十、二十、三十と重なり合う二振りの剣。片手で悠々と振る女性と両手で必死に守りに入る少年。

「くっ！」

「ほらほら、足元がお留守よ」

「ッ!?!うわぁっ!?!?!」

ひょいと足を掛けられ少年は体勢を崩してしまふ。

そこを狙って剣を横に薙ぐ。

少年は崩れた体勢のまま迫りくる剣の腹に手を置き、そこを支点とし魔力を乗せた蹴りを放つ。

しかし一瞬の内に放たれたその蹴撃も女にはヒットすることなく、女は後方へ跳んで回避する。

女の実力を身体で体験している少年は当然避けられる事も予測していたので慌てる事はない。

寧ろ狙いはこれからだ、と言わんばかりの笑みを顔に浮かべている。

すう、と剣を携え、少年は走り出す。後ろへ跳んだ女が構える前

に、

「神煉流ぜ」

蒼く輝く魔力を宿した剣が彼女を捉らえ

「遅い」

捉らえずに女の剣に弾かれ、容赦ない一撃が少年を吹き飛ばした。

「んゝ、まだまだ全然足りないわね」

そう言ったのは黒髪の女性。親であり、姉であり、師匠である彼女は先程の少年との稽古の感想を述べているのだが、どうやら思った程の成長は見られなかったようで不服そうな表情をしている。

お昼の用意をしながらそれを聞いていた少年は組み手の内容に納得がいけない様子だ。

「む……足りないって何が足りないって言うんだよ。だいたい、あそこで邪魔されなきゃ……」

ぶつぶつと言いはじめた少年を見て、女は深く溜息をつき、右手を少年へと伸ばす。

「バカ」

「あう!？」

指で少年の額を思いつきり弾いた　デコピンだ。

「つう~~~~、何すんだよお!？」

「あんだねえ、実戦で敵が待つてくれると思ってるの?足りないのは全部よ、ぜ・ん・ぶ。パワー、速度、技術、判断能力、タイミン  
グ、エトセトラエトセトラ……何?まだ言つて欲しい?」

「……ごめんなさい」

赤くなつた額を涙目でさすりながら少年は女を睨むが如何せん、全く怖くなく、寧ろ可愛くみえる。

その証拠に女はほとんど少年の悪い点を指摘していく。かなりの数を挙げていくが彼女からするとまだ言い足りないご様子。少年は自分の不甲斐なさにふて腐れながらも謝るしかない。

「あんたもいい加減私に一撃掠らせるくらいしてみなさいよね」

女が少年の師匠になつてもう二年と半年が経っている。少年はメキメキと力を付け、一般の魔導師なら軽くあしらえる程に成長したが、未だ師匠のお目がねに叶うまでには成長してないらしい。

「そんな事言ったってサキから戦い方を教えてもらってるんだから、俺の戦い方はそっちに筒抜けだもん。勝てるわけないじゃん」

少年の戦闘スタイルはアクロバットかつ独創的なものだが、それも芯は女。サキから教わった基礎で、それを自分なりにアレンジしたに過ぎない。それが師匠と弟子の関係、ということだ。

「ハア……………」

そんな少年の心の声を聞いてサキは再び深い溜息をつく。

「そんな言い訳が通るわけないでしょうが……………もし私が敵になつたらどうするのよ？」

「え？」

サキの言葉に少年は目が点になる。

「あんならどうするのよ、翔？」

少年　翔は答える事が出来なかった。

緊急出動の回数がめっきりと減ったある日。

陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹と本局技術部の精密技術官のマリエル・アテンザが機動六課へとやってきた。

マリエル技官は隊長陣のデバイス等の調整でやってきたただがギンガは六課へと出向する事となった。

なので朝練もギンガを加えた形で行われ、ラストにの隊長陣VSFW陣の模擬戦では、普段は隊長陣側が人数を減らしていたのをギンガが参加した事で五対五で始める事となったのだが、いつも以上に隊長陣が圧勝してしまい、隊長陣達が反省する事となってしまった。

まあ、そんなこんなで平和な日々を謳歌していた昶はこの日もヴィオと遊んでいた。

「てか、俺って仕事全然してないか!？」

「しょーおにーちゃん?」



「いや、ごめん……なんでもないよ」

突然叫びだした朧を不思議そうに見上げるヴィヴィオ。

午後から寮母のアイナが買い出しに出掛けた為、その間に朧がお守りを頼まれたのだ。

午前中は訓練に時間を費やしたので午後からはデスクワークが待っていたわけのだが、毎度の事ながらレインがそれを買って出た。

交換条件として一つ二千元の高級プリンを三日分用意しなければならなくなったのは痛い、デスクワークがなくなったと思えば安いものだと考える………というか考えないとやってられない。

「さて、じゃあなにして遊ぶ？」

だがまあ、こう考えてばかりではヴィヴィオに悪いので朧は彼女に問い掛ける。

「おままごと！」

「おままごと？」

予想外の答えに朧が繰り返す。即答で答えたということは、恐らく始めから決めていたのだろうが、おままごとというのは今回が初めてだったので朧も少し驚いた。

「うん、ヴィヴィオがおくさんでしょーおにーちゃんがだんなさんね〜」

ヴィヴィオの中では既に構想が練り上がっているのだろう、すぐに配役を決めていく。

「それじゃあ、それで始めようか」

ともあれ、別段勅が止めなければいけない事もなく、二人のおままごごとが始まった。

「ガチャ、ただいま」

「おかえりなさい」

扉を開けると（開けるふり）彼の愛すべき奥さんであるヴィヴィオ（設定）が笑顔で出迎えてくれる。

彼女が向けてくれるその笑顔だけでその日の疲れが吹っ飛んでしまふ。

「はい」

「ん？」

出迎えてくれたヴィヴィオはその笑みを絶やさぬまま、朧の方へと両手を広げている。なんの事だかわからない朧は彼女に聞く事にした。

「どづしたの？」

「きゅーりよーめーさい出して〜」

「……………」

この時、この瞬間まで朧が考えていた『おままごと』というものは二人でご飯を食べたり、一緒に掃除をしたり、と穏やかで和やかなものだったのだが、突然生々しい単語が飛び交い、朧の思考が停止してしまう。

しかしヴィヴィオは一体どこでそんな言葉を覚えてきたのか？

「だーしーてー」

「あ、ああ……………」

催促するヴィヴィオにおままごとなどした事がない朧はこんなものなんだろう、と半ば強引に自分を納得させて懐から取り出した紙（実際は財布に入っていたレシート）をヴィヴィオに手渡す。

「むうう……………」

渡した明細（しつこく言うがレシート）と睨めっこするように食いつくヴィヴィオ。

「せんげつよりおきょーりょーがへってるわ。どーゆーことなの？」  
「……………はい？」

またもやヴィヴィオから飛び出した不釣り合いな言葉に翔は素っ頓狂な声で応える。今も目の前では「せつめーしなさい！」と恐妻家を演じる可愛い女の子が一人。

「（誰の入れ知恵だよこれは！？）」

ヴィヴィオが今までにこんな言葉を発した事は過去に一度もない。と、いうことは誰かが昼ドラのような知識をヴィヴィオに与えたということになる。

「あーなーたあー！」

「ああ、ええと……………会社がちょっと上手くいってなくて……………」

ブンブンと頬を膨らませながらヴィヴィオが怒るのでとりあえず、考えを保留にしてヴィヴィオの相手に専念する事にする。

「そんな会社でだいじょーぶなんでしょーね？」

「だ、大丈夫だから……………心配しないで」

翔はなんて答えたらいいのかわからず、ひとまずは当たり障りのない返答でその場を凌ぐ。

ヴィヴィオもその答えで納得したのか、既にいつもの笑顔に戻っ

ている。

「それじゃー、ごはんにする？おふるにする？それともわたし？」

「っ……ハア………」

朔は何故か痛くなってきた頭に手を当てる。

いくら初心なハートを持つ朔とてヴィヴィオのような年齢の子供にそんな事を言われたところで慌てる事はない。可愛い妹みたいな存在なのだ。慌てるというよりは寧ろこの歳でそんな言葉を覚えて……と悲しくなってくる。

「ねー、どれにするのお？ねえ」

そんな彼の悲しみはいざ知らず、早く続きをやりたいヴィヴィオが彼の服を引っ張るので「じゃあ、ご飯で」と返答する。

そして机に並べられたご飯（食器のみ）を前にして二人は向かい合うように座る。

いただきます、の言葉を合図に食器を手に持ち食事を始める（あくまでふり）。

漸くまともなおままごとになったな、と内心で安堵する旦那さん（朔）。

しかし、奥さん（ヴィヴィオ）の攻撃はまだ続いていたのだ。

「そっういえばね」

「ん？」

飲み物だけは昶が二人分を用意したので、昶はそれを落ち着いた様子で口へ運ぶ。

「となりのおくさん、だんなさんにつわきされたそーよ」

ピクツと、昶の肩が震える。だが今更この程度の事でうるたえる昶ではない。

「ほんとーにうわきしょーだわ。グランセニツクさん」

ブーーーーッ！

まさかの身内ネタに昶は盛大にお茶を吹き出す。

これを仕込んだ輩は何かヴァイスに恨みでもあるのだろうかと思わずにいられない。

吹き出した昶に「きたないでしょー！めっ！」と注意するヴィヴィオだが昶のそろそろ我慢の限界だった。

「……………ヴィヴィオ」

「ん？」

すつと立ち上がりヴィヴィオの近くまでいき、優しく言う。

「おままごとって遊びは誰に教えてもらったんだ？」

言葉の意味も知らずに言っている、純粹無垢な少女は恐らく悪くない。裏で操る外道がいるのだ。

「?どうしたの、しょーおにーちゃん?」

「いや、ちょっと気になってね。それで誰が教えてくれたんだ?」

ヴィヴィオの身長まで屈み込み、微笑みながら質問する朔。

「だめ、教えちゃだめって言われてるもん!」

どうやら口止めされているみたいだが、朔は次なる一手を打つ。

「教えてくれたらプリンをご馳走しよう」

「ほんと!?!」

朔の出した交換条件に目を輝かせるヴィヴィオ。念のために言うておくとこれは餌付けではなく、交換条件だ。……決して汚い手段ではない。

「ああ、約束する」

「ええとね」

天使のような笑顔を浮かべながらヴィヴィオは素直に教えてくれた。

「ふ〜ふ〜ん」

廊下を鼻歌交じりで歩く女性が一人いた。

今日の分の仕事が予定よりかなり早く終了し、暇が出来たのだ。

これも日頃の行いのおかげだと考えながら、女はこのあと何をしようかと考えを巡らせていた。

「ん〜、久しぶりにFW達の訓練を見に行くっていうのもええなあ」

だが、残念。彼女　八神はやての予定は既に決まっていたのだ。

「は〜や〜て〜」

「お、翔くん。お仕事は休憩中か？」

「まあな。ちょっとはやてを捜してて」



「私を？」

声のする方へ振り向くとはやての方へやって来る昗の姿が。

「なんや？そんな笑顔で。なにかええことでもあつたんか？」

ニツコリと笑顔を向けながら自分を捜していたという昗にはやても笑顔で応える。

「いいこと？そうだね。はやてが見付けられたからかな？」

「どういうことや？ハッ、まさか私に惚れてもう」

「違うから、寝言は寝て言え」

「さ、左様か……」

いつもの調子で慌てふためくと予想していたはやてはビシッと否定され少々傷付いてしまう。

「俺の用事はこれだよ」

「なんなん　ッ！！？」

突然現れた蒼い輪がはやてを拘束する。

「バインド！？これはなんの真似や昗くん！！？」

昗のいきなりの行為に彼を睨みつけるはやて。だが次の昗の一言でその表情は一変する。

「お前、ヴィヴィオにおままごとを教えたらしいな？」

「な、なんの事や？」

「プリンをあげるって言ったら吐いたぞ」

「ヴィヴィオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！？」

プリンに負けた部隊長、哀れ。

「純粋な子供にあんな事を言わせて……覚悟は出来てるんだよな？」

「いや、あれはちょっとした茶目っ気……」

「アート、ソードスフィア展開」

七本という朧の展開出来る最大数の魔力剣が宙に待機する。

「え、ちよっ、嘘や！？こんなんは朧くんのお株やろ！！？」

「シヨットー！」

「ぎゃああああ！！？」

七本の蒼い剣は盛大にはやてを吹き飛ばし、その行為は、隊舎内で発生した魔力反応を調べにきたフェイトが二人を発見するまで続いていた。

「これではやても反省したよ……多分」

事情を聞いたフェイトは苦笑いしながら言った。

「それならいいんだけどな。ヴィヴィオが変な子に育ったら絶対あの狸の所為だよ」

どこかすつきりした顔の朧。はやての置き中、妙に清々しい笑顔だったが、別に普通のストレス発散や、八つ当たりなどを考えていたわけではないと思いたい。

ちなみに現在ははやてはヴィヴィオの保護者であるのはからお叱りを受けている真つ最中で、もはや魂が抜けかかっている。

そんな感じで今は朧とフェイト、二人で歩いているわけなのだが。

「……なんだかこうして二人で話すのも久しぶりだね」

「そうだな……最近は何んだか慌ただしかったし」

あの戦闘機人達との邂逅以降、捜査や訓練などを一緒にしていたとしても昶とフェイトが二人きりになる機会はなかったのだ。

「一つ……聞いていいかな？」

「なんだよ、改まって？」

聞きづらいのか、少し萎縮しながらもフェイトは決心して聞くことにした。

「昶、研究所の任務から戻ってきて変わった、ううん、なんだか吹っ切れたよね」

「任務前、サキが突然六課へとやって来た時の昶は周りから見ても気持ちにかなりの落差があった。」

それはフェイトが見ていられない程に。だから彼女は最後まで昶を一人で行かせる事に反対したのだ。

だが帰ってきてからは一変、今までの、いつもと同じ昶がそこにいた。フェイトとしても向こうで何があったのかがずっと気になっていた。

「聞いても、いい？」

今までキョトンとしながら聞いていた昶は少し笑いながら口を開いた。

「別に吹っ切れた、ってわけじゃないんだけど。ただ思ったんだよ。

サキは変わってないって」

「変わってない？」

頬をかきながらどこか嬉しそうに語る昗は自分の素直な気持ちを言葉にした。

「ああ、研究所に行つてあの子を見付けた時に思つたんだ」

あの子、というのが今も病院のベッドで寝ている女の子ののだという事をフェイトも理解している。

「サキは昔と変わらない。あの子を助ける為に俺を向かわせたんだつて」

サキが昗と一緒にいた長い時の間、彼女は昗の師匠をしていただけでなく、様々な土地へ行き、人助けをしてきた。彼女はそれを「単なる自己満足」と言っていたが、昗もそんな自己満足に救われて今を生きている。それを今も続けている。昗にはそれだけで充分だった。

「気に入らないから壊してつていうのもアイツらしいけど、俺にはそれの方がしっくりくる。だから今アイツがあそこにいるのには何か理由があるんだよ」

証拠も根拠もなにもない。けど昗は彼女をよく知っている。だから昗はそう信じる事にした。

「……その理由が例え」

「え？」

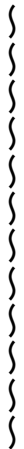
最後の部分を上手く聞き取れなかったフェイトが聞き流すが昶はなんでもないよ、と再び歩を進める。

フェイトもそれに着いていくように歩き始めるが、最後に見せた昶の表情。

「（……一瞬だけだったけど、哀しそうな顔をしてた）」

心の奥底にまだ引つ掛かりがあるんだ。

フェイトにはそうとしか思えなかった。



くれいんぽすと

レ「認めない、認めないよこんなお話！」

翔「いきなりなんなんだよ？確かにヴィヴィオに要らぬ知識を与えちゃったけど……」

レ「翔ちゃんが罰を与える側なんて私は絶対に認めないよ！！」

翔「そつちか！？んなことどうでもいいだろうが！！？」

レ「どうでもいい？何を言ってるの！？重要な事だよ！キ〇・ヤマトがスーパーコーディーターだって事実と同じくらい事実なんだよ！！？」

翔「お前は一体俺をどうしたいんだ！？」

……少々お待ちください

レ「ハア、ハア……ハア……こ、この件に関してはまた後日、だね……」

翔「ハア、またこんな、ハア……事を……やるのかよ、ハア……」

レ「今回はヴィヴィオとおままごととフェイトちゃんとの会話だね」

翔「おままごとはアレだな。少し温いリアルおままごと」

レ「でも6歳時にあんな事言われたら堪ったもんじゃないね……」

翔「自分の子供があんなおままごとをしていたら俺、絶対止めるよ」

レ「それがいいよ……」

翔「物語的にはフェイトとの話が関係してくるんだよな」

レ「うん、いつの間にか立ち直った翔ちゃんのバカみたいな単純な理由。それと未だ残る不安のカケラ。それが今回の話で入れたかった事らしいよ」

翔「俺って悩んでばかりじゃないか？」

レ「作者曰く『元々翔はこの段階でもずっと悩んでいる設定でした。けどそれじゃあ鬱な主人公になりそうだったから、急遽あいう設定に変更。翔には悩んで、悔やんで、苦しんで、乗り越えていつかほしい』だって」



翔「嫌だよ！？俺苦しむ事確定なの！！？」

レ「それが主人公の運命なんだよ！運命と書いて定めと読むんだよ！」

翔「くそ……あぁいいよ、俺が主役やってやんよ！」

レ「やんよwww」

翔「うっさい黙れ！／＼／」

レ「それじゃあ、今回はここまでで！」

翔「では、」

レ「次話にて」

レ・翔『お待ちしております！！！！』

第三十七話 リアルって名前が付いているけど本当にこんな事があるなんて思

どうでしたか？

ホント、書きたい事が上手く纏めれていないような……

この話の補足としては、昴はまだ悩んでいる、ということをお伝えしたかったです。ただあからさまに悩んでいる、というのがなくなっただけなので根本的な解決にはなっていません。

気付いているのも現段階でフェイトとレインのみです。

こんな感じですが、これからも応援していただければ嬉しい限りです！！

では、次話にてお待ちしております！！！！

ああ、オリキヤラ書いてえ〜（笑）

第三十八話 準備（前書き）

どうも、夕です!!

長い間お待たせしました!!

それ程長くない分量ですが完成しました!!

ちきしょう、ある部分がずっと閃かずにその一部だけで6時間以上  
掛けてしまった……

自分の文才のなさに涙が出そうです（泣）

それでは、どうぞ!!!!

## 第三十八話 準備

「ハアアアッ！」

黄昏れ時の訓練場、振り下ろされる白銀の刃を朧は身の丈程の大剣で受けとめる。

シグナムの猛攻は留まることを知らず、咆哮をあげながら朧を追い込んでいく。

「っ」

烈火の将に相応しい怒涛の攻めにただただ防戦一方な朧は苦悶の表情を浮かべるが、

「こ、のオー！」

内側から強化されている右腕で大剣を力の限り薙ぐ。

「!?」

予想を超えた力の反撃にシグナムはたじろぎ一瞬、隙ができた。

「No.4 open!」

朧の声が響く。

『No.4 open』

それに合わせ機械的な声が続く。

朔の左手に握られる一振りの刀。

大剣と日本刀、

変則的な二刀流が出来上がり、攻守が一変した。

「オ……オオオオアアア                    ！！！」

「                    ッ！？」

朔は絶叫しながら二刀を振るう。

豪快な一撃を叩き付ける大剣と鋭く撓う一閃を放つ刀。

撃と戟、

異なる性能を持つ二刀がシグナムのペースを乱す。

「                    っ」

払われた一閃がシグナムの髪を風ぎ冷や汗を垂らす。

だがそれだけでは終わらない。

「ら…… ああああ！」

留まることを知らない神速の連撃を容赦なく叩き込む。

身体を覆う程の剣を素早く振るうその力はあるのか、既に優に百合を越える剣戟にシグナムは鞘をも持ち出し、放たれる剣閃をいなしながら林の中へと突入していく。

「チッ」

舌打ちをしたのは朧。

朧は木々に囲まれた林の中では、大きすぎる大剣は邪魔になると判断して投擲したのだ。

彼は剣戟に混ぜた蹴撃をシグナムの側面へと放ち、距離をあけると大剣を投擲！

「　　っ!？」

大木に打ち付けられたシグナムだが、迫りくる剣先を感じ、身体を振ることで避ける。

轟！と激しい音をたてた大剣は大木を穿ち、刺さる剣を中心にクレーターを作り上げる。

だが朧はそんなものに目も暮れず、十数メートル先の騎士へ真っ直ぐ駆け、懐へ飛び込み孤を描くように刀を振るう。

対するシグナムは既に体勢を立て直し、八相の構えで迎え撃つ！

「ハアアアアッ！」

振り下ろされた剣が朧を捉え、直撃

「ッ!?!」

せずにその姿が塵気楼のように掻き消える。

目を見開き驚きの表情を隠せない。

一体どこに!?!?

思った矢先、

ピリピリとしたナニカを感じた

「ラアッ!?!」

「!?!?!」

それはさながらリピート再生。まるで朧の時間だけが巻き戻されたように再び懐へと現れ、切り掛かる。

完全にタイミングを外され、既に振り下ろしたレヴァンティンでは防御に間に合わない！

「舐め、るな！」

刃がシグナムへと届くその前に彼女は鞘を出現させ刀との間に滑り込ませる。

「っ……………！」

刀と鞘がぶつかり合い火花を散らす。

しかし、体勢を崩しているシグナムは踏ん張りが効かずに吹き飛ばされる。

その僅かな刹那を見逃す昶ではなく、彼は片手で剣をクルリと回し逆手に持ち替えると、力任せに打ち付けた。

「ッ！！？」

シグナムは鞘を自身と大剣の間に割り込ませるが、鞘はミシリと音をたて、身体ごと吹き飛ばされる。

「昶、お前……………」

「どうした？」



「……いや、今何をしたんだ？」

再び剣を構えたシグナムが一度言い淀み、一節を置いて問うた。

ぼやけたように見えた朧が突然消えて、ワントンポ遅れてやってきたのだ。シグナムが不可解に思うのも当然だ。

その問いに朧は刀を鞘へと納めながら答える。

「神煉流陸式、陽炎<sup>かげろう</sup>」

### 神煉流陸式 陽炎

特殊な歩法と身体の揺れを行使し、擬似的な幻影を作り出す戦闘技法。自身の数十センチ程しか離す事が出来ないが、相手のタイミングを狂わせ、自身の正確な位置を悟らせずに無防備な体勢を作り出すことができる。

シグナムは朧の説明を聞き微笑する。

「まだそんなものを隠し持っていたとはな」

「手の内は人より多く持つてるつもりだからな。シグナムが見たことないもんもまだ沢山あるぞ」

サキに弟子入りして十数年、神煉流は勿論、武術、歩法、体捌き

……多くの技術を叩き込まれ、姿を消した二年の間にも他の者から吸収してきた。

未だ翔は成長し続けているのだ。

……身長は別として

「待て！何か失礼なことを言われた気がする！」

「何を言っているんだ？そら、早く構えろ」

「あ、ああ、ごめん」

ナニカ電波を受信したのか叫びだし、シグナムに叱咤される。

「全く、もう少し気を引き締める。なんの為に剣を交えていると思ってる」

「そうだったな」

若干呆れながら言い放たれた言葉に、気を引き締める。

二人が模擬戦をしていたのには理由がある。

公開意見陳述会が迫り、朧やシグナム達にも聖王教会の預言の内容が伝えられていたのだ。

### 管理局システムの崩壊

にわかには信じられない事だが、相手は希代の天才スカリエッティ。何を留意していても不思議ではない。

なので何があっても対向出来るようにと副隊長陣も自分達の訓練に力を入れているのだ。

946

「次の一撃で終わりだ」

自身の相棒を中段で構えながらシグナムが言った。

「ああ、No.4 out、No.3 open」

『No.4 out、No.3 open』

朧の腰からも鞘に入った刀が消え、西洋剣が姿を現す。それを朧は両手で持ち、向かい合う。

いくぞ

どちらが言ったのかはわからない。

ただその一言で二人は駆け出し、

剣を重ねた

人気のない洞窟。その奥の奥に広がる人工的な光はどこか廃工場を連想させるがきちんと整備され機能している。

長い通路は生体ポットが左右に敷き詰められており、その一角で数人が会話していた。

「ウーノ姉えさま、素敵です」

「新しい身体、どう？」

「いいに決まってるわ。貴女達の動作データが活きてるもの」

うつとりするクアットロとパネルを操作しているディエチがウーノに調子を聞く。

それに対してウーノは自身の指の動作を一つ一つ確認していくように動かしていき、満足そうに応える。

「妹達の方も皆順調です」

「No.7セツテ、No.8オットー、No.12デイドも基本動作とIS動作までは完璧」

「他の姉妹達も既に活動中……良いペースね」

妹達の報告に笑みを歪め口端が吊り上げる。

「あ、でもお〜」

クアットロが指を口元へ当てながら、まるで何かを思い出したかのような口調で言う。

「“あの娘”の調整はもう済んだんですかあ？」

クアットロ達がいる更に奥の区画。そこには二人の男女の姿があった。

「そう……予定通り陳述会って事ね」

「ああ、それで君にはこのエリアの一掃後に彼を相手してもらいたいんだが、いいかい？」

数多ものモニターを物凄い速さで操りながら、スカリエッティは後ろにいるサキに問い掛ける。

「構わないわ。けどその時には」

「ああ、わかっているよ。無事に返すことを約束しよう」

「……チッ」

舌打ちするサキ。

それは目の前の狂喜に満ちた変態に対してではなく、不甲斐ない自分自身に。

「そう睨まないでくれ。ちゃんと残りの半分も全てが終わった後にちゃんと解放するよ？それが終われば改めて私達は敵同士となる！フハハハハ、アハハハ、ハハハハハハハ」

発狂したように笑うスカリエッティをほってサキは立ち去ろうとするが、くいつと彼女の方へ顔を捻る。

「ああ、そういえば本当に調整はいいのかい？君の身体は二つの」

「心配される謂れはない。アンタは黙って彼女達を解放する用意でもしてなさい」

サキはスカリエッツィの言葉を遮り、殺気を放つ。

尋常ならざる殺気を前に堪えもしない彼は言葉を続ける。

「しかし君も面倒な性格をしている。君の力なら今ここで私たち全員を殺す事も簡単だろうに」

「……くだらないロストロギアまで使ってそうさせたのはアンタでしょ」

目だけで人を殺せるのなら彼女の瞳は目の前の男を既に十は殺している。

「君のような強者、私では到底敵わないからね。これくらいは仕方ないさ」

「……………」

感情のコントロールが得意なサキだが彼女はそれを隠そうとはしない。ムダだとわかっているからだ。

そうして彼女は踵を返しその場を後にする。

「ドクタク、今サキっちがこ〜んな目をしてどっか行ったっすよ」



「……」

「やあ、ウエンディ、ノーヴェ」

サキと入れ替わりでやってきたのは手で吊り目を作っているNo. 11、ウエンディと無言でいるNo. 9、ノーヴェ。ウエンディはどうかサキの真似をしているようだ。

「ホント、ドクターはサキっちに嫌われてるっすよね」

「私は随分と嫌われているからね。悲しいよ」

やれやれと肩をすくめながらスカリエッティは言う。

「ドクター」

「おや、ウーノ。もう調整は済んだのかい？」

「はい」

「それはもう完璧です」

身体の調整が終了したのだろう、ウーノやクアットロ達がやってきた。

「ドクター？」

「なんだい、クアットロ？」

「うふふ、さっきウーノ姉さまから聞いたんですけどお、あの娘”がもう最終調整に入ってるんですかあ？」

クアットロは指を組んだ手を顔の横まで持って行き、その顔は満面の笑みを浮かべている。

「ああ、初めての試みだったからね、少々不安だったが概ね成功しているよ。今はガジェット相手に調整中だ。見てみるかい？」

そう言ってスカリエッティがひとつのモニターを展開させる。

そこには、

数多の残骸を撒き散らす“白い閃光”がそこにあつた。

「な、なんなんっすかこれ……？」

「いやあ〜ん。すげ〜い」

「想像以上ですね」

「ああ」

ナンバーズたちは画面の中で繰り広げられている光景に目を奪われ、その姿は驚きを見せる者、笑みを見せる者と様々だ。

「……これをコイツ一人で？」

だんまりを決め込んでいたノーヴェも目を見開き、無意識に呟いた。

五十は軽くあつたガジェットを白の光は次々と塵芥へと変えていく。

「解析に随分時間が掛かったがなんとかアレを使用出来るようになったよ。ちょうど終わったみたいだね」

スカリエッティが再び画面へと目を向ける。その瞳に映るのは黒髪をひとつに纏めた一人の少女。

「最終調整は終了だ。何か違和感はないかい？」

「大丈夫です」

スカリエッティがモニターの向こうへと話掛けると、少女は淡泊に答えた。

「それじゃあこちらに戻ってきてくれるかい？」

『わかりました』

感情の籠らない声のままモニターは消え去る。

「あれが……私たちの妹……？」

ポツリと呟くノーヴェを余所にスカリエッティは大きく腕を挙げる。

「祭への準備は整いつつある。ひとつ大きな花火を打ち上げようじゃないか！アハハハ、フハハハハ、アハハ、アハハハハハ」

狂気的な表情に狂喜的な声。その声は洞窟の中へどこまでも響いていく。

「ハハハハハハハ、間違いなく！素晴らしく楽しいひと時になる！アハハハハハハ、ハハハハハハハ！」

『お疲れ〜』

「おお……サンキュー」

木にもたれ掛かるようにして座る朧にタオルを渡しそのまま肩にこしかかるレイン。

既に日は暮れて、夜風が二人の髪を風ぐ。

「今日のデスクはどうだったんだ？」

『いつも通りだよ。朧ちゃんが目を通さないといけない物はちゃん

と分けてるから明日確認してね』

「え〜、やだよ。レインが代わりに仕上げといてくれよ」

全てを丸投げしようとする名ばかり副隊長。そんな翔を小さなお姉さんは腰に手を当てながら叱り付ける。

『ダメ そんな事だからいつまで経っても出来ないの。横で教えてあげるから一緒にやるの!』

ここのところは本当に最低限のデスクワークしかしていなかった翔。周りは殆どがもう諦めてしまっている。

「ん〜でもなあ〜」

『フェイトちゃんに言い付けるよ』

「やだなあ〜、ちゃんとやるって」

フェイトちゃんの名前、一言で素直になるなら始めからそうしてよ

レインは心でそう思ったが、言っても仕方ないと思い口には出さなかった。

『……それで模擬戦、勝てたの？』

「負けたよ。撃ち合ってアートを折られて終了」

朧はさらりと言った。

『……』

「……」

二人の間に会話は無い。

朧にとって一番長い付き合いのレイン。

当然ただタオルを持ってきてくれただけでない事ぐらい理解している。

「……最後に」

朧がぼつりと口を開く。

「最後に言われたよ。俺の剣には迷いがあるって」

『……』

「陽炎も俺に迷いがなかったら反応が間に合わないで俺が勝ってただろうって言った」

淡々と語られるそれをレインは静かに聞く。

「迷ってる俺には負けないうて言われたよ」

はは、と昗は軽く笑う。

これを人は空元気と言う。

『…………… 確実に出てくるよ』

誰が、とは言わない。

『今のままじゃ絶対に勝てないよ』

「わかってる……………」

もとより実力差は歴然、ましてや迷いを抱えたままでは勝てるわけがない。

『昗ちゃんは死ぬ気なの？』

「……………」

『ここで無言は止めて欲しいなあ〜って』

目を伏せる昗の正面へレインはふわふわと飛んでいく。

『昗ちゃん、こっち見て』

目の前から聞こえる声に従いながら、ゆっくりと顔をあげる。



『覚えてるかな？前に私、聞いたよね、翔ちゃんは何を望むのかって』

忘れられるわけがない。

垣間見たレインの姿。

いつもと違う口調、想像を絶する存在感。

思い出すだけで体中から冷や汗が流れ出す。

『その言葉をね、もう一度よく考えてみてほしいの』

小さな身体の小さな瞳がしっかりと翔の情けない顔を捉える。

『その答えを見付けられたら、きっとそれが全てに繋がるから』

風になびく髪を抑えながらレインは笑みを浮かべる。

『だから考えてみて。間違えないように』

優しく、

悲しげに、

『……決して、間違えないように』

微笑んでいた。

~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「みんな、おっひさ〜」

翔「相変わらず軽いな、お前は……」

レ「そんな事気にしない気にしない。久しぶりなんだからもっとデ  
ンション上げてごうよ」

翔「そうだな！それじゃあやるか！〜」

レ「でも話す内容が特にないんだよね」

ズコー〜！〜！

翔「なんだよそれ！？」

レ「だってゲストだっていないし」

翔「それはそうだけど……で、でも本編でいろいろあったたる！俺の新しい技とか、謎の新キャラとか！」

レ「あゝ、あつたね。確かそんなの」

翔「お前絶対やる気ないだろ！？」

レ「む、失礼な。私程やる気のあるデバイスはいないよ？例えるなら八九寺真宵ちゃんと会話してる時の阿良々木くん並だね」

翔「うん、例えは悪いがレインがやる気だという事はわかった！」

レ「当たり前だよ、あささぎちゃん」

翔「俺の名前は浅儀だ。しかもいつもは翔ちゃんだろ」

レ「失礼。噛みました」

翔「違う、わざとだ……」

レ「噛みまみた」

翔「わざとじゃないっ！？」

レ「鹿島見た」

翔「アントラーズか！？赤いユニホームか！？」

レ「……………」

翔「……………」

レ「そ、それじゃあ本編に行こうか！」

翔「お、おー！（コイツ全部なかった事にしやがった！？）」

レ「今回は3つのシーンに分けられてるね」

翔「シグナムとの模擬戦、スカリエツティ陣営、レインとの会話、  
だな」

レ「今回戦闘で登場した新しいものはアートのNo.4の日本刀と  
神煉流陸式、陽炎だね」

翔「アートはこれで全部出揃った事になるかな」

No.1 短剣

No.2 短剣

No.3 西洋剣

No.4 日本刀

No.5 ナイフ

No.6 大剣

レ「ちなみにNo.1とNo.2の短剣はそんなに短くはないよ？  
だいたい小刀くらいの長さかな」

翔「陽炎については本編で話した通りって事で。何か質問があれば  
ご一報を」

レ「この戦闘の内容も本当はもっと激しいものだったらしいよ」

翔「そうなんだ？」

レ「シグナムが紫電一閃やら飛竜一閃やらもつと大暴れの予定で、  
翔ちゃんにももつと説教する感じだったんだって」

翔「……内容変更になってよかった」

レ「結局負けたけどね」

翔「それは言わない約束で……」

レ「それではスカリエッティ陣営をちよつと飛ばして先に私との会  
話シーンを」

翔「レイン、完全にお姉さんしてたよな」

レ「これからはおねーさまと呼んでもいいよ」

翔「絶対ヤダ」

レ「意地悪な翔ちゃんは放置して、解説に入ります。まずはシグ

ナムが朧ちゃんに言ったという台詞「

朧「迷いだね」

レ「うん、シグナムは戦闘中から朧ちゃんに違和感を感じてたの。顕著に出てるのが言い淀んだとこだね」

朧「迷いがなかったら俺が勝ってたとも言ってたな」

レ「朧ちゃんの新技、陽炎だね。あれの二戟目、まあ、一戟しか放ってないんだけど、アレは朧ちゃんがうじうじ迷ってるから剣気やら気配やらを完全にコントロール出来ずにシグナムに察知されたから彼女は鞘での防御が間に合ったんだね」

朧「やっぱり感情のコントロールは大切って事だな」

レ「お次は私の言葉、なんだけどここはスルーな方向で」

朧「なんで？」

レ「いろいろ放り込んだからね」

朧「まあ……確かにここは読者の皆さんそれぞれに考えてもらった方がいいかな」

レ「では最後にスカリエツティ陣営！」

朧「注目はなんと言ってもあの新キャラだな。ノーヴェの言葉から察するに戦闘機人っぽいけど」

レ「さあね、そこはこれからのお楽しみだね」

翔「今回はこの辺りかな」

レ「そうだね、それでは、」

レ・翔『次話にてお待ちしております！！！！』



### 第三十八話 準備（後書き）

どうでしたか？

これで次回からは原作の【その日、機動六課】に突入です！

オリ要素もいれるつもりなので楽しみにしていて下さい！！

誤字脱字、質問、感想、提案、ぶっちゃけどんな内容でもお待ちします（笑）

では、次話にてお待ちしております！！！！

第三十九話 その日、機動六課 (前) (前書き)

どうも、夕です!!

内容がどうにも纏まらなくて試行錯誤な毎日ですが、今回もなんとか出来上がりました!!

あ、今回は【れいんぽすと】はお休みです。

では、どござ!!!!

### 第三十九話 その日、機動六課（前）

轟音をたてながら離陸していくへりを翔は見上げる。

いよいよ公開意見陳述会が明日に迫り、六課も警備任務に着くこととなったので、前線部隊のうちフェイト、シグナム、翔以外のメンバーが飛び去ったへりに乗り本局へ先行することとなった。

見送りに来たのは残った前線メンバーに加えて共に明日出勤するはやとレイン、なのはの見送りにきたヴィヴィオとその付き添いであるアイナ。

なのはが乗り込む前に少々ぐずったヴィヴィオだったが、翔の説得となのはの『明日の夜に戻って来たらキャラメルミルクを作つてあげる』という約束で、ヴィヴィオもそれに納得した。

「そろそろ戻ろうか」

「うん」

へりが見えなくなったところで翔はヴィヴィオの手を繋ぎながら踵を返し中へと入っていく。

「しよーおにーちゃんもね」

「ん？」

「しよーおにーちゃんもキャラメルミルク一緒に飲もーね？」

「マジ？」

手を繋なく先から聞こえる無邪気な声に初は少し顔を引き攣らせる。

「俺あの甘つたるさが“アレ”を思い出すから苦手なんだけど……」

頭に広がったのはひとつの抹茶。苦々しさ満載のそれに落とされる数多もの角砂糖。ポツン、ポツンと音をたてながら甘味という桁違いの味に浸食されていくあの脅威……

アレを飲んだ後は脱衣所にはいけないわ……

角砂糖だけじゃなくてミルクも入れるらしいわよ……

一日摂取カロリーを大きく超える禁忌のお魔茶（字は仕様です）

というより、あんなもん飲む気になれねえよ！？

そんな数々の声が飛び交い、畏怖の念が込められ命名された『リンディ茶』。

……話が逸れたが、翔は甘い飲み物はリンディ茶の恐怖イメージが付き纏うのであまり好きになれないのだ。

「むうー」

膨れながらもじっと睨みつけるヴィヴィオだが、6才程の少女が睨みを利かせたところで怖くもなんともない。ただただ可愛いだけだ。

『良いじゃん。一緒に飲んであげなよ』

そんな恐ろしい事を傍らで言うやつがいなければ。

「お前……人事だと思って言ってるだろ」

翔は自分の肩に腰を掛ける年がら年中着物を着込む少女に溜息混じりに反論した。

『うん、だって私は嫌いじゃないもん。キャラメルミルク。おいしいじゃん』

ねー、と同じ意見同士で笑みを交わす。

前々から思ってたけど、レインとヴィヴィオってホントに仲良いやな……

ちびっこ同士で何か共通した意思を持っているのかこの二人、姉

妹や親友と言ったレベルで仲が良いのだ。

そんな様子を見てもう一度、今度は少し長めに溜息をつき、

「たくつ……一杯だけだからな。あとはコーヒーを飲むからな」

「うん」

先程までのむすつとした顔が嘘みたいに輝く笑顔を朔へと向ける  
ヴィヴィオ。

朔もその表情に微笑ましいものを感じ、軽い笑みでかえす。

「ヴィヴィオ、そろそろお部屋にもどろっか？」

「うん、フェイトママ」

話が一段落したのを見計らいフェイトがヴィヴィオへ話し掛ける。  
そろそろお子ちゃまは睡眠の時間帯が迫っているからだ。

「それじゃあ、朔また明日。寝坊したらダメだからね」

『大丈夫だよフェイトちゃん。私がちゃんとたたき起こすから』

お前らは俺の母親か!?

そうツツコミかけたが、どうせ逆に言い負かされる展開が見えた  
ので声には出さない。

えへん、と胸を張るレインだが朔は無視する。無視したら無視だ。

「じゃあ翔、レイン、お休み」

「おやすみ」

『お休み』

「ああ、お休み」

『まあまだ九時半過ぎだから寝ないけどね』

「うっさいよお前!..?」

「明日はFW達と外の警備って事になるな」

「だね。フェイトちゃんやなのはちゃんは中で警備、シグナムははやてちゃんの護衛で入ることになってるから私たちとヴィータちゃん、あとリインちゃんが頑張らないと」

自室へと戻ってきた昗はレインと共に明日の警備についての最終確認を行っていた。

「聖王教会の騎士カリム。彼女の予言が正しければ恐らく明日やって来るテロリスト。以前の行動から考えて十中八九、スカリエツテイたちだろうね」

部屋に作られたオーダーメイドの椅子に座りながら、レインは自身の考察を述べていく。普段の彼女から伝わるおちゃらけた雰囲気は微塵も感じられない。

「だろうな。だとしたら敵の戦力はガジェット、戦闘機人、召喚師の女の子、お前と同じ融合騎にゼストっておっちゃん」

それと、と昗は一拍置いてその名を口にする。

「それとサキだな……」

「昗ちゃん、これだけは聞いておくよ」

顔を少し歪めながら言った昗にレインは真剣な顔で問うた。



『死ぬつもりはないんだよね?』

もしもそんな気持ちで任務につくつもりなら、なにが何でも行かせないし、誰にも文句は言わせない。

彼女の表情からはそう発せられているように見て取れた。

そんな問いに朔は静かに、ゆっくりと自身の気持ちを吐き出す。

「……死ぬつもりは、ない」

本当か嘘か。

実際のところは朔本人にしかわからない。いや、本人さえわかっていないのかも知れない。

そんな真偽がハッキリしない返答だったにも関わらず、レインはそっか、と満足したのか笑みをこぼした。

『なら、私が朔ちゃんを守ってみせるから。一緒に頑張ろうね』

守ってみせるから

その言葉にチクリとなにか胸に刺すような痛みを感じたが、そんなことは露知らず。レインは明日の警備について話を戻し始めた。

『本局の防御は一見鉄壁の要塞に見える。けどこれは簡単に崩す事が出来る』

「……力に偏見がある」

ぼつりと朧が呟く。

『そう。あそこは対魔導師用に考えたら強固な要塞だと思つよ。それでも“その程度”なんだけど……まあ、それは今は置いて……』

どこか含みのある台詞が含まれているが、レインは気にせず話を続ける。

『結局はそれだけなんだよ。あそこは魔法っていう手段に頼り過ぎてる。ガジェットのアMFとか使われたら殆どの局員はひとたまりもないね。それに対抗する為に六課が創設されたくらいだしね』

魔法は便利なものだ。しかし、それはあくまで手段のひとつでしかなく、当然それが通用しない条件というものも存在する。

「そうは言つたつてガジェットひとつひとつのアMFは高がしれてるだろ。本局のセキュリティもある。アイツらはそれをどうやってん、通信？」

襲撃手段を真面目に考えていると、突然朧に映像通信がやってきた。朧は慣れた手つきでモニターを出現させる。

『はあ〜い』

「リンディさん？」

映っていたのは緑色の長い髪をしたリンディ・ハラウン。フェイトの義母で以前は提督として巡行艦で指揮官をしていたが今では艦長職を退き、今では管理局の総務統括官を務める。

朧もハラウン家に居候していた身なので大変お世話になったのだ。

「お久しぶりです。お元気でしたか？」

「本つ当に久しぶりね。この間も近くまで来たのに会いに来てくれなかったし」

「いや、あの時は任務だったから……はは、ははは」

半眼で睨まれ朧は苦笑しながら視線を逸らす。

この人に勝てる気がしないんだよなあ

頭を掻きながらそんな事を考える。

「リンディさん、久しぶり〜」

「レインも久しぶり。二人で話でもしていたのかしら？」

「うん。明日の警備についての最終確認をちょっとね」

「邪魔しちゃった？」

「そんな事ないですよ。それよりも突然どうしたんですか？」

一年以上連絡を取ってなかったリンディからの通信に少し驚きながら、昶は笑みをこぼしながら尋ねた。

『いやね、さつきまでフェイトとヴィヴィオと通信で話していたんだけど、急に昶くんの顔がみたいなあ〜って思ってた』

「ははは……それはありがとうございます……」

本当に読めない人だ……

昶は再び苦笑する。

『それでね、フェイトや昶くんとも会いたいから私も明日出席しようかなって思ったんだけど』

「やめた方がいいですよ。俺たちは警備任務だから会えないです」

『フェイトからもそう言われたのよねえ……』

顔に手を当て困った、とでも言うようにリンディは溜息をつく。そんな彼女にレインが付け加えるように言った。

『それに予言の事もあるし、リンディさんは来ない方がいいよ』

『私もクロノやアコースくんからの報告書で読んだわ。……昶くん、無理しちゃダメよ』

「ええ、善処しますよ」

リンディの顔に先程までとは違う表情が現れ、それに笑みを返し

て答える。

『……………』

そんな翔の姿を見て、なにかを感じたのかリンディは翔くん、と名を呼んだ。

『事件が一段落したらこっちに顔を出しなさいね？貴方の実家はハラウン家なんだから』

ニツコリと笑い掛けながら言った。

それはまるで母親のように。

優しく、

温かく、

慈愛に満ちた表情で、

母親か……………

翔はポツリと呟いた。

母親どころか父親すら知らない朧に親というのものがどんなものなのかはわからない。サキも親代わりだったが実際、母親というより姉、と言った方がしっくりとくる。

こんな感じなのかな……

なんとなくそう思った。

日付は既に変わって、深夜の森は静まり返る。

その上空で闇夜を駆ける影がひとつ。無造作に纏められた黒髪を

風が凧ぐ。

『外での飛行はどう?』

「問題ありませんウーノ姉さま。これなら空戦も十分に可能です」

『見つからないようにしなさい。発見されたら面倒よ』

「心得てます」

ウーノの心配に少女はすぐに頷く。彼女が見つめる先に見えるのは管理局地上本部。

少女はそこで立ち止まり、ただただ辺りを眺めているだけ。

『貴女の希望で飛行テストを許可したけど、一体なにがしたかったの?』

作戦開始まで二十四時間を切り、細かい作業が残ったウーノを除き、他のナンバーズは時間を待つばかりだったのだが、一番下の妹が突然外に出たいと言い出したのだ。

ウーノは作戦前に余計な問題が増える事を危惧したが、起動してから日も浅く、戦闘訓練と違い飛行訓練は限られた時間しか取れなかったこともあり、スカリエッティの了承を得て彼女は外の夜空を散歩することが出来た。

だがまだ彼女がそんなことを突然言い出した理由を知らない。

ウーノに尋ねられ、彼女はポツリと答えはじめた。

「……確かめたかったです」

『……確かめたかった？』

「はい、けど残念です。“どちらも”いないようです」

残念だと答える顔には全く変化が見られない。黒髪黒目の美しい容姿だが、その変化のなさが彼女の不気味さを更に引き立てる。

『そう、なら早く帰還しなさい』

戻るように指示を受け、自分たちの隠れ家へと飛び去

「……すみませんウーノ姉さま。発見されました」

「君はこんな所でなにをしている。所属と部隊を言え、ちゃんと飛行許可は取っているのか？」

声を掛けてきたのはBJを着た一人の男性。飛んでいるところから見るに恐らく、警邏に出っていた航空武装隊の局員なのだろう。

「どうしますか？」

『全く……始末なさい』

深く溜息をつきながら指示を飛ばす。

「おい、聞いて え？」



次の瞬間には男の右腕は無くなっていた。

「　　ガアアツ！！？」

腕があつたはずの場所からは激しく血飛沫が舞う。

いつの間にか少女の手に握られていた身の丈程の大剣は赤く染まっている。

「すみません。貴方に恨みはないんですが、今見つかるわけにはいきませんので」

死んでください

少女は剣を振るった。

現れたのは白刃。

空を切るように走るソレは、

容赦なく男の身体を斬り裂いた。



「面倒な仕事が増えたわね」

『すみません。それで私は帰還すれば？』

「ええ、今度こそ見付からないようにね」

『わかりました』

通信が切れる。

「全くあの娘は……でも………ふふ」

ウーノは文字通りいなくなった局員の穴をばれないように細工するのを面倒だと感じながらも自身の妹の完成度に満足していた。

「何を考えているのかわからないところもあるけど、IS、魔力、フレーム、固有武装、その他全て問題なし。いい感じね」

コンソールを叩き、口端を吊り上げながらウーノは笑う。新しい

試みで造られた少女は他の姉妹たちとは身体の造りが全く違う。上手くいったのが奇跡のような品物なのだ。

「あの娘もただ会いたかっただけなんて。どうせ明日には“二人とも”会うことになるのは知っているでしょうに」

誰もいない部屋で一人笑う。

「ドクターの夢の実現まで、あともう少し……」

彼女は小さく笑う。

第三十九話 その日、機動六課 (前) (後書き)

どうでしたか？

なんだかイロイロやっちゃった感は正直否めませんが、後悔はしてません！……多分(笑)

次はきちんと戦闘書けるかなあ……

でも実際どう組み立てようかあまり決めてないんですよ……(汗)

まあどうにかなるさ( 現実逃避マテ

質問や意見などがあれば言ってくださいね。

あと、昗やレインの出張依頼や【れいんぽすと】の出演希望などもお待ちしております！！

あと地味にまだ募集しているのが皆さん忘れていらっしやるだろう。昗が助けたちびっ子です。現在候補が2つ挙がっていますがまだまだ募集中なのでよろしくお願いします！！

あゝ、そういうえば登場した新キャラも名前決めてないや。

なのでよろしければそちらも考えていただければ幸いです。

名前2つはメッセージでお願いします！！

では、次話にてお待ちしております！！！！

第四十話 その日、機動六課（中）（前書き）

どうも、夕です！！

今回は本編が少し短いです。

しかし、【れいんぼすと】が長い（笑）

どうしてこうなった？

それと少し試験的な意味も込めて今までとカッコを少し変更しています。

あくまでも試験的に。

今まで

デバイス：『

今回

デバイス：【

なのでまた戻すかもしれませんが、なにかあれば言ってください。

では、どうぞ！！！！

## 第四十話 その日、機動六課（中）

公開意見陳述会当日。

前日より地上本部の周りは既に数多くの魔導師がデバイスを持ち、警備に勤しんでいる。

何も起こるはずがない

そう思っている警備隊員たちだが、ピリピリとした雰囲気は確実に流れている。

そんな雰囲気を出している一人、頭に着物マスケットガールを乗せた黒いチャージャーがトレードマークの局員もきちんと警備をし、辺りを徘徊していた。

【結局、昨日はあのまま話はうやむやになっちゃったけど】

朧の髪の上からひよこつと顔を出しながら口を開く。

【スカリエッティの攻め口がわからないんだよね】

「ああ、地上本部の壊滅ってどういうことなんだ……？」

そう、予言では地上本部壊滅と詠まれたが実際にどうやって実行に移されるのかわかっていない。

時間、動機、手口、全くわからないのだ。

【ここまで情報が少ないと厳しいね……】

後手に回るしかないこの状況に眉間に皺を寄せる。

「とにかく、今は無事に終わることを祈るしかないな」

そう言って昶は自身が握る物を見つめる。

握られているのは金色のデバイス。中の警備に向かったフェイトはデバイスの持ち込みが禁止されている為に預かっているのだ。

他に中にいるなのはたちのレイジングハートやレヴァンティンなどもスバルやヴィータたちが預かっている。

それはすぐに動けるのは外の連中だけだということを意味する。

昶やヴィータだけでなく、FWの四人たちにもその負担が大きいのしかかっているのだ。

「ちっ……来るならこいよ」

投げやりな物言いで昶はそう呟いた。



陳述会が開始されてから四時間が経った。

辺りは既に黄昏れ時。

今も意見が交わされている地上本部を見つめる影。

【連中の尻馬に乗るのはどうも気が進まねえけど】

ローブを纏った男の横で手の平サイズの赤毛の少女、アギトは腕を組みながら不服そうな顔をしている。

「それでも、貴重か機会ではある。ここで、全てが片付くならそれに越したことはない」

ローブの男、ゼストが気にしない様子でそれに答えて彼女もまあね、と同意するがそのまま自身の心中を吐露した。

【つうか、私はルーラーが心配だ。大丈夫かなあ、あの子？】

思い浮かぶのは一人の少女。アギトという名前をくれたもう一人の恩人。

アギトにとってゼストと同じくらい大切な、守るべき対象の女の子。

「心配ならルーテシアに付いてやればいい」

【ッ！！？】

ゼストの冷静な言葉にアギトは少しながら膨れっ面で反論する。

【今回に関しちや旦那の事も心配なんだよ！ルーラーにはまだ虫たちやガリユールがいるけど、旦那は一人じゃんか】

召喚師であるルーテシアにはガリユールを初めとする家族とも言える多くの虫たちが存在する。

いざとなれば“切り札”だって存在する。

しかし、ゼストは一人。

もちろんアギトとて彼の實力を疑っているわけではない。オーバース以上の實力を持つゼストだ、滅多なことで負けることなどない。

しかし今回彼が乗り込む場所は敵の本拠地。

それに旦那の身体は……

様々な想いを胸にしまい、彼女は笑みを浮かべながら拳を胸にあてる。

【旦那の目的はあのヒゲ親父なんだろう？そこまでは私が付いていく。旦那の事、守ってあげるよ】

「……お前の自由だ。好きにしろ」

淡泊なゼストの反応に古きベルカの融合騎は笑い掛けながら答えた。

【するとまさ、旦那は私の恩人だからな】

『お話し中失礼』

と、突然二人の目の前に映像通信が繋がれる。

「ん、」

【なんだサキじゃん】

モニターの中には黒髪の女性、サキ・クルス。

『はあ〜い』

手を振りながらサキはいつものように笑う。

「どうしたのだ？」

ゼストが言った。

『何？用がなきゃ連絡しちやいけない？』

おやおよ、と目に手をやり泣いた振りをするサキ。

もう一刻もしないうちに作戦開始にも関わらず相も変わらず緊張感のカケラもない。

「それで、どうしたのだ」

スルー。

ゼストは気にしないことに決めたらしい。それをすぐに理解したサキもちえ、とふて腐れながらも本題に入ることしにした。

『貴方の目的は地上本部なんですよ？とりあえずここら一帯の魔導師には邪魔させないから本部側から来た魔導師にだけ注意して』

【サキは旦那を心配してくれるのか？】

『ん？別にそういうわけじゃないんだけど、向こうにはSランク並の子もいるからね。まあアンタならどうにかできると思うけど』

【あつたりまえだ！旦那には私が付いてるんだからな】

いつものように、なんでもないような表情で言い放つサキと便乗するような形でアギトはぎゅっと拳を握る。

「わざわざ済まないな、お前にも目的があるのだろうか？」

その様子を見てゼストも礼を言う。ゼストにはゼストの、サキにはサキの目的があることをしっかりと理解しているのだ。

『別にアンタのためじゃないわよ。アンタの行動も私のプラスになる、ただそれだけ。それじゃあほどほどに頑張りなさい』

そう言い残し通信は切れた。自分本位の行動の結果だと言いつけるサキだが、そんな彼女の言葉にゼストの顔に軽く笑みがこぼれた。

「いくぞ、アギト」

【おうよ！旦那もやる気だね！】

あまり感情を見せることのないゼストが微笑したことにアギトも気合いが入る。

「ああ、些かやり遂げる理由が増えたのでな」

一人と一騎は大きくそびえ立つ建物へと向かっていく。

「ナンバーズ、各位所定の位置に配置完了」

「お嬢とゼスト殿、サキ殿も所定の位置に着かれた」

「後はGOサインを待つだけです」

ウーノ、トーレ、クアットロの順で確認を済ませていく。

ウーノがパネルを操作する後ろで、椅子にもたれ掛かりながらス  
カリエツティは静かに笑う。

「ふふふふふふ、この手で世界の歴史を変える瞬間だ」

多くの言葉はいらない。

ただただ狂喜に満ちたその顔が、見開いた瞳、吊り上がった口元  
が全てを物語る。

「さあ、始めよう!」

スカリエツティの聲が高らかに響き渡る。

『ミッション、スタート!』

「じつして悪夢の日は始まった。」

辺りに警報が鳴り響く。

「どうしたんだ!？」

【念話が使えない!通信システムにクラッキングされてる!】

突然のアラートに連絡を取ろうとするが中とは繋がらない。

そしてそのすぐに大きな爆音。

「今度はなんだ!？」

【わからない!でも確実になにかが起こってる!?!】



事態を正確に飲み込めていない一人だがすぐにB Jを展開し、本部へと向かおうとする。

しかし、

「なっ!?!」

中へと入るシャッターが全て閉まってしまった。

仕方がないのでシャッターを破壊しようと画策するが、

「ッ!?!ガジェット!?!?!」

辺り全体に紫の魔法陣が展開され、?型や?型のガジェットが次々と現れる。

「レイン!これをエリオたちに渡して来てくれ!」

昗はポケットからバルディッシュを取り出しレインへと渡す。

「こいつをフェイトに届けさせてくれ!」

【わかった!すぐ戻るから!】

どんどんとガジェットが現れるこの状態を放っておくわけにはいかない。

周りの局員ではガジェットを相手には出来ないなので昗が残らなければならぬのだ。

レインが飛び去るのを確認し、朧は叫ぶ。

「アート！No.1、2 open！」

【No.1、2 open】

両手に現れる二刀の小太刀。

「ハアアアアッ！」

数多ものビームの雨をくぐり抜け、一機、二機、三機と次々と破壊していく。

こいつら一体何体いるんだよ!?

蒼い斬撃を放ちながらも朧の顔は険しいものへとなっていく。

（遠くからも聞こえる爆音に衝撃。恐らくここだけでなく他の場所も襲撃されてる!）

だが本部の周りには障壁が張られており滅多なことでは破壊され侵入されることはない。

しかしそこに朧はナニカ引っ掛かりを覚えた。

（破壊して……侵入……?）

そしてガラクタへと変えたガジェットの数に二十に差し掛かるうとして、朧はハッとした。

「そうか！この数なら！」

敵の狙いは大量のガジェットによる本部の包囲。

障壁があつたとしても大量のガジェットが発生させるAMFによつて中の警備に当たつていた局員は魔力が結合出来ず無抵抗。周りの局員も殆どが対応出来ない。

完全にやられた！

心中で叫ぶ翔。

【翔ちゃん！】

後方から自分を呼ぶ声がした。翔は振り向かずそのまま会話を始める。

「レイン、バルディッシュは！？」

【渡したよ！他もガジェットだらけ、こいつらの狙いつて……】

「ああ、わかつてる」

二人は既にこのガジェットたちの狙いを理解している。

翔らはすぐにユニゾンし、辺りのあらかたのガジェットを撃退す

ると動かしているであろう指揮官を捜しに駆ける。

「倒れてる局員たちは大丈夫なのか!？」

【ガスにやられてるけど、麻痺性だから命には別状ないよ!】

別状ない、というレインの言葉にホッと溜息をつく朔。しかし、すぐにまた臨戦態勢の表情へと変えていく。

ガジェットを破壊しつつ急ぎ移動している最中、レインがナニかに反応した。

【この先でかなりの魔力反応がある!これって】

朔は身体に込める魔力を強め、速度を上げる。

「こんなものなんですか？」

少女は一人呟く。

彼女の右手にはとても少女が持つものとは思えない大きな剣から赤い液体が滴り落ちる。

辺りに転がるのは魔導師たち。

それも一人二人ではない。十は優に超えている。

ある者は片腕がなく、またある者は足がなく、そしてまたある者は命がない。

しかしこの惨劇を作り出した張本人はそんなモノに最早見向きもしない。

「うう……ああ……」

まだ生きている局員はうめき声をあげるが、少女は気にしない。

「こ……この……やる」

頭から血を流す局員が倒れながらも渾身の力を込めた魔力弾を放つ。

しかしそれも白い障壁によって阻まれた。

「く……そ……」

男はそのまま気を失ってしまった。

少女は抵抗を見せた男にさえ見向きもしない。

死んでいても生きていても、彼女にとってどちらでもいいのだ。

「やっぱりあの二人でないと……」

少女はその場を後にしようとするが、

「ま、待て！」

「お、お前を殺人の容疑で逮捕する」

「大人しくしろ！」

大量の局員が少女を囲む。

それでも彼女は全く動じない。

「邪魔なんですが……まあ、準備運動にはなりますか……」

その瞬間、

纏めた黒髪をなびかせた少女は消えた。

少なくとも局員からはそう見えた。

数分後にはこの場所に立つものは誰もいなかった。

「あら、遅かったわね」

「サキ……」

そして二人は再会した。







~~~~~

〜れいんぽすと〜

レ「前回がお休みだった件について」

翔「なんでも作者が『メ切りもかなり過ぎちゃってるし、今回はメンドイからいいや』ってなくなったらしい」

?「ちゃんとやりなさいよ」

轟

翔「がはあっ!!!?!」

レ「いきなりのボディブロー……さすがだね」

?「これくらい当然よ」

翔「俺のせい……じゃ……ない……のに……」

?「男が言い訳しない!」

暴

翔「ぶぎゃあ!!?」

レ「『暴』って……」

?「ふう、スッキリしたわ」

翔「……」

レ「ゲスト紹介の前に既に翔ちゃんが力尽きた……まあいつか」

?「それじゃあ紹介してもらっていいかしら?」

レ「おっけ、それじゃあ紹介するよ!泣かぬなら、『烈破爆砕撃!』で泣かせてやろう、カナンをね で、お馴染みの一之瀬祐希奈ちゃん!魔法少女リリカルヴィヴィオより登場です!」

翔「いや、そんなの初めて聞いたからな!?勝手に捏造するなよ!?!?」

祐「うっさい!」

蹴

翔「べふ!」

レ「見事な膝蹴りが顎に決まったね」

翔「……」

祐「なんだか歯ごたえないわね」

レ「まあ、カナンくん程打たれ強いわけじゃないからね」

翔「……………」

祐「起きないじゃない」

レ「うん」

祐「ならこつね！烈破爆碎拳！」

撃

翔「うおおい！！？」

祐「起きてるならさっさと起きなさいよ」

翔「本当に気を失ってたんだよ！」

レ「身の危険を感じての回避行動が上手くなったね」

翔「嬉しくない！」

祐「感謝しなさいよ？」

翔「…………泣いていいのか？」

祐「ダメに決まってるじゃない」

翔「一応、俺って一之瀬の」

祐「祐希奈よ」

翔「……祐希奈の年上だよな？」

祐「そうね。翔は19なんでしょ？なら私の方が断然年下ね」

翔「……何故こんなにも主導権を握られている？」

祐「それはね……」

レ「それは？」

祐「私が神だからよ！」

翔「ここでは違う！そっちの時と一緒にしたにするなよ！！？」

レ「でもここでも補正が入るから神……とまでは言えないけど確実に翔ちゃんよりはずっと上の位置だよ」

翔「はい？」

祐「つまり翔は私に服従ってことね」

翔「……いや、つまりでなんで!？」

祐「それにしても……」

翔「スルー!?!お前もスルースキルの持ち主か!?!？」

祐「永遠に黙りなさい」

撲

翔「ぐへらあー!!」

レ「これってもう何回目なんだろう?」

祐「私が喋ってる時は黙りなさい。それが礼儀ってもんよ。わかった?」

翔「……はい」

レ「中学生に逆らえない社会人……これはかなりシユールな光景だなあ」

祐「まったく……何を言おうとしたんだっけ……あ、そうだ。翔ってホントに19なのよね?」

翔「……そつでいいます」

祐「ちっちゃいわね」

翔「うわあああああああああああああ!?!?」

レ「翔ちゃんのコンプレックスを容赦なくえぐるその性格……凄くいいよ」

祐「その歳でそんな身長なんてもう弄ってください、って言ってる

ようなもんじゃない カナンよりもちっこいんじゃない？」

翔「中学生に負けてる……はは、そんなことあるわけないよな……俺はもうすぐ伸びるんだ……チビじゃないんだ……」

レ「あ、あ、隅っこの方で三角座りしていじけちゃった。祐希奈ちやんが言い過ぎるから」

祐「う、だってそこまでショック受けると思わなかったんだもん」

レ「ほらもう、目元に涙も溜めちゃってる」

祐「ああもう！わかったわよ、私が悪かったわよ！」

レ「いつてらっしや〜い」

翔「う……エリオにだって勝ってるんだ……ぐす……晩熟型なんだ……」

祐「（こうみるとホントに女の子が泣いてるみたいね……）え〜と、ゴメンね？私が悪かったわ。謝るから、ね？」

翔「う……別に怒って……ない……」

祐「（そりゃあ泣いてるからね……）翔はちっちゃくなんかないわよ。ほら、私よりおつきいじゃない！立って立って！あゝ私完全に負けてるわ」

翔「……祐希奈は女の子だろ。勝つてて当然なんだ……」

祐「でもなのはさんやフェイトさんには負けてるのよね？……  
あ」

翔「う……うう……うっさいぺた○こー！」

ピキリ

祐「……もういいわ。優しく諭すなんて私らしくなかったわ……ここからは私らしくやらせてもらうから。私はね、ウジウジしたやつが大っ嫌いなものよ……！」

……祐希奈奮闘中

しばらくお待ちください



レ「あ、お帰り」

祐「ただいま」

レ「翔ちゃんは？」

祐「あそこよ」

翔「……」「」「ド」「？」

レ「翔ちゃん!!？」

翔「……酷い目にあつた」

祐「アンタが悪いのよ！」

翔「すみませんでした！」

レ「（翔ちゃんのせいなのかな……？）」

翔「と、とにかく話が脱線してしまいましたが、まずは一つお知らせを」

レ「祐希奈ちゃんよろしく」

祐「え〜っと、なにに？……嘘？これ何かの間違いじゃないの？」

翔「まあ俺たちもコツコツ頑張ってるからな」

祐「主にレインがでしょ」

翔「……否定出来ないのが悔しい」

レ「翔ちゃん弄りは一瞬置いといて祐希奈ちゃんどうぞ！」

翔「一瞬！！？」

祐「総合PVが300000アクセスを突破しました！みんなレイ  
ンに拍手！」

レ「いや〜それほどでも〜。これも読者のみんなのおかげです！ありがとう！」

翔「……なんだか納得いかないけど、いつも応援ありがとうございます！」

祐「まあこれから暇だったら読んであげてね。もちろんリリカルヴィヴィオを読み終わった後でね」

翔「……祐希奈ってちゃっかりしてるな」

レ「それじゃあ本編に触れていくよ！」

祐「そう言っても今回の話って内容的に薄いわよね？触れるところなの？」

翔「痛いところ突いてくるな……レイン頼んだ！」

レ「全く翔ちゃんは……今回は基本的には原作通りに翔ちゃんがいたら、て話だね。注目してほしいところはサキとゼストの会話とか新キャラの力の片鱗だね」

祐「サキって結構ツンデレよね。ゼストとの通信を切ったのも照れ隠しでしょ？」

翔「……お前がツンデレって言うか？」

祐「なんか言った？」

翔「なんでもありません！」

祐「そう」

レ「そうだね。基本的にはサキは自分のペースに相手を引きずり込むタイプだけど不意な言動とかに弱いことも偶にあっただかな」

翔「そんなことあったか？」

レ「……翔ちゃんは鈍かったから全く気が付いてなかったよ」

祐「これだから男って……」

翔「ん？」

レ「はあ次いくよ。次は新キャラの無双だね」

翔「戦闘描写はないけどな」

祐「でもかなり強そうね。武器はおっきい剣みただけど」

翔「それに白い障壁って……プロテクションだよな？」

レ「そうだよ」

翔「あいつって戦闘機人じゃなかったのか？」

レ「まあそこら辺はひ・み・つ・かな」

祐「一筋縄じゃいかなそうね」

レ「要注意には変わらないね」

レ「と、いうことで今回はこの辺で終了!」

翔「なんて長さだよ……もう少しで本編に届きそうって……」

祐「作者もつとっかかりしなさいよ」

翔「全くその通りだがお前も原因のひとつだと自覚しようか!」

祐「イヤよ」

翔「そうですか……」

レ「でも最後に少しお知らせ！」

翔「今回30万アクセスに達したので、作者がまた記念のお話を書きたいと思っているらしいです」

レ「なのでその内容を募集したいと思います！」

祐「内容は基本的にどんなものでも構わないらしいわ。『翔やレインのこういふ話がいい！』とかでもいいし、特別編として『クロスしてみないか？』というのもアリらしいわね」

翔「別に感想に書いてくれてもいいけど、出来ればメッセージの方が嬉しい」

レ「そして前から募集してる新キャラと病院でずっと寝てる女の子の名前も継続中だよ。こちらにもメッセージでね」

祐「普通の感想、誤字脱字、意見、質問、れいんぽすとへの出演依頼、翔やレインの貸出届けなども待つてるわ……ってなんで私がここまで」

レ「祐希奈ちゃん今日はありがとうね。楽しかったよ」

祐「私もストレス解消になったし楽しかったわ」

翔「……犠牲がでることも考えるよな」

祐「ブレイドエクスプロージョン！」

翔「ギヤアアアア！？」

レ「翔ちゃんちよつとは学ぼうよ……あ、そうだ。今回出演してくれた祐希奈ちゃんや私、翔ちゃんが登場するテストメントさんの所のクロスリレー作品『魔法少女リリカルなのは〜時の引き金〜』も良かったら読んでみてね。私や翔ちゃんはともかく、祐希奈ちゃんやカナンくんたちが大活躍するから」

祐「レインもしっかり宣伝するのね……」

レ「基本中の基本だよ。それじゃあ祐希奈ちゃん今回はホントにありがとうだね」

祐「ん、どう致しまして」

レ「ではー!」

レ・祐「次話にてお待ちしております!……!」

翔「……この待遇に異議を申し立てる」

第四十話 その日、機動六課（中）（後書き）

どうでしたか？

ヨシユアさん、祐希奈を貸していただきありがとうございます！！

祐希奈可愛いよ祐希奈（笑）

祐希奈がどこか違ったりしていたら言ってください。

すぐ訂正します。

本編も次回は漸くバトル回！

翔もサキも頑張ります！！

では、次話にてお待ちしております！！！！



第四十一話 その日、機動六課(中の2) (前書き)

どうも、夕です!!

今回はかなり力を入れて書いたんですが自分の文章力を痛感させられました(笑)

特に最後ら辺は(笑)

では、翔VSサキをお楽しみください!!!

第四十一話 その日、機動六課(中の2)

「あら、遅かったわね」

「サキ……」

大きな鎌を携え、ニッコリと微笑み掛けるサキ・クルス。その周りには多くの武装局員たちが転がっており、昶の視線は自然とそちらの方へと向いてしまう。

「安心しなさい。誰ひとりとして死んでないから。まあダメージは確実に通したから暫くは起きないけど」

そんな考えを読み取ったのかサキは倒れる局員たちの状態を伝える。目を凝らしてよくみると彼女の言う通り、みな気絶しているだけだ。

やっぱり殺すつもりはないのか

心中でそのことを嬉しく思うが、表情には出さないうでまっすぐにサキを見つめる。

「俺はサキを止めに来た」

そう、と彼女は返事を返す。わかっているわよ、とでも言いたそうな顔で。

「サキには何か考えがあるっていうのもわかってる。けどそれが何なのかは教えてくれないんだろ？」

「うん。教えない」

即答で返されてしまったが、そんなことは今更なので昶は気にせず会話を続ける。

「俺はサキの敵なのか？」

「当たり前じゃない」

以前も聞いたその問いにサキは以前と同じ返答。

周りがパニックに陥っているこの喧騒の中、その言葉はハッキリと昶の耳にまで届いた。

「それは……それは絶対、なんだよな」

言い淀みながら紡ぎ出したその言葉に一体どれほどの思いが込められているのか、そんなものは昶自身にしか知り得ないこと。

しかしその表情が表しているものが哀だということは誰が見ても明らか。

その顔を見てなお、サキは溜息をつく。

「確か最後に会った時に言ったわよね。全力でぶつかってきなさいって」

「ああ……」

「なら、」

その言葉と同時に、

尋常ならざる殺気が朧を突き刺した

「ッ！？」

悪寒を背中で感じながらもすぐに両手の剣を構える。

それに対して相変わらずサキは大鎌を片手で持ちながらもダラリと腕をさげ、あくまで自然体。

しかしそれは彼女にとって既に戦闘態勢の証。

「ここでそれを見せなさい」

次の瞬間には、

地獄の鎌が朧の首を捉えていた。

「みんな！」

「お届けに来ました！」

地下通路のとある区画、六課の隊長であるなのは、フェイト、そして会議室から抜け出た聖王教会シスターのシャツハ・ヌエラは緊急時の集合場所であるこの場所でティアナたちと合流し、自身のデバイスを受け取っていた。

「状況は？」

「ここに向かう途中戦闘機人二名と交戦しました。表にはもつとい  
るはずですよ」

ティアナがここに来るまでのいきさつを簡略にして報告していく。

「ヴィータちゃんと翔くんは？」

「ヴィータ副隊長は本部に向かって来るアンノウンを迎撃に、翔さんはレインと一緒に辺りのガジェットを」

「翔、聞こえる？翔！？」

報告を聞きフェイトはすぐに朧に連絡を取ろうとするが繋がらない。

「朧と通信が繋がらない!?!」

そしてそれは朧に限ったことではなかった。

「ギン姉にも繋がりません!?!」

ギン姉、ギン姉!?!と地下の通路でスバルの音が響く。

「もしかしたら戦闘機人と交戦中なのかも」

「ロングアーチ、こちらライトニング01」

フェイトは管制から二人の状況を特定してもらおう為に六課へと通信を送る。

「……ライトニング01……こちらロングアーチ……」

通信先はグリフィス。しかしノイズが酷く、聞き取りづらい。

「グリフィス!?!どうしたの、通信が!?!」

「こちらは……今ガジェットとアンノウンの襲撃を受け……なんとか持ち堪えていますますがもう……」

通信が切れた。

現在六課に残っている戦力はシャマルとザフィーラのみ。

ガジェットだけならいざしらず正体不明の敵もいるとなると不安は爆発的に増大する。

なのはとフェイトは無言で頷きあい、四人に指示を与える。

「分散しよう」

「スターズはギンガと朧の安否確認と襲撃戦力の排除。ライトニングは六課に戻る」

『はい!』

四人に指示を与えながらもフェイトは自身で朧を捜しに行けないことに憤りを感じていたが、彼女も分隊長。

そのくらいの感情を抑えることくらい出来ないといけないのだ。

大丈夫、朧ならきつと

そう自分に言い聞かせ、フェイトはエリオとキャロを連れ、六課へと向かう。

首を刈り取ろうと容赦なく振られる大鎌。

「　　ッ!?」

朔は咄嗟に身体を逸らして後方へ跳び回避運動を取る。

常人の反応速度では頭と身体がお別れしてしまっていたらうごとが容易に想像できる一閃に肝を冷やす。

しかし既に出遅れた朔に安堵の時はない。

「ツヴァイデバイス、set」

抑揚のない声が耳に届くと同時に発砲音が二回。

「なっ!?」

気が付いた瞬間には両手の剣が弾き飛ばされ、宙を舞う。

魔力弾での狙撃か!?

無意識に飛ばされた小太刀の方へと視線を向け、手を伸ばす。

「よそ見してる暇があるの?」



腹部から鈍い音が鳴る。

膝のバネを効かせた蹴りは靱を数十メートル吹き飛ばす！

「ガアツ！！？」

【靱ちゃん！】

瓦礫と化した壁へと叩き付けられ漸く止まる。

【靱ちゃん！大丈夫！？】

「痛つ……ああ、No.4 open！」

レインの声に応えるようにNo.4の印を持つ刀型のアートの腰に現れた鞘に納まり装着される。

「ハアアアツ！！！」

ポウツと蒼い魔力が溢れ出し、靱が駆ける。

神煉流壱式

「蒼閃！」

抜刀の要領で放たれた蒼い斬撃は高速でサキの下へと飛んでいく。

「神煉流壱式、白閃」

黒銃をホルスターへ素早く直し、斬撃に相對するようにサキが鎌をグルンと振るう。

ギロチンの如き白い斬撃は蒼い斬撃とぶつかり合い、

蒼を掻き消した

「な」

蒼閃と白閃は同じ技。威力に多少の差はあれど抵抗も出来ずに消された事に朧は驚きつつも跳躍。そのままサキへと切り掛かる。

大きな鎌は既に振るってしまいサキは防御には間に合わない。

「ハア……アアアア!!」

魔力、力、体重、それら全てを乗せた一撃を上段から叩き込む！

しかしそれも通らない

「チツ……!!」

【手加減してよ!】

「それは無理な相談ね」

軽口を叩くサキの右手には白い槍。

彼女は刹那のうちにソレを起動させ、片手で朧の一撃を逸らしたのだ。

そしてこの間に出来た隙は致命的だった。

「神煉流肆式槍ノ型、貫穿」

白槍の上から更に白い魔力がコーティングされ、それは問答無用で朧へと穿たれた。

「グアツ!!?」

白い魔力が朧の身体を突き刺すように放たれ、再び瓦礫の中へと押し戻される。

「く……」

相手にすらならない自分の不甲斐なさに朧は顔を歪める。

コツコツ……

サキが近づく音が聞こえるが未だ瓦礫の中から抜け出せない。

「コッソ、と音が止む。」

「アンタ今リミッターが付いてるんでしょ」

埋もれている朧を見付けられていないだろうがそれでもサキは朧へと語りかける。

「それを外しなさい」

「な、なにを……」

サキの言う通り、確かに朧には出力リミッターが付けられておりAAまでの力しか出せない。

だからか漸く脱出しながらもサキの言葉に吸い込まれるように聴き入り、動く事が出来ない。

「ああ、確か部隊長の承認が必要なんだったつ。チツ……クアツトロー！」

舌打ちしながらサキはコンソールを開き通信を繋ぐ。

『はいは〜い。どうしたんですかあ、貴女から連絡をくれるなんて初めてじゃないですか〜？』

「今から中にいる八神はやてに二分間だけ通信を繋げなさい」

『わかりましたあ〜二分だけですよ〜……はい、完了です』

モニターが眼鏡からはやてへと変わる。

「八神はやて二佐ね？」

『な、アンタどうやってここに……!』

突然開かれた回線に周囲からザワザワと声が聞こえるがサキは気にせずに用件を伝える。

「時間がないから手短に言っわよ？すぐに浅儀勅二等空尉のリミッターを解除しなさい」

『ちよ、どういことや!?!』

「早くしないと“死ぬわよ”？」

『ッ!?……わかった。浅儀勅、限定解除承認、120分リミッターリリース』

「話が早くて助かるわ。それじゃあ後ろのお偉いさん方にもよろしく」

『あ、ちよい待ち』

終始サキのペースで行われた通信はすぐに終了した。

このあとはやていろいろはいろいろと問い詰められるだろうがサキの知ったことではないのだ。

この数分の出来事を朧とレインはただ呆然と見ているしか出来な

かった。

「これで、全力が出せるはずよね。早くしなさい」

「……どういっつもりだ？」

考えが全く読めない。

先程は首を吹き飛ばそうとしたくせに今度は全力で戦え、と。

なにが狙いなんだ？

ぐるぐると思考を巡らせるが全く答えが見付からない。

【朧ちゃん、やるよ】

「……ああ」

考えていても仕方がない。

足元に蒼い六芒星、アウラ式の魔法陣を展開させてサキを見据える。

「チツ……後悔すんなよ」

「そういうことは私に一太刀浴びせてから言いなさい」

依然余裕積々な態度を崩さない彼女に朧も腹を据える。

「リミットリリース」

【出力リミッター解除】

溢れ出す蒼、制限もなにもない朧の力。

だがこれだけでは終わらない。

「No.4 out」

手に中の刀が消える。

呼び出すのだ

目の前の事態を收拾する為に

朧はその名を口にする！

「起きろ、デュランダル」

【漸く戻ったか】

少し高めのアルトボイスが応える。

顕現した剣に装飾は赤い水晶一つのみでただただ蒼い。

しかしそれはまるで全てを包み込む優しい蒼。

聖剣デュランダル

朧の第二のパートナーが目を覚ました。

「敵はサキだ」

デュランダルを構えながらポツリと呟く。

【余の前持ち主か。久しいな、サキ】

「そう？私はそんな感じがしないんだけど」

【……ふん、やはりおぬしはやりづらい】

「褒めてくれてありがとう」

自身のことを『余』と呼ぶ高飛車な管制人格はサキとのやり取りにくすんだ声で応える。

「……サキを止めるぞ」

【ふん、あまちゃんが生意気言いおって……】



デュランダルの声はいつも通りの喧嘩腰だが普段の刺々しさはない。

剣もサキを止めたいのだ。

それを感じとった朧は相方をギュッと握りしめ、構えを取る。

「アイン、ドライ release」

サキの方も無用となった鎌と銃を待機状態へと戻し、残った白槍をすうっと“構えた”。

「ッ!？」

『朧ちゃん、気を引きしめて』

『ああ……わかってる』

レインと念話で会話しながらも朧の額からは冷汗が滲み出ていた。

あのサキが“構え”を取ったのだ。

その意味を二人はよく知っている。

ここからは一瞬たりとも気を抜けない!

「」

ガリガリと神経を削られていくこの状況で二人は不動。

瞬きの一つもない。

もしこの場に観客がいたならばいつまで続くのだろうかと思つたことだろう。

コロ、と

小石が風で転がった。

十秒か、それとも三分経つたのか、体感時間では永久とも思えるような時間はそれで突然終わりを告げた。

□  
『！

二人の姿が消えた。

戟ッ！と音が鳴る。

次の瞬間には蒼剣と白槍が火花を散らせ風に揺れる黒髪の長髪が二人現れ、獲物を弾き合う。

先に体勢を整えたのはサキ。

彼女の細腕から数多もの稲妻を思わせる閃光が朧を襲った。

一般の局員なら避ける事も、反応する事も、或いは穿たれた事に気付くことさえ出来ないかもしれない。

だが生憎、朧はこと戦闘に関しては一般局員を遙かに凌駕している。

その証拠としてB Jが少し破れるが身体には届いておらず、剣を振るい、首を傾け、身体を捻り、朧は一撃一撃を紙一重で避けて反撃の機会を伺っている。

しかし相手はサキ。孤を描く一筋の銀閃が朧の脇腹に狙いを定め、彼女を朧が捉えた。

「ッ!？」

この時初めてサキの表情に驚きが現れたのだ。

それもそのはず、彼女の一撃はしっかりと朧を捉えて回避は不可能だった。

なら何故？

彼女の槍は防がれたのだ。

なら何に？

剣によって防がれたのだ。

デュランダルに？

否。

大量の凍剣に！

サキの一撃を止めるのに用いた凍剣は二十本を軽く超える。

しかしその残骸に絡まり槍を引き抜く事が出来ない。

「壱式」

「ッ！！？」

澄んだ声が聞こえサキが槍から手を放し後方へすぐさま回避行動を取る。

「蒼閃ッ！」

振り抜かれたデュランダルは白槍を一刀両断し、派生した蒼い斬撃はサキへと一直線に向かっていく。

先程打ち消された壱式よりも多く魔力を練り込まれた蒼閃をこの

刹那の時間で掻き消すのは不可能。

だがその不可能を可能にする人種が二種類いる。

一つはバカ、翔がその典型的な例だ。

そして二つめは今翔の目の前にいる

天才だ

サキの両手にはいつの間にか密着型のグローブが装着されており、後方へ跳ぶのを止めた。

「伍式」

その声と共に彼女の足が地面を強く押す。発せられた言葉が示すものは元を辿れば護身の為の技！

「碎覇ア！」

フルスイングよろしくで撃たれたサキの魔力を込めた拳はその一撃をもってして魔力斬撃を爆破させてしまった。

爆風が舞い上がり二人の視界を遮る。

だが爆風の中から跳躍しながら長髪を靡かせ飛び出す者が一人。

翔だ。

「うおおおお！」

一閃

「チツ！」

デジャヴュのような光景だが今回のサキは“回避”を選択したのだ。

それは受けきれないと判断したということに他ならない。

身体ごと振り下ろされた一撃は地面をえぐり取り、コンクリの礫<sup>つぶて</sup>が辺りに飛び散る。

しかし朧の動きは止まらない！

「No.5 open！」

高速で接近しながら朧はサキに向かってナイフを投擲。

それを簡単に拳で弾き返されてしまいが気にしない。

少しでも動きを限定させることが狙いなのだから。

デュランダルから吹き荒れる魔力。

蒼閃なら先程と同じ道を辿る。

ならどうするか？

簡単だ。

点がダメなら面だ！

「神煉流肆式」

その答えが指し示す技は神煉流肆式、旋風。

だが今は違う。

デュランダルに纏う魔力が徐々に氷の粒へと変化していき、解き放つ！

「凍ノ型、<sup>ひょう</sup>雹！」

荒れ狂う台風の中からサキを襲うのは氷の刃。

旋風の派生系、雹は数十、数百の刃が彼女の身体を傷付けていく。

「え？」

そんな中で朧は不甲斐なものを見た、というような表情になる。

その理由は、

凍獄の中でサキがうっすらと笑ったからだ。

直後、台風が暴風に掻き消された。

「な  
」

【……やっぱり持ってたんだね】

白い魔力を放出し続けるサキを啞然とした表情で目の前の光景を見つめる昶とまた別の反応をするレイン。

昶が啞然としたのは自身の電を消滅させられたこと。

対するレインが見つめるモノは剣。

— 際異彩を放つ西洋剣。色合いこそは純白だがその形状は昶の持つデュランダルと非常に酷似しており、装飾も青い水晶一つ。

【……オリヴィエの純潔の剣、オートクレール】

レインがその名を口にした。

オートクレール



「ローランの歌」や「シャルルマーニ伝説」で登場したローランの親友、オリヴィエの使用していたとされる剣でデュランダルに勝るとも劣らない名剣。

それがサキの手にあるのだ。

「そんなに驚くことでもないでしょレイン？元から私が使ってたんだから」

【……そうだね】

サキは微笑しながら朧の中にいるはずのレインに話し掛ける。

「さて、時間もないし早く再開しましょうか」

オートクレールを構えるサキは地面を蹴り、

消えた。

「なっ!?!」

【朧ちゃん下!】

レインの声に反応し言われるがまま下を向く。

懐には既に腰溜めの体勢で白剣を構えるサキ。

「吉式」

「くっ！」

咄嗟にデュランダルを防御に回すが間に合わない！

「白閃」

閃！と振るわれ発生した白色の斬撃が下から朧を切り裂く。

「グハアッ！？」

彼女の攻撃はまだ止まらない。

「追撃　ッ！、終閃！」

途中一瞬顔を歪めたサキだがすぐに立て直し、下から押し出され吹き飛ばされるはずの朧にサキは続けざま振り抜いた剣を再びそのまま振り下ろし、脳天に叩き込む！

「ガハアッ！？」

上空へと向かうはずが地面へと叩き込まれてしまう。

それ程の攻撃を食らい無事で済むわけがない。

しかし、サキはそうは考えない。

「早く立ちなさい。ちゃんと防御が間に合ったんでしょ」

そんなことを言い放つ。

「……ッ……クッ……」

ふらりくらりと立ち上がる朧。B Jはボロボロで、全身は切り傷だらけ、頭から流れる血で左目が赤く染まっている。

その足元に転がっているのは折れた二本の小太刀、アートのNO. 1、2だ。

「吹き飛ばされていたアートを終閃の放たれる瞬間に轉移させて少しでもインパクトの衝撃を和らげた……相変わらずそういう小細工は得意ね」

やれやれ、とでも言いたげな声で状況を解説しているサキだがその顔はまだ立ち上げられる事に嬉しさを感じてるように見える。

が、その表情もすぐに隠れてしまう。

「これが今の私とアンタの力の差、さてどうするの？」

サキの魔力放出は朧のモノとは比べものにならないくらい強力なもの。それは一種のリミットブレイクと他ならず、このままでは天地がひっくり返っても勝てる見込みがない。

「レイン……止血頼む」

【わかった！】

デュランダルを杖代わりにして立ち、額の血を拭いながら朧は必要最低限の処置だけを行う。

「この状況を打開するにはどうすればいいの……わかってるわよね？」

「言われなくてもッ！」

意味深なサキの言葉に怒号する昗は、ある一言を口にする。

装填結界、展開『ソウコウケンラン蒼昊絢爛』

この瞬間、確かに蒼がそこにいた。

【れいんぼすと】

レ「今回は完全にバトル回だね」

翔「俺とサキの戦闘シーンだったけど、また随分攻防の移り変わりが凄いな」

レ「翔ちゃんも意外に強かったんだ」

翔「俺をなんだと思ってたんだ!？」

レ「やられ役」

?「だがそこがいい!」

翔「これでも主人公!知ってるよねお前!?!？」

レ「だって今までも全然勝ててないじゃん」

翔「うっ!」

?「おや、聞こえてないのかい?」

レ「今までの戦績を簡単に紹介してみるとこんな感じなんだよ?」

・VSフェイト戦 ×

・VSゼスト戦 (途中で介入された為)

・VSフードの女 (サキ) ×

・VSなのは

・VS新人FW四人 ○

・VSシグナム ×

累計 一勝三敗二引き分け

翔「……」

レ「弱いね」

翔「弱いつて言うな！」

レ「そう言うのは勝ててから言ってね？」

翔「うう……言い返せないのがツライ」

？「ふむ、これが俗にいう“放置プレイ”というやつなのだね？なかなか刺激的じゃないか！君たちのその必死さからは凄まじい愛を感じるよー！」

レ「そ、それじゃあ早く本編についてもっと触れてこっか」

翔「……う、うん」

？「レインくんも翔ちゃんも恥ずかしがり屋さんなんだね！安心したまえ！この放置プレイもその延長線上なんだと僕はちゃんと理解しているぞー！」

レ「……最初に言ったように今回は完全に朧ちゃんとサキの戦闘だね（朧ちゃん、頑張つて！無視だよ無視！スルーだよ！）」

朧「……ま、まあその日、機動六課の目玉らしいし（こ、これは物凄くキツイぞ……）」

？「だから安心して君たちも僕に身を委ねてくれて構わないよ！僕は苺パンツを広げなさいと神に選ばれた人間だからね！なんならこの世全ての苺パンツアンリマユと読んでくれても構わないさ！」

朧「……………ッ」

レ「……（堪えて！堪えて朧ちゃん！）」

？「ところで朧ちゃん？今日は当然苺パンツを履いているのだろうね？」

朧「履いてるかバカヤロオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

レ「朧ちゃん……………」

？「おや、放置プレイはもう終了かい？漸く僕と話したくなつたのだね！初やつめ！」

朧「死ねえ！」

閃

？「ふふふ、やはり紅く高揚した顔も可愛い！どうだいレインくん





レ「こ……今回のゲスト……テストメントさんのところでのクロス  
リレー、『魔法少女リリカルなのは』時の引き金』より出演……  
パンツイーラ……」

パ「……と、いうわけだよ！だからわかったかい？ 翔ちゃんには絶  
対領域から見えるか見えないかの際どい毒パンツを僕にだけ恥ずか  
しがりながらもスカートを巻くし上げて」

翔「もういつそ殺してよ……」

レ「かつてここまで私の【れいんぽすと】を壊してくれたゲストが  
いただろうか……」

パ「 羞恥に染まり涙を浮かべた翔ちゃんは僕に……って翔ちゃ  
ん、聞いているのかい？ 仕方ないな、もう一度始めから説明するか  
らよく聞きたまえ！」

翔「嫌ああああああああああああああああ……」

……暫くお待ちください

パ「さて、では本編について語ろうではないか！レインくん進行を頼むよ！」

朧「うう……ひくっ……ぐすん……」

レ「また隅っこで三角座りしてる……」

パ「アレはアレでそられるものがあるのだがね！」

レ「……変態は放っておいて話を進めるよ。今回は神煉流の新技が幾つか登場したね」

パ「槍を使った『貫穿』と旋風の氷結系『雹』だね」

レ「（……真面目な事も言えるんだ）……まあそれらに関しての詳しい説明は後日にして、原作では有り得なかったこの時期でのリミッター解除！」

パ「これは朧ちゃんしか解除していないところを見ると原作沿いした場合に朧ちゃんだけ最終局面で全力が出せないわけだね？」

レ「鋭いところついてくるね……そこは」

パ「そこは苺パンツの奇跡が朧ちゃんを覚醒させるのだね！」

レ「いい加減に黙ろうか変態？」

パ「ふふ、その殺気じみた視線は病み付きになりそうだが、ここは言うことを聞いておくよ！」

レ「……そこはイロイロ考えてるから続きをお楽しみについてこと」

パ「さすが朧ちゃんだね！隠し玉がまだありそうだ！」

レ「それは最後の描写のこと言ってるの？だとしたら正解とだけ言  
つとく」

パ「朧ちゃんのことなら誰よりも詳しいさ！」

レ「へえ、誰よりも……」

パ「そうだね！誰よりも……て、なんだいこの異様な寒気は！？」

レ「あのね、一つ間違いがあるようだから正しとくけど……」

パ「ま、まさかこの殺気レインくんが！？」

レ「私やフェイトちゃん以上に朧ちゃんの事を知っている、なんて  
口が裂けても言わない方がいいよ？」

パ「仕方ないね、上位は君たちに譲ろうじゃないか！私は全世界の  
女の子たちに苺パンツを広めなくてはならないからね！こんなとこ  
ろで殉ずるわけにはいかないのさ！」

レ「……月夜ばかりと思うなよ」

パ「レインくんも案外その台詞が似合うもんだね！」

レ「……こほん、今回はこの辺でお開きにするね（朧ちゃんを慰

めないといけないし……今回ばかりは同情するよ」

パ「また呼んでくれて構わないよ！けどその時は朧ちゃんにスカートを義務化させておいてくれたまえ！」

レ「こんな変態も出てくるけど、『時の引き金』もよろしくね！」

パ「変態とは……そんなに褒めないでくれたまえよ！」

レ「で、では、次話にてお待ちしております……！」

レ「朧ちゃん、元気だして！ね？」

朧「レ……インぐすっ……俺って男だよ……ひくっ……女の子じゃないよな……？」

レ「うん、朧ちゃんは立派な男の子だよ！だからもう泣き止もう？」

翔「う……うん……」

パ「翔ちゃん！jkスタイルかナーススタイルどっちがいいか意見を聞かせてくれるかい？」

翔「うわあああああああああああああ……！」

レ「お前はもう来るなああああああああああああ……！」

第四十一話 その日、機動六課(中の2) (後書き)

どうでしたか？

翔とサキの戦闘はまだ少し続きます。

まあそんなことより【れいんぽすと】が凄く暴走していたと思いま  
すwww

パンツィーラのような暴走キャラは書いたことがなかったので書け  
ていたが激しく不安ですが、不備があれば言うてください(笑)

質問や誤字なども言うてくださいね！

では、次話にてお待ちしております!!!

第四十二話 その日、機動六課（中の3）（前書き）

どうも、夕です!!

すみません、凄い投稿が遅くなりました（汗）

話が全然思い浮かばずこんなに間が空いてしまって……

それではどうぞ!!

第四十二話 その日、機動六課（中の3）

日が沈み辺りを照らすのは夜空の星々と焚火のみ。

焚火を囲うのは二人。

黒髪の女性はおいしそうにシチューを食べているのと対照的に同じく黒髪の少年は三角座りをして俯いている。

「……………くそッ……………！」

「まだ気にしてるの？ アレはアンタにはまだ無理よ」

悔しがる少年に女は溜息をつきながら事実を突き付ける。

「アンタにまだあんな戦い方教えてないし、突っ込んでいっても勝てるわけないじゃない」

二人は今日、とある村で犯罪者と戦闘を行っていた。

そこで少年は敵の魔導師に突っ込んでいき砲撃を避けきれなかったのだ。

「アンタの反応速度は確かに凄いけど、今はそれだけ。カモスピードも、なにかもがそれを活かせる域にまで達成ていない」

女は言葉をぼかしたりしない。仮にも彼女は少年の師、そんなことをしてはいいつまで経っても成長は望めないのだ。



「こんなんじゃ……！」

少年はまだ幼い。今回は相手が悪かったのだ。たかだか六歳程度の子供がAAクラスの魔導師に勝てるわけがない。

だが少年は幼いからこそ、それを理解出来ない。納得出来ない。

握る拳に自然と力が籠る。

「……………ハア」

そんな姿をかれこれ三時間も見せられたらそりゃあ溜息もつきたくなる。

私も随分甘くなったのかな……まあ上手くいけば後々とんでもないモンに化けるかもしれないし

内心でそう考えながら女は目の前でいじけているへタレに声を掛ける。

「ならアンタに一つ、出来損ないのプレゼントをあげる」

「……………え？」

「試した事がないからわかんないけど、それでアンタは魔力砲撃に對して無敵に近い力を得るわ」

「ホント!？」

突然の夢みたいな話に少年はばつと顔を上げる。

「でもそれはアンタの強みを削る事になる。私はアンタにその力は合わないとも思ってる……それでも欲しい？」

「いる！ 俺、サキみたいになりたいんだ！ いろんな人たちを守りたいんだ！」

少年は間髪を入れずに自身の想いを言葉にする。それは紛れも無い彼の気持ち。

それを聞き、女は嬉しくもいり、恥ずかしくもあり、残念でもあり……

「そう……ならあげるけど、その力に頼ってばかりじゃダメよ。私が必要無しだと判断したらすぐに外すんだから」

「うん！」

「使い続けたら死んじゃうかもしれないよ？」

「注意しながら戦えばいいんだろ！」

育て方間違ったのかな……

絶対わかってないだろう目を輝かせる少年に女はもう一度、深い溜息をついた。

装填結界、蒼昊絢爛

その名が示すように結界魔法の一種だがそれは自身の内に発動させる異質なモノ。

過去に結界魔法に特化している一族の村でただ一人結界魔法を使えない男がいた。

周りはその事を批難したが男は努力に努力を重ね、とある結界魔法に辿り着く。

装填結界

それが男の名付けた名。

結界魔法の一種だがそれは他の結界とは全く異なり自身の内に発動させる異質なモノ。

遙か昔に浅儀一族と交流があったと伝えられている精霊の力を借りたものだと伝えられている。

体内に結界を張り巡らせ“とあるモノ”を活性化させることで、身体そのものを一時的に精霊へと近付け限界以上の能力を行使する

ことが出来る術。

術使用中は身体から魔素の放出と取り入れが常時行われているので身体が自身の魔力光のように蒼く発光しているのもその為。

この術を生み出した男は浅儀の守護者、死後には守護霊として奉られる程の存在にまでなった。

そして数十年、数百年に一度、その素養を持った子が生まれその子らは等しく装墳結界のみを発動させることができ、まるで奉られるかのように育てられた。

だがそれはある日を境に一変する。

装墳結界が禁忌の術と化したのだ。

それ以来一族はその術を行使出来る者を迫害し、隔離、酷い場合は殺害し始めた。

村で産まれてきた子供はすぐにその素養を持つ忌み児ではないのかを調べ上げられ、妊婦とその父親は自分達の子供の誕生を喜ぶと同時に素養がないようにと祈りながら出産を待つ事が最早風習と化していた。

だが、この数百年の間はまるでその素養を持った子供は産まれてこず、そんな風習も過去のものと忘れ去られていた。

翔、と名付けられた赤子が生まれてくるまでは

蒼

今の翔を一言で表すのにこれ程適した言葉はない。

なにせ身体が蒼く発光しているのだから。

「ハアッ！」

その声を皮切りに二人は足をぐつと踏み込み駆ける。

二本の剣が幾度も幾度も重なり合い、その度に轟音と衝撃波が大気を震わせる。

互いに肩、腕、腰、頬、至る所に切り傷がどんどん増えていき、それと比例して流れる血の量が増えていく。

そして何十、何百と交えた二人は剣を構えた姿勢を崩さないまま今一度距離を取る。

「浅儀一族の禁忌、装填結界、ソウコウケンラン蒼昊絢爛……本来外界に張って内を守護する結界を体内に展開する魔法……いえ、創られた当時は魔術の部類だったんだっけ」

えげつないわね、とサキは朧を見据えながら言う。

装填結界の名を受け継ぐ朧オリジナル魔法、蒼昊絢爛。

自身の限界を超える掛け値なしの朧の切り札。

「……思ってもないこと口にしやがって」

戦況を冷静に分析しながら朧はサキの軽口に眉を吊り上げる。

現在切り札を切って漸く対等の状況。いや、少しの差でサキが上回っている。

「……レイン！」

【ソードサモナー展開】

現れたのは一振りの凍剣。通常よりも型の大きな剣はそんじょそこのなまくらよりも遥かに名剣と言える品物。

昗はそれを左手で持ち、駆ける。

蒼い閃光が接近しデュランダルを薙ぐ！

横薙ぎされた蒼剣をサキは身体を後ろに反らす事で難無く避けてしまう。

まだだ！まだ左が残っている！

「うおお……おおお！」

左手で持つ凍剣をぐるんと逆手に持ち替えサキの方へと突き出す。

オートクレールは届かない！

身体を後方へ反らしてた体勢では白剣をまともに振るうことは出来ない。

だが、

「甘い」

そんな声が聞こえた。

「なっ　！？」

凍剣が硝子細工のように粉々に壊れてしまう。

サキは足に魔力を込めてそのまま身体を倒し、逆立ちの要領で凍剣を持つ手を蹴り上げ砕いたのだ。

後方へ大きく跳んだとおもいきや、着地したその足で再び地面と別れを告げ、朧に接近。爆発的な勢いを維持したまま剣を水平に振るう。

「ぐっ!？」

急ぎデュランダルを立てて防御に入るがとんでもない突進力にどんどん後方へ追いやられる。

懐がから空きよ

冷たいナニカが腹部に押し付けられ、魔力がどっ、と膨れ上がる。

「しま」

【ッ!？ プロテク】

「参式遠ノ型、虎爪」

白い銃身が解き放つ猛虎の爪。零距离から放たれた銀しろがねの砲撃が朧を吹き飛ばす。

が、

音も立てずに砲撃は掻き消えた。



その場に見えるのは息を切らし、右手にデュランダル、左手に欠けたナイフを持つ、黒いBJまでもが霞むほど蒼く輝く朧。

だがただ一つ、異彩を放つそれは朱<sup>あか</sup>。

朧の瞳。

流転の魔眼。

「綻びを消したってわけね……」

朧は身体を少しずらし、レインが身体と銃口の間で防壁を張る。

吹き飛ばされながらもその防壁が砕かれる前に朱眼を解放し、手中転位でアートを手に戻し、砲撃の綻びを見付け露散させる。

それだけの事を朧とレインは一瞬のうちに果たしたのだ。

にも関わらず朧は納得がいかないとでもいつかのような顔をしている。

『……レイン、気付いたか？』

『うん……』

レインも何か違和感のようなモノを感じるらしく朧の念話に答える。

『とにかくもう一度確かめる』

そう言っつて念話を切り朧は再び地面を蹴り、一瞬でサキの後方へ回り込み剣を水平に振るう。

だがそれはサキの想定範囲内。右腕を振り、剣と剣がぶつかり合い高音が鳴り響く。

サキにまで届かないとわかるや否や朧は後方へ跳び加速する。

もはや一般人には完全に視認出来ないレベル。その速度で動き回りながらサキの視界を前後左右に振る。

牽制の意味を込めてか、サキは発砲するが魔力弾が着弾するのは完全に朧の動き去った後の地面。

そして朧がブレ始める。

「これは……陽炎か」

まるで蜃気楼のように二重、三重へと重なる蒼い塊が疾走する様を見てサキは自然と眩く。

そこを好機と見た朧はギュツと足首を捻り方向転換、自身の幻影とともにサキへと踏み込む！

狙いは首筋へと見せ掛けた下腹部への横薙ぎの一撃

敵の視認したタイミングからズレを生み出し無防備な相手を斬る  
神煉流陸式、陽炎。

たとえわかかっていても先手を譲るしかないこの技で朔は懐へと潜り、

「式式、逆巻」

その言葉と共に彼女の振り上げた剣から発生した大量の魔力の塊

「……っ!？」

津波と呼んでも差し支えない広範囲の魔力斬撃が朔を飲み込んだ。

「陽炎には面攻撃が効果的……これも昔教えなかつ、たッ!？」

独り言のように呟くサキはすぐに自身の後方へと白剣をたてる。

戟!とぶつかる金属音。

「……覚えてるよ。身を持って叩き込まれたから、なッ!」

朔の魔眼の力、魔力の流れを読み取り津波が自身を覆いかぶさる前に脱出を計ったのだ。

鏝ぜり合いな均衡は刹那、蒼剣を振り抜くが剣閃は虚空を斬る。

後方へと流れ込む魔力の流れ。

それはお返しとでもいうかのようなサキの一閃を表す。

「ッ!」

殺気に魔力、二種類の感覚を感じ取り神速とも言える速さで離脱。それを追う形を取るサキ。両手でしっかりと白剣を握りその剣には膨大な魔力が込められている。

【朧ちゃん、くる！？】

「ああ！」

仁王立ちで待ち受ける朧の剣にも溢れ出す蒼い魔力が更に溢れ出す。

「神煉流壱式」

それは互いが一番信頼を置く技。

名は違えど神煉流の担い手として真つ先に会得するべき初級の技。だがそれも担い手次第、使う者が使えば必殺ともなりえる一太刀を放つ技。

斬撃を飛ばすのではなく纏わせ続け、ただ一心不乱に振り抜き敵を打ち倒す技！

「蒼オオオ」

「白ウウウ」

二人の担い手は高らかにその名を叫ぶ！

「閃ッッ！！」

蒼と白。

二つの決して折れる事のない剣がぶつかり合い、音が消え、光が視界を遮る。

余波だけでAAAを越える一撃は次第に辺りに静寂を齎した。

光が消え、剣を振り切った二人の姿が確認でき、

「っ……！？」

サキはよろめく身体を剣で支え、

「がっ！？」

昗は片膝をついた。

一撃の強さはサキの方へと軍配が上がったのだ。

「っ……！！」

よろめく身体に鞭を打ち、昗を立ち上がろうとする。

「なんでだ……」

先程まであった一つの疑問。これまでの一連の攻防で昗は確信した。

「なんで俺はサキと戦えてる？」

翔の疑問はそこにあった。

ここまでの戦闘は互いに全力を出したものだ。二人は対等に死闘を演じた。

そこに翔は納得出来なかったのだ。

「サキはこんなに弱くなかった」

翔は過去に何度か、サキの本気というものをその目で見たことがある。

「あの人と闘ってた時……あの時はこんなもんじゃなかった」

サキとその相手が戦い、辺り一帯が焦土と化していたのを翔は確かに覚えている。

本来のサキの力は今の翔では太刀打ち出来ない程の強さなのだ。

「……一体どういう事」

「ガハアツ!？」

なんだ?と言い切る前にサキの姿が翔の言葉を遮った。

翔は彼女の口元、ソレを押さえていた左手を見て驚きの表情に染まる。

「ど、どうしたんだ!？」

「……何を慌ててんのよ」

「だ、だっていきなり!？」

「うっさいわね……これくらいなんでも……くっ!？」

痛みを伴うのかサキの顔が歪む。

昶は未だに彼女の掌についた異常な量の“アカ”から目を離せない。

血。

吐血だ。

「どっし」

「アンタには関係ないわ。早く続きを始めるわよ」

今度はサキ自身の意思で言葉を遮る。

「それにアンタ……まだそんな使い方してるのね」

「……どっしという意味だ」

侮蔑にも似たサキの視線は昶の瞳へとまっすぐ向けられている。

「その魔眼……いつまでそんな縛りを掛けてるつもり？」

「ど、どういっ……？」

一体何を言っているんだ、とでも言うような表情で朱眼の持ち主は彼女を見つめる。

本来アンタの魔眼にそんな制限リミットないでしょうが

朧は頭を強く殴られたような衝撃を受けた。

「まさか、本気で忘れてたの？　ならアンタは昔どうやって封印処理してたって言うのよ」

生れつき魔眼を持っていた朧がサキと出会ったのは五歳程のころ、その当時朧は確かに朱眼

「あ

思い、出した

自身の力の不甲斐なさに憤りを覚えていた朧がサキに貰った力。

常時発動の魔眼の力を特殊な術式で圧縮させ、限定的なモノにす



る代わりに効力を格段に上昇させる。

「術式の解除法を教えてなかったから仕方ないと言えば仕方ないけど……」

とにかく、と手で自身の口元を拭い、サキはオートクレールを構える。

「いいから来なさい。アンタが勝てたら全部教えてあげるから」

「……くそっ！」

戸惑いながら朧もデュランダルを構える。

(サキの身体もわからない……狙うなら一撃で戦闘不能……なら！)

朧は右手でデュランダルを携え不動。

「ふうん……」

それを見たサキもまた、自らの右手でオートクレールを携える。

「最後に一つ聞いておくわ」

「……なんだよ」

「朧……アンタは何をしたいの？」

突然の質問に朧は意味がわからなかったが、とりあえず答えた。

「何をって……俺はサキを止めたいんだよ……」

「迷ってるの？」

「ッ!？」

シグナムにも言われた言葉が再び朧へと突き刺さる。

「何を迷ってるのか知らないけど、アンタは一体何がしたいの？」

サキを止めたい

その想いはサキの知りたい答えではなく、朧の思考を狂わせる。

「これは師匠として最後の忠告。アンタは……浅儀朧は何がしたかったのか、もう一度考えてみなさい」

そう言っつてサキは駆ける。右手に宿る膨大な白い魔力を見て、朧もありつたけの魔力を込める。

「神煉流零式」

掲げられた二つの腕が同時に消える！

「九景終落」

鳴り響いた音が一音。

しかし、放たれた斬撃は二人で十八撃。

神速をも越える斬撃を刹那の時間で九発、人体の急所へ叩き込む  
神煉流の零式、九景終落。

バタリ、

誰かが倒れる音がした。

「……………あ……………あ……………」

声が出ない。

身体が動かない。

意識ももう少しで跳ぶ事は明確だがそれでも声を出したかった。  
手を伸ばしたかった。

「……………しゃあ……………きい……………」

サキは倒れているた朧を一瞥し、すぐに別の場所へと視線を向ける。

視界がぼやけて朧にはハッキリと見えなかったがそこには

「……………ああ……………ん……………でえ……………」

サキがもう一人いるように見え、そこで朧の視界はブラックアウトした。

【れいんぽすと】

レ「また負けたね」

翔「うっさいわ!」

レ「でも翔ちゃんが勝てない事は読者さん皆予想通りだから安心だね」

翔「……それは喜んでいいのか？」

レ「そこは自分で考えてね？それじゃあ早速今回のゲストを呼ぶよ？」

翔「最近はなんかゲストが結構来てくれるな」

レ「それは作者が汚い手を使ってクロス作者さん達に根回ししてるからだよ」

汚い手とか言うな!?

翔「あれ？今なんか……」

レ「それじゃあ今回のゲスト! 【魔法少女リリカルなのはStrikers 禁断の刃】より、彼女に任せて、倒置に英語は! 王佐の刃、刀のフラメ!」

フ「来てあげましたよ、仕事をサボれると聞いたから」

翔「どんな理由だ!？」

フ「貴方にわかりませんが、ぐちぐちと部下から小言を言われながら  
積まれた書類を処理しないといけない気持ちか？」

翔「……とてつもなくわかる」

フ「さて、何をするんですか、ここで?」

レ「まあ簡単に言っていると今回の本編の解説をするところだね」

フ「なら始めましょう、早く」

翔「お、やる気だな」

フ「街に行きたいです、早く終わらせて」

翔「一言前の俺の言葉を返せ!」

レ「まあまあ、とにかく先進めるよ」

翔「えっと、今回は俺とサキの戦闘のみ」

レ「冒頭に言った通り翔ちゃんの負け」

翔「いちいち言わんでいい!」

フ「主人公なのか、本当に？」

翔「それは言うんじゃない!？」

レ「今回は新技も結構出たし前に紹介してなかった技と一緒に紹介するよ」

・神煉流肆式槍ノ型 貫穿

神煉流の槍で使用される技。槍の矛先に魔力コーティングした刃を作りだし、敵に突き刺す。

・神煉流肆式凍ノ型 電

肆式旋風の応用で氷結系。レインの魔力変質が必要な為、ユニゾン中しか使えない。基本的には旋風と同じだが風の中での斬撃が氷の刃となっている。

・神煉流弐式 逆巻

魔力を籠めた剣を振り上げる事で魔力の津波を起こす。威力自体はさほど高くはないが広範囲攻撃が可能。

・神煉流零式 九景終落

神速を越える速さの斬撃を刹那の時間で人体の九箇所の急所に放つ。

レ「蒼昊絢爛については作中で詳しくしたから省くね」

翔「かなり技が増えたな」

フ「別としてな、使えるかどうかは」

翔「……これ絶対喧嘩売ってるよな」

レ「ここで暴れないでよ？」

翔「わ、わかってるよ」

フ「面白いですね、自分のデバイスに言い含められるとは」

翔「……………」

レ「はい、今回はここら辺でおしまい！！ 誤字脱字や質問なども待ってるからね！！ 私たちやフレームも出てる【引き金】もよろしくね……！」

翔「……もう我慢出来ない！ フラメ表に出る！」

フ「Come on！ 切り刻んでやるよ……！」

レ「あゝ、翔ちゃん。フレームって魔導リンクSSSだよ？」

翔「……え？ ちよ、待てフレーム!？」

フ「Yaiha!!」

爆

翔「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

レ「……では、次話にてお待ちしております」



第四十二話 その日、機動六課(中の3)(後書き)

どうでしたか？

本当はあと少し長くするつもりだったんですが……まあここがキリがいいかな、と思って(笑)

なので次話は短いかも……決して時間がなかったからここで切ったわけではないですよ!!

ホ、ホントですよ!! h a h a h a h a ……

そしてムーギネーターさん、フレームをお貸しくださりありがとうございます!! ございました!

おかしな点があれば言ってくださいね。

誤字脱字があるかもしれないのであればよろしくお願いします!!

では、次話にてお待ちしております!!

第四十三話 その日、機動六課（後）（前書き）

どうも、遅れてすみません、夕です!!

今回はいろいろあると思われる話です。

もっと上手く書きたかった……

では、早速どうぞ!!

## 第四十三話 その日、機動六課（後）

戦いの勝者は地に倒れ伏す敗者を一瞥する。

その視線は一瞬、酷く悲しそうにしていたが彼女　サキはつい今しがたやってきた次なる敵へと身体を向ける。

（ん……この匂い……）

襲来者の姿、漂う鉄の匂いに一瞬目を見開いたサキだがすぐいつもの余裕を持った彼女の表情が表を現す。

「終わって、しまいましたか？」

「そうね、私が楽しみにしていた今日のメインイベントは終了したわ」

大きな瞳、綺麗な顔立ち、一つに纏めた長い黒髪。

大和撫子。

目の前の少女を的確に表現している言葉はそれ。

だがそれを口にするものはいないだろう。

美貌を異質とするような青いボディースーツ。

その姿はサキも良く知る姉妹たちと同じ姿。

そして

「私の姿をした戦闘機人……ね」

そう、背丈の違いや若干の幼さは残るもののその顔はサキと同じもの。

「はい、ナンバーズのN O . 1 3。サヤと言います」

戦闘機人 サヤは単調にそう答えてみせた。

(あの変態……やっつけてくれたな)

表情に変化がないサヤを見据えながらサキは内心、ほくそ笑むスカリエッティを想像し悪態をつく。

「それで、アンタはなんの用なの？ 私を始末しにきた？」

「はい」

殺しにきた。

間髪を入れずにサヤはそう答えたのだ。

オマケですが

と一言付け加えて、だが。

「……オマケ？」

眉を潜め訝しむサキとその後方で倒れる朧へと交互に視線を移し、サヤはピツと二本の指を立てる。

「私に言い渡されたドクターからの任務は二つ。一つ、地上本部周辺の無力化。二つ、浅儀朧の捕獲もしくは排除」

二つめは可能な場合ですが、と付け加える。

しかし、

彼女の言葉はそこで終わってはいない。

「しかし、私には確かめたいことがあったのですが……」

「……確かめたいこと？」

「固有武装展開“フェアベルデン”」

その声と共に出現した大剣。ドスツと音をたて剣先が地についたソレを両の手で構え、サヤが動いた。

「ッ!？」

突進の如く振り下ろされた大剣を跳ぶような形で回避するサキ。

避けたことで穿たれたコンクリートが瓦礫となって辺りに飛び交い、躲しきれなかった破片がB、身体とサキを切り刻む。

だがやられっぱなしのサキではない。

身体に伴う痛覚を無視し彼女はサヤの方へと飛び込んでいく。

「ハッ!!!」

お返しとでもいうかのような突進紛いの切り上げ。

速度、威力、タイミング。

どれをとっても申し分ない一流の一閃。

対するは横薙ぎの一撃。

焦りなく振り抜かれた二つの剣。

その衝突は轟音をたてながら。

サキを大きく弾き飛ばした。

その威力は建物へ激突するまで続き、土埃が一気に舞い上がる。

もくもくと上がる煙はただただ規則的に揺れ、吹き飛ばした側  
サヤはそれを依然変化のない表情で見つめてる。

だが、そんなインターバルも刹那の間。

煙を貫くように飛び出した白い残像が一直線にサヤへと向かう。

煌めく数多の斬撃。

打ち付ける度、振るう度に剣速が増していくサキの斬撃を身の丈程もある大剣をそれ以上の速さで振るい弾き返すサヤ。

埒があかないと感じたサキは渾身の一撃を白剣に込め、一太刀。

「ッ」

予想以上に力の籠った一撃にサヤは少し、ほんの少しだけのけ反る。

その隙にサキは後方へ跳躍、剣に纏う魔力を更に強め、振り抜く。

「白閃ッ！」

三日月のように反った白い魔力斬撃はその鋭さを持ってサヤへと襲い掛かる。

しかしそれがサヤを切り裂くことはなかった。

相殺されてしまったのだ。

一体何に？

白い魔力斬撃に。

神煉流壱式、白閃

抑揚のない声でその言葉は発せられた。

発した本人は振り抜いた形で残心。

「ツツ!? ……アンタは私のクローンだものね。使えてもおかしくないってわけ……」

サヤが放ったのは紛れのない神煉流の技。

それも魔力を使つての。

一瞬驚きが胸から溢れ出しそうになったがこれまでの経験がそれを押さえ込んだ。

「正確には他人の魔法や技を模倣し自らのものとして使用出来る私のIS“コピーキャット”の能力です」

それは自信の現れか、はたまた単に何も考えていないのか、惜しみ隠すことなくサヤは自身の能力を口にする。

「ただしコピー対象は調整段階で指定したモノのみとなりますが」

「それで私をコピーしたってわけね」

スカリエツティのところのデータを密かに漁っていたサキは自身のデータが残っていることを知っていたので出所をすぐに特定出来た。



「オリジナルである貴女のデータも非常に役立ちました」

「……データだけでわかった気にならないことね」

オートクレールを強く握り直し、目の前に立ちはだかる大剣使いを睨みつける。

それを見てサヤもすつと剣先をサキに向け、構え直す。

「いくら貴女でもそんな身体で私に勝てると思わないことです。私と違い失敗作のプロトタイプが埋め込まれている貴女は既に浸蝕が始まっている。大人しく浅儀朧を引き渡してください。今もこれまでのように上手く魔力を込められ」

いい加減黙りなさい

凍てつくような声色と気高き白き魔力がサキから共に溢れ出す。

「　　ツツツ!?!」

尋常ならざる殺気に無意識に後方へと跳躍するサヤ。

今の今まで無表情だった彼女の顔に初めて感情が籠る。

それは怯えか、恐怖か。

「随分饒舌に話すじゃない。私に説教垂れるなんて一億光年早いわ。もうちょっと人生経験積んでからしてきなさいガキんちよが」

言い切った直後、

「ッ！？」

サヤは自身の後方へと素早く振り返り防御の姿勢へ。

目の前にはサキの姿が。

二つの剣が重なり、激しい雷撃にも似た轟音が鳴り響く。

「」

防がれたことを理解すると同時にサキは短いステップを踏み更に加速。

薙ぎ、突き、刺し、斬り、打ち。

繰り返される剣戟の雨にサヤはただただ防戦一方に陥る。

その状況を打開しようとして大剣を振るう！

「なっ！？」

剣を止められサヤの表情が再び驚愕の色に染まる。

それもそのはず、サキが素手で受け止めているからだ。

白い、魔力の籠った左手で。

「……データ不足ね」

刃を握る手は威力を殺しきれず流血してしまっているが、おかげでサヤの懐はがら空き。

「神煉流の伍式は本来防御の技なの、よッ!!」

華奢な片腕に一体どれ程の力があるのか、白い輝きを放つオートクレールがサヤを切り裂く!

「……………っ……………!!」

切り裂かれる直前にサヤは身体を強引に反らし回避を試みたが完全な回避には至らず、腹部についた斜め一文字が彼女から苦悶の声を引き出す。

「チツ……………」

サキの方はというと渾身の力を込めて放った一閃が浅くしか入らなかったことに憤り舌打ちをうつ。

次は真っ二つにしてあげる。

彼女の目がしっかりとそう伝えていることをサヤは感じ取り、

「……………ふふ」

笑った。

「……何がおかしい？」

「いえ、やはり貴女は強いと思ひまして」

笑みを浮かべるその表情はただ純粹に喜びを感じているようにみえる。

それがより一層サキに疑問と苛立ちを沸き立てる。

「これ以上アంతに関わつてる時間はないの。大人しく死んでなさい！」

沈めた足を怒号とともに解き放ち、一気に間合いを詰める。

限界まで疾走した身体から放たれる一閃をサヤは防御ではなく半歩後ろへ下がることで回避。

避けられたとわかるや否や肘を引き、押さえ付けられたバネの如く剣先を首筋に向け突き出す。

常人なら回避も不可能な剣速で迫る白剣をサヤは戦闘機人の反応速度を用いて大剣を振り上げ衝突、白剣を遙か上空へ弾き飛ばす。

「ヒュンフデバイス set！」

得物を失ったサキだがその両手には既に薄手のグローブが装着されており、近距離の間合いを更に詰め懐へと潜り込む。

「ハアア……アアアアアツツ！」

魔力コーティングを施された拳が空を切り裂き、鋼以上の強度を持つ拳がサヤの腹部へと突き刺さる。

インパクトと同時に吹き飛ばされたサヤは砂塵を上げながら鉄柱に衝突し、漸く止まった。

重力に従って落下してくるオートクレールを掴み、地面に突き立てる。

「……ハア……ハア……ハア……ハア……」

……これでどうだ。

オートクレールで身体を支えながらも大量の汗を流し、肩で息をするサキ。

今も湯水のように溢れ出す白い魔力だがその身体は既に限界。

それでも人並以上の気迫が彼女を駆り立て拳を放ったのだ。

手応えはあった。

脊椎を砕く勢いで放った拳はきつちりとダメージを通した。

……まだ来るか？

吹き抜ける風により視界が開ける。

「……………認識を改めます」

声とともにコツコツと近付いてくる足音が聞こえる。

「貴女は強い。今の一撃、急所から僅かにズレていました。貴女の身体が万全なら私が敗北していたでしょう」

大剣を肩に乗せ一つに纏めた長い黒髪を靡かせるサヤ。

その姿は決してダメージが低いわけではないがまだまだ戦闘は可能。

対するサキは立っているのもやっとな状況。

朧との戦闘からの連戦に加え、身体の異常。

体力、精神共に限界を迎えつつあるのは明確。

しかしサキの魔力だけは未だに膨大な量を放ち続けている。

「皮肉ですね。それほどの魔力を生み出す“ツインレリックシステム”が身体機能を徐々に破壊していくというのは」

「……………あの変態が勝手に埋め込んだんでしょ」

サキの声からは最早当初の覇気は見る影もなく衰えている。それでも彼女の瞳はしっかりと目の前の敵を見据えつつける。

全盛期の半分の力も出せないその身体で。

「……諦めていましたが」

ポツリとサヤが呟いた。

「貴女を倒せば私にも……」

「……」

ぶつぶつと一人呟く彼女に戸惑うを覚えるサキ。

そして口を閉じるとゆっくり、視線をサキの方へと向ける。

「今から私の持てる全てを出します。だから貴女はそれに耐えてください」

「アンタは一体何を……？」

そこまで言ったのと同様。

一陣の風がその場を支配した。

吹き荒れる魔力。

放出、吸収を繰り返すことで見える擬似的な発光現象。

その姿はまるで小さき白銀の妖精。

「冗談じゃないわよ……」

信じられない事象だがサキ自身の思考の速さ。なにより目の前の光景が真実を物語り最早苦笑しか出てこない。

「……装填結界発動、ビヤカリョウラン白夜繚乱」

浅儀の禁忌。

それを体現させる一人の少女。

「アンタには私と朧、二人のデータが組み込まれているってわけね」

「はい。流石のドクターも禁忌の体言には手を妬いたようですが、浅儀朧の使用データ。ISによる発動媒体、ツインレリックからの魔力供給、戦闘機人としての魔力を介さない独自のエネルギー。それらを組み合わせることで擬似的にでも発動させることに成功しました」

神々しささえ感じる威圧感を放ちながら淡々と述べる白銀<sup>サヤ</sup>。

「……やってやるわよ」

対するは死に体の身体で高濃度の魔力を放出し続ける白<sup>サキ</sup>。

ふらつく足腰にムチを打ち、地面に刺したオートクレールを抜き去り、虚勢とも取れる言葉とともに剣を構える。

「見せてください……私の為に、貴女の強さを……」



強風が吹き荒れ、瓦礫が崩れ落ちる。

その瞬間。

白銀と白は今一度駆けた。

海上。

三つの閃光が輝きを放ちながらぶつかり合う。

その中の一つ金色の光、フェイト・T・ハラオウンはザンバーフ  
オームのバルディッシュを握りつつ二人を相手にしているとは言え、  
決めきれないこの状況に内心かなり焦っていた。

襲撃を受けている六課へと先にエリオとキャロを向かわせた。

二人にはすぐに追い付くと言ったが予想以上の強敵に阻まれ既に  
相当の時間が経過してしまっている。

心配事はそれだけではない。

地上本部と六課の様子、通信の繋がらないギンガ。そして同様に  
繋がらない翔。

早くしないと……

ただただ焦りだけが加速していく。

「心配事ですか、フェイトお嬢様」

「ッ！？」

声の主は左右の足首と腿に小さな羽を生やした紫の短髪をした女性。

ナンバーズのNo.3、トーレだ。

「ならお急ぎください。間に合わないかもしれませんよ。いろいろと」

「ッ！？ スカリエッティはどこにいる！ 何故こんな事件を起こす！」

「お望みでしたらいつでもご案内いたします」

「勿論、貴女が我々に協力してくれるのなのですが」

もう一人は薄い桃色の髪をし、両腕に刃のついたブーメランを持った女性。

No.7、セツテ。

「彼は犯罪者だ！ それも最悪の！」

仲間になれ、という言葉にフェイトは真っ向から反対する。

「……悲しいことを言わないでください。ドクターは貴女やあの少年の産みの親のようなものですよ」

「くっ……！」

トーレの言葉に歯を噛み締めるフェイト。

彼女にとって捕まえるべき凶悪犯罪者であるスカリエッティだが、トーレの言葉もまた間違っていないのだから。

「貴女方の命はドクターがプロジェクトFの基礎を組み上げたからこそ」

「黙れ！」

そう、スカリエッティがいなければフェイトが誕生することはなかった。

自身を救ってくれたのは、共に生きることを契約したアルフ、親友のはやて達、温もりを与えてくれる家族……そしてどこか放つてはおけない、朔。

この出会いがあつたのも元を正せばスカリエッティの功績。

それがフェイトに歯がゆさを与え怒号を上げることしか対抗出来ないのだ。

「……仕方ありませんね。またお会いすることになると思います。その時はゆっくりとお話を」

ため息をつくと同時に二人の周りに紫の光が舞いはじめる。

「ああ、それともうお気づきかもしれませんが」

トーレはまるで何かを思い出したようにフェイトへと話し掛ける。

その瞬間、まばゆい光と共に激しく音が鳴り響き、フェイトの視界を遮った。

次はもう、貴女は私達には勝てません

次の瞬間にはもう辺りには自身を残し、誰もいなかった。

「ッ!?!」

暴力にも等しい白いの斬撃を紙一重で回避する。

たとえ回避に成功して安心してはいられず、二撃、三撃、四撃と一息の間に数多もの斬撃を繰り出され全くもって気を抜くことが出来ない。

防御に徹している現状でも戦闘機人の身体を活かした有り得ない筋肉のしなりからくる攻撃に少しまた少しと切り傷が増えていく。

「……………っ……………!?!」

サキの身体に激痛が走る。

長時間の魔力放出が彼女の身体に多大な負荷を与え、身体機能を急激に蝕んでいくのだ。

そんな状況下で勝利への道筋は限りなく零に近い。

けど零じゃない。

サキはサヤの斬撃に加え内からの痛みにも耐えながら状況を打破する為の機会を窺い続ける。

「ッ!？」

そして見付けた。

否。

作り出した。

起死回生の瞬間を。

サヤの顔に驚愕の表情が浮かび上がる。

一瞬、ほんの刹那の時間、攻撃の手が止んだのだ。

理由など知らない。

わからない。

そんなことはどうでもいい。

ただこの時、この瞬間まで粘り続けたのはサキの力なのだから。

神煉流壱式

オートクレールを腰溜めの体勢で痛覚を遮断し、魔力を引き出せる限界まで高密度に圧縮していく。

「ッ  
「！」

サヤも急いで防御に転じるが、コンマの差で斬撃の方が早い。

「白閃ッッ！！」

二つの影が静止している。

ひとつはサキ、ひとつはサヤ。

そしてバタリと、片方が地に伏せた。

地面には血液が流れており、倒れた方が死んでるようにしか見えない。

「……………う……………」

声にもならない音を発しながら身体を必死に動かそうとするが全く動かない。

そして立っている方、戦いの勝者もまた、未だ身体を動かすことが出来なかった。

「……………助かった？」

勝者はサヤ。

最後の瞬間、サキが剣を届かせるその前に激痛が身体を走り、血を吐きながら倒れたのだ。

サヤ自身も最後の攻防、何故か止まった自身の腕に疑問もあったがそれを上回る自身が体感した『死』という感覚に言葉が出なかった。

「……と、とにかく浅儀翔は貰っていきます」

「……ま……まち……さい……ッ」

とりあえず自身に与えられた任務を遂行するため、翔へと近付いていくサヤ。

それを止めようと声を絞り出すサキだが全て意味がない。

サヤが翔の前に立ち、手を伸ばす。

その瞬間、

異常な重圧が空間を支配した。

「　　ッッ!？」

突如接近してきた何者かからの一閃。

それを大剣、フェアベルデンで受け止め、瞬時に出せる全速力を出し切り、後方へ大きく跳び再び構える。

「　　なっ」

前を見据えるサヤの瞳からは驚愕が見て取れる。

刃こぼれ。



一撃。

たった一撃を受け止めただけで刃が欠けてしまったのだ。

それはあのまま進めば自分が死んでいただろうということを確認に指し示している。

肌に直接伝わる圧迫感、プレッシャー。

今も目の前でただならぬ威圧感を放つ者から目が離せないでいるサヤ。

「……何者なんですか？」

無意識にそんな事を呟いていた。

口を開くことなく構える姿には一切の隙もなく、その気迫は高き獅子かと錯覚させる。

「何者なんですか……」

呼吸もなく、微塵の筋の動きもない。

静止した状況でただただ剣を構える。

「何者なんですか、貴方は」

サヤは堪らずその人物の名を口にだす。

浅儀 昶

と。

昶は一言も発せず、ただデュランダルを構えているだけ。

しかしその姿はいつもの様子とは天と地の差があり、一つがそれを明確に現している。

「……まだ気絶してる？」

注意深く昶を観察すると彼は未だ意識を取り戻していない。

まさか無意識下でこれ程の重圧を……？

「……………ふふ」

何故か自然と笑みが零れた。

すう……

肘を顔の横にまで持って行き刃の欠けた剣を昶へと向ける。

身体の腰から足元へと意識を巡らせ、ぐっと溜め込み爆発させる。

限界速度で疾走。

腰を捻り、手首をしならせ、横の回転運動で遠心力を増幅させ爆発的な威力を生むサヤ。

向かう朧も静から動へ。

初動を殆ど感じさせず一気にトップスピードまで跳ね上がり、無茶な動きに身体が悲鳴を上げる。

補助もなしに限界を越えた異常な加速力からデュランダルを振り下ろす。

金属がぶつかり合う音。

勝負はその一瞬で決まった。

フェアベルデンが根本から折れたのだ。

「……貴方のその力は」

「」

背を向けながら呼び掛けるサヤに朧はやはり口を閉じたまま。

「……まあいいです」

その様子に解答を聞くのを諦め、折れた大剣を待機状態に戻しつつ、朧とサキへと視線を向ける。

「フェアベルデンもあんな状態ですし、今回は撤退させてもらいます。恐らくもう一度会うことになると思います。その時にまた見せ

てください。貴方たちの力を、その源を、私の為に……」

そう言い残しサヤは去って行った。

その姿を見届けながら朔はまるで憑き物が取れたように倒れ伏せる。

残ったのは倒れ込む朔とサキのみ。

辺りは戦闘の余波で既に原形を留めていない。

火の手も上がり、夜の空が赤く燃える。

その日、機動六課は……管理局は大敗した。

【れいんぼすと】

夕「どうも、夕です。今回は六課全体が忙しく出れない為、私にお呼びが掛かりました。しかしここで一つ問題があります。何かわかりますか？」

……

.....

.....

タ「はい、そうですね。私以外にここに出られる人がいないんです！ ですから！ で・す・か・ら！ 今回はまだ登場していない第二章から登場予定の方をこちらにお呼びしたいと思います。どうぞ」

？「こんにちは！ 今回は皆さんがお忙しいとのことで私にお呼びがかかりました、ユ」

タ「はい、禁止い！！ 名前公開まだ禁止！！」

？「何故ですか！？ 男たるもの名乗りは最も重要な事なんですよ！？」

タ「君はまだ登場してないんだから今出てきちゃいろいろまずいでしょ！？」

？「なら僕にどうしろと！？」

タ「とりあえずＹと名乗っとけ。それくらいなら大丈夫だから」

Ｙ「私に偽名を使えというのですか！？ 跳んだ屈辱です！」

タ「そこまで！？ そこまで嫌なの！？」

Y「当然です！ 貴方は僕に料理を作れと言っているようなものなんですよ！？」

タ「全然大したことじゃない!? むしろ作れた方がいいぐらいだよ!?」

Y「料理は女性が作るものです！」

タ「それは差別だ！」

Y「いえ、区別です！」

タ「大差ないわバホオオオオオオオオオオオ!!!」

Y「仕方ありませんね。男たるもの潔く引く事も時には必要だと師匠が言っていましたから」

タ「……………ハア……………それじゃあ今回の内容を一言で表してみようか」

Y「読みにくい！」

タ「本人を前に容赦ないな！？」

Y「真実を語つたまでです」

タ「読みにくくてすみませんでしたね!! 自分でもわかってたよ!!」

Y「逆ギレですか、それでも男なんですか？」

タ「……話が進まない(泣)」

Y「何を泣いてるんですか、男が泣くなんて言語道断です。いいですか？ そもそも男というものは……」

ユ　ゲフンゲフン。

Yの男講座開催中、暫くお待ちください

Y「　と、いうことです。理解出来ましたか？」

タ「わかったよ、わかったから早く続きをやらせて……」

…… 5分後

タ「それじゃあ改めて今回の要点はどこだった？」

Y「サキさんとあの戦闘機人、サヤさん……でしたっけ？　その二人の戦闘ですね」

タ「そう。ぶつちやけ今回は結構ツツコミ所が多いのです」

Y「二人の戦闘が凄く見えないうところとか？」

タ「それは私のせいですね！ すみませんねへタクソで！」

Y「でも僕から見てみるとやっぱりサキさんは強いですね」

タ「我が作品屈指のチート代表だからね」

Y「今回も前回もサキさん本気出してないですよ？ 負けちゃいましたけど」

タ「それに関しては正しいとも言えるし正しくないとも言える」

Y「結論だけを言ってください」

タ「そんなツンツンキャラじゃないだろお前……ええと今のサキは本編中でも言われていたとおり、本来の実力をまるつきり出せていません。全盛期の約三割以下とお考えください」

Y「サキさんですからね」

タ「うん、サキだから」

Y「他に見所と言えば、サヤさんが装填結界を使用しましたね」

タ「アレは朧が研究所破壊の時に使用した装填結界のデータを取って擬似的に再現したものなんだ」

Y「あの能力、ホントは凄いですけどね」



タ「朧はまだまだ使いこなせてないから仕方ないよ」

Ｙ「朧さんは男に成り切れてないですから」

タ「……一応どういう意味か聞いておこうか」

Ｙ「男があんな身長じゃダメです」

タ「うん、とりあえずそれを朧の前で言うのはやめてあげてね」

タ「今回はこんな感じで終了です」

Ｙ「漸く終わりですね」

タ「ん、なんか予定でもあった？」

Ｙ「トレーニングしたいんです」

タ「……男だから？」

Ｙ「貴方も漸くわかってきましたね！ 勿論その通りです！ トレーニング後のコーヒー牛乳は絶品ですよ！」

タ「そーだねー」

Y「ハッ！ こうしちゃいられません！ 早くトレーニングを始めなければ！」

タ「と、言うことらしいのでここでホントに終了です。疑問や質問、意見、誤字脱字などお待ちしています！ 今回は私、タと」

Y「男の中の男を目指すユ」

タ「Y！ YだよY！」

Y「……納得出来ません」

タ「もう納得出来なくてよろしい！！では」

タ・Y「次話にてお待ちしております！！！」

第四十三話 その日、機動六課（後）（後書き）

どうでしたか？

疑問点などがあればどんなものでもいいのでおっしゃってくださいね。

ネタバレにならない限りお答えしたいと思いますので。

そして【れいんぼすと】……

つい出しちゃった、てへ

後悔も反省もしてないがな！！（オイ

それでは、次話にてお待ちしております！！

第四十四話 決意（前書き）

どうも夕です!!

遅くなり大変申し訳ありません!!

今回はフェイトちゃんタイムなので皆でフェイトちゃんに悶えまじよう（笑）

ではどござ!!

## 第四十四話 決意

リイン、オイ、リイン!?

返せ……ギン姉えを……返せよおおおおおおお!!

どおけええええええええええええええ!!

壊さないで……私たちの居場所を……壊さないでええええええええええええええ!!

大事なものを傷付けられ、奪われ、幾つのも嘆きが暗い空、赤き空にこだまする。

だがこれでは終わらない。

終われない。

持って行かれたものは取り戻す。

そして今度こそ護って見せる。

機動六課は、まだ終わっていない。

フェイトはとある一室のパイプ椅子に腰掛けている。

その表情は決して優れてると言えるものではない。

ここ数日、対応に追われてまともに睡眠時間が取れていないのだ。

管理局が僅か十数分で本部の機能を停止させられ大敗したガジエツトと戦闘機人による地上本部への攻撃から既に五日が経過し、最低限の態勢を立て直す事は出来た。

それでも管理局が受けた被害は甚大。

怪我人だけでなく、死人も出てしまった。

「私たちの家も破壊されちゃった」

それは当然管理局に属する機動六課にも言えることで、無防備に近かった六課も襲撃を受け壊滅。

残っていたメンバーも大なり小なり傷を負った。

ザフィーラやヴァイスに至っては絶対安静にしておかねばならない状態。

そしてここにも未だ目を覚まさない一人がいる。

「とりあえず私たちの住居や本部ははやてやアコース査察官が頑張ってくれてアースラに移ったよ。区画整理は済んでるから朧の部屋もちゃんとある」

フェイトは白いベッドの上で静かに眠る朧に語りかける。

あの日、戦闘機人であるトーレ、セツテとの戦闘が終了し急いで六課へと急行した彼女はその場の光景に思わず息をのんだ。

破壊された六課のこともあったが何より驚いたのはそこにいた“黒き火竜”の姿。

キャロの故郷、アルザスにおいて大地の守護者と呼ばれる真竜ヴオルテール。

その竜が咆哮をあげながら佇んでいたのだ。

近くにはずぶ濡れになったキャロと気絶したエリオとフリード。

倒れ伏すシャマルとザフィーラ。

崩れかけた六課の中にまだ人が残されている事を確認し、フェイトはすぐにキャロにヴオルテールを還させる。

そして各員を病院に運ぶ手配を済ませていた折りに受けた連絡。

朔が重傷を負って倒れていたとの知らせ。

ダメージの大半は魔力によるものだったが、切り傷が多く出血も少なくなく、なにより筋肉や腱の炎症が酷かった。

原因は意外なところから知らされた。

「はやてが教えてくれた。サキさんと戦ったんだよね」

朔は襲撃に参加したサキと戦い、敗北したのだ。

実際はその後にサヤという戦闘機人がやってきたのだが、そのことをフェイトたちは知らない。

何故か？

詳細がわからないのだ。

何故か？

至極簡単だ。

目撃者がいないからだ。



戦闘があつたとおぼしき場所はかなりの範囲まで広がっており、その場には昶と一振りの剣、そして殴り書きされたメモが一枚だけ残っていたとのこと。

そのメモには

「レインを借りるわ」って……」

そう、昶のよき理解者は今この場にはいない。

レインはサキが連れ立ったのだ。

オートクレールを置き去り、代わりにデュランダルを持って。

今、昶の首に巻かれたチョーカーに赤い宝石の姿はない。

「レインとサキさんは何をするつもりなの……？」

デュランダルはその性質上自ら持ち主を選ぶ剣。

レインが現マスターである以上彼女とユニゾンしないと使用出来ない。  
ない。

そこからサキが何かしようと画策し、それにレインも賛同している事が容易に想像出来る。

「こんな時にレインまでいなくなるなんて……」

フェイトは顔を俯け、ギュッと膝上の握りこぶしが強く握る。



さらわれたヴィヴィオの事や怪我を負った隊員の事を確認したらすぐに仕事へと戻り、何一つ弱音を吐かなかったのは。

それがエース・オブ・エース。

それが高町なのは。

「でもなのはだって普通の女の子」

約束……破っちゃったなって。私がママの代わりだよって、守っていくよって約束したの、傍にいてあげられなかった。守ってあげられなかった！

どんなに凜としていても。

どんなに強くても。

あの子きつと、泣いてる……！！……ヴィヴィオが一人で泣いてるって、悲しい想いとが、怖い想いしてるかもって思うと、体が震えてどうにかなりそうなの……！！

「どこにでもいる十九歳の女の子」

つらいことだってある。

哀しいことだってある。

泣きたい時だってある。

「そんななのはに私は“大丈夫だから”としか言えなかった……！」

曖昧な言葉しか掛けられなかった自分の不甲斐なさに更に拳に力が籠る。

でも

顔を上げ、朧の手を握る。

その手は奮えていた。

「はは、どうしたんだろ。奮えが止まらないや」

枯れた笑い声。

同じなのだ、フェイトも。

いつもの凜とした彼女は今ここにはいない。

怖いこともある。

不安なこともある。

普通の、どこにでもいる十九歳の女の子。

六課の隊長達はエリートが故、周りからの期待が高い。

そんな彼女達が弱音を吐いていたら？

全てを諦めていたら？

周りはどうなるか？

そんな重圧が常にフェイト達にはのしかかっている。

魔王なんかじゃない。

死神なんかじゃない。

ロストロギアなんかじゃない。

みんな十代の女の子なのだ。

「……朔の手は暖かいね」

手の平から伝わる人の温もり。

それがフェイトの気持ちをゆっくりと落ち着かせていく。

「私は……なのはに言ったから、大丈夫だって」

だから助けよう、二人で

「それを嘘には絶対しない。その為の準備も着実に出来てきてる。六課もこれからレリック捜査からスカリエツティ一味の追跡に任務が変更になると思う」

コネクションを使ってアースラの稼働、負傷したヴァイスの代わりヘリの操舵手になったアルト。ゲンヤ・ナカジマ三佐の部隊と共同でのスカリエツティのアジトの捜査。

使えるものは全て使ったフル活動。

「だから朔は安心して休んで。レインのこと、サキさんのこと……私に任せて」

朔が抱えていた悩み。

それが一体なんなのか、フェイトのはわからない。

その答えは朔自身が見つけなくちゃいけないのかもしれない。

だがその本人は今も彼女の目の前で眠っている。

レインもいない。

「なら私がサキさんを捕まえて、朔の前まで連れてくる」

それはとてつもなく難しく、達成する方が困難な内容。

「けどやってみせる。ギンガも、ヴィヴィオも……レインも、サキ

さんも、皆助けて、連れてくる。だから」

そこまで言い終わるとフェイトはおもむろに少し腰を浮かべ

朧の頬にそっと唇を当てた。

「目が覚めた時にはきっと全部終わってて、また一緒に心から笑いあえるから」

そう言っつてフェイトは少し顔を赤く染めながらも優しげな笑みを浮かべる。

いつしか奮えは止まっていた。

そこにいるのは普段通りの、凜とした一人の執務官。

「それじゃあ、行ってくるね」

フェイトは病室を後にする。

残された朧の手に青い宝石が握られたまま。

病院の入り口から出てきたフェイトは近くに備え付けられた時計で時間を確認した。

「もう少しで休憩時間もおしまい。そろそろアースラに戻らなくちや」

ここまでずっと現場捜査や書類整理やらで働きづめだったフェイトにやってきた休息。

その終了にはまだいくばくか時間がある。

「うん、この時間だったら余裕をもって帰れるかな」

アースラへ戻ったら入院している隊員達の様子をはやてに報告し、スカリエツテイ一味のアジトを搜索。

その為の手掛かりになりうるかどうかはわからないが、一つ変な動きがあった。

…… 聖王教会に届いた一つの伝達文

騎士カリムより聞き及んだ話によると、そこにはとある場所の座標だけが書き記されており、訝しみながらも彼女はその指定された場所へ数人の部下を向かわせたが、そこには予想だにしなかった光景が広がっていた。

「人造魔導師素体の培養所……」



ずらつと並んだ生体ポットの数々。

騎士達はその光景に圧倒されたが、すぐに収容し病院へと搬送し治療に当たったとのこと。

施設の動力は生きていた。

あれは間違いなくスカリエッティの研究所だ。

離反者？

それともスカリエッティ自らが……。

幾ら考えても答えは見付からず、泥沼へ落ち込みそうなので一旦保留。

フェイトは自らの車を駐車している場所へと向かい

「やっと会えたわ」

「ッ！？」

背後から掛けられた聞いたことのある声にフェイトは驚きつつ振り向いた。

「貴女は……貴女達は……！」

そこにいたのは二人の女性。

長髪とローブを黒一色で染め上げた女性が一人。

もう一人は蒼い髪と翡翠の瞳を持ち着物を着こなす小さすぎる女性。

「ちょっと朧の様子見てきたけど、大丈夫そうね」

【久しぶり。フェイトちゃん】

「サキさん……レイン……ッ！」

思い思いに話す二人に対して突然現れたことに困惑するフェイトだがすぐさまバルディッシュを起動させ、構える。

「そんなに警戒しなくていいわ。戦う気なんてないから」

身構えるフェイトに笑みで応えるサキ。

警戒を解こうとしないフェイトにレインが仲介に入る。

【サキはね、フェイトちゃんに会いにきたんだよ】

「私に……？」

どっという意味だ……？

サキさんと会ったのは今までに二回だけ。それも直接話したこともないのに……。

依然、意図が読めない彼女たちの行動に訝しむフェイト。

「そうよ。フェイト・T・ハラOWN執務官、貴女に用があったの」

彼女の反応に対してサキはやっぱり笑って返した。

「……それで私に話ってなんですか？」

三人はあのまま駐車場にいるわけにもいかず、近くのカフェテリアに移動して今は外のテラスで向き合いながらお茶をしている。

湯気の立つカップを口に近付け一口含み、サキからの言葉を待つ。

「私が聞きたいのは一つよ」

出会った時とは真剣さがまるで違うサキにフェイトも口に含んだ液体を喉の奥へと流し込む。

「フェイトちゃん、貴女は朧のことどう思ってるの？」

……

……

……

……え？

ナニヲイツテルノコノヒトハ？

「いろいろ聞いたわよ。朧となんだかい感じらしいじゃない」

彼女の言葉にフェイトの顔が瞬時に赤く染まっていく。

「なな、何をいきなり！？ いいい、いい感じてどういう意味ですか！？」

「どういう意味って……もう、そんなことを私に言わせるつもりなの？」

頬に手を当てながら別に恥ずかしくもないくせに恥ずかしそうに見せるサキ。

間違いなくフェイトで遊んでいる。

「わ、私達はまだそんな関係じゃありません!!」

「へえ、聞いた？ レイン？」

【勿論】

「ふえ？」

思わず何が？ とでも聞いたそんな素っ頓狂な声を上げてしまう  
フェイトに対し意地の悪そうな口元をニタァつと吊り上げる悪女が  
二人。

「まだ” って事はそういう予定はあるのね？」

「ちちち、違います!？ そ、そそ、それは言葉の綾……」

両手をブンブンと振りながら必死に否定するが、他者から見れば  
その態度は明らかに逆効果で。

「ぶっちゃけどこまで行つたの？ キスは済ませた？ まさかもう  
ヤっちゃっ……んなわけないか、あの子にそんな度胸あるはずない  
し」

「キ、キキ、キス!？ ヤヤ、ヤっちゃ!？ あうう……」

フェイトとて十九歳という年頃の女の子。

そついう知識も一応所有している。

無論経験などあるわけないが、それでも彼女を瞬間湯沸かし機に

するのには充分だ。

「うう〜」

【フェイトちゃんは反応が可愛いなあ】

「ホント、見てて飽きないわねえ」

耳まで赤くして小さく縮こまった彼女の反応を見て愉しむレインとサキ。

「そ、そんな話ならもう帰ります!!」

バンツとテーブルを叩き立ち上がる。

「まあ待ちなさいって。これでも貴女には本当に感謝してるのよ？」

「……………」

「あの子…… 鞆を支えてくれたのは貴女だってレインから聞いてるわ。貴女がいなかったら鞆が今よりもっとヒドイものになってたみたいね」

「そ、そんな…… 私なんて何も……」

初めて聞いたサキからの真面目な話にフェイトは戸惑いを覚えつつも口を開く。

「フェイトちゃんならわかるかな？ 鞆は…… 脆い」

「はい……」

サキの言うことにフェイトは酷く覚えがある。

出会った当初の翔はフェイト以外に心を開こうとはしなかったし、六課でも事あることに悩み、苦しんでいた。

「翔は不器用な子だから、大事なことになるほど自身の内に抱え込む。今だってそうでしょ？」

……やっぱりわかるんだ。

長い間翔とは会っていなかったはずのサキなのに、それでも彼女はまるで今の今まで近くで見ていたかのように翔のことを見事に言い当てる。

そう話す姿を見て改めてサキが翔の師匠なんだと再認識し、それと同時にサキがどれほど翔の事を想っているのか、フェイトにはひしひしと伝わってきた。

「恐らくあの子の事だから私の事で悩んでるんでしょうね」

「わかっているのならどうして!？」

見透かしたような言葉に思わず怒鳴りたててしまう。

想いのままに怒りを露わにするフェイト。

それをサキは何故か優しい眼差しでみつめる。

「ごめんね、それは出来ない……私にも事情がある……でも安心したわ……あの子の近くにこうやって真剣になっってくれる子がいてくれて」

違うんだ……。

サキさんは師匠だけど……それだけじゃない。

彼女が心から紡ぎだした言葉に嘘偽りはなく、その表情は師といふよりは弟を心配する姉。

「それでね、フェイトちゃん。貴女に一つ頼みがあるの」

「私に、頼み……？」

「貴女にあの子を……朮をこれからも支えてあげてほしいの」

お願い、と頭まで下げる。

「ちょ、頭を上げてください！ そんなことしなくても！ 第一私だけじゃなくてサキさんやレインだって……」

サキらしからぬ改まった言動に思わず慌ててしまふフェイト。

【私たちじゃダメなの】

今まで黙っていたレインが口を開く。

「ダメって……どうして……」



【手も貸すし、誠意を尽くして支援する。けど私じゃダメなの。私  
はあくまで朧ちゃんの“鞘”となる存在。いつかは抜き出さないと  
いけない時が来る】

「鞘……？」

フェイトは鞘が何を表す言葉なのかわからないが、サキが話を進  
めていく。

「わからなくていいわ……まだ、ね。今はとにかく私達じゃダメだ  
ということさえ理解してくればいい」

「なら、サキさんはなんでダメなんですか？ 今回の件があったと  
してもいつかはまた朧と一緒に」

今回の事件が無事に終われば、サキには恐らく裁判が待っている。

管理局への襲撃は決して軽い罪ではないが、サキは死人を出して  
いない。

なんらかの制限はつくかもしれないが、それでも再び朧と共に歩  
める時が来るかもしれない。

「無理よ」

そんな淡い希望をサキは一言で切り裂いた。

「どうしてですか……？」

「それは」

……言い切ったからには何か納得せざる負えない理由があるはず。  
彼女とて本当は朧と共にいたいはず。

フェイトはその目でじつとサキを見据え次の言葉を待つ。

もう長くないからよ

一瞬、時間が止まった気がした。

……そ、それって

先ほど潤したはずの唇は既に乾ききっている。

その唇をフェイトはかろうじて動かす。

「私は失敗作の人造魔導師。それに加えてちょっと特殊なものを積んでてね」

サキが宙に手をかざすと赤い水晶体の映るモニターが出現した。

これは……

現れた物質にフェイトは酷く心当たりがあった。

なにせ機動六課の名目上の始動目的はソレの搜索なのだから。

「レリックを使用したツインレリックシステム……？」

モニターに羅列された初めて聞く言葉をフェイトは反芻するように読み上げた。

「相性のいい二つのレリックを埋め込みリンカーコアと融合させることで相乗効果を生み、無限に等しい魔力を手に入れる」

【けどサキに取り入れられたソレは試作段階の代物。レリックが徐々に身体を蝕んで臓器器官などの活動を停滞させる。それは高出力の魔力を出せば出すほど侵蝕速度が速まるんだって】

淡々と、まるで他人ごとのように二人は話していく。

「だ、だったら今からそのレリックを取り除けば……！」

「もう手遅れよ。それに私は既に死んだ人間……どうせレリック抜きじゃ生きれないし、レインと貴女に伝えた今、今更二度目の生に執着なんてないわ」

「そんな……」

自身の意思をはっきり伝えるサキに困惑するフェイト。

「それにしなくちゃいけないことも増えたし、今この魔力を失う訳にはいかない」

……どういふこと？

私はサキさんのことをよくは知らない。でも、この人の目的は初

にあった事はわかる。

なら今更何を……？

「……貴女達はこれ以上何をするつもりなんですか？」

冷汗が垂れる。

この返答でフェイトがとる行動が決まるのだ。

もし戦う事になって勝てるかどうかわからない。

しかし彼女は執務官。

犯罪行為を犯す者をみすみす逃す事は出来ない。

「やることは貴女達と同じよ」

スカリエッツィのやることを止めに行くの。

その言葉にフェイトは耳を疑った。

「貴女はスカリエッツィの味方じゃなかったんですか!？」

いつにもまして不可解な言動。

今までの行動とまるつきり矛盾している。

「前に言ったでしょ？ あんな奴の仲間になった覚えはないって。

その証拠に私の知ってるアジトはもぬけの殻だったし。ああ、これ

を渡しておくわ」

そう言ってサキは情報端末を一つフェイトへと差し出した。

「これは……？」

「私が前に変態のアジトから抜き出したデータが入ってるわ。プロテクトが堅かったモノは流石に無理だったけど中には役に立つモノもあるでしょ」

【それと念のためにフェイトちゃんにこのデータを渡しとくよ】

バルディッシュのコアが光り、データが転送される。

【その中には私がサキから聞いて纏めた新型の戦闘機人のデータが入ってる】

「新型……？」

【それは保険。新型の相手は私とサキでするつもりだけど、はつきり言ってる分が悪い】

「ッ！？」

……サキさんが勝てない！？

フェイトは驚きを隠せなかった。

いつも圧倒的な力を見せて朧やなのはを退けたサキの更に行き届く敵がいるというのだ。

「それと……これは私の勘なんだけど、多分まだ向こうにも私が知らない隠し玉があるわよ」

「……なっ!？」

「スカリエッティがあONSE ああフェイトちゃん達は知らないんだったわね……ヴィヴィオちゃんだっけ? あの子を連れ去ったのは何故だと思っ?」

「ヴィヴィオ……オ?」

サキの口から飛び出した思いも寄らなかった名前。

確かにヴィヴィオをさらった理由はわからない。

人造生命体という特殊な出生だが普通より少し魔力が高いだけの少女。

そうなるとヴィヴィオに固執するだけの理由があると考える方が自然。

【ヴィヴィオに元となった素体がいるのには気付いてるよね】

「うん……」

レインの言ひ通り。

当初から言語や意思がハッキリしていたヴィヴィオ。

それは複写クローン。

プロジェクトFが関わっている証拠。

フェイトにとっては複雑な技術。

【言ってしまうとね、ヴィヴィオは聖王オリヴィエのクローン体】

「聖王!？」

聖王オリヴィエ。

古代ベルカ時代の王であり、聖王教会の信仰すべき対象。

どうしてそんな昔の人が素体に……？

そもそもなんでレインがそのことを？

【確か騎士カリムの預言にはこうあったよね。“聖地より、かの翼が蘇る”って】

こくり、とフェイトも無言で頷く。

【聖王と蘇る翼。そこから推測出来るスカリエッティの切り札は】

「ゆりか」。聖王のゆりか。」

「聖王の……ゆりか。」

サキの解答にこだまするようにフェイトが反復する。

### 聖王のゆりかご

古代ベルカ聖王時代にあったとされる、最強の質量兵器。天地を統べる聖者の舟。

そんなものが本当に？

【まあこれは私とサキの推測。だから違つかも知れないけど、一応無限書庫で調べてもらっておいた方がいいと思う】

レインの忠告にフェイトは素直に頷いたが内心では信じられない、否、信じたくない、と言う気持ちが大半をしめていた。

もしそんなのがやっところられたら……

考えただけで恐ろしい。

「大丈夫よ」

フェイトの考えを読み取ったのか、サキは優しく声を掛けた。

「私は負けないわよ。その為にレインとデュランダルを借りたんだから」

任せなさい、といったもののような笑顔を向ける。

その表情はどこか見たことがあって、ひどく安心出来た。



敵対していた時は脅威だったけど、味方と思うところんなにも頼もしいんだ。

フェイトは心が晴れていくような気がした。

「伝える事は伝えたし、そろそろ行くわ」

レインを肩に乗せサキが立ち上がる。

「待ってください!」

フェイトの声に周りのお客が注目するが、そんなものを気にする暇はなかった。

「一緒に……戦ってくれないんですか?」

目的は同じなんだ。

だったら……

しかしサキが首を縦に振ることはなかった。

「私には私のやり方があるから……貴女達とは一緒にはいられない

わ

一人で進む道を選ぶサキ。

フェイトにはそれが哀しく思えてならない。

その思いが顔に出ていたのか、サキは微笑みながらフェイトの顔に手を触れる。

「貴女は本当に優しい子ね……朧のこと、頼むわ。支えてあげて」

サキはそう告げると、フェイトに背を向けて歩きだした。

【れいんぽすと】

レ「さてさて、今回もまた朧ちゃんは寝ているのでお休みです。なのでこの方に代役を頼んでます」

Y「また僕ですか」

レ「まあまあいいじゃない。それでユ　　ってここじゃあまだYって呼ばないとダメなんだっけ」

Y「僕は全然OKですよ！　むしろ名乗らせなさいと大声で叫びた

いですー!」

レ「うん、もうちょっとだけ我慢してね。コーヒー牛乳買ってあげるから」

Y「仕方ないですね。レインさんの頼みですから。男たるもの我慢の二つや三つ……あ、コーヒー牛乳は忘れないくださいね」

レ「……」

Y「どうしたんですかレインさん？」

レ「ううん……ちょっと凄いなあって思ってた」

Y「？」

レ「今回はもう一人来てくれてるから呼んでもいいかな？」

Y「構いませんよ」

レ「それじゃあどうぞー!」

?「えーつとなんでこんな所にくることになったのかしら？」

レ「はい、非常にやる気が感じられないこの方! 【魔法少女リリカルなのはStrikers 闇を切り裂く者】より、さすらいのストロベ もとい、焰の魔導騎士! ミオ・レッドフィールド  
!」

ミ「なんだが一瞬物凄い不愉快な事言われたような気がしたんだけ

ど、私の気のせいかしら？」

レ「気のせいじゃないかなあゝ、私は知らないし。ユ　Ｙは知ってる？」

Ｙ「いえ、僕はコーヒー牛乳を飲んでいたので」

レ「ああそうなんだ……」

ミ「なんなのこの子は……？」

レ「Ｙに関してはこの紙に書かれたことを守ってね」

ミ「えゝとなになにに、ユ　Ｙの為のお約束条項第一条、ユ　Ｙの名前を本編で登場するまで呼んではいけません。第二条、ユ　Ｙの【ピーツ】を明かしてはいけません。第三条、ユ　Ｙってしつこいわね……Ｙの暴走はある程度は見逃しましょう……なんで？  
第四条、ユ　Ｙ……これってワザと？　ワザとよね？　……上記の三カ条を必ず守ること……」

レ「理解した？」

ミ「ええ、理解したわ。燃やしていいってことね？」

レ「作者にならOKだよ」

ミ「……行ってくるわ」

ミオさんがお通りです。しばらくお待ちください

ん？ ああ、ミオだ。今回は出演ありがとうこれからも って、  
え？ なんでレギオン構えてるの？ ちょ、それは、シャレになら  
n

ミ「ふう、すっきりしたわね」

レ「おかえり〜」

Ｙ「おかえりなさい」

ミ「ただいま……ってアンタまだ飲んでたの？」

Ｙ「これは3杯目です！」

ミ「どんだけ好きなのよ……」

Ｙ「コーヒー牛乳は至高の飲み物です！！」

ミ「なんだかここに来たこと早くも後悔してきたわ……」

レ「大丈夫だよ、きつとなれるから……多分」

レ・ミ『ハア……』

Y「どうしたんですか？　ため息なんてついて。男たるものため息なんてつくものではないですよ？」

ミ「私達は女よ……もういいわ、早く始めましょう……」

レ「そうだね……」

Y「任せてください！！」

レ・ミ『……』

レ「今回はフェイトちゃんメインの話だったね」

ミ「そうね。結構大胆なこともしちゃってるし」

Y「……ん……なん……」

レ「え？」

Y「……ん……………わい……………す……………」

M「ゴメン、よく聞こえないわ」

Y「せせ、せ、接吻なんて卑猥です！！ 不潔です！！ 軟弱です！！」

レ「顔を赤くして何言うのかと思えば……………照れてるの？」

Y「て、照れてません！？ 男たるものが照れるはずがないでしょ！？」

M「ふふ、強がっちゃって、可愛いわね」

Y「強がりなどではありません！！」

M「ホントかな」

Y「ホ、ホントです！？」

M「じゃあ私とキスしてみる？」

Y「ななな、何をいい、言ってるんですか！？ 卑猥です！！ 淫乱です！！」

M「淫乱なんて難しい言葉知ってるのね、偉いわよ」

Y「子ども扱いしないでください！！」

M「あ、私ここ楽しくなってきたな」

レ「心変わりが早いね、気持ちはわかるけど」

Y「……男たるもの、この程度でめげては……」

ミ「次はどんなふうに弄っていかうかしら」

Y「師匠助けてください……」

レ「それじゃあどこか気になった点とかあるかな？」

Y「そうですね……何故レインさんが誘拐されたヴィヴィオさんの事を知っているのは気になりますね」

ミ「私もいろいろとあるけど、一番気になるのはヴィヴィオが聖王のクローンだってなんでわかったのが気になるわね」

レ「中々いいところだね……誘拐された事を知ってるのは調べたからだよ。六課がアースラに移った事ももう調査済みだし」

Y「さすがレインさんです」

レ「大したことないよ。それでヴィヴィオの正体がわかった事についてだけど……これは秘密だね　わかる人にはわかっちゃうんだけど」



ミ「と言つことはこれから先で明かされる機会があるってことね」

レ「そうだね」

レ「はい、今回はこの辺りで終了です！」

ミ「本編に殆ど触れてないけどいいのかしら？」

レ「作者の都合上、あと十五分足らずで上げないといけないから時間がないんだって」

ミ「最低の作者ね」

Ｙ「今更ですね」

レ「今回も誤字脱字、質問、意見などなどどんな内容でも待ってるよ」

Ｙ「ミオさんが登場する、はやコンことボン太郎さんのところの【魔法少女リリカルなのはStrikers 闇を切り裂く者】、それとレインさんや翔さん、ミオさんも出演するテストAMENTさんのところのクロス企画【魔法少女リリカルなのは 時の引き金】も是非読んでください」

ミ「Ｙ、アナタちゃんとできるのね」

Y「男たるもの」のくらい当然です」

M「そうなの……」

L「では」のへんぞー」

L・M・Y『次話にてお持ちしております……！』

## 第四十四話 決意（後書き）

どうでしたか？

もっとフエイトを上手く書きたかった……

意見や質問があれば言ってくださいね？

【れいんぼすと】の方も今回は無理矢理終わらせました。

なにせミオが書きやすい書きやすい（笑）

時間がもう少しあればもっと書けたのに……

だがまだだ、まだ終わらんよ！！（笑）

ボンさん、今回はミオをお貸しくださりありがとうございます！！

不備があれば言ってくださいね。

では、次話にてお待ちしております！！

## 第四十五話 決戦へ(前書き)

どうも、夕です!!

ちくせう、10月中に1回しか更新できなかった……orz

今回はしかもちよい短いっす。

主にサキと今回ははやてですね。

あ、あと文の書き方をまた少し変えてみました。

前の方がいいか、こちらの方がいいか意見をくださると感謝です  
笑)

ではごっごっ!!

## 第四十五話 決戦へ

アースラ内会議室。

隊舎が破壊され、住居と本部を両立できるようにとアコースや多くの人物の力添えにより廃艦前のアースラに機動六課の拠点を移したのだ。

現在は機動六課のこれからの方針が決定したようで、そのことについて話し合われている。

「地上本部の事件への対策は相変わらず後手に回っています。地上本部だけでの事件調査の継続を強硬に主張し、本局の介入をかたくなに拒んでいます。よって、本局からの戦力投入はまだ行われず、本局所属である機動六課にも捜査情報は公開されません」

無情とも言える内容が副官、グリフィスの口から伝えられる。

海と陸。

本局を嫌う地上本部の意地の張った主張により機動六課は完全に孤立してしまった状態。

捜査情報までもが知りえない状態ときた。

最悪の状況。

しかし、部隊長であるはやての瞳には陰りはない。

「そやけどな、私達が追うのはテロ事件でも、その主犯格、ジェイ・スカリエッティでもない。ロストロギア、レリック」

空間にレリックが映し出される。

「その捜査線上にスカリエツティとその一味がおるだけ……そういう方向や。で、その過程において誘拐されたギンガ・ナカジマ陸曹となのは隊長とフェイト隊長の保護児童、ヴィヴィオを捜索、救出する。そういう線で動いていく」

それは屁理屈にも似た捜査方針。  
手段と目的を入れ替えただけなのだ。

「それに、こつちには独自の情報網もある」

聖王教会の騎士カリムやアコース、陸士108部隊のゲンヤ三佐といった情報網。そしてはやてがその手に持つ一つの情報端末。

「サキさんやレインから受け取ったこれは確実に私達のアドバンテージになりうる」

そう、先日フェイトがサキ本人から彼女の想いと共に受け取ったものだ。

はやてはその情報の全てを地上本部に流出してはいない。  
自分たちの動きを制限させられるわけにいかないからだ。

「両隊長、意見はある？」

その言葉にここまで静かに聞いていたのはが不安そうに口を開いた。

「理想の状況だけど……また無茶してない？」

ただでさえ、捜査を継続できるようにといろいろ手を回したのだ。それに加え情報操作がばれるとさすがのはやてもただでは済まない。だがなのはの心配を余所に、はやてはにっこり笑って見せた。

「後見人の皆さんの黙認と協力は固めてあるよ。大丈夫」

クロノ、カリム、リンデイ、そして非公開ながら協力してくれている伝説の三提督。  
根回しには抜かりない。

「こんなときこそその機動六課や。ここで動けな部隊を起こした意味がない」

「了解」

「なら、方針に異存はありません」

はやての行動力と決意を改めて感じ、なのは、フェイト兩名も笑みで返した。

「でもまあ問題は山積みなんやけどね」

そう言って現れたのは、幾つかのモニター。  
そこにはサキと戦闘を行っている一人の少女の姿。

「サヤ、っていうみたいやな、この子」

サヤ

公開陳述会の日にサキを倒したという最新型の戦闘機人。

「詳しいことはサキさんもわからなかったみたいだね……戦闘時の考察が殆どだ」

キーを叩きながらフェイトが次々とモニターを展開させていく。

「人造魔導師と戦闘機人の複合型……彼女のIS、“コピーキャット”は常時発生型で朧やサキさんの技の模倣。これ以上は増えたりしないそうなんだけど……」

不意に、フェイトの指が止まる。

その表情には陰りが見え隠れしている。

彼女の視線の先にはまるで白く発光しているように見える戦闘機人、サヤが圧倒的な強さでサキと戦闘を繰り広げる映像。

「白夜繚乱っていうらしいけど、これって朧くんの蒼昊絢爛だよね……まさか朧くんの装填結界まで模倣できるなんて」

「蒼昊……装填、結界……？ 初めて聞く名前ですけど……」

「それって魔法なんですか……？」

その理由を答えたのはフェイトではなくなのは。

聞き覚えのない言葉にティアナ達も率直に疑問をぶつけた。

「詳しくはあまり言えないんだけどね、装填結界っていうのは朧くんの持つ魔法の名前なの」

「朧の血筋が関係する魔法だよ。使用すれば圧倒的な戦闘力と無尽



の魔力が得られるんだ」

「なのはやフェイトの説明はかなり大雑把だったが現在流れている映像がその凄さを物語っている。」

「確か彼女の相手はサキさんがするって言ってたんやったね？」

「うん、分は悪いけどレインと二人でどうにかするって……」

「なら申し訳ないけど、私らはそこ以外に戦力を裂く」

「……」

「……そう、だよな。」

機動六課は人材が豊富だと言っても所詮は一部隊。動ける人数には当然制限があり、敵に拡散された場合に対処しきれない。

それに加えて現在は戦力である朧も戦えない状態。圧倒的に人手不足なのだ。

フェイトとてそれを理解はしている。だが簡単に納得ができるともいえず、握る拳が自然と強くなる。

「それに、裂くべき場所は他にもありそうや」

「そう言って次にモニターへと現れたのはヴィヴィオ、そしてもう一つ」

「レインの言う通りやとしたら、ヴィヴィオは古代ベルカ時代の王様のクローンってことやけど……」

一瞬ちらりと、横目でなのはを見るがはやてはそのまま話を続ける。

「もしそれが事実とするんやったら、こっちもかなり真実味が帯びてくる」

あんまり嬉しくないけどな、と展開される舟の設計図らしきものを見ながら一人愚痴る。

「念のため無限書庫の方にも依頼して探してもらったけど……ホント、とんでもないものやね。戦史時代の古代ベル力ですら既にロストロギア扱いだっただ古代兵器“聖王のゆりかご”……アルハザードの流出物とも言われとる」

「アルハザード……」

「フェイトちゃん……」

「うん。私は大丈夫だよ、なのは」

失われた古代世界アルハザード。それはフェイトにとって苦い思い出であり、かつてその世界に執着した一人の大魔導師を彷彿とさせるには十分だった。

事情を知るなのは声を掛けるが、当の本人は笑って見せる。今は弱さを見せる時ではないことをフェイトは理解している。なのはもそれをすぐに読み取ったのかそれ以上は何も言わない。

「まあ、今はもしもの話ばっかしてても仕方ないな。今もロツサがスカリエツティのアジトを捜してくれとる」

これまでフェイトやナカジマ三佐、そしてサキのくれたデータを元にアコースが搜索してくれているのだ。

「私らも捜査、出勤は本日中の予定や。皆、気合入れてな」

そう言っけてキリよく終わらせようとはやてが立ち上がり

警報が鳴り響いた。

「さあ、いよいよ復活の時だ……私のスポンサー諸氏、そしてこんな世界を作り出した管理局の諸君。偽善の平和を謳う聖王教会の諸君」

手を空へと仰ぎ、演説じみた狂言を放つ男、スカリエツィ。

「見えるかい……これこそが君たちが忌避しながらも求めていた絶対の力！」

今彼の映像はミッドチルダ全域に流されており、それは民衆の驚愕を浮かべた表情から徐々に恐怖へと変えていくには十分な力を有している。

「旧暦の時代、一度は世界を征服し、そして破壊した……古代ベルカの悪魔の平地、聖王のゆりかご」

（浮上していく特異な形をした舟。）

その光景がスカリエッツィの気持ちをも更に高めていく。

「見えるかい？ 待ち望んだ主を得て古代の技術と英知の結晶は今その力を発揮する」

『あ、ああ……痛い……痛いよ……ママ……ママアアア!!』

幼き少女の悲鳴と共にゆりかご内部の玉座の間の光景が一斉に流れ出す。

恐らくこの映像を見ているだろうエース・オブ・エース。彼女がどのようにこれを見ているのか、それを考えただけで心が躍る。

そしてもう一人、今は敵に回った一人の女性がどのように怒りを表しているのか……

「さあ!! ここから夢の始まりだ!! ははははは、あはははははは、あはははははは」

スカリエッツィの狂気染みた高鳴りは止まらない。彼の欲望と共に。

【少し前にも三基のインヘリアルが襲撃、制圧されてたみたいだね】

凜々しくも少し幼めの声。

なりを潜めていた戦闘機人たちが再び姿を現したのだ。

【三ヶ所とも既に撤退を始めてて速さは以前とは比べ物にならない。早めに叩きたいとこだけどはやてちゃんも嫌な感じに拡散してて隊長陣の投入は難しいだろうね】

管理局員の通信回線に割り込んで手に入れた情報を少女は自分なりに推測する。

二人の女性がいるのは大通りに面した場所。

つい数時間前まではそれなりに賑わっていたのだが今は人っ子一人見当たらない。

「っ……予想は、外れてなかった、つてこと……ね」

ビルを背もたれにしながら苦悶の表情を浮かべ呟いたサキ。大丈夫？ と彼女の傍らで着物を着た少女、レインが声を掛けるが、無理に作った笑みを向けられてしまう。

それ以上言うな、ということなのだろう。

……わかったよ、元マスター。

久方ぶりの再会と言っても元はサキがレインの主だったのだ。言いたいことくらい言葉にしなくても理解出来てしまう。

だからレインも彼女の体調に触れるのではなく、広大な空を飛翔

していく舟を見上げながら話を始めた。

【それで、敵さんはご丁寧に招待状まで送ってきてくれたけどどうするの？ 馬鹿正直に指定された場所へ向かう？】

聖王のゆりかごが出現してすぐ、サキに通信が入ったのだ。

ナンバーズNo.13、サヤから。

ごきげんよう。見えますか？ 今しがた現れた舟、アレが先程ドクターの言葉にあった聖王のゆりかごです。聖王陛下がいる限りゆりかごは墜ちません。仮に中に侵入しようとする魔導師がいれば私が迎撃に移ります。どなたたちが私の足止めをしない限りは……私のはあの舟の甲板でお待ちしておりますので。ああ、これと同じものを浅儀勅にも送っています。だから見せてください……貴女たちの力を。

「言いたいことだけ言って、ホントに不躰な娘ね……」

体調が安定したのか、少なくともサキの呼吸はいつの間にか整っている。

【で、行くの？ その体で】

陳述会のあの日に仕留めきれなかったのだ。

あの時以上に体の機能が落ちてきている現状で勝てる見込みなど零に等しい。

だが、サキの表情はそんな考えを一気に吹っ飛ばす。

「当たり前でしょ？ 何のためにアンタを連れてきたのよ。それに……スカリエツティは私に喧嘩を売ったのよ」

思い出すのは先ほど映った少女の悲痛な声。

あ、ああ……痛い……痛いよ……ママ……ママアアア！！

【多分ヴィヴィオのそこにはなのはちゃんが向かうだろうね。問題はゆりかご内部への侵入経路と玉座までの道のり……それと彼女に剣を持たせなきゃいいんだけど……】

「剣は大丈夫でしょ。それにこれはここまで事態を長引かせた私の責任でもあるし。聖王なんて関係ないわ。あの子への道まで……とはさすがに言えないけど、侵入経路くらい私が確保してあげるわ」

見上げた先には巨大な舟と数百はくだらないガジェットの大群。

「久々ね」

【朧ちゃんにマスター権が移る前以来だからね】

そう言ってサキとレインは互いに触れる。

最後に

【最後に……朧ちゃんにはもういいの？】

朧は未だ目を覚まさない。

無事この事件を終えたとして、サキが朧に会うことはもう……

「言ったでしょ。伝えるべきことは伝えた、あとはあの子次第よ」

微笑しながら答えるサキ。

その姿はどこか哀愁が漂っているのをレインは確かに感じ取った。けどそれは同時に彼女が引く気がないこともはっきりと理解できてしまった。

だからレインも覚悟を決める。元マスターの想いに応えるために。

ユニゾン・イン

神々しい光が辺りを照らす。

中から現れたのは黒ローブに長い黒髪。その容貌はいつものサキそのもの。

ただその瞳だけはレインの色が色濃く出ており翡翠色に輝いている。

「行くわよ」

【つづ】

そうして彼女たちは飛び立った。

最後の戦場へと赴くために。



「ロツサがスカリエッツィのアジトを見つけてくれた」

はやての声が響くのは場所は先ほどと変わらない会議室。

しかし、議題は雲泥の差。もう既に事態は動き始めているのだ。

「そしてこの事件にレジアス中将と最高評議会が関わってることもわかった」

レジアスは地上の平和を願い、そして最高評議会は次元世界の平和を願うての行動。

その志は立派なものだ。はやて自身もそう思う。

気持ちだけでは何も護れないのかもしれない。偽善では何も護れないのかもしれない。

けど

「理由はどうあれ、レジアス中将や最高評議会は偉業の天才犯罪者ジエイル・スカリエッツィを利用しようとしたけど逆に利用されて裏切られた。どこからどこまでが誰の思惑で何が誰の思惑なんか、それはわからへん……」

様々な思惑が交錯し、最早絡まった糸は解けないところまできてしまった。

「そやけど今巨大船が空を飛んで、街中に戦闘機人とガジェットが現れて市民の安全を脅かしてる……これは事実」

かつて闇の書事件、と呼ばれた事件があった。

それは一人の少女を中心に引き起こった事件で、少女の知らないところで引き起こった事件。

いわば被害者ともいえる彼女は自らの守護騎士達と共に罪を被り償っていきこうという強い決意から敢えて反論せず、一切を受け止める覚悟を持っている。

たとえ事実誤認のもとに非難されることがあろうとも。もうこんな理不尽な事で不幸になる人が出ないように。

「私たちは止めなあかん」

どんなに崇高な目的があろうとも、どんなに立派な考えがあろうとも、無関係な人間を巻き込んでいい道理はない。

それが機動六課、部隊長の意思であり、決意。

その決意はまるで伝染するかのように、なのは達の瞳にも闘志が宿る。

「ゆりかごには本局の艦隊が向かってるし、地上の戦闘機人たちがガジェットも地上の部隊が協力して対応に当たってくれてる」

「けど、高レベルでのAMF戦をできる魔導師はそう多くない……私達は三グループに分かれて各部署に協力することになる」

順にフェイト、なのは。ガジェットとの戦闘経験がどの部隊よりも多い機動六課が積極的に動かなければならないこの状況。

圧倒的に人員不足は否めず、多くの負担がかかるのは必須。

「今回の出勤は今まで以上に厳しい戦闘になると思う。FW陣には隊長陣の助けも難しいと思う」

シグナム、ヴィータ、フェイト、なのは、ティアナ達と順に目を見据えながらはやては言葉を紡いでいく。

「上等や。そんな時の為に作った部隊で、そのための前線メンバーや。私は出来ると思じとる」

根拠なんてない。しかし、その言葉を実行できないなんて、はやてにはまるで思えなかった。

「今日で終わらずで！ この事件を！！」

『『了解！！』』

一人は力を知るために。

一人は欲望を満たすために。

一人は自身の贖罪のために。

一人は姉を助けるため。

一人は事件を解決するために。

一人は怨敵を捕まえるために。

一人は娘を取り戻るために。

それぞれの想いを胸に彼女たちは飛び立っていく。

なら今も眠る少年は？

彼は一体何のために……？

【れいんぽすと】

レ「今回も朧ちゃんはいませうん」

Y「男の風上にも置けませんね」

ミ「アンタはそればっかね……」

Y「男たるもの当然のこと……ってミオさんじゃないですか？  
ま  
だ居座っていたんですか？」

ミ「何？ そのなんだか棘のある言い方？」

レ「実はミオちゃんは【れいんぼすと】準レギュラーなんだよ！」

ミ「ミ、ミオちゃんって、ちょっとむず痒いんだけど……」

レ「え〜いいじゃん、ミオちゃん。可愛いよ？」

ミ「可愛いって……私はそんなキャラじゃ」

レ（キラキラ〜 期待の眼差し）

ミ「……ハア、もういいわよ。好きに呼びなさいよ……」

レ「ミオちゃんだね！」

Y「ミオちゃんさんですね！」

ミ「アタのそれはやめなさい」

Y「む、何故ですか？」

ミ「無自覚なのはわかるけど、何となくバカにされてる気がするのよ。今まで通りに呼びなさいよ」

Y「嫌なのなら仕方ないですね……それとホントにミオさん準レギュラーでいいんですか？ 他作者さんのこのキャラクターなのに？」

ミ「大丈夫よ大丈夫。上の方でもう決定してるみたいだし」



レ「今回は戦闘前の準備期間って感じだね」

ミ「軸としてはサキさんとはやてちゃんだったわね」

Ｙ「やはりサキさんは男の中の男ですね！」

ミ「いや、彼女も女性だから」

Ｙ「生き様が男らしいと言っているのです!!」

ミ「……それとなんだかＹに説き伏せられたみたいで釈然としないわね」

レ「はやてちゃんも十九歳とは思えない覚悟だね」

ミ「はやてちゃんはホントに真のしつかりした良い子よ。大きくなっても九歳のころからそこは全然変わってないわ」

レ「はやてちゃんのが好きなんだね」

ミ「当然でしょ？ あんな優しい子滅多にいないわよ」

Ｙ「僕はその方にお会いしたことはありませんが、今回の話からそれが十分伝わりますね」

レ「だからこそスカリエッティにも負けないでほしいね」

Y「こんなに皆さんが頑張っていていつしやるのに、主人公の本人はまだ寝てますね」

M「ホントに主人公なの？」

レ「ん〜まあ大目に見てあげて？ 朧ちゃんもあれで結構頑張ってるから」

M「あんまり期待しないで待ってるわ」

Y「男を見せてくれることを期待してます」

レ「それじゃあ今回はこの辺で終了だね」

M「次はいよいよ戦闘開始？」

レ「その予定ではあるらしいよ」

Y「あまり信用なりませんけどね」

レ「確かに……」

M「それじゃあしめるわよ」

レ「では、」

レ・M・Y「次話にてお待ちしております……！」



第四十五話 決戦へ（後書き）

どうでしたか？

サキもはやてカッコよく書けてたらしいなあ〜って（笑）

ではこの辺で、

次話にてお待ちしております！！

第四十六話 向かうべき場所（前書き）

どうも、夕です。

今日にどうしても投稿したかった！

え？ 理由？ そんなもんは【れいんぽすと】で確認してくれ（笑）

今回も書き方や内容に四苦八苦していますが、どうぞー！！

## 第四十六話 向かうべき場所

喧騒止まぬ旧市街の一角。

まるで湧いて出るように迫りくるガジエットの群れ。

魔導師達も弾幕を張って対処するがその半分以上がガジエットへと接触する前に掻き消えてしまう。

「ガジエットを中央に集めつつ牽制！ 弾幕を切らすな！ 砲撃部隊は準備を！」

圧倒的な数の暴力の中で持ちこたえているのも一重に指揮を執る一人の手腕が大きい。

黒衣のBJを纏う銀髪青眼の女性。

声を響かせるその女性はリーシャ・ヴィルフレイン一等空尉。

首都航空隊所属のストライカー級魔導師だ。

「テンカウント後一斉砲撃を行いガジエットを一掃する！ カウントスリーで第一、第二部隊は後退！ カウント開始、テン、ナイン……」

この周囲一帯を任された彼女が預かっている部隊は陸士部隊と航空隊、それぞれ二部隊の計四部隊の混合編成。

「エイト、セブン……」

異なる部隊を分解し、アタッカーに一部隊、支援部隊に二部隊、砲撃部隊に一部隊へと再編成してなお連携を取れるその姿は彼女のカリスマがあつてこそ。

「……シックス、ファイブ、フォー、スリー！」

指定したカウンターのアクセントを強める。

それと同時に前方にて牽制を行っていた魔導師達が後方へと跳ぶ。入れ替わり前に出たのは十人程の魔導師。

各自が各々の魔力光をデバイスの先端で輝かせている。

「ツー、ワン……！」

弾幕が止んだ事で一気に迫りくるガジェット達だが放ち続けた魔力弾のおかげでその殆どが一カ所に集中。

「てえエツ!!！」

合図と共に全砲撃が一齐に発射される。

その威力はどこぞの某教導官殿の砲撃に比べれば若干見劣りするがそれでも十人の砲撃が合わさるとその威力は莫大で。

「よし!!！」

「やったか!?!？」

所々からそんな声が聞こえてくる。

爆煙が風にさらわれ視界を広げる。

その先には瓦礫と化したガジェット。

「やった!！」

「これで……!!！」

「まだです！」

その光景を見て喜びの声を上げる局員達だが、一人の怒号が周りを戒め警戒を強めると同時に恐らくは砲撃を逃れたのだろう、煙を突き抜けるように？型が数機、局員達の上空を通過する。

「しま」

浮かれている隙を憑かれ突破を赦してしまい急ぎ迎撃に移行。だがそれを実行に移す前に一つの影がガジェット全機を切り裂いた。爆発をバツクに飛翔するのは女性。肩より少し伸びたセミロングの茶髪に虹色をした髪止め。

手に銀の刀身をした片手剣を持つ彼女にリーシャは親しみを持った声色で話し掛けた。

「助かったわ、フィリ」

「元々取りこぼしは私の役目だったし、お礼はいらないよ。姉さん」

そう言ってゆっくりと地につける女性はフィリ・ヴィルフレイン。

二つ離れたリーシャの妹で階級は空曹長。

実の姉妹にも関わらず髪の色が異なるのはフィリが母親の遺伝子の色濃く受け継いでいるからだ。

「とりあえずは小休止ってどこ？」

「そうね、またすぐそろそろとやってきてるけど」

数十、数百のガジェットの軍勢を遠くに確認し辟易するような物

言いでフィリの問いに答えるリーシャ。

「ここだっていつまでも足止め出来るわけじゃないし……キツイわね」

ガジェットは決して弱くない。

学習機能を積んでいるのか、報告で受けていた動きを上回る速度で移動してくる事に加え、御家芸であるAMFが魔力結合を分解し、魔導師に多大な魔力消費を行使させる。

それが多大な負荷となり、数で圧倒されているこちらには体力、魔力ともにくらあっても足りない。

「数に底が見えないし私達は兄さん達の艦隊がこっちにやってくるまでの時間稼ぎに徹したほうがいいわね」

ゆりかごは二つの月から魔力を受けられる軌道衛星上に到達すると高い防御性能を発揮。同時に精密狙撃や魔力爆撃など強力な対地・対艦攻撃が可能になるほか、次元跳躍攻撃も行えるようになり、また大気圏内、宇宙空間だけでなく、次元空間でも航行可能かつ戦闘可能な戦闘艦となる、と無限書庫より各局員に向けて報告があった。そんな今も飛翔し続ける危険極まりないゆりかごは第一級のロス・トロギアと認定され、それを破壊する為に現在本局から多くの次元航行艦がミッドチルダへと向かっている。

その艦隊の一つにリーシャ達の兄が乗艦しているのだ。

「……まあもともと時間稼ぎだったからあんまり変わらないんだけどね」

「え？ 姉さん何か言った？」

本当はこの話には続きがある。

航行艦隊がミッドに到着する時間とゆりかごが軌道衛星上に到達する時間。

少しの差で艦隊が間に合わないのだ。

その時間の誤差を解消するために機動六課の隊長陣が突入して駆動炉を破壊すること。

混乱や余計な不安を招かない為にこの内容は隊長クラス以上にしか通達されていないもだ。

……まあこの子に言っても大して影響ないと思うけど。

隣できよとんと首を傾げて姉を見上げるフィリ。彼女の性格上、無頓着……とまではいれないが別段気にするような性格でもない。

自分の為すべきことを為す。そういう性格なのだ。

「なんでもないわ」

だからと言って話すわけでもないのだが。

「それじゃあ、あのめんどくさがりがやってくるまでに少しでもガジェットを減らしておきましょうか」

「そうだね。ダメダメな兄さんを持つと妹は本当に大変だよ」

特に兄が悪いわけでもないのだが、最終的に駄兄というレッテルを貼ることで落ち着いてしまう二人からこの兄妹たちの力関係が想像できるだろう。

「やるわよ、イクサ」

「もう一仕事いくよ、ウィンド」

二人の手には同型の片手剣状をしたアームドデバイス。

カラーリングが異なるだけに見えるそれらは全てリーシャが自ら手掛けた特別機スペシャルワンのデバイス、『シャイニングシリーズ』のうちの二機。

「作戦通り私とフィリ曹長が前に出る。第一、第二部隊は掩護に回って足止めを。第三、第四はその間に補給を！」

「了解！！！！」

やる気のある声を聞きリーシャは前方を見据える。

敵は既にハッキリと視認出来る場所まで接近している。その数は……数えるのも面倒だ。

だが、

「与えられた以上の仕事をきっちりこなす。それが一人前の大人よね」

さあ時間稼ぎだけで終わるとは思わないことね。

自己暗示にも似た自身への激励。

その目は魔導師ではなく騎士のもの。よくよく見れば隣のフィリも同じような顔付きをしている。

「片っ端から斬るわよ」



「アイサー」

互いの顔は見ない。

伊達に長年姉妹をしてるわけじゃない。

姉が、妹が、取るべき行動など手を取るようにわかる。

ガコンガコンと音がなり、葉莢が地に落ちる。

それと同時にリーシャは爆発的に膨れ上がった魔力が籠った剣を一閃。

巨大な魔力斬撃がガジェットの群れへと着弾、爆発。

その周りも魔力斬撃と共に接近したフィリにより次々と狩られていく。

彼女達は一機足りとも通すつもりはない。

目標は全機破壊。

「それまでに駆動炉を止められるのかしらね、エースさんたち」

一度だけゆりかごへと視線を向け、勝負じみた想いを胸にリーシヤは前線へと駆けた。

「第七密集点撃破、次っ！」

『はい！』

地上で局員達が奮闘している中、高町なのはは空にいた。

既に六課隊長陣のリミッターは外され、エクシードモードも展開

中。

次々とガジェットを破壊していくその姿はまさしくエース・オブ・エース。

にも拘らず彼女本人は晒されている現状に内心焦っていた。

タイムリミットまで推定三時間。早く中に入らないといけな  
いのに！

連絡を受けた次なる密集点へと移動。

桜色の砲撃でガジェットを破壊しつつ、味方からの報告を待つ。

ゆりかごの内部に侵入しなくてはいけないのだが侵入経路が未だ  
に発見できないのだ。

思い浮かぶのは出勤前に見たヴィヴィオの姿

「まだ入り口は見つからないっ」

「すみません、まだ！」

他の人たちも精一杯頑張ってくれている。

それは理解しているが、無意識に唇を噛む。

簡単に割り切れるものじゃない。

『高町一尉！ 奥へ進めそうな突入口が見つかりました！』

待ち望んだ言葉が聞こえ、思わず愛機を握る力が強まる。

だがこういう場合、何らかの障害は付き物で、

『しかし、ガジェットの守りと外壁が厚すぎて破れません！』

「ッ」

発見された場所の周りのは五十を超えるガジェット。それに加え  
対魔力弾用にコーティングされた外壁。

その報告に再度顔を歪める。

出来うることならこんなところで余計な魔力は使いたくなかったの  
だが……

けど！

だが入口が見つかったのだ。

なら迷うことはない。

手に持つ力は不屈の心。どんな困難にも屈せず貫く力。

彼女は決心するように杖の切っ先を向ける。

「レイジングハート！ カートリッ」

『巨大な魔力反応感知！ 射線上の局員は直ちに退避して』

「ッ！？」

直後、

なのはと通信からの声を遮るように彼女の横を極太の光が通過し  
た。

轟！！ まるで大気が震えるような凄まじい爆発と爆風に見舞わ  
れ、思わずなのはも髪を抑えつつ目を閉じてしまう。

一体なにが……？

『ぜ、前方ガジェット、全機大破……侵入経路確保……先の砲撃、す、推定SS……』

その疑問に答えてくれたのは通信先のオペレーターだった。彼女も半信半疑なのか恐る恐ると言った声色。

なのは自身も瞳を開き現状を確認する。

目の前に広がるのはまるでそこだけ一掃されたように一直線に道の開いた空域。

「ご丁寧に外壁までも破壊されている。」

「……誰が？」

こんな砲撃を撃てる人物などそういるものではない。砲撃を撃つた人物を捜そうと振り向こうとし、

そんな暇ないでしょ。

「え？」

一陣の風がなのはの真横を過ぎ去った。

急ぎその人物を確認するために再び前方を見据える。

そしてなのははその姿を確認し、納得した。

《私にできるのはこのくらいよ。後はなのはちゃんたちだけでどうにかしてね》

不意に繋がれた念話。その声は以前会った時のような軽い口調。風になびく美しい黒髪にいつもと同じ漆黒のローブ。手に携えているは蒼き剣。

サキ・クルス。

何を考えているのかなのはには未だによくわからないが、少なくとも今、この瞬間は力を貸してくれる。

《はい、ありがとうございます！》

だからなのは礼を言った。フェイトやはやて、彼女の仲間たちに向けるような笑みで。

《……甲板で私の敵がいる。貴女たちはそれに構わず中に入りなさい》

なのはの謝辞にワントンポ遅れての返事は少し真剣みを帯びていた。

ここからは気が抜けない、という意味なのだろう。

更に速度を上げゆりかごへと目指すサキになのはも続く。

サキは甲板へ、なのはは内部へ。

……待っててね、すぐにママが助けに行くから。

不意に浮かんだ娘の顔に想いを誓い、彼女は進む。明日と言う日をみんなで笑って迎えられるように。

あんな巨大な砲撃を放ったあれは誰だ……？

そんな周りの局員の視線を感じつつもサキはそれに一瞥もくれず  
ハイスピードでゆりかごへと向かう。

その表情は 何故か赤かった。

【何照れてるの？】

「……うっさい」

サキからはレインの顔を覗くことは出来ないがコイツは絶対ニヤ  
けた顔をしている、とサキは確信している。自身の性格をよく理解  
しているだろう元相棒はこういうところで自分のペースに持ってい  
こうとするのだ。

「そんなことより現状はどんな感じなの？」

【あ、誤魔化した】

「いいから教えなさい」

未だ軽口を叩くレインにサキは少し強めに言った。

本音を言えば丸つきり彼女の言う通りなのはサキだけの秘密。

ちえー、とふて腐れながらレインは報告を始める。

【六課の通信を傍受した限りではフェイトちゃんはシスターシャツ  
八達とスカリエッティのアジト。なのはちゃん、ヴィータちゃんは  
ゆりかご内部。ゆりかごの周辺ははやてちゃんが指揮。シグナムは  
本局の方に向かってるみたいだし、地上はFWの子たちや地上本部  
の局員たちが食い止めてるみたいだね。なんとか足止めは出来てる  
みたい】

ユニゾンだというのにも関わらず六課の通信網へとハッキングを仕掛けるその技量にサキは別段驚いたりはずに、黙々とその報告を聞く。二人の表情はもう真剣なものへと切り替えられている。

【戦闘機人は……何人がティアナ達と戦闘中。召喚士の女の子もキヤロ達と戦ってるみたいだね】

「何？ 掩護に行きたいの？」

サヤほどではないにしろルーテシアや戦闘機人たちは強い。それこそ一般の局員では太刀打ちも出来ないほど。だからサキもレインに尋ねた。彼女たちを助けに行きたいのか、と。

【まさか】

そんな考えをレインは一蹴する。  
ちゃんちゃらおかしいと言わんばかりの声で。

【確かに難しいと思うよ。相手はあの子たちより格上なんだと思う】  
けどレインは知っている。  
彼女たちが頑張ってきたことを。彼女たちの心が強いことを。

【案外バカにできないんだよね、あの子たちの力も】  
目を閉じながらサキはその話を聞いていた。  
そして、

そう

と、一言だけ呟いた。

「ならここからはこっちに集中するわよ、いいわね？」

【オツケー】

身体の調子は　いい。

今はもう陳述会の時ほどの力を常時出すことは出来ない。

そこまで身体の機能は衰えてしまっている。

だが先ほど高出力の魔力を放ったにも関わらず身体の痛みは引いている。

既に身体が麻痺してきているのかもしれない。

ならもう長くはない。

けどこれはチャンス。

力を出すのは一瞬でいい。その一瞬に全てを込められさえすれば。

あと少し、もってよね

胸に手を置き自身に言い聞かす。

そしてサキは甲板に足を付けた。

目の前には青いボディースーツを着た黒髪の少女。

お待ちしていました

抑揚のない声が聞こえてきた。

「彼は……来ないようですね」



「ご生憎、アイツは未だベッドでお寝んねよ」

そうですか、と残念そうな声で答えるが相変わらず表情に変化は見られない。

「しかしだとしたら貴女一人で私に勝つつもりですか？」

「ええ、そうよ」

さも当然といつかのようにサキは答える。  
その様子に、

「ふふ」

サヤに笑みが零れた。

美しい容姿から生まれる不気味な笑み。

笑みを絶やさず視線が瞳、胸、腕へとスライドしていき、蒼い剣へと向けられる。

「いいでしょう、何か策もあるようですし」

そう言っつてサヤも自身の得物を構える。

先日靱に折られたはずの大剣、フェアベルデン。

恐らく耐久性を上げたのだろう。

「私は知りたい……貴女たちの強さを……その意味を……何がそこまでさせるのかを！」

何を固執しているのか、最早執念じみたその思いが彼女を狂わせ

る。

綺麗な花には棘があるとはよく言うがこれはもう猛毒が塗られていると思ってもおかしくない。

そのレベルにまで跳ね上がってしまったている。

「今度こそ教えてもらいます……たとえ全てを壊しつくしてでも！」

同じ容姿を持つ二人が再びぶつかり合う。

互いの目的のために。

決戦が始まる。

【れいんぽすと】

レ「はいはい、皆大好きレインだよ！」

ミ「よく自分でそんなこと言えるわね」

レ「読者の皆の気持ちを代弁しただけだもん」

ミ「ああそつなの……て、今日はなんだかテンションがいつもより高くない？」

レ「あ、気付いた？ さすがに今日は上げて行かないとなあって思  
うし」

ミ「……今日何かあったっけ？」

レ「ふふ〜ん、結構重大発表なんだよ？ 私たちにとっては」

ミ「へえ〜、気になるじゃない。教えてよ」

レ「OK じゃあユ Y、ドラムロールよろしく！」

Y「わかりました！」

ミ「Yいたんだ……」

ジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカ  
ジャカジャカ ジャン！！

レ「小説一周年記念おめでとーーーーー！！！」

オーーーー！！

ヒュウヒュウ！！

レインちゃーーーーん！！

愛してるーーーー！！

ミオ結婚してーーーー！！

ミ「おめでとつを言う前にとりあえず一人燃やしてくるわね」

レ「いつてらっじゃ〜い」

あ、ミオ。いつもぼすの方ありが　　って何？　え！？　またレ  
ギオン！？　ちょ、やめ

ミ「悪は滅びたわ」

Y「流石ミオさんです。良い燃やしっぷりでした」

ミ「ありがと　　これで心おきなく言えるわね。一周年おめでと」

レ「ありがと！　作者燃やされちゃったけど」

ミ「でもこんな記念の日にも主役は欠席なのね」

Y「ホントに、朔さんは男としての自覚が足りなさすぎます」

ミ「いや、そこは主役としての自覚でしょ……」

レ「うん、私もさすがに今日朔ちゃんがないのは可哀相かなあと  
思ったから特別に呼んじゃうことにしました」

ミ「呼ぶって言うても未だにベッドで寝てるんじゃないの？」

レ「本編ならそうだね。だから今回は引き金の方の朔ちゃんを呼ん

じゃおつと」

ミ「……それって変わらないんじゃないの？」

レ「大丈夫！細かいことは気にしないから」

Ｙ「そうですよミオさん。男たるもの細かいことを気にしてはいつまで経っても立派な男にはなれません」

ミ「だから私は女なんだけど」

Ｙ「もつたいないですよ。ミオさんなら師匠にも負けず劣らずの立派な男になれるのに」

ミ「……アンタの師匠がどんな奴か知らないけど絶対ごめんだわ」

レ「はいはい、そんな話どうでもいいから朧ちゃん呼ぶよ」

ミ「ん、いいわよ」

Ｙ「こちらも大丈夫です」

レ「はい、召喚」

朧「……俺は一体どう反応すればいいんだ？」

Ｙ「朧さん、お久しぶりです！」

朧「おお、ユ」

レ「はいストップ！ これ読んで」

翔「なんなんだよいきなり……ええくと、ユ Yの為のお約束条  
項第一条、ユ Yの名前を本編で登場するまで呼んではいけません。  
ん。第二条、ユ Yの【ピーツ】を明かしてはいけません。第三  
条、ユ Yってしつこいな…… Yの暴走はある程度は見逃しまし  
よう……第四条、ユ Y……これ絶対言わせたいだけだろ！？  
……上記の三カ条を必ず守ること……」

レ「理解した？」

翔「……ちょっとイラついたけど、まあ言いたいこともわかるし。  
そんなことで怒るほど俺も子供じゃないし」

ミ「へえ〜」

翔「ん？ ミオか、なんだか俺がいない間に随分ここで世話になっ  
てるらしいな。ありがとう」

ミ「うん、それはいいんだけどね。翔くんはやっぱり大人だからあ  
んなくだらないお約束条項じゃ怒らないんだ？」

翔「そりゃあなあ、別段誰かに迷惑かけてるわけでもないし、ネタ  
バレを防ぐためにしてるんだしいいんじゃないか？ だいたいあんな  
もんで切れたりするのは沸点が低い証拠だし、もう19歳なんだ  
し大人な対応を……ってどうしたミオ？ そんなに拳をプルプル震  
わせて？」

ミ「悪かったわね〜子供で」

翔「え？ ミ、ミオさん？ どうして怒ってらっしゃるんですか？」

ミ「怒ってる？ ううん、私は笑ってるんだけどなあ」

翔「素晴らしい笑みですがそれは怒りの笑みですよね！？」

ミ「まあ翔くんが言うならそうなのかもねえ……私沸点低いみたいだし」

翔「いやいやいや、ミオさんはいつも冷静沈着なお人じゃないですか！？ 沸点が低いって言うのはさっき言ったようなことで簡単に怒る人で」

レ「あゝあ、また墓穴掘ったね」

Y「全くです。男たるもの女性の機嫌にはいつも気を付けなければいけないと言うのに」

翔「え？ ええ！？」

ミ「うん、私って翔くんが言うにはやっぱり沸点低いみたいだからさあ」

翔「……機嫌直しては……くれない？」

ミ「うん」

轟！

レ「あ、死んだ」





ど」

ミ「まずは翔くんとレインに一言もらいましょうか」

翔「え？ 俺が言うの？」

ミ「主人公でしょ？」

レ「一応」

翔「一応は余計だ！」

レ「じゃあまずは私からいくよ。このたびは一周年を迎えました【魔法少女リリカルなのはStS syo 守りたいモノ】ですが未だまだまだ未熟な作品です。皆様の応援がこれ以上ない励みになります！ これからもどうぞよろしくお願いしま〜す！！」

ミ「なんかいつもより真面目ね」

レ「一周年だしたまには、ね」

ミ「じゃあ次翔くんね」

翔「え、え〜と、言いたいことは殆どレインに言われてしまいました。今日で一周年です。これも一重に読者の皆さんのおかげです。現在本編は第一章の佳境となっておりますが、第二章、第三章と続いていく予定です。作者もより一層頑張っていくと思えますのでこれからもこの作品をよろしくお願いします！！」

ミ「とまあ挨拶は終わったけど、この後どうするの？」

レ「作者は一周年記念で何か書きたいとは言ってたんだけど、今の本編の間にツッコむことはさすがに出来ないからそのあとくらいに書こうかなって言ってたよ」

翔「確か三十万アクセス記念もなにか言ってたっけ？」

レ「多分一緒にするんだと思うよ」

Y「おおちゃくな人ですね」

レ「今更だけどね」

ミ「とりあえず何かあると思っていいのね？」

翔「そうだと思うけど」

レ「ああ、後作者から預かっていたものが」

翔「そんなもんあったのか？」

レ「うん、とりあえずどうぞ」

「聖杯戦争って知ってる？」

「またコイツが原因かよ……」

「問おう、お前が俺のマスターか」

「えへ俺ってば一日五十時間は寝ないといけないんだけど」

「聖杯を渡せ」

「必ず聖杯は手に入れてみせる！ 町長として！」

「君を殺したりはしないよ。自分で誓った誓約があるから」

「な、なんなんですかこれって!？」

「貴女は巻き込まれたんですよ。七人のマスターによる殺し合いに」

「お前は俺が全てを殺してやる」

「卿にそれができるのか？　なら私も友の言葉を借りてこつ言おう」

さあ、今宵の恐怖劇グランギニョルをはじめよう

「……なによこれ？」

翔「……これって」

Y「あれですか？」

レ「うん、聖杯戦争二次だって」

ミ「幾つか聞き覚えのある言葉があるんだけど」

レ「わかる人いたらおもしろいよね。書きたい人とかいたら言うてね？ 作者書こうか悩んでるらしいし。ちゃんと書いてくれる人なら託したいらしいし」

翔「でもこれ人数足りてくないか？」

レ「まだ悩んでる人選が結構あるんだって」

ミ「まあやるのならちゃんとしないといけないしね」

レ「そういうことだね」

Y「あ、この辺で時間みたいです」

翔「……作者めんどくさがったな」

ミ「そうでしょうね」

レ「それではここまで一年ありがとうございました！ これからもよろしく願いますー！！」

翔「ではー！」

レ・翔・ミ・Y「次話にてお待ちしております!!」

第四十六話 向かうべき場所（後書き）

どうでしたか？

とにかく今日一周年だったんですよ（笑）

これからもよろしく願います!!

では、次話にてお待ちしております!!

## 第四十七話 答えの選択（前書き）

すみません、大変遅くなりました！！

テストメントさんのところのクロスリレーに気を取られ、スランプに陥り、全然書けませんでした（汗）

今回は時間掛かった上に凄く短いです、すみません（汗）

そのかわりに何故か【れいんぼすと】が長くなって……マジでな  
んで？

では、どうぞ！

第四十六話のタイトル変更しました



## 第四十七話 答えの選択

……ここは。

気が付くとそこは高原。

空は青く深く、湖はどこまでも澄んでいて、森から聞こえる鳥のさえずりが心地いい。

……綺麗だ。

翔は無意識に声を出していた。

あまりにも見事な大自然について見とれてしまう。  
だが。

「……ここはどこだ」

少なくともこんな場所来たことないし、見たこともない。

こんな場所があるんだったら今度フェイトも連れてきてピクニックでもしよう。

レインもエリオもキャロも呼んで……ああ、なのはやはやて達を呼んでもいい。

きっと楽しい、のどかで、優しい時間。そんな時間を

「過ごしたいか？」

不意に声が掛かった。

声のする方を見遣る。

そこには一人、ただただ独りで佇んでいた。

騎士だ。

朔は一目見てわかった。

身長は朔と大した差はない。

同じ空間にいるだけで感じる圧倒的な存在感。

黄金のような光りを放ち、それでいて下品でない、透き通るような髪色をした髪を一本に纏め、軽装タイプの美しい甲冑に身を包んだ、凜として、勇猛なオーラを纏う、そんな騎士。

……あ、れ？

あつたことはない。

そのはずだ。

けどその顔には見覚えがあつて、何より自分に向ける瞳なんかはまるで

「なあ、アンタは」

「ここは美しい場所だ」

「え？」

騎士は辺りを見渡しながら言った。

「若葉が芽吹き、自然が生きている。風は頬を撫でるように安心を与えてくれる」

そうは思わないか、とこちらに問い掛ける。

甲冑という自然と掛け離れた外套を身につけながらも放つ言葉だ

がその実、的を射た事を言う。  
だから朧も頷いた。

「過ごしたいか？　こんな自然の中で、幸福なひと時を」

それは騎士の初めの質問。呆気に取られていた当初とは違い今度はちゃんと答えた。

「……そうだな。こんな時間が少しでも長く、願わくば永遠に続くように」

素直な、率直な答え<sup>想</sup>え。

先程思い描いた幸福な世界。

本当に？

突如、世界が一辺した。

「なっ!?!」

空は淀み、草木は踏み荒らされ、剣が、槍が、盾が、様々な武器が転がり、突き刺さっている。

先程とは最早別の場所と言っても過言ではなく、幻想は脆く崩れ去って行く。

一目見てわかる。ここは戦場だったのだと。

場の空気が一瞬で行き詰ったように感じ、知らぬ間にか冷汗が背筋に垂れる。

「『こんな時間が少しでも長く、願わくば永遠に続くように』……確かにそれは御身の望みのだろう。貴殿らしい優しく、温かい、

そんな渴望だ」

……一体俺の何を知っている。

初対面であるにもかかわらず、まるで長年の友のような物言いを  
する騎士。

その態度に訝しいと思いつつも騎士の言葉を無意識に聴き入って  
しまう。

「だがその言葉には一言、御身の在り方を決定付けた原点が欠けて  
いる。それではまだ何も届かない……いや、それ以前の問題」

「……どういうことだよ。それに……それにここは、アンタは一体  
誰なんだ!？」

混乱する頭では怒鳴り付けるようにしか言えなかった。

だがそれは最もな問い掛け。自分がここにくるまでの間に何をし  
ていたのかもよく思い出せない。それには恐らく目の前にいるこの  
騎士も関係しているはずだ。

「ん、私のことか？ まあ御身のおかげで猶予はいくばくか増えた、  
いいだろう。私の事は……フム、オルランドとでも呼んでくれ」

「オルラン、ド？」

「ああ、偽名だが気にするな」

偽名かよ、とツツコミを入れるが軽く流され、騎士　　オルラン  
ドは言葉を続けた。

「ここは御身の心の中だ。本来なら御身の心が映し出されるはずの

場所」

「俺の心？ でもこんな場所……」

「される『はず』と言ったろうが。あの自然にこの戦場跡、これらは全て私の心の一部だ」

「……なんで？」

オルランドの言っていることはおかしい。

よくわからないが彼の言葉通りならここは朧の心の中。だということにこの風景はオルランドが映し出したものだという。そこに朧のモノは何一つなく、完全に彼一人のものだ。

「それについては問題ない。緊急事態だったが故に今は御身の意識が奥底に沈んで私の方が強くなっているからこうなっているだけだ。時間が経てばここも本来の姿を取り戻す」

暫くはこの状態が続くが我慢してくれ、と朧の考えを読み取るように答えていくオルランド。

だがこの騎士は肝心な事に答えていない。

「オルランド、お前は何故俺の中にいるんだ？」

そもそも何故朧の心に見知らぬ騎士がいるのか。

オルランドなんて言う名前には知り合いはないし、そんな名前はせいぜい本の中の物語で出会ったことがあるくらいだ。

自分の祖先という候補も考えられるがそれを考え初めて やめた。

初自身よく覚えてはいないが、浅儀の村の住人が外の世界と関わりを持つとするなんて思えない。

外見も全然違う。似ているとこなど身長くらいなものだ。それもオランダの方が若干高いが。

「……ダメだ自爆した」

自分で考えて自分で落ち込む初。完全に自業自得だがその肩を落とす姿がなんとも哀れに見えて仕方ない。

そんなマヌケを放ほうつてオランダは言い放つ。

「……恐らく似ているからだ」

「……似ている？」

ああ、とオランダ。

「御身の生き方は私と酷く似ていて、どこまでも愚者なのだ」

瞬間。

「ッ!?」

彼の言葉と共に流れた一つのイメージ。

地に伏せる屍の数は数百、数千、最早数えきれない騎士たちがその身、その地をを赤く染める。

鉄の匂いが充満する中、騎士は立っていた。

!!

声にもならない音を上げるオルランド。

その表情は絶望、後悔、未練。

朔は悟った。

彼は独り、ただ独りなのだ。

私と酷く似ている。

「……アンタもって事か」

オルランドも誰かを失ったのだ。己の不甲斐なさ故に。

朔の問い掛けにオルランドが口を開く様子はない。

目を閉じ、全てを受け入れている。朔にはそんなふうに見て取れた。

朔自身も、彼に掛ける言葉が見付からない。

お前は悪くない。

仕方がなかった。

相手が悪かった。

そんな慰めに意味は持たない。

なら何ならいい？

責めればいいのか？

慰めればいいのか？

共に泣けばいいのか？

わからない。

ただ一つ言えることはそのどれを持ってしても彼を癒す事は出来ないということだけ。

ひたすらに償いを求めるだけの贖罪の道。

実際、朔がそうだった。

死なせてしまった。

大事な人を。

この世界に必要な人を。

ちっぽけで愚かなガキの命と引き換えに。

それは彼女一人の死に留まらず、五人、十人、百人、千人、もしくはそれ以上。

それだけの人を殺してしまったと同義。

だってそうだろう？

彼女が助けるはずだった命は一体誰が救う？

捨て置くのか？

知らない命だ。自分には関係ないと？

否。

俺が救わないと。

こうして贖罪<sup>呪い</sup>は生まれる。

そしてそれは

……この騎士も同じっていうことか。

威風堂々とした佇まいに尋常ならざる風格。

そんな彼が自分と同じ葛藤を抱いて……

違う。

「え？」

発せられた音は否定。

だがそれは全てを否定したものではない。

「御身と私はただ似ているだけだ。全てを亡くしてしまった私とは



違う。御身にはまだいるのだろう」

大切な者が。

ふと浮かび上がったのは金色の女の子。  
自分を救い出してくれた優しい女の子。

「その少女が今戦っている、そう言ったら御身はどうする？」

「ッ!？」

荒野と化したこの場に現れる一つの画面。そこには一人、ガジエ  
ットを次々と破壊していく光景が映し出された。

「彼女だけではない」

言葉と共に次々と映し出される戦況。

召喚師と主人を護る守護者と。

三体一という圧倒的戦力差と。

自身の姉と。

巨大な船を護る軍勢と。レギオン

そして

「……これ、は」

同じ顔をした二人が死闘を繰り広げている真っ只中。

優位なのは恐らく幼さを残した方。逆に大人びた方の彼女には苦悶の表情が浮かび上がっている。

「そういえば御身はまだ現状を知らなかったのだったな」

そう言っただけでオルランドは説明を始めた。  
大敗した管理局に古代ベルカ時代の戦略兵器、サキ・クルスをベ  
ースにした人造戦闘機人。

……そう、か。

全てを聞き終え、朧も自身がサキに敗北したことを理解した。

「そして御身の師も今は自身の闘いへと赴いている。現状、勝  
ち目はないと言っている」

どうするのだ、その瞳が問い掛けている。

「今すぐ行くに決まってるだろ!!」

皆が戦っているのだ。

自分だけが寝てるわけにはいかない。

間髪を入れずに言い放った朧に対してオルランドは凜とした表情  
を崩さず、まるでその答えを予期していたかのように言葉を紡いだ。

無理だ。

「なッ!?!」

オルランドとは反対に予期せぬ返答に驚嘆する朧。

冗談でもなんでもない。

目を見ればわかる。

オルランドは真にそう言っているのだ。

だが何故？

そんな思考が頭の中を埋め尽くす。

「向かうのなら状況を鑑みて御身の師のところだろうが、今の御身では話にならん。むしろ邪魔にしかならないだろう」

「ッ！？ 俺だって戦える！ サキのサポートくら」

「不可能だな。今の御身が向かうくらいなら別の者が向かった方が幾分マシだ」

食い下がる朧を遮り、オランダはぱっさりと切り捨てる。

朧にはわからない。どうしてそこまでして自分を否定するのか。睨みつけるようにオランダを凝視するが。

「迷いのあるその身で師と共に戦えるのか？」

「ッ！？」

全て、目前の騎士の言う通りだった。

「たとえどんな風景をしていたとしてもここは御身の心の中。何を想い悩んでいるのかなどパスを通してこちらにも伝わってきた」

「俺は……」

「『自分を恨んでいるのかを考えると怖い。サキが何を考えて行動しているのかがわからない。いつも正しかったサキのやる事が今回も正しいんじゃないのか。だとすると俺はアイツの邪魔しかしてない。俺は何をすればいいのか』……御身は考えすぎだ。そんなこ

とでは何も成すことは出来ぬぞ」

「俺は！俺は最善の答えを出そうと考えたんだ！悩んだんだ！」

失敗したくないから、もう失いたくないから。

だから考える、悩む、苦悩する。

「それともなにか！？お前は悩むことはないのか！？悩むのはいけないことなのか！？お前だって！考えたことがあるだろ！あそこで、あのタイミングで！なんでああしなかつたんだって！？後悔したことがないのかよっ！？」

心中を吐露するように叫び出る言葉の数々。子供の癩癩。ツギハギだらけの単語の羅列。

だがそれには確かに翔の想いが乗っている。

「答えるよ！」

「知ったような口を聞くなっ！」

「っ！？」

オルランドは吼えた。

勇猛で圧倒的な存在感に変化はないがそこに大人びた風格は消え去っていた。

それどころかその表情、姿にはどこか幼さが入り混じっている。

まるでそれこそが兜を取った騎士の本来の姿だともいうように。だが怒鳴った言葉には怒りや殺気が入り混じっており、齡二十にも満たないガキを黙らせるには充分で。

その証拠に翔は言葉を失い、一步も動けず、背筋に通る汗をどこ

までも感じ取っていた。

怒鳴った本人も無意識に感情的になってしまったことに驚いている様で二人の間に静寂が訪れる。

「……すまない、取り乱した。忘れてくれ」

一呼吸間を置き、騎士は謝罪した。

この時には既にオルランドの在り方も再び元のものへと戻っていた。

「一つ、間違いを正しておこう」

翡翠色の瞳に見つめられ、初も少しずつ落ち着きを取り戻す。

「私は別に悩むことが悪いとは思わない。むしろ好ましいとさえ思う」

人は生きている限り悩みを抱き続ける生き物。それとぶつかり、乗り越えることで人は強くなれる。

オルランドはそう言う。

「だがそれにも限度がある。いつまでも悩んでいて良いというわけではない。覚悟を決めず、迷いをその身に孕んだままでは剣が鈍る。それは愚の骨頂であり、それでは……何も為すことはできない」

淀んだ天を仰ぎながら語るオルランドの哀愁漂う姿にいつしか朔は聞き役に徹していた。

それだけその言葉には重みがあり、真実味を帯びていた。

少年は心の奥深くまで染み入るように騎士の言葉を吸収していく。

「御身は私と似ている。だが既に終わった私とは違う。私の様な愚者になることもない。まだやれることがある、出来ることがあるのだ」

それに。

再び朧の瞳を見据え、騎士と問うた。

「それに、御身の出す答えはもう決まっているのだから？」

「決まって、る……？」

何を言っているんだこの騎士は。

それがわかっていているのなら自分はこんなに悩まなかっただろうけど

“ どうするかなど、とうの昔に決まっていよう ”

不意にそんな言葉を思い出した。

「今一度、御身が問われたことを思い出してみるがいい」

そう言われて朧は思い出す。

レインの言葉を。

“ 前に私、聞いたよね、朧ちゃんは何を望むのかって。その言葉をね、もう一度よく考えてみてほしいの ”

“ その答えを見付けられたら、きっとそれが全てに繋がるから ”

サキの言葉を。

“アンタは……浅儀朔は何がしたかったのか、もう一度考えてみなさい”

「御身は何故サキに師事した。何故剣を取った」

“俺、サキみたいになりたいんだ！ いろんな人たちを守りたいんだ！”

「あ………」

それはまだ幼かった頃の記憶。

自分の不甲斐なさに飛び出した自身の想い。本音  
手を指し延ばされたあの時から焼き付けられた記憶の根源。

「そうか、俺は………」

以前、レインに『守ってみせる』と言われ胸が痛んだことがあった。

あの時はわからなかったが今ならわかる。

「守られるんじゃないなくて、俺は守りたいんだっ………！」

フェイト、レイン、エリオにキャロ。なのはにはやて、他にも沢山の人を。

……そしてサキも。

自身の拳を見据え、ギュツと力を込める。  
守る。

それが朔の原点であり、覚悟。

その姿を見てオルランドは少し嬉しそうに、そつと微笑した。

「悩むのはもうこの辺でいいだろう」

ピキ、と。

どこかで輝の入る音がした。

「時間だ。早く向かうといい。守りたいものの為に」

世界の輝が波紋のように広がる。

それはこの世界の崩壊を意味していることは朔にも容易に想像できた。

「オルランド！ アンタは一体」

「浅儀朔！」

誰ともわからない自身の心に住み着く騎士に叫び掛ける。

だが騎士はその声を遮り、微笑みながら語り掛けた。

「守れるものは何も人や形あるモノだけではない。人の誇り、人の覚悟、人の業。守護するものの形は様々だ。御身は己の信ずるものを護るといい」

パリン、と。

世界が割れた。

「待ってくれ、まだ聞きたいことが」

崩れゆく世界の中、朔は必死にその手を伸ばすが、空を切るばかり



り。

そんな姿を遠目で見据えるオルランドは溜息をつきながら

御身の道に神の御加護があるように。

そんなことを呟いた。

「患者の避難はあとどれくらいだ!?!」

「あとは数名です! 先生も急いで」

「主任っ!」

「どうしました!?!」

「患者さんが一人消えてしまいました!」

「なっ!?!」

「点滴も引きちぎられていて……」

「患者の名前は!?!」

「602号室の浅儀朏さんです!」

【れいんぼすと】

レ「遅い……」

ミ「確かに遅かったわね」

Y「クロスリレー作品を言い訳に使ってますね、前書きで。全く男の風上にも置けません」

ミ「男云々は置いといて、Yの意見には賛成ね。言い訳なんて見苦しいだけよ」

レ「みんな辛辣だねえ」

Y「それはレインさんも同じでしょう」

レ「だって作者が不甲斐ないんだもん」

ミ「全くよ」

レ「まあ作者も反省してるだろうし、いびりはこの辺にしようか」

ミ「そうね、それに何か報告があるみたいだし」

Y「そう言えばそんなことを言っていましたね」

ミ「この間祝一周年って言ったのに忙しないわね」

レ「それだけ頑張ってるってことだよ……私が」

ミ「そうねー、頑張ってるわねーレインは」

レ「……何気にミオちゃんも馴染んできたね」

ミ「そりゃ結構ここにいる時間長いし、否応なしに慣れるわよ」

Ｙ「さすがミオさんですね！」

ミ「先に言っとくけど私は女よ」

Ｙ「ミオさんは超能力者ですか!？」

ミ「ええ、実は私<sup>パイロキネシス</sup>私発火能力を持つてるのよ」

レ「ミオちゃん、ツッコミが仕事を放棄したら後に残るのは<sup>カオス</sup>混沌だけだよ」

ミ「別にいいんじゃないかしら、カオス」

レ「諦めたらそこで試合終了だよ!？」

ミ「私的にはもう終了してしまってもいいんだけど」

レ「ぶー、ミオちゃんに乗ってくれなーい」

ミ「そんな顔してもムダよ。さあ、今日からここは私の城に」

Y「あの、早く進めなくていいんですか？ 今日時間押してるって聞いてたんですが」

レ「……」

ミ「……」

Y「え？ 僕何か変なこと言いました？」

ミ「……いいえ、助かったわ。ありがとう」

レ「う、うん。わ、私たちもちよっと脱線し過ぎてたね」

Y「いえいえ、お役に立てたようですねによりです」

ミ「……まさかYに指摘させるなんて」

レ「……でも今日は確かに時間押してるんだよね」

Y「男ならこのくらいなんのそのですよ！」

レ・ミ「いつものYだ」

Y「ふえ？」

ミ「……先を進めましょうか」

レ「……そうだね。Y、これ読んでもらっていい？」

Y「これですね、わかりました。え〜っと、『罪状、浅儀昴は仕事の肩代わりとしての高級プリン二週間分の約束を反故にした罪。通常なら万死にも値する所業だが、今回は新たに考案してみた新開発』」

レ「ごめんごめん、渡す紙間違えちゃった。はい、こっちを読んでね」

Y「あ、わかりました」

ミ「……激しく続きが気になる内容ね。Yは気にならないの？ 昴くんがどうなるか」

Y「だっていつものことですし。【ミストラル】では昴さんの不遇具合はデフォルトです」

ミ「嗚呼、そっちでも基本的には扱いは変わらないのね」

Y「むしろこっちの方が酷いです」

ミ「……うん、ちょっと同情しちゃうかな」

レ「もう、そんなことどうでもいいから早く続き始めるよ」

Y「そうですね！」

ミ「……頑張ってね、昴くん」

Y「えーこっちの用紙には……」祝！ いつの間にかPV4000

00アクセス!」……そうだったんですか?」

ミ「え? 私は知らなかったわよ。興味なかったし」

レ「私もこの間聞いたんだよね。まだ前回、前々回のアクセス記念もしてないのに」

Y「一周年記念もまだですね」

ミ「……なんて言うか、ダメね」

レ「本編が今そんな雰囲気じゃないっていうのもあるけど、最近作者執筆速度自体が遅いしねえ」

ミ「ダメじゃない」

Y「ダメですね」

レ「ダメダメだね」

?「で、でも! さささ、作者さんもお忙しいかもしれませんし……」

ミ「あら?」

Y「貴女は……?」

レ「あれ、どうしたの?」

?「え、えと、今回のサプライズゲストだって作者さんが……わ、

私なんかでごめんなさい……うう……」

レ「そんな萎縮しなくても大丈夫だよ、大歓迎だし」

ミ「そうね、こんなに可愛い子なんだし。でも私は初対面だしちょっと紹介してほしいかしら」

Y「僕がご紹介しましょう！」

レ「あれ？二人って知り合いだったっけ？」

？「初対面だと思いますけど……」

Y「彼女こそ巷で有名なサーヴァント、ライダーさんですよ！」

？「ふええ！？」

ミ「ライダー？」

レ「ミオちゃんもされなかった？サーヴァントバトン。あれで彼女はライダーだったんだよ」

ミ「……あゝ、あの裏で私とサキさんに『殴るなキヤスター』の称号が付いたあれね。けど彼女って見た目明らかに非戦闘要員じゃない？むしろ守ってあげたくなる部類だわ」

レ「ふふ、ミオちゃんも既に彼女の宝具にやられたみたいだね」

ミ「彼女の宝具？」

レ「これを見たらわかるよ」

【ライダー】

真名：ユニス・クローバー

属性：秩序・善

ステータス。

筋力：E。耐久：E。

敏捷：E。魔力：E。

幸運：A。宝具：A+。

クラススキル。

対魔力：D。

騎乗：E。（自転車）

保有スキル。

直感：C。

宝具

【初心な羞恥の表情（ハートキャッチ）】

ランク：A。種別：対人宝具。レンジ：1～6。最大捕捉：10人

概要：恥ずかしがり屋の少女の表情で皆を魅了し、保護者位置となる自身のサーヴァントにする。対魔力などは関係なく、鈍感スキルA+や一筋である。コン以外に効力を発揮する。



【幼女の泣き顔（イエス ロリータ ノータッチ）】  
ランク：A+。種別：対人宝具。レンジ：1〜6。最大捕捉：1  
0人

概要：泣きそうな顔をする彼女に攻撃を与えることは何人たりとも  
できない精神性の宝具。唯一狂化や精神破壊などのスキルを持つも  
のには効果がない。余波でのダメージ判定も最低限しか効かない。

【補助輪のない自転車（マザーズバイク）】  
ランク：E。ただの自転車。

レ「ね？」

ミ「ええ、とりあえず彼女の名前がユニスで私が既に彼女に勝てな  
いということとは理解したわ」

ユ「あうう……私普通の局員なのに……」

Ｙ「こんにちは！ ライダーさん！」

ユ「こ、こんにちは……あ、あと私はユニス……」

Ｙ「ライダーさんは今回作者に呼ばれたんですよね？」

ユ「あ、は、はい……って私はユニ」

Y「何もないところですけどどうか楽しんでいってくださいね！」

ユ「うう……」

ミ「……うん、Yも悪気はないのよ？ 許してあげて。私はちゃんとユニスって呼ぶから、ね？」

ユ「はい……ありがとうございます……」

レ「それでユニスちゃんも作者から何か言付けみたいなのもらってるの？」

ユ「あ、はい。これをレッドフィールド執務官に渡すようにと」

ミ「私に？」

ユ「は、はい。どうぞ」

ミ「え〜と、『これを読んでいるということはユニスがそちらに到着したということだね？ なら本題に入るとしよう。今回彼女に文を持たせたのは他でもない、溜まりに溜まったPVアクセス記念と一周年記念についてのことだ。知っての通り現在第一章は最早佳境ゆりかごではつちやければ終了という場面だ。そんな中で番外編を投下する勇氣など、当然ながら私は持ち合わせていない。そこでゆりかご編終了後の六課解散までの間にいろいろ入れていきたいと思っている。全く構想は練っていないが書けるかな、と考えている話があるのだよ。そこで聞きたい……どんな話が見たいのかを！ 今から私が思いついた話をミオくんみなに挙げていってもらおうか  
ら皆みな思い思いに見たいモノに投票してくれたまえ！ もし挙げた話以外に見たいものがあるのならそれを教えてくれたまえ。私の独断

と偏見をもって決めさせてもらおう。応募は感想やメッセージで頼むよ。個人的にはメッセの方が大歓迎だよ。サプライズにできるからね！ はははははー。では、アディオス！！』……死ね」

レ「……うん、一回死ねばいいと思う」

Y「一回と言わず十回くらい死ねばいいと思いますよ」

ユ「あ、あれですよ、作者さんも場を和ませよう」と……」

レ・ミ・Y「……」

ユ「はううう……」

ミ「……まあとりあえず仕事だけはやり遂げるわ。今この作者が現段階で考えているのがこれよ」

1：ドキドキ！ ユニス！ 初めてののでーと

2：二泊三日！？ 二人だけの温泉旅行！

3：初ちゃん！ ミッドは危険がいつぱい！？

4：ヴィヴィオ初めてのおつかい

5：わ、私がお見合い！？ そんなの絶対ムリでしゅー！ うう……  
ひたはんだあ（舌嚙んだあ）

ミ「今考えてるのはこんな感じみたいよ。1番はここにもいるユニスが生まれて初めてデートすることになる内容よ。相手は……嗚呼、

やっぱり朧くんなんだ」

レ「2番目は……と、ふうん。朧ちゃんとフェイトちゃんが3日間の完全休養の日に二人で温泉旅行に行く話らしいね。これはサウンドステージでスターズが3日間の休養があったから出来ると思った内容らしいね」

Y「3番目は朧さんがミッドチルダの街でいろいろな災難にあるお話みたいですね」

ユ「よ、4番目はヴィヴィオちゃんがおつかいにでるお話みたいです。……元気いっぱいヴィヴィオちゃんを余所に浅儀三尉たちがそわそわする……そんなお話のようです」

ミ「5番目はまたユニスの話ね。彼女がお見合いを進められるお話ね」

レ「……こんなに言ってホントに作者書けるのかな？」

ミ「ムリじゃない？」

Y「なんで僕の話が一つもないんですか!？」

レ「そりゃあ、Yは二章からの登場だし」

Y「納得いきません!」

ミ「納得なさい」

Y「僕に比べてユニスさんの待遇の良さにびっくりです!」

ミ「そうね、出番もあんまりなかった見ただし、良かったんじゃない？」

レ「本人はそれどころじゃないみたいだね」

ミ「？」

ユ「あうあう！？ わわわ、私のお話が！？ し、しかも二つも……あうう……むりだよお……」

ミ「可愛らしいわね」

レ「全く」

ミ「この5つの他に何かアイディアがあるようならメッセか感想送って欲しいらしいわよ。期限は……って書いてないじゃない」

Y「忘れたんじゃないですか？」

ミ「ホントに抜けた作者ね……これって私たちが決めた方がいいのかしらね」

レ「ミオちゃん勝手に決めちゃっていいよ」

ミ「いいの？」

レ「うん」

ミ「じゃあゆりかご編が終了するまで」

Y「一瞬で決まりましたね」

M「だって特に考えてないから」

レ「でもそんなとこだよね。ということだから期限はまだもう少し先かあ」

M「もし他の案が浮上してきたらそれも候補に加えるかもしれないらしいし、まあそんな時はまたよろしくとのことよ」

レ「魅力的な案を待つてるよ」

レ「さて、今回は本編の内容に何一つ触れること出来なかったけど」

M「なんだか変な方向へ向かったしね」

Y「それでライダーさんは……」

M「まだあそこよ」

ユ「……で、でもここで登場したらお母さんも喜んでくれるのかなあ……」

レ「完全に自分の世界に入ってるね」

ミ「持って帰りたいくらいね」

Y「男ならあの姿を守っていかなければなりませんね！」

レ「それじゃあ今回はこの辺で」

ミ「では！」

レ・ミ・Y「次話にてお待ちしております！！」

ユ「ああ……お父さんも応援してくれてるし……へえ？ お、お待ち  
ちしてましゅ！ はたたんだあ（また噛んだあ）」

第四十七話 答えの選択（後書き）

どうでしたか？

漸く主人公が出てきましたね。

遅いぞ主人公（笑）

次はもっと早く上げられるように頑張りたいと思います！

あとユニスマジ天使w

アンケートの方もよろしくお願いします！

メッセや感想、どちらでもいいので（笑）

では、次話にてお待ちしております！！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9985o/>

---

魔法少女リリカルなのはStS syo ~守りたいモノ~

2011年12月20日01時53分発行